岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 157

下庄遺跡
上東遺跡

主要地方道箕島高松線道路改築に伴う発掘調査 2

（第 1 分冊）

2001

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 157

下庄遺跡
上東遺跡

主要地方道箕島高松線道路改築に伴う発掘調査 2

（第 1 分冊）

2001

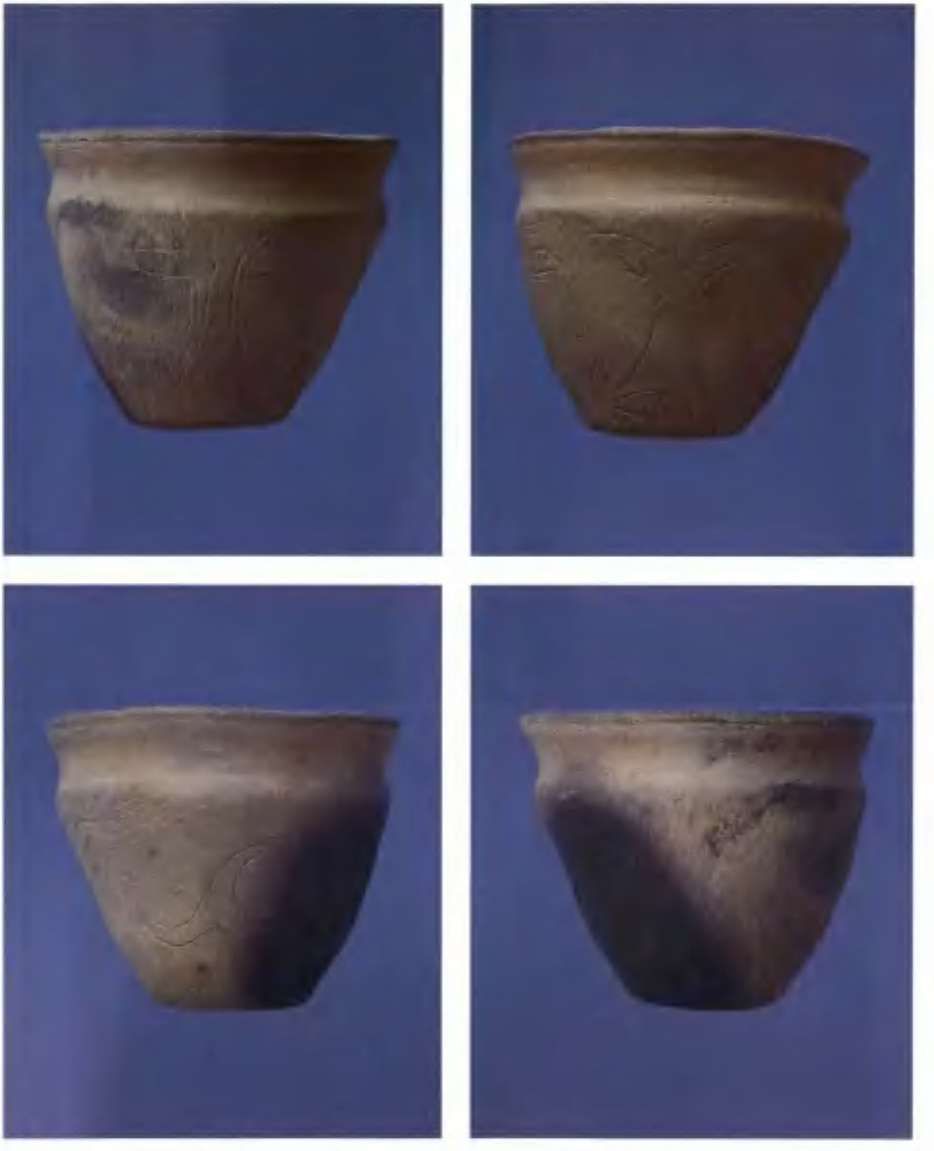
岡山県教育委員会

1．遺物検出状態（南から）

2．遺物出土状態（東から）

1．杭断面（北から）

2．スプーン出土状態（東から）



絵画文土器

骨角製品

1．卜骨(表)

2．卜骨(裏)

1．卜骨(表)

2．卜骨(裏)

1．弧帯文土器

2．貨泉(表·裏)

序

岡山県においては、近年の本州四国連絡橋陸上ルートや山陽自動車道さらに中国横断自動車道の開通など広域基幹交通網の整備が進み、アクセス道路や従来からの生活関連道路の整備改良が大きな課題となっていました。こうしたことから、大内田・高松地域を結ぶ一般県道大内田高松線の改良工事が計画されました。岡山県古代吉備文化財センターでは、この工事に先立ち、平成３年に岡山市津寺の路線内に所在する津寺三本木・一軒屋遺跡の発掘調査を実施し、平成11年には報告書が刊行されています。その後、平成９年４月から同10年５月まで今回報告する下庄遺跡・上東遺跡の調査が実施されたのです。

上東遺跡は、昭和49年に山陽新幹線建設、同52年には都市計画道路建設に伴い調査が行われています。この時の調査は、遺跡地を東西に大きなトレンチを入れるような形になりました。その結果、約500ｍの間に４ヵ所の微高地が確認されたのです。このことは、調査前の知見において、単一の微高地から形成されているとの認識からすれば、これを変える調査結果を得ました。また、従来から、弥生時代後期上東式土器の標式遺跡として著名でありましたが、発見されている資料は調査に伴うものではなかったのです。この調査において、遺構に伴い検出されたことにより、具体的な形で把握され、上東式土器の編年の作業が進んだことなど大きな成果を上げたのです。

今回の調査は、南北方向に大きなトレンチを入れることになったのです。その結果、湿地を形成しながらも旧２号線付近まで微高地が存在していることが明らかとなり、上東遺跡の南北の幅は、下庄遺跡を含め、約1kmをこえることが確認されました。遺構においては、長崎県原ノ辻遺跡に次いで２例目である波止場状遺構が発見されています。このことは、上東遺跡が、このような海に出る施設を保有していたことが明らかになった意義は大きいといえましょう。

この報告書が、今後の調査研究、文化財の保護・保存のために活用され、地域の歴史研究を深める資料として広く利用いただければ幸いと存じます。

なお、現地調査の実施、報告書の作成にあたって、岡山県文化財保護審議会委員、岡山県道路建設課、倉敷地方振興局建設部工務第一課、ならびに地元の関係各位から温かい御理解と御協力をいただきました。末筆ながら、記して厚くお礼を申し上げる次第です。

平成13年３月

岡山県古代吉備文化財センター

所長　正岡睦夫

例　言

1　本書は、主要地方道箕島高松線道路改築に伴い、岡山県倉敷地方振興局から岡山県教育委員会が依頼を受けて、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した下庄遺跡及び上東遺跡の報告である。

2　当該遺跡の発掘調査は平成8年度に実施した第一次調査(担当 大橋雅也)の後、平成9年度から調査を行った。調査担当は、下澤公明・田井荘之助・築地由行・渡邉恵里子である。

3　発掘調査および報告書作成にあたっては、岡山県文化財保護審議会委員の水内昌康、近藤義郎の両先生からは有益な御指導と御助言をいただいた。記して謝意の意を表す次第である。

さらに、多数の県内外の研究者の方々から、様々な御助言、御教示を得た。記して謝意の意を表す次第である。

4　特殊な遺構・遺物及び自然科学分野における鑑定、同定については次の諸氏、機関に依頼し有益な教示を得、一部の成果については報告文をいただき、附編に収載し、それ以外については本文中で用いた。記して深く感謝をする次第である。

・貨泉の鉛同位体比分析	平尾良光・榎本淳子・早川泰弘(東京国立文化財研究所)
・土器付着炭化植物遺残の識別	松谷暁子(東京大学総合研究博物館)
・動物遺存体と骨角製品	富岡直人(岡山理科大学)
・土器内固形物の分析	四柳嘉章(漆器文化財科学研究所)
・自然科学的分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
・種実同定	株式会社　古環境研究所
・花粉分析	〃
・種実同定	〃
・木材同定	〃

5　報告書の作成は平成10年と11年の2ヵ年にわたり、岡山県古代吉備文化財センターで行った。

6　本報告書の整理担当調査員は、平成10年度下澤公明、平成11年度下澤公明・築地由行である。本文の執筆は調査担当調査員が分担し、文末に文責を記した。

7　本書に掲載した遺構写真は、調査担当調査員が撮影した。遺物写真は整理担当調査員の指示により、江尻泰行の協力と援助を仰いだ。

8　本書の編集は、下澤公明が担当し築地由行が補助した。

9　本報告書の関係する遺物・実測図・写真・マイクロフイルム等は、岡山県古代吉備文化財センター(岡山市西花尻1325－3)に保管している。

凡　例

1　報告書に記載された高度値は海抜高であり、方位は特に示さない限り磁北である。

2　遺物番号はまとめて、通し番号を付けた。これ以外のものについては材質・種別を示すため、下記の略号を番号の前に付した。

石器・石製品－S　　金属器・金属製品－M　　木器・木製品－W　　玉類－O

骨・骨角製品－B

3　掲載した遺構の縮尺率は必ずしも統一が図れず、個別にスケールを付した。なお、遺物は土器が基本的に1/4である。木器も1/4としたが、大きいものについては個別に縮尺率を示し、鉄器・石器については個別に表記した。

4　遺構名を省略する場合の略称は、以下のとおりである。

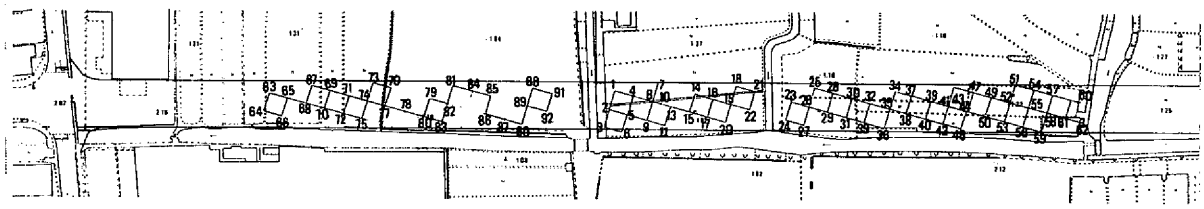
竪穴住居－住　　建物－建　　土壙－土　　井戸－井　　土器溜り－土溜

また、遺物名については壺形土器、甕形土器、高杯形土器、器台形土器、鉢形土器などは、壺、甕、高杯、器台、鉢のように略称して用いる。

5　報告書に用いる時代区分は一般的政治区分に準拠し、補うために文化史区分、世紀を併用した。

6　第２章第２図は建設省国土地理院発行「岡山南部」の２万５千分の１地形図を複製し、加筆した。

7　グリット番号は、下図のとおりである。

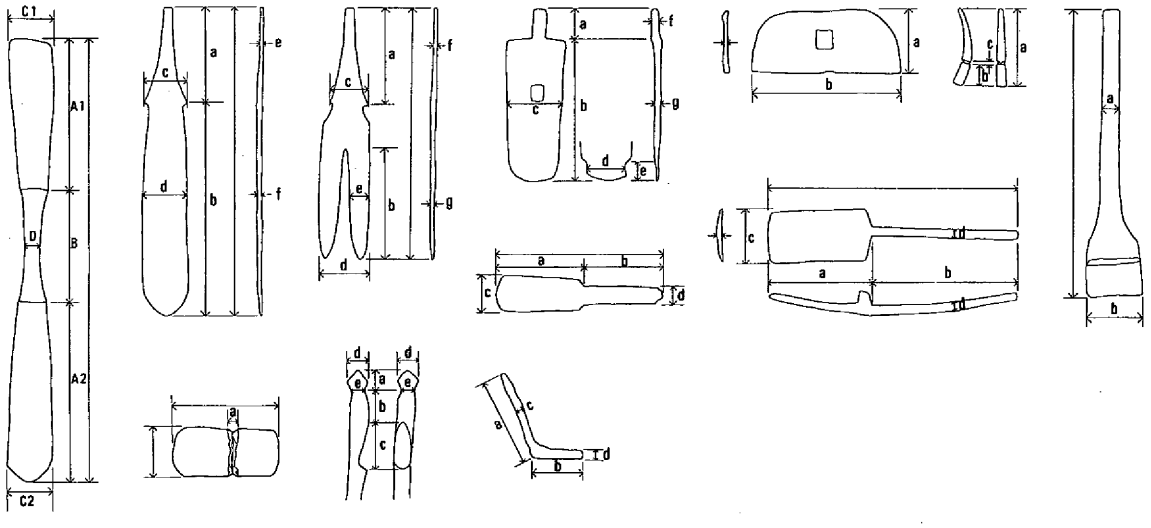


8　本文中に掲載した観察表の凡例は、以下のとおりである。

土器観察表－法量欄の（　）付き数値は径1/8以下からの復元推定値である。

色調は小川正忠・竹原秀雄編『新版　標準土色帖』1993年版をもとに表記した。

木器観察表－アルファベットの計測部は、下図のとおりである。



目　　次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章　発掘調査および報告書作成の経緯

第1節　発掘調査の契機……1

第2節　第一次調査……2

第3節　発掘調査の経緯と体制……4

1　調査の経緯……4

2　保存問題……6

3　日誌抄……7

4　調査の体制……12

第4節　報告書の作成……13

第2章　遺跡をとりまく環境

第1節　地理的環境……14

第2節　歴史的環境……15

第3章　下庄遺跡

第1節　調査区の概要……17

第2節　調査の概要……17

1　Ia・b区の調査……17

2　Ⅱ区の調査……103

3　Ⅲ区の調査……104

4　Ⅳ区の調査……108

第4章　上東遺跡

第1節　調査区の概要……109

第2節　調査の概要……109

1　Ia・b区の調査……109

2　Ic区の調査……154

3　Ⅱ区の調査……311

第5章　結語

第1節　調査成果の概要……312

第2節　波止場状遺構について……314

第3節　出土遺物について……323

1　時期……323

2　絵画文土器について……325
3　弧帯文土器について……327
4　底部調整について……333
5　底部付着の炭化物について……334
6　祭祀について……336
附編
・上東遺跡出土資料の自然科学的調査　平尾良光・榎本淳子・早川泰弘……3
・上東遺跡出土土器付着炭化植物遺残の識別　松谷暁子……7
・上東遺跡出土の動物遺存体と骨角製品　富岡直人……24
・上東遺跡出土の土器内固形物分析　四柳嘉章……40
写真図版
報告書抄録

図　目　次

発掘調査および報告書作成の経緯

第１図　グリット位置図・土層断面図(1/5,000) ……3

第２図　調査区設定図(1/5,000) ……5

第３図　遺構配置図(1/5,000) ……5

遺跡をとりまく環境

第１図　遺跡位置図(1/1,500,000) ……14

第２図　周辺遺跡分布図(1/25,000) ……16

下庄遺跡

第１図　土層断面図(1/80) ……17

第２図　Ia・b区遺構配置図(1/400) ……18

第３図　Ia・b区弥生時代以前の遺構配置図(1/400) ……18

第４図　Ia・b区弥生時代遺構配置図(1/400) ……19

第５図　Ia・b区中～近世遺構配置図(1/400) ……19

第６図　Ⅱ区遺構配置図(1/600)・土層断面図(1/60) ……103

第７図　Ⅲ区遺構配置図(1/300) ……104

第８図　Ⅲ区土層断面図(1/60) ……104

第９図　Ⅳ区土層断面図(1/60) ……108

上東遺跡

第１図　Ia・b区弥生～古墳時代遺構配置図(1/500) ……110

第２図　Ia・b区中～近世遺構配置図(1/500) ……110

第３図　A－A′土層断面図(1/120) ……111

第４図　波止場状遺構図(1/400) ……154

第５図　Ib・c区土層断面位置図(1/500) ……155

第６図　Ib・c区関係図(1/500) ……155

第７図　A－A′土層断面図(1/120) ……156

第８図　B－B′土層断面図(1/80) ……157

第９図　C－C′土層断面図(1/80) ……158

第10図　D－D′土層断面図(1/80) ……158

第11図　E－E′土層断面図(1/60) ……159

第12図　F－F′土層断面図(1/80) ……160

第13図　G－G′土層断面図(1/80) ……160

第14図　H－H′土層断面図(1/80) ……160

第15図　盛り土崩落内材検出図(1/100) ……161

第16図　グリット53北側の材と土層関係図(1/100) ……162

第17図　グリット52周辺の材と土層関係図(1/100) ……162

第18図　立面ポイント位置図(1/150) ……163

第19図　Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ立面図(1/150・1/100) ……164

第20図　Ⅰ工区立面図(1/100) ……164

第21図　杭列Ⅲと立面図(１/100) ……165

第22図　波止場状遺構と杭(1/300) ……166

第23図　波止場状遺構除去後の杭(1/300) ……166

第24図　杭の樹種(1/150) ……168

第25図　遺物出土位置図(1/300) ……169

第26図　波止場状遺構最終検出杭と遺物位置図(1/300) ……170

第27図　波止場状遺構除去後の最終検出杭と遺物位置図(1/300) ……170

第28図　遺物出土位置図(1/300) ……171

第29図　壺出土位置図(1/300) ……171

第30図　甕出土位置図(1/300) ……172

第31図　高杯出土位置図(1/300) ……172

第32図　鉢出土位置図(1/300) ……173

第33図　器台・製塩土器出土位置図(1/300) ……173

第34図　Ⅱ区土層断面図(1/60) ……311

結語

第１図　造成模式図……314

第２図　盛り土概念図(1/80) ……315

第３図　杭模式図……315

第４図　敷葉工法断面図(1/200) ……317

第５図　第Ⅰ工区崩落部分出土遺物(1/100・1/16) ……318

第６図　基盤層出土遺物(1/200・1/16) ……319

第７図　遺物出土層(１)(1/100・1/16) ……321

第８図　遺物出土層(２)(1/100・1/16) ……321

第９図　上東Ia～c区西壁土層断面模式図(1/750) ……322

第10図　高杯模式図……323

第11図　絵画文土器(1/2) ……325

第12図　文様展開図(1/2) ……327

第13図　文様復原案……328

第14図　撥形文関連資料出土例および遺跡位置図(白ヌキは出土地不正確) ……329

第15図　底部の調整……333

表　目　次

表１　貝の種類とサイズ表……121
表２　樹種名一覧表……167

巻頭図版目次

巻頭図版１　１．遺物検出状態(南から)
２．遺物出土状態(東から)
巻頭図版２　１．杭断面(北から)
２．スプーン出土状態(東から)
巻頭図版３　絵画文土器
巻頭図版４　骨角製品
巻頭図版５　１．卜骨(表)
２．卜骨(裏)
巻頭図版６　１．卜骨(表)
２．卜骨(裏)
巻頭図版７　１．弧帯文土器
２．貨泉(表・裏)

写真図版目次

写真図版１　１．下庄Ia区中近世遺構面(北から)
２．下庄Ia区弥生遺構面(北から)
３．下庄Ia区溝１(南東から)
写真図版２　１．下庄Ib区中世遺構面(南東から)
２．下庄Ib区溝１(南から)
３．下庄Ib区竪穴住居(北から)
写真図版３　１．下庄Ib区竪穴住居(南から)
２．下庄Ib区井戸１(西から)
３．下庄Ib区井戸１掘り下げ(俯瞰)
写真図版４　１．下庄Ib区井戸１完掘(西から)
２．下庄Ib区土壙12(南から)
３．下庄Ib区土壙17(南西から)
写真図版５　１．下庄Ib区土壙21(東から)
２．下庄Ib区土壙24～27・30(南から)
３．下庄Ib区柱穴(南東から)
写真図版６　１．下庄Ib区土器溜り１(北東から)
２．下庄Ib区土器溜り１断面(南東から)
３．下庄Ib区土器溜り２(北から)
写真図版７　１．下庄Ib区土器溜り２遺物出土状態(南から)
２．下庄Ⅱa区全景(南から)
３．下庄Ⅱb区全景(北から)
写真図版８　１．下庄Ⅱc区全景(北から)
２．下庄Ⅱa区溝14(西から)
３．下庄Ⅲ区全景(北から)
写真図版９　１．下庄Ⅲ区たわみ９(北から)
２．下庄Ⅳ区中央トレンチ(北から)
３．下庄Ⅳ区中央トレンチ西端(南東から)
写真図版10　１．上東Ia区全景(北から)
２．上東Ia区全景(南から)
３．上東Ib区全景(南から)
写真図版11　１．上東Ia区建物１・２(南西から)
２．上東Ib区微高地下がり(北から)
３．上東Ib区微高地下がり(東から)
写真図版12　１．上東Ib区貝塚(北から)
２．上東Ib区貝塚(北東から)
３．上東Ib区貝塚出土獣骨(俯瞰)
写真図版13　１．上東Ia区溝３・４(東から)
２．上東Ia区溝２・６・７(南から)
３．上東Ia区溝５(北から)
写真図版14　１．上東Ia区土器溜り(南から)
２．上東Ia区土器溜り掘り下げ(南から)
３．上東Ib区獣骨検出状態(南から)
写真図版15　１．上東Ic区波止場状遺構検出状況
(南西から)

2．上東Ic区遺物出土状況(南西から)
写真図版16　1．上東Ic区土層断面(B－B′)(東から)
2．上東Ic区遺物出土状態(南から)
写真図版17　1．上東Ic区遺物出土状態(北東から)
2．上東Ic区第Ⅰ工区南端状態(南西から)
写真図版18　1．上東Ic区遺物検出状態(南西から)
2．上東Ic区第Ⅱ工区撤去状態(南東から)
3．上東Ic区第Ⅱ工区撤去状態(南西から)
写真図版19　1．上東Ic区第Ⅱ工区撤去状態(北西から)
2．上東Ic区第Ⅱ工区撤去状態(東から)
3．上東Ic区第Ⅱ工区撤去状態(南東から)
写真図版20　1．上東Ic区杭検出状態(南東から)
2．上東Ic区杭検出状態(北東から)
3．上東Ic区杭検出状態(北東から)
写真図版21　1．上東Ic区杭検出状態(西から)
2．上東Ic区杭検出状態(北から)
3．上東Ic区土層断面(G－G′)(南から)
写真図版22　1．上東Ic区土層断面(F－F′)(南東から)
2．上東Ic区土層断面(B－B′)(南東から)
3．上東Ic区土層断面(A－A′)の噴砂
(西から)
写真図版23　1．上東Ic区土層断面(F－F′)(南から)
2．上東Ic区土層断面(C－C′・B－B′)(北
東から)
3．上東Ic区杭列Ⅲ検出状態(北西から)
写真図版24　1．上東Ic区杭列Ⅲ検出状態(北西から)
2．上東Ic区土層断面(E－E′)(北東から)
3．上東Ic区杭列Ⅱ検出状態(西から)
写真図版25　1．上東Ic区杭列Ⅰ検出状態(東から)
2．上東Ic区杭列Ⅴ検出状態(南から)
3．上東Ic区杭列Ⅴ検出状態(西から)
写真図版26　1．上東Ic区杭検出状態(西から)
2．上東Ic区杭検出状態(南東から)
3．上東Ic区杭検出状態(南東から)
写真図版27　1．上東Ic区杭検出状態(北西から)
2．上東Ic区杭検出状態(西から)
3．上東Ic区基礎横木検出状態(北から)
写真図版28　1．上東Ic区遺物出土状態(南西から)
2．上東Ic区杭検出状態(南西から)
3．上東Ic区杭検出状態(北東から)
写真図版29　1．上東Ic区杭検出状態(北から)
2．上東Ic区草検出状態(西から)
3．上東Ic区敷葉(木片)検出状況(東から)
写真図版30　1．上東Ic区貨泉出土状態(東から)
2．上東Ic区遺物出土状態(南西から)
3．上東Ic区樋出土状態(南西から)
写真図版31　1．上東Ic区遺物出土状態(東から)
2．上東Ic区作業風景(南東から)
3．上東Ic区作業風景(南西から)
写真図版32　1．上東Ic区細粒鉱滓による埋め戻し
(南東から)
2．上東Ⅱ区トレンチ(北から)
3．上東Ⅱ区トレンチ(南東から)
写真図版33　出土土器1
写真図版34　出土土器2
写真図版35　出土土器3
写真図版36　出土土器4
写真図版37　出土土器5
写真図版38　出土土器6
写真図版39　出土土器7
写真図版40　出土土器8
写真図版41　出土土器9
写真図版42　出土土器10
写真図版43　出土土器11
写真図版44　出土木器1
写真図版45　出土木器2
写真図版46　出土木器3
写真図版47　出土木器4
写真図版48　出土木器5

第１章　発掘調査および報告書作成の経緯

第１節　発掘調査の契機

現在の「主要地方道箕島高松線」の路線は都道府県道の企画、計画の作成段階を経て、すでに昭和42年に都市計画決定がなされ「中央線」と命名されていたものである。その後は「箕島矢部線」、「大内田高松線」等と名称の変更が行われ今日に至っている。

平成８年度当初に県道路建設課改良係、倉敷地方振興局建設部工務一課二係から箕島高松線道路改良についての事業説明を受ける。事業の概要は、国道２号の岡山市箕島から総合流通センターを経由して岡山市高松までの県道の付け替えおよび改修である。これによって岡山県総合流通センターと岡山倉敷線(旧国道２号)および吉備津松島線を結び、岡山市並びに山陽自動車道倉敷インターチェンジへのアクセス強化を図るものである。

国道２号から岡山倉敷線まではすでに整備済みで、岡山倉敷線から新幹線高架下までの区間の整備を計画、実施設計も終了し平成９年９月の工事着工を予定しているとの趣旨である。

教育庁文化課と倉敷地方振興局との事前協議後の平成８年７月３日に倉敷地方振興局長から埋蔵文化財発掘の通知(第57条の３)が提出される。それを受けて平成８年９月９日に倉敷地方振興局建設部工務第一課二係・用地推進室・文化課・岡山県古代吉備文化財センターの関係者による現地協議が行われた。当該地は倉敷市上東・下庄に所在し、対象面積26,250㎡を測り、計画道路延長は南北1,050ｍ、幅員6.0(25.0)ｍの規模で計画されていた。現状地目は水田であり、路線の東側に農道と農業用水路が並行しており、西側は東西に長い水田を縦断する格好となっている。

倉敷振興局では法規制の事前協議(埋蔵文化財・住民への基本説明会)が進行中であり、路線内の未買収用地は(株)中四国印刷センターとＲＳＫバラ園の新駐車場部分が交渉中との説明を受ける。そして、チボリ公園に関連して吉備津松島線を平成10年に改良する予定があり、それに併せて箕島高松線の工事を計画しており４車線のうち２車線だけでも間に合わせたいのと、工事は南側から開始したい趣旨説明を受ける。

文化課は工事予定地内における埋蔵文化財包蔵地の範囲・性格・内容の概要を把握するための部分的な発掘(確認調査)の必要性を伝える。そして、路線用地幅杭、作付・上物・地下支障物件・埋戻し等の条件整備を確認し、岡山県古代吉備文化財センター調査第一課が平成９年１月７日から１月28日まで確認調査を実施した。ちなみに、埋蔵文化財発掘調査の報告(第98条の２)は平成９年１月21日付けである。

次年度へ向けての範囲確認で南側に弥生時代から古墳時代にかけての集落跡等が発見され、従来の上東遺跡の載る微高地の南側に新たな微高地の所在を明らかにする事ができた。

この事実に基づき、平成９年２月26日に岡山県古代吉備文化財センターにて協議を行い、倉敷地方振興局に今後の未買収地の対応、耕作に支障の無いように農業用水路および畦畔の確保などの条件整備を依頼した。そして、平成９年度は調査員４名により11,250㎡の発掘調査を実施する体制が計画された。

(高畑)

第２節　第一次調査

第一次調査は、路線内における周知の上東遺跡の広がりと遺構密度を明らかにし、第二次調査の範囲と調査期間の確定を目的とした。調査は、平成９年１月７日から１月28日にかけて行い、第１図に示すＴ１～Ｔ21の各地点について、3×3mまたは2×2mのトレンチを設定した。なお、当初計画では、路線内を基本的に約40mおきにＴ１～Ｔ20までの計20ヵ所について確認する予定であったが、調査の進行に伴い、その所見を基に調査箇所を省略し、また北端にＴ21を追加し、15ヵ所に限定した。そのためトレンチ番号に欠番が生じている。全体の調査面積は135㎡であり、実際の調査日数は13日間である。

調査地点の現況は水田が営まれ、その標高は南端部で約130cm、中央部で約120cm、北端部で約150cmを測り、中央部がやや低くなるものの、全体的には南へと緩やかに傾斜する状況である。

Ｔ１・Ｔ３では、地表下約50cm、海抜70～80cmで黄褐色粘土の微高地基盤層を確認した。この基盤層の上部には灰褐色粘質微砂層が堆積しており、わずかに弥生時代以降の土器細片が含まれる。遺構は確認されず、その密度は非常に希薄であると判断された。

Ｔ４においては、この微高地上で、中近世の柱穴・土壙、および弥生時代～古墳時代のものと思われる柱穴を確認した。

Ｔ５では、海抜95cmで弥生時代から古墳時代の微高地遺構面を確認し、弥生時代の柱穴を検出した。他の箇所と比較し遺構密度は高い。微高地はＴ５からＴ７にかけて次第に傾斜するものと考えられ、Ｔ７では微高地自体は確認されず低位部へと移行する。このＴ７では、微高地上から転落、あるいは廃棄されたと思われる古墳時代６世紀後半～７世紀前半の須恵器が海抜０～40cm付近の黒灰色粘土層を中心に出土した。

Ｔ８では近世～近代と思われる砂の堆積が海抜０cmまで厚く確認され湧水のためこれ以上掘り下げることができず、Ｔ７で判明した遺物包含層の北側への広がりは明らかにしえなかった。

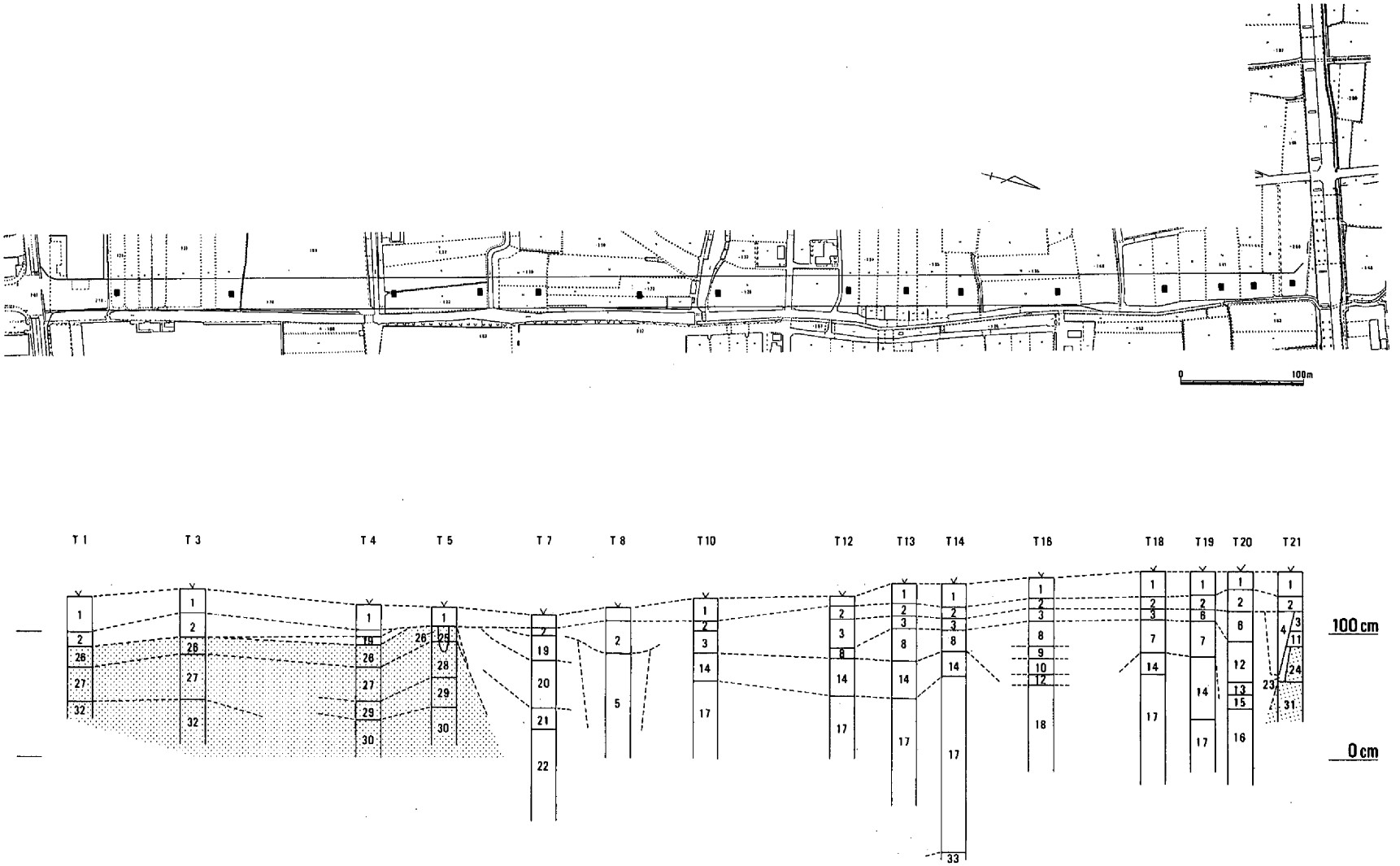
Ｔ10～Ｔ14にかけては、地表下150cm、海抜０cmまで掘り下げたが、いずれも湿地を示す粘土あるいはシルト層の堆積であり、遺物もほとんど確認されなかった。このことから、古くとも中世後半段階までは人為的行為の及ばない湿地であると判断した。

Ｔ16では、海抜60～70cmにおいて灰色微砂混粘土層を確認し、この層位の下面に鉄分沈着が認められたことから水田層の可能性がある。しかしながら、遺物が明らかでなくその時期が古代以降であるとしか推測できない。

Ｔ18～20においても基本的には近世～現代以降と考えられる水田あるいは畑作層の下位は、粘土とシルトの堆積であり遺構・遺物とも確認されなかった。

Ｔ21では、海抜約90cmで南に傾斜する微高地斜面の弥生時代～古墳時代の遺物包含層を確認し、この南端部に近世段階の東西方向に走る溝と思われる下がりを検出した。ここで確認された微高地は、山陽新幹線および都市計画道路の建設の際に調査された上東遺跡才ノ町の微高地の続きとして捉えられるものと思われる。また、微高地そのものはＴ21以南までは広がらず、低位部へと移行するものと考えられる。

以上の所見から、路線内における遺跡の広がりは、Ｔ５を中心とした弥生時代から古墳時代の微高地とその北側の遺物を包含した低位部からなることと、最北端のＴ21で明らかにされた南側へ傾斜する微高地斜面部分であることが確認された。（大橋）



1 暗灰褐色微砂～細砂
2 灰黄～灰褐色微砂混粘土
3 黄茶～灰茶色細砂混粘質微砂
4 薄灰茶色粗砂
～灰オリーブ色シルト
5 灰茶色粗砂
6 茶～暗茶褐色粘質微砂
7 茶褐～灰茶褐色粘質微砂
（1～2mmの黒色バンドあり）
8 橙褐色粘質微砂
9 茶褐色粘質微砂
10 茶褐～黄灰色微砂
11 薄橙灰色粘土
12 灰色微砂混粘土
13 明黄灰色微砂～粗砂混粘土(Fe含)
14 橙褐～灰褐色粘質微砂～粘土
15 明黄灰色微砂～粗砂混粘土
16 暗灰～黒灰色粗砂混シルト質粘土
17 灰～暗灰色粘土(植物遺体多)
18 暗灰色粘土
19 橙灰～橙褐色粘質微砂
20 暗茶褐色粘質微砂
21 黒灰色粘土
22 灰色粘土
23 薄茶灰～灰オリーブ色細砂
24 暗茶褐色微～細砂
25 暗茶色粘質微砂
26 灰褐色粘質微砂
27 黄褐色～明黄色粘土
28 黄褐色微砂
29 灰～黄灰色粘土
30 灰色粘土
31 灰オリーブ色粘土
32 灰色粗砂～砂礫
33 灰色砂礫

第1図　グリッド位置図・土層断面図 (1／5,000)

第３節　発掘調査の経緯と体制

１　調査の経緯

第一次調査の結果を受け、平成９年４月から全面調査に入った。調査区は、上東遺跡として把握されていたが、調査対象地が南北に長いために改めて地籍図を検討することとなった。その結果、調査区南寄りに東西方向に存在する用水を境とし、字名が異なる。したがって、遺跡名についても、それぞれの字名を遺跡名として用いることとした。

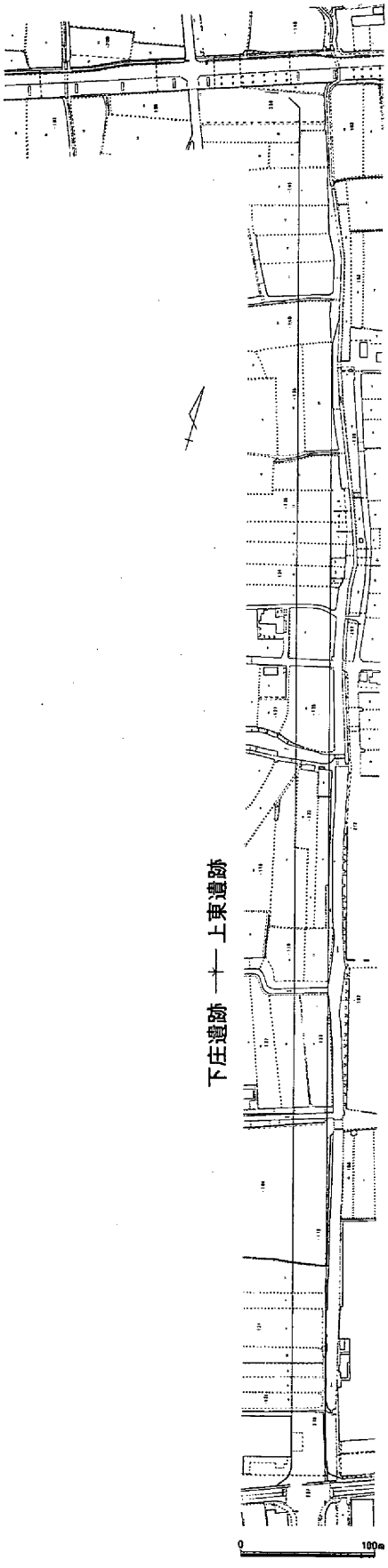
調査体制は２班で４人が、面積11,250㎡を調査対象とした。調査地点は、第一次調査の結果を踏まえ下庄遺跡と上東遺跡Ⅰ区・Ⅱ区とし、Ⅰ区・Ⅱ区の間は調査対象外とした。実際の掘削は東が川となり西も水田となっていることから両側に150cmを残し、幅22mを掘り下げた。調査区は、水田畔の関係から下庄遺跡はⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅳ区に、上東遺跡はⅠ区・Ⅱ区とし、排土地確保の関係から必要に応じａ・ｂ・ｃに分けた。

調査は、第一次調査で比較的遺構密度の濃い字境の用水側の下庄Ia区から入った。下庄Ib区から上東Ib区にかけては、黄褐色土の安定した基盤層が認められ、20cmほどの表土を除去すると、すぐに遺構面になる。上東Ib区の北側は砂層が認められ、河道が入ってきていると考えられた。また、下庄Ⅰ区では、黄褐色土が南西方向に下がりグライ化していき、遺構も希薄となる。Ⅱ区からⅢ区にかけては耕作土下50cm、Ⅱ区では駐車場の盛り土があることから120cm近くを排土しなければならなかった。黄褐色土の基盤層が認められたが、遺構の密度は希薄である。

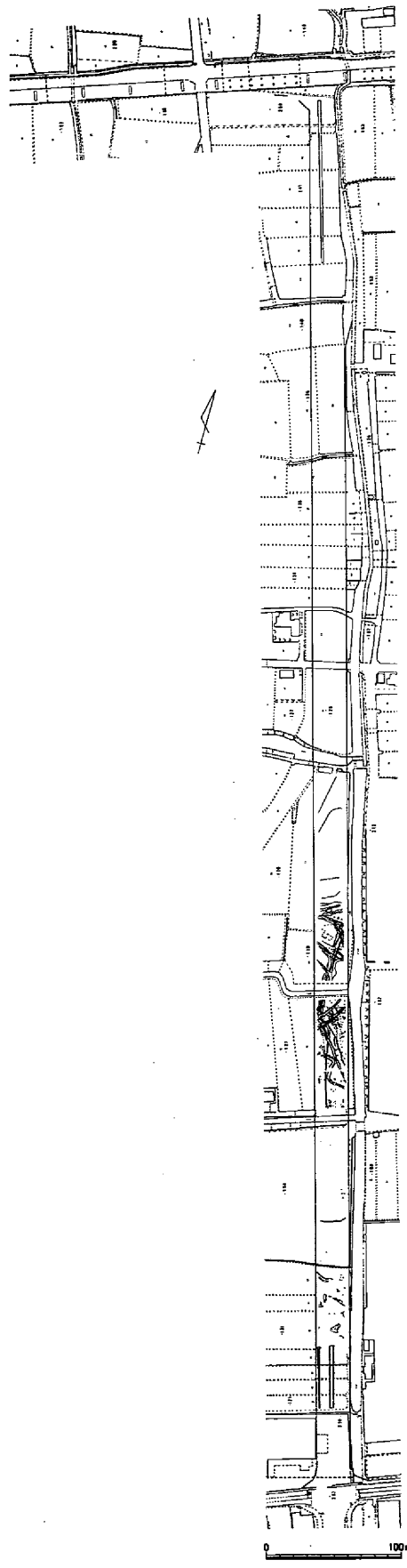
Ⅳ区の調査区に接した西側の水田は、倉敷市の確認調査で基盤層は認められるが、遺構・遺物は確認されなかった。このようなことから、Ⅳ区の調査は中央部に幅3mのトレンチで対応した。さらに、当調査区南側は構造物があり、撤去が平成11年以降になること、遺構の状況からこの部分については立会で対応することとなった。

上東Ia区からIb区の南側は、黄褐色土の基盤層が認められ北側は河道が北東－南西に認められる。下がり部分には、古墳時代後期の貝塚が形成され、さらに、古墳時代後期と同前期の河道が存在することが確認された。掘り下げが砂であるため調査区北側は、幅と法面を多く取ることになり面的な調査ができていない。Ic区はIb区の調査と第一次調査の内容から、河道か後背湿地と考えていた。このことから、面的な調査ではなくトレンチで対応することとした。その結果、土手状の高まりが認められた。しかし、この高まりは、近世の護岸に関わるものと考え、この高さを確認するために、さらに掘り下げを行った。そして、この高まりの下層から弥生時代後期後半期の甕と壺が、人工の盛り土部分から検出されたのである。しかしながら、この時点においても、まだ、時期がこれほど古くなるとは考えずに断面図において済ますことで進めた。この認識は、Ib区の古墳時代の河道堆積土である灰色砂層がこの土盛りの下に入っていくものと想定していたからである。最終的に、この層が土盛りの層より上に堆積し、先きの土器の出土から土盛りが弥生時代後期まで遡ることが明らかとなったのである。

遺構の性格については、護岸関係の施設と考え調査を進めた。12月下旬になり南東斜面から完形品に近い土器と木器が検出されだす。平成10年１月下旬にそれらの遺物の取り上げにかかるが、土手の性格については依然と靄の中であった。全国的に出土例のない絵画文土器の報道機関への発表のあ



第２図　調査区設定図 (1/5,000)



第３図　遺構配置図 (1/5,000)

と、従来の横断でのトレンチではなく平行するトレンチを設定した。このトレンチにより北東側の広い平坦部と南西側の細長い部分では、構築の工法が異なることが明確に確認された。

そして、２月上旬段階で遺構の性格がようやく把握された。それに対応する調査の実施を図った。しかしながら、用いられる杭の量の多さと埋土の砂と粘土そして多量の湧水のために年度末をひかえ調査は停滞気味であった。年度内に現在の杭列、トレンチの図化さえおぼつかない状況下にあった。ましては、波止場状遺構の全面的な掘り下げを行っての調査は不可能であり、主要部分のトレンチでの最低限度の事実認識の把握さえできない現状であった。他方、工事着工は年度当初ではなく後半にはいってからという状況であった。このようなことから、倉敷地方振興局・文化課・センターの三者で協議を行い、現在検出を済ませている杭列の図化と土手の構築工程を明らかにできる程度のトレンチを入れることが可能な調査期間として新年度の５月中ごろまで継続することで了解に至った。

10年度の調査は、新幹線の南側を対象とし発掘調査担当２班９名、報告書担当１名の体制で実施した。調査は、今年度の調査区と並行するかたちで、当該区の調査を続けなければならないことから２班の内の１班が担当となる。また、図面作成の量が多いことから、二課内で応援体制をはかった。このような状況下で、昨年度段階で検出していた杭の作図とサンプルの採取、新たなトレンチにより波止場の造成の工程が曲がりなりにも把握することができ、調査を終わらせることができたのである。

2　保存問題

上東遺跡の波止場状遺構は、平成10年１月下旬頃に600個体を超える完形の土器の出土状態から絵画文土器の報道機関の発表さらには、遺構そのものの性格が明らかになるにつれ保存の話が俎上にのぼりはじめた。公の場において保存の問題が取り上げられたのは、毎月初めに行われる県下の考古学研究者の組織である『岡山県遺跡保護調査団』とで行われる埋蔵文化財連絡会議においてである。その時期は、調査がほぼ終了の見通しのついた平成10年５月の会議の場であった。ここで、保護調査団側から「極めて重要な遺構である。今後この遺構は残るのか」との質問があり、これに対し文化課は担当である倉敷地方振興局もその重要性を認識し協議を進めていることを伝える。具体的には、現地表面から1mほどの盛り土と、湾入部分は土壌改良材をしないと沈下するなどから細粒鉱滓を入れる。また、説明板などの作成も考えているなどと答えている。同６月の会議において文化課は、波止場状遺構について細粒鉱滓でパックするように埋め戻しを行い保護したとの報告をする。また、模型を作って展示するよう努力するとの旨の話をする。このような経緯を踏まえ、平成10年度末には現地に説明板を付設した。さらに、100分の１の模型を作成し、文化財センターの展示室で公開している。

現地での現状保存が出来なかったが、次善の策として遺構部分を工事施行にともなう滅失(調査の経緯でもふれたように遺構を全て掘り上げての終了ではなく、波止場状以外の北側はトレンチによるものだけであり遺構自体は遺存している。)を細粒鉱滓で埋めることにより、遺存している部分については現状で残すことができたのである。このことは、調査が終了すると工事により跡形もなくなることを当然のこととして受け入れてきた側面がある。調査が終わっても遺構そのものは、調査の方法によっては残されているのである。近い将来ではなく遠い将来においてそれらの遺構が、関連諸科学の進展であらたな資料を得る技術が生み出された時を見据えた遺跡の取り扱いが求められる。このようなことからすれば、今回の方法は先に述べたように次善の策であったが、本来的には当初計画の過程の中でこのような調査終了後の取り扱いを考えるべきであるのかどうか検討の必要が出てきたことは否めないであろう。　（下澤）

３　日誌抄

第一次調査

平成９年１月７日～１月28日

全面調査

平成９年４月１日～４月４日

調査準備

平成９年４月７日～４月11日

下庄Ia区から調査を始める。側溝の掘り下げ。

平成９年４月14日～４月18日

土壙、溝の掘り下げと写真撮影。

平成９年４月21日～４月25日

近世面の全景写真と実測。近世面の掘り下げ。

平成９年４月28日～５月２日

下庄Ia区－遺構の検出、掘り下げ、写真撮影。

上東Ia区－側溝の掘り下げ。

平成９年５月６日～５月９日

下庄Ia区－遺構掘り下げ、実測。

上東Ia区－側溝の掘り下げ。

平成９年５月12日～５月17日

下庄Ia区－遺構の掘り下げ、実測、全景写真。調査終了。

下庄Ib区－重機による排土。

上東Ia区－調査開始。側溝の掘り下げ。

平成９年５月19日～５月23日

下庄Ib区－重機による排土。

上東Ia区－遺構の掘り下げ、実測。

平成９年５月26日～５月30日

上東Ia区－遺構の掘り下げ、実測、写真撮影。

下庄Ib区－基準杭打ち。

平成９年６月２日～６月６日

上東Ib区－遺構の掘り下げ、実測、写真撮影。

上東Ib区－側溝の掘り下げ。

上東Ic区－側溝の掘り下げ。

平成９年６月９日～６月13日

上東Ia区－遺構の掘り下げ、実測、写真撮影。

下庄Ib区－調査開始。側溝の掘り下げ。

上東Ic区－側溝の掘り下げ。

平成９年６月16日～６月20日

上東Ia区－遺構の掘り下げ、実測、写真撮影。

平成９年６月23日～６月27日

上東Ia区－遺構の実測。

下庄Ib区－側溝掘り下げ。遺構検出。

平成９年６月29日～７月４日

上東Ia区－遺構の実測。調査終了。

下庄Ib区－遺構検出。

平成９年７月６日～７月11日

上東Ib区－重機による打って返し。

下庄Ia区－遺構検出。

平成９年７月14日～７月18日

下庄Ib区－遺構の掘り下げ、実測、写真撮影。

平成９年７月22日～７月26日

下庄Ib区－遺構の掘り下げ、実測、写真撮影。

上東Ib区－重機による表土排土。

平成９年７月28日～８月１日

下庄Ib区－遺構の掘り下げ、実測、写真撮影。

上東Ib区－重機による表土排土。

平成９年８月４日～８月８日

下庄Ib区－遺構の掘り下げ、実測、写真撮影。

上東Ib区－調査開始。側溝掘り下げ、包含層の掘り下げ。

平成９年８月11日～８月15日

下庄Ib区－遺構の掘り下げ、実測、写真撮影。

上東Ib区－遺構検出。

平成９年８月18日～８月22日

下庄Ib区－遺構の掘り下げ、実測、写真撮影。

上東Ib区－基準杭打ち。遺構検出。北側の砂層掘り下げ。

平成９年８月25日～８月29日

下庄Ib区－遺構の掘り下げ、実測、写真撮影。遺物の取り上げ。

上東Ib区－遺構の掘り下げ、実測、写真撮影。中世水田検出。

平成９年９月１日～９月５日

下庄Ib区－遺構の掘り下げ、実測。掘り上げの空撮。

上東Ib区－中世水田の実測、写真撮影。

平成９年９月８日～９月12日

下庄Ib区－遺構の掘り下げ、実測、写真撮影。

上東Ib区－微高地下がりの掘り下げ。

平成９年９月16日～９月19日

下庄Ib区－遺構の掘り下げ、実測、写真撮影。

上東Ib区－微高地下がりの掘り下げ。

平成９年９月22日～９月26日

専門委員会

下庄Ib区－遺構の掘り下げ、実測。

上東Ib区－貝塚の検出。

平成９年９月29日～10月３日

下庄Ib区－遺構の掘り下げ、実測、遺物取り上げ。

上東Ib区－貝塚の実測。中央トレンチ掘り下げ。

平成９年10月６日～10月９日

上東Ib区－貝塚の実測。中央トレンチ掘り下げ。

平成９年10月13日～10月17日

下庄Ib区－調査終了。

上東Ib区－貝塚の実測、写真撮影。中央トレンチ掘り下げ。

平成９年10月20日～10月24日

上東Ib区－貝塚の実測。中央トレンチ西側砂層の掘り下げ。

平成９年10月27日～10月31日

上東Ib区－調査終了。

下庄Ⅲ区－調査開始。

下圧Ⅳ区－調査開始。

平成９年11月４日～11月８日

下庄Ⅳ区－トレンチ掘り下げ。

上東Ic区－調査開始。重機による打って返し。

平成９年11月10日～11月15日

下庄Ⅳ区－調査終了。

上東Ic区－重機による表土剥ぎ。遺構検出。中央トレンチの掘り下げ。

平成９年11月17日～11月21日

上東Ic区－重機による表土剥ぎ。中央トレンチ掘り下げ。土手状遺構の検出。

平成９年11月24日～11月29日

上東Ic区－土手状遺構の検出。

下庄Ⅲ区－重機による表土剥ぎ。

平成９年12月１日～12月５日

上東Ic区－土手状遺構の掘り下げ。

下庄Ⅲ区－遺構検出、掘り下げ、実測、写真撮影。

平成９年12月８日～12月12日

上東Ic区－土手状遺構の掘り下げ、全景写真。

下庄Ⅲ区－調査終了。

上東Ⅱ区－調査開始。

平成９年12月15日～12月19日

上東Ic区－基準杭打ち。土手状遺構の実測、砂層の掘り下げ。

上東Ⅱ区－トレンチ掘り下げ。

平成９年12月22日～12月26日

上東Ic区－砂層の掘り下げ。

平成10年１月５日～１月９日

上東Ic区－砂層の掘り下げ。遺物の取り上げ。

平成10年１月12日～１月16日

上東Ic区－砂層の掘り下げ。遺物の取り上げ。

上東Ⅱ区－トレンチ掘り下げ。

下庄Ⅱ区－重機による表土剥ぎ。

平成10年１月19日～１月23日

上東Ic区－砂層の掘り下げ。遺物の取り上げ。土手状遺構の空撮。

下庄Ⅱ区－調査開始。重機による表土剥ぎ。側溝の掘り下げ。

平成10年１月26日～１月30日

上東Ic区－土器、木器の取り上げ。

下庄Ⅱ区－重機による表土剥ぎ。側溝の掘り下げ。

平成10年２月２日～２月６日

専門委員会

上東Ic区－砂層の掘り下げ。遺物の取り上げ。

上東Ⅱ区－トレンチ掘り下げ。

下庄Ⅱ区－重機による表土剥ぎ。

平成10年２月９日～２月13日

上東Ic区－裾部の掘り下げ。

下庄Ⅱ区掘り下げ、遺構検出。重機による表土排土。

平成10年２月16日～２月20日

上東Ic区－木器割り付け、実測。

上東Ⅱ区－調査終了。

下庄Ⅱ区－全景写真。

平成10年２月23日～２月27日

上東Ic区－土器、木器割り付け、実測。

上東Ⅱ区－調査終了。

下庄Ⅱ区－掘り下げ

平成10年３月２日～３月７日

上東Ic区－土器、木器割り付け、実測。重機による一部埋め戻し。

上東Ⅱ区－調査終了。

下庄Ⅱ区－掘り下げ。実測。調査終了。

平成10年３月９日～３月13日

上東Ic区－土器、木器割り付け、実測。重機による一部埋め戻し。

下庄Ⅱ区－掘り下げ、実測。

平成10年３月16日～３月20日

上東Ic区－杭列の空撮、実測。

平成10年３月23日～３月27日

上東Ic区－杭列の実測。

平成10年３月30日～３月31日

図面整理。

平成10年４月１日～４月３日

調査準備。

平成10年４月６日～４月10日

上東Ic区－杭列の実測、トレンチ掘り下げ。

平成10年４月13日～４月17日

上東Ic区－杭列の実測、トレンチ掘り下げ。

平成10年４月20日～４月24日

上東Ic区－杭列の実測、トレンチ掘り下げ。

平成10年４月27日～５月１日

上東Ic区－杭列の実測、トレンチ掘り下げ。

平成10年５月６日～５月８日

上東Ic区－杭列の実測、トレンチ掘り下げ。

平成10年５月11日～５月15日

上東Ic区－調査終了。

4　調査の体制

平成９年度

岡山県教育委員会

教 育 長　黒瀬定生

岡山県教育庁

教育次長　平岩　武

文化課

課　長　髙田朋香
課長代理　臼井洋輔
課長代理　西山　猛
参　事　葛原克人
課長補佐（埋蔵文化財係長）　平井　勝
主　事　三宅美博

岡山県古代吉備文化財センター

所　長　籔本克之
次　長　正岡睦夫
＜総務課＞
課　長　小倉　昇
課長補佐（総務係長）　井戸丈二
主　査　木山伸一
＜調査第三課＞
課　長　柳瀬昭彦
課長補佐（第二係長）　下澤公明（調査担当）
文化財保護主任　田井荘之助（調査担当）
文化財保護主任　築地由行（調査担当）
文化財保護主事　渡邉恵里子（調査担当）

平成10年度

岡山県教育委員会

教 育 長　黒瀬定生

岡山県教育庁

教育次長　平岩　武

文化課

課　長　髙田朋香
課長代理　西山　猛
参　事　正岡睦夫
課長補佐（埋蔵文化財係長）　松本和男
主　事　三宅美博

岡山県古代吉備文化財センター

所　長　葛原克人
次　長　大村俊臣
＜総務課＞
課　長　小倉　昇
課長補佐（総務係長）　安西正則
主　査　山本恭輔
＜調査二課＞
課　長　伊藤　晃
課長補佐（第二係長）　下澤公明（整理担当）
文化財保護主幹　山磨康平（調査担当）
文化財保護主査　土師忠満（調査担当）
文化財保護主任　田井荘之助（調査担当）
文化財保護主事　金田善敬（調査担当）
文化財保護主事　蛯原啓介（調査担当）
主　事　小林利晴（調査担当）
主　事　米田克彦（調査担当）

平成11年度

岡山県教育委員会

教 育 長　黒瀬定生

岡山県教育庁

教育次長　宮野正司

文化課

課　長　松井英治
課長代理　佐々部和生
参　事　正岡睦夫
課長補佐（埋蔵文化財係長）　松本和男
主　事　奥山修司

岡山県古代吉備文化財センター

所　長　葛原克人
次　長　大村俊臣
＜総務課＞
課　長　小倉　昇
課長補佐（総務係長）　安西正則
主　査　山本恭輔
＜調査一課＞
課　長　高畑知功
＜調査第三課＞
課長補佐（第二係長）　下澤公明（報告書担当）
文化財保護主任　築地由行（報告書担当）

第４節　報告書の作成

報告書作成の整理は、2ヵ年の計画で平成10年４月から調査員１名、復元３名、実測１名の体制で実施した。しかしながら整理に入るについて、問題が残されていた。その一つは、現場での調査が５月半ばまで延びたことにより本格的な整理作業は、それ以降に持ち越された。次の問題が整理の初年度前半に大きな比重をしめたことである。基本的には、報告書作成の整理で年間に及ぶ調査については、調査現場事務所で土器の洗浄、注記を終えてからセンターで復元実測の作業という流れである。したがって、遺物の処理はこの段階まで終了していなければならない。最終的な出土箱数641のうちの200箱程度しか洗浄が済んでいない状態であった。さらに、数百点に及ぶ杭等の木製品類は、手付かずの状況であり、先に記したように調査が継続していたことなど、十分な体制で整理に入れなかったのである。

このようなことから、洗浄と注記を済ませている遺物についてセンターで復元を行うこととした。残りの処理をしていない遺物については、平成10年度の調査対象である山陽新幹線南側部分の現場事務所において洗浄、注記を済ませること、また、木製品類については、事務所に保持しておくだけの施設がないことからセンターで処理する方向となった。実測は幸いにも完形品が多く出土していたため、復元の作業を経なく進めることが出来た。復元は復元室で行うが、遺物を広げる空間が手狭なため作業の段取りが後戻りする状況であった。このようなことから、７月半ばから作業空間が得られる新収蔵庫に移す。しかし、センターの事業関連から11月には元の復元室に戻る。現場事務所の洗浄と注記は、特に時間がかかると思われていた注記については器械を用いることで効率を高めたが、それらが終了したのは10月に入ってからである。木器類については、新たに３人を７月から９月の3ヵ月間入れることにより処理することができた。したがって、本格的に整理作業が軌道に乗りだしたのは、夏場をすぎてからである。

２年次目の平成11年度は、調査員２名、復元３名、実測２名の体制で行うこととなった。昨年度調査した新幹線南側部分の地区についても、調査員１名、復元２名、実測２名で整理に入る。この他に、不規則ではあるが１名が実測に加わることとなり、このような体制で最終年度を迎えることとなった。復元については、10月上旬でほぼ作業が終了することから、新幹線南側部分の整理に振りむけた。いずれにしても、2ヵ年に及ぶ整理は初年度における整理の前段階までの作業がほとんどできていないことが最後まで影響した。（下澤）

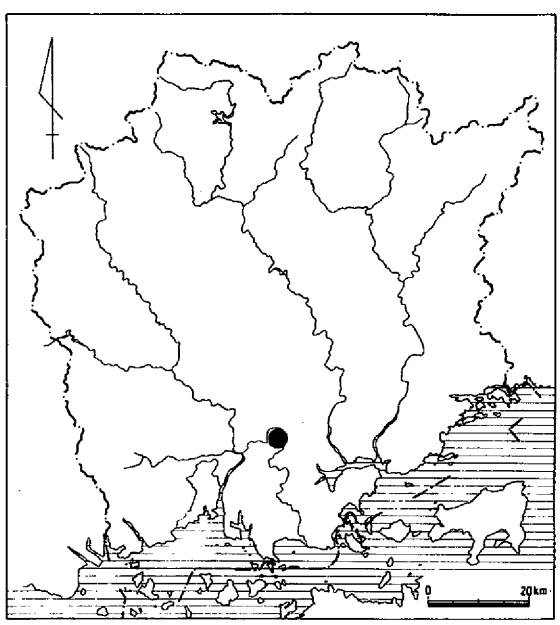
第２章　遺跡をとりまく環境

第１節　地理的環境

下庄遺跡と上東遺跡は、倉敷市の東端で岡山市と接している。この地は旧都窪郡庄村にあたり、岡山県中南部、平坦な岡山平野の中央西寄りに位置している。東部は岡山市に北部は旧吉備郡高松町と旧御津郡一宮町に、西部は旧都窪郡中庄村に、南部は旧都窪郡福田村、早島町等と接している。

遺跡の北側は片岡山と呼ばれる標高50m前後の低い丘陵が存在するが、現在は住宅地に造成され甍を連ねている。西側には日差山－仕手倉山－高鳥居山の山塊となり、その山腹を山陽自動車道がはしる。南側は早島の低い丘陵があり、南部は江戸時代以降の干拓で陸続きとなり、そこには岡山県総合流通センターの倉庫群が立ち並んでいる。かつては吉備の穴海に浮かぶ島の１つであった。東側には吉備中山が立地している。このように、幾ばくかの景観が吉備中山にとどめられているが、ほかは近年の開発により往時の姿を大きく変えてしまっている。

丘陵の前面には広大で肥沃な水田が形成され、標高2m前後の平野となっている。この平野の北寄りには、東西に山陽新幹線、都市計画道路が、南側には旧２号線、山陽本線が通っている。そして、その中央を縫うように吉備高原を源とした足守川が南流し、この旧河道により形成されたのが上東遺跡である。従来から知られている上東遺跡は、片岡山丘稜の南側沖積地に立地し、過去２度の調査において東西方向に４つの微高地の存在が明らかにされている。南側については、遺跡の近くまで遠浅の海岸がはいっていたと考えられていた。第一次調査の結果、後背湿地を介在させながらさらに南に大きく広がることが確認された。現在の箕島高松線は調査地区の70m西にあり、さらにその西の東西に古い家並と新たに造成され建てられた家がひろがる。東側は岡山市との境となる用水が南北に流れ、さらに東には住宅展示場と工場が存在する。この間に挟まれた地区は、宅地がまばらに認められる程度で広い水田が営まれている。この付近の畔の方向は、東西と南北が認められるが東西方向のむきが多い傾向にあり、水田の規模から近年において圃場整備が行われたことが窺われる。このようなことから、旧地形を想定できうる畔がほとんど認めることができないのである。しかしながら、このような地形の変化が起こりつつある中でわずかながら、それを想定できうる畔が認められるのである。この地点が波止場遺構が検出された地区の畔である。畔は、北東から南西方向のものが認められているのである。



第１図　遺跡位置図 (1/1,500,000)

（下澤）

第2節　歴史的環境

この地域には、矢部伊能軒遺跡(34)や矢部奥田遺跡(39)で早期の押形文土器が出土し、比較的なだらかな丘陵からそれに連なる地に人の痕跡が認められている。生活の痕跡が認められるようになるのは、縄文時代の矢部貝塚(38)である。貝塚は、標高15mの台地上に中期後半から後期前半にかけて形成された。その主体となる貝の種類がヤマトシジミであることから、この付近が汽水域であったことが知られる。晩期になると沖積地に進出していたことが、吉野口遺跡(55)での竪穴住居の検出から窺える。

弥生時代になると、その早い段階では高田遺跡(54)、岩倉遺跡(5)、東山遺跡(57)、川入遺跡(8)で遺構や遺物が認められ、沖積地の前面に出ていく傾向を窺わせる。中期から後期においては、新邸遺跡(58)、矢部南向遺跡(50)、加茂B遺跡(51)などが営まれる。その内の矢部南向遺跡では、小銅鐸の出土と他地域の土器の検出が目に付く。この分布図に入らないが、矢部南向遺跡北側の矢部高塚遺跡の銅鐸や貨泉また政所遺跡では銅釧が出土し、この地域が後に吉備と呼ばれる中枢域にあったことが想定される。このようなことから、今回調査された上東遺跡の波止場状遺構は、その構築の開始から中枢域の形成と密接な関わりを窺わせるのである。これと相前後して周辺の丘陵部に墳墓が形成されだす。後期後半以降では、楯築弥生墳丘墓(62)、鯉喰神社弥生墳丘墓(49)、女男岩遺跡(65)、辻山田遺跡(66)などが、足守川流域に展開した大集落の奥津城と想定される。特に楯築弥生墳丘墓は、円丘部径北東－南西40m、北西－南東38mを測り、両端に細長い突出部を設けた当代最大規模を有する。また、鯉喰神社弥生墳丘墓がそうであるように特殊器台や特殊壺を使用する固有の祭祀形態を保持していたことが知られる。特に楯築弥生墳丘墓にみられる弧帯文は、上東遺跡Ic区出土の鉢形土器に相似た線刻が認められ、その関係が注目される。

古墳時代に入ると、そのほとんどが継続的に発展、拡大していることが上東遺跡、加茂B遺跡、矢部南向遺跡などで知ることができる。前期古墳としては、特殊器台形埴輪を持つ全長30mの矢部大坑古墳(37)が北西の丘陵上に出現する。また、分布図から外れるが、東北の丘陵上には同様の遺物が検出されている全長120mの中山茶臼山古墳が位置する。これ以降古墳の系譜は、足守川上流部に移る。後期になると、周辺丘陵部には矢部古墳群(35・36)、前池内古墳群(44)、貝殻石灰岩製家形石棺を持つ王墓山古墳(72)を中心とした群集墳を形成している。終末期には、外護列石を巡らす二段築成の二子14号墳(29)が認められる。これらと相前後して日畑廃寺址(71)の古代寺院が造成されだし、これら古代寺院に供給された瓦が二子御堂奥窯址(28)が調査されている。

古代には、津峴駅家に推定される矢部廃寺(46)や公的な港湾施設と想定される川入遺跡(8)などの『官』関係の遺構が認められる。中・近世は戦乱の舞台となり、備中高松城の水攻めが著名である。

このように、上東遺跡は吉備の中枢に入る前面に位置することが、今回の調査及び周辺の遺跡のあり方から次第に明らかになりつつある。しかしながら、新たな県道の付設によりさらなる景観の変化がもたらされるとともに、遺跡地の開発が進むことになるであろう。このことから、上東遺跡という単体での把握ではなく、今日的な意味では都市機能として諸々の施設を備えた遺跡として理解していくべきであろう。　（下澤）

1 上東遺跡１
2 下庄遺跡
3 上東遺跡２
4 荒神古墳
5 岩倉遺跡
6 才楽遺跡
7 柿梨堂遺跡
8 川入遺跡
9 撫川城址
10 庭瀬城址
11 大内田見塚
12 坪井北遺跡
13 奥坂遺跡
14 天神坂遺跡
15 東栗坂１号墳
16 東栗坂土塁址
17 東栗坂２号墳
18 新屋敷古墳
19 矢尾神社遺跡
20 西栗坂1・2号墳
21 松島城址
22 舟渡貝塚
23 才古山古墳1・2号墳
24 二子高鳥居山古墳
25 砂原南遺跡
26 砂原北遺跡
27 御堂奥、岩部奥地東遺跡
28 二子御堂奥窯址群
29 二子14号墳
30 二子古墳群
31 若宮神社東遺跡
32 山地遺跡
33 琵琶池北遺跡
34 矢部伊能軒遺跡
35 矢部古墳群A
36 矢部古墳群B
37 矢部大坑古墳
38 矢部貝塚
39 矢部奥田遺跡
40 矢部大山谷古墳群
41 江田古墳群
42 矢部堀越遺跡
43 郷境墳墓群
44 前池内遺跡
45 高坪古墳
46 矢部廃寺址
47 矢部寺田遺跡
48 矢部遺跡
49 鯉喰神社弥生墳丘墓
50 矢部南向遺跡
51 加茂Ｂ遺跡
52 惣爪廃寺址
53 足守川矢部南遺跡
54 東惣爪遺跡（高田遺跡）
55 吉野口遺跡
56 賀陽氏屋館址
57 東山遺跡
58 新邸遺跡
59 藤の木遺跡
60 日幡城址
61 法伝山古墳
62 楯築弥生墳丘墓
63 西の平古墳
64 半俵３号墳
65 女男岩遺跡
66 辻山田遺跡
67 大池上古墳群
68 真宮古墳群
69 西尾貝塚
70 赤井南古墳群
71 日畑廃寺址
72 王墓山古墳

第２図　周辺遺跡分布図 (1/25,000)

第３章　下庄遺跡

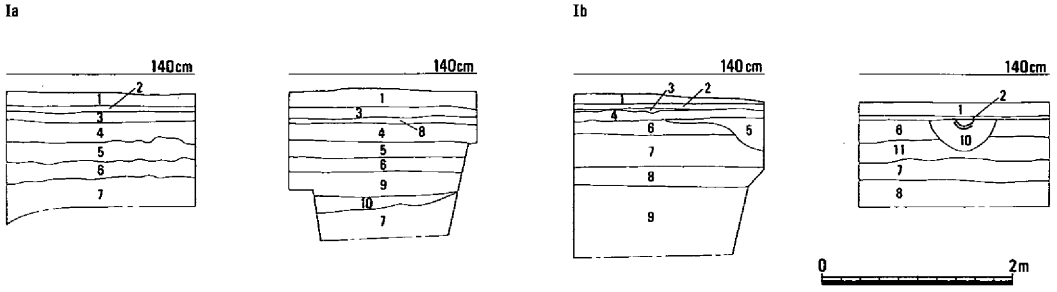
第１節　調査区の概要

下庄遺跡Ⅰ区は、上東遺跡との境となる用水の南側1,827㎡で、このうちIa区は627㎡、Ib区は1,200㎡を測る。微高地はIb区の北寄りに認められ、遺構もこの部分に比較的多く検出されている。Ia区にかけては黄褐色基盤層を認めるが、南に行くにつれグライ化する状況になる。Ⅱ区は面積は2,400㎡でバラ園の駐車場になり、水田面に60cmほどの客土がある。調査時においてはａ・ｂ・ｃの３区としたが、表土掘削の状況から黄灰色土の基盤層が認められたが、遺構の密度が極めて薄いことが明らかとなったことで、区分けを取りやめた。Ⅲ区は、調査面積1,300㎡である。基盤層は認められたが、遺構は性格不明の凹み状で、一部においては遺構として取り扱うのに躊躇するのも存在する。また、その密度も南に行くにしたがい薄くなることから、調査予定の中ほどまで全面調査を実施したが、残りの部分は西端と中央部分に幅広のトレンチによる調査に変えた。Ⅳ区は、駐車場で調査時においては撤去予定が立っていない状況であった。したがって、今回での調査は見送り、その撤去後に立会をすることとした。（下澤）

第２節　調査の概要

１　Ia・ｂ区の調査

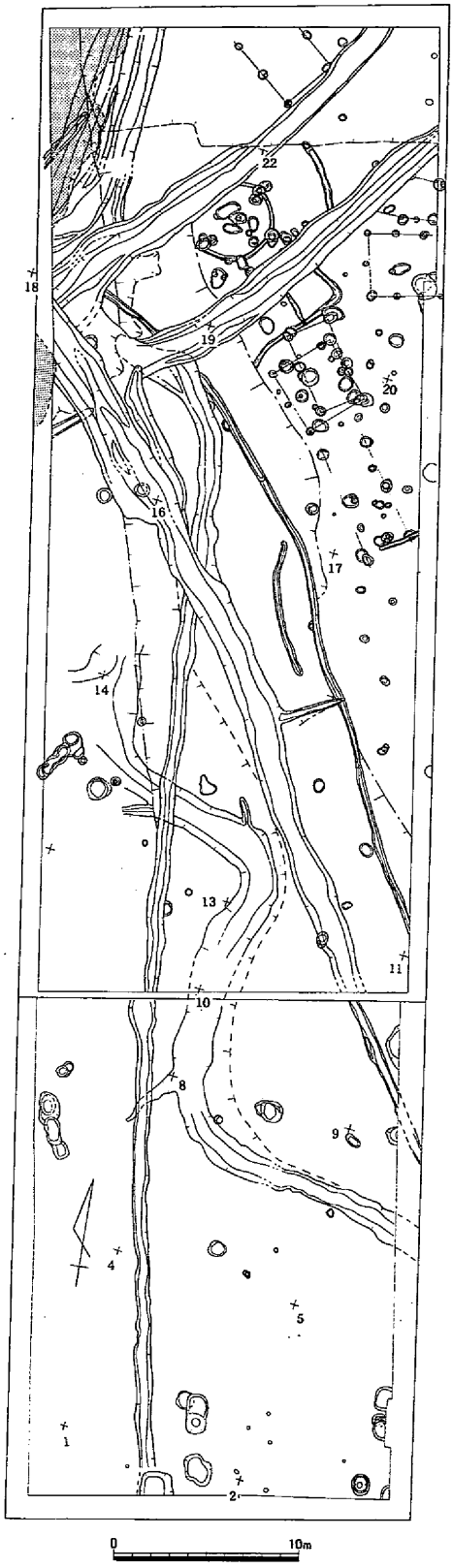
遺構面は、３面認められた。黄褐色系の基盤層は北側に認められるが、南西に向かいグライ化の状況を見せる。微高地部分には、弥生後期の遺構が認められる。この部分の遺構検出面は、水田直下の床土を排土して検出されることから、土器溜りなどは上面が削られ、割れが水平になって認められた。この上面には中世の溝、調査区南端寄りに近世の土壙が認められている。また、基盤層の下層には時期の特定ができないが、蛇行する溝を検出している。（下澤）



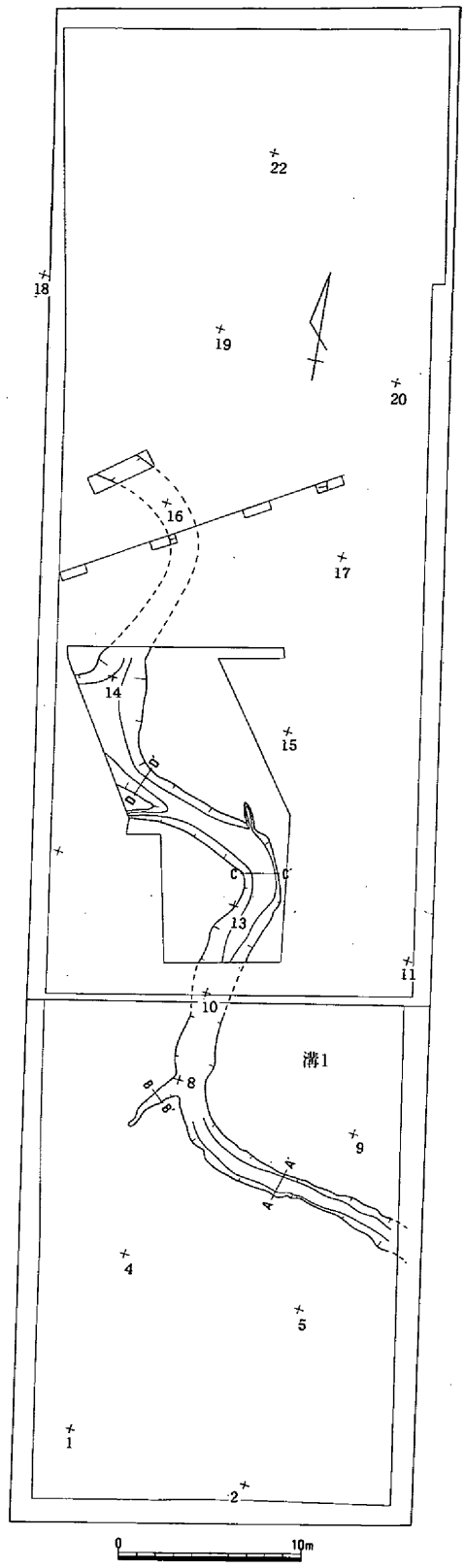
1 耕作土
2 床土
3 耕作土
4 黒褐色土
5 黄褐色土
6 青灰色粘土(黒褐色ブロック含)
7 青灰色粘土
8 床土
9 暗褐色粘土
（この間に若干の有機物堆積層）
10 灰褐色粘質微砂

1 耕作土
2 床土
3 淡青灰色粘質微砂
4 淡灰白色粘質微砂
5 淡褐灰色粘質土
6 淡黄灰褐色土
7 黒褐色土
8 黄褐色粘質土
9 青灰色粘土
10 暗茶褐色土(土壙15)
11 明灰黄色粘質土

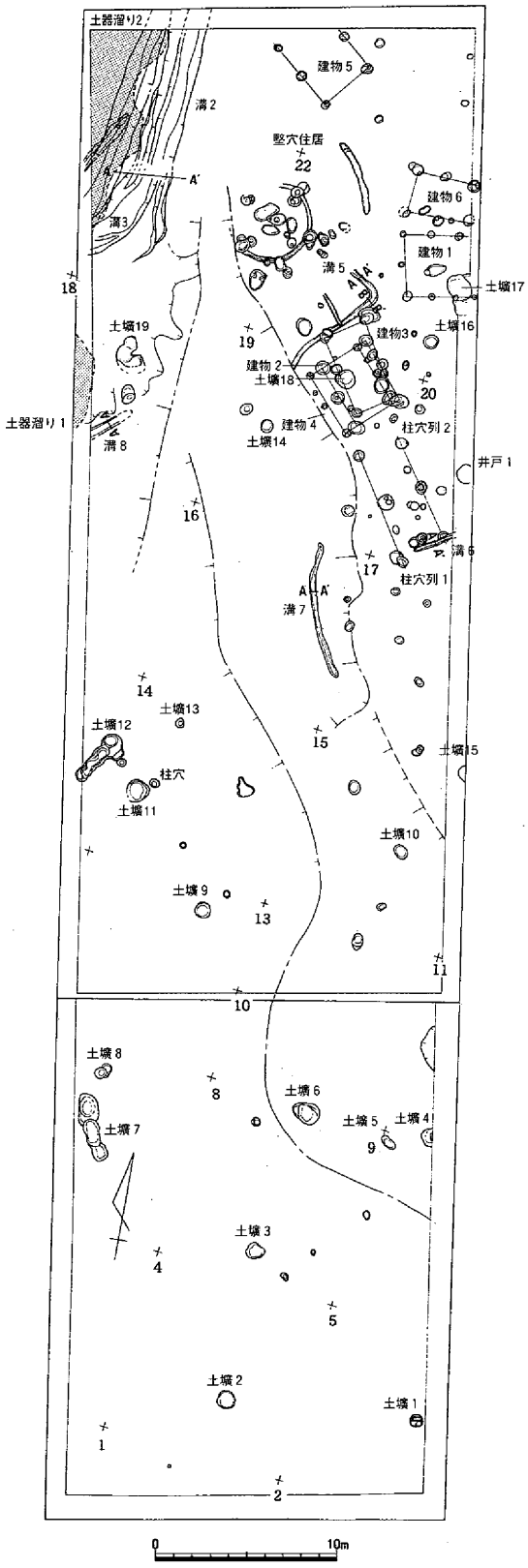
第１図　土層断面図 (1/80)



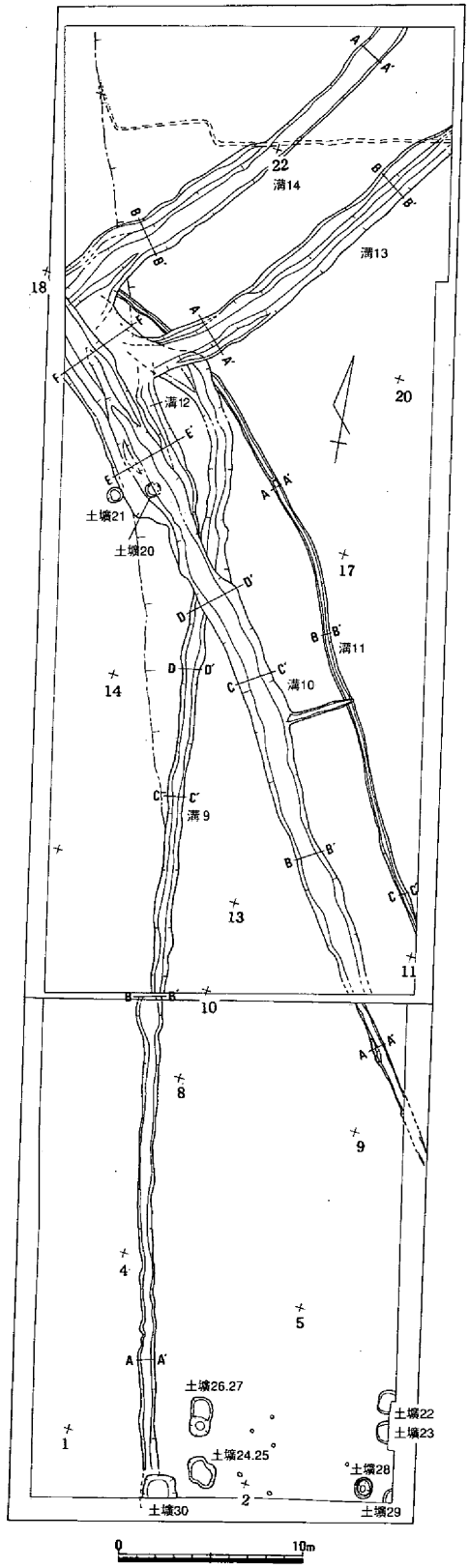
第２図　Ｉａ・ｂ区遺構配置図 (1/400)



第３図　Ｉａ・ｂ区
弥生時代以前の遺構配置図 (1/400)



第４図　Ｉａ・ｂ区弥生時代遺構配置図 (1/400)

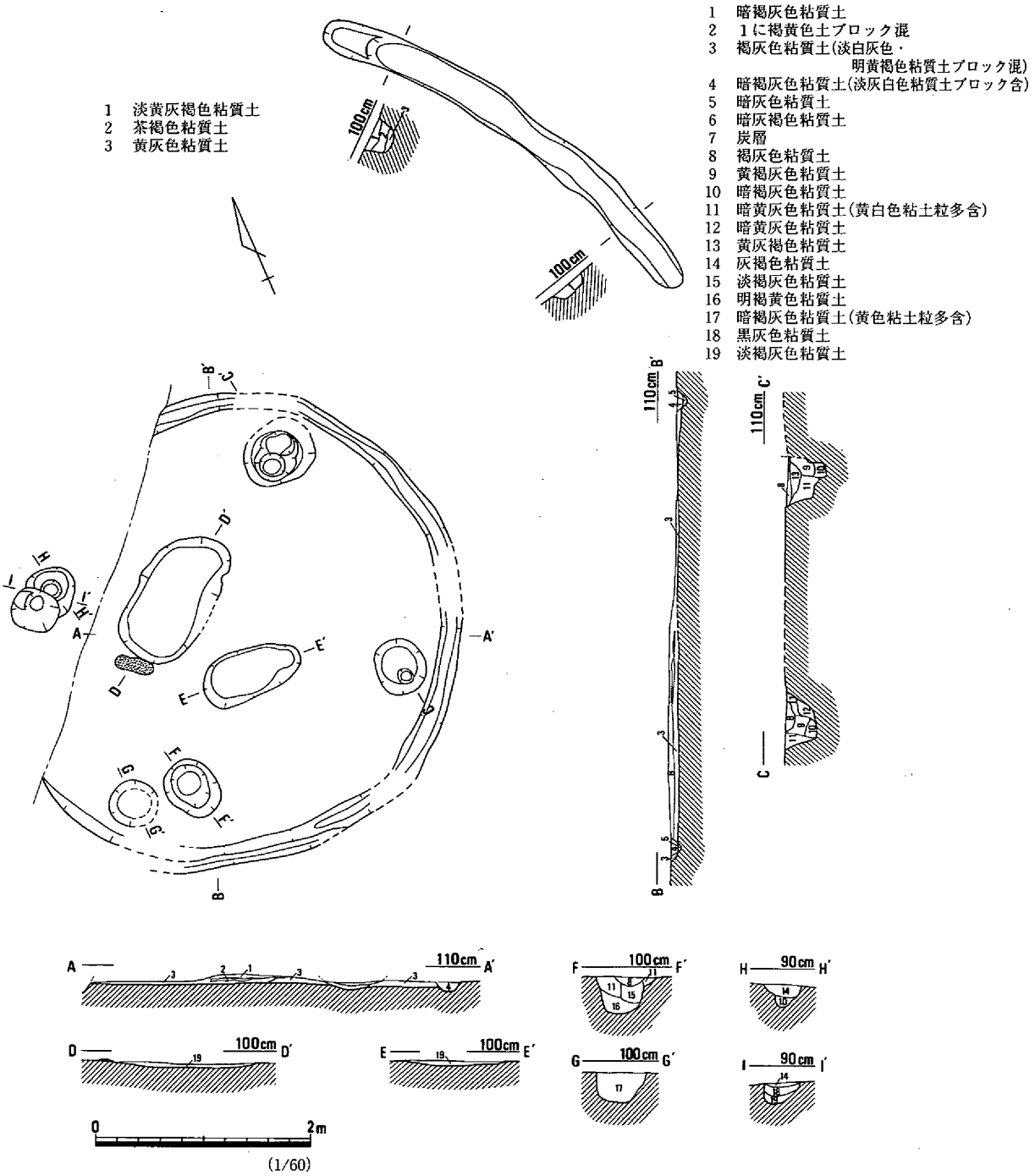


第５図　Ｉａ・ｂ区中～近世遺構配置図 (1/400)

（１）竪穴住居

今回の調査において確認された竪穴住居は、このIb区で検出された他には認めることができなかった。遺構は、床土直下で検出され壁の立ち上がりがほとんどなく、北西側の壁体溝は削平されている。また、調査区西壁に接して認められた土器溜り１は、土器の破片の上面が平らな状態で検出されていることからも、この地点は、黄褐色基盤層が高く安定した所に相当するものと思われる。　（下澤）

竪穴住居



遺構名	位置（調査区）	形状	規模(cm) 長軸	規模(cm) 短軸	床面積(㎡)	柱穴	火所	壁体溝	外周溝	時期	備考
竪穴住居	下庄Ｉｂ	円形	450	－	(12.4)	4／4	○	○	○	弥・後	170×75×5cm・90×44×6cmの凹み

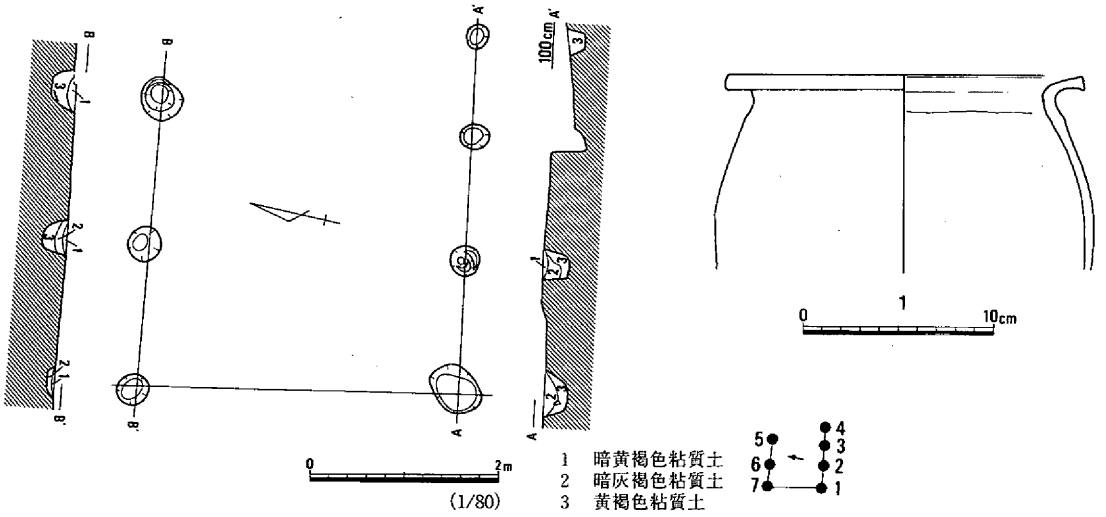
竪穴住居は建物５の南に位置する。北西側を中世の溝13に切られているが、直径約450cmの円形に復元できる。主柱穴は４本検出されたが、西の柱穴は２本が切り合い、北の柱穴では一つの掘り方に柱痕が２本重複していることから、少なくとも１度の建替えが行われたことが認められる。中央土壙も２基検出されており、それぞれに対応すると考えられる。また、竪穴住居の埋土が大きく２層に分かれるが、間に炭層(第７層)および炭面を挟むことから、第３層上面が新しい段階の床面にあたる可能性がある。中央土壙は、西側は長径130×短径70cm、東側は長径90cm×短径45cmの浅い楕円形を呈し、いずれの中央土壙にも炭面が認められる。竪穴住居の埋没状況を観察すると、東側の中央土壙は第３層より上位から掘りこまれており、新しい段階の竪穴住居に伴うと考えられる。

さて当竪穴住居の壁体溝より約3m北東の位置に幅30～40cmの溝が弧状に検出されているが、当竪穴住居の周辺は中世の溝や現代の耕作により削平を受けており、本来は当竪穴住居を中心に円形に巡っていたと考えられる。別の竪穴住居の壁体溝とも考えられるが、弧の中心が当竪穴住居と一致することから竪穴住居と一連の遺構と考えられ、周堤帯外周に巡る溝の可能性が想起される。時期は、図化し得なかったが覆土中より弥生時代後期前半に比定される土器細片が出土している。　（渡邉）

（２）建物

建物は、竪穴住居と同様に黄褐色基盤層の緩斜面北東側に検出され、いずれも梁行１間のものである。建物２～４が重複し、建物１と６は接して検出された。建物の棟方向は、北西－南東と東－西の二方向である。検出された建物の柱穴は一応に浅く、遺存の状態は良くない。このことは、先に述べたようにこの微高地部分は、本来的にはこれよりも高くなっていたことが考えられ、北東側についてもやはり削平が行われたことが理解される。　（下澤）

建物１



遺構名	位置(調査区)	規模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm) 桁	柱間寸法(cm) 梁	面積(㎡)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期	備考
建物１	下庄Ｉｂ	３×１	375	345	105～156	345	不明	N-84°-E	円	25～80	弥・後	

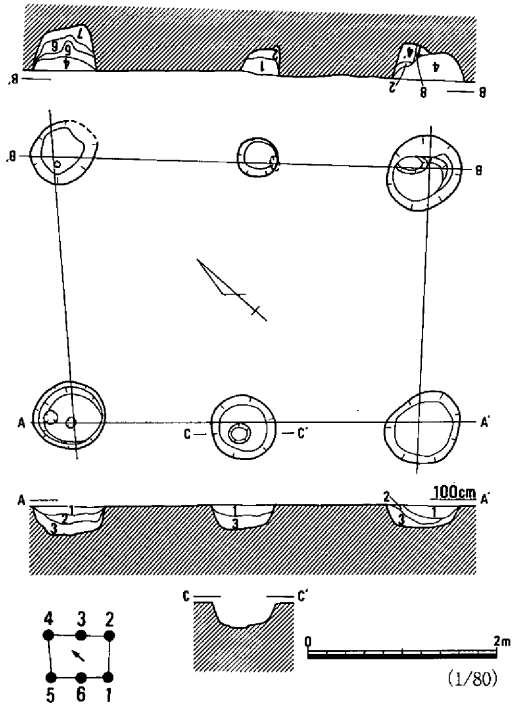
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底(脚)径	法量(cm) 器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1	弥生土器	甕	18.8			良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	

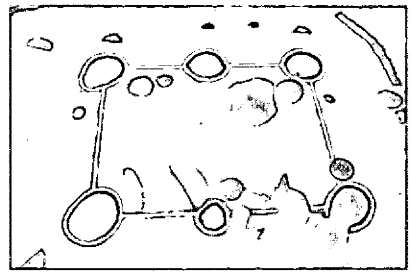
建物１は竪穴住居の東に位置する。東は調査区外になり全容は不明であるが、梁間１間×桁行３間分が検出された。

主軸は東西方向で、後述する建物６とおおむね平行している。なお、P1とP7をつなぐ軸線の少し外側に外れるが梁間のほぼ中間に小柱穴が検出されており、梁間が345cmと長いことから東柱に相当する可能性もある。柱穴規模はP1を除いて径約30cm前後と比較的小さい。

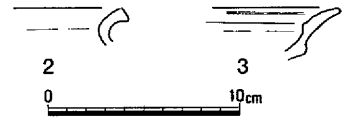
時期は、建物１のP3が後述する土壙17に切られていたことにより、土壙17より古く、弥生時代後期前半に溯ると考えられる。（渡邉）

・建物２





1　暗灰褐色土
2　黄灰褐色粘質土
3　淡黄褐色粘質土
4　暗茶灰褐色粘質土
5　暗灰褐色粘質土
6　暗褐灰色粘質土(炭多含)
7　にぶい黄灰色褐色粘質土
8　白灰褐色土



遺構名	位　置 (調査区)	規模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm)		面積(㎡)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模 (cm)	時期	備考
					桁	梁						
建物２	下庄Ｉｂ	２×１	370～377	281～290	162～209	281～290	10.7	N-40°-W	円	45～84	弥・後	

掲載 番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
2	弥生土器	甕				良好	5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒	
3	弥生土器	高杯				良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	

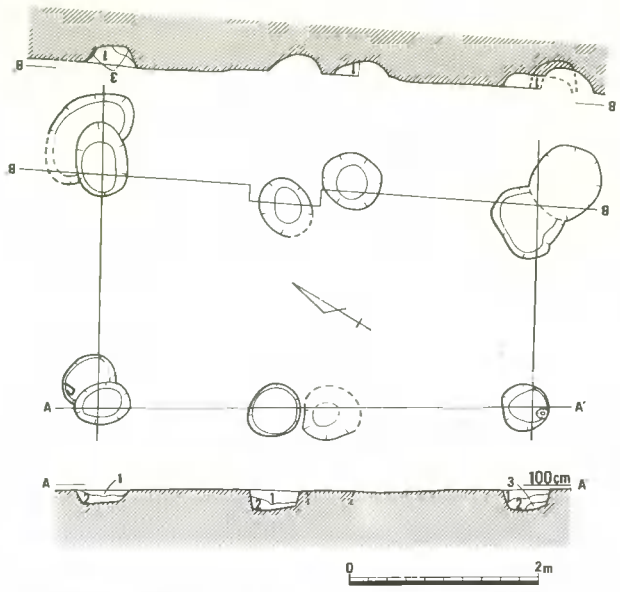
建物２は竪穴住居の南東、建物１の南西に位置する。梁間１間×桁行２間の規模を有する。

主軸は北西から南東方向で、地形的には等高線に沿ったかたちで建てられている。また建物１・６とは軸を異にし、ほぼ直交する位置関係にある。

建物２の特徴として、建物１と比較した場合、柱の規模が径70cm前後と比較的大きく、掘り方も逆台形を呈するしっかりした柱であることが挙げられる。この柱穴規模に現された差から、この２棟の建物の機能に違いがあるのではないかと考えられる。なおP2では径20cmの柱痕が確認され、P3～６においても、柱が沈んで作られたと思われる凹みを底面で検出している。

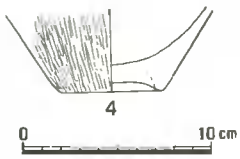
時期は、P4から甕２、高杯３が出土しており、弥生時代後期中頃に比定される。（渡邉）

建物3



1　暗灰茶褐色土(Mn含)
2　灰黄褐色土
3　明灰黄褐色土

(1/80)



遺構名	位置(調査区)	規模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm) 桁	柱間寸法(cm) 梁	面積(㎡)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期	備考
建物3a	下庄Ⅰb	2×1	118～151	198～254	187～267	198～254	10.7	N-28°-W	円	49～80	弥・後	

遺構名	位置(調査区)	規模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm) 桁	柱間寸法(cm) 梁	面積(㎡)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期	備考
建物3b	下庄Ⅰb	2×1	118～151	198～254	180～270	198～254	9.9	N-28°-W	円	49～80	弥・後	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底(脚)径	法量(cm) 器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
4	弥生土器	甕		5.2		良好	7.5YR6/2(灰褐)	砂粒	

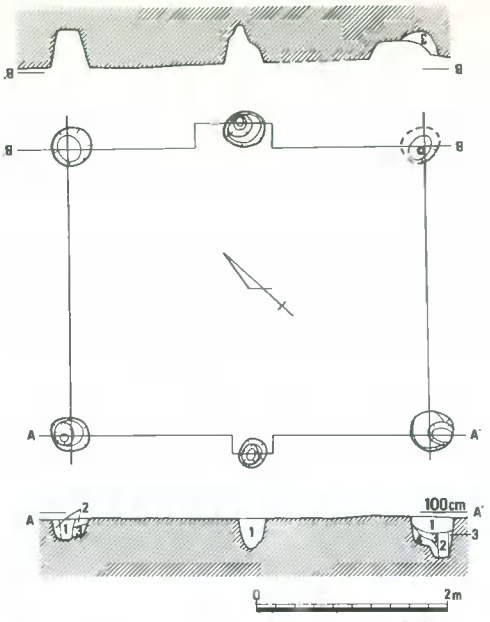
建物3は、竪穴住居の南西側に位置する。微高地が南西方向に緩やかに下りはじめる縁辺に、他の建物と重複して検出された。検出時においては、P1のほかは2基のピットが重複したり接近していることから2棟の重複と考えていた。しかし、P4とP5に切られているピットの建物を想定すると、北側に歪なものとなり、さらに、P3とP6の芯を通らないことになる。このようなことから、以下のような建物とした。

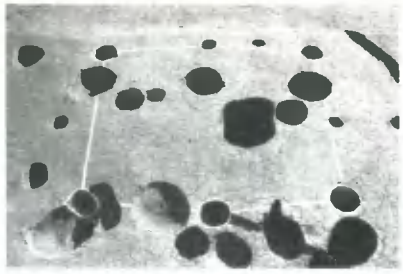
建物3aは、P3とP6を使用したものである。P1は、断面から3個のピットが重複しているのを確認した。プランの検出段階では、断面ラインの交点を中心として認められたピットがこの建物を構成すると考え、切り合いも最も新しいと判断される。

建物3bは、P3′とP6′を使用したものである。この柱間は、建物3aに比較してやや距離を短くしている。

出土遺物は、4の甕の底部が見られる。上げ底で、外面にはタテのヘラが見られる。このほかに、細片が検出されるが、時期は弥生時代後期に入るものである。　(渡邉)

建物4





1　褐灰色粘質土
2　暗褐灰色粘質土
3　暗灰褐色粘質土
4　明黄褐色粘質土

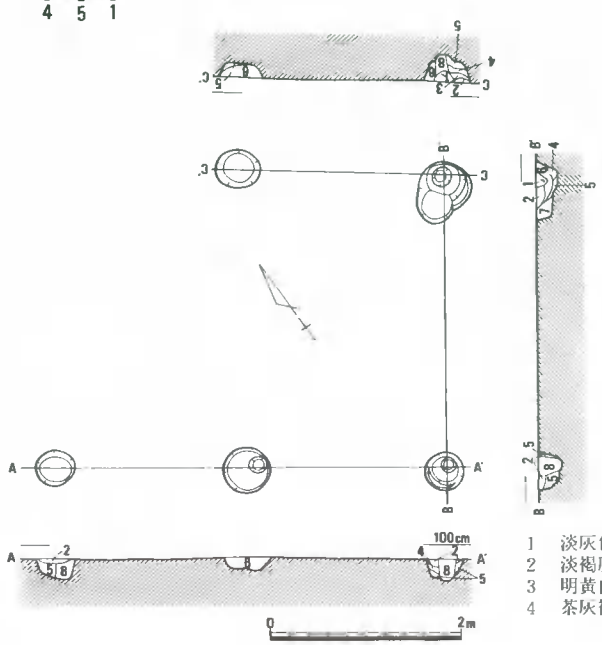
(1/80)

遺構名	位置（調査区）	規模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm) 桁	柱間寸法(cm) 梁	面積(㎡)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期	備考
建物4	下庄Ⅰb	2×1	367～396	303～306	180～200	303～306	12.6	N-44°-W	円	39～45	弥・後	

建物4は、竪穴住居の南西側に位置する。微高地が南西方向に緩やかに下りはじめる縁辺に、他の建物と重複して検出された。桁行のP3とP6が外側にくるが、他の柱との関係が不都合にならないことから桁行2間、梁間1間とした。柱痕は、P1とP5の断面に、P3では底に凹みが残される。

出土遺物は、P5より弥生後期の細片が検出されている。　（下澤）

建物5



1　淡灰色粘質土
2　淡褐灰色粘質土
3　明黄白色粘質土(ブロックか)
4　茶灰褐色粘質土
5　暗灰褐色粘質土(明黄白色土粒多含)
6　淡灰褐色粘質土(黄橙色土粒含)
7　褐灰色粘質土
8　茶灰褐色粘質土(黄色粘土粒やや多含)

(1/80)

遺構名	位置（調査区）	規模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm) 桁	柱間寸法(cm) 梁	面積(㎡)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期	備考
建物5	下庄Ⅰb	2×1	410	307	200～215	307	不明	N-50°-W	円	40～55	弥・後	桁は延びる可能性有り

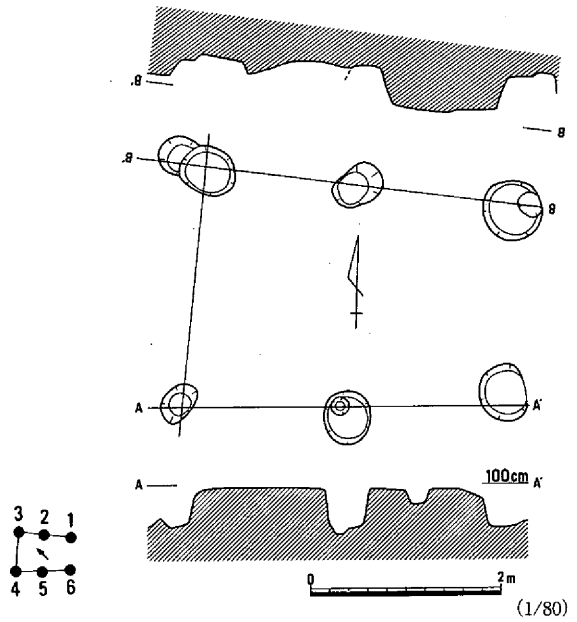
建物５は建物１～４より竪穴住居を挟んで北に位置する。北側は調査区外になり全容は不明であるが、梁間１間×桁行２間分が検出された。

P2では２基の柱穴の切り合いが認められたが、他の柱穴では切り合いや柱痕の重複が認められないことから、建替えは行われなかったと考えられる。

主軸は建物２～４と同じく等高線に平行する方向をとるが若干西に振れている。柱穴は径50cm前後の円形で、P－１・２・４では径10～15cmの柱痕が確認され、P5にも痕跡が底面で検出されている。

時期は、図化し得なかったがP1～３から弥生時代後期の土器細片が出土しており、建物１よりは後出すると考えられる。（渡邉）

建物６



遺構名	位　置（調査区）	規模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm) 桁	柱間寸法(cm) 梁	面積(㎡)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期	備考
建物６	下庄Ｉｂ	２×１	344	247	153～190	247	(7.8)	N-12°-W	円	30～60	弥・後	桁は延びる可能性有り

建物６は建物１の北に位置する。東側は調査区外となり全容は不明であるが、梁間１間×桁行２間分を検出した。北西隅にあるP3が軸よりずれているためいびつな平面形を呈しているが、梁間及び桁側の柱間距離が建物２・４とほぼ同規模であることから、建物２・４同様の、１間×３間の形態をとる可能性が高い。

主軸は東西方向であるが建物１とは若干異なり、北に振っている。建物間の距離も狭いため建物１と併存したとは考え難く、時期差があると考えられる。

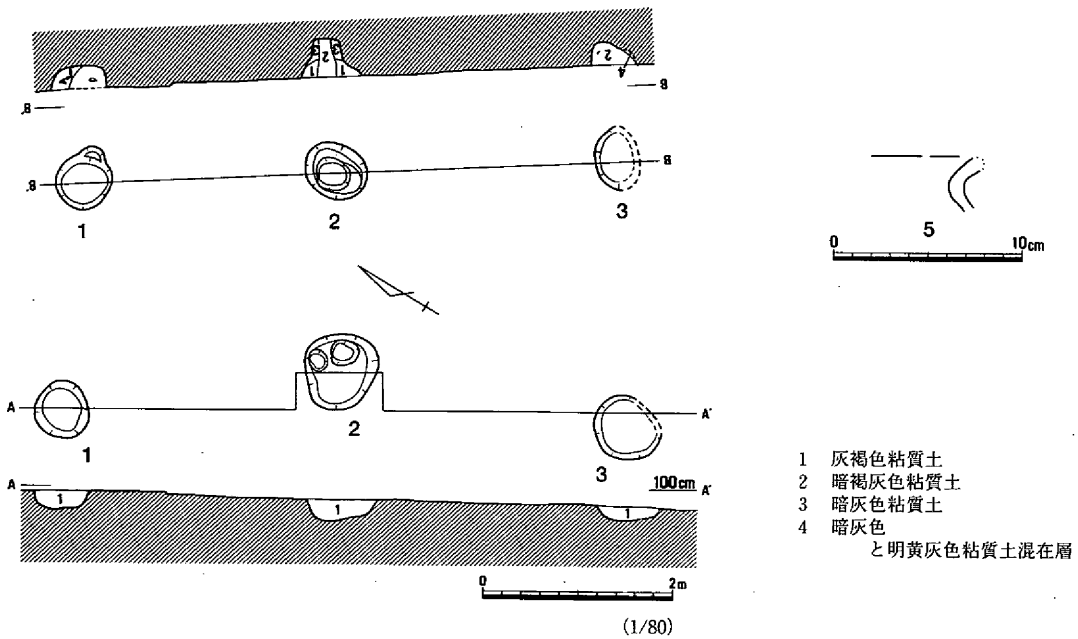
柱穴のうち、P2～４は中世の溝による削平を受け、P1とP6も側溝により東側を切られているため小さく不整形な円形を呈しているが、本来はP5同様の径50～60cmの規模を有していたと考えられる。P5では径18cmの柱痕も認められた。

時期を特定できる遺物の出土はないが、柱穴の形状や埋土の状況から弥生時代後期に属すると考えられる。（渡邉）

（３）柱穴列

柱穴列は、基盤層緩斜面の北東側にある。当初の検出時においては、北西にあるそれと同様な建物であると理解していた。しかしながら、梁間が台形となることから柱穴列とした。周囲に柱穴は存在するが、これと関連するものは見出すことはできなかった。（下澤）

柱穴列１・２



(1/80)

遺構名	位置（調査区）	規模	長さ(cm)	列方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期	備考
柱穴列１	下庄Ⅰb	２間	593	N-29°-W	円	60～80	弥・後	

遺構名	位置（調査区）	規模	長さ(cm)	列方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期	備考
柱穴列２	下庄Ⅰb	２間	558	N-35°-W	円	50～65	弥・後	

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
5	弥生土器	甕				良好	5YR6/6(橙)	砂粒	

柱穴列１は建物２～４の南東に位置する。周辺で検出された柱穴のうち、径60cmを越える比較的規模の大きな柱が等間隔で並ぶので柱穴列として扱った。P2では径20cmの柱痕が確認された。

時期はP2から土器細片が出土しており、弥生時代後期に属すると考えられる。（渡邉）

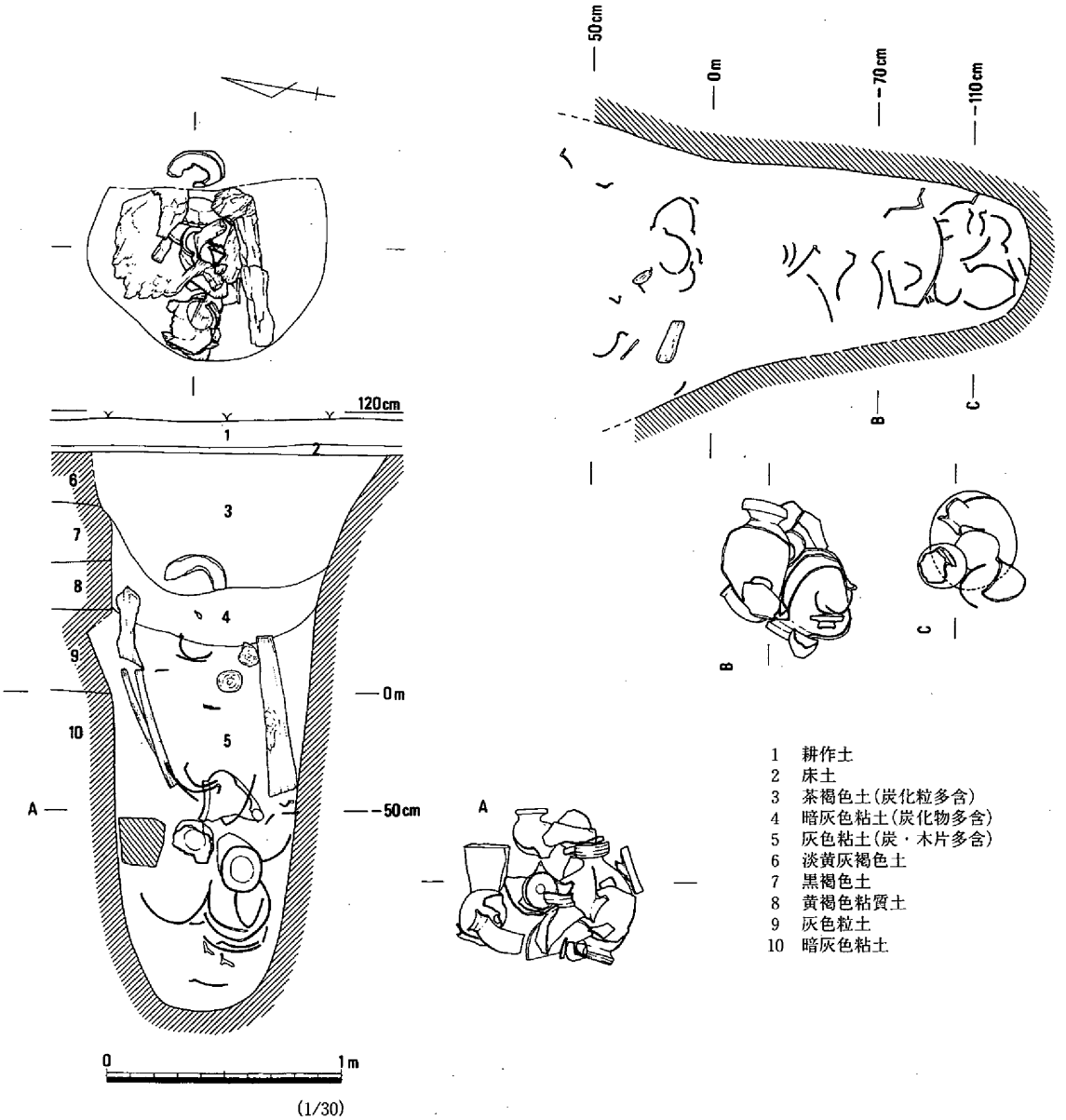
柱穴列２は建物２～４の南東、柱穴列１の東に位置する。柱穴列１と柱穴列２の主軸はほぼ平行しており、１棟の掘立柱建物を構成する可能性も考えられるが、柱穴底面の海抜高が柱穴列１は60～75cmに対して柱穴列２は40～60cmと深く、埋土の状況にも違いがみられることから、別の遺構と考え、２列の柱穴列として扱った。

時期は、P3から出土した甕5およびP1から出土した土器から弥生時代後期に属すると考えられるが、どちらの柱穴列の土器も細片のため細かな時期の特定には至らず、両柱穴列の前後関係は判別できなかった。（渡邉）

（４）井戸

井戸は、１基検出されている。井戸としているが、底は青灰色粘土層で掘り下げても湧水層には達していなかった。一応井戸としたが、昭和49年に山陽新幹線建設に伴い調査された地区においては、やはり、底の暗青灰色粘土層で湧水に達していないものが調査されている。さらに、この種の遺構から多くの土器が検出されている。　（下澤）

井戸１

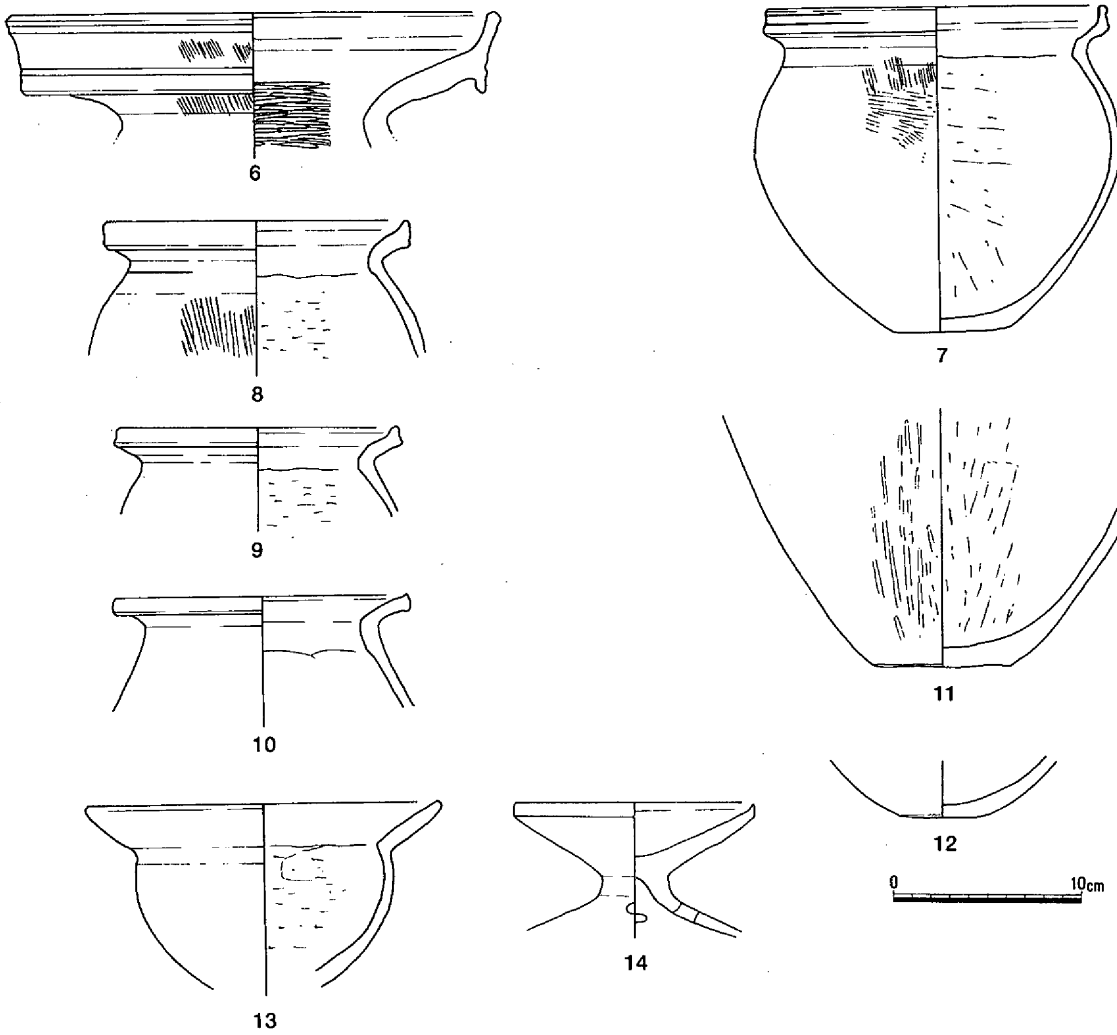


遺構名	位置（調査区）	規模(cm) 上面径	底面径	深さ(底面海抜高)	平面形	断面形	土器	時期	備考
井戸１	下庄Ⅰb	(75)×101	36×43	240(－134)	円	椀	◎	弥生	

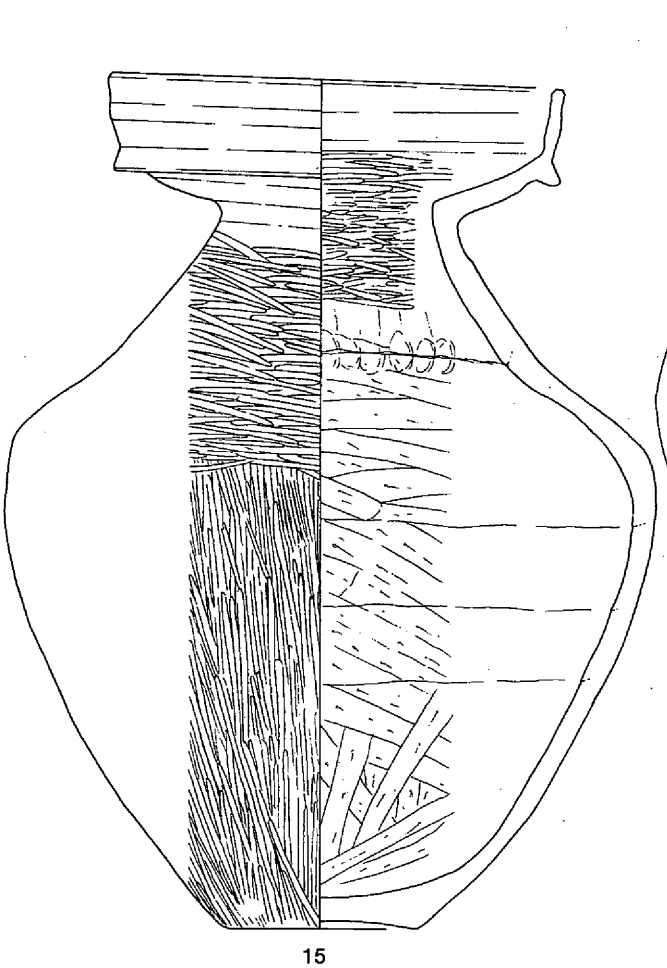
井戸１は、柱穴列２の東側に位置し、側溝の掘り下げ中に検出された。検出は耕作土下に認められる床土直下で、土層断面図に見られる第６層の淡黄灰褐色土面においてである。平面形態は、円形を呈するものと思われる。断面は、海抜0cm部分で上方にやや広がる形態をとる。深さは、240cmを測り、海抜高は－134cmを測るが湧水は見られなかった。この底の層は第10層の暗灰色粘土で、たいへんき

めが細かく砂粒等は全く含まれていない。

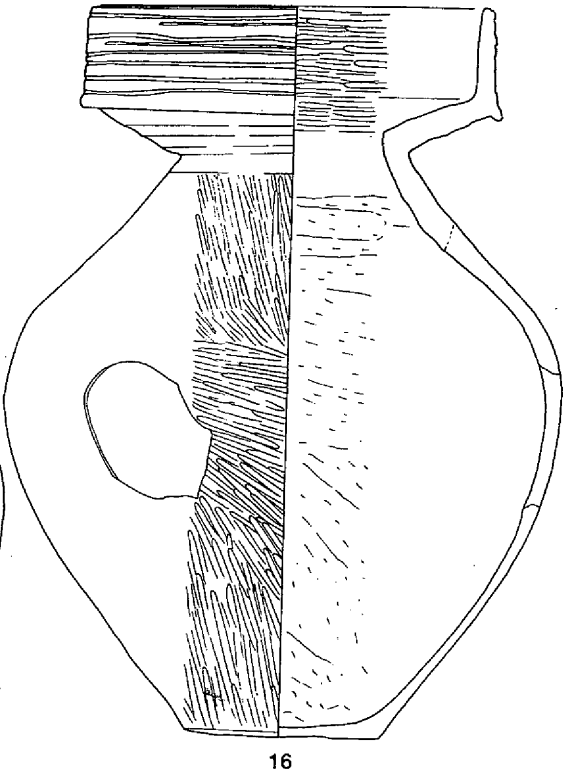
遺物の出土状態は、第３層中と第５層中に認められた。第３層は土器が土に埋まった状態で検出されたが、第５層は完形の土器が投げ入れられていることから、土器の間に土が入り込む状況を呈する。このことから、第５層の細分は不可能であった。検出された一部の土器は、その出土状態により土が入らない物が認められている。６～14は第３～４層の出土で、６は実測図の第３層下方に図示している遺物である。底に近く最下層として取り上げた土器は、平面図のＣで見られる39～42のほぼ完形に近いものである。この他に、25・38・46・48・67・72は上層から出土した土器の接合資料、破片である。平面図のＡとＢもそれぞれの高さの位置で図化したもので、層位的なものではなく、先に記したＣの平面図とともに遺物の出土の状況を示すことが主であり、この図からは土器が隙間なく重なっていることが判断できる。また、17のなかに63が入った状態で、このほかにも鉢が重なって検出されている。



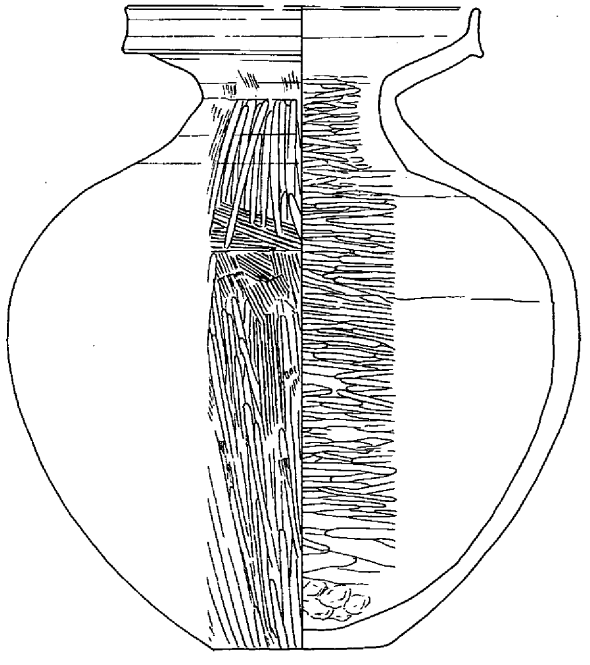
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底(脚)径	法量(cm) 器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
6	弥生土器	壺	25.3			良好	10YR7/4(灰白)	砂粒	口縁部に凹線
7	弥生土器	甕	17.9	6.2	17.3	良好	10YR8/2(灰白)	砂粒	
8	弥生土器	甕	15.6			良好	2.5YR6/2(灰黄)	砂粒	
9	弥生土器	甕	(16.5)			良好	2.5YR7/2(灰黄)	砂粒	
10	弥生土器	甕		7.4		良好	10YR5/2(灰黄褐)	砂粒	
11	弥生土器	甕		15.3		良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	
12	弥生土器	甕		5.0		良好	2.5YR6/1(灰黄)	砂粒	
13	弥生土器	鉢	18.5			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
14	弥生土器	高杯	(12.7)			良好	5YR6/6(橙)	精良(水漉粘土)	



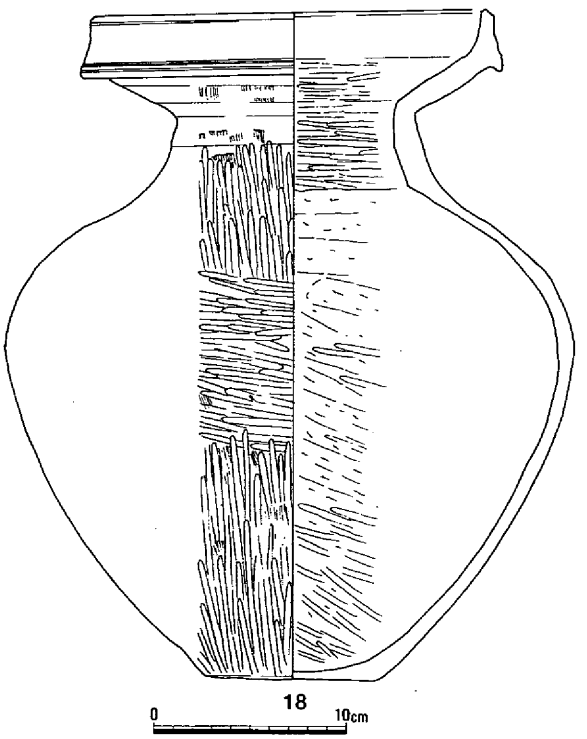
15



16



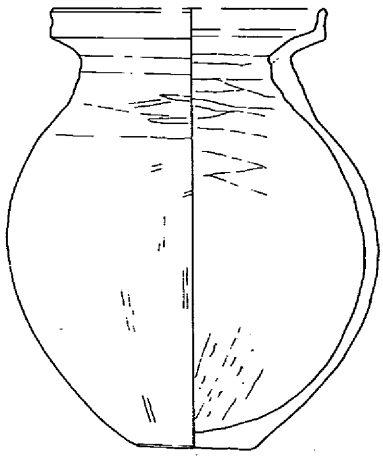
17

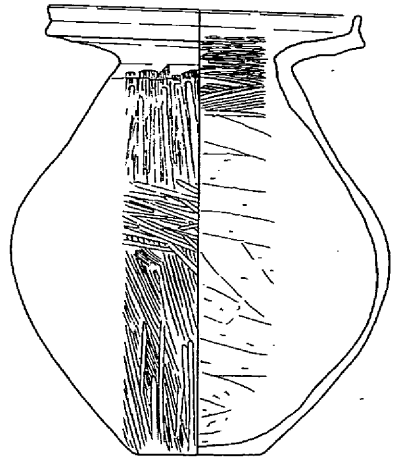


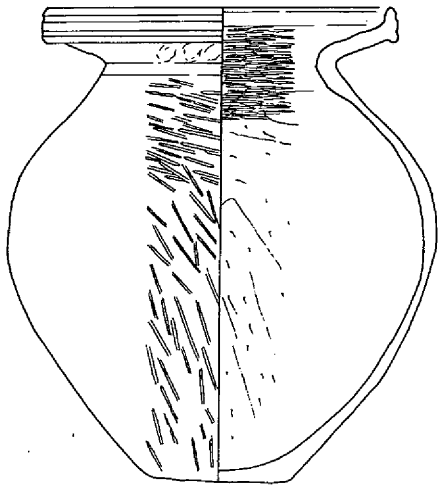
18

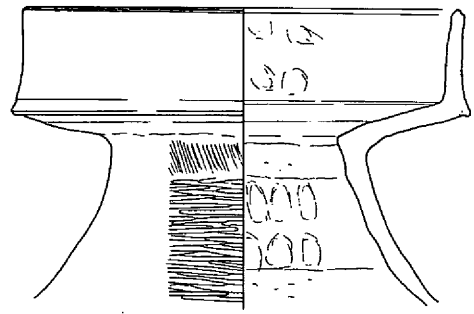
0　10cm

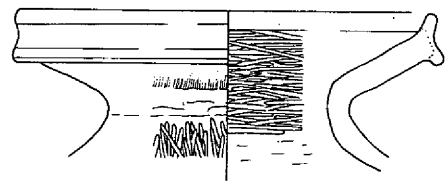
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
15	弥生土器	壺	23.8	10.3	45.1	良好	10YR7/1(灰白)	砂粒	
16	弥生土器	壺	20.0	10.2	38.6	良好	10YR8/2(灰白)	砂粒	口縁部の沈線は螺旋　胴部下半に穿孔
17	弥生土器	壺	18.5	9.3	33.9	良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	
18	弥生土器	壺	20.4	9.0	35.4	良好	7.5YR8/2(灰白)	砂粒	

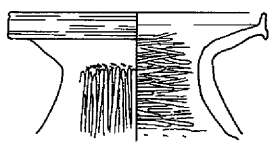

19

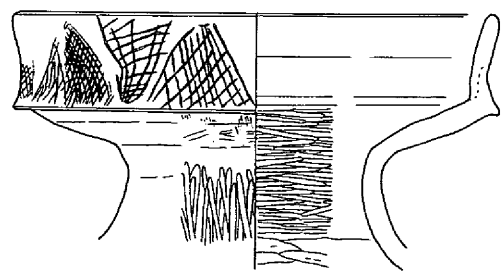

20


21

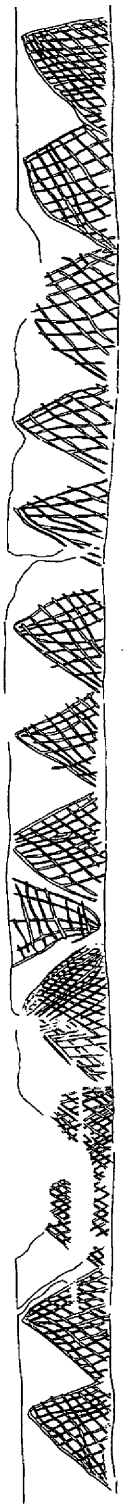

22


23

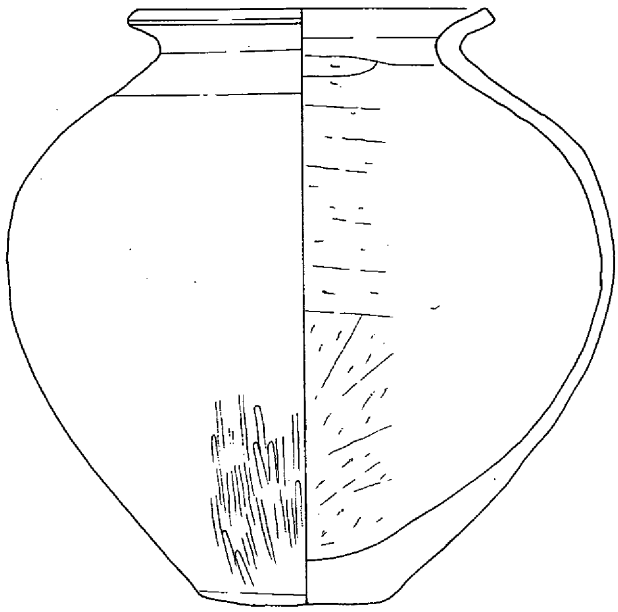

24


25

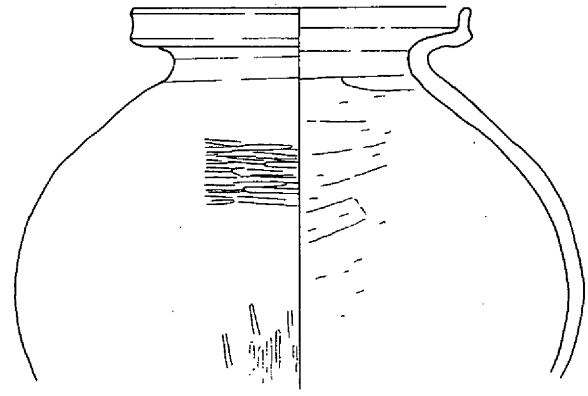
0　10cm



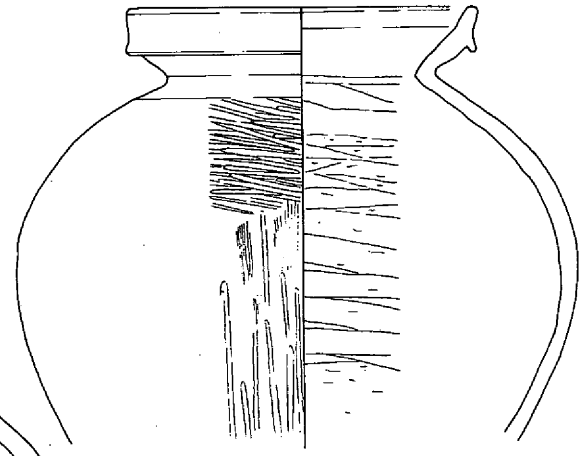
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
19	弥生土器	壺	14.3	6.3	23.3	良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒	
20	弥生土器	壺	16.3	6.9	23.4	良好	2.5YR6/1(灰黄)	砂粒	
21	弥生土器	壺	18.3	7.9	25.3	良好	2.5YR7/2(灰黄)	砂粒	口縁部に凹線
22	弥生土器	壺	22.7			良好	7.5YR7/2(明褐灰)	砂粒	
23	弥生土器	壺	21.8			良好	2.5YR7/1(灰白)	砂粒	
24	弥生土器	壺	13.4			良好	7.5YR7/2(明赤褐)	砂粒	
25	弥生土器	壺	24.7			良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	口縁部に鋸歯文



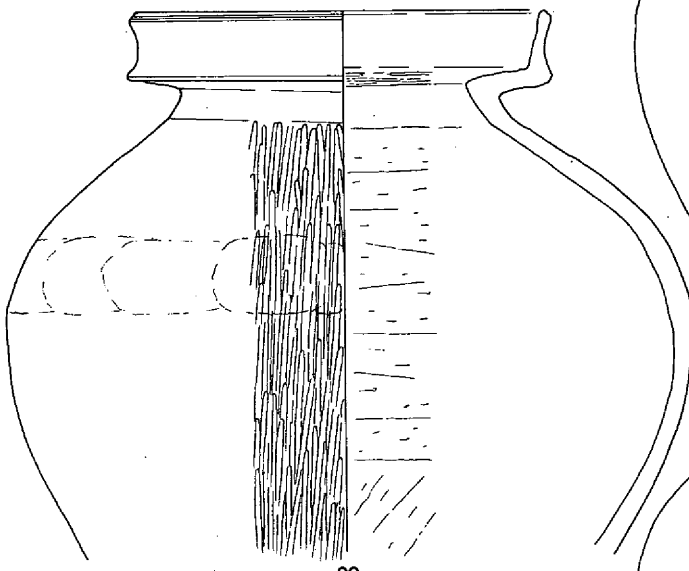
26



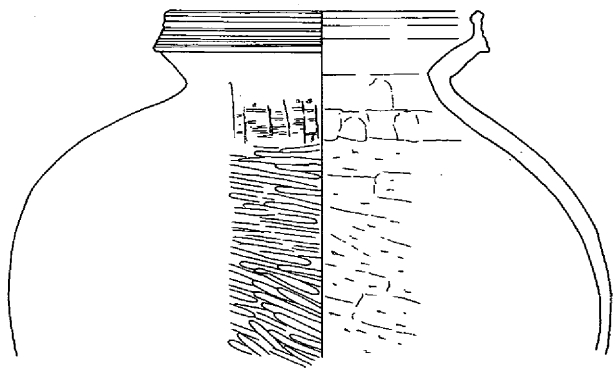
27



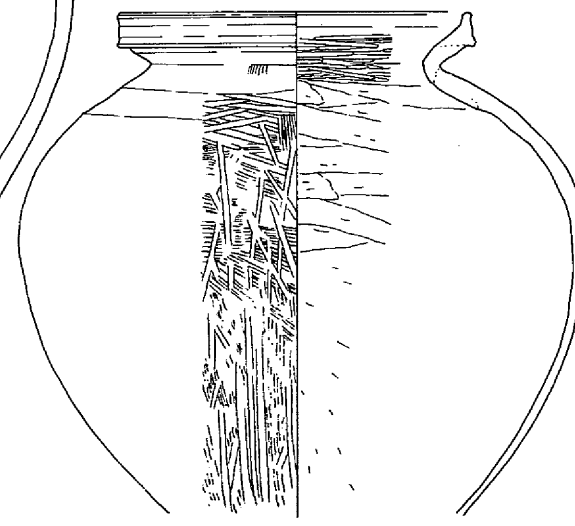
28



29



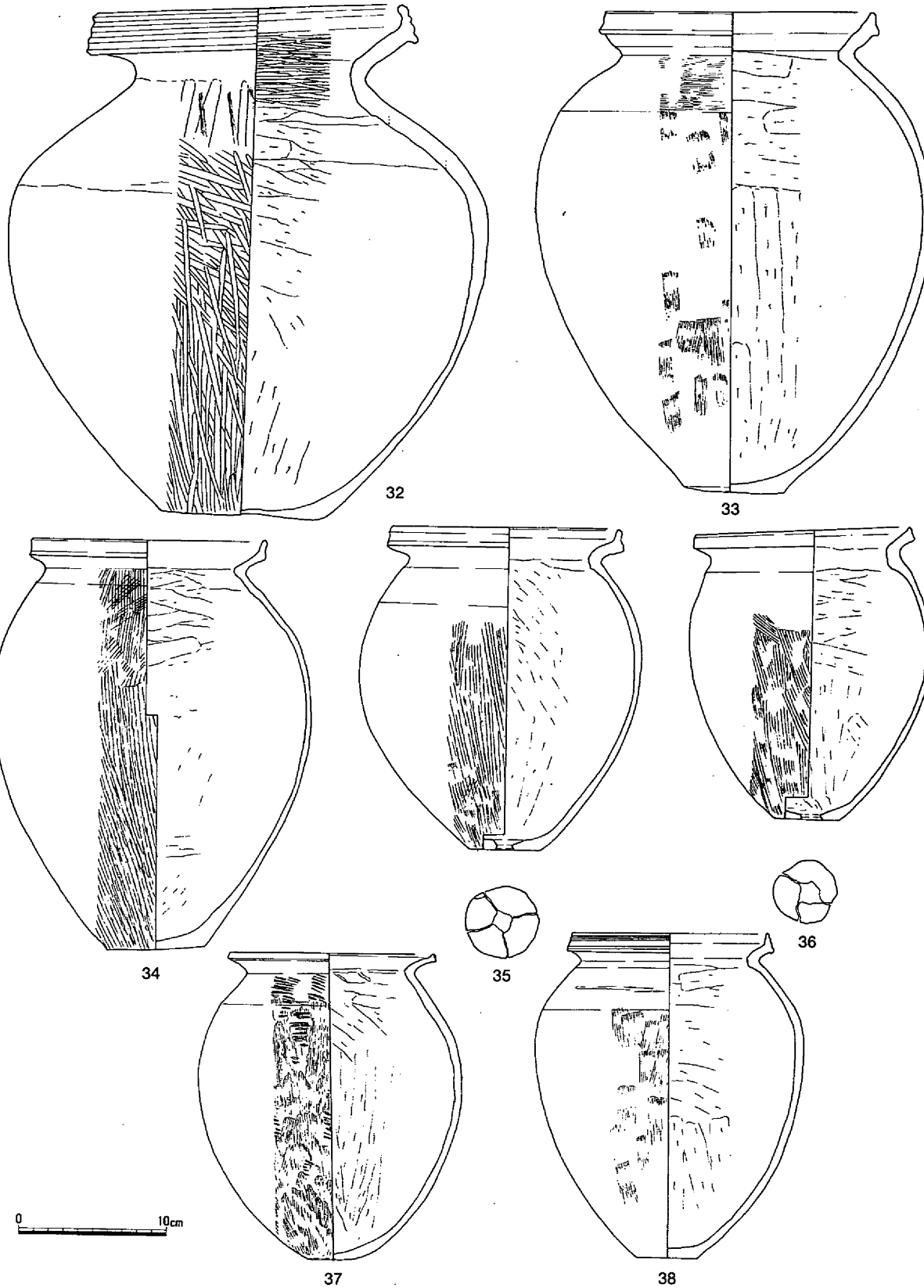
31



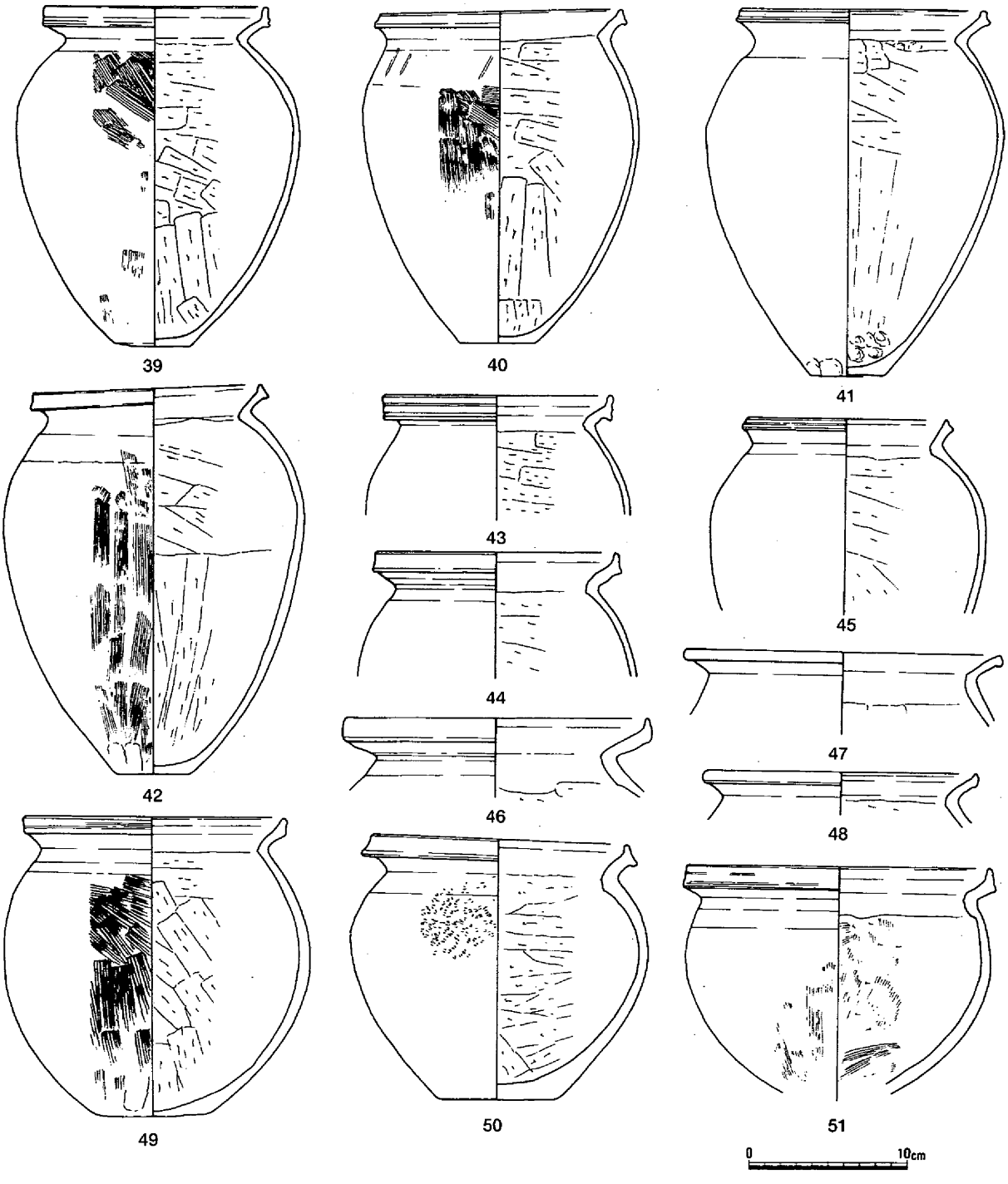
30

0　10cm

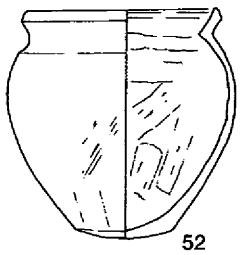
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
26	弥生土器	壺	18.2	10.2	31.6	良好	5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	
27	弥生土器	壺	17.6			良好	7.5YR8/2(灰白)	砂粒	
28	弥生土器	甕(?)	18.0			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
29	弥生土器	壺	21.6			良好	5YR8/3(淡橙)	砂粒	口縁端部に沈線
30	弥生土器	甕	18.2			良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒	
31	弥生土器	甕	16.4			良好	10YR8/2(灰白)	砂粒	口縁部に凹線

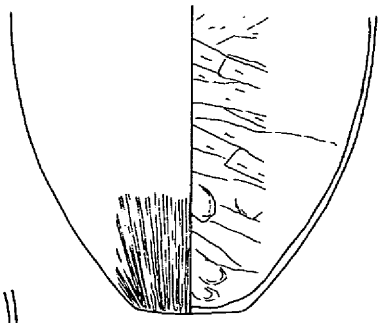


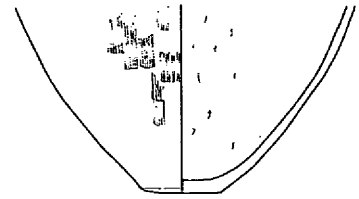
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
32	弥生土器	壺	20.3	11.1	26.4	良好	2.5Y R7/4(灰黄)	砂粒	口縁部に凹線
33	弥生土器	甕	18.0	6.9	32.7	良好	10Y R8/2(灰白)	砂粒	
34	弥生土器	甕	15.7	6.6	28.0	良好	2.5Y R7/1(灰白)	砂粒	
35	弥生土器	甕	15.4	5.0	20.9	良好	2.5Y R6/1(灰黄)	砂粒	底部に焼成後の穿孔
36	弥生土器	甕	14.6	4.4	20.1	良好	10Y R7/1(灰白)	砂粒	底部に焼成後の穿孔
37	弥生土器	甕	14.1	3.3	20.7	良好	7.5Y R6/2(灰褐)	砂粒	タタキの後ハケ
38	弥生土器	甕	13.2	4.3	22.1	良好	N2/(黒)	砂粒	口縁部にヘラ沈線

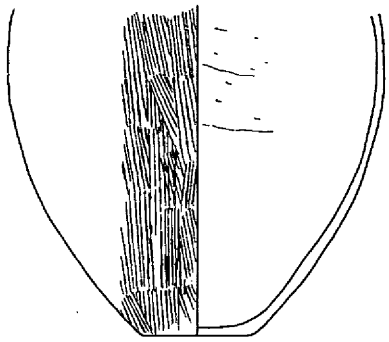


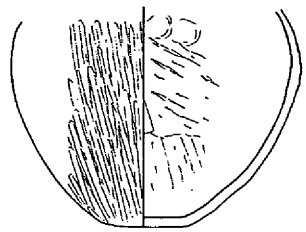
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
39	弥生土器	甕	14.2	4.9	21.7	良好	10YR8/2(灰白)	砂粒	
40	弥生土器	甕	15.3	4.8	21.2	良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒(多)	
41	弥生土器	甕	15.4	4.8	23.2	良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	全体に煤付着　口縁端部に凹線
42	弥生土器	甕	14.6	4.8	24.9	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	全体に煤付着
43	弥生土器	甕	14.6			良好	10YR7/2(灰白)	砂粒	口縁部に沈線状の条線
44	弥生土器	甕	15.3			良好	2.5YR7/2(灰黄)	砂粒	
45	弥生土器	甕	12.7			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に沈線状の条線
46	弥生土器	甕	19.4			良好	10YR8/2(灰白)	砂粒	
47	弥生土器	甕	20.0			良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	
48	弥生土器	甕	17.2			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	
49	弥生土器	甕	16.7	7.4	19.2	良好	10YR8/1(灰白)	砂粒	
50	弥生土器	甕	16.1	7.7	17.0	良好	2.5YR7/1(灰白)	砂粒	肩部～胴部中に半截竹管文
51	弥生土器	甕	29.3			良好	2.5YR8/2(灰白)	砂粒	

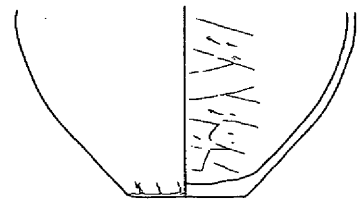

52


53

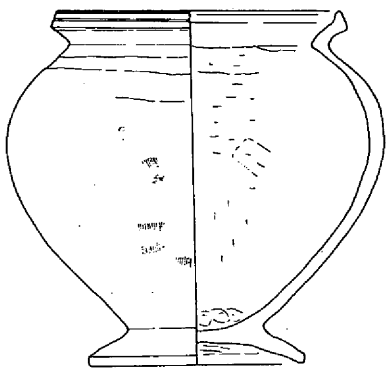

54

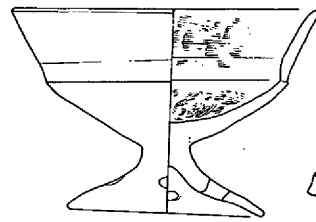

55

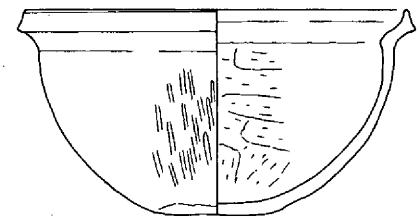

56

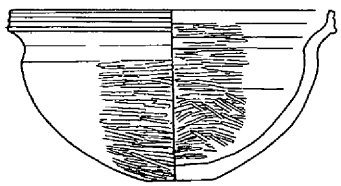

57

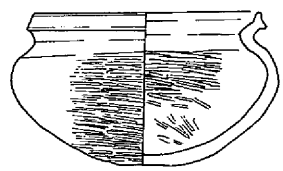
58

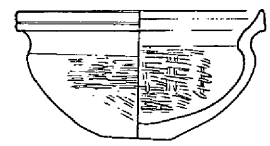

59


60


61

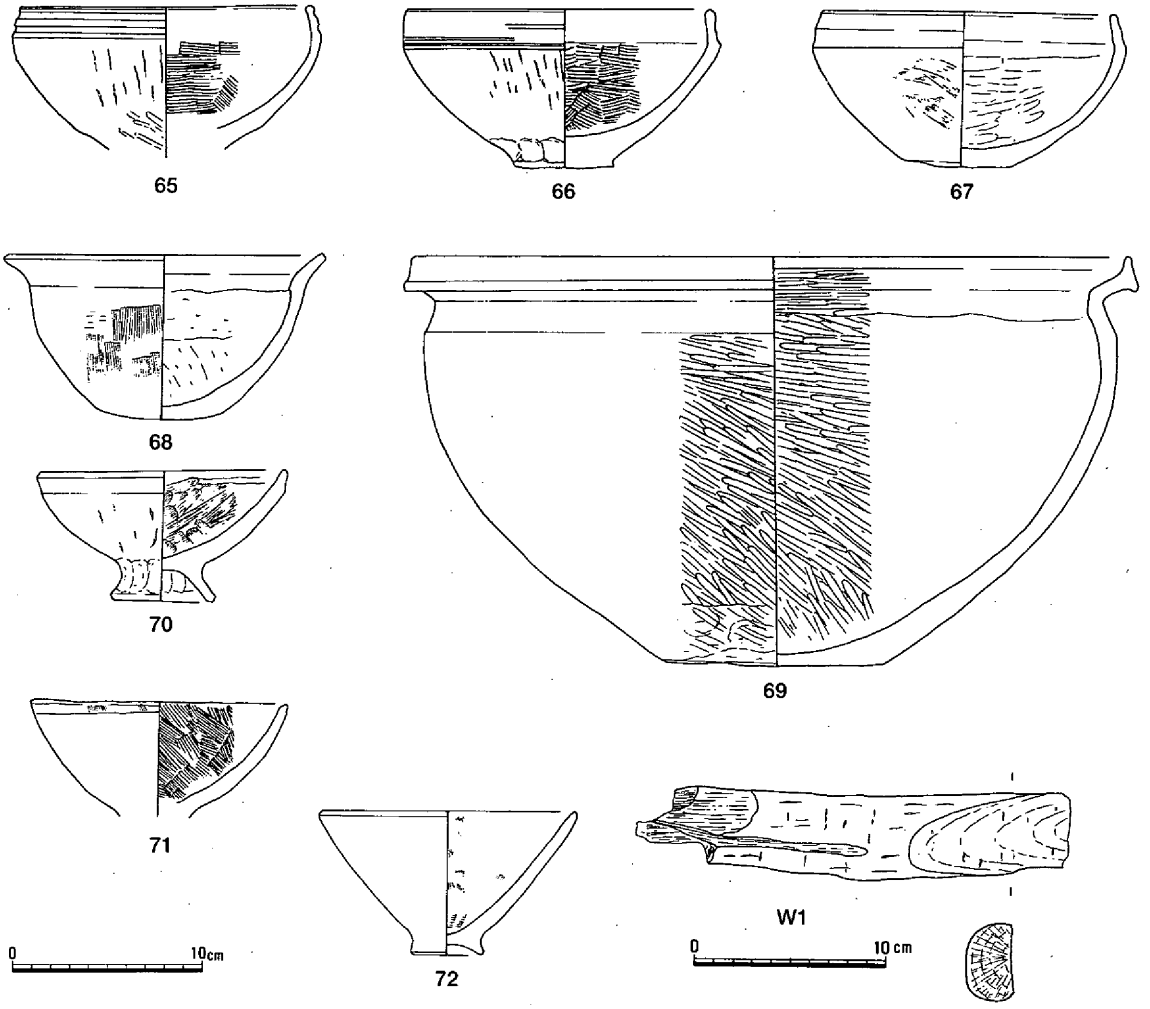

62


63


64

0　10cm

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
52	弥生土器	甕	10.0	5.3	12.3	良好	7.5YR6/2(灰褐)	砂粒	全体に煤付着
53	弥生土器	甕		5.5		良好	ススで不詳	砂粒	全体に煤付着
54	弥生土器	甕		4.5		良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
55	弥生土器	甕		6.0		良好	10YR6/1	砂粒	
56	弥生土器	甕		4.3		良好	10YR7/1(灰白)	砂粒	
57	弥生土器	甕		6.5		良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒	
58	弥生土器	甕		4.4		良好	10YR7/1(灰白)	砂粒	
59	弥生土器	台付甕	15.0	11.2	18.9	良好	7.5YR7/2(明褐灰)	砂粒	口縁部に沈線
60	弥生土器	高杯	16.0	10.1	11.1	良好	7.5YR8/2(灰白)	砂粒	
61	弥生土器	鉢	20.2	7.0	10.9	良好	10YR6/1(褐灰)	砂粒	
62	弥生土器	鉢	16.9	3.7	9.2	良好	5YR7/6(橙)	精良	口縁部に凹線
63	弥生土器	鉢	11.9	4.6	8.3	良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	
64	弥生土器	鉢	12.9	3.8	6.9	良好	5YR6/4(にぶい橙)	精良	



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
65	弥生土器	台付鉢	13.6			良好	10Y R8/2(灰白)	精良	口縁部に凹線
66	弥生土器	鉢	16.2	5.3	8.9	良好	7.5Y R8/2(灰白)	砂粒	
67	弥生土器	鉢	15.3	5.5	8.3	良好	10Y R7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
68	弥生土器	鉢	16.7	6.8	8.9	良好	7.5Y R8/3(浅黄橙)	砂粒	
69	弥生土器	鉢	37.2	11.1		良好	7.5Y R8/2(灰白)	砂粒	
70	弥生土器	台付鉢	13.0	5.3	7.1	良好	7.5Y R7/4(にぶい橙)	砂粒	
71	弥生土器	鉢	15.4			良好	10Y R8/2(灰白)	砂粒	口縁部に凹線
72	弥生土器	台付鉢	13.6	3.6	7.7	良好	7.5Y R7/4(にぶい橙)	砂粒	

掲載番号	器種	法量(cm) 長さ	幅・径	厚み	樹種	備考
W1	有頭棒	22.8+ α	4.4			

土層は第４層が、炭化粒ではなく炭状のものが多く含まれていた。また、第５層の上方に木が認められたが、井戸枠に用いられた状況にはなかった。

出土遺物は、破片を含め72点になる。６は実測図に記されている壺である。口縁部は、開き気味に立ち上がるとともに下方にも張り出す。口縁部には退化凹線が見られ、頸部内面はヨコヘラミガキをする。７は甕で、半分ほどの破片である。口縁部には、上方に拡張するが下方はしない。口縁部には、ナデによる条線が認められるが全周はしていない。外面調整は、頸部近くは細いハケ、胴部にかけては粗いヨコハケを行う。８と９は口縁部摘み上げ状に拡張する口縁を持ち、口縁部はナデにより凹部

気味となる。10は口縁端部を肥厚気味にし、口縁部が丸くなる。11と12は甕の底部で、11は平底である。13は鉢で、口縁部が大きく外方へ開く。外面調整は磨滅のため不詳である。14は、杯部の形態から器台と思われたが、脚部の内容から高杯とした。杯部は拡張する口縁部がないが、脚部は短脚で大きく広がる裾部を形成する。脚部穿孔は、4個認められる。調整は、磨滅と剝落のため不詳である。

15～20・22・24・25は頸部が「ハ」の字状に開く壺で、15・16・22・25は口縁部が大きく上方へ拡張する。15の口縁部はナデの凹凸が見られ、下方に張り出す。底部外面と頸部内面はヘラミガキが見られる。頸部から胴部への移行は肩部が強く張り、底部は上げ底となる。16は肩部の張りが強くないことから、下膨れとなる。口縁部は螺旋の沈線を施文する。外面調整は頸部から肩部にタテヘラミガキ、内部の口縁部はヘラミガキ、頸部は押圧とヘラケズリが見られる。胴部下に外からの穿孔が行われている。17は口縁部を上下に粘土を足して拡張するが、その拡張は顕著ではない。外面調整はハケの後タテヘラミガキを行い、内面は頸部から底部にかけてヘラケズリの後ヨコヘラミガキが底部近くまで行われる。18は、口縁部上下端に沈線が認められる。外面調整は、頸部から肩部にタテヘラミガキ、頸部内面は、ヨコヘラミガキが行われる。19は肩部の張りが緩み胴部への移行の屈曲が目立たなくなる。口縁部の上方への拡張は、この種の甕の口縁部の形態に近い。器面全体に煤が付着している。20は口縁部に粘土を足して拡張するが、顕著ではない。口縁部内面拡張部の屈曲部に薄く粘土を付す。頸部の「ハ」の字状の開きが下方まで大きく開くため、胴部最大径が下がり下膨れとなる。22は上方に大きく拡張するが、下方のそれは顕著でない。口縁部端には、沈線を施文する。口縁部内面には、押圧が認められる。外面調整は頸部にヨコヘラミガキ、頸部内面は、ヘラケズリと押圧後ナデが行われている。24は口縁端部を上下に拡張し、口縁部には明瞭ではないが退化凹線が認められる。外面調整は頸部がタテヘラミガキ、内面はヨコヘラミガキが行われる。25は口縁部を大きく上方へ拡張し、14個の充塡鋸歯文を施文し、このうち1個は逆に施文されている。鋸歯文の線は、雑に描かれている。外面調整は頸部がタテヘラミガキ、内面はヨコヘラミガキが行われている。21と23は、頸部屈曲が強いが壺とした。21は口縁部を上下に拡張し、凹線を施文する。外面調整は頸部から胴部上半にヨコヘラミガキ、頸部内面は、ヨコヘラミガキが行われる。23は口縁から粘土を付して上下に拡張する。外面調整は頸部下にタテヘラミガキ、頸部内部はヨコヘラミガキが行われる。

26・27・29・32は球形の胴部を持つ壺である。26は口縁を単純に終わらせ、胴部が張る。27と29は口縁部を上方へ拡張し、27の口縁部はナデにより凹部となる。29は口縁端部に沈線を施す。29の胴部最大径の部分には、連続した平たい面を認めることができ、タタキが用いられたことが考えられ、頸部から胴部下半までタテヘラミガキを行う。32は内傾気味に拡張する口縁部を形成し、凹線を施文する。外面調整は、頸部から肩部にかけて幅広の暗文風のミガキが施される。内面は、ヨコヘラミガキが施される。底部の器壁の厚さは、極めて薄い。

28・30・31は、比較的大形で球形の胴部を持つ甕である。28は口縁部の下方拡張部で、粘土を付して形成している。外面調整は肩部にヨコヘラミガキ、頸部内面の屈曲部までヨコヘラケズリを行う。30は拡張した口縁部にナデによる凹部を形成する。外面調整はハケの後ヘラミガキ、頸部内面はヨコヘラミガキを施す。31は拡張した口縁端部を丸く肥厚気味にし、退化凹線を施文する。外面調整はヨコヘラミガキ、内面は頸部の屈曲部から肩部に押圧が認められる。

33～59は、甕である。33は大形のもので、口縁端部下を張りだし、胴部から底部への移行にはくせを残している。外面調整は細かいハケが認められ、内面はヘラケズリを行う。器面全体には、煤が付

着している。34は、口縁部の下方への拡張は見られない。外面調整は頸部から底部までハケ、内面は頸部屈曲部までヨコヘラケズリを行う。器面全体を煤が付着し、内面の胴部下半から底部にかけては炭化物の付着が認められる。35は、拡張する口縁部は強いナデにより凹部を形成する。外面調整はタテハケ、内面は頸部屈曲部までヘラケズリを行う。底部には、焼成後の穿孔がある。36の口縁は肥厚気味にし、ナデの条線が認められる。外面調整は頸部から底部までハケ、内面は頸部屈曲部下半までヨコヘラケズリを行う。底部には焼成後の穿孔がある。器面全体と内面の胴部下半から底部上にかけて煤が付着する。37は口縁部のヨコナデが強いことから端部が肥厚気味になる。胴部外面は平行タタキの後ハケ、内面は頸部屈曲部までヘラケズリを行う。底部は、明瞭な屈曲を呈さない。38は、内傾気味に拡張する口縁部にヘラガキ沈線を施文する。外面調整は細かいハケ、内面は頸部屈曲部下半までヘラケズリを行う。39は、口縁部下方の拡張はほとんどなく、ナデによる凹部を形成する。外面調整は細かいハケ、内面は頸部屈曲部下半までヘラケズリを行う。外面全体には煤が付着し、内面にも熱による変色部分が残る。40～42の口縁部はナデで端部が肥厚気味となり、41の底部は上げ底気味で押圧痕が認められる。これらの内面調整は、いずれも頸部屈曲部までヘラケズリを行う。外面全体には煤が付着し、40は肩部に吹きこぼれと思われる痕跡が、41と42には内面の底部近くにも煤を認められる。43と45は、口縁部にナデによる沈線状の条線が認められる。46は、口縁端部が上方に摘み上げるように拡張し、先がとがる。49～51は、胴部の短い器種である。49と51は、口縁部にナデによる条線状の沈線が見られる。50は、口縁部が内傾して上下に拡張する。頸部下半から胴部にかけては、竹管による刺突が施されている。52は小形の甕で、底部が丸く張り出す。器面全体に煤が付着する。53～58は底部の破片で甕としたが、54・56は壺の可能性がある。59は、台付甕とした。口縁部を摘み上げ状に拡張し、沈線を２条施文する。外面調整はハケ、内面は頸部屈曲部までヘラケズリを行う。台部は、低く幅広である。

60は高杯で、口縁部が大きく外方へ広がり、脚柱部は短く裾部への移行は明確な稜を持たない。外面調整は磨滅で不詳であるが、内面は丁寧なヘラミガキを行う。

61～72は鉢で、61～64・69は口縁部を拡張する。64は口縁部に沈線が認められるが、磨滅のために明確さに欠ける。69は大形で、口縁部が楕円になる。63は丁寧な作りで焼成も良いが、内外面とも二次的な火により黒色変化を呈している。67の内面調整はヘラケズリで、他はヘラミガキである。65～68は口縁部を拡張しないものである。65・66は屈曲する口縁部となり、65は凹線を66は磨滅のため不詳であるが沈線が認められ、内面調整はハケによる。61も屈曲する口縁部となり、幅広のナデの凹部を形成する。68は外反する口縁となり、内面はヘラケズリを行う。底部は、66が肥厚した平底、67は平底、そして68が丸底気味となる。70～72は、台付鉢である。70・71は口縁部のヨコナデにより凹部を形成する。これらの内面調整はハケであるが、72はハケの後ヘラミガキを行う。台部は70が高く押圧で、72は低い形態を呈する。

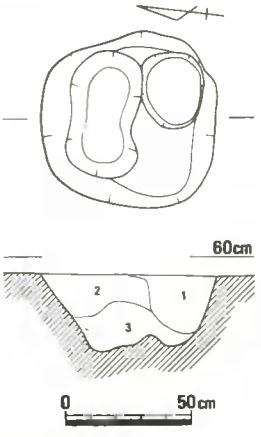
Ｗ１は、第５層中から検出されたものである。両端が失われているが、斜めにカットされている形状から上東Ic区から多く出土している同種の木器と同様な内容を示していることから有頭棒とした。この他に、木片が認められたが木器と判断できなかった。（下澤）

（5）土壙

性格が不明で、形状が不定形なものを土壙として30基を報告する。土壙は、Ib区の黄褐色系基盤層がグライ化していく南からIa区に散在する状況と、緩斜面から北東の微高地上に検出されているのは、弥生時代後期が主である。中世のものは、Ib区の北西寄りに確認され、埋土が灰色系であることから弥生期のものと判別できた。また、近世のものが、Ia区の南端にまとまって認められている。

（下澤）

土壙1



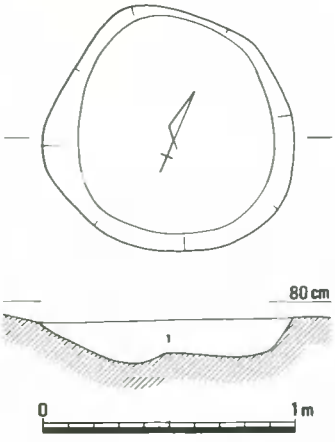
1　褐灰色粘質土
2　1に淡黄褐色粘質土ブロック多混
3　淡灰色粘質微砂と灰色粘質土混在層

（1/30）

位置（調査区）	遺構名	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
下庄Ⅰb	土壙1	70	70	30	隅丸方形	台形		弥・後	底面凹凸

土壙1は土壙2の東に位置する。地形的には低位部にあたり、掘り方も不整形であることから人為的な遺構でないかもしれない。時期は埋土の状況により弥生時代後期に属する可能性が高い。（渡邉）

土壙2



1　暗灰褐色粘質土（灰白色土ブロック少混）

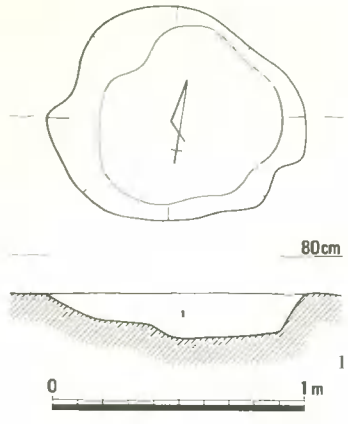
（1/30）

遺構名	位置（調査区）	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙2	下庄Ⅰa	98	95	18	円形	椀		弥生	

土壙2は土壙1の西に位置し、底面全体にわずかな凹凸が見られた土壙である。この凹凸は、灰白色土ブロックを掘り上げて生じたものである。底面は、全体的に西側がやや低い傾向にある。

遺物は検出されず、検出面や埋土などの状況から弥生時代の遺構であると推定した。埋土中に含まれる灰白色土ブロックと同じものは、調査区内では確認できていない。（築地）

土壙３



1　暗褐灰色粘質土（灰白色土ブロック混）

（1/30）

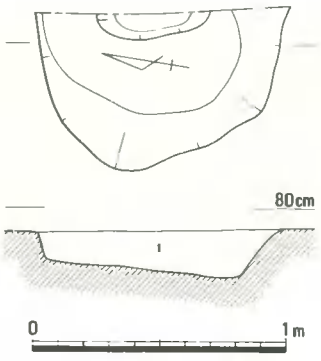
遺構名	位置（調査区）	規模（cm） 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙３	トリⅠａ	86	85	21	不整形	皿		弥生	

土壙３は土壙２の北に位置し、底の北東側が、中央部より凹んだ状態であった。

遺物は認められなかったが、検出面や埋土などの状況から弥生時代の遺構であると推定される。

（築地）

土壙４



土壙４は土壙３の北東に位置し、調査区端のため正確な規模などは不明であるが、幅は90cmを越えないと考えられる。底面ほぼ中央部には、平面形が10×45cm以上、深さ10cmほどの楕円形の凹みが認められた。

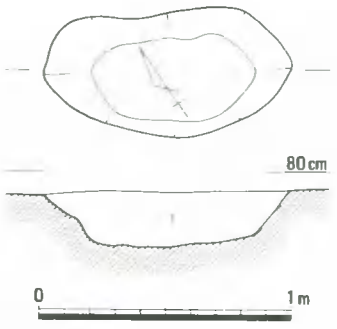
遺物は認められなかったが、検出面や埋土などの状況から弥生時代の遺構であると推定した。（築地）

1　灰茶褐色粘質土（灰白色土ブロック含）

（1/30）

遺構名	位置（調査区）	規模（cm） 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙４	トリⅠａ	100	60	20	不整形	台形		弥生	

土壙５



土壙５は土壙４の西に位置し、掘り込みはなだらかである。底面には、わずかな凹凸が見られる土壙である。

遺物は認められなかったが、検出面や埋土などの状況から弥生時代の遺構であると推定される。（築地）

1　灰褐色粘質土（灰白色土ブロック混）

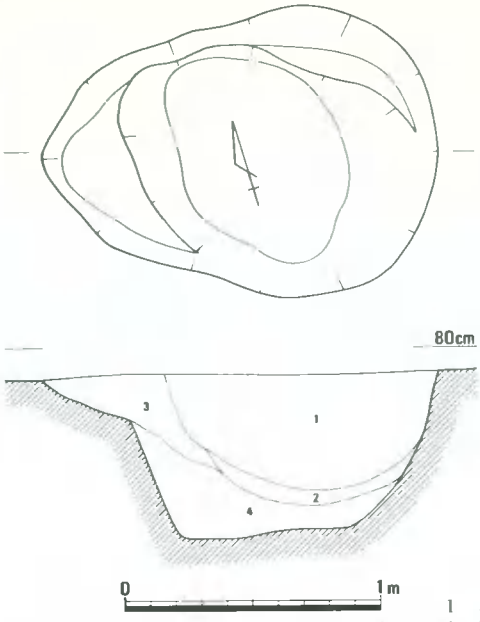
（1/30）

遺構名	位置（調査区）	規模（cm） 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙５	トリⅠａ	99	50	21	不整楕円形	皿		弥生	

土壙6

土壙6は、Ia区の土壙16の東側に位置する。平面形態は楕円形を呈し、断面は台形状を示す。掘り込みは段状となり、底はほぼ平坦である。

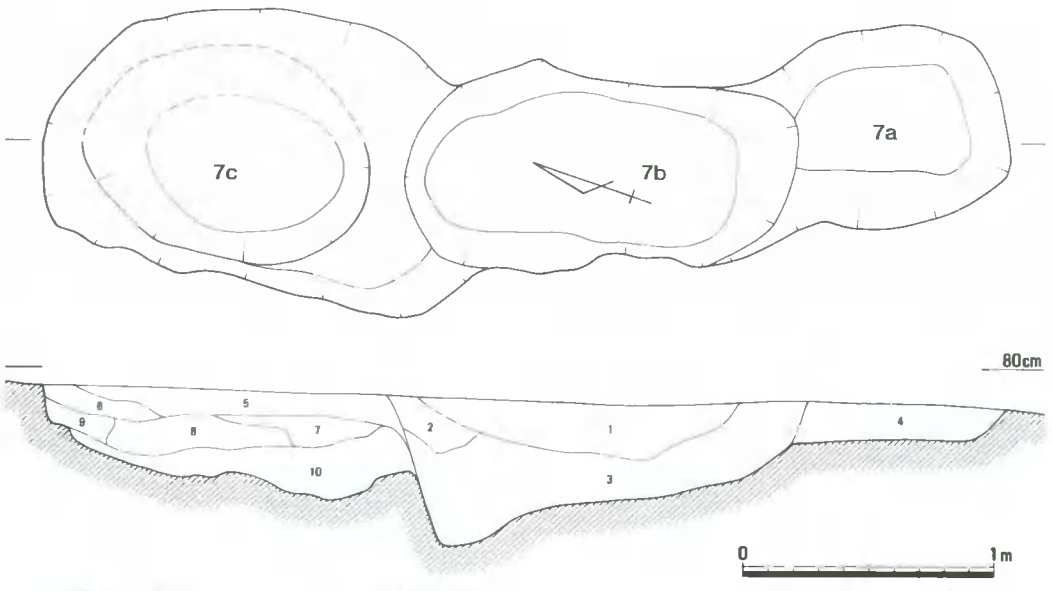
出土遺物は、検出できなかった。しかし、時期については基盤層である黄褐色土での遺構検出時に確認し、さらに、埋土が弥生後期のそれと同様の内容を示すことから判断した。（下澤）



1　灰褐色粘質土（灰白色粘質土ブロック混）
2　暗灰色粘質土
3　灰色粘質土
4　黒灰色粘質土（灰色粘質微砂混）

遺構名	位置（調査区）	規模（cm） 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙6	下庄Ia	155	116	66	楕円形	台形		弥・後	

土壙7

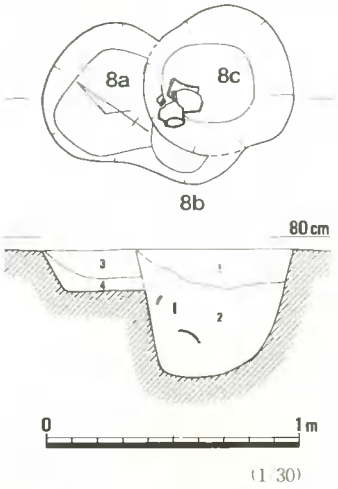


1　淡灰褐色粘質土
2　白灰色粘土
3　暗灰色粘土
4　明黄灰色粘質土
5　淡灰白色粘土（粗砂含）
6　暗茶褐色粘質土
7　暗黄褐色粘土
8　明黄灰色粘土（黄灰色粘土ブロック多含）
9　6に黄褐色粘土ブロック含
10　淡暗灰褐色粘土

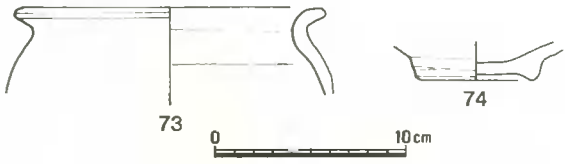
遺構名	位置（調査区）	規模（cm） 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙7a	下庄Ia	(82)	80	15	隅丸方形	台形		弥・後	
土壙7b		(155)	82	58	不整形	椀	○	弥・後	
土壙7c		(150)	108	40	不整形	椀		弥・後	

土壙7は、土壙8の南側に位置し、3基の土壙が重複している。土壙7aは北辺が重複し、底は浅く平坦である。埋土は、粘質土が1層認められた。土壙7bは、形態的に他の土壙に比較して整ったもので、土壙7aと7cを切って重複している。底は、南から下がり北端で一段深くなる。埋土は、3層とも粘質系で下層に行くにしたがい粘質が強くなる。土壙7cの形態は、他の土壙と比較して不整形で、底部の面も一定することなく凹凸が見られる。埋土は粘土系が多く、基盤層がブロック状に含まれる層が認められる。（下澤）

土壙8



1　灰褐色粘質土(炭化粒多含)
2　暗茶灰色粘質土(黒色粒土ブロック含)
3　淡黄灰色粘質土
4　淡黄灰色と黒色粘質土のブロック



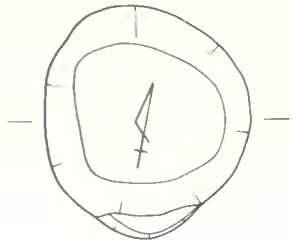
遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙8a	下生Ⅰa	55	(40)	16	(円形)	皿		弥・後	
土壙8b		(30)	(12)	18	−	−		弥・後	
土壙8c		63	56	50	円形	台形		弥・後	

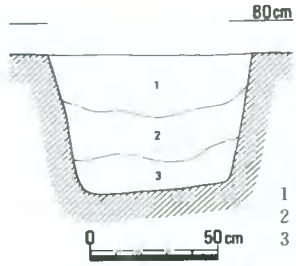
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
73	弥生土器	甕	16.6			良好	2.5Y R6/2(灰黄)	砂粒	
74	弥生土器	甕?		6.1		良好	10Y R5/3(にぶい黄褐)	砂粒	

土壙8は土壙7の北側に位置し、3基の土壙が重複している。土壙8aは平面形態が円形を呈し、南東部分が重複する。底部は平坦で、深さは16cmほどを測る。土壙8bは東部分が重複し、3分の1程度が遺存する。平面形態は円形と推定され、深さは18cmを測る。土壙8cは平面形態が円形をし、断面形態は一部なだらかに底部に移行するが、台形状を示す。これら土壙の前後関係は、プラン検出と土層断面の観察からa→b→cの順が確認することができた。

出土遺物は土壙8cから、甕の破片が検出されている。**73**は頸部を「く」の字に屈曲させ、端部は丸く終わらせる。**74**は摘み出して、上げ底とした底部破片である。高台風の摘み出し部分は、両側からナデによる調整が認められる。外面調整も押圧の後ナデ、内面は剝落しているがナデを行う。これらの破片は、出土時では胴部部分も検出されているが接合できなかった。しかしながら、出土の状態から同一個体の可能性がある。（下澤）

土壙9





1　灰色粘質土
2　暗灰色粘質土
3　灰色粘質微砂

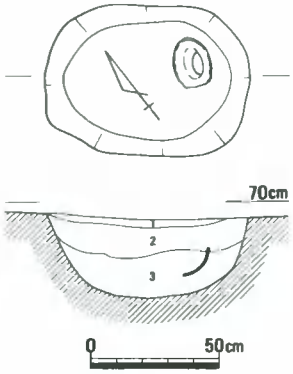
(1:30)

土壙9は土壙8の北に位置する。長径92cm、短径80cmの不整円形を呈する。掘り方は台形で、深さ50cmを越える。底面の海抜高は約10cmを測る。

時期の特定できる土器は出土しなかったが、埋土の状況から弥生時代後期に属すると考えられる。　(渡邉)

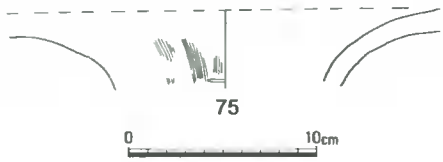
遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙9	下庄Ⅰb	92	80	53	不整円形	台形(箱)			

土壙10



(1:30)

1　淡灰褐色粘質土
2　暗灰褐色粘質土(淡黄灰色粘質土ブロック含)
3　暗灰色粘土

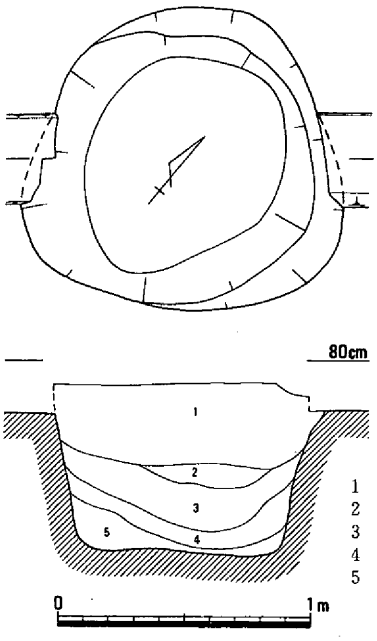


遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙10	下庄Ⅰb	80	59	31	楕円形	椀	○	弥・後	壺口縁

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
75	弥生土器	長頸壺	(23.6)			良好	5YR6/6(橙)	砂粒	剝落　頸部に沈線

土壙10は、土壙15の南西側に位置する。平面形態は楕円状を、断面形態は椀状を呈する。埋土には、基盤に近い土層が、ブロック状に認められた。

出土遺物は、底から若干浮いた状態で検出された。**75**は口縁端部から内面にかけて剝落する壺で、形状から長頸となると思われる。文様は図化しているが、沈線と考えられる線が一部残されているのが認められる。　(下澤)



(1/30)

1　褐灰色粘質土
2　灰色粘質土
3　灰色粘質土(淡黄灰色粘質土ブロック混)
4　暗灰色粘土質
5　灰色粘質微砂

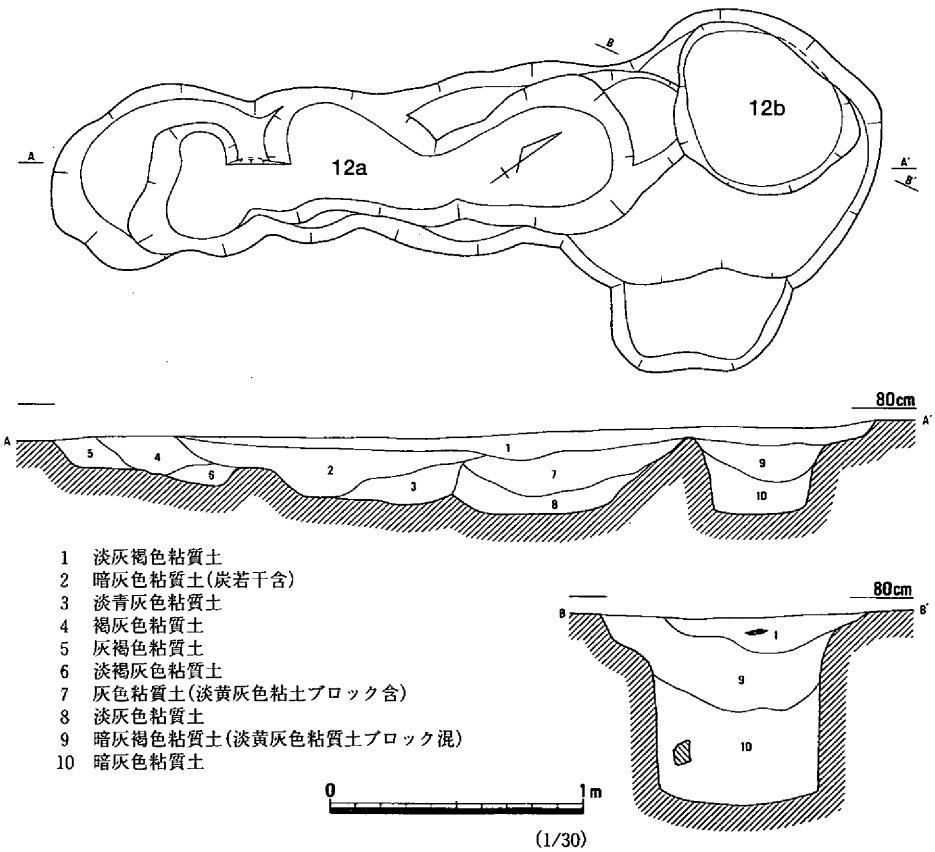
土壙11

土壙11は土壙９の北西に位置する。長径125cm、短径122cmの不整円形を呈する。深さは検出面より68cm、底面の海抜高は約0cmを測る。掘り方の断面の形状が袋状を呈してはいないが、底面が比較的フラットで、壁体が直立に近く立ちあがっており、貯蔵穴や井戸の可能性も考えられる。

時期は、図化し得なかったが壺および甕の口縁部細片などの出土が認められることから、弥生時代後期に属すると考えられる。　(渡邉)

遺構名	位　置 (調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙11	下庄Ｉｂ	125	122	68	不整円形	不整台形	○	弥・後	

土壙12



(1/30)

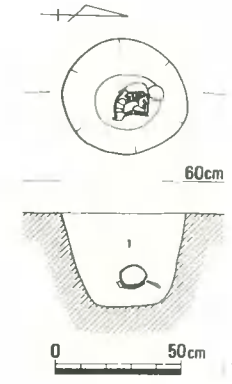
1　淡灰褐色粘質土
2　暗灰色粘質土(炭若干含)
3　淡青灰色粘質土
4　褐灰色粘質土
5　灰褐色粘質土
6　淡褐灰色粘質土
7　灰色粘質土(淡黄灰色粘土ブロック含)
8　淡灰色粘質土
9　暗灰褐色粘質土(淡黄灰色粘質土ブロック混)
10　暗灰色粘質土

遺構名	位置（調査区）	規模（cm）			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙12ａ	下Ⅰｂ	250	72	32	不整形			弥・後	複数の窪みだが分割しがたい
土壙12ｂ		100	70	72	円形	箱		弥・後	

土壙12は土壙11の北西側に位置し、重複した土壙である。プラン検出時においては単独の土壙と考えられたが、縦断の土層断面の観察から４基の土壙の重複であることが明らかとなった。土壙12ａの第１層は、淡灰褐色粘質土が３基の土壙とｂが埋まり、凹み状になってからの埋土である。したがって、この土壙中の掘り下げは区別していない。土壙の底は、それぞれの掘り込みの底が凹凸の状態を呈している。重複関係は、断面から中央の第２と第３層を埋土とする掘り込みが最も新しくなる。土壙12ｂは規模110×130cm、深さ17cmの掘り込みの北よりに、第１層を最終埋土として存在する。埋土の状態からこの浅い部分の掘り込みは、２段掘りのものである可能性が強い。埋土は、いずれの土壙中にも基盤層に近い土が存在している。

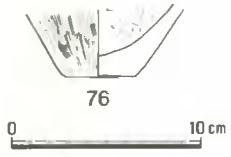
出土遺物は、土壙12ｂの断面図の第１層中に図示しているほか、細片が出土しているが図示できないものである。これらの破片は、弥生後期に属するものである。（下澤）

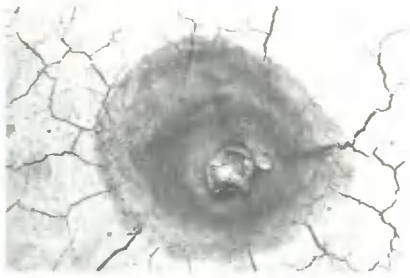
土壙13



（1/30）

1　暗灰褐色土（淡灰黄色土ブロック少含）



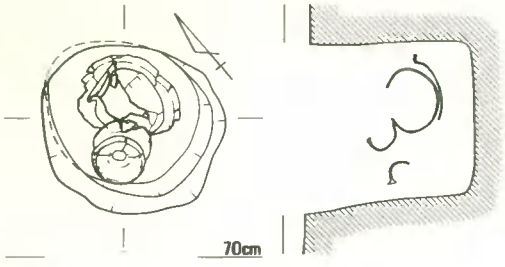


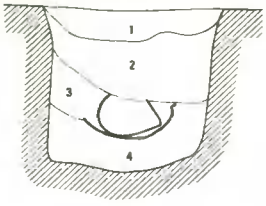
遺構名	位置（調査区）	規模（cm）			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙13	下Ⅰｂ	50	45	36	円形	椀		弥・後	

掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底径	器高				
76	弥生土器	甕		5.0		良好	10YR7/2にぶい黄橙	砂粒	

土壙13は土壙12の北東に位置し、平面形態は円形を、断面は椀状を示す。検出面は、上部を中～近世の下がりに削平されており、本来の規模は大きかったものと考えられる。出土遺物は、76の甕が横倒しの状態で、土壙底面から8cmほど浮いた位置で検出された。これとともに、拳大ほどの石も検出されている。甕は、口縁部から胴部にかけて、土圧でつぶされたように壊れていた。埋土が分けられないことから、土器が土壙内に置かれた状態で、一度に埋められたものと考えられる。また、底部を除き非常にもろくなっており、取り上げても水洗が困難であり復元には至らなかった。出土時の形状から、後期前半に比定されるものと考えられ、遺構もこの時期に相当するものと思われる。（築地）

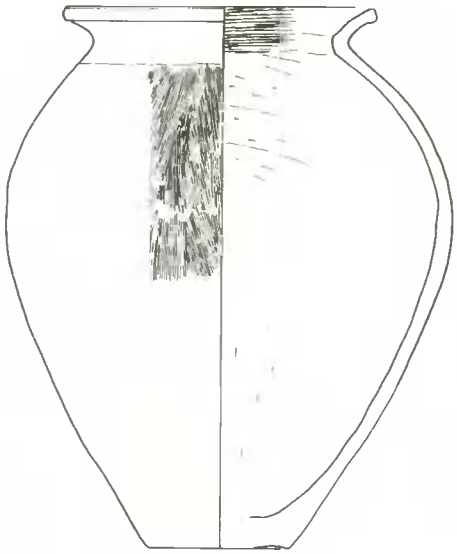
土壙14





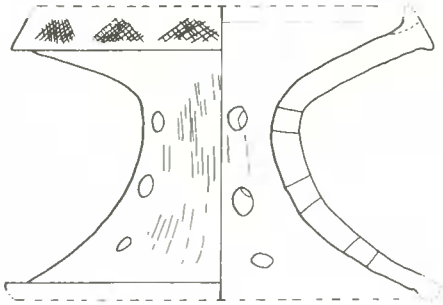
1　暗灰褐色粘質土
2　暗褐灰色粘質土
3　暗灰色粘質土
4　暗青灰色粘質土

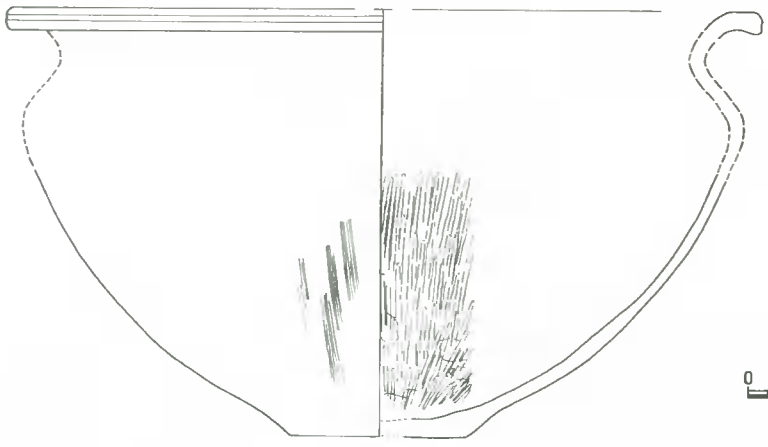
(1/30)


77

78

79


81



80

遺構名	位置 調査区	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙11	下庄Ⅰb	75	68	63	円形	箱		弥・後	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
77	弥生土器	甕	16.1	7.4	28.7	良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	肩部・底部に煤付着
78	弥生土器	甕	5.5	2.4	8.3	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	
79	弥生土器	高杯				良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	脚柱部に沈線
80	弥生土器	鉢	(38.5)	9.3	(22.8)	良好	5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒	
81	弥生土器	器台				良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	鋸歯文　透し3段1組5方向

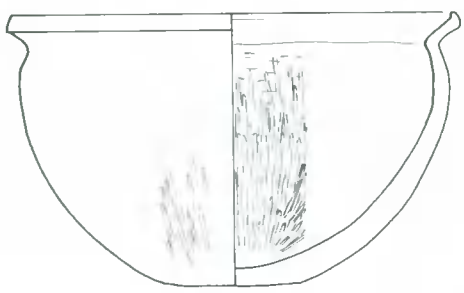
土壙14は土壙13の北、建物２～４の南西に位置する。微高地から南西に向けて下がり始める肩口近くに位置する。径70cm前後の円形を呈し、検出面からの深さ63cm、底面の海抜高は約0cmを測る。平面規模はやや小さめであるが、断面は土壙11と同じくほぼフラットな底面から壁体が直立近く立ち上がる形状で、土壙11同様に貯蔵穴もしくは井戸の可能性が考えられる。

出土遺物は甕77、鉢80、器台81が第３層から、甕78および高杯79が最下層の第４層から出土している。78は被熱しており、特に底部の劣化が著しい。高杯79はかなり磨滅しているが、器表面の一部に丹塗りが認められる。鉢80は図上では完形に復元しているが、体部の半分以上を欠き、組み合う体部片も出土しなかったことから、当初から裁断されたものが埋置されたと考えられる。器台81は上下端部を欠くがほぼ完形で出土した。

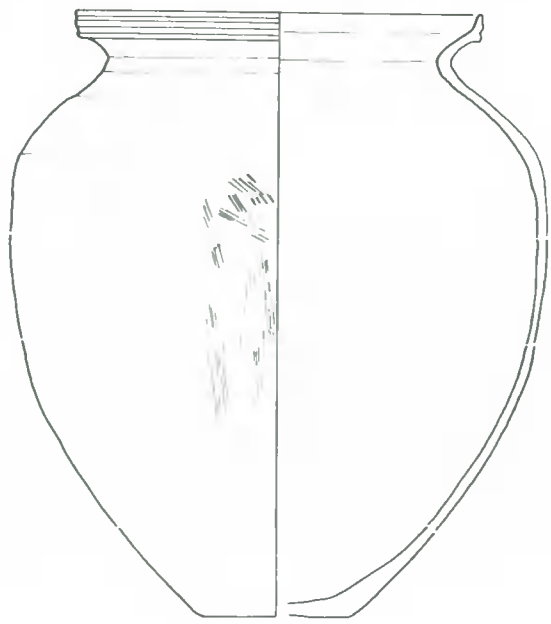
土器の出土状況を詳細に検討すると、第４層上面に、裁断された鉢79が内面を上にむけて置かれ、その鉢に入れ子にするように甕78が横たえられ、その甕腹部の上に器台77が正位置で据え置かれていたと復元できる。このように意図的に土器を埋納した状況が看取され、土壙14の廃棄に伴って何らかの祭祀が行われたと想定される。

時期は、弥生時代後期中頃でも新しい段階に比定される。（渡邉）

土壙15



82



83

0　10cm

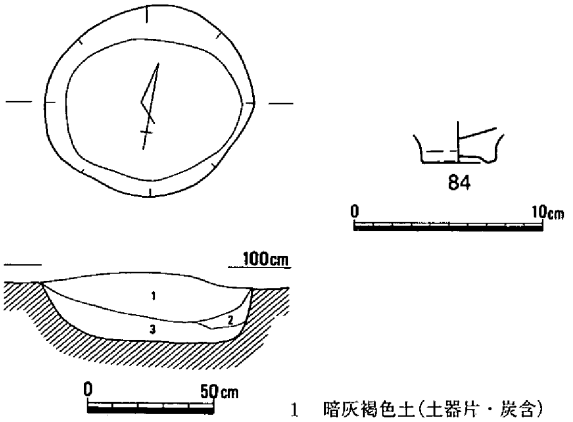
遺構名	位置（調査区）	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙15	下庄Ⅰb	69	－	33	不明	椀	□	弥生	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
82	弥生土器	鉢	23.3	7.2	14.5	良好	5YR6/3(にぶい橙)	砂粒	
83	弥生土器	甕	(21.6)	(8.0)	(32.0)	良好	7.5YR7/2(明褐灰)	砂粒・多	口縁部に凹線　口縁部下・肩部～底部に煤付着

土壙15は土壙10の北西側の調査区壁面に位置する。第１図の断面図に認められるもので、椀状の掘り込みの中に土器が認められた。

出土遺物は鉢と甕で、82は口縁端部が摘み上げ状となる。83は胴部の接合面が無い箇所が認められるが、出土状態と胎土から同一個体とした。口縁部には、凹線が施文される。（下澤）

土壙16



1　暗灰褐色土(土器片・炭含)
2　灰褐色粘質土
3　淡茶灰色粘質土

(1/30)

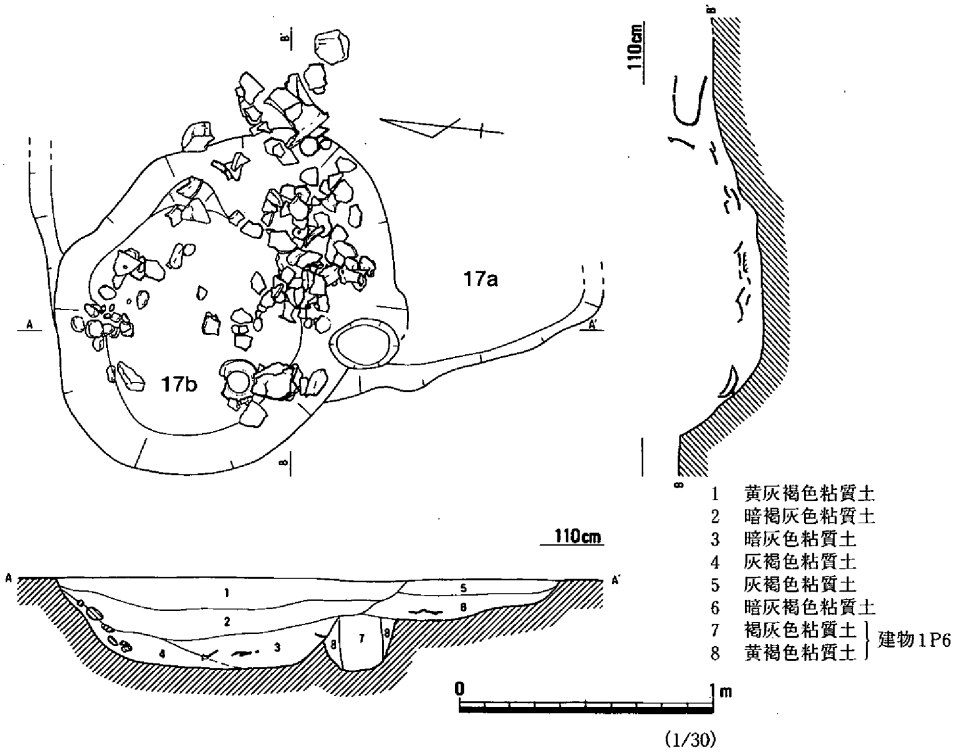
土壙16は、建物１の南側の微高地上に位置する。平面形態は円形で、断面形態は椀形を呈する。深さは26cmを測り、埋土の第１層が盛り上がった状態で検出されたことからも削平を受けたことが窺える。また、この層では、土器の細片と炭が多く含まれていた。

出土遺物は鉢の台部と考えられるもので、外面調整はヘラミガキ、内面もヘラミガキが、認められる。第１層からは出土を認められるがいずれも細片であり、実測に耐えるものではなかった。　(下澤)

遺構名	位　置 (調査区)	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙16	下庄Ｉｂ	76	76	26	円形	椀	○	弥・後	

掲載 番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
84	弥生土器	台付鉢(？)		4.0		良好	5ＹＲ5/4(にぶい赤褐)	砂粒	

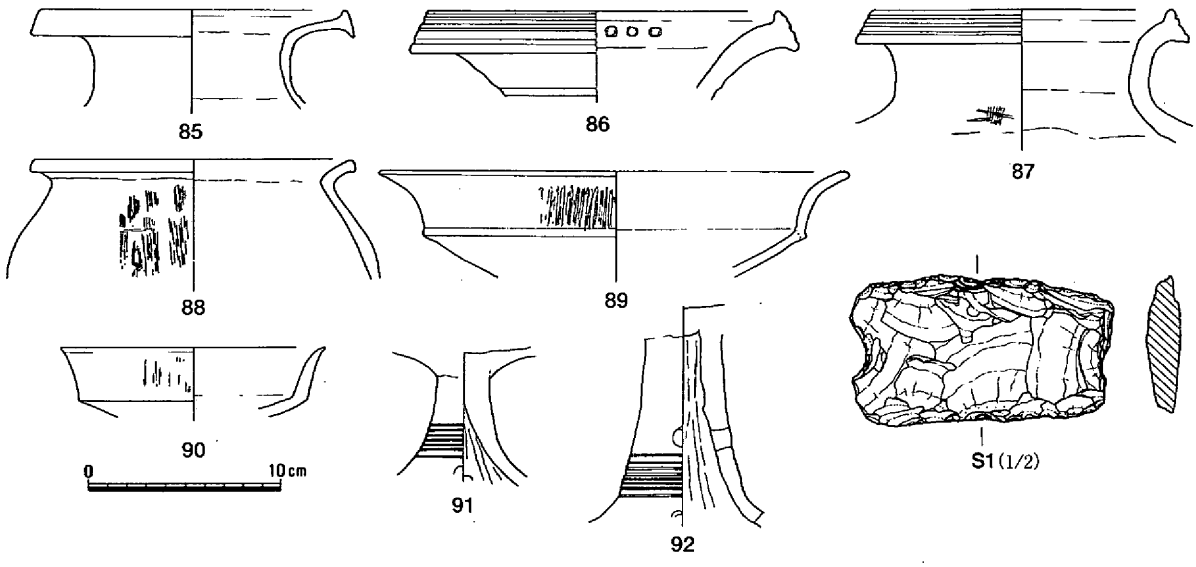
土壙17



1　黄灰褐色粘質土
2　暗褐灰色粘質土
3　暗灰色粘質土
4　灰褐色粘質土
5　灰褐色粘質土
6　暗灰褐色粘質土
7　褐灰色粘質土　建物1P6
8　黄褐色粘質土　建物1P6

(1/30)

遺構名	位　置 (調査区)	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙17ａ	下庄Ｉｂ	－	－	16	方形？	？		弥・後	
土壙17ｂ		150	113	36	円形	椀	◎	弥・後・前半	



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
85	弥生土器	壺	15.8			良好	5YR5/6(にぶい赤褐)	砂粒	
86	弥生土器	壺	18.6			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に沈線　口縁内部に方形刺突文３個
87	弥生土器	壺	16.0			良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒	口縁部に凹線
88	弥生土器	甕	16.6			良好	7.5YR3/1(黒褐)	砂粒	外面に煤付着
89	弥生土器	高杯	24.2			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	外面丹塗り
90	弥生土器	高杯	13.8			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	
91	弥生土器	高杯				良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	脚部下半に沈線
92	弥生土器	高杯				良好	7.5YR8/4(浅黄橙)	砂粒	脚部下半に沈線

掲載番号	器種	材質	法量(mm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	備考
S1	石包丁	サヌカイト	70.5	40.0	10.0	32.0	

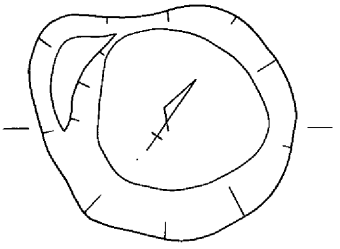
土壙17は土壙16の北に位置する。２基の土壙が切り合っており、断面図の第１～４層が遺構一覧表の土壙17bに、第５層と第６層が土壙17aに対応する。第７層と第８層は土壙とは無関係の柱穴で、先述した建物１のP3にあたる。

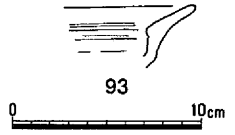
土壙17aは東側の大部分が調査区外になり、北西部も土壙17bに切られているため全容は不明だが、南北幅2mを越える大型の土壙と考えられる。確認されている北側と西側のラインが直線的で、南西部にみられるコーナー部分も角度が急であることから、隅丸(長)方形を呈する可能性が高い。底面の海抜高は70cmを測る。

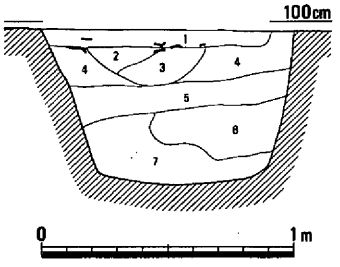
土壙17bは長径150cm、短径113cmの楕円形を呈し、底面の海抜高は約60cmを測る。下層にあたる第３層および第４層に多く遺物が含まれていた。また、北側の一角で、砂利石が流れ込んだように壁面に沿って検出された。第３層には炭を多く含んでいた。出土した遺物は、出土状況からおおむね新しい方の土壙17bの覆土中に包含されていたと判断できる。

土器は壺**85～87**、甕**88**、高杯**89～92**、打製石庖丁**S1**など比較的多く出土した。弥生時代後期中頃を中心として若干古い様相もみられるようであるが、遺構の検出状況から、１つの土壙の幅ではなく、新旧の土壙の遺物が混在していると考えた方がよいであろう。これらのことから土壙17aは弥生時代後期中頃の古い段階に、土壙17bは弥生時代後期中頃でも新しい段階に比定され、先述した建物１は土壙17aより古く位置付けられ、弥生時代後期前半に遡る可能性が高い。　(渡邉)

土壙18







(1/30)

1　灰茶褐色土(土器片・Mn含)
2　灰茶褐色土(土器片・Mn・炭含)
3　灰黄褐色土
4　灰黄褐色土(白灰色粘質土ブロック含)
5　灰黄褐色土(黄褐色土ブロック含)
6　灰黄褐色土(黄褐色土ブロック多含)
7　灰黄褐色土(白灰粘質土ブロック極多含)

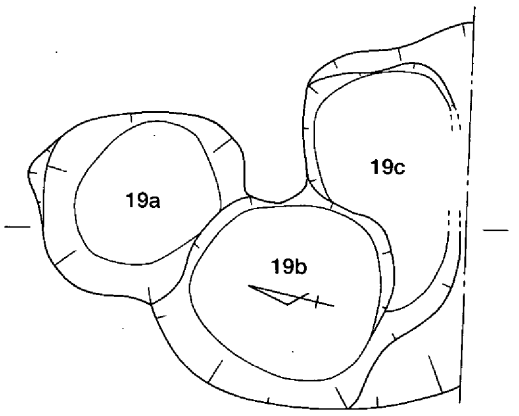
土壙18は、建物４の中央に位置する。平面形態は西辺が張り出すようになるがほぼ円形、断面形態は台形を呈する。底は平坦で、深さ67cmを測る。

出土遺物は第１層中から認められるが、図化できたのは**93**の高杯の破片である。口縁端部が外方に広がり、内面に屈曲を持ち、端面に退化凹線を施す。　（下澤）

遺構名	位　置 (調査区)	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙18	下庄Ｉｂ	(90)	100	67	円形	台形	○	弥生	

掲載 番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
93	弥生土器	高杯				良好	7.5ＹＲ6/4(にぶい橙)	砂粒	口縁内面に凹線　杯部内面に稜線

土壙19



(1/30)

暗灰褐色土(淡灰黄色土ブロック・炭少含)

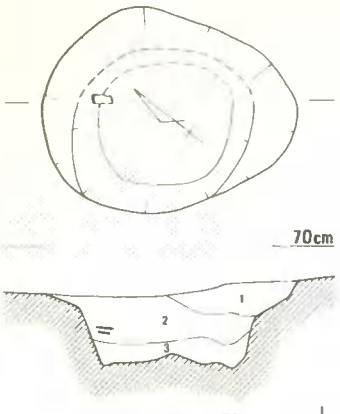
土壙19は土壙18の西に位置し、３基の土壙が重複している。土壙19aは南辺が、19bは北と南辺が、19cは北西辺が重複し、底はすべて平坦となる。埋土は３基の土壙とも、土器片を多く含む暗灰褐色土の１層のみが認められた。その中で、断面の遺物などの混入状況から、19aと19cの新旧は判断できなかったが、19bが最も新しいと推定した。

出土遺物には、高杯の脚柱部など器種の推定できるものもあったが、ほとんどが細片であった。19bからは、モモと思われる種子が１点出土している。時期は、細片ではあるが、いずれの土壙も弥生時代後期に属するものである。

（築地）

遺構名	位　置 (調査区)	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙19ａ	下庄Ｉｂ	80	－	24	不整方形	椀	○	弥・後	
土壙19ｂ		－	80	44	不整形	椀			土壙19中で、一番新しい？
土壙19ｃ		128	－	34	不整形	椀			

土壙20



1　灰褐色土(砂質土含)
2　灰黄褐色土(砂質土含)
3　淡灰色土

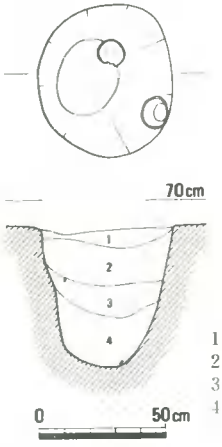
(1:30)

遺構名	位置 調査区	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙20	下庄Ⅰb	100	81	33	不整楕円形	椀		中世	底部凹凸

土壙20は土壙21の東に位置し、溝10の埋土上面において確認された土壙である。底面が溝の土と区別できなかったが、土層断面の観察から、凹凸の状態を呈する底面を確認することができた。

出土遺物は、早島式土器の小片が多く認められる。時期は、中世の遺構である。　（築地）

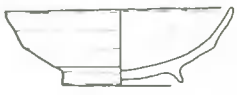
土壙21



1　灰褐色土(砂質土含)
2　灰褐色土(暗灰色土混)
3　淡黄灰色土
4　淡灰色土

(1:30)

94



95

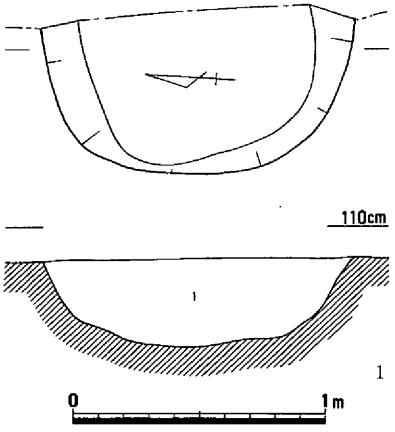
0　10cm

遺構名	位置 調査区	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙21	下庄Ⅰb	60	52	55	円形	椀		中世	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底脚径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
94	土師質土器	高台付椀	12.4	5.3	4.4	良好	10YR8/3.5 浅黄橙	砂粒	底部内面に液状付着物　早島式
95	土師質土器	高台付椀	11.7	6.1~6.3	4.6	良好	10YR7.5/4 浅黄橙	砂粒	早島式

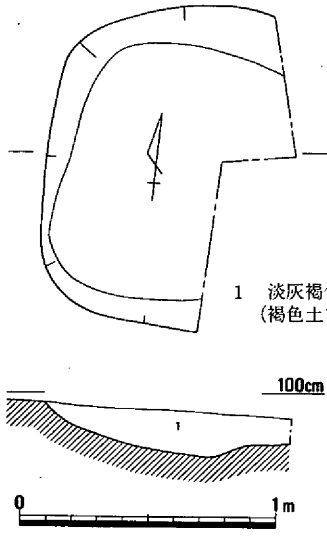
土壙21は土壙20の西に位置し、溝10の肩口に掘り込まれていた土壙である。そのため、土壙20同様、底面が溝の土と区別できにくかった。出土遺物には、94と95の高台付椀が検出されている。共に貼り付け高台で、ヨコナデで処理されている。94の底部内面には、付着物が認められたが、不詳である。94は土壙の底面から、95は第2層の灰褐色土中からの出土である。土壙の時期は、13世紀中葉の遺構であると考える。　（築地）

土壙22・23



1　淡灰褐色土
（褐色土ブロック含）

(1/30)



1　淡灰褐色土
（褐色土ブロック含）

(1/30)

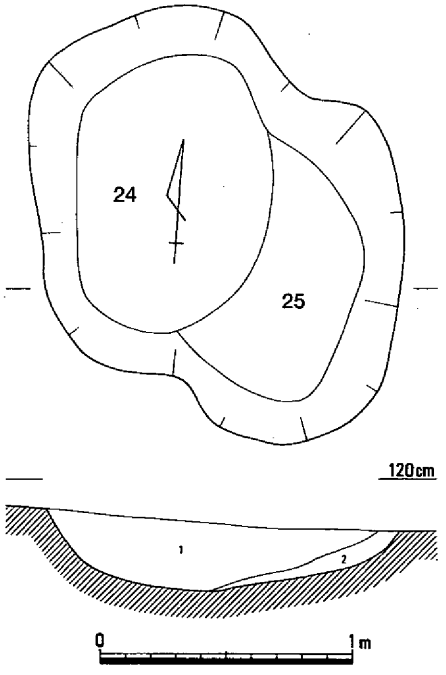
遺構名	位　置（調査区）	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙22	下庄Ⅰa	128	(68)	20	(隅丸方形)	椀		近世	

遺構名	位　置（調査区）	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙23	下庄Ⅰa	120	(65)	36	隅丸方形	椀		近世	

土壙22は、土壙28の北側に位置し、第１図第４層の上面で検出されたが、東側溝により半分を失う。（下澤）

土壙23は、土壙22の北側に接して位置し、第１図第４層の上面で検出されたが、東側溝により半分を失う。埋土は、土壙22と同じ淡灰褐色土である。（下澤）

土壙24・25



1　淡灰褐色土(褐色土ブロック含)
2　灰色粘質土

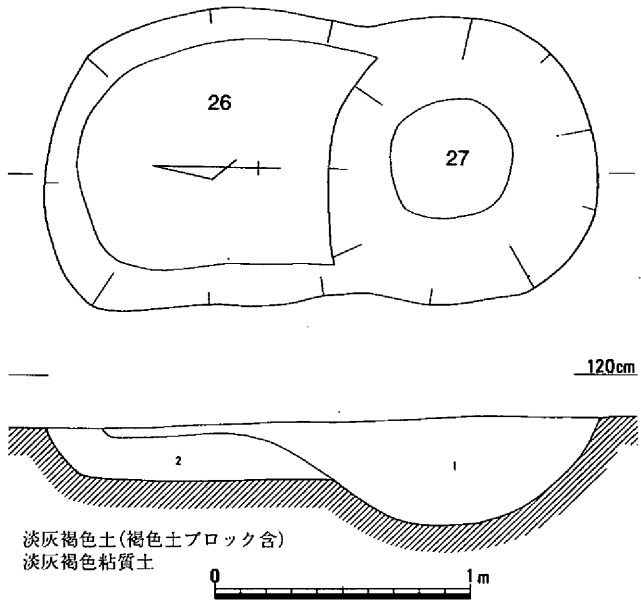
(1/30)

土壙24は、土壙30の北東側に接して位置し、土壙25と重複している。平面形態は楕円形、断面形態は椀形を呈する。検出土層は第１図の土層断面に示した第４層で認められ、埋土は淡灰褐色土である。（下澤）

土壙25は、土壙30の北東側に接して位置し、土壙24と重複している。西辺が重複しているが、平面形態は楕円形を呈する。土壙24との関係は、当土壙の北西側にずらすように同規模の土壙を掘り込んでいる。埋土は、土壙の掘り込みが緩くなっているためわずかに灰色粘質土が東辺に沿うように認められた。（下澤）

遺構名	位　置（調査区）	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙24	下庄Ⅰa	145	－	28	楕円形	椀		近世	
土壙25		130	－	28	楕円形	椀		近世	

土壙26・27

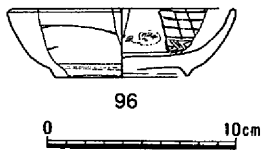


(1/30)

土壙26は、土壙30の北側に位置し、南辺で土壙27と重複している。底は、平坦となる。

(下澤)

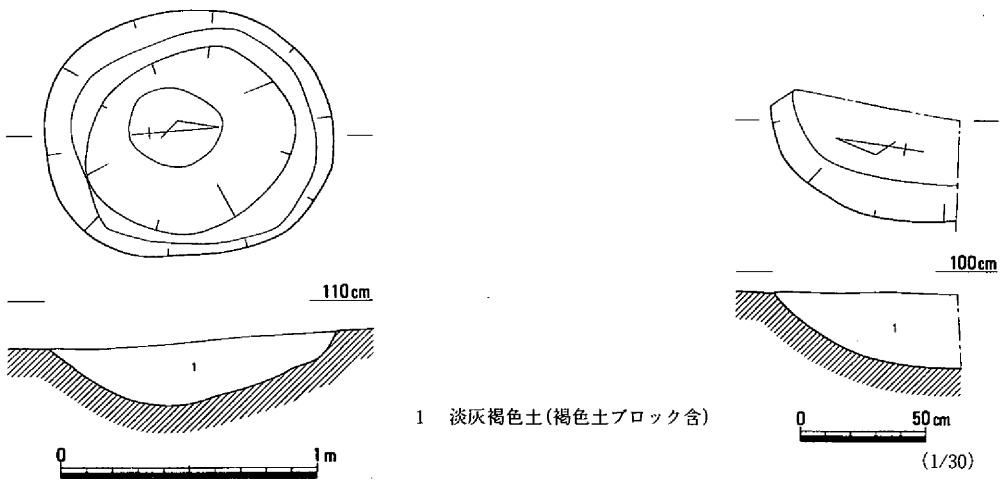
土壙27は、土壙30の北側に位置し、北辺で土壙26と重複している。出土遺物は、主に磁器の破片検出され、96の小皿が図化可能なものであった。　(下澤)



遺構名	位　置 (調査区)	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙26	下庄Ｉａ	126	－	20	隅丸方形	皿		近世	
土壙27		113	－	41	円形	椀	○	近世	

掲載 番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
96	磁器	皿	11.9	6.9	3.7		N8/0(灰白) 5B5/1(青灰) 文様 2.5G Y7/1(明オリーブ灰)釉		畳付　放れ砂

土壙28・29



(1/30)

(1/30)

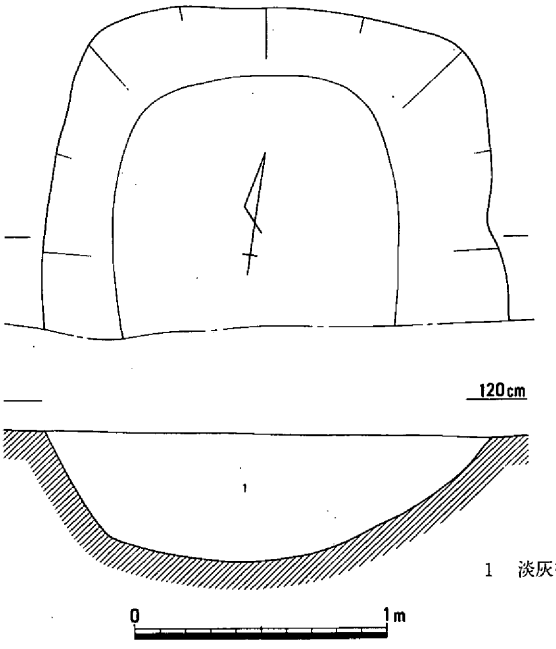
遺構名	位　置 (調査区)	規模(cm)			平面形	断面形	土器	時期	備考
		長さ	幅	深さ					
土壙28	下庄Ｉａ	115	96	25	円形	椀		近世	

土壙28は、土壙23の南側に位置する。平面形態は円形、断面形態は椀状を呈する。検出面は、他の土壙と同じ第１図第４層からである。　(下澤)

遺構名	位　置（調査区）	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙29	下庄Ｉａ	(75)	(42)	30	?	(椀)		近世	

土壙29は土壙28の南東側に位置し、また、調査区の隅にあたるため側溝でほとんどを失っている。検出面と埋土から、他の土壙と同時期のものと推測される。（下澤）

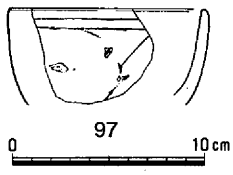
土壙30



(1/30)

1　淡灰褐色土（褐色土ブロック含）

土壙30は、土壙24の南西側近くに位置し、南辺を側溝により失う。また、溝８と重複している。平面形態は隅丸方形、断面形態は椀形を呈する。埋土は、淡灰褐色土で、他の土壙のものと同じである。溝８との関係は、土壙が第１図の断面の第４層からの掘り込みであるが、溝８はその下層の第５層からのものである。したがって、土壙が下層に存在する溝を切っていることになる。（下澤）



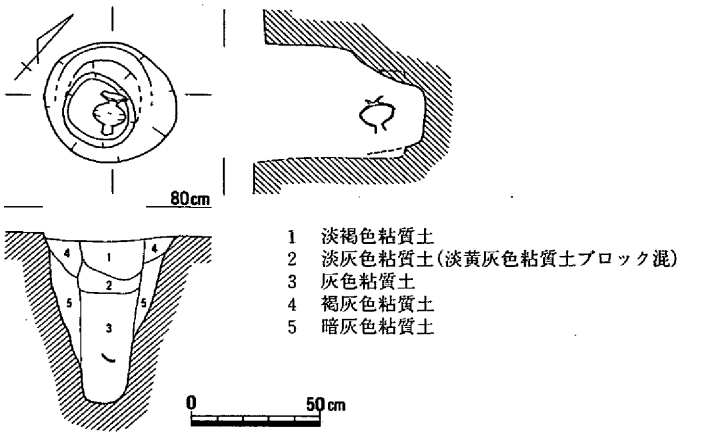
遺構名	位　置（調査区）	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙30	下庄Ｉａ	175	(125)	52	(隅丸方形)	椀		近世	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
97	陶器	碗	10.0				N6/0(灰)文様 N4/0(灰)釉透明		唐津焼

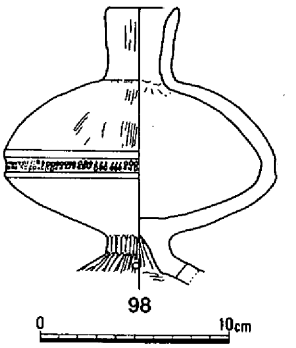
（６）柱穴

柱穴と考えられる穴は、微高地上とIa区において認められる。しかしながら、判断面の観察からはほとんど柱痕跡が認められなかった。比較的深く、形状も柱穴に近いのも認められるが、ここでは、柱痕跡等明確な判断材料があるものについて取り上げた。　（下澤）

柱穴１



(1/30)



遺構名	位　置 (調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
柱穴	下庄Ｉｂ	52	48	66	円形	椀	○	弥・後	脚付直口壺

掲載 番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
98	弥生土器	脚付直口壺	3.7			良好	2.5Y6/1(黄灰)	砂粒	胴部に凸帯・竹管文　脚部に円形透かし１個残存

柱穴１は土壙11の北東部に接するように検出された。上面の径50cm前後の円形を呈し、深さ66cmを測り、底面の海抜高は0cmに近い。径20cm前後の柱痕が明瞭に確認されている。

脚付直口壺**98**は、柱痕の底面から約10cm浮いた状態で検出された。脚裾部を欠くがほぼ完形で、土圧で破損した状況も認められなかった。

このような状態で柱痕内に土器が完形で残される状況を想定してみると、一つには柱が抜き取られた穴に偶然落ち込んだ、もしくは埋納された場合、１つには柱を建てる前に偶然落ち込んだ、もしくは埋納された場合が考えられる。前者の一例として南溝手遺跡の弥生時代中期後葉の建物40、弥生時代後期前葉の建物３などが挙げられるが、南溝手遺跡の場合は、抜き取りの痕跡も確認され、その穴に故意に細かく割った土器を詰めた状況がみられる。当柱穴の場合、抜き取り痕は確認されず、その可能性は低い。また、土器が完形品である点が大きく異なっている。

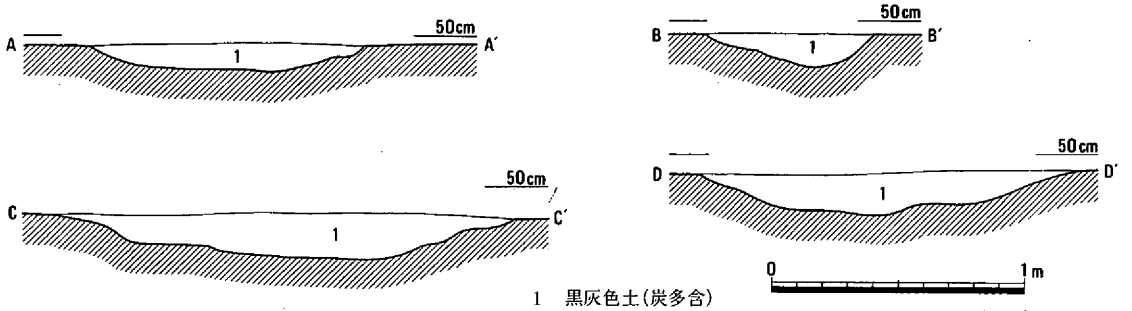
後者の場合を想定すると、柱痕の存在からこの土器の上位に柱が建てられたと想定できる。もし、当柱穴が建物を構成する柱の一つで、何らかの構造物を支える柱であれば、その重みで土器が潰されることも十分に考えられる。しかし当柱穴周辺には、この柱穴に組み合って建物を構成するような柱穴は検出されなかった。そうした場合、柵のように列を成すか単独で存在するかは判らないが、あまり荷重のかからない柱であったと想定せざるを得ない。

いずれにせよ、柱痕内にほぼ完形の土器が残されていることは意図的な行為の結果と考えられ、何らかの祭祀に伴う可能性も十分に考えられる。時期は弥生時代後期後半に比定される。　（渡邉）

（7）溝

黄褐色基盤層下より蛇行する溝が検出されたが時期は、不明である。弥生後期の溝は、上東遺跡から続くものがIb区北西端に認められる。また、微高地上には、性格不明の溝が検出されている。中世のものは南北、北西－南東、北西－南西方向の溝が存在している。（下澤）

溝1

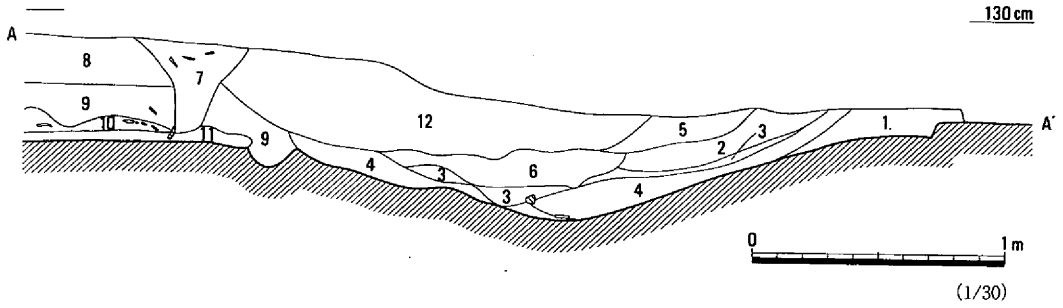


1　黒灰色土（炭多含）

(1/30)

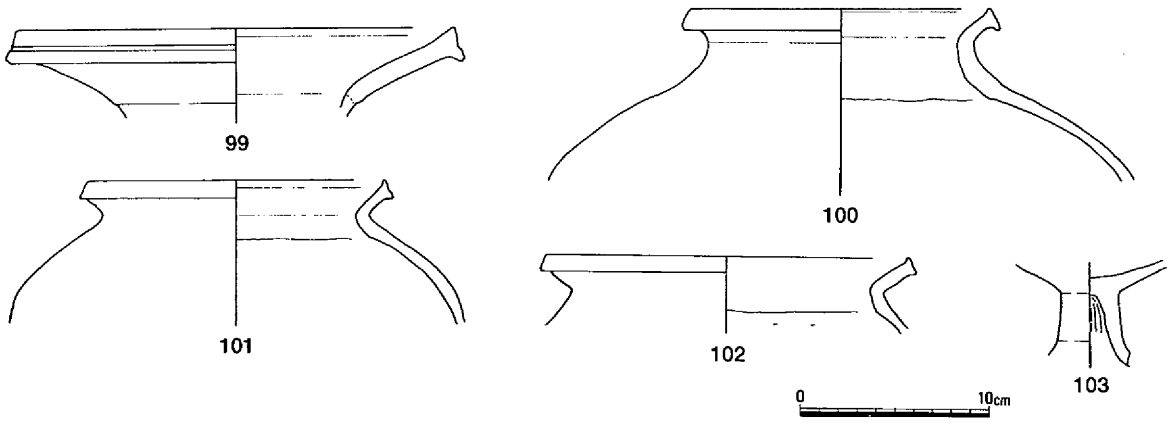
溝1は、調査区の東壁から西壁にかけて、北西から南東方向に向けて蛇行した溝である。検出は、弥生の基盤の第1図第5層を排土してからである。埋土は炭を多く含む黒灰色土で、遺物は全く認められなかった。また、壁面、分岐する溝等の内容から人為的な溝の可能性は薄い。（下澤）

溝2



(1/30)

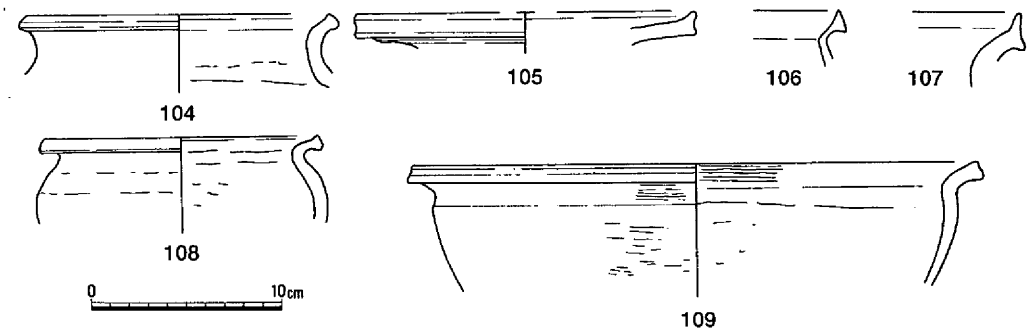
1　黄灰色土
2　淡灰黄褐色細砂と淡灰色粘質微砂の互層
3　淡灰色粘質微砂（炭含）
4　淡灰色粘質土
5　暗灰黄褐色砂
6　明灰黄褐色細砂
7　黄褐色やや砂質土（柱穴？）
8　灰黄褐色土（Mn含やや砂質）
9　灰黄褐色土（Mn含やや粘質）
10　褐灰色粘質土
11　暗灰色粘質土
12　暗灰黄褐色砂質土



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
99	弥生土器	壺	23.0			良好	10YR8/2(灰白)	砂粒	
100	弥生土器	壺	15.6			良好	5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒	
101	弥生土器	甕	15.8			良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	
102	弥生土器	甕	19.2			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
103	弥生土器	高杯				良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	

溝２は土器溜り2の東側に近接し、南北方向に延びる幅230cm、深さ40cmを測る溝である。北側は調査区外へ延び、上東遺跡の溝２と５～７のいずれかとつながる可能性を持つ。南側は溝14に切られ、それ以南では確認できていない。底のレベルは北側壁面で標高53cm、南側は溝14に切られる位置で45cmであった。このことから流れの方向は、北から南と推測される。遺物は、磨滅・剝落した破片が多く出土し、特に底からは多く検出されている。復元できたものには、**99**と**100**の壺、**101**(上層から出土)と**102**の甕、**103**(下層から出土)の高杯がある。調整は、表面が磨滅しているため不明瞭である。時期は、弥生時代後期と推定した。なお、断面図の第２～６層が、溝２に相当する。　(築地)

溝３



掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
104	弥生土器	壺	15.9			良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	口縁部に煤付着？
105	弥生土器	壺	(17.6)			良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒	
106	弥生土器	甕				良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線
107	弥生土器	甕				良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒	剝落
108	弥生土器	甕	14.4			良好	10YR6/4(にぶい黄橙)	砂粒	
109	弥生土器	鉢	(29.7)			良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	口縁部に凹線

溝３は溝２と土器溜り２の間で、それぞれと重複し、ほぼ南北に延びる幅200cm、深さ40cmを測る溝である。南側では西に振り、北側同様に調査区外へ延びている。底のレベルは北側壁面と南側西壁面で共に標高58cmであり、その間も多少高低はあるものの、ほぼ同レベルであった。溝２の土層断面図A-A′の第12層がこの溝の埋土で、ここでは１層のみである。調査区西壁面では溝のほぼ中位にレンズ状の層と北側に別の層が認められた。溝３も、溝２同様に上東遺跡の溝２・５・６・７のいずれかとつながる可能性を持つが、どれとつながるかは断定できない。溝２の土層断面図A-A′の層位は、第１層が弥生の斜面堆積、第２～６層が溝２、第８～11層は土器溜り２、第12層は溝３に相当すると判断される。

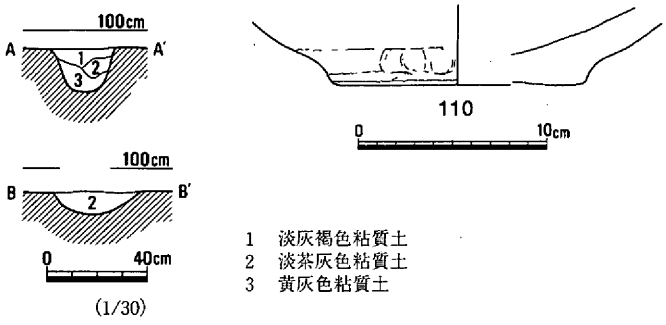
出土遺物は、表面が磨滅、剝落した破片が多く、復元できたものは**104**～**109**である。**104**と**108**は口縁端部を拡張気味に、**105**は口縁端部を上方に拡張させる壺である。**106**～**108**は甕で、**106**は口縁端部を肥厚させる。**107**は上方への拡張が大きい。**109**は口縁部がやや上方に引き出され、内外面にミガキが見られる鉢である。遺物などから弥生時代後期後半の遺構である。　(築地)

溝４

溝４は、溝２の西側に接して位置する。溝は幅120～170cm、深さ25cm前後を測る。検出は土器溜り２の土層断面図に示すように、その下から確認された。土器溜りの凹み部分と思われたが、図のように明らかに土器と分離でき、プランにおいても明確な溝として把握できた。

出土遺物はないが、その重複関係から土器溜り２より古くなる。　(下澤)

溝5

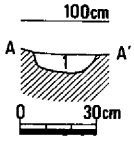


(1/30)

溝5は竪穴住居の南東側に位置する。溝は北西側が溝13と重複し、屈曲した南西側は微高地の緩斜面で消える。竪穴住居の外周溝と連なると考えたが、最上面の埋土中に土器の細片が多く、内容が異なる。出土遺物は、**110**の底部を検出する。　(下澤)

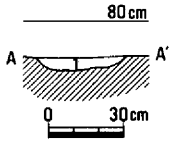
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
110	弥生土器	壺		13.5		良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	

溝6・7・8



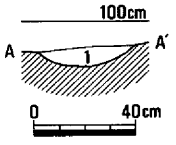
(1/30)

1　暗褐灰粘質土



(1/30)

1　暗褐灰色粘質土(黄色粘質土ブロック混)



(1/30)

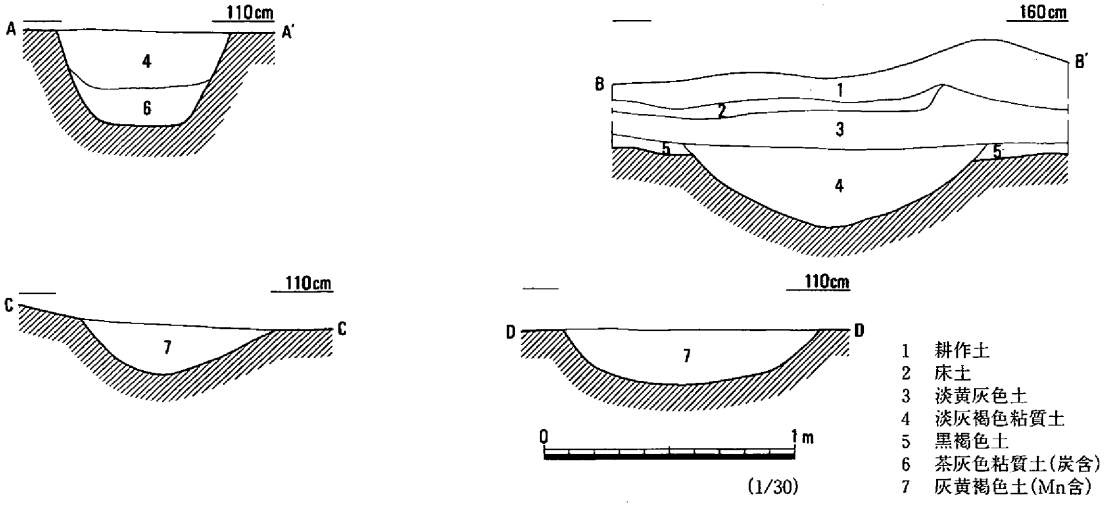
1　淡黄灰色砂質土

溝6は柱穴列2の南端の柱と重複し、幅24cm、深さ8cmを測る。柱穴状に溝のプランを検出した。(下澤)

溝7は柱穴列1の南西側に位置し、幅34cm前後、深さ8cmを測る。微高地緩斜面に沿うように認められるが、南端は立ち上がる。　(下澤)

溝8は土器溜り1の北西側に位置し、幅40cm、深さ8cmを測る。検出段階では、中近世の遺構と判断していた。出土遺物は細片ではあるが、全て弥生期のものであった。　(下澤)

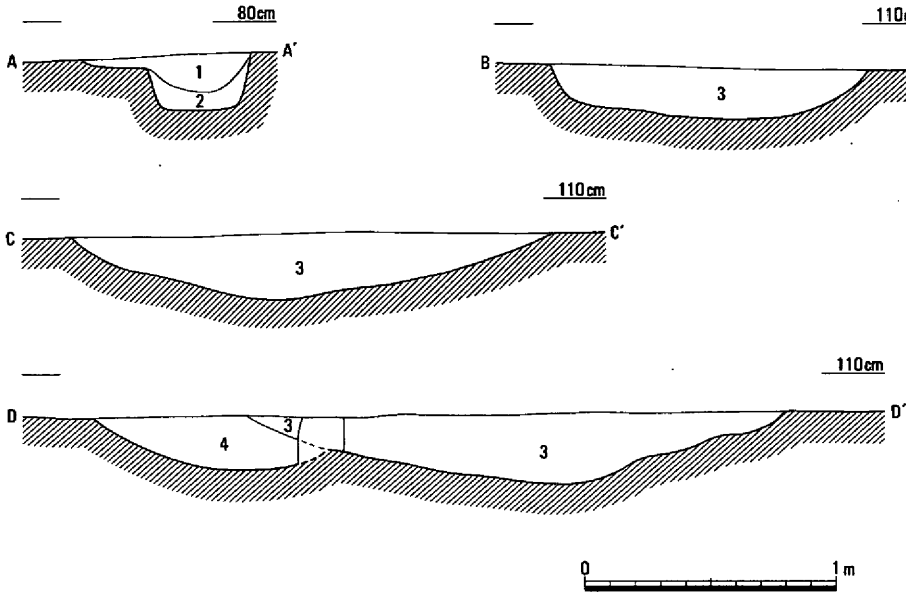
溝9



(1/30)

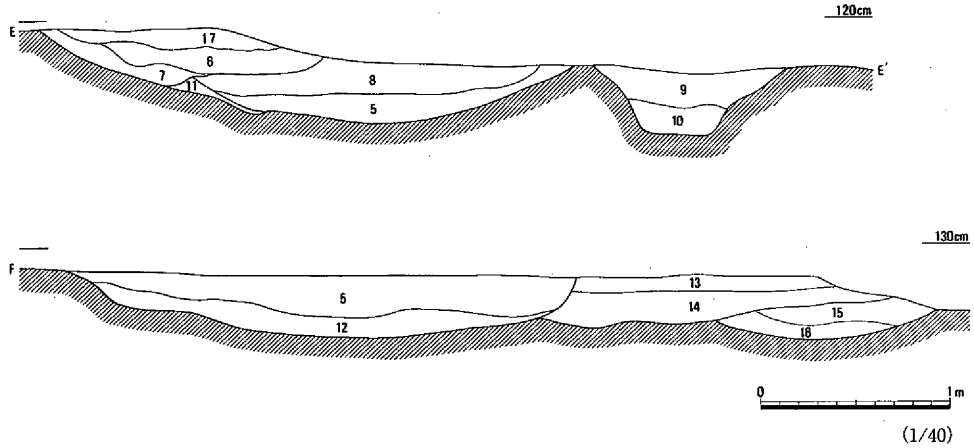
溝9は調査区中央やや西寄りに南北に走り、幅70～125cm、深さ20～36cmを測る。溝の流れの方向は、高さに凹凸が見られ一定方向の底の下がりは認められない。しかしながら、溝12に切られているが、その底の痕跡が認められている。その先は確認することができなかった。このことからすれば、北から南に流れていたと判断しても妥当であろう。　(下澤)

溝10

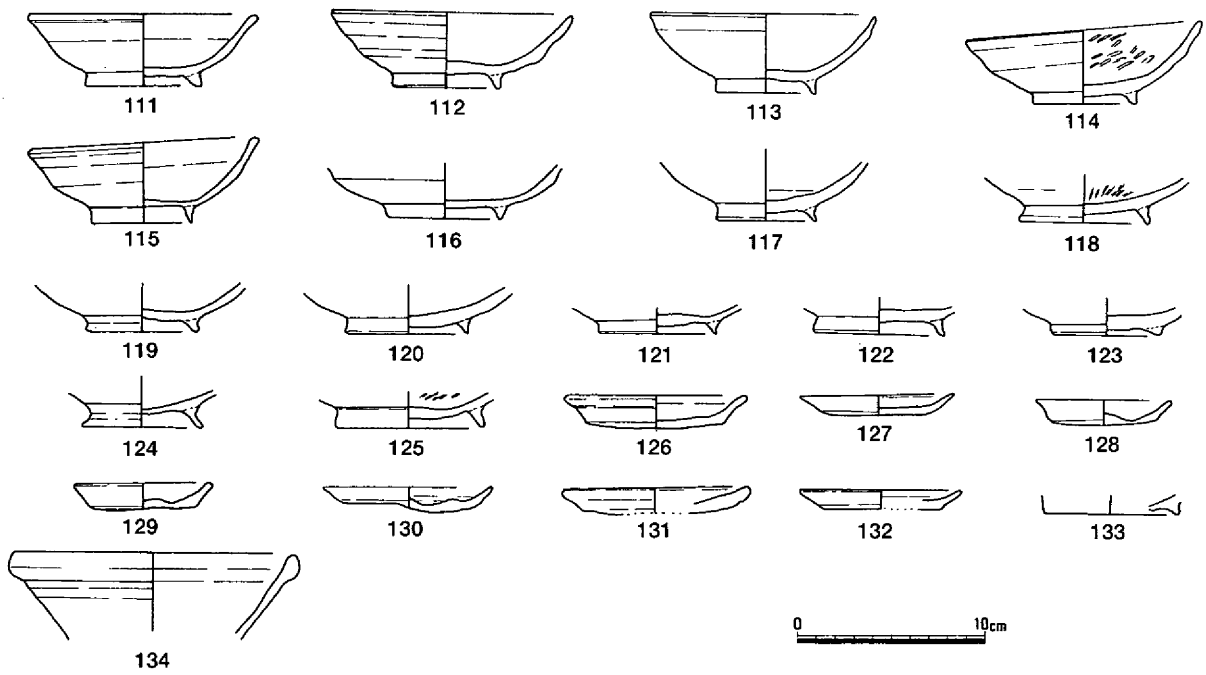


1　暗灰褐色砂質土
　　(淡黄灰色粘質土ブロック含)
2　暗灰色粘質土
3　明灰褐色土
　　(やや砂質　Mn含)
4　灰黄褐色土(Mn含)
5　黄灰褐色土(Mn含)
6　灰茶褐色土(Mn含)
7　灰黄褐色土
8　淡灰黄褐色砂質土(Mn含)
9　淡暗黄褐色砂質土
10　灰褐色砂質土
11　黄灰褐色粘質土(Mn含)
12　灰茶褐色やや砂質土(Mn含)
13　灰褐色やや砂質土
14　淡灰褐色砂質土
15　淡灰褐色やや砂質土
16　褐灰色やや砂質土
17　灰黄褐色土

(1/30)



(1/40)



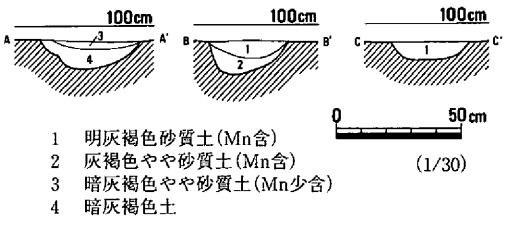
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
111	土師質土器	高台付椀	11.9	6.0	4.9	良好	10YR8/2(灰白)	砂粒	早島式
112	土師質土器	高台付椀	12.7	5.5	4.0～4.1	良好	2.5YR8/2(灰白)	砂粒	早島式
113	土師質土器	高台付椀	11.5	5.2	4.2	良好	2.5Y8/1(灰白)	砂粒	表面磨滅　早島式
114	土師質土器	高台付椀	12.7	5.5	4.5	良好	10YR8/2(灰白)	砂粒	外面磨滅　早島式
115	土師質土器	高台付椀	12.0	5.1	4.5	良好	10YR8/2(灰白)	砂粒	早島式
116	土師質土器	高台付椀		5.8		良好	10YR8/2(灰白)	砂粒	早島式
117	土師質土器	高台付椀		5.4		良好	10YR8/1(灰白)	砂粒	早島式
118	土師質土器	高台付椀		7.2		良好	2.5Y8/1(灰白)	砂粒	早島式
119	土師質土器	高台付椀		5.6		良好	10YR5/2(灰黄褐)	砂粒	表面磨滅　早島式
120	土師質土器	高台付椀		6.3		良好	2.5Y8/2(灰白)	砂粒	表面磨滅　早島式
121	土師質土器	高台付椀		6.3		良好	2.5Y8/1(灰白)	砂粒	早島式
122	土師質土器	高台付椀		6.8		良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	早島式
123	土師質土器	高台付椀		5.4		良好	N1.5/(黒)	砂粒	早島式
124	土師質土器	高台付椀		6.2		良好	10YR8/3(浅黄橙)	砂粒	早島式
125	土師質土器	高台付椀		7.6		良好	10YR8/1(灰白)	砂粒	早島式
126	土師質土器	皿	9.6	7.4	1.8	良好	10YR8/2(灰白)	砂粒	底部ヘラ切り　早島式
127	土師質土器	皿	13.5	5.8	1.4	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	磨滅　早島式
128	土師質土器	皿	7.1	5.6	1.6	良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	底部ヘラ切り　早島式
129	土師質土器	皿	7.3	5.6	2.7	良好	10YR8/2(灰白)	砂粒	底部ヘラ切り　早島式
130	土師質土器	皿	9.0	5.4	1.9	良好	10YR8/2(灰白)	砂粒	表面磨滅　早島式
131	土師質土器	皿	10.0	(7.7)	1.3～1.5	良好	2.5Y8/1(灰白)	砂粒	口縁内面に沈線　底部ヘラ切り？　早島式
132	土師質土器	皿	8.6	6.4	1.0	良好	5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	早島式
133	土師質土器	高台付碗		(7.1)		良好	2.5YR8/1(灰白)	砂粒	早島式
134	磁器	鉢	14.6				7.5Y8/1(灰白) 5Y7/1(灰白)釉	精良	白磁

溝10は溝11の西に位置し、下庄Ia区北東隅から北西方向にほぼ直線状に延びる幅270cm、深さ40cmを測る溝である。溝11を切り、北東から南西方向に溝10に流れ込むような溝も検出された。底のレベルは、南から北に向け低くなっていくが、土層断面図F-F′付近で一度高くなっている。土層断面図D-D′で、第４層は溝９、E-E′で第９と10層は溝12、F-F′では第15と16層が溝９、第13と14層は溝13の埋土である。

出土遺物は、**111～125**と**133**の早島式の高台付椀と**126～132**の皿、**134**の白磁の鉢がある。**132～134**は、下庄Ia区側の出土遺物である。**112**は溝の底面に伏せられた状態で、**113**は第８層の底部に伏せられた状態で、**115**は溝の底面に垂直に立った状態でそれぞれ出土した。13世紀中葉の遺構であると考える。（築地）

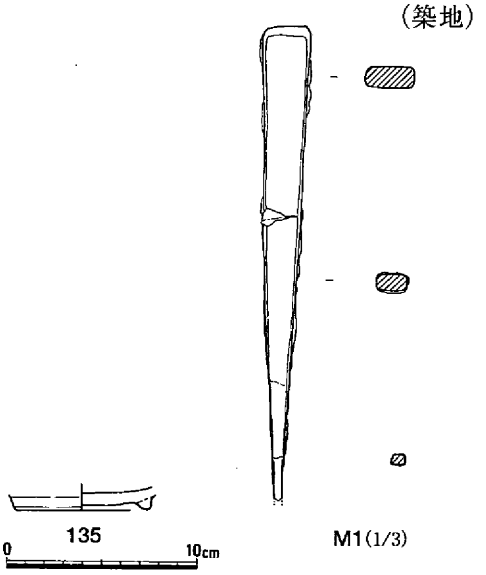
溝11

溝11は溝10の東に位置し、これに並行して延びる幅40cm、深さ10cmを測る溝である。南側は、調査区外へ延びるが、北側は溝14に切られ、それ以北では検出していない。出土遺物は、早島式の土器片が検出されている。遺構の時期は、中世である。（築地）



溝12

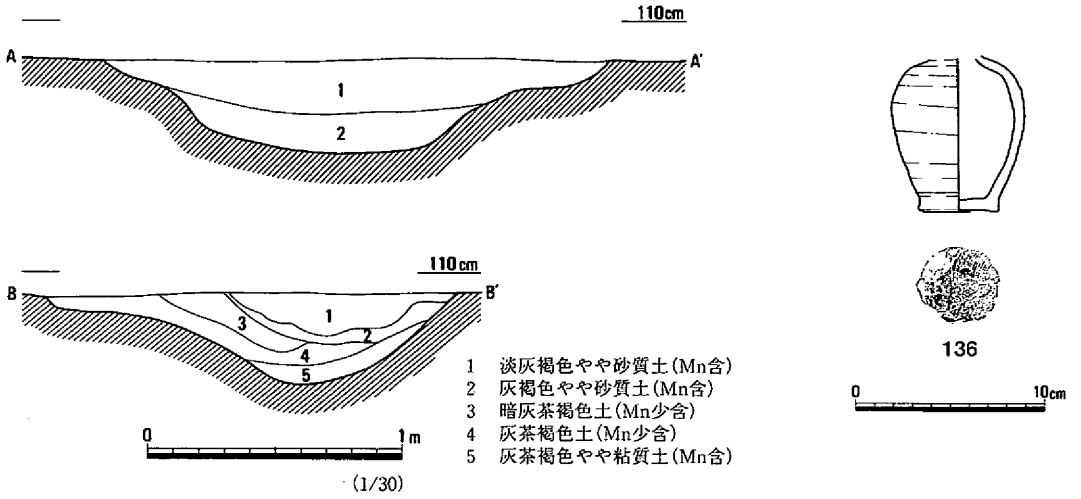
溝12は溝10の東に位置し、それに併走する幅70cm、深さ28cmを測る溝である。溝は９・10・13の溝と重複し、溝９を切り、溝13には切られている。出土遺物は、**135**の早島式の高台付椀馬鍬の歯**M１**がある。（築地）



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
135	土師質土器	高台付椀		7.0		良好	10YR6/1(褐灰)	砂粒	早島式

掲載番号	器種	材質	法量(mm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	特徴・備考
M1	馬鍬の歯	鉄	(187.8)	(19.9)	(10.4)	(43.6)	

溝13



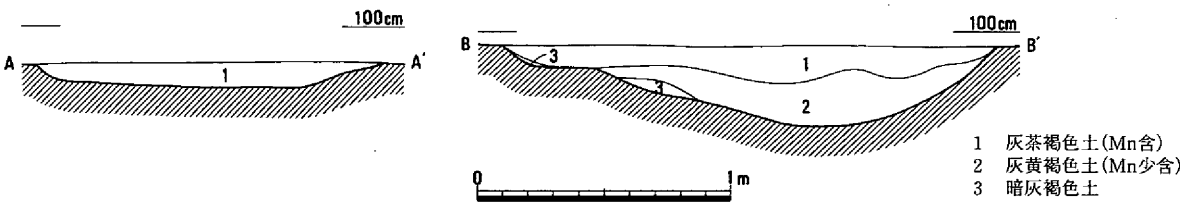
(1/30)

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
136	須恵器	瓶		4.1		良好	N5/(灰)	精良	ロクロ右　底部糸切り

溝13は溝14の南東側に位置し、北東から南西方向にほぼ直線状に延びる幅200cm、深さ37cmを測る溝である。溝13は、溝10～12と重複している。溝10の土層断面図F-F′の第13と14層が、溝13に相当する。流れの方向は、底のレベルや、埋土の状況から、北東から南西と考えられる。

出土遺物には、早島式の土器片や須恵器片などが認められる。**136**の瓶は口縁部を欠いてはいるものの、胴部は完形状態で出土した。底部には、糸切りが認められる。遺物は、古代の遺物を含むが、中世の遺構であると考えられる。　(築地)

溝14



(1/30)

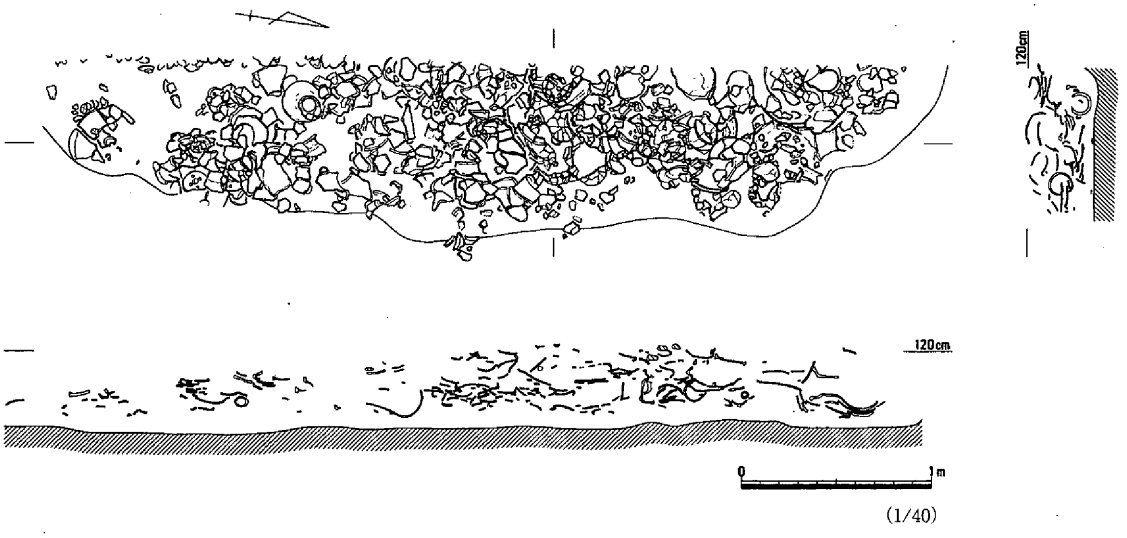
溝14は溝13の北西側に位置し、溝13と併走するように検出された幅200cm、深さ33cmを測る溝である。溝14は、溝9～11と重複し、切り合い関係からは、溝10が新しく、溝11は古くなる。北側は、近世の下がりにより上部を削平されている。この削平されたところでは、埋土は灰茶褐色土の第1層が認められている。削平されていない南側には、その層の下に別の埋土が確認された。この埋土が認められる付近からは、溝が深くなっている。溝の北側にある平坦部はほとんどが、1つの層で埋まっている。北東から南西に向かい底が下がっていることから、流れの方向は北東から南西と考えられる。

出土遺物には須恵器片などがあるが、どれも小片で、図化するに至らなかった。遺物や溝の切り合い関係などから中世の遺構であると推定される。このことから、中～近世の溝の新旧を想定すると、溝11→溝9→溝12→溝13→溝14→溝8→溝10の順に、新しくなるものと考えられる。　(築地)

（８）土器溜り

Ib区の北西端と西壁際の二ヵ所に認められた。いずれの土器溜りとも、耕作土下に認められる床土の直下から検出されている。検出時の状態は、土器の露出面が一定の高さに揃っていたことから、耕作等による削平を受けていたと判断できる。土器の出土状態は完形品を多く含み、遺物が集中し、その密度も濃く間に入る土も少ない内容のものと、完形品を含むが遺物の密度は濃くなく、比較的広がるように認められるものとがある。いずれの土器溜りとも一部凹み状を呈するが遺物検出下面においても明確な掘り込みなどは認めることはできなかった。（下澤）

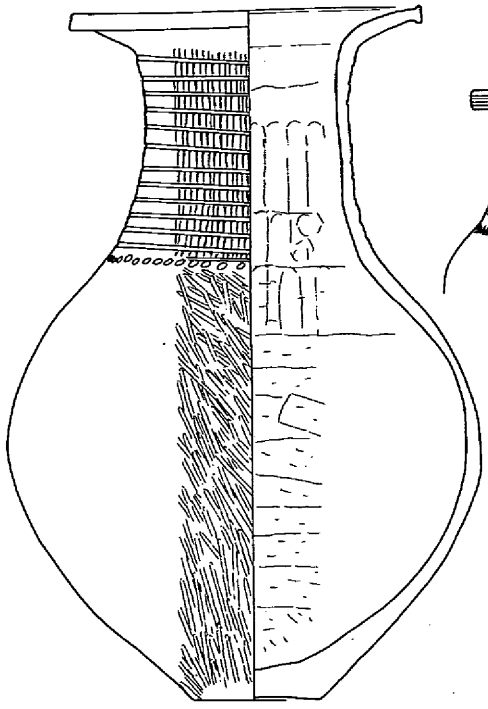
土器溜り１



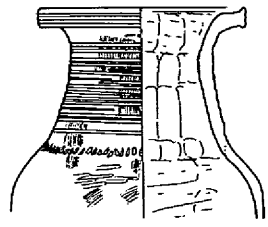
(1/40)

土器溜り１は土壙19の南西にあり、下庄Ib区西端ほぼ中央北側、現水田面下約15cmで検出された遺構である。調査区の端であるために、全体の規模は不明だが、調査区内ではほぼ半楕円形の広がりを持ち、長軸径500cm、短軸半径100cm、深さ35cmを測る。北東側に溝10、南端に溝８が隣接し、検出状態から、これらの溝によって一部削られているものと考えられる。さらに、上部は遺物とともにほぼ水平になっていることから、削平されていることが想定され、調査区内での規模も本来は、もう少し広がっていたものと推測される。そして、西側にもかなりの広がりを持つものと思われる。遺構の底部は、弥生の包含層の凹みに遺構が生じたような状況にある。土層の状態は、土器の密度が高く、明確には確認できなかった。しかし、土器の間に見られる土はほとんどが、灰色土(炭を含む)であった。また、遺構の底部近くで土器の量が少なくなると、黄褐色やや砂質土(マンガンを多く含む)層が、所々で観察された。出土遺物の量は、コンテナ55箱に及ぶ。土器の出土状況は、遺構の上面から深さ10cmほどでは、やや小さめな破片が多く、それより深くなると、残存率の高い、大きめの破片も多く見られるようになる。出土した土器の多くは、磨滅や剝落のために調整が不明瞭である。一辺が1～20cm大の角礫や川原石も遺構全体で検出された。石の量はコンテナにほぼ１箱であった。接合資料の多くは、南側にあるものの方が低い位置にあり、そのほとんどが垂直方向10cm以内、水平方向30cm以内に位置していた。最も離れたもので垂直方向に22cm、水平方向に150cmであった。

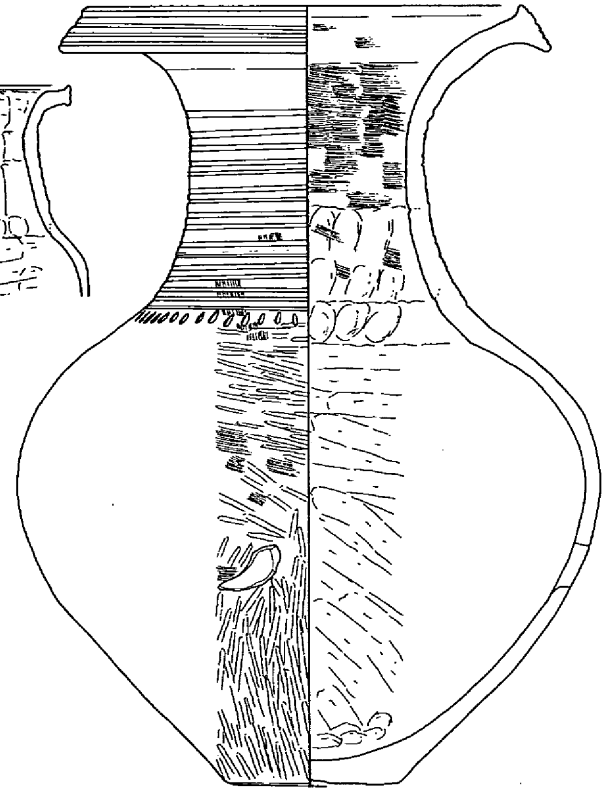
出土遺物は、137～326である。これらの遺物のうちで、ほぼ復元できたのは、153と156の長頸壺、177の壺、180の無頸壺、193の甕、248と250の高杯、275の鉢、309の製塩土器などである。137～165は長頸壺で、そのほとんどは口縁部に凹線を巡らせ、頸部にハケを施し、沈線を描いている。そして、



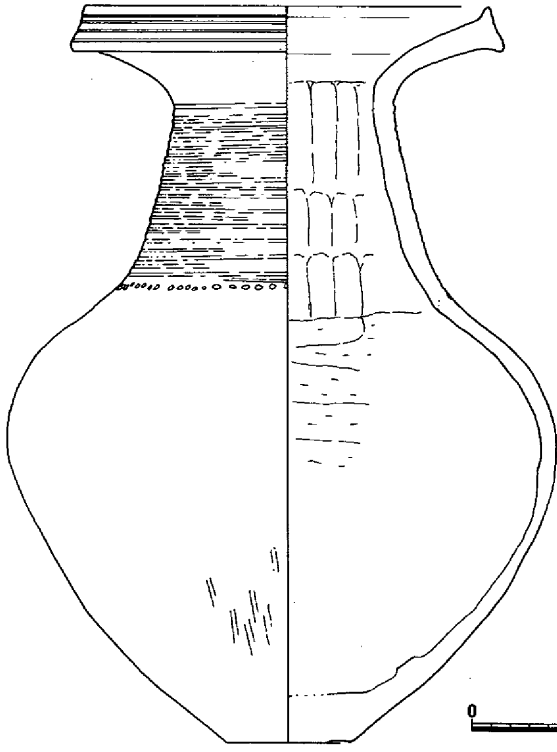
137



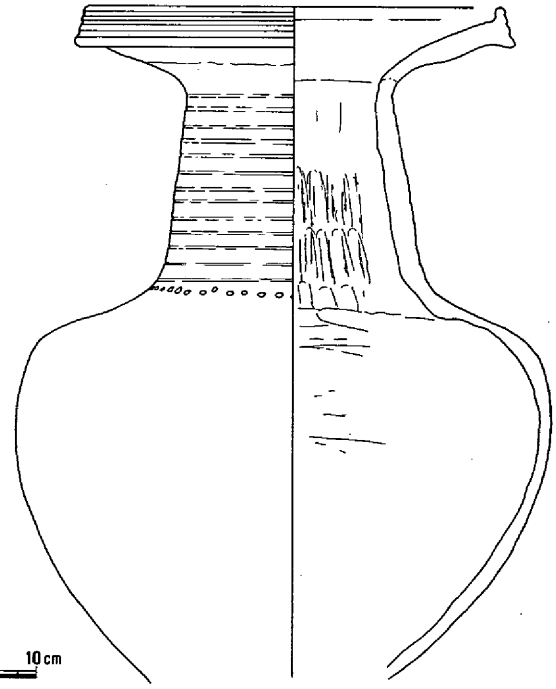
138



139



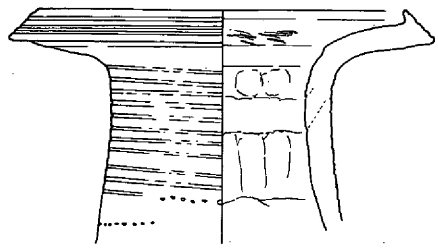
140



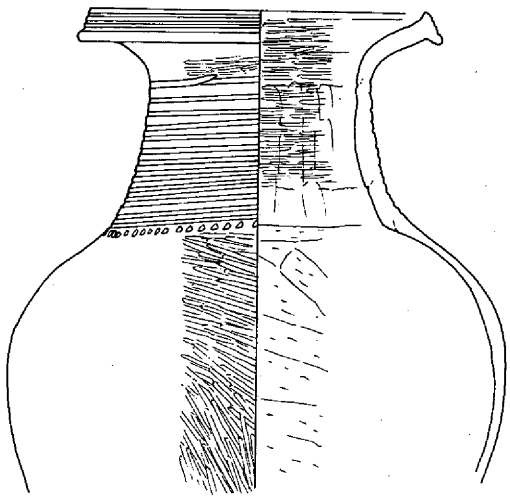
141

0　10cm

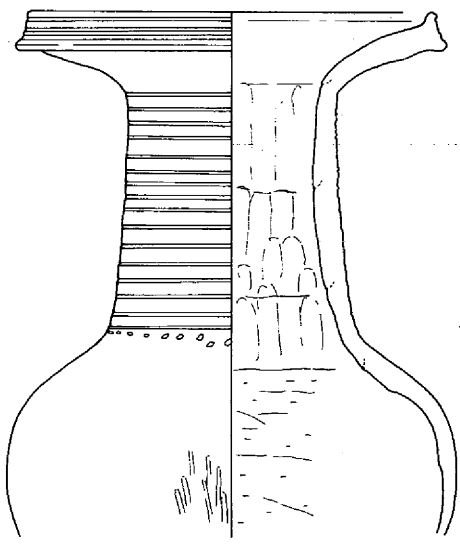
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
137	弥生土器	長頸壺	18.4	6.7	36.7	良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒(多)	頸部沈線は螺旋か不詳
138	弥生土器	長頸壺	10.9			良好	5YR7/3(にぶい橙)	砂粒(多)	頸部沈線は螺旋
139	弥生土器	長頸壺	23.1	8.2	41.3	良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒(多)	胴部下半に焼成後の穿孔　頸部沈線磨滅で不詳
140	弥生土器	長頸壺	21.3	6.6	39.0	良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	頸部沈線は螺旋か不詳
141	弥生土器	長頸壺	21.8			良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	頸部沈線は不詳



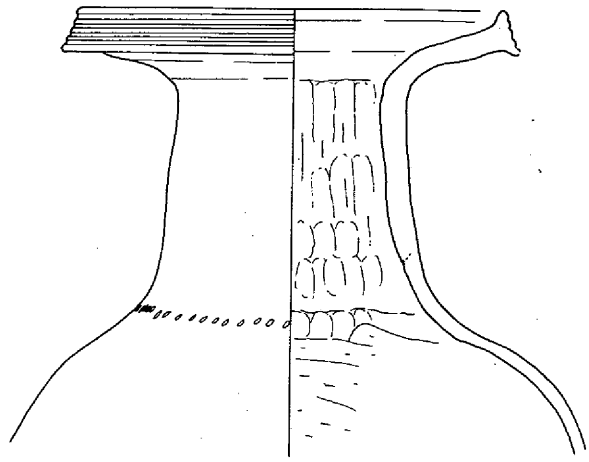
142



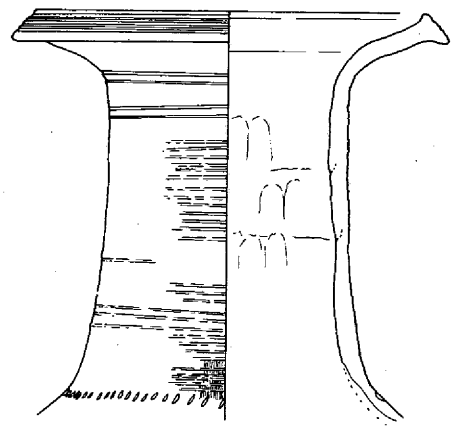
144



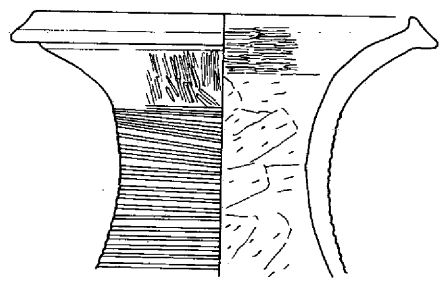
146



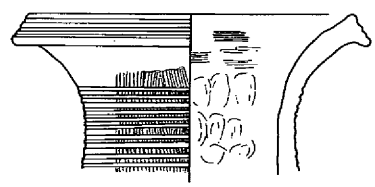
143



145

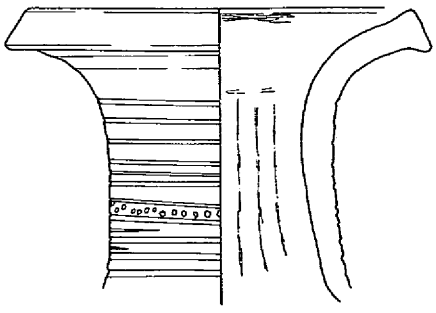


147

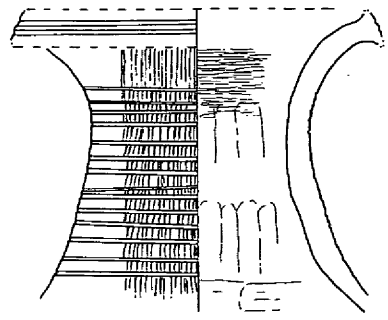


148

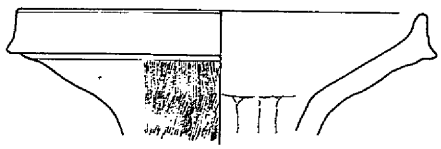
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
142	弥生土器	長頸壺	19.5			良好	2.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒(多)	頸部沈線は螺旋
143	弥生土器	長頸壺	22.2			良好	5YR6/6(橙)	砂粒	頸部に沈線あるが不詳　口唇部に凹線
144	弥生土器	長頸壺	17.8			良好	2.5YR4/4(にぶい赤褐)	砂粒	頸部沈線は単線
145	弥生土器	長頸壺	20.7			良好	2.5YR6/6(橙)	砂粒	頸部沈線は螺旋か不詳
146	弥生土器	長頸壺	21.4			良好	2.5YR6/6(にぶい橙)	砂粒	頸部沈線は螺旋か不詳
147	弥生土器	長頸壺	19.7			良好	5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒(多)	頸部沈線は螺旋
148	弥生土器	長頸壺	16.8			良好	7.5YR8/3(浅黄橙)	砂粒	



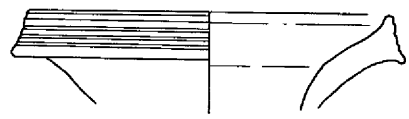
149



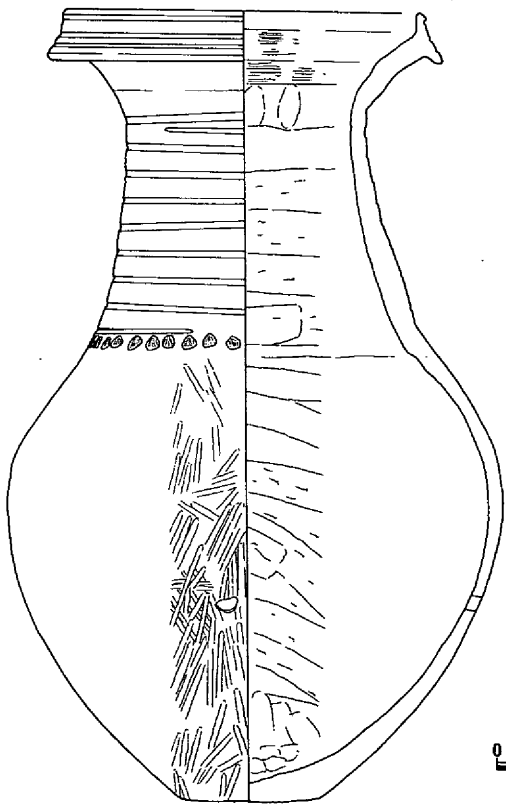
150



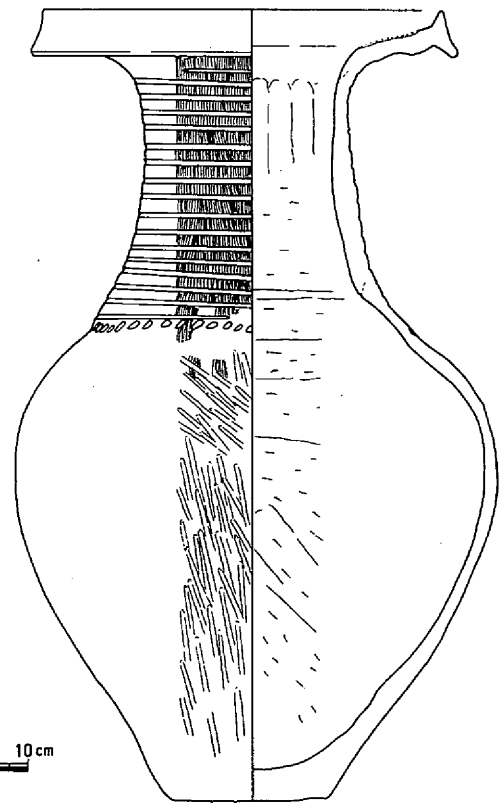
151



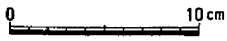
152



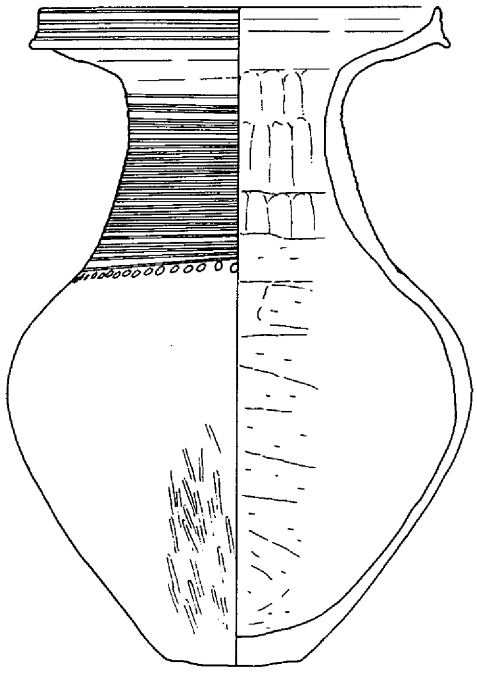
153



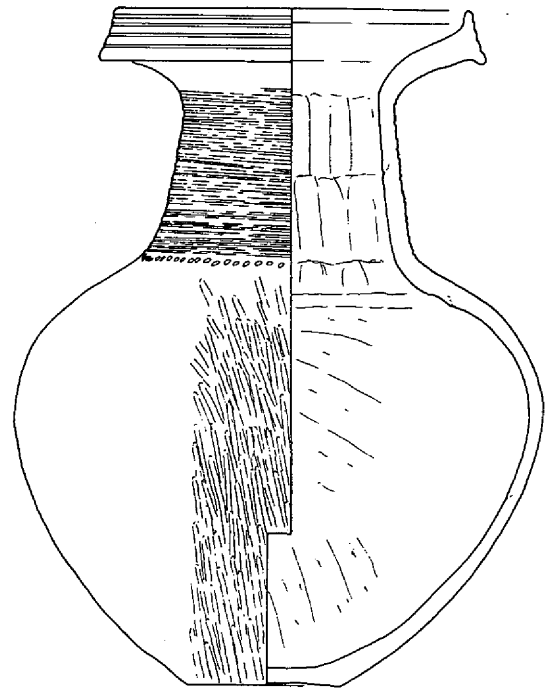
154



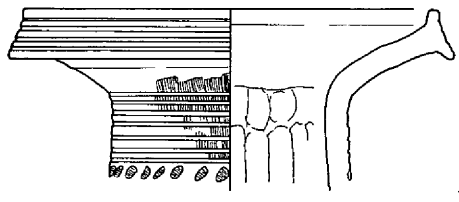
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
149	弥生土器	長頸壺	(19.8)			良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	頸部沈線は単線、間に刺突文
150	弥生土器	長頸壺	18.1			良好	5YR6/6(橙)	砂粒(多)	頸部沈線は螺旋
151	弥生土器	長頸壺	21.2			良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	
152	弥生土器	長頸壺	19.3			良好	5YR6/6(橙)	砂粒	口縁部に凹線
153	弥生土器	長頸壺	18.6	7.3	42.0	良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒(多)	頸部沈線は螺旋　胴部下半に穿孔
154	弥生土器	長頸壺	21.2	18.4	41.9	良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	頸部沈線は螺旋



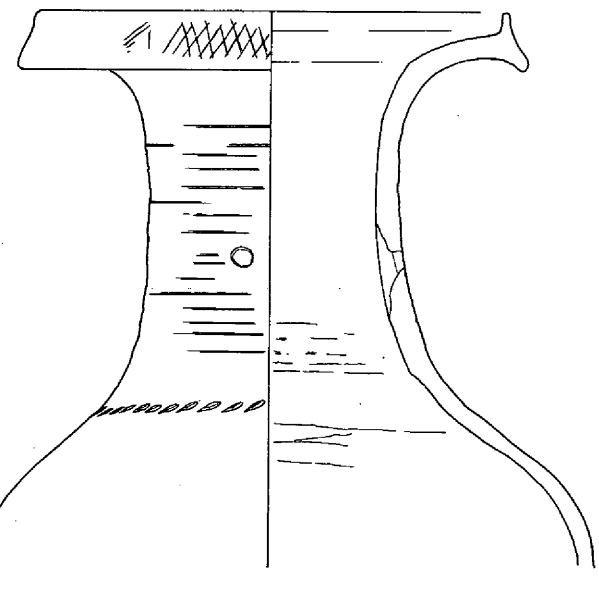
155



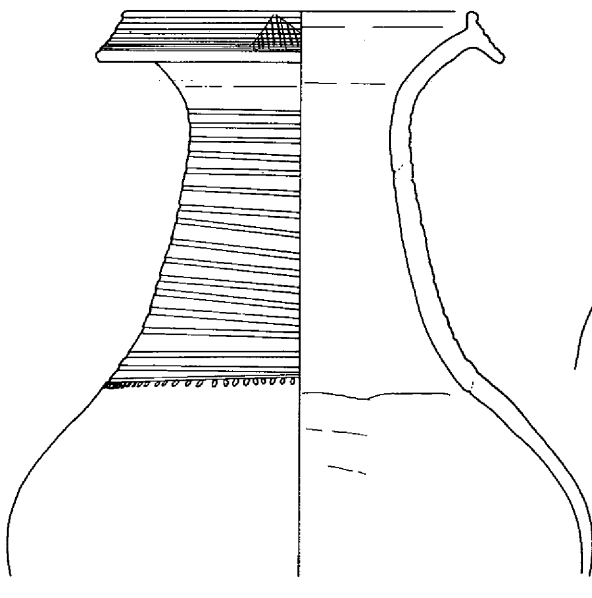
156



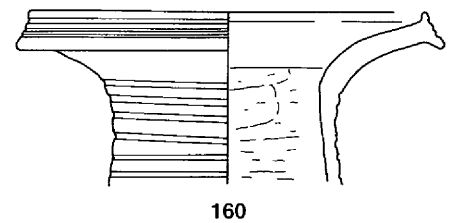
157



158



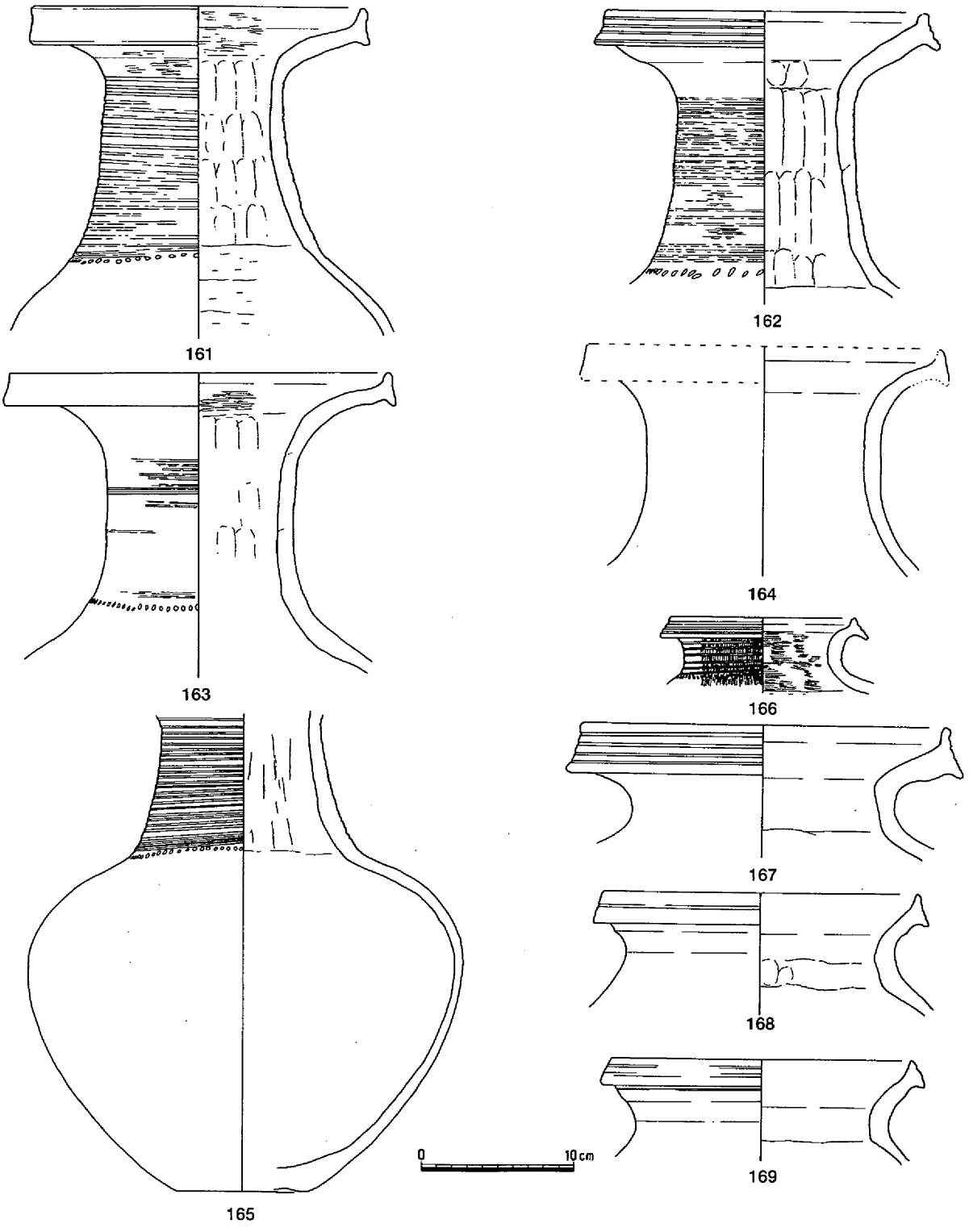
159



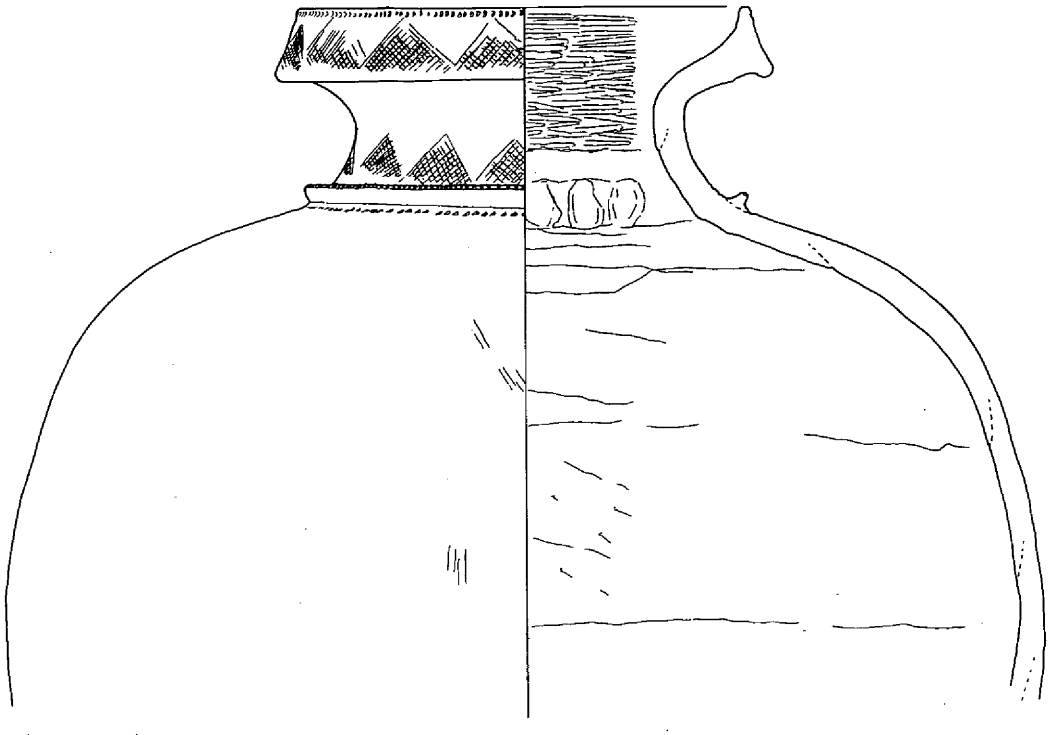
160

0　10cm

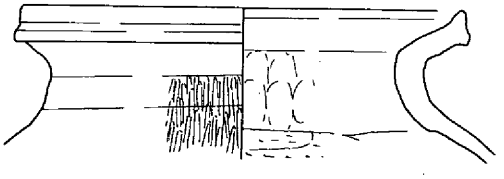
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
155	弥生土器	長頸壺	21.0	7.2	35.8	良好	7.5YR8/3(浅黄橙)	砂粒(多)	頸部沈線は螺旋か不詳
156	弥生土器	長頸壺	18.6	8.0	35.8	良好	10YR4/4(赤褐)	砂粒	頸部沈線は螺旋
157	弥生土器	長頸壺	21.4			良好	5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	頸部沈線は螺旋か不詳
158	弥生土器	長頸壺	24.7			良好	2.5YR5/6(明赤褐)	砂粒	口縁部に斜格子文　器面風化が顕著　頸部に穿孔
159	弥生土器	長頸壺	18.3			良好	2.5YR5/6(明赤褐)	砂粒	頸部沈線は螺旋　口縁部に鋸歯文
160	弥生土器	長頸壺	21.0			良好	5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	頸部沈線は螺旋



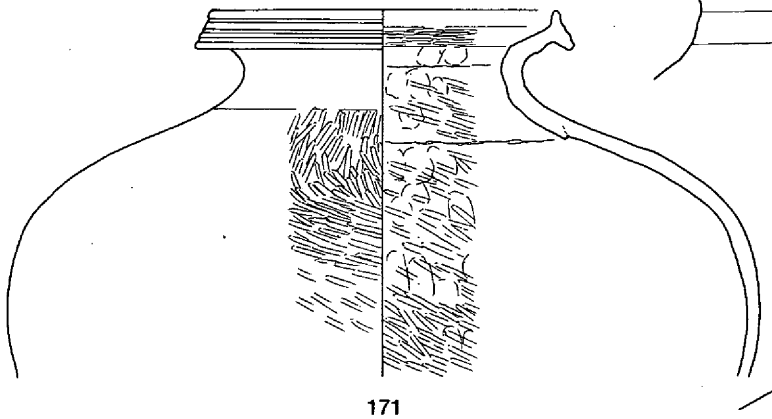
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
161	弥生土器	長頸壺	21.7			良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	頸部沈線は単線
162	弥生土器	長頸壺	21.0			良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒(多)	頸部に沈線はあるが不詳
163	弥生土器	長頸壺	24.6			良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	頸部に沈線はあるが螺旋か不詳
164	弥生土器	長頸壺	(23.1)			良好	2.5YR5/6(明赤褐)	砂粒	器面剥離顕著
165	弥生土器	長頸壺		9.8		良好	5YR6/6(橙)	砂粒	頸部沈線は螺旋　丹塗り
166	弥生土器	壺	12.0			良好	7.5YR7/5(にぶい橙)	砂粒	
167	弥生土器	壺	23.9			良好	5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線
168	弥生土器	壺	20.6			良好	2.5YR5/6(明赤褐)	砂粒	口縁部に凹線
169	弥生土器	壺	19.7			良好	5YR5/6(明赤褐)	砂粒	



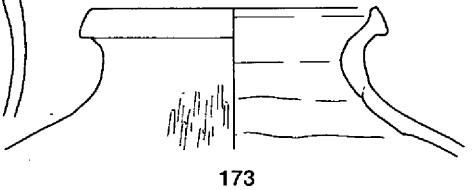
170



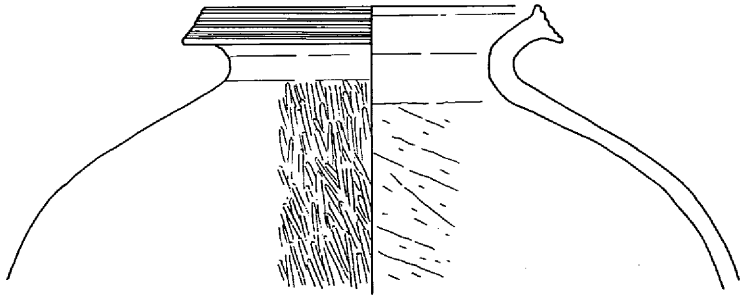
172



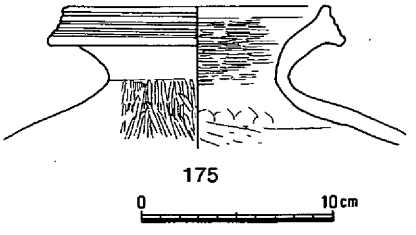
171



173



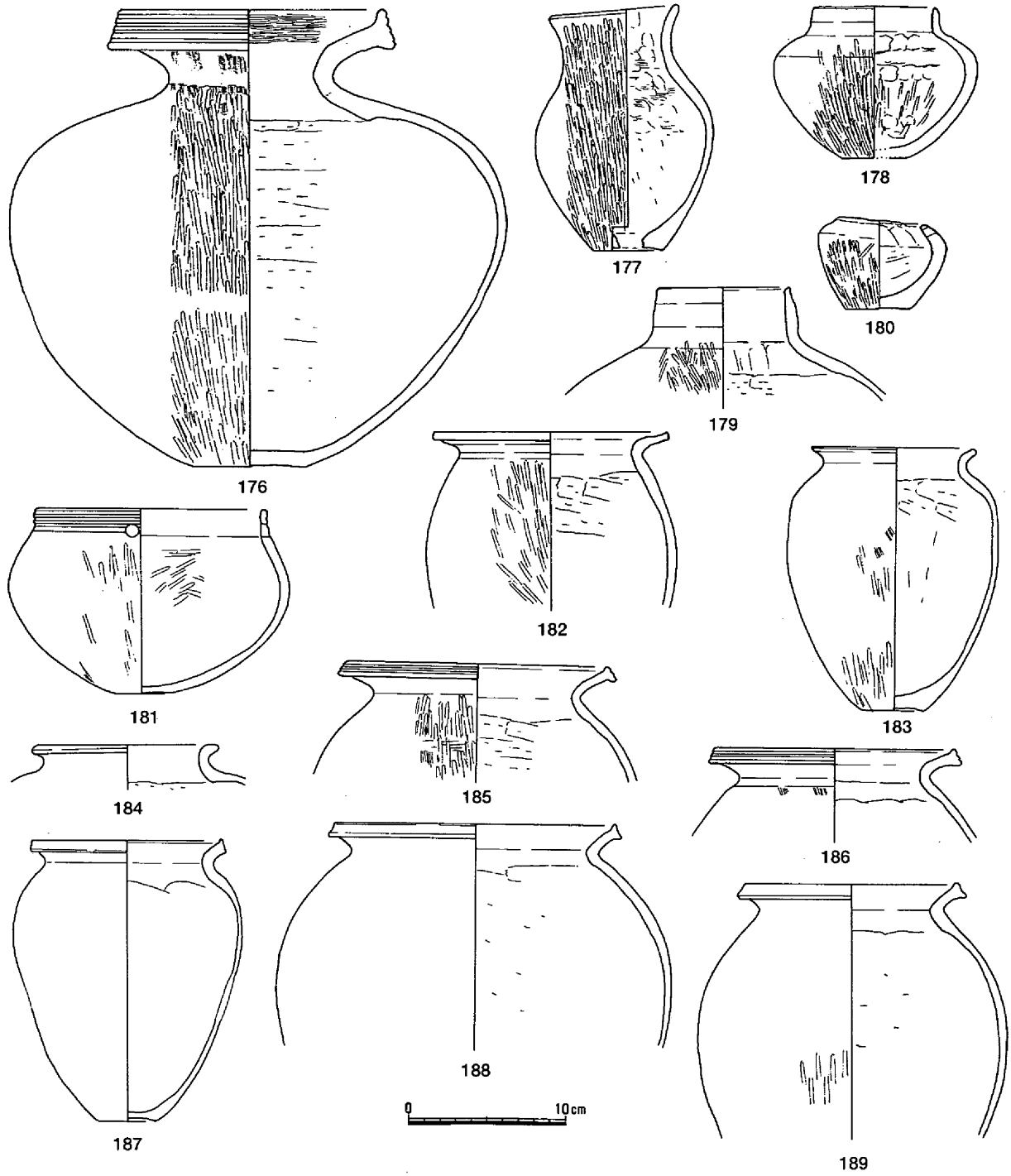
174



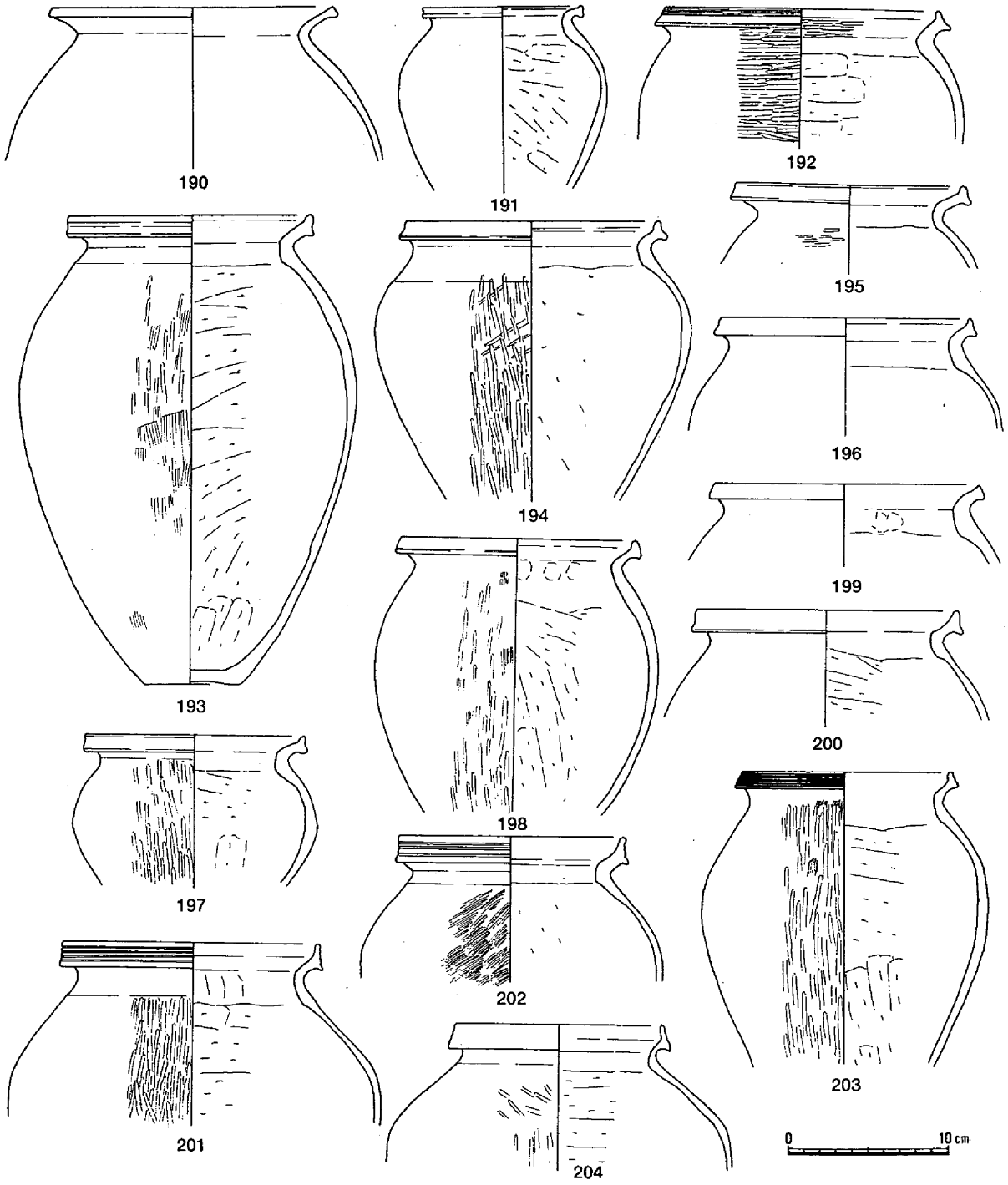
175

0　10cm

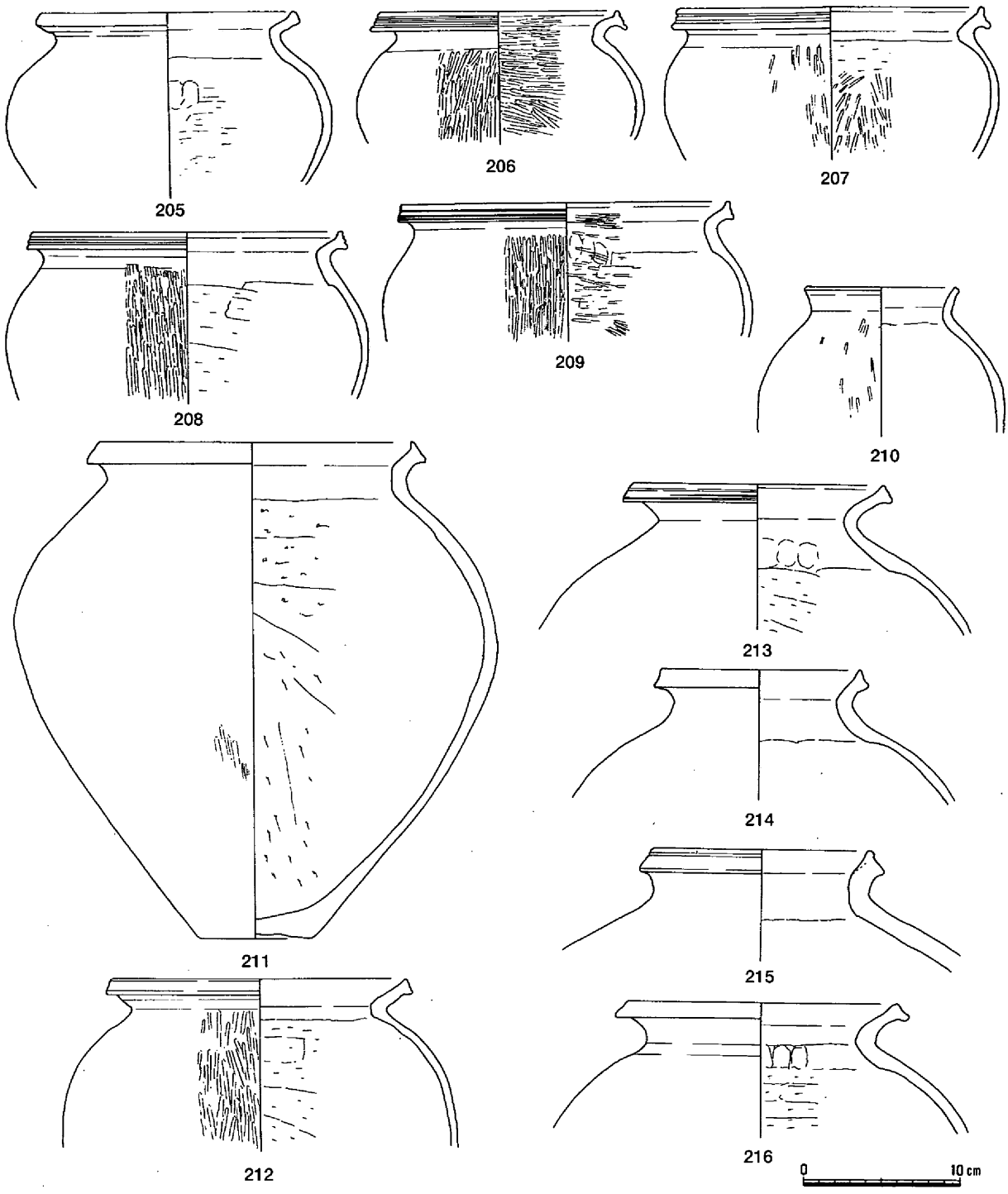
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
170	弥生土器	壺	22.9			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	肩部に凸帯　口縁部と頸部に鋸歯文
171	弥生土器	壺	18.2			良好	5YR6/6(橙)	砂粒	
172	弥生土器	壺	23.8			良好	5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒	
173	弥生土器	壺	14.9			良好	5YR5/6(明赤褐)	砂粒	
174	弥生土器	壺	17.5			良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線５本
175	弥生土器	壺	13.7			良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線



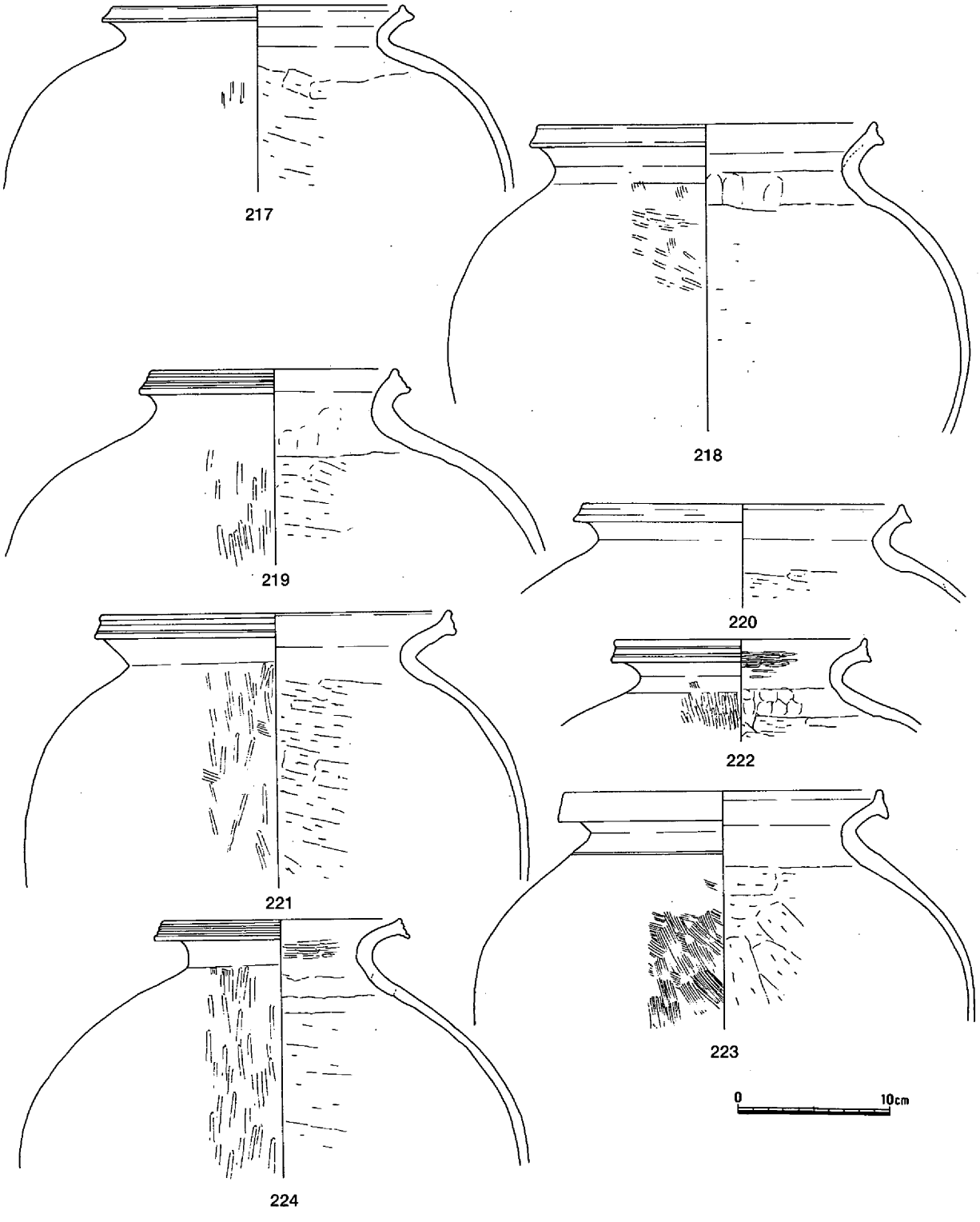
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
176	弥生土器	壺	16.4	7.0	29.4	良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線４本
177	弥生土器	壺	8.3	4.6	15.8	良好	2.5YR4/4(にぶい赤褐)	砂粒	底部に焼成後の穿孔
178	弥生土器	直口壺	9.7	4.2	9.7	良好	5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒(多)	
179	弥生土器	直口壺	8.2			良好	5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒	
180	弥生土器	無頸壺	6.0	4.1	5.9	良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に１対の孔
181	弥生土器	広口壺	14.4	3.5	12.0	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒(多)	口縁部に孔・凹線
182	弥生土器	甕	14.8			良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒(多)	
183	弥生土器	甕	10.3	4.1	16.9	良好	5YR6/4(にぶい褐)	砂粒(多)	上げ底
184	弥生土器	甕	11.1			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	
185	弥生土器	甕	16.6			良好	5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒(多)	口縁端面に凹線
186	弥生土器	甕	15.5			良好	5YR4/8(赤褐)	砂粒	口縁部に凹線３本
187	弥生土器	甕	12.0	3.7	18.1	良好	5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒	
188	弥生土器	甕	17.8			良好	5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒	
189	弥生土器	甕	15.6			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	



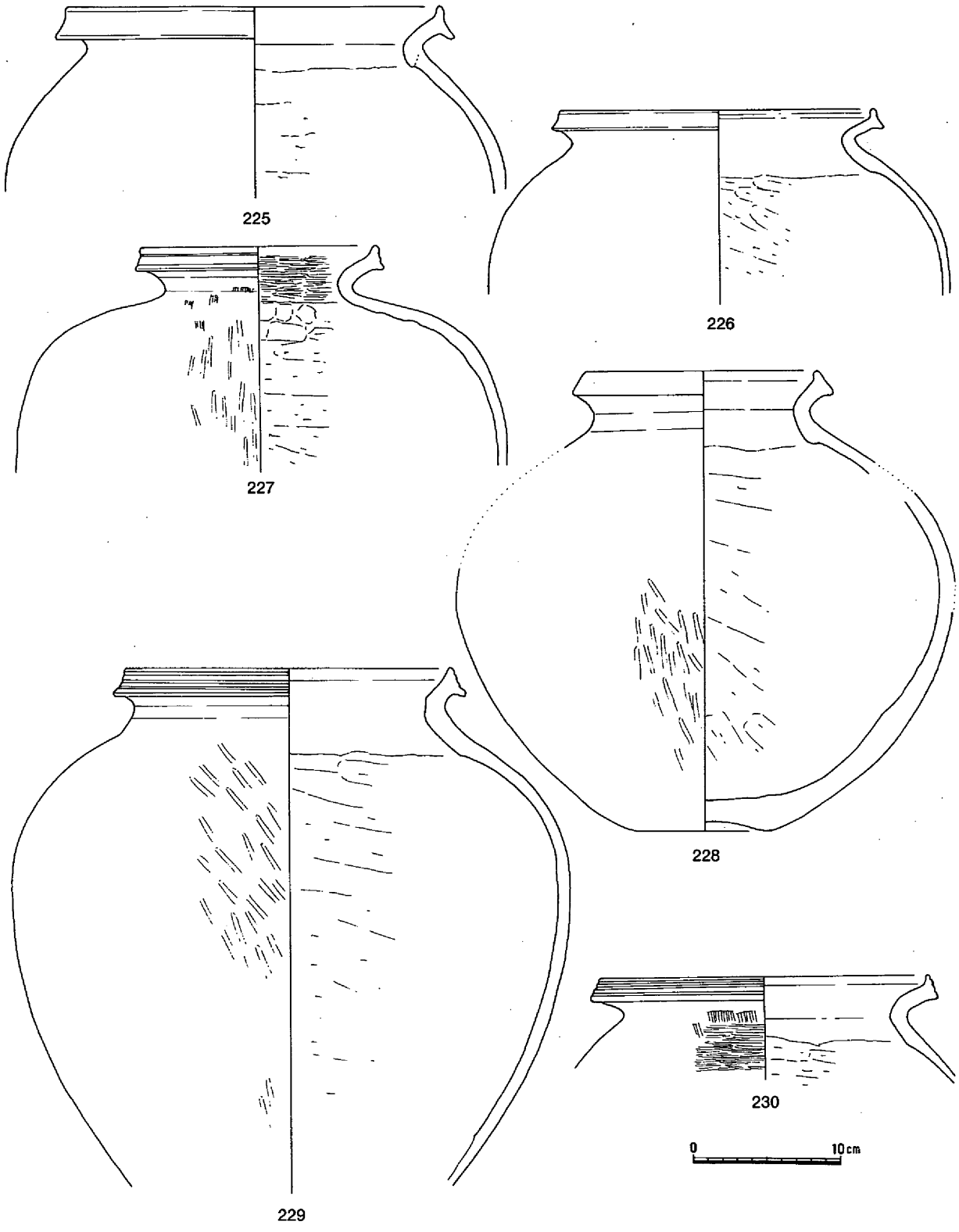
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
190	弥生土器	甕	17.8			良好	7.5Y R5/4(にぶい褐)	砂粒	
191	弥生土器	甕	10.1			良好	10Y R7/2(灰白)	砂粒	
192	弥生土器	甕	17.2			良好	2.5Y R5/4(にぶい赤褐)	砂粒	
193	弥生土器	甕	15.3	6.1	29.7	良好	7.5Y R7/3(にぶい橙)	砂粒	
194	弥生土器	甕	15.8			良好	5Y R4/4(にぶい赤褐)	砂粒	
195	弥生土器	甕	14.3			良好	5Y R5/6(明赤褐)	砂粒	
196	弥生土器	甕	15.7			良好	7.5Y R7/3(にぶい橙)	砂粒	
197	弥生土器	甕	13.8			良好	7.5Y R6/4(にぶい橙)	砂粒	
198	弥生土器	甕	14.8			良好	7.5Y R7/3(にぶい橙)	砂粒	
199	弥生土器	甕	16.7			良好	5Y R5/6(明赤褐)	砂粒	
200	弥生土器	甕	16.2			良好	10Y R8/2(灰白)	砂粒(多)	
201	弥生土器	甕	16.3			良好	5Y R7/4(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線４本
202	弥生土器	甕	14.2			良好	5Y R5/6(明赤褐)	砂粒	口縁部に凹線３本
203	弥生土器	甕	15.1			良好	10Y R7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に沈線
204	弥生土器	甕	13.0			良好	5Y R5/4(にぶい赤褐)	砂粒	口縁部に凹線



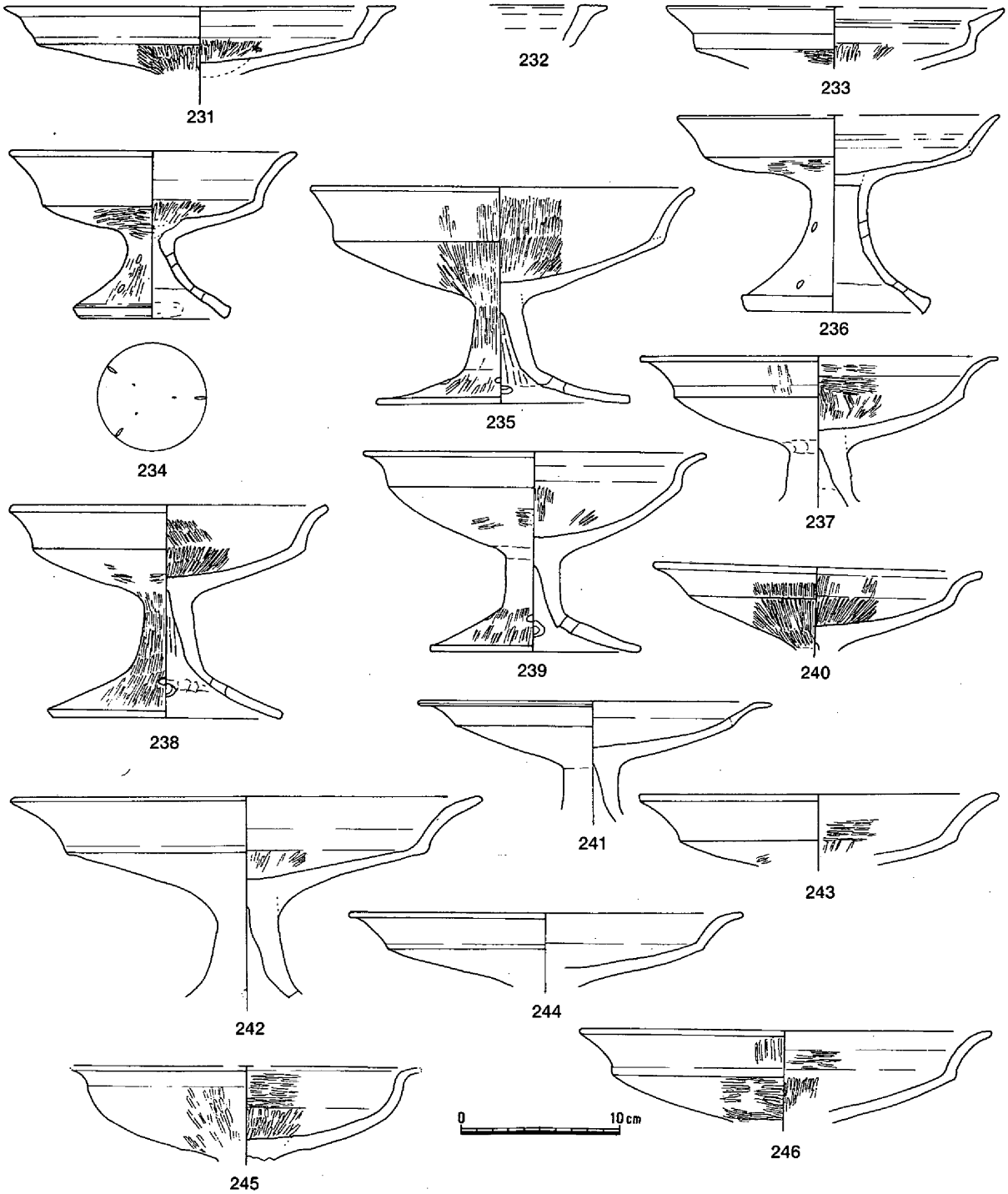
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
205	弥生土器	甕	16.0			良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	
206	弥生土器	甕	15.1			良好	10R4/4(赤褐)	砂粒	口縁部に凹線
207	弥生土器	甕	19.4			良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線2本
208	弥生土器	甕	19.6			良好	5YR6/6(橙)	砂粒	口縁部に凹線
209	弥生土器	甕	20.9			良好	2.5YR5/6(明赤褐)	砂粒(多)	口縁部に凹線
210	弥生土器	甕(?)	9.4			良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	
211	弥生土器	甕	19.9	7.0	31.9	良好	10YR5/3(にぶい黄褐)	砂粒	
212	弥生土器	甕	18.7			良好	5YR7/6(橙)	砂粒	
213	弥生土器	甕	15.9			良好	5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線3本
214	弥生土器	甕	12.9			良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒	
215	弥生土器	甕	13.9			良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	
216	弥生土器	甕	17.2			良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	



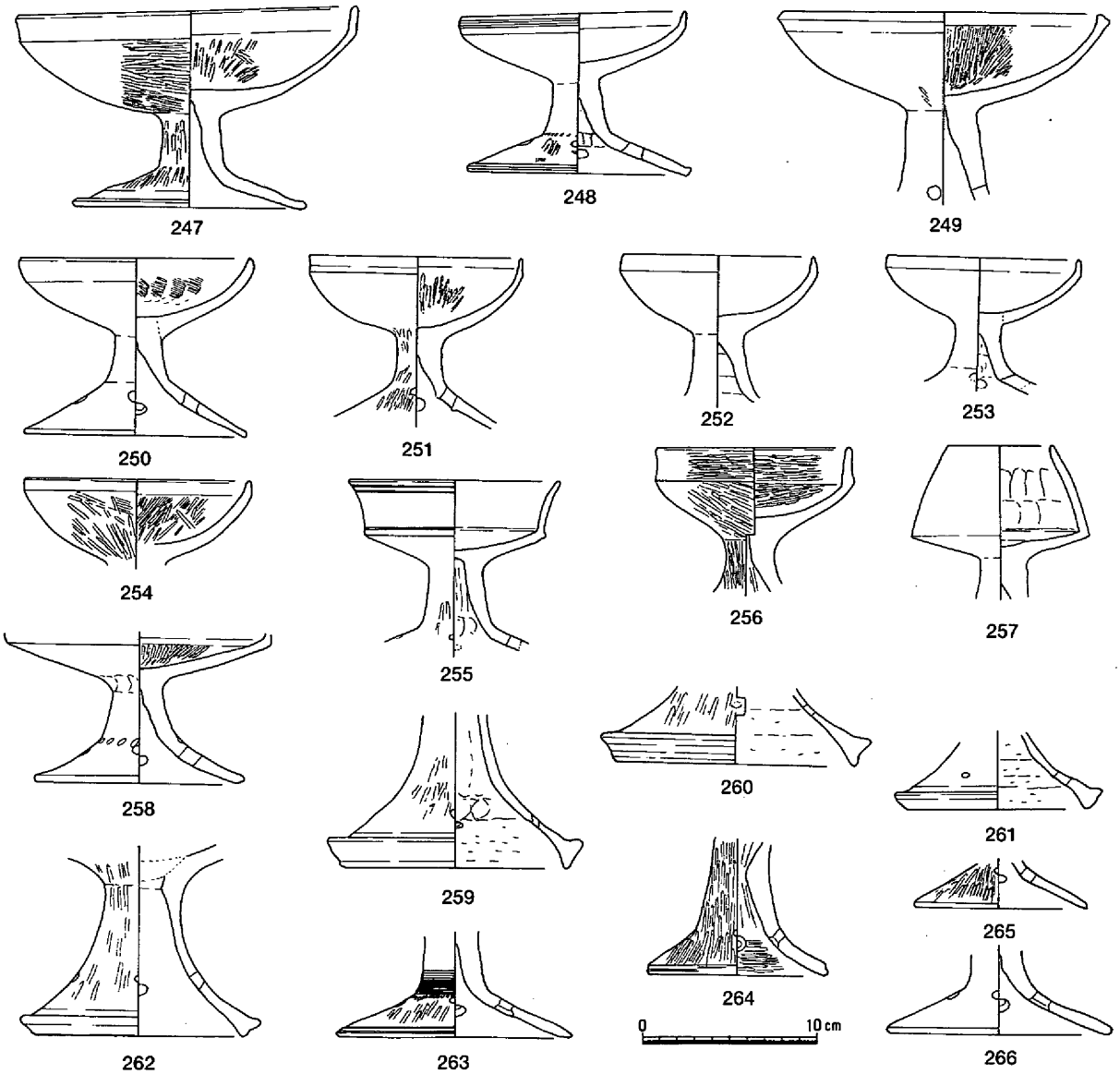
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
217	弥生土器	甕	19.1			良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	
218	弥生土器	甕	22.0			良好	5YR6/6(橙)	砂粒	
219	弥生土器	甕	16.0			良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線
220	弥生土器	甕	20.9			良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	
221	弥生土器	甕	23.0			良好	5YR6/6(橙)	砂粒	
222	弥生土器	甕	16.4			良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	
223	弥生土器	甕	20.8			良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	肩部に沈線
224	弥生土器	甕(?)	15.6			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線３本



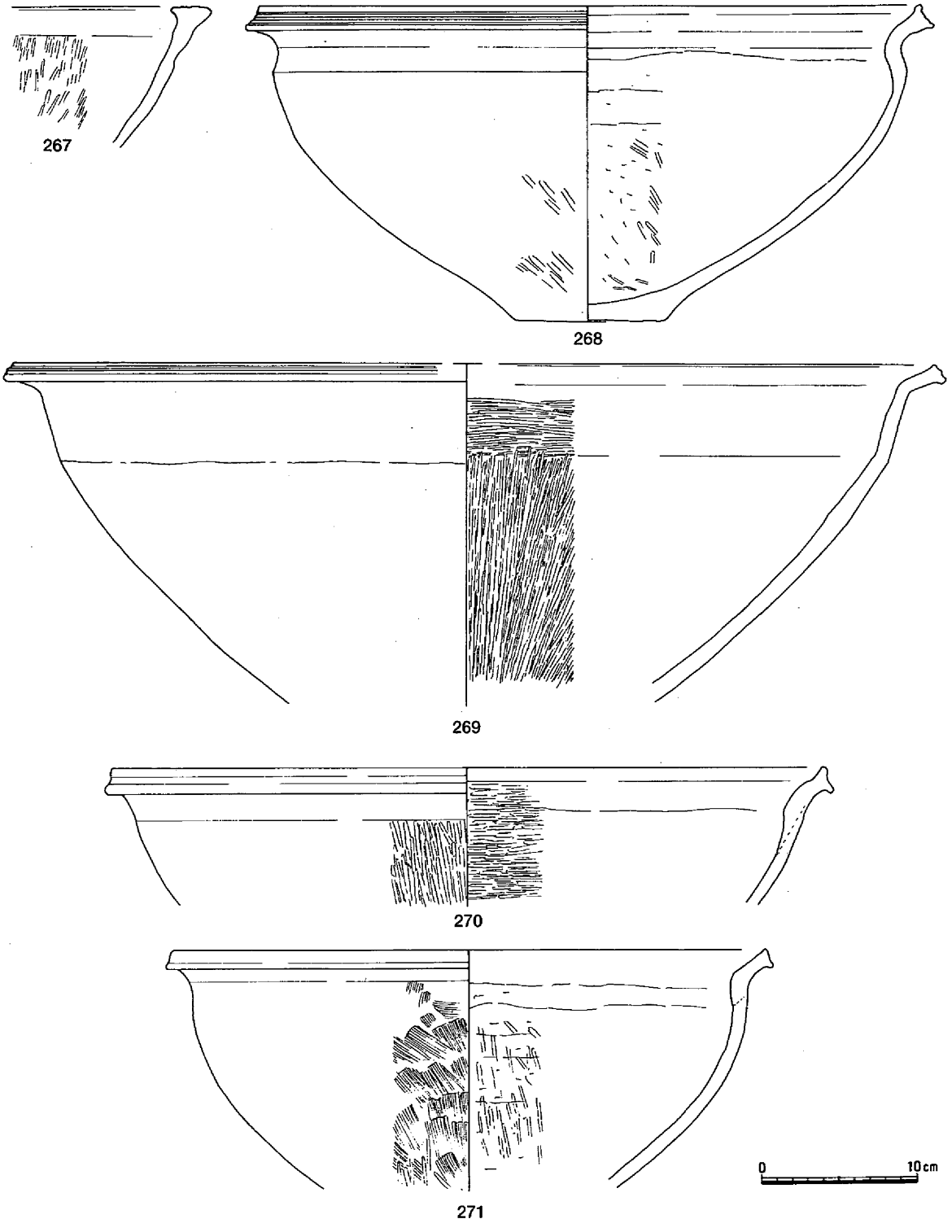
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
225	弥生土器	甕	25.0			良好	5YR5/6(明赤褐)	砂粒	
226	弥生土器	甕	21.2			良好	5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒	
227	弥生土器	甕	16.1			良好	2.5YR5/6(明赤褐)	砂粒	
228	弥生土器	甕(?)	15.4	9.1	(31.4)	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	
229	弥生土器	甕	21.9			良好	5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線３本
230	弥生土器	甕	22.2			良好	10YR8/2(灰白)	砂粒	口縁部に凹線３本



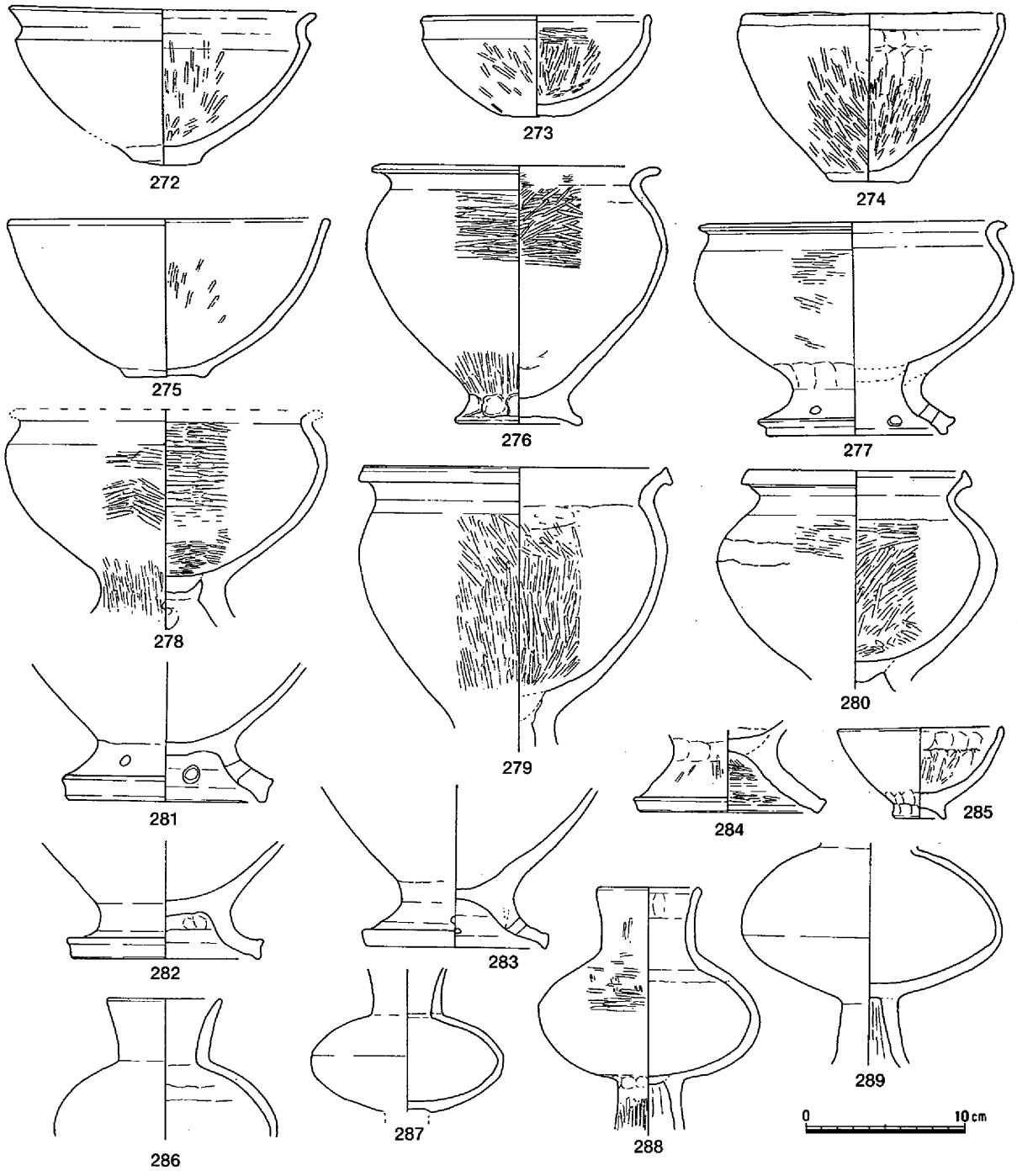
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
231	弥生土器	高杯	24.8			良好	2.5Y R5/6(明赤褐)	砂粒	口縁端面に凹線
232	弥生土器	高杯				良好	10Y R6/2(灰黄褐)	砂粒	口縁端面に凹線
233	弥生土器	高杯	(21.1)			良好	5Y R7/4(にぶい橙)	砂粒	
234	弥生土器	高杯	18.1	9.4	10.6	良好	5Y R6/6(橙)	砂粒	裾部に透し２段
235	弥生土器	高杯	24.0	15.9	14.0	良好	2.5Y R5/4(にぶい赤褐)	砂粒	
236	弥生土器	高杯	(20.2)	11.0	(12.8)	良好	10Y R5/6(赤)	砂粒	裾部に透し２段
237	弥生土器	高杯	22.3			良好	2.5Y R6/6(橙)	砂粒	
238	弥生土器	高杯	19.9	14.6	13.6	良好	5Y R6/4(にぶい橙)	砂粒	
239	弥生土器	高杯	21.6	13.1	12.8	良好	10Y R5/6(赤)	砂粒	
240	弥生土器	高杯	20.5			良好	7.5Y R8/4(浅黄橙)	砂粒(多)	
241	弥生土器	高杯	22.0			良好	5Y R5/6(明赤褐)	砂粒(多)	
242	弥生土器	高杯	29.4			良好	2.5Y R6/4(にぶい橙)	砂粒	
243	弥生土器	高杯	22.5			良好	2.5Y R5/6(明赤褐)	砂粒	
244	弥生土器	高杯	24.9			良好	10Y R7/3(にぶい黄橙)	砂粒	
245	弥生土器	高杯	22.0			良好	10Y R7/3(にぶい黄橙)	砂粒	
246	弥生土器	高杯	15.6			良好	2.5Y R6/6(橙)	砂粒(多)	



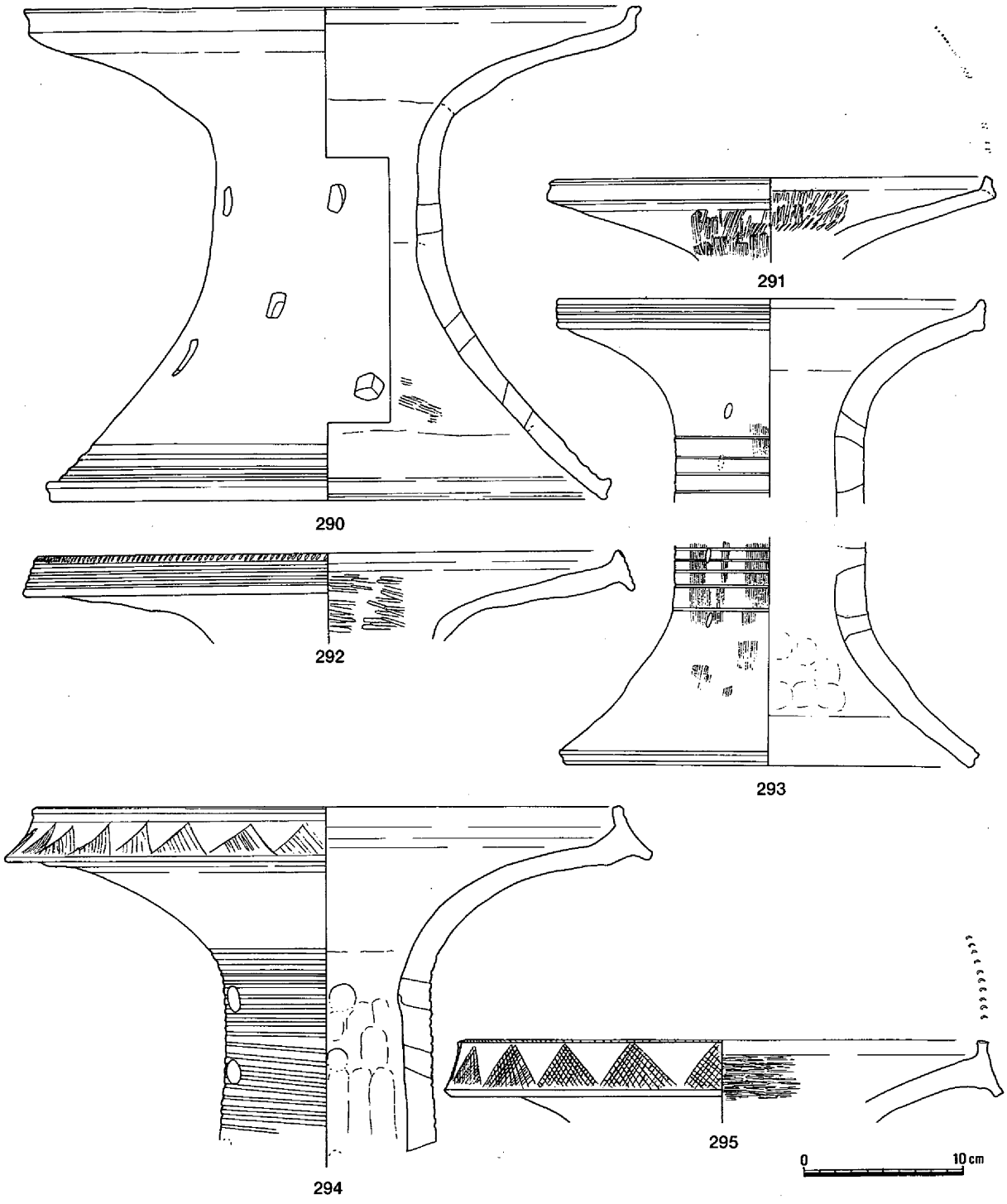
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
247	弥生土器	高杯	19.3	12.9	11.7	良好	5YR5/6(明赤褐)	砂粒(多)	
248	弥生土器	高杯	12.8	12.6	9.5	良好	2.5YR5/6(明赤褐)	砂粒	口縁端部に沈線　脚柱下端に刺突文
249	弥生土器	高杯	18.2			良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	
250	弥生土器	高杯	13.1	12.5	10.3	良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒(多)	
251	弥生土器	高杯	11.9			良好	2.5YR6/6(橙)	砂粒	
252	弥生土器	高杯	10.9			良好	2.5YR5/6(明赤褐)	砂粒	
253	弥生土器	高杯	10.9			良好	5YR6/6(橙)	砂粒	
254	弥生土器	高杯	12.8			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒(多)	
255	弥生土器	高杯	11.9			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁外面に沈線
256	弥生土器	高杯	11.0			良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒(多)	
257	弥生土器	脚付直口壺	5.9			良好	5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒	
258	弥生土器	高杯		11.7		良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	
259	弥生土器	高杯		12.8		良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	
260	弥生土器	高杯		13.7		良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	
261	弥生土器	高杯		10.0		良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒(多)	
262	弥生土器	高杯		11.6		良好	2.5YR5/6(明赤褐)	砂粒	
263	弥生土器	高杯		13.2		良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	脚柱部に沈線と刺突文
264	弥生土器	高杯		10.0		良好	10YR8/2(灰白)	砂粒	裾部に円孔4個
265	弥生土器	高杯		9.8		良好	2.5YR5/6(明赤褐)	砂粒(多)	
266	弥生土器	高杯		12.5		良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒(多)	



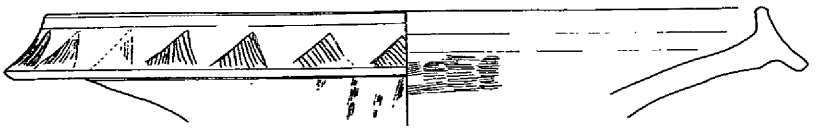
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
267	弥生土器	鉢				良好	2.5Y R 4/4(にぶい赤褐)	砂粒	口縁端面に凹線
268	弥生土器	鉢	42.4	9.9	20.5	良好	5Y R 6/4(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線
269	弥生土器	鉢	(60.2)			良好	2.5Y R 5/6(明赤褐)	砂粒	口縁部に凹線２本
270	弥生土器	鉢	45.9			良好	5Y R 6/4(にぶい橙)	砂粒	
271	弥生土器	鉢	38.2			良好	5Y R 6/4(にぶい橙)	砂粒	

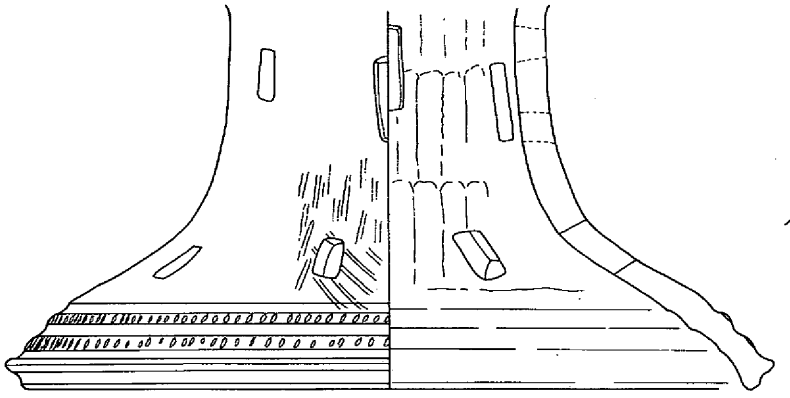


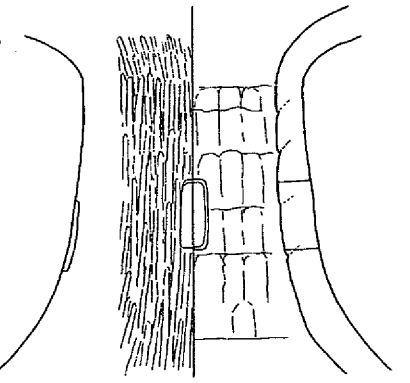
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
272	弥生土器	鉢	18.8	4.2	10.0	良好	2.5Y R6/6(橙)	砂粒(多)	
273	弥生土器	鉢	14.1	4.4	6.4	良好	5Y R6/4(にぶい橙)	砂粒(多)	
274	弥生土器	鉢	16.1	5.0	10.8	良好	7.5Y R7/4(にぶい橙)	砂粒(多)	
275	弥生土器	鉢	20.6	5.1	10.4	良好	10Y R8/2(灰白)	砂粒	上げ底
276	弥生土器	台付鉢	17.2	7.7	16.4	良好	2.5Y R5/4(にぶい赤褐)	砂粒	
277	弥生土器	台付鉢	18.4	10.9	13.5	良好	5Y R5/4(にぶい赤褐)	砂粒(多)	台部に孔6個
278	弥生土器	台付鉢	(18.6)			良好	2.5Y R6/6(橙)	砂粒(多)	台部に孔4個？
279	弥生土器	台付鉢	18.9			良好	5Y R6/4(にぶい橙)	砂粒(多)	
280	弥生土器	台付鉢	13.6			良好	5Y R5/4(にぶい赤褐)	砂粒(多)	
281	弥生土器	台付鉢		12.3		良好	5Y R6/6(橙)	砂粒	台部に孔6個
282	弥生土器	台付鉢		11.6		良好	5Y R5/4(にぶい赤褐)	砂粒	
283	弥生土器	台付鉢		11.0		良好	2.5Y R5/6(明赤褐)	砂粒	
284	弥生土器	台付鉢		11.3		良好	7.5Y R7/4(にぶい橙)	砂粒(多)	
285	弥生土器	台付鉢	10.3	3.1	5.8	良好	5Y R5/4(にぶい赤褐)	砂粒(多)	
286	弥生土器	直口壺	7.0			良好	5Y R7/6(橙)	砂粒	
287	弥生土器	脚付直口壺				良好	5Y R6/6(橙)	砂粒	
288	弥生土器	脚付直口壺	6.3			良好	5Y R5/4(にぶい赤褐)	砂粒(多)	
289	弥生土器	脚付直口壺				良好	5Y R6/4(にぶい橙)	砂粒	

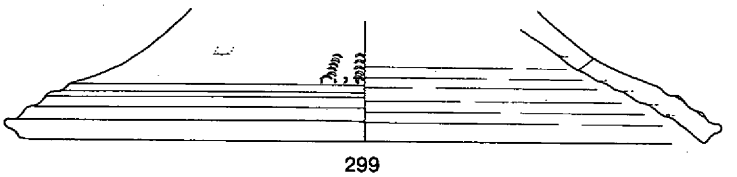


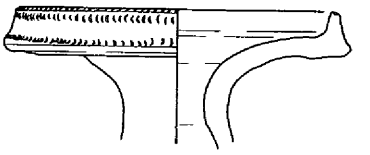
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
290	弥生土器	器台	39.1	35.2	31.6	良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	裾部に凹線
291	弥生土器	器台	26.9			良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	口唇部に刺突文
292	弥生土器	器台	37.9			良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線・刺突文
293	弥生土器	器台	26.7	23.5	(24.0)	良好	5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒	筒部に沈線・円孔
294	弥生土器	器台	37.2			良好	5YR6/6(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線・鋸歯文
295	弥生土器	器台	32.4			良好	10YR8/2(灰白)	砂粒	口縁部に鋸歯文　口唇部に刺突文

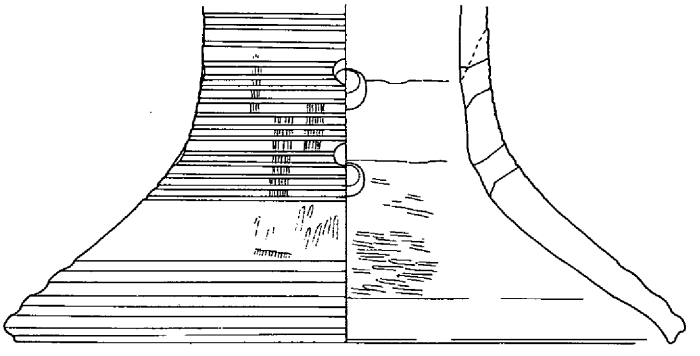

296

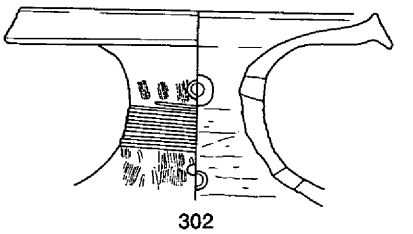

297

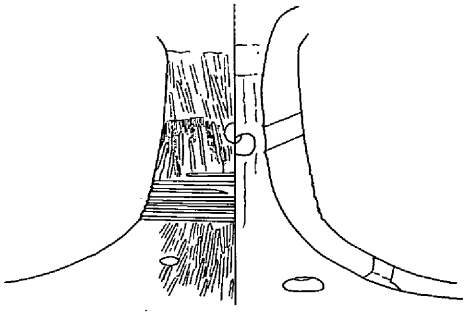

298

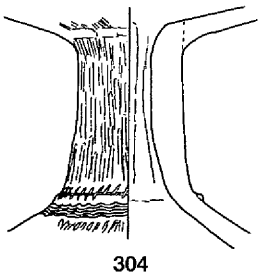

299

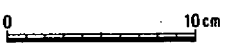

300


301

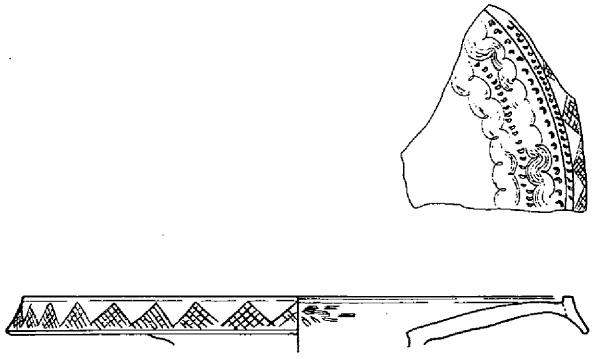

302


303

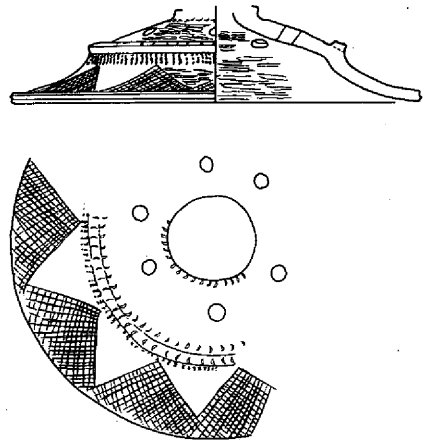

304



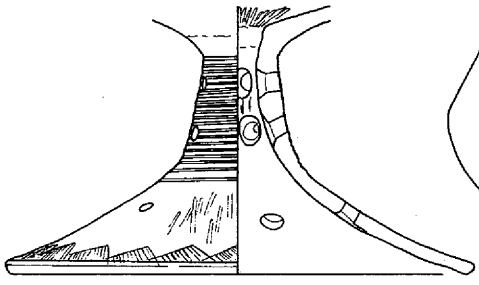
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
296	弥生土器	器台	37.2			良好	5YR7/6(橙)	砂粒	口縁部に鋸歯文
297	弥生土器	器台		37.8		良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	脚部に凹線・刺突文
298	弥生土器	器台				良好	5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	方形透し
299	弥生土器	器台		35.6		良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	半截竹管の刺突文　方形透し
300	弥生土器	器台	16.4			良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部と口唇部に刺突文
301	弥生土器	器台		34.0		良好	2.5YR6/6(橙)	砂粒	筒部に沈線　裾部に凹線
302	弥生土器	器台	18.8			良好	2.5YR5/6(明赤褐)	砂粒	筒部沈線は螺旋・円孔上下に4個
303	弥生土器	器台				良好	2.5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒(多)	脚下半の沈線は螺旋　脚柱部に円孔4個
304	弥生土器	器台				良好	5YR6/6(橙)	砂粒	脚部下半に凸帯・刺突文・波状文

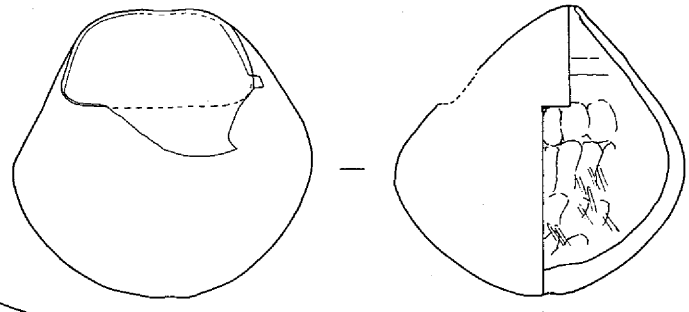


305

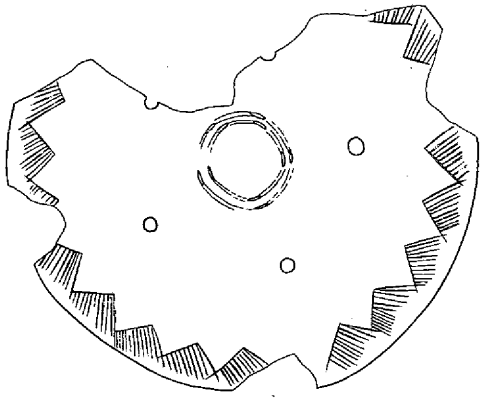


307

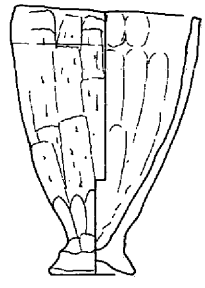




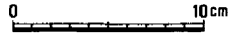
308



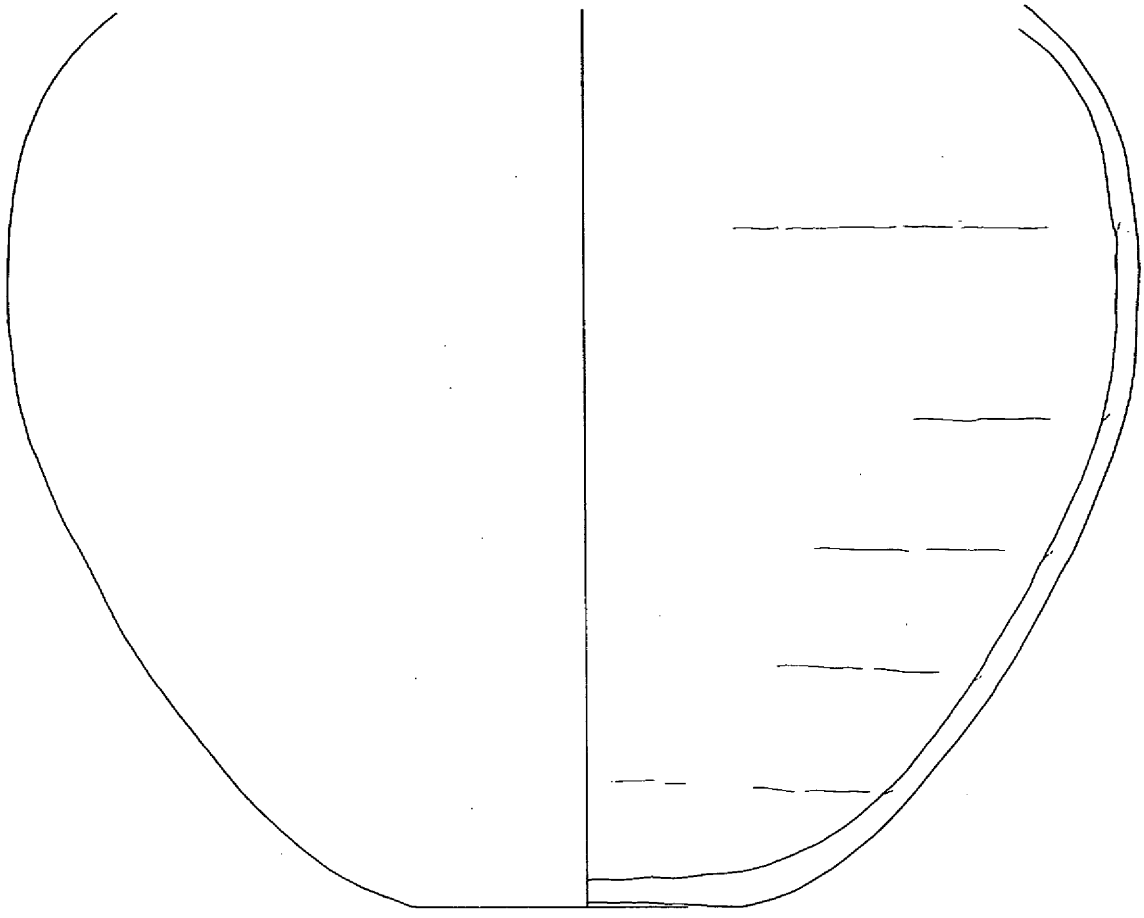
306

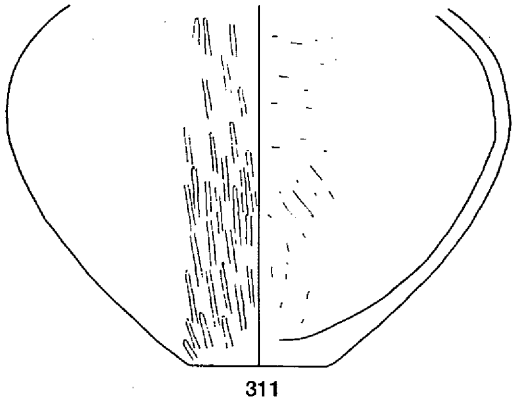


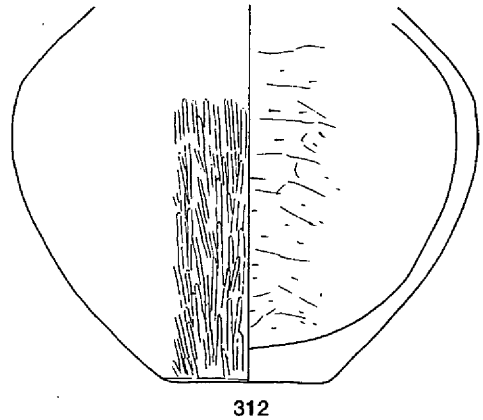
309

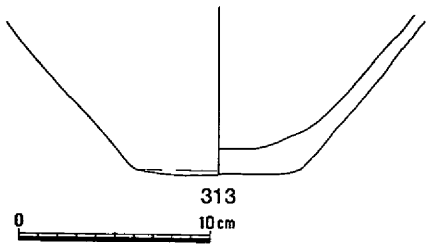


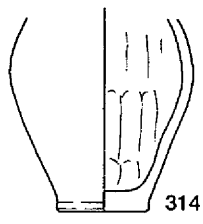
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
305	弥生土器	器台	28.1			良好	5YR6/6(橙)	砂粒	口縁部に鋸歯文・刺突文　内面に刺突文と波状文
306	弥生土器	器台		24.2		良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒(多)	脚柱部沈線は螺旋　裾部に鋸歯文　透し3段
307	弥生土器	装飾高杯		21.3		良好	2.5YR5/6(明赤褐)	砂粒(多)	裾部に鋸歯文・刺突文　円形透し6個
308	弥生土器	手焙り形土器			15.3	良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒(多)	
309	弥生土器	製塩土器	9.8	4.6	14.2	良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒(多)	

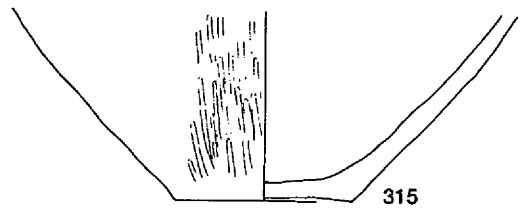




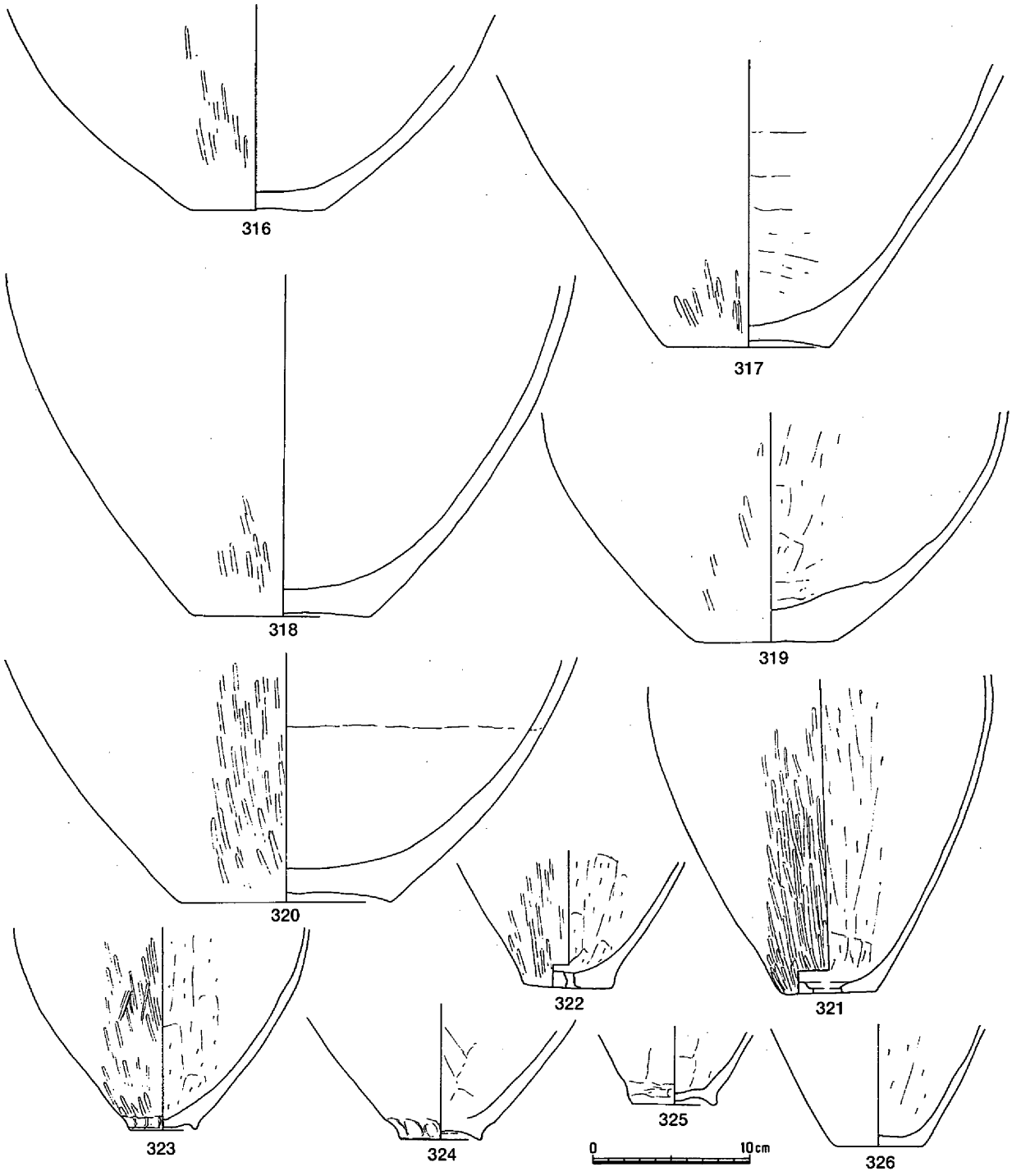








掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
310	弥生土器	壺		18.0		良好	5YR6/6(橙)	砂粒	
311	弥生土器	壺		7.1		良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	
312	弥生土器	壺		8.9		良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	
313	弥生土器	壺		8.6		良好	5YR6/6(橙)	砂粒	
314	弥生土器	壺		4.7		良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	
315	弥生土器	壺		9.4		良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	

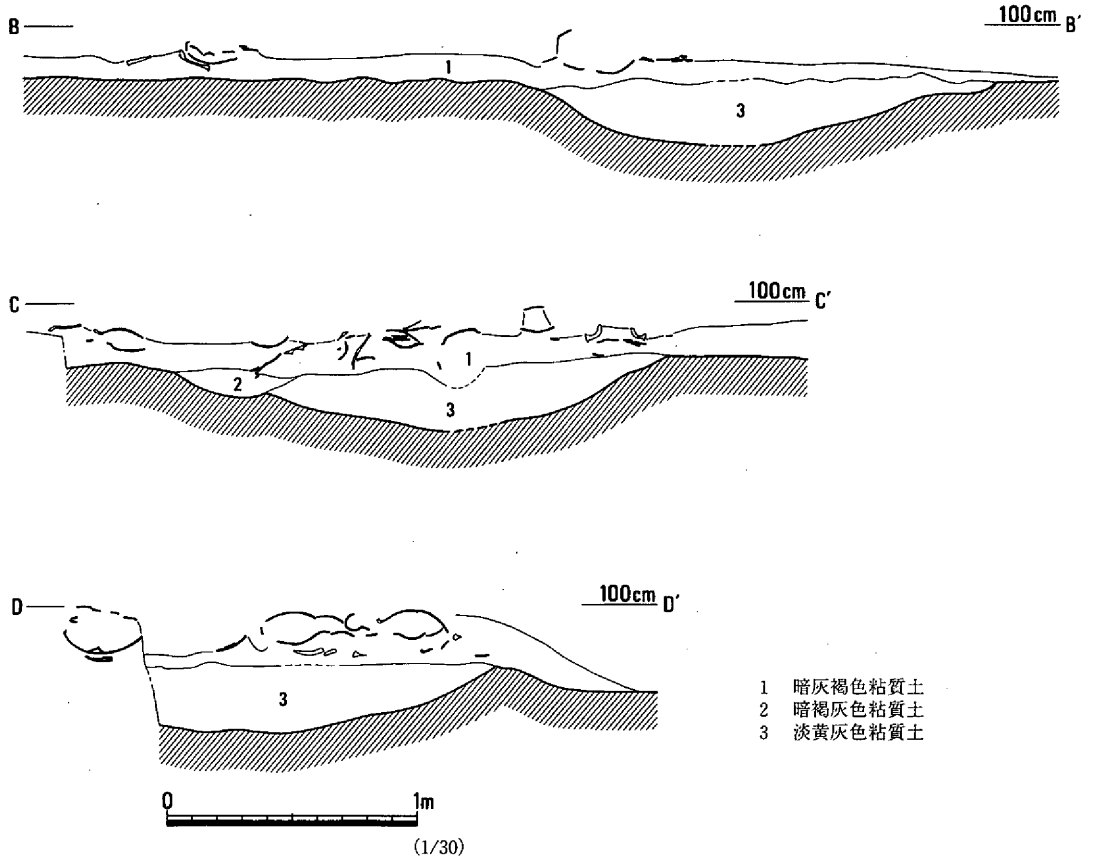


掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
316	弥生土器	壺		8.6		良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	
317	弥生土器	壺		10.4		良好	5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	
318	弥生土器	壺		11.3		良好	5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	
319	弥生土器	壺		8.0		良好	5YR6/6(橙)	砂粒	
320	弥生土器	壺		13.7		良好	5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒	
321	弥生土器	甕		6.1		良好	7.5YR5/2(灰褐)	砂粒(多)	底部に穿孔
322	弥生土器	甕		5.7		良好	5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒	底部に焼成前の穿孔
323	弥生土器	甕		4.2		良好	10YR6/1(褐灰)	砂粒	
324	弥生土器	甕		5.4		良好	5YR5/6(明赤褐)	砂粒	
325	弥生土器	甕		5.4		良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	
326	弥生土器	甕		5.7		良好	5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒	

肩部には刺突文を施文する。内面の調整は、口縁部をヨコナデで、頸部に押圧痕とナデ、もしくは、ヘラケズリで行っている。また、胴部はヘラケズリを施している。しかし、形態は、口縁部が傾斜するもの垂直に立っているもの、口縁端部の拡張が上下等しいものや、上下どちらかに偏っているもの、胴部も丸いものや肩の張っているものなど様々である。口縁部の傾斜が鋭角なものは、下方への拡張が目立つ。ただし、142は上への拡張が顕著であった。垂直に立つものは、上下にほぼ等しく拡張するか、もしくは上へ拡張する傾向がある。139と151は胴部と頸部内面に、148は口縁部内面にハケが見られた。141は他に比べ肩が張っており、頸部内面にシボリ痕が認められた。153の刺突文は貝殻を用い、胴部下半に煤が付着していた。137と139は底部が上げ底で、155は底面がやや丸みを持つ。156は胴部にかすかに丹らしきものが残っていた。165も丹塗りが認められる。166～177は壺で、口縁部に凹線を巡らせ、外面をヘラミガキ、内面を肩部までヘラケズリで調整しているものが多い。166は多くの長頸壺に見られるような施文と調整が行われている。170は復元できた遺物中、最も大きなもので、口縁部上端に半截竹管文、頸部に鋸歯文とその下に刺突文を巡らせている。肩部の凸帯は貼り付けで、キザミを施し、凸帯の下部にも刺突文を施文している。172と173は表面が剝落して調整は不明瞭である。177は内面のヘラケズリが胴部中位までしか及んでいない。178・179・286の直口壺、180の無頸壺、181の広口壺も、他の壺と同様な調整を行っている。182～230は甕で、そのうち210・224・228は一応甕として扱う。甕のほとんどが、外面をヘラミガキ、内面を頸部までのヘラケズリで仕上げている。口縁部の形状には違いがあり、簡単にまとめると、口縁端部を丸く仕上げてある183・184・210と、口縁端面の拡張がない182・190・199・210と、拡張がある185～189・191～198・200～209・211～230との3種類に大別される。また、口縁部に面を持つものは、口縁部に凹線を施しているものと、そうでないものとにも分けられる。口縁端面の拡張は長頸壺と同様に、口縁部が垂直に立つものは上方への拡張が大きくなる傾向にある。182は胴部下半に被熱を受けており、煤が付着している。他の194・195・198・211にも煤が付着している。183・186・203・223には外面にハケが見られる。185は外面にタタキが施されている。187は磨滅が著しいが、底部に煤が付着していた。193は外面をハケ後ミガキで調整している。同様に、ハケ後ヘラミガキで調整しているものには196・198・218・227・230がある。196には丹が付着していた。206・207・209・219は内面をミガキで処理している。231～256・258～266は高杯で、口縁部の形状が、口縁端部に面を持つもの、口縁部が外反するもの、内傾するものとに大きく分けられる。しかし、それぞれを細かく見ると様々な形状があり、分類しきれない。また、脚部にも様々な形状が見られる。表面の調整は、杯部をヘラミガキで調整しているものが、ほとんどである。外面がクモの巣状のヘラミガキであるものには234・238・246があり、内面が放射状のものには234・238・243・258がある。237のミガキは多方向である。脚に施されている透しは円形で、4孔のものがほとんどである。ただし、234・236は2段3方回である。杯部と脚部の接合は、円盤充填であるものが231・234・236・245・262と、差し込みであると思われるものは235・237・242・250・253である。237・258は接合部に押圧痕が認められる。248は外面にハケを施した後、ヘラミガキを行っており、内面は丹塗りである。他の231・232・260にも丹が認められる。250と254は杯部内面をハケ後ヘラミガキで、調整している。267～275は鉢で、ほとんどが内外面をヘラミガキで調整されていた。267は口縁端部に面を持ち、269は口縁部を斜め上方に大きく引き出している。268、273は内面にヘラケズリが、270は内面にヘラミガキが、271は外面にハケが見られる。276～285は台付鉢で、内外面ともヘラミガキで調整しているものがほとんどである。277～280・284は円盤充

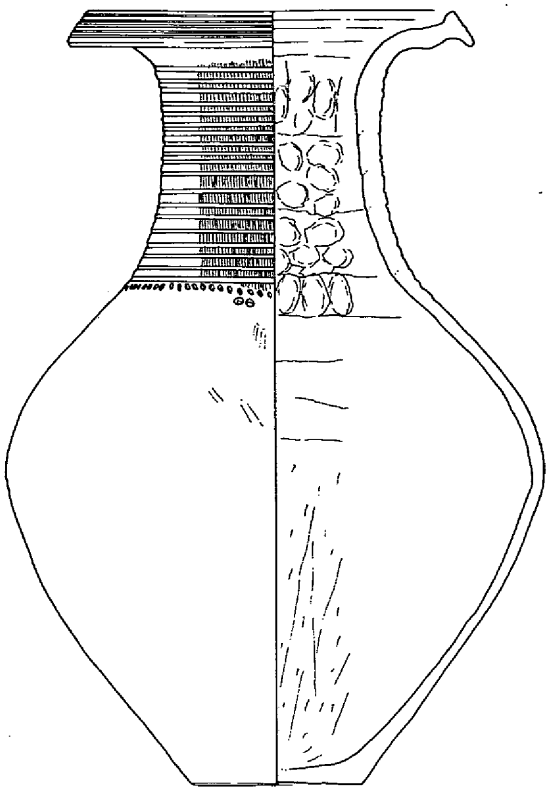
塡である。台部との接合は、276と285がユビオサエであり、284もユビオサエではないかと思われる。277がユビオサエ後ナデ。282は台部内面をユビオサエで行った後、丁寧なナデを施している。283は鉢・底・台部を別々に接合しているような形跡が観察できた。また、台部には孔が2個あり1つは未貫通である。257・287～289は脚付直口壺で、257は内面にユビオサエが認められる。287・289は脚部と口縁部を別々に貼り付けている。288は円盤充塡である。290～306は器台で、290の透しは方形で6個、内面に少しハケが見られた。291は外面に細かいハケを施した後、内面同様ヘラミガキを行っている。292は外面が剝落していたが、内面にヘラミガキが認められた。293の円孔は縦に3段3方向にあると思われる。上部と下部で接合はできなかったが、同一個体と考えられる。外面に細かいハケが認められた。294の透しは円形で、3段5方向である。口縁部に鋸歯文が施されている。筒部の沈線は螺旋である。295の内面にはヘラミガキが施されていた。296の内外面にはハケ後ナデが見られた。297の透しは方形で、6個と8個の2段である。298の透しは方形で、対では同じ高さだが、上下にずれた4個である。297と298は外面はヘラミガキ、内面はユビオサエとナデで調整されていた。299の透しは方形だが、個数は不明である。裾部の凹線の間には、刺突文を巡らしている。ただし、破片により刺突文の向きが違うことから、すべて同じ方向でなく変えているものと考えられる。裾部にはキザミも見られる。301は円形透し2段4方向である。外面はハケ、内面はナデとヘラミガキが認められた。302の透しは、円形である。沈線は左回りの螺旋である。外面はハケ、内面はヘラケズリが施されている。305は口縁部内面には櫛描文と刺突文が施文されている。調整は剝落していて不明瞭である。306は裾部に斜線充塡の鋸歯文を施し、筒部には沈線を施している。307は装飾高杯で、裾部に鋸歯文、凸帯上とその上部に半截竹管文2列、凸帯下部に列点文、脚柱部と裾部のつなぎ部分にも半截竹管文があり、脚裾部には円形透し6個が見られる。外面にはヘラミガキ、内面はハケを施した後ヘラミガキで調整されていた。308は手焙形土器で、内面にはユビオサエが認められる。309は製塩土器で、外面にヘラケズリが見られ、内面はナデで処理されている。口縁部と底部が楕円形である。310～320は壺底部で調整は壺のそれに準じ、311・312・317・319・320は底部が肉厚である。そして、310の内面には工具痕が、311の内面にケズリ後ナデが、314には内面にユビオサエとナデが見られる。321～326は甕底部で、内面をヘラケズリ、外面をヘラミガキで処理したものがほとんどである。323は外面に若干ハケと底部に横方向のユビオサエとナデ、底部に煤が付着している。324・325の底部にもユビオサエ。また、325は外面に工具によるナデがみられる。ほとんどが内面をヘラケズリ、外面をヘラミガキで仕上げている。321・322は底部に穿孔があり、更に322は底部に煤が付着している。遺構の上面で、深さ10cm以内からは189～191・195・197・202・216・218・220・222・227・299・306・307・309・322・326が出土している。また、157・200・261・295・312・313・321は、深さ10cm前後から。145・146・152・156・160・175・180・196・207・210・223・226・231・233・236・259・262・271・280・288・302・323は遺構の底部10cmほどの深さから出土している。この層位と土器の新旧との間には若干の相関関係が見られる程度であり、それぞれに、古い形態のものや新しい形態のものも含まれている。土器の時期幅も後期前葉から中葉を示す。このことから、遺構の時期も、この間に形成されたと推定される。（築地）

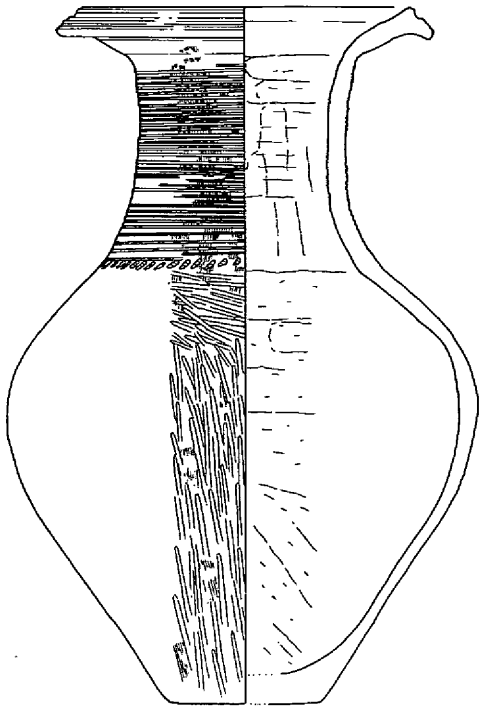
土器溜り2

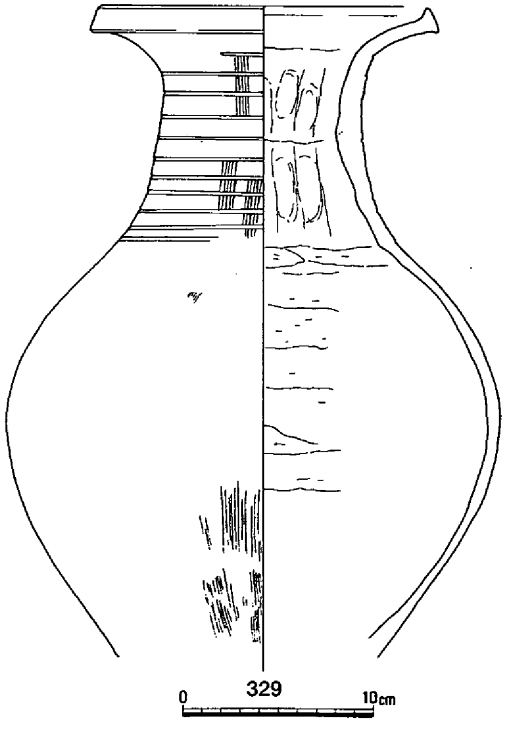


土器溜り２は、土器溜り１の南側に位置する。土器溜りは、長さ1,200cm、幅400cmにわたって調査区の北西端に検出された。検出状態はほぼ床土直下で、下面も基盤層に広がっている。遺物は散在する状況を示すが、所々で密集する部分が認められる。土器溜りの下面の状態は断面図に示すように、凹凸は認められず平面的な状態を呈していた。また、下層に認められた遺構については、完全に埋没後に形成されたことが明らかとなっている。

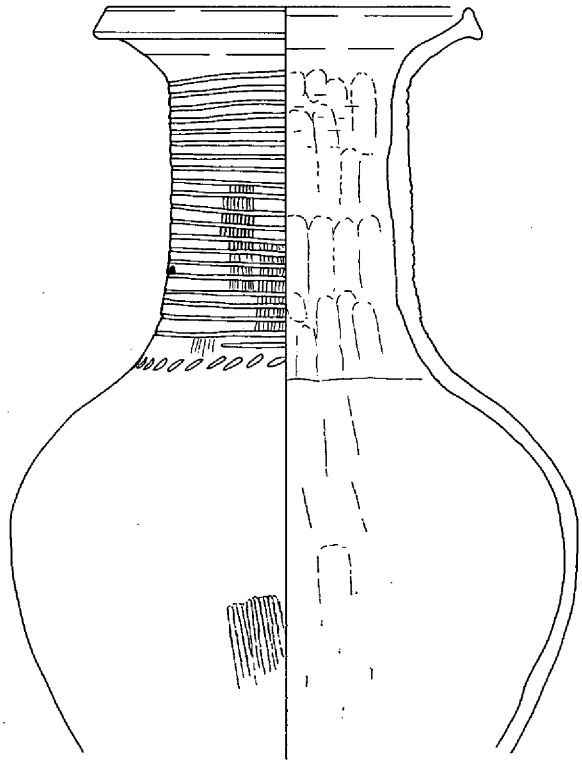
出土遺物は327～434土器とＳ２砥石である。327～338・340～348・350は、長頸壺である。327は口縁端部が内傾して上下に拡張し、退化凹線を施文する。頸部には単線で施文する沈線文が、肩部には連続刺突文を施す。内面調整は、頸部から肩部にかけて押圧による。328は口縁端部を下方に拡張し、退化凹線を施文する。頸部にはタテハケの後沈線を施すが、磨滅のため螺旋か単線か不明である。内面調整は、頸部から肩部にかけて押圧による。329は口縁端部が上方に摘み上げ状に拡張し、下方はわずかに張り出す。頸部には、螺旋の沈線が施される。内面調整は、頸部から肩部にかけて押圧による。口縁部の外方屈曲部分は、粘土を足して成形している。330は口縁端部が内傾して上下に拡張するが、文様の有無は剝離のため不明である。頸部は直立し、沈線はタテハケの後螺旋の沈線が、肩部には連続刺突文が施文される。内面調整は、頸部から肩部にかけて押圧による。331は口縁端部が摘み上げ状に拡張するが、施文の有無は剝離が激しく不明である。頸部には単線の沈線が、肩部には連続刺突文を施す。内面調整は、頸部から肩部にかけて押圧による。332は頸部から口縁部への屈曲が「Ｌ」字状に外反して口縁端部を肥厚させ、直立する頸部にはタテハケのみが認められる。頸部から胴部へは肩が張らず、楕円の胴部に移行する。333は口縁端部を肥厚気味に拡張し、退化凹線を施文する。頸部には沈線が認められるが磨滅で不詳である。内面調整は、頸部から肩部にかけて押圧による。


327

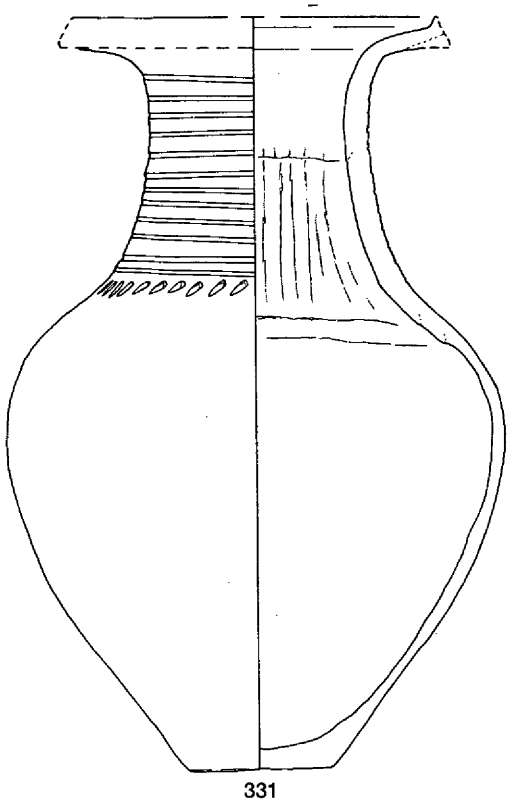

328



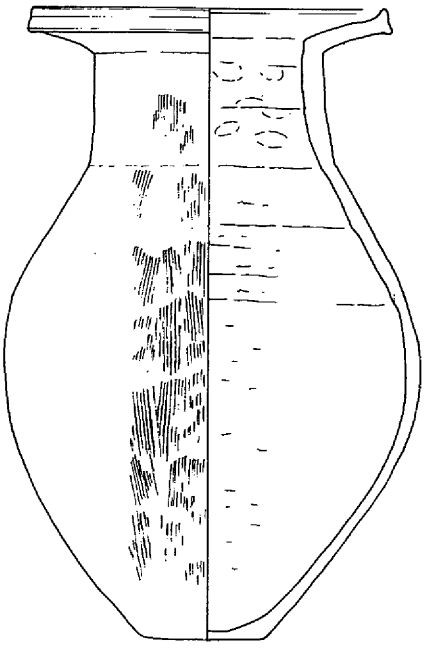
329


330

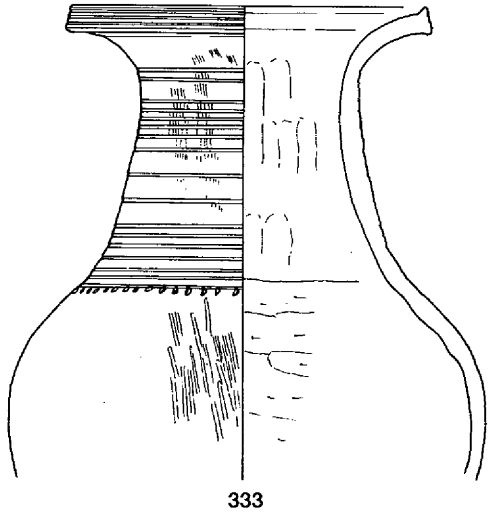
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
327	弥生土器	長頸壺	19.2	9.1	40.6	良好	7.5YR6/3(にぶい橙)	砂粒	頸部沈線は単線
328	弥生土器	長頸壺	17.9	8.0	36.8	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	頸部沈線は螺旋？
329	弥生土器	長頸壺	17.1			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	頸部沈線は螺旋
330	弥生土器	長頸壺	19.2			良好	5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒	頸部沈線は螺旋



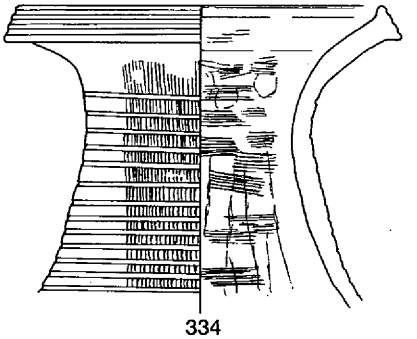
331



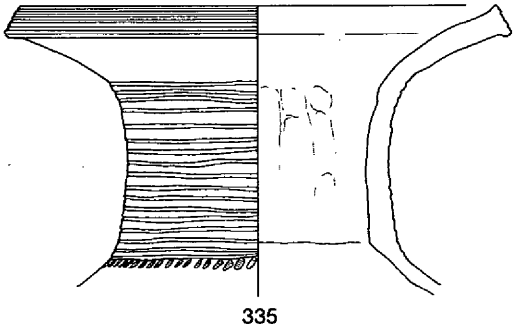
332



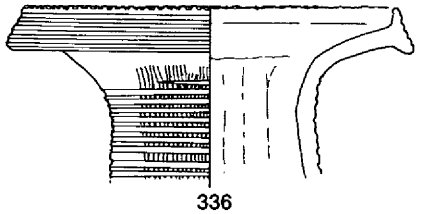
333



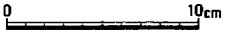
334



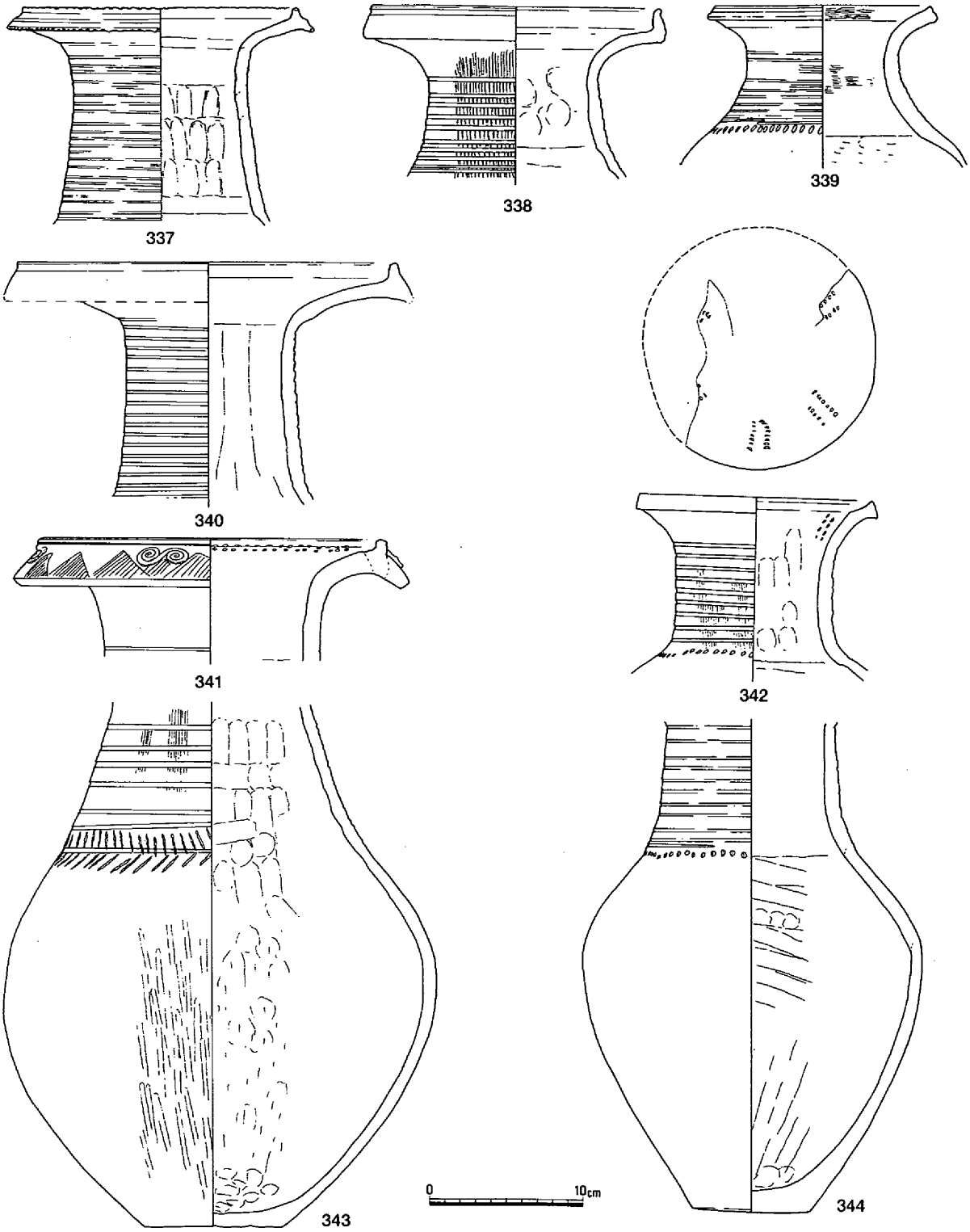
335



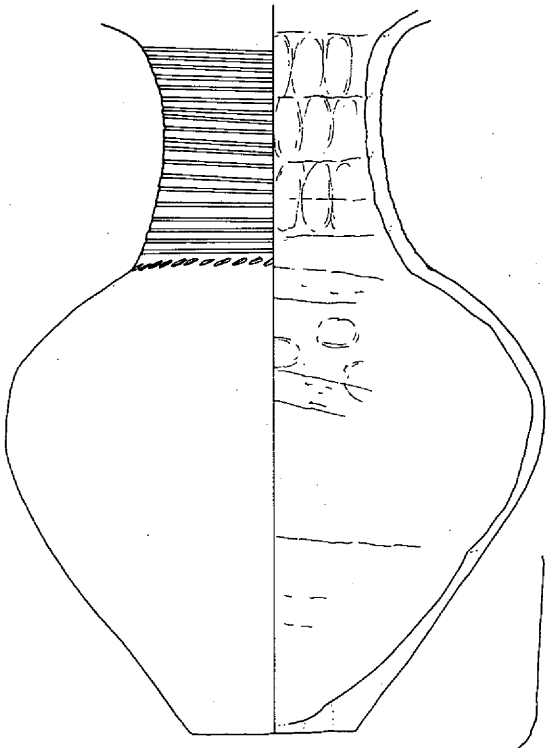
336



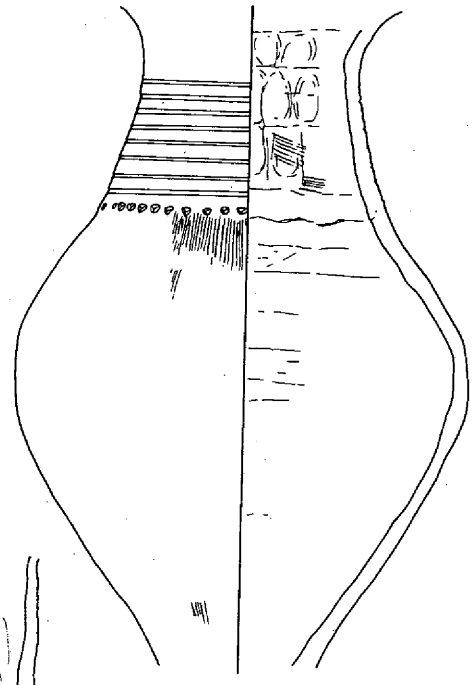
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
331	弥生土器	長頸壺	(19.2)	7.6	39.6	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	頸部沈線は単線
332	弥生土器	長頸壺	18.4	6.3	33.3	良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒	
333	弥生土器	長頸壺	18.8			良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	頸部沈線は螺旋か不詳
334	弥生土器	長頸壺	18.9			良好	10YR5/6(明赤褐)	砂粒	頸部沈線は単線
335	弥生土器	長頸壺	24.7			良好	7.5YR7/2(明灰褐)	砂粒	頸部沈線は螺旋？
336	弥生土器	長頸壺	19.8			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	頸部沈線は螺旋



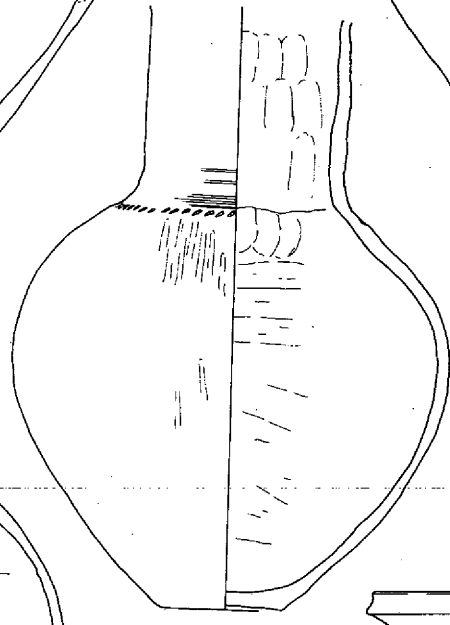
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底(脚)径	法量(cm) 器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
337	弥生土器	長頸壺	17.7			良好	10YR7/2(にぶい橙)	砂粒	頸部沈線は不詳
338	弥生土器	長頸壺	18.7			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	頸部沈線は単線
339	弥生土器	壺	14.1			良好	2.5YR8/2(灰白)	砂粒	頸部沈線は螺旋
340	弥生土器	長頸壺	24.2			良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	頸部沈線は螺旋
341	弥生土器	長頸壺	22.0			良好	5YR5/3(にぶい赤褐)	砂粒	口縁部に鋸歯文と「S」字状浮文
342	弥生土器	長頸壺	15.3			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁内面に刺突文
343	弥生土器	長頸壺		8.9		良好	7.5YR7/2(明褐灰)	砂粒	肩部に羽状の刺突文
344	弥生土器	長頸壺		7.7		良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	頸部に沈線　肩部に刺突文



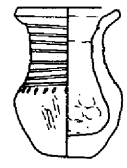
345



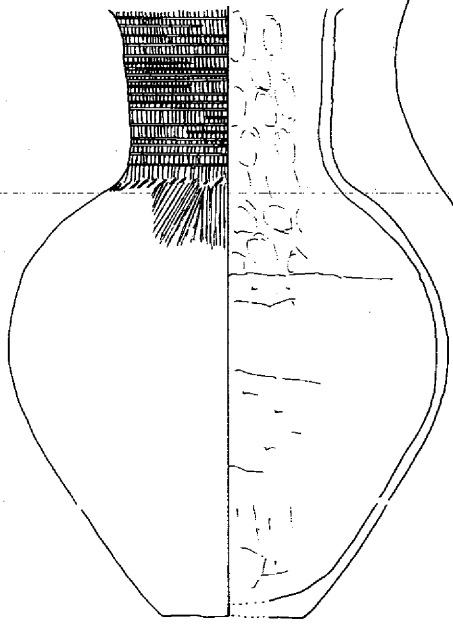
346



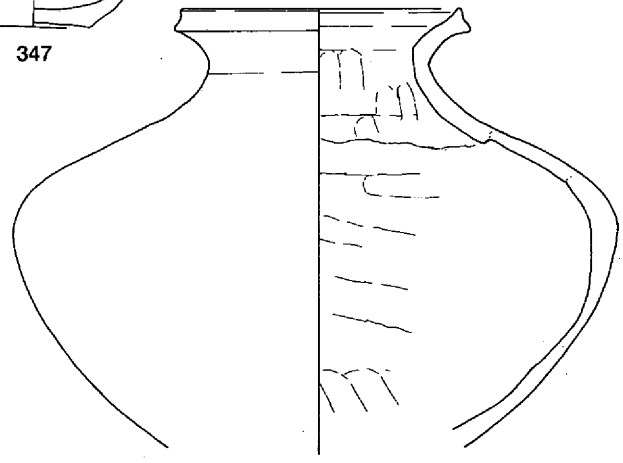
347



350



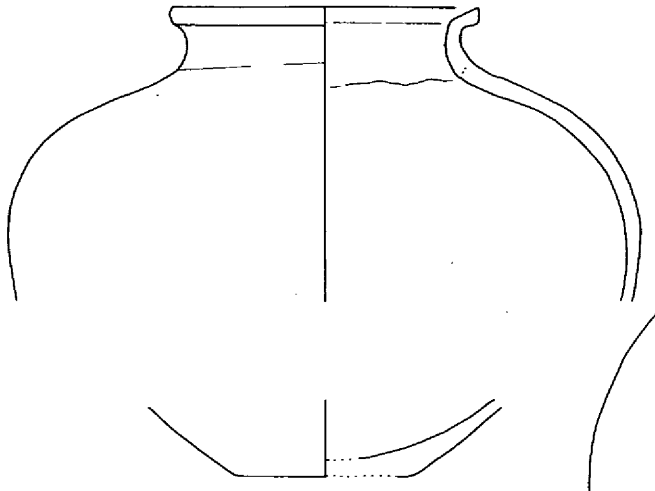
348



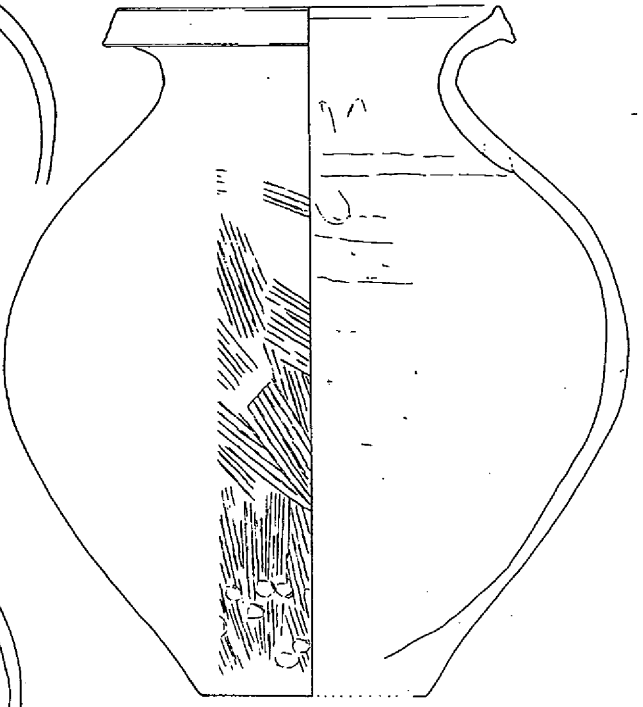
349

0　10cm

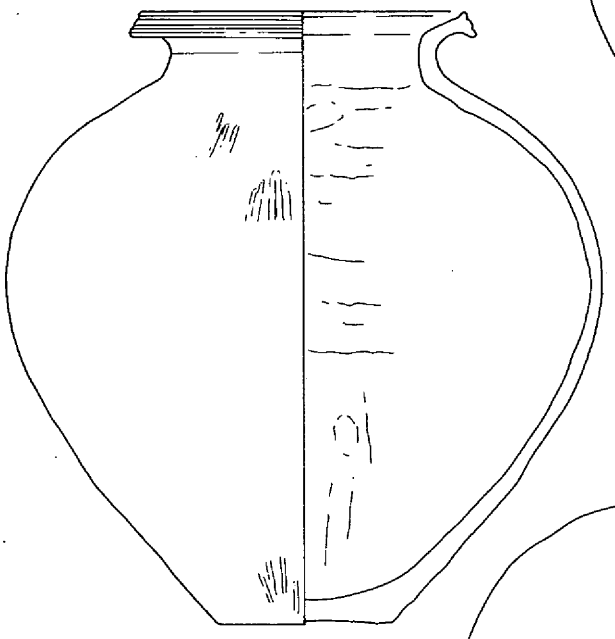
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
345	弥生土器	長頸壺		8.8		良好	5YR5/6(明赤褐)	砂粒	頸部沈線は螺旋
346	弥生土器	長頸壺				良好	2.5YR7/2(灰黄)	砂粒	頸部沈線は単線？
347	弥生土器	長頸壺		6.2		良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	器面剝離が顕著
348	弥生土器	長頸壺		7.6		良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	頸部沈線は螺旋
349	弥生土器	壺	14.4			良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	
350	弥生土器	長頸壺	5.3	2.6	7.9	良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	頸部沈線は螺旋か不詳



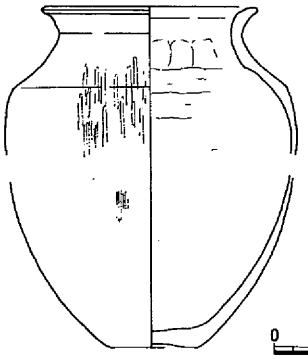
351



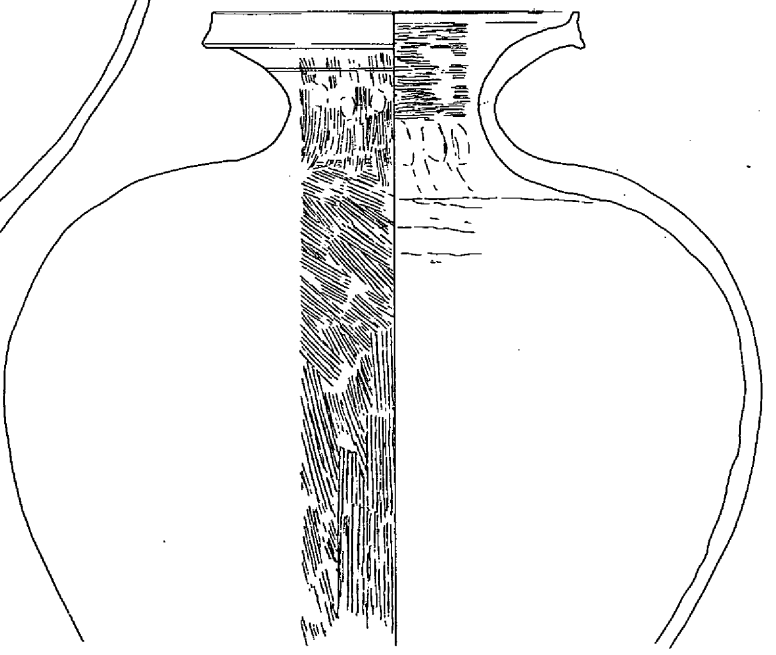
352



353



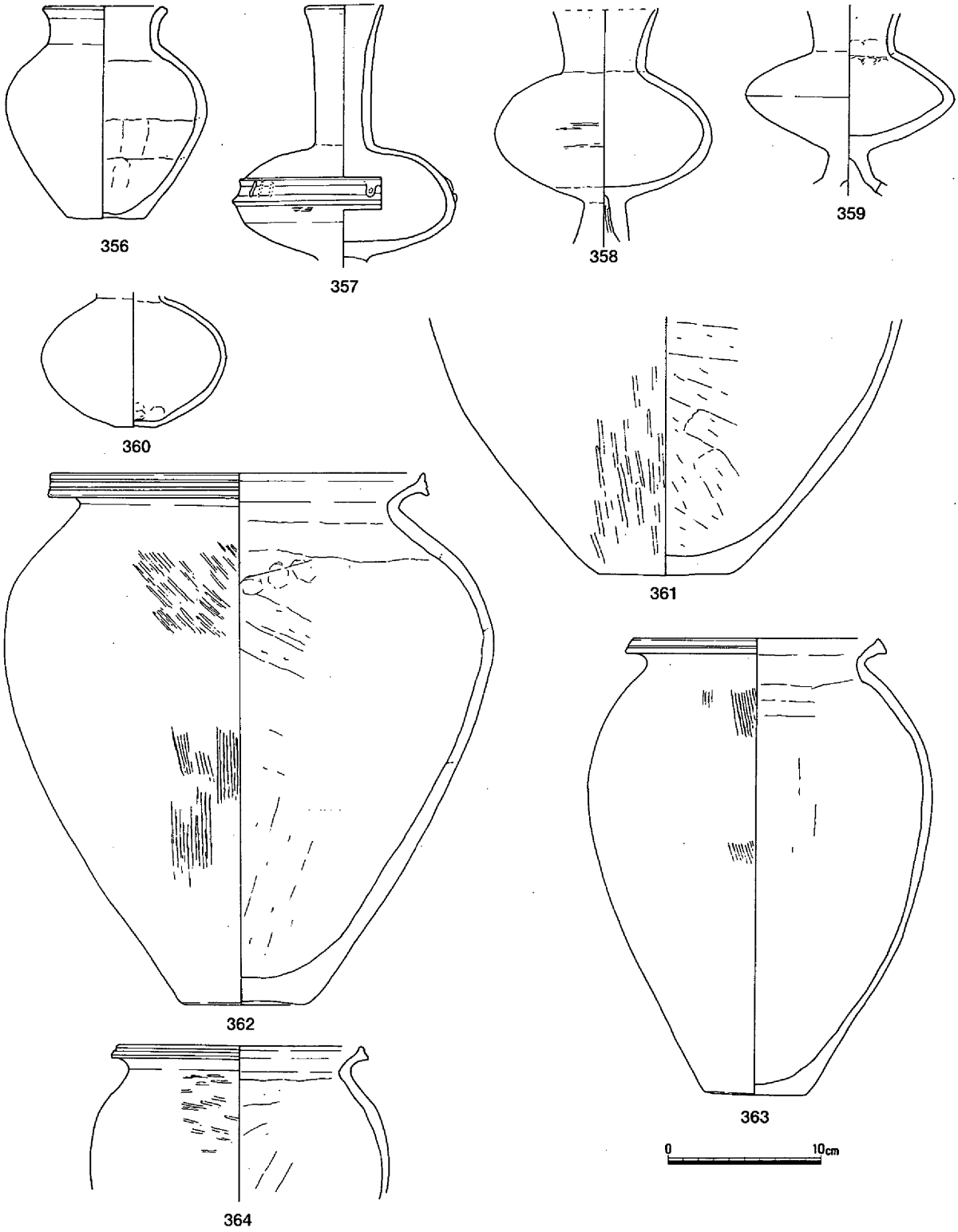
354



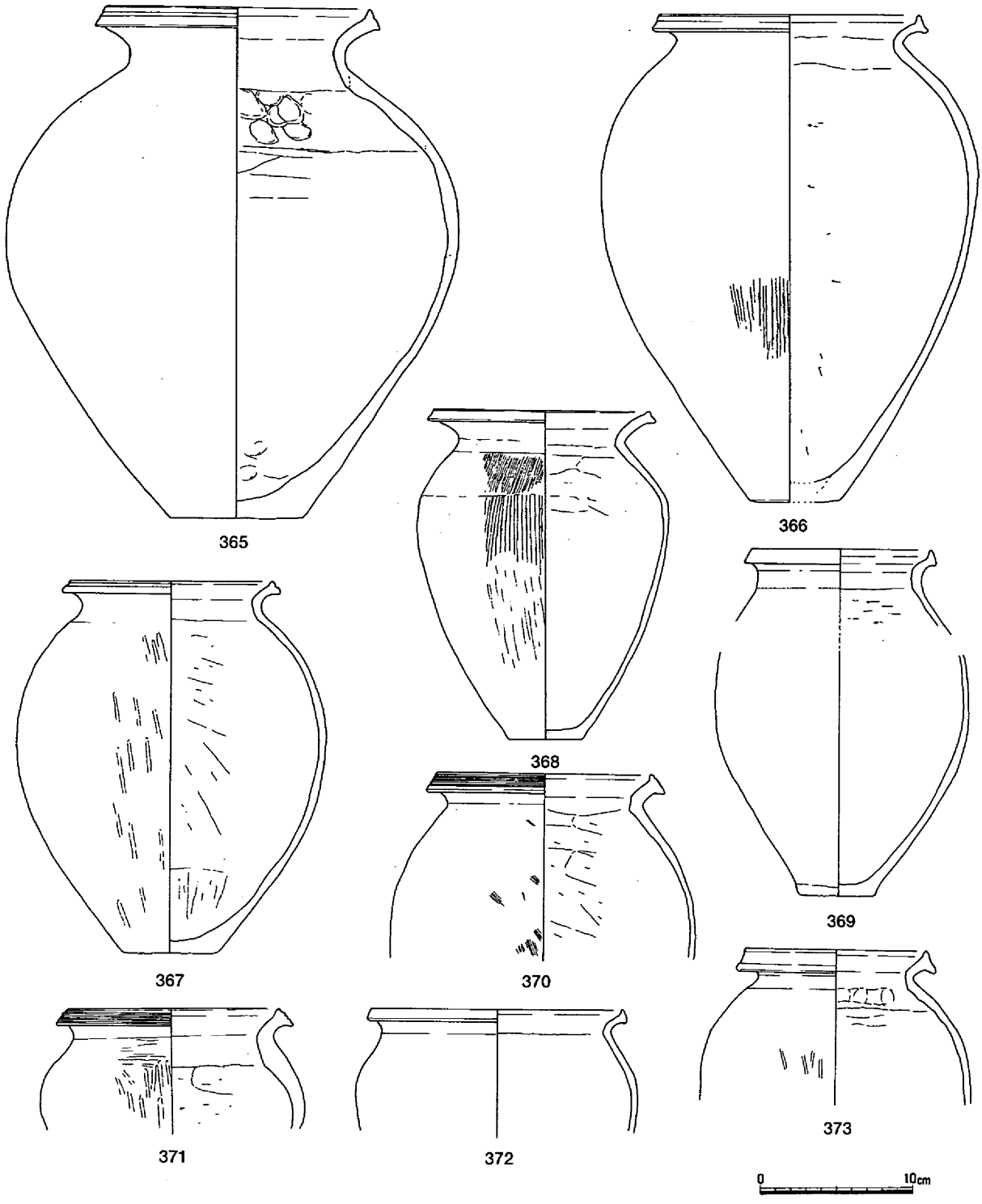
355

0　10cm

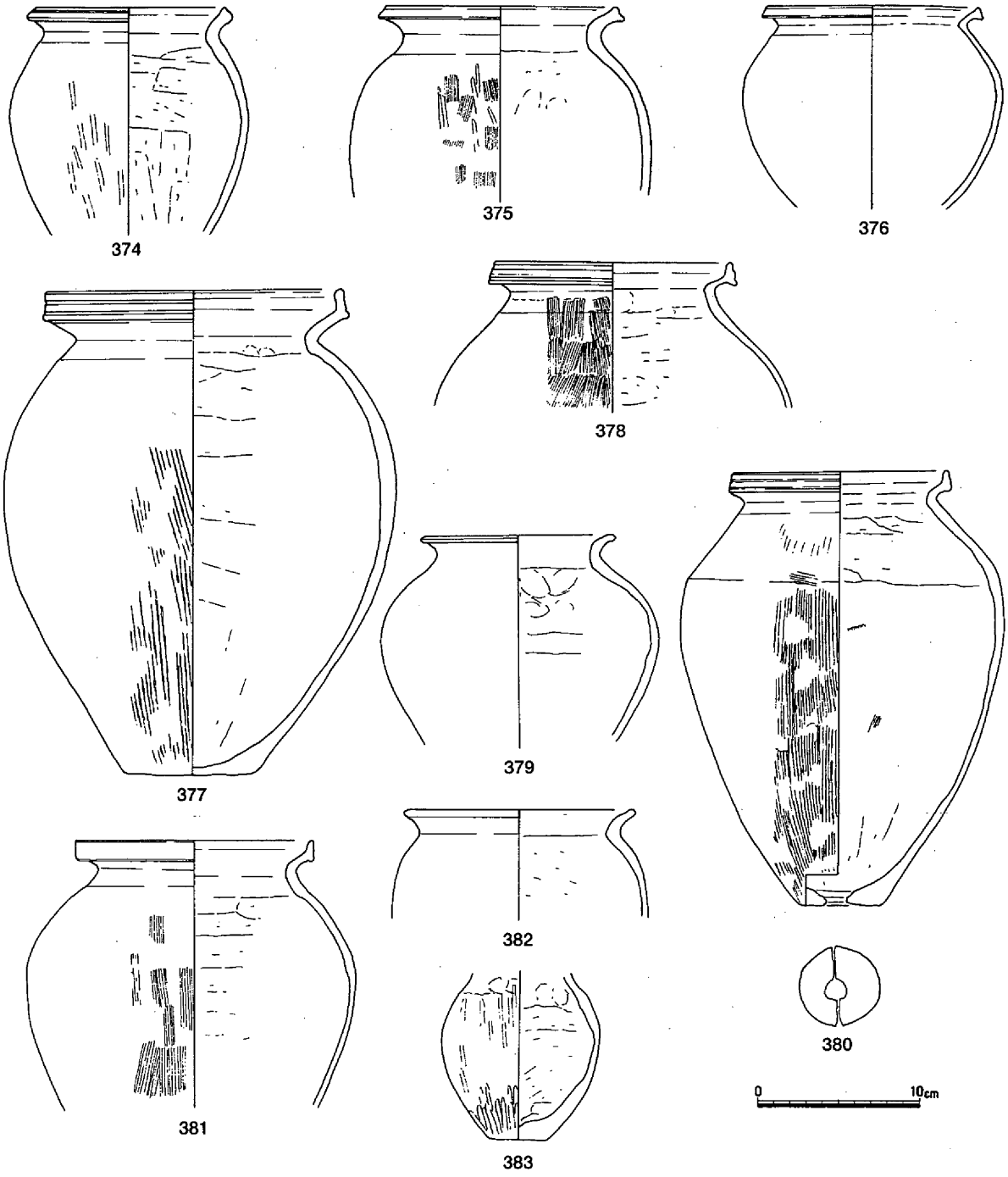
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
351	弥生土器	壺	16.0	9.2		良好	7.5YR8/2(灰白)	砂粒	
352	弥生土器	壺	20.0	12.0	36.8	良好	7.5YR7/2(明灰褐)	砂粒	
353	弥生土器	壺	16.9	9.0	32.8	良好	2.5YR4/3(にぶい赤褐)	砂粒	口縁部に凹線
354	弥生土器	甕	11.0	4.6	(18.0)	良好	7.5YR6/2(灰褐)	砂粒	
355	弥生土器	壺	19.2			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	



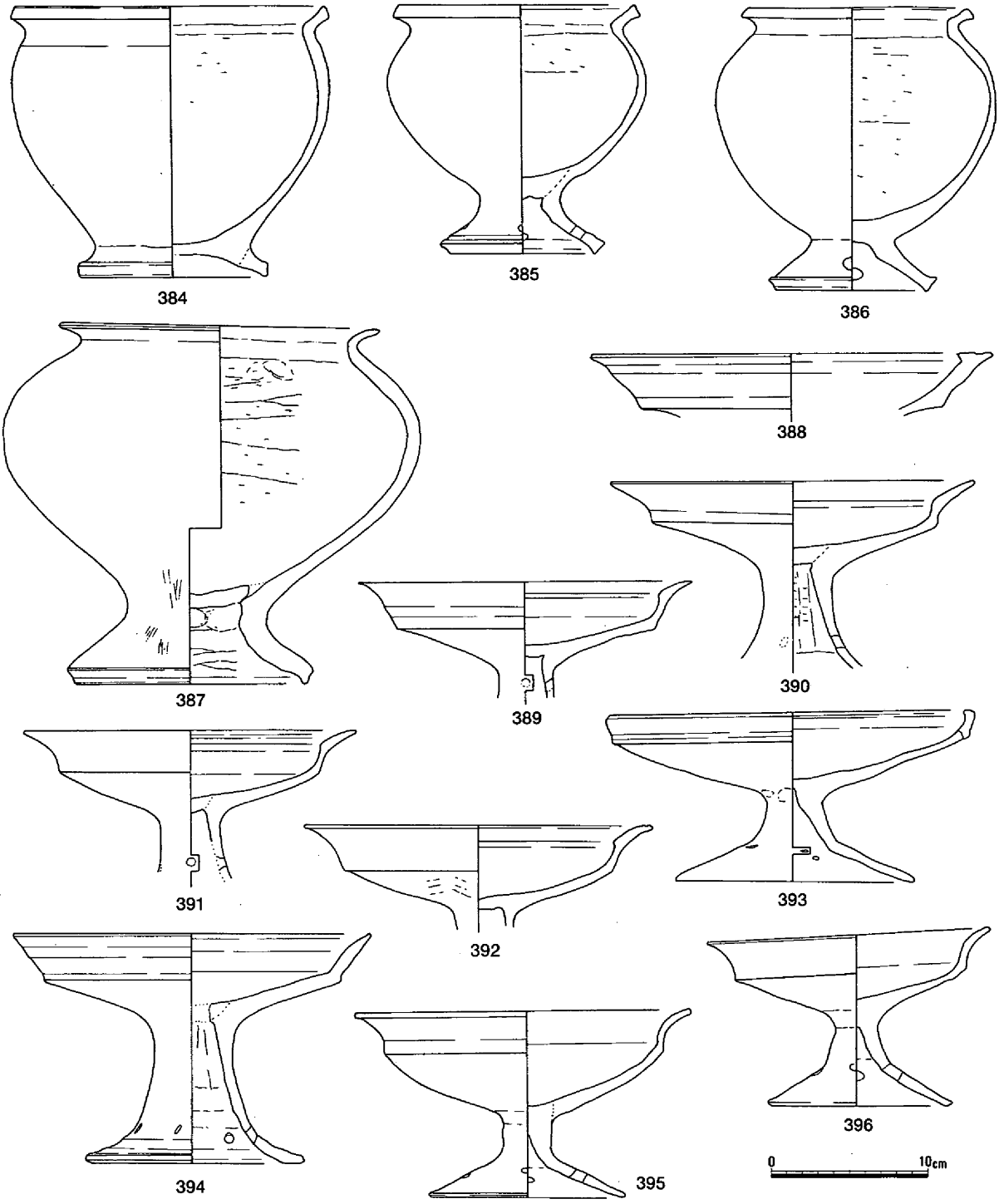
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
356	弥生土器	壺	7.9	5.2	14.2	良好	5YR6/6(橙)	砂粒	
357	弥生土器	脚付長頸壺	5.5			良好	5YR5/6(明赤褐)	砂粒	凸帯に浮文
358	弥生土器	脚付直口壺	(6.7)			良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	
359	弥生土器	脚付直口壺				良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	
360	弥生土器	直口壺		2.4		良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	
361	弥生土器	壺		8.6		良好	5YR5/6(明赤褐)	砂粒	
362	弥生土器	甕	24.8	8.8	35.1	良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線
363	弥生土器	甕	16.0	6.7	30.3	良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒	口縁部に凹線
364	弥生土器	甕	16.3			良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線



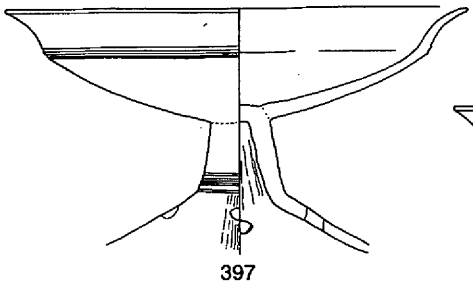
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
365	弥生土器	甕	17.1	8.5	33.4	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線
366	弥生土器	甕	17.0	6.0	31.9	良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒	
367	弥生土器	甕	13.1	6.3	(24.5)	良好	7.5YR7/2(明灰褐)	砂粒	口縁部に凹線
368	弥生土器	甕	13.9	4.8	21.7	良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	
369	弥生土器	甕	11.7	4.9	(22.8)	良好	7.5YR7/2(明褐灰)	砂粒	
370	弥生土器	甕	14.0			良好	7.5YR7/2(明褐灰)	砂粒	口縁部に凹線
371	弥生土器	甕	13.6			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線
372	弥生土器	甕	16.5			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
373	弥生土器	甕	11.9			良好	5YR6/6(橙)	砂粒	

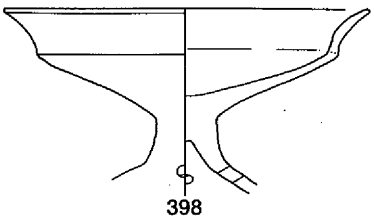


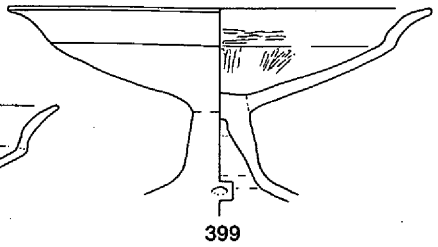
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
374	弥生土器	甕	11.8			良好	10YR8/2(灰白)	砂粒	
375	弥生土器	甕	14.3			良好	10YR6/3(褐灰)	砂粒	
376	弥生土器	甕	13.2			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
377	弥生土器	甕	18.4	8.1	30.4	良好	2.5YR5/6(明褐灰)	砂粒	口縁部に凹線
378	弥生土器	甕	14.6			良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線
379	弥生土器	甕	11.5			良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	
380	弥生土器	甕	13.2	5.1	27.2	良好	2.5YR7/2(灰黄)	砂粒	底部に焼成後の穿孔
381	弥生土器	甕	14.2			良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒	
382	弥生土器	甕	14.1			良好	7.5YR7/2(明褐灰)	砂粒	
383	弥生土器	壺(?)		3.5		良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	

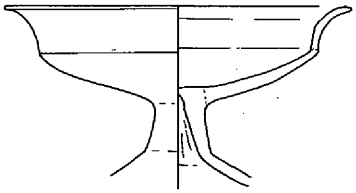


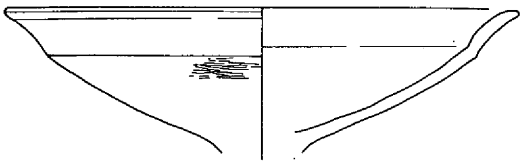
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
384	弥生土器	台付鉢	19.5	11.7	17.2	良好	5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	
385	弥生土器	台付鉢	15.0	9.1	15.8	良好	10YR8/2(灰白)	砂粒	
386	弥生土器	台付鉢	13.9	9.5	18.0	良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	
387	弥生土器	台付鉢	19.7	14.0	23.3	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒(多)	
388	弥生土器	高杯	(25.6)			良好	5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒	口縁端部を左右に拡張
389	弥生土器	高杯	21.2			良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	
390	弥生土器	高杯	23.2			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
391	弥生土器	高杯	20.9			良好	7.5YR8/3(浅黄橙)	砂粒	
392	弥生土器	高杯	21.5			良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	
393	弥生土器	高杯	22.2	15.2	11.1	良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	外面丹塗りか
394	弥生土器	高杯	22.4	12.1	14.7	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	
395	弥生土器	高杯	21.3	12.3	12.0	良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	
396	弥生土器	高杯	18.1	11.5	11.4	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	

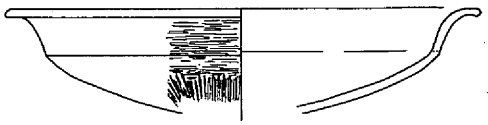

397

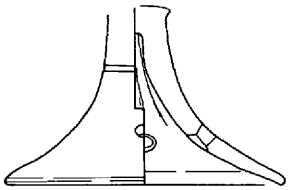

398

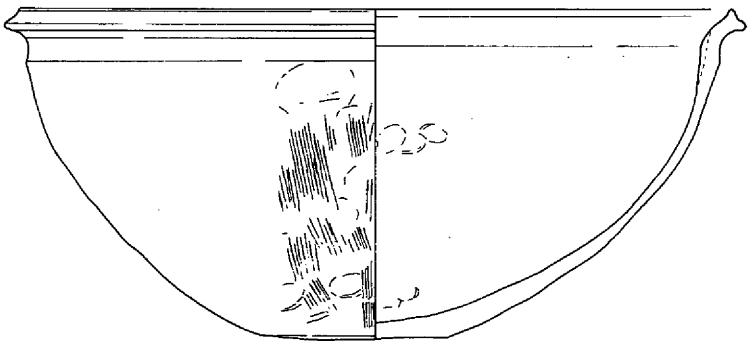

399

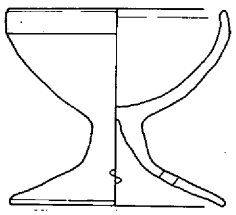

400

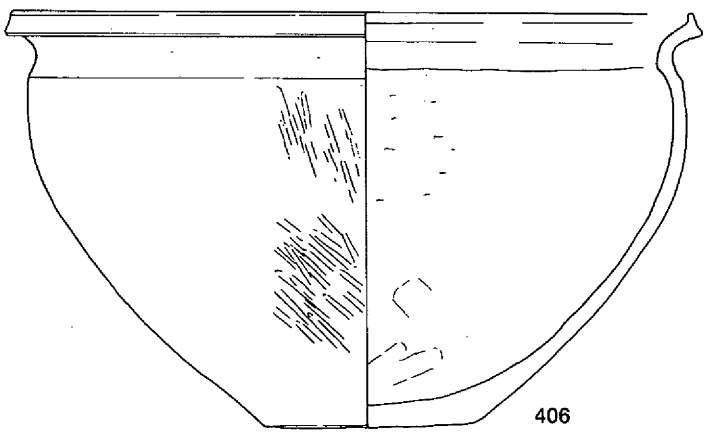

401


402

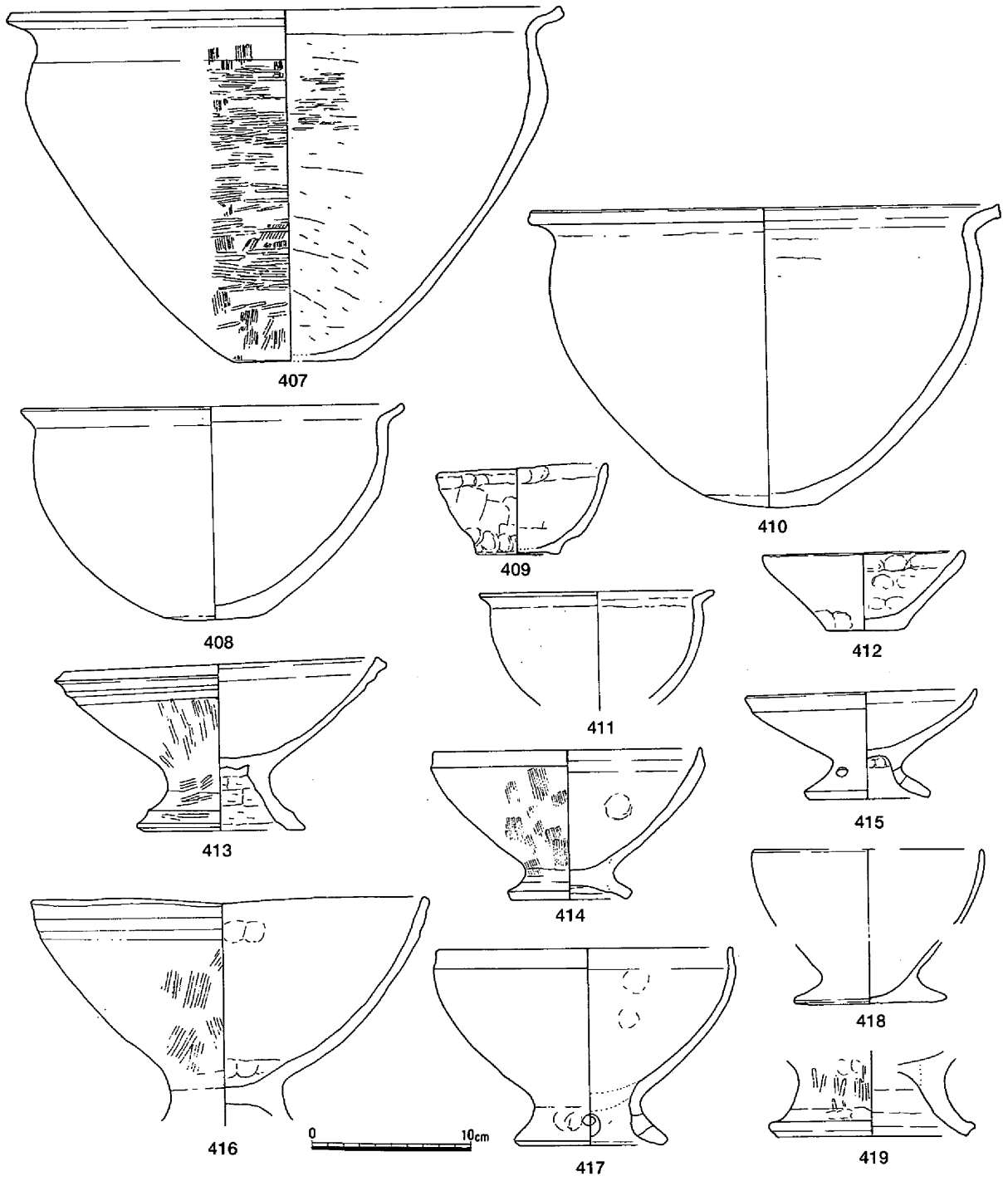

403


405

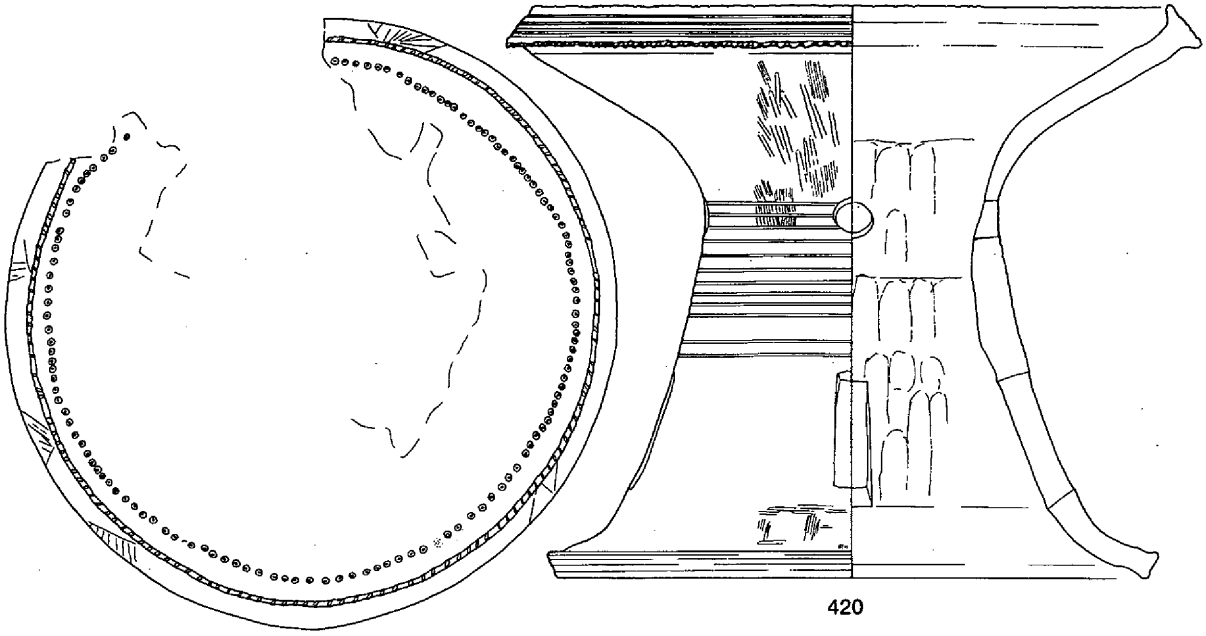

404


406

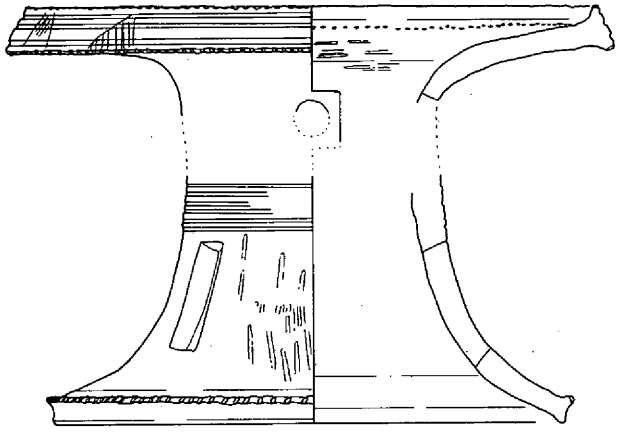
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
397	弥生土器	高杯	24.3			良好	2.5Y R5/3(にぶい赤褐)	砂粒	脚部下半に沈線
398	弥生土器	高杯	19.2			良好	10Y R6/3(にぶい黄橙)	砂粒	
399	弥生土器	高杯	22.2			良好	5Y R6/4(にぶい橙)	砂粒	
400	弥生土器	高杯	18.2			良好	5Y R5/4(にぶい赤褐)	砂粒	
401	弥生土器	高杯	26.5			良好	10Y R7/2(にぶい橙)	砂粒	
402	弥生土器	高杯	24.8			良好	10Y R7/3(にぶい黄橙)	砂粒	
403	弥生土器	高杯		15.0		良好	7.5Y R7/2(明灰褐)	砂粒	
404	弥生土器	高杯	11.6	11.3	10.4	良好	5Y R7/4(にぶい橙)	砂粒	
405	弥生土器	鉢	37.2	9.8	17.8	良好	10Y R6/4(にぶい黄橙)	砂粒	
406	弥生土器	鉢	35.5	10.9	11.7	良好	5Y R5/4(にぶい赤褐)	砂粒	



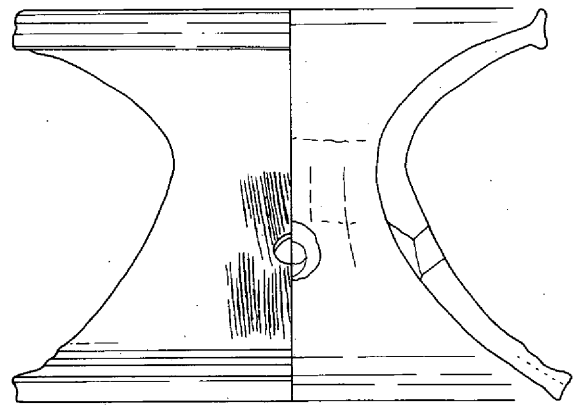
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
407	弥生土器	鉢	34.5	7.7	22.6	良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒	
408	弥生土器	鉢	23.6	6.3	13.7	良好	7.5YR5/6(明褐)	砂粒	
409	弥生土器	鉢	11.0	5.4	5.9	良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒	
410	弥生土器	鉢	29.6	8.4	19.2	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	
411	弥生土器	鉢	14.8			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
412	弥生土器	鉢	12.8	5.0	5.0	良好	7.5YR5/2(灰褐)	砂粒	
413	弥生土器	台付鉢	19.9	8.5	11.1	良好	5YR5/3(にぶい赤褐)	砂粒	
414	弥生土器	台付鉢	16.9	7.4	9.6	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
415	弥生土器	台付鉢	14.7	7.7	7.0	良好	7.5YR7/2(明褐灰)	砂粒	
416	弥生土器	台付鉢	24.7			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
417	弥生土器	台付鉢	18.8	9.2	12.6	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
418	弥生土器	台付鉢	14.7	9.9		良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	
419	弥生土器	台付鉢		12.0		良好	2.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	



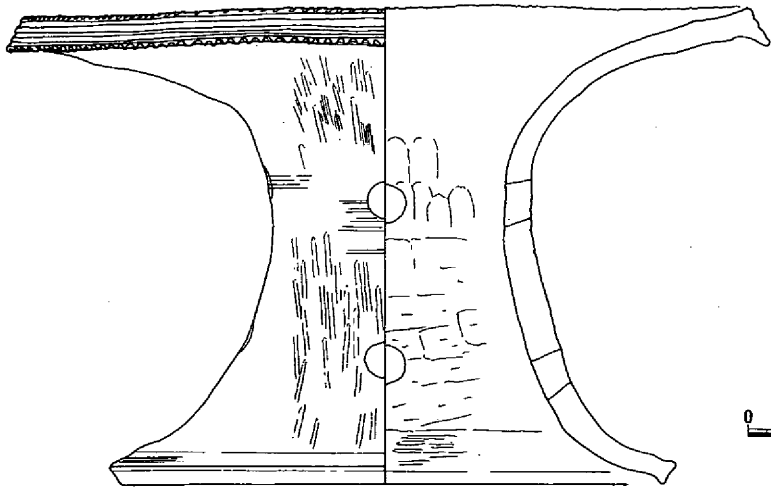
420



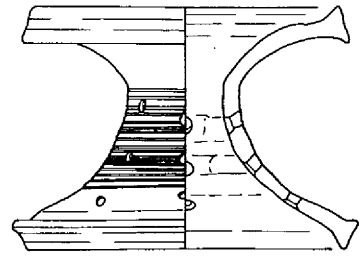
421



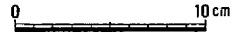
422



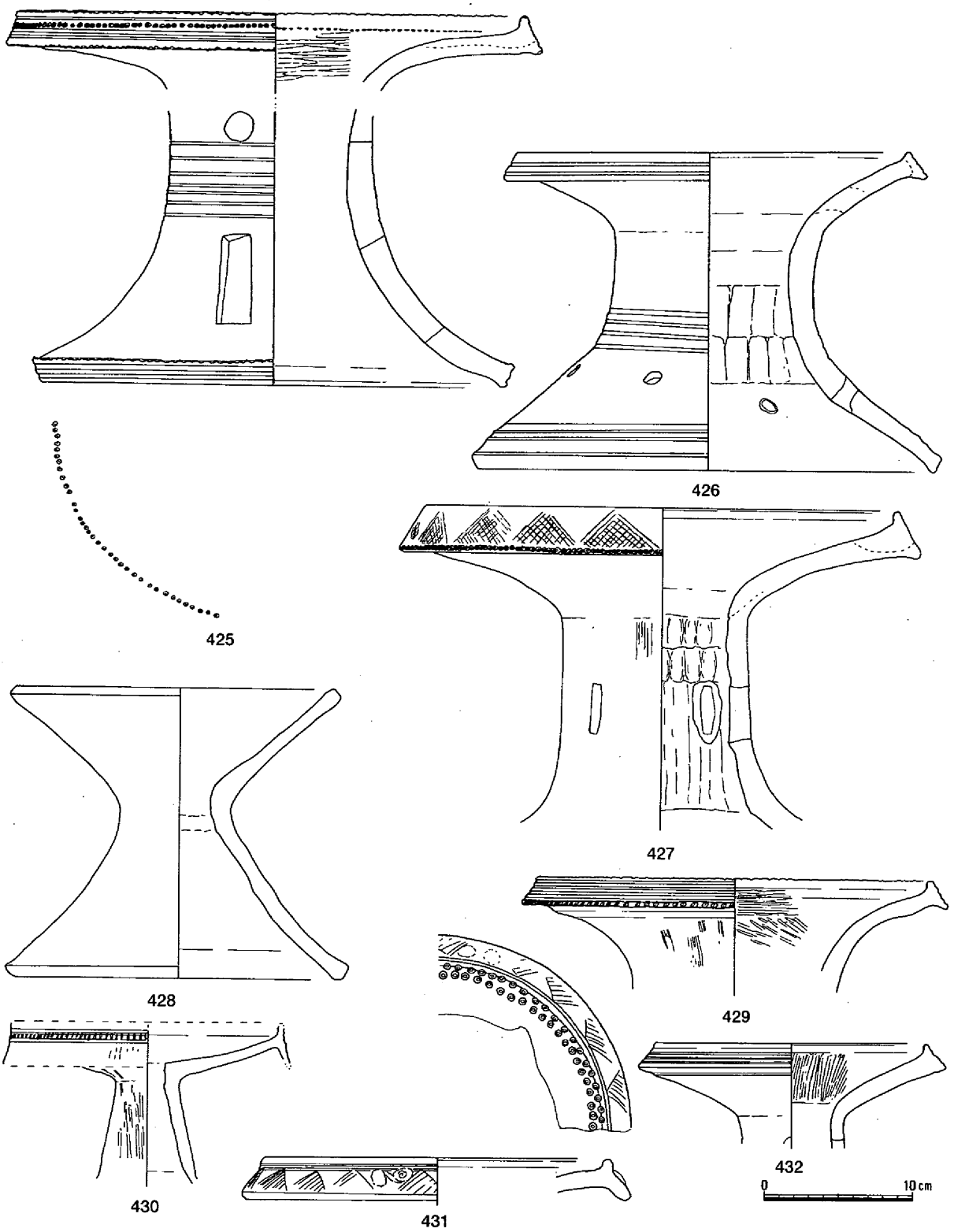
423



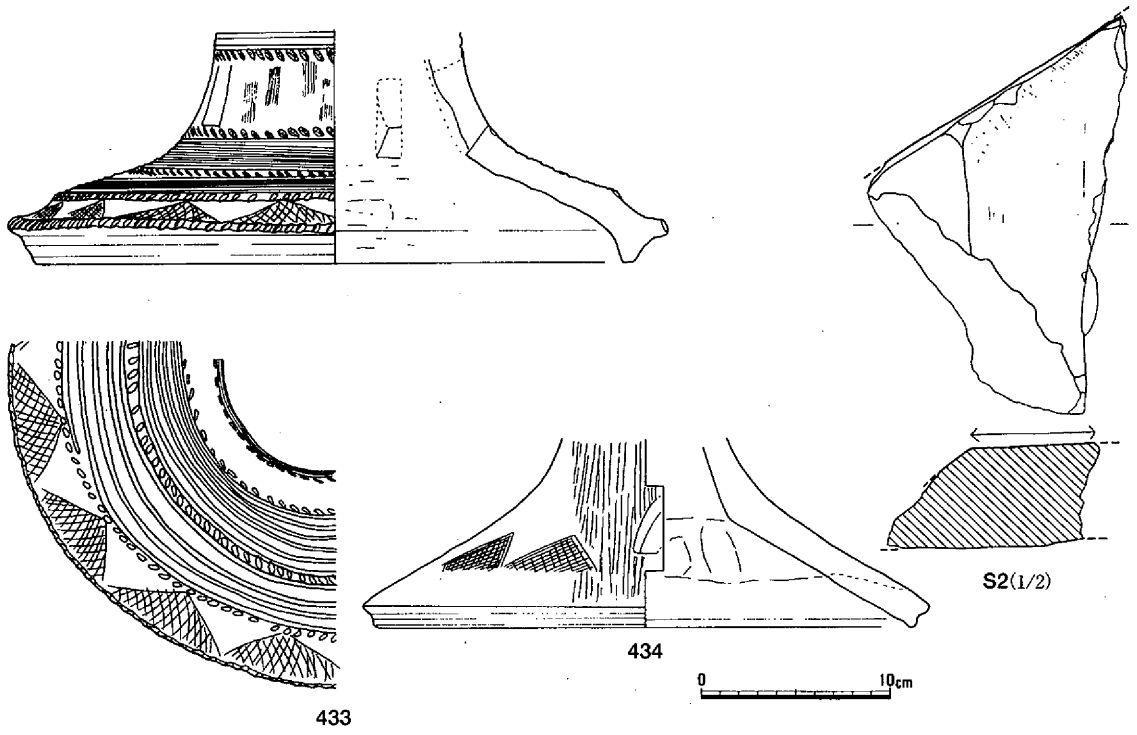
424



掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
420	弥生土器	器台	33.1	30.4	30.5	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	筒部に円と方形の透し
421	弥生土器	器台	30.0	27.1	(22.0)	良好	10YR8/2(灰白)	砂粒	口縁部に鋸歯文　内面に刺突文
422	弥生土器	器台	27.0	28.0	20.9	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	筒部に円形透し４個
423	弥生土器	器台	38.2	28.7	25.4	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	筒部に円形透し２段４方向
424	弥生土器	器台	16.0	16.6	12.8	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	筒部沈線は単線



掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
425	弥生土器	器台	33.4	30.6	(25.0)	良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	筒部に円と方形の透し　口縁部に竹管文・キザミ
426	弥生土器	器台	26.2	30.4	21.7	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	筒部に円形透し６個・凹線　脚部に凹線
427	弥生土器	器台	31.6			良好	2.5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒	口縁部に鋸歯文
428	弥生土器	器台	21.2	21.5	19.6	良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	
429	弥生土器	器台	26.4			良好	2.5YR8/2(灰白)	砂粒	口縁部に凹線
430	弥生土器	器台				良好	10YR8/2(灰白)	砂粒	口縁部に刺突文
431	弥生土器	器台	22.8			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に鋸歯文と浮文
432	弥生土器	器台	18.4			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底(脚)径	法量(cm) 器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
433	弥生土器	器台		30.9		良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	裾部に刺突文と凹線を交互に施文・鋸歯文
434	弥生土器	器台		(28.2)		良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	台部に鋸歯文

掲載番号	器種	材質	法量(mm) 最大長	法量(mm) 最大幅	法量(mm) 最大厚	重量(g)	備考
S2	砥石	頁岩	105.0	69.0	27.0	192.9	

334と335は口縁端部を肥厚気味にし、退化凹線を施文する。336と337は口縁端部を上下に内傾させて拡張し、その端部にキザミを付す。338は口縁端部が上方に拡張し、ヨコナデの凹部が認められる。339は上東式の長頸壺ではないが、口縁端部はわずかに肥厚気味となり凹線を施す。緩やかに屈曲する頸部には螺旋と思われる沈線が、肩部には連続刺突文が施文される。340と341は口縁端部が上方に、下方はさらに屈曲させ外方に拡張する。341の口縁部には斜めに線を充填した鋸歯文と「S」字状浮文が、内面には竹管文が2列施文されている。342は口縁端部をヨコナデにより肥厚させている。頸部沈線は螺旋かどうか不明、内面には2列で5ヵ所の刺突文が認められる。343～348は、口縁部の欠失したものである。343は、肩部の刺突は羽状に施される。348は底部と胴部の接合面がないが、胎土、焼成から同一個体と判断した。

349～353・355は、緩やかに外反する頸部から大きく張り出す胴部を持つ壺である。349は、外反する口縁端部を肥厚させ、頸部から胴部の移行は撫で肩となる。350は、手捏ね状の長頸壺である。351は、口縁端部を摘み上げ状に肥厚させる。胴部と底部は胎土と焼成内容から同一個体で、器面調整は剝落のため不詳である。352と353は口縁端部を上下に肥厚させ、退化凹線を施文する。器面調整は352がハケ、353はヘラミガキが認められる。355は口縁端部を上下に拡張し、ヨコナデによる条線が認められる。器面調整は、頸部から胴部下半にかけてハケによる。

354と356は、口縁端部に変化がないものである。354は胴部の接合点が見られないが、胎土と焼成などから同一個体とした。356は直立する頸部から外方に屈曲させる。

357～360は、直口を持つ壺である。357は、玉葱形の胴部に鶴首状の口縁部を作る。胴部には、凸帯を付し、さらに3本対の棒状浮文と円形浮文状のものが見られる。358と359は直口する口縁部で脚部を有する。360は、短めの頸部となるか。

362～382は甕で、376までは口縁端部を内傾させ上下に肥厚させる。362は口縁部に退化凹線が、器面は剝離のため不明瞭であるがヘラの調整が認められる。363は口縁部に退化凹線が、器面は剝離のため不明瞭であるがハケの調整が認められる。底部内面に、煤が付着している。364は口縁端部に退化凹線が、器面外面の頸部から胴部上半にヨコヘラミガキを行う。365は口縁部に退化凹線が、器面は剝離のため不明瞭である。366の口縁部の上方への肥厚は拡張に近く、器面は剝離のため不明瞭であるが、ハケの後ヘラミガキを行っているか。367は口縁部に退化凹線で、外面は肩部から底部にかけてタテヘラミガキが認められる。底部は平底で、ヘラミガキを行う。368は肩部と胴部に用いられるハケが異なる。外面には、肩部から底部まで煤が付着する。369は、上方の肥厚が拡張気味である。接合部がないが、同一個体である。調整は、磨滅で詳細不明である。370と371は口縁部に凹線を施文する。372は上方に、373は下方に拡張する。374は口縁部に細い沈線を、外面にはヘラミガキが認められる。375と376は、器面の剝離が著しく調整は不詳である。377・378・380・381は、口縁端部を上方に拡張させる。377・378・380は口縁部に退化凹線を、胴部調整はタテハケが行われる。381は、口縁部の文様の有無は、磨滅のため不明である。379と382は「く」の字に屈曲する頸部から外反する口縁部となる。

384～387は、台付鉢としたが甕としてもよいものである。口縁端部は387が細く丸くなり、他は平坦とする。何れも低い台部であるが、385と386は透しが存在する。台と体部との関係は、384が台の貼付け、385と387は円盤充塡の手法がとられているのが観察できた。

388～404は、高杯である。388は口縁端部を「T」の字状に拡張し、退化凹線を施文する。389～392は、外反する口縁部内面に屈曲を有する。いずれも器面の剝落が著しく、調整が不明瞭であるが391と392は口縁内面に凹線の施文の痕跡が認められる。393の口縁屈曲部は、粘土を継ぎ足して形成する。その継ぎ足し部分外面には、ヨコナデによる凹部が認められる。脚部裾の透し孔は5個である。394は外反する口縁端部を丸く納め、ヨコナデによる凹線状がわずかに認められる。裾部は「ハ」の字状に開き、口縁部と同様なヨコナデが見られる。裾部の透し孔は6個、接合は円盤充塡である。395～402は、口縁部が大きく外方へ屈曲する。397は、口縁屈曲部と脚屈曲部に沈線を施文する。404は、鉢状の杯部となる。

405～419は、鉢である。405は口縁端部上下を肥厚、口縁屈曲部内面は、粘土を付して形成する。406は口縁端部を肥厚し、上方へ拡張する。外面調整はヘラミガキ、内面はヘラケズリ後ヘラミガキを行う。底部は平底で、ヘラミガキを行う。407は口縁端部を平坦にする。外面調整はタテハケ後ヨコヘラミガキ、内面はヨコヘラケズリ後肩部まではヨコヘラミガキを行う。底部は平底で、調整はヘラケズリ後ヘラミガキが見られる。408は器面の剝離が著しく口縁端部などの図は剝落した状態で図化している。底部は、丸い傾向を示している。410は器面が剝落しているため、底部は本来は平底の可能性がある。409は、底部をユビオサエにより摘み出す。

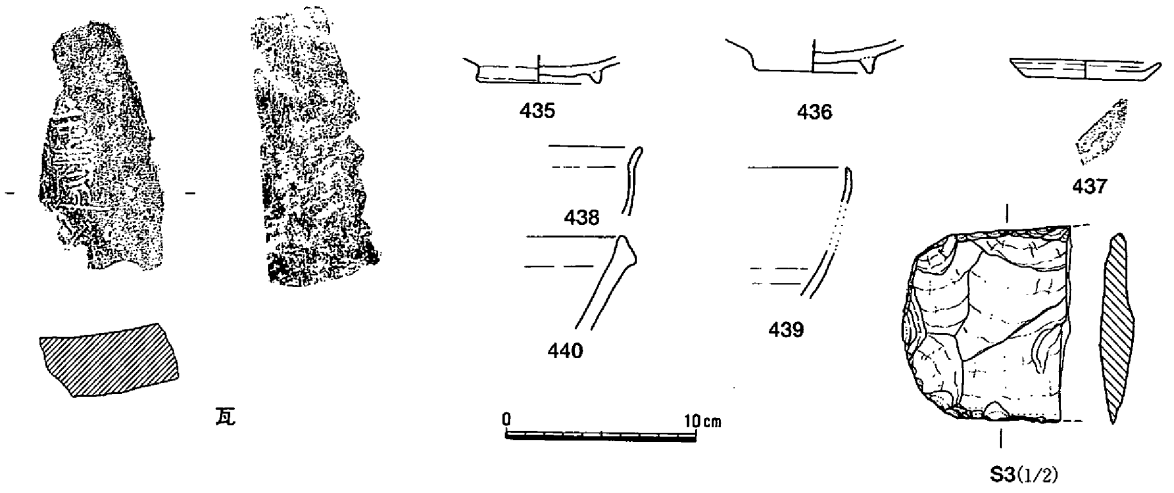
413～419は、台部が付される。416と413は口縁部にヨコナデの凹部を、台部にも同様な処理を認める。414・415・417は口縁部を屈曲させ、端部を丸く納める。415と417には、台部に透しが存在する。

420～434は、器台である。420は内傾する口縁端部に退化凹線、上下端にキザミを施す。筒部には、

磨滅で不明瞭であるが沈線が12本認められる。裾端部はヨコナデにより肥厚させ、退化凹線を施文する。透しは筒部上半に円形、下半には方形のものが4個対で認められる。内面調整は、ユビオサエ、ナデが認められる。421は接合面が認められないが、胎土、焼成から同一個体とした。口縁部は内傾する口縁端部に退化凹線、上下端にキザミを施す。鋸歯文は俯瞰図に示す位置に認められるが、磨滅のため全周するか不詳である。内面には、竹管文が刺突される。筒部には、沈線を認める。裾端部はナデにより凹部を持ち、上端にはキザミを施す。透し孔は、筒部上半に円形、下半には方形が3個認められる。円形透しの数は不明であるが、方形透しとは縦列しない。422は拡張する口縁端部にヨコナデによる凹部となる。裾部には、凹線が認められる。透しは、円形が4個認められる。外面調整はタテハケが観察される。423は口縁端部を斜め下方に拡張し、退化凹線とキザミを施す。筒部には磨滅のため不明瞭ではあるが、沈線が認められる。裾部には、沈線が認められる。透し孔は、円形が縦列で4個存在する。外面調整はタテハケ後タテヘラミガキ、内面は筒部に押圧とヨコヘラケズリさらに下半にはヨコヘラミガキを行う。424は口縁と裾の端部は、肥厚させて拡張させる。筒部には、剝落して不明瞭であるが単線の沈線が施文される。透しは、縦列に3個で5ヵ所に認められる。内外面とも、丹塗がされている。425は、拡張した口縁端部に退化凹線、上下端にキザミを施す。退化凹線の部分には竹管の刺突、内面にも同様の刺突が巡らされる。筒部には、沈線が認められる。裾端部は退化凹線、上端には刺突が施され、裾末端には竹管が施文される。透しは、筒部沈線文の上下に円形と方形が認められるが、破片がなく単位は不明である。内面調整は、受部にヨコヘラミガキが認められる。426は、口縁端部に退化凹線を施す。筒部には、剝落して不詳であるが凹線が認められる。裾部には凹線が施文され、端部はヨコナデで肥厚する。透しは、裾部上半に円形のものが6個存在する。427は、粘土を足して口縁部をつくる。端部を斜めに肥厚させて拡張し、充塡鋸歯文と竹管文を施文する。透しは、筒部に方形のものが5個認められるが、大きさはそれぞれ異なる。内面調整は、押圧とシボリ痕が認められる。428は「く」の字状の形態を呈するもので、器面の剝離が著しく詳細は不明である。429は口縁端部を内傾して拡張し退化凹線、上下端にキザミを施す。430は狭まる筒部から大きく外方へ屈曲し、端部を上下に拡張する。端部には凹線上に刺突、その下にはわずかに鋸歯文と思われる痕跡が認められる。431は口縁端部に斜線充塡の鋸歯文と浮文、内面には2列の竹管文が施文される。432は口縁端部を肥厚し、上方に拡張させ退化凹線を施文する。筒部には、円形の透しが一部遺存している。内面調整は、タテヘラミガキを行う。433は筒部下方から沈線－刺突－刺突－沈線－刺突－沈線－刺突－充塡鋸歯文－刺突の順で施文される。3段目の沈線は、螺旋による施文の可能性がある。434は端部は、ヨコナデにより凹部を形成する。裾部には、充塡鋸歯文と方形の透しがそれぞれ2個遺存している。

S2は砥石で、材質は頁岩である。（下澤）

（９）遺構に伴わない遺物



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
435	土師質土器	高台付椀		6.5		良好	10ＹＲ8/2(灰白)	砂粒	
436	土師質土器	高台付椀		6.2		良好	10ＹＲ8/2(灰白)	砂粒	
437	土師質土器	小皿	7.9	6.0	10.0	良好	7.5ＹＲ7/3(にぶい橙)	砂粒	内面に煤付着　底部糸切り　早島式
438	磁器	鉢				良好	N7/0(灰白)釉 10Ｙ6/1(灰)		青磁
439	磁器	碗				良好	10Ｙ4/3(赤褐)釉 N1.5/0(黒)		天目
440	陶器	鉢				良好	口縁部の一部 N5/0(灰)7.5N6/1(灰)	砂粒	魚住焼

掲載番号	出土調査区	種別	法量	特徴・備考
瓦	下庄Ⅰ	平瓦	現存長14.6cm　幅6.5cm　厚さ3.3cm	上面に文字を線刻　一部煤

掲載番号	器種	材質	法量(mm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	備考
Ｓ３	スクレイパー	サヌカイト	44.5	52.5	9.5	28.9	

遺構に伴わない遺物のほとんどはIa区からの出土で、石器がIb区からのものである。出土した土層は、第１図で示した第４層の黒褐色土までの層から検出された。

435と**436**は、高台を付す早島式の椀である。いずれも、張り付け高台であり、付したあとからナデを行っている。高台は、台形状の不安定感で、三角形状となり雑な作りとなっている。**437**は、早島式の小皿である。底部は糸切りで、内面には煤が認められる。**438**は、青磁の鉢である。**439**は、天目の碗の破片である。**440**は、魚住焼の鉢である。**瓦**は厚さ3.3cmほどで下面にタタキメが、上面には布目が認められる。上面には、２字から３字の文字が線刻されている。解読については、文献の関係者に見ていただき検討したが、明確にできなかった。

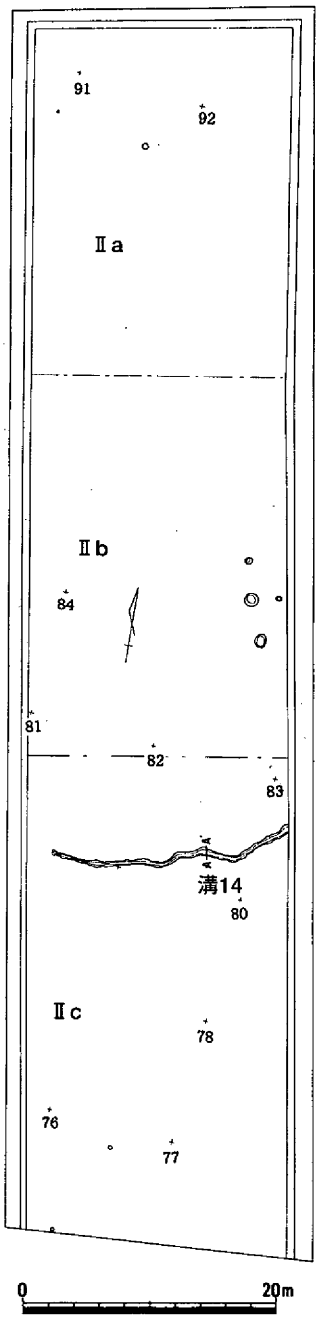
S3はスクレイパーで、側面に自然面を残す。背部は磨滅が、刃部では磨り減りが認められる。

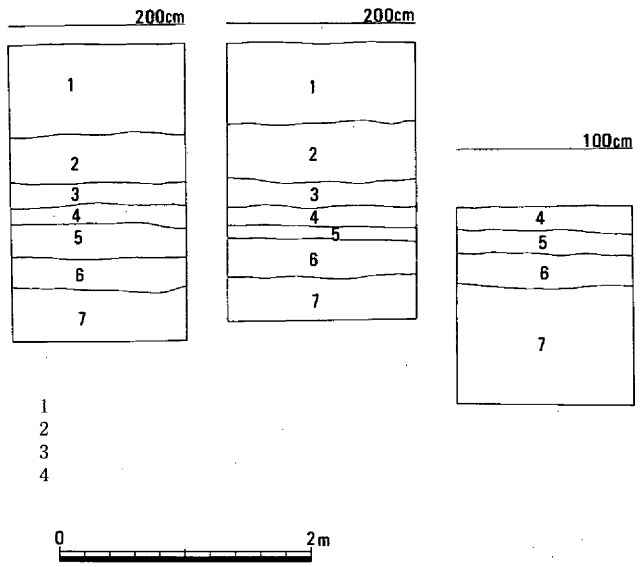
（下澤）

２　Ⅱ区の調査

Ⅱ区は、用水と農道をまたいだ南側の長さ99mほどの調査区である。現況で駐車場となっている関係から、この造成のため旧水田面より60～70cmの盛り土がなされている。調査区の長さから、北からａ・ｂ・ｃとし、調査に入る。しかし、排土量が多く遺構密度が薄いことがⅠ区の調査で予想されていたことから、Ⅱ区全面について第４層の黄灰色粘質土上面まで機械による排土を行った。

堆積土は、第４層がⅠ区からの黄灰色系の基盤が認められる。この下層になると砂を含み、第７層では植物遺体を多く含むようになる。検出された遺構は、溝と数個のピットであり、遺物は認められなかった。　（下澤）



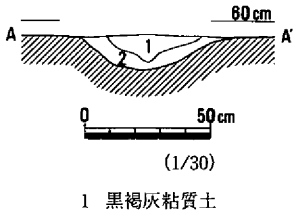


第６図　Ⅱ区遺構配置図 (1/600) **・土層断面図** (1/60)

（１）溝

溝は、途中で消えているがⅡ区において検出された。この他には、溝の痕跡を認めることはなかった。　（下澤）

溝14



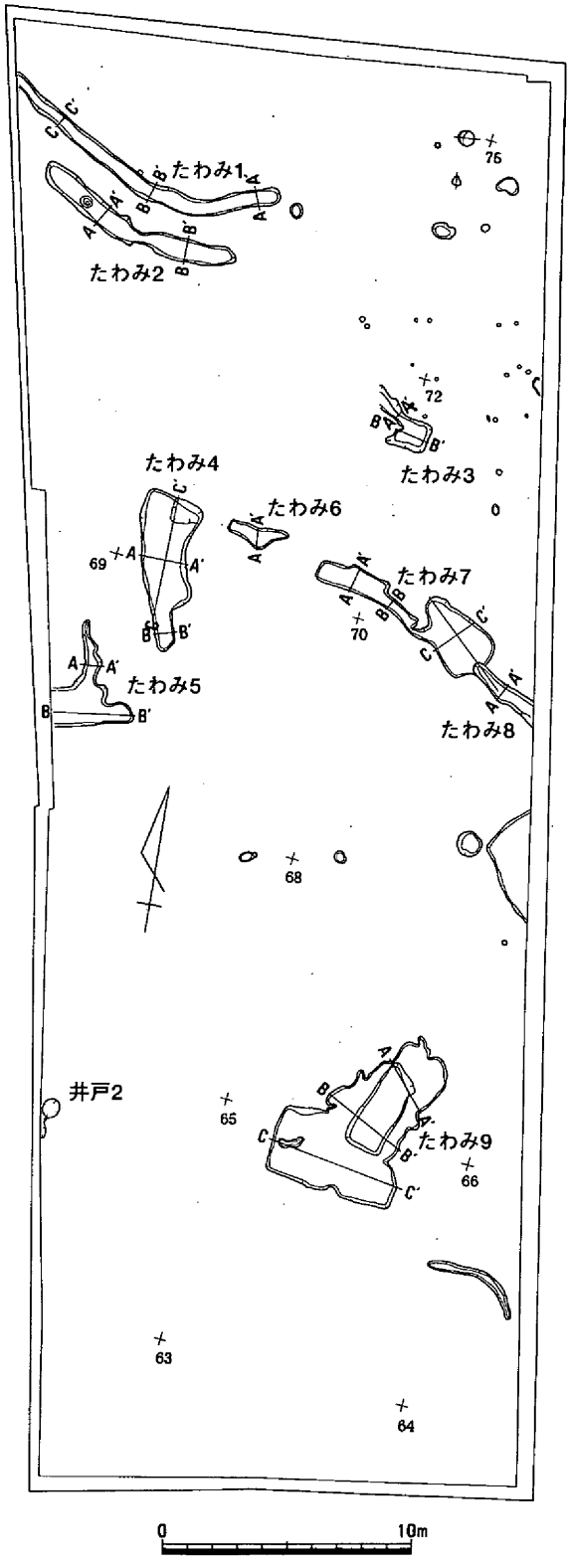
(1/30)

1　黒褐灰粘質土
2　黄灰色粘質土

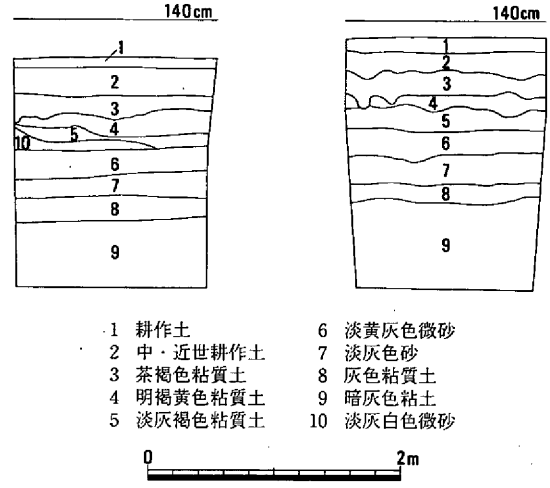
溝14はⅡｂ区調査区の南寄りに、東西方向に検出された。西側は、浅くなり消えている。平面状は凹凸が目立ち、東に行くにしたがい幅が広くなるなど人為的な溝とは考えがたい。溝の西と東での高低差は、15.5cm東側が低くなっている。時期は、遺物がなく判断しがたいが、溝の埋土が弥生後期のそれと近いことから、その時期の前後に相当することが思考される。　（下澤）

3　Ⅲ区の調査

Ⅲ区は、長さ58mの調査区である。基盤層は第４層の明褐黄色粘質土であるが、Ⅱ区とⅢ区の第７層と第９層はレベル的に同じ層位に相当すると見られるが異なっている。遺構は、いずれも基盤面で確認されたが、人為的な物は井戸であり、その他の、特にたわみについては判断しかねるのである。時期は、井戸から弥生後期の小片が確認されたのみである。（下澤）



第７図　Ⅲ区遺構配置図（1/300）



第８図　Ⅲ区土層断面図（1/60）

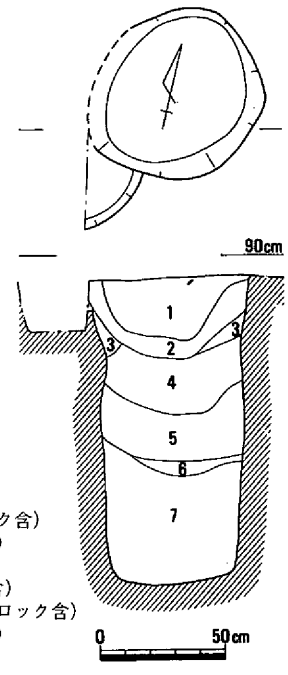
（１）井戸

調査区の南西寄りに検出されたもので、最も南に位置する遺構である。（下澤）

井戸２

井戸２はたわみ９の西に位置し、第７層は下層ほど砂質となる。第６層からは草木がそのままの状態で認められている。

出土遺物は、弥生土器の小片が少量出土している。調査時点で、底から湧水があった。（築地）



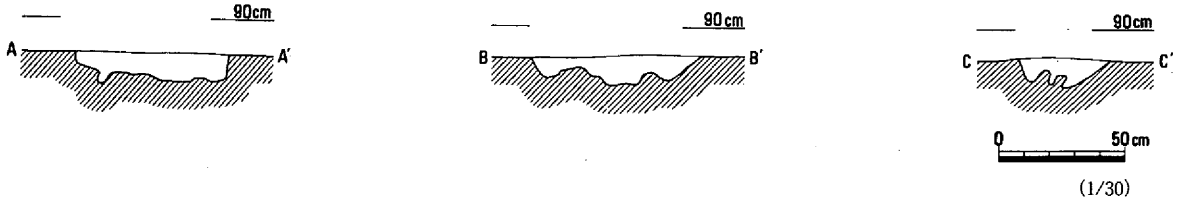
（1/30）

遺構名	位　置（調査区）	規模(cm) 上面径	底面径	深さ(底面海抜高)	平面形	断面形	土器	時期	備考
井戸2	下庄Ⅲ	70×60	50×62	121(-39)	円	箱	○	弥・末	

（２）たわみ

基盤層である明褐黄色粘質土の面で検出され、いずれも不定形の形態を呈する。各たわみの埋土は、黒褐色粘質土である。（下澤）

たわみ１

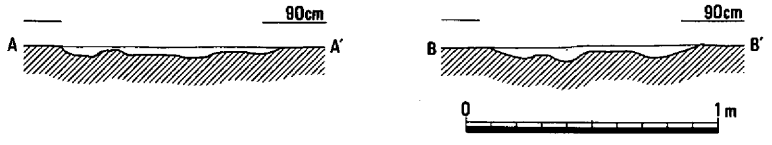


(1/30)

遺構名	位　置（調査区）	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	土器	時期	備考
たわみ１	下庄Ⅲ	－	65	22	長楕円形			

たわみ１はたわみ２の北側に接してあり、ほぼ弧状に平行して認められた。深さは22cm前後を測り、底面の状態は凹凸が多く認められる。出土遺物はなく、埋土からして弥生期に属すると思われる。（下澤）

たわみ２

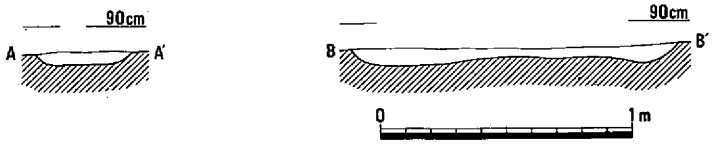


(1/30)

遺構名	位　置（調査区）	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	土器	時期	備考
たわみ２	下庄Ⅲ	840	80	10	長楕円形			

たわみ２はたわみ１の南側に接し、ほぼ弧状に平行して認められた。深さは10cm前後を測り、底面の状態は凹凸が多く認められる。これはたわみ１と同じような形態を示していることから、同一の遺構を形成していたことが思考される。出土遺物はなく、埋土からして弥生期に属すると思われる。（下澤）

たわみ３

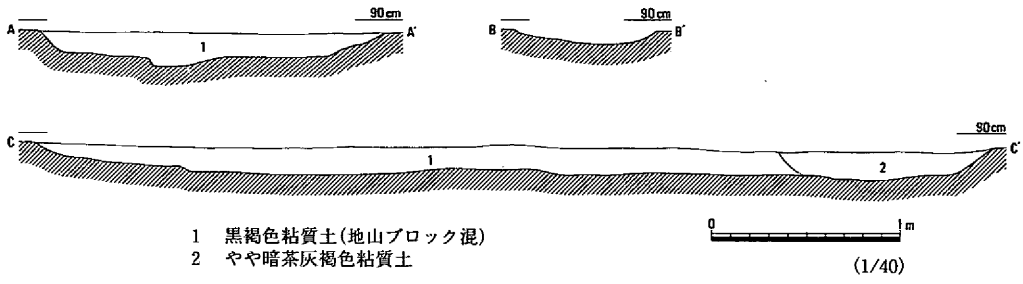


(1/30)

遺構名	位　置（調査区）	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	土器	時期	備考
たわみ３	下庄Ⅲ	300	123	8	不整形			

たわみ３はたわみ２の南東方向にあり、一部を第一次調査で確認している。不定形な形態を呈し、深さは8cm前後を測り、底は比較的平坦である。出土遺物はなく、埋土からして弥生期に属すると思われる。（下澤）

たわみ4



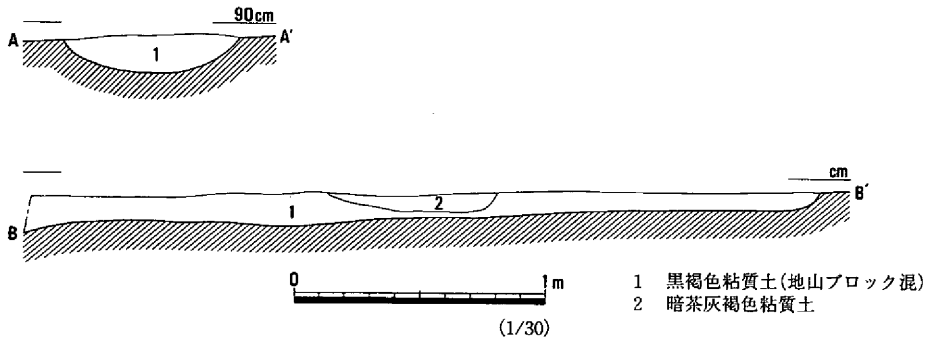
1　黒褐色粘質土(地山ブロック混)
2　やや暗茶灰褐色粘質土

(1/40)

遺構名	位　置 (調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	土器	時期	備考
たわみ4	下庄Ⅲ	650	210	18	不整形			

たわみ4はたわみ6の西に接し、南北に不定形な形態を呈する。深さは18cm前後を測り、底は比較的平坦である。たわみ北東側コーナーの一段深い部分は、土層断面に示されるようにたわみ6が途切れているがここまで延びていたことが思考される。出土遺物はなく、検出土層および埋土からして弥生期に属すると思われる。　(下澤)

たわみ5

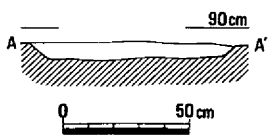


1　黒褐色粘質土(地山ブロック混)
2　暗茶灰褐色粘質土

(1/30)

遺構名	位　置 (調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	土器	時期	備考
たわみ5	下庄Ⅲ	(330)	149	12	不整形			

たわみ5はたわみ4の南西側に位置し、不定形な形態を呈する。北側に延びる部分の壁は、不規則であるが底は比較的平坦である。深さは12cm前後を測り、底は平坦となる。出土遺物はなく、検出された土層および埋土からして弥生期に属すると思われる。　(下澤)



(1/30)

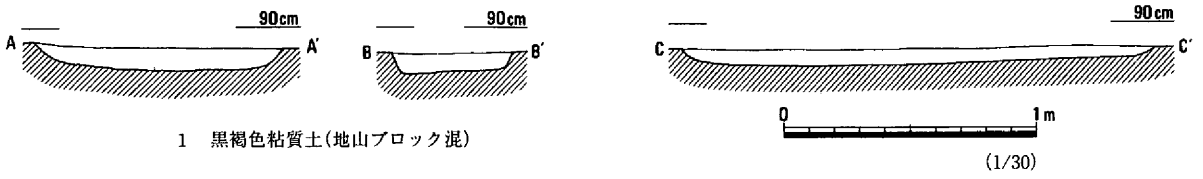
1　黒褐色粘質土(地山ブロック混)

たわみ6

たわみ6はたわみ4の東側に位置し、長さの短い形態を呈する。深さ6cm前後を測り、底は平坦となる。検出の状態からたわみ4と重複している。出土遺物はなく、検出された土層および埋土からして弥生期に属すると思われる。　(下澤)

遺構名	位　置 (調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	土器	時期	備考
たわみ6	下庄Ⅲ	242	85	6	不整形			

たわみ7



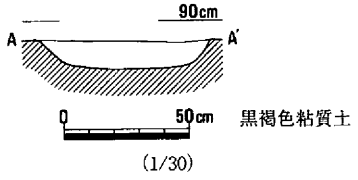
1　黒褐色粘質土(地山ブロック混)

(1/30)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	土器	時期	備考
たわみ7	下庄Ⅲ	780	195	10	不整形			

たわみ7はたわみ6の東側に位置し、不整形で2個のたわみを接合した形態を呈するが前後関係は認められていない。深さは10cm前後で、底は平坦である。出土遺物はなく、検出された土層および埋土からして弥生期に属すると思われる。(下澤)

たわみ8

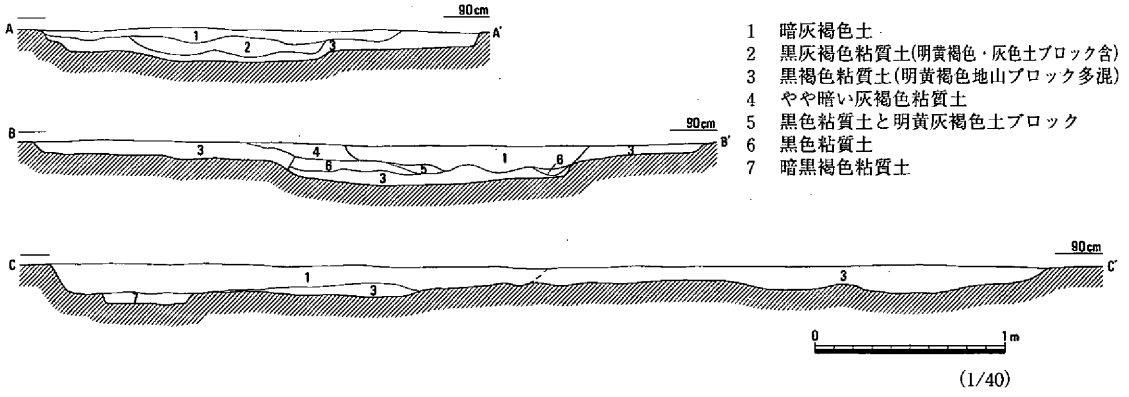


(1/30)

たわみ8はたわみ7の南東辺で重複している。溝状の形態を呈し、深さは12cm前後を測り、底は平坦となる。検出された土層および埋土からして弥生期に属すると思われる。(下澤)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	土器	時期	備考
たわみ8	下庄Ⅲ	(310)	70	12	不整形			

たわみ9



1　暗灰褐色土
2　黒灰褐色粘質土(明黄褐色・灰色土ブロック含)
3　黒褐色粘質土(明黄褐色地山ブロック多混)
4　やや暗い灰褐色粘質土
5　黒色粘質土と明黄灰褐色土ブロック
6　黒色粘質土
7　暗黒褐色粘質土

(1/40)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	土器	時期	備考
たわみ9	下庄Ⅲ	720	621	15	不整形			

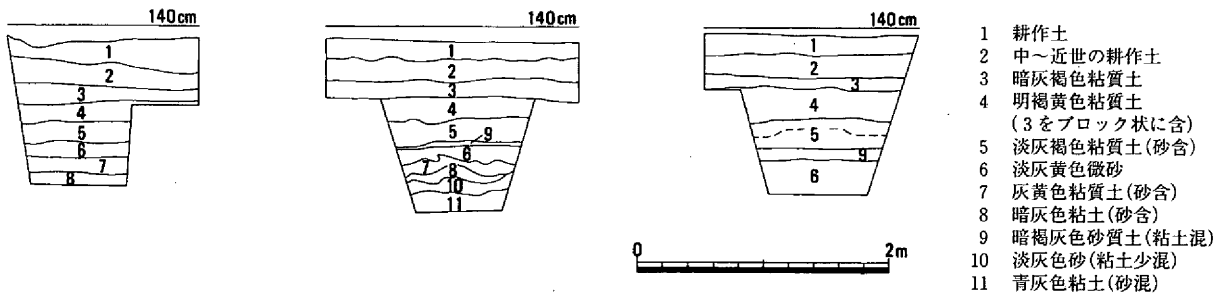
たわみ9は井戸2の東側に位置し、一回り小さいたわみと重複している。東西方向と北東から南西方向の方形の形態を呈すが、後者の壁は凹凸があり、不整形となる。底面は比較的平坦となり、埋土は他のたわみと同様に黒褐色粘質土を基調とするが、明黄褐色土をブロック状に含む。重複する内側のたわみの最下層の埋土は黒褐色粘質土で、外側のものと変化を認めていない。出土遺物はなく、検出された土層および埋土からして弥生期に属すると思われる。(下澤)

4　Ⅳ区の調査

Ⅲ区の調査においては、南に行くにしたがい遺構密度が薄くなることが理解されていた。また、当道路付設に伴い駐車場の移転先である西側部分の倉敷市による確認調査では、遺構などは確認されなかった。このようなことから、全面調査ではなく第3図で示すように中央に幅3mのトレンチを入れ状態を見ることとした。その結果、他の調査区で認められた基盤層である第4層の明褐黄色粘質土が、北と南端で7cmほどの高低差をもって堆積していることが確認された。しかしながら、遺構、遺物は認めることはできなかった。調査区西端に追加の確認のために土層観察用とともにトレンチを設けた。遺構、遺物においては、中央トレンチと同様に確認することができなかった。

土層については、基盤層である第4層は、Ⅲ区においてそのレベルが80cm前後であったが、Ⅳ区においてもその状況に変化はない。この堆積層の厚さは、Ⅲ区で凹み状となる所において堆積が薄くなり10cmに満たない状況が観察されている。これに対しⅣ区においては、全体的な堆積の状況を把握するに至らなかったが、50cm、20cm、10cmと南に行くにしたがい堆積の厚さを減じていくことが確認された。第4層以下の堆積層は灰色粘土系を基調とし、全ての層に砂を含む状態になる。当地点から50mほど南の所には東西方向に走る旧2号線があり、この関連の工事で砂と貝が出てくることが知られている。

このようなことから、Ⅳ区については基盤層は認められるが、その地勢条件から使用するには安定性に欠けていたことが窺われるのである。　（下澤）



第9図　Ⅳ区土層断面図　(1/60)

第4章　上東遺跡

第1節　調査区の概要

上東遺跡Ⅰ区は、下庄遺跡との境となる用水の北側3,436㎡である。その内のIa区は836㎡、Ib･c区はそれぞれ1,300㎡である。Ia区は、下庄遺跡Ⅱb区で認められた微高地続きで、中近世と弥生後期の二面の遺構面が認められた。

Ib区は、Ia区から続く微高地の下がり部分に相当し、多くの堆積物が検出された。この下がり部分には、弥生後期末の溝を切って古墳前半から6世紀後半にかけての河道が認められた。また、7世紀に形成されたと考えられる貝塚が、微高地側斜面に認められた。これらの河道が埋没した段階で、水田が営まれ、灰色の土層の面が認めることができた。耕作土直下では、馬と牛の骨の散布を検出している。

Ic区は、調査区の北東から南西方向に土手状の高まりを検出する。北西側は傾斜がきつくなるが、南東側は緩やかな傾斜を保ち、北東側に行くにつれて幅を広げる様相を呈する。この南東側斜面を傾斜に沿いながら砂を排土する過程で多量の土器を検出したのである。

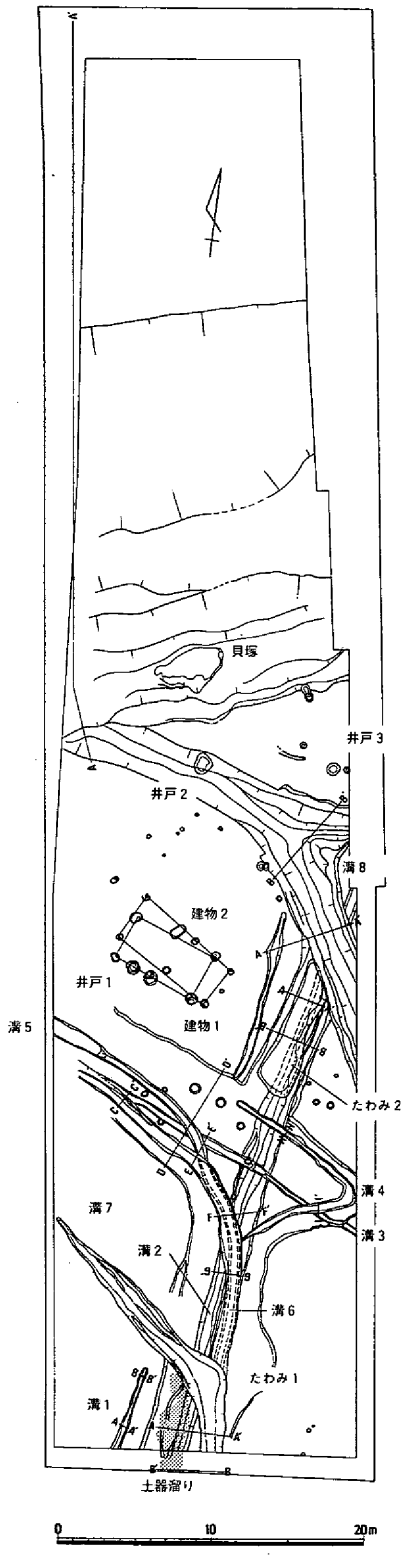
Ⅱ区は、第1章第3図に示した新幹線高架橋の南に位置する。堆積土は、灰褐色系の粘質土の水平堆積であり、土層の変化は認められなかった。このようなことから、当地区の調査は、トレンチで済ませることになった。（下澤）

第2節　調査の概要

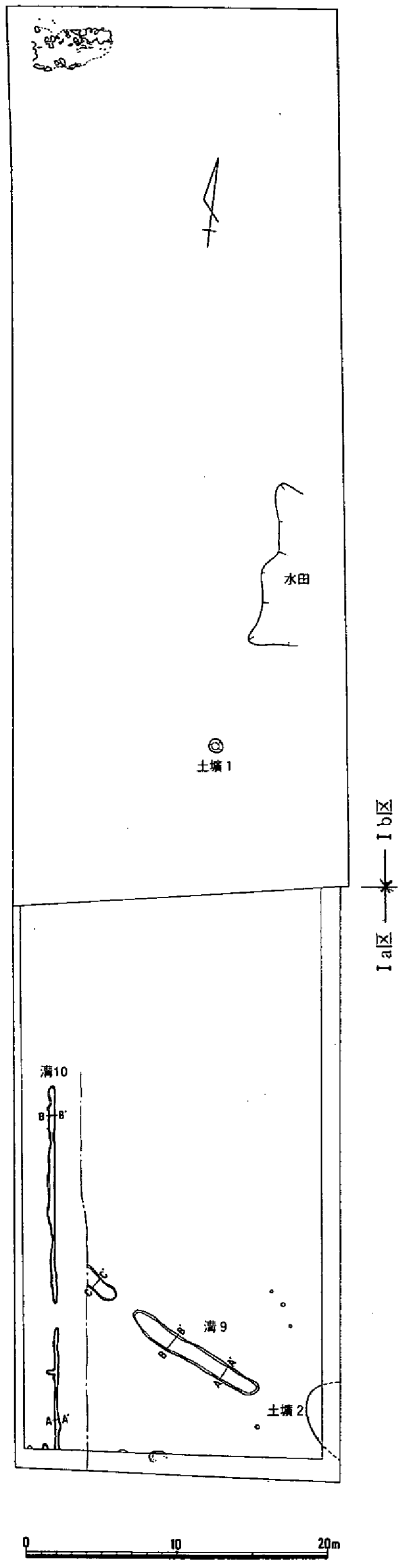
1　Ia･b区の調査

下庄遺跡Ⅱb区からの微高地上には、溝、建物、貝塚等が検出している。溝は、凹みの中に多数の細い溝が穿たれている。微高地の下がりは、弥生後期末の溝と切り合う。

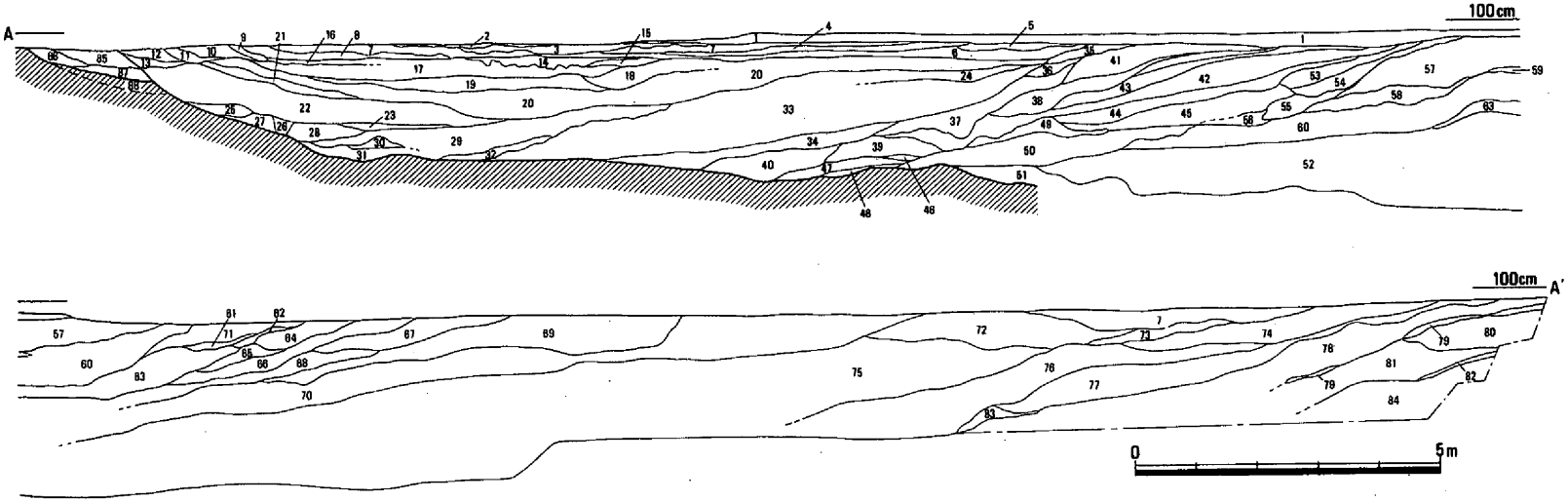
微高地下がりの土層についての詳細は後に触れる。溝8の埋土は第3図第85～87層で、この溝を切って微高地下がりが形成されるが、河道により浸食されたと考えるのが妥当であろう。第25層の黒灰色砂質土は貝塚に相当するもので、ここから検出される遺物の時期は7世紀前半である。この貝塚上面からは、古代に含まれるものが認められていることから、第22層の暗灰色粘土、第20層の暗褐灰色粘質土より上層がこの期の堆積である。第29層の暗灰色粘質土と第34層の暗灰色粗砂混じり粘質土間の土層は、6世紀代の須恵器を検出していることからこの期の堆積と判断できるであろう。この層から第50層の淡褐灰色粗砂で古墳時代前半期の遺物が出土しているが、この層より上層の堆積層からは遺物がなく時期の判断ができない。第50層と6世紀代の堆積層との関係からは、これらとあまり隔たらない時期と思考される。第52層の淡灰色砂礫中には、縄文後期から古墳時代前半期のものまでの遺物が検出されている。（下澤）



第１図　Ｉａ・ｂ区弥生～古墳時代遺構配置図
(1/500)



第２図　Ｉａ・ｂ区中～近世遺構配置図
(1/500)

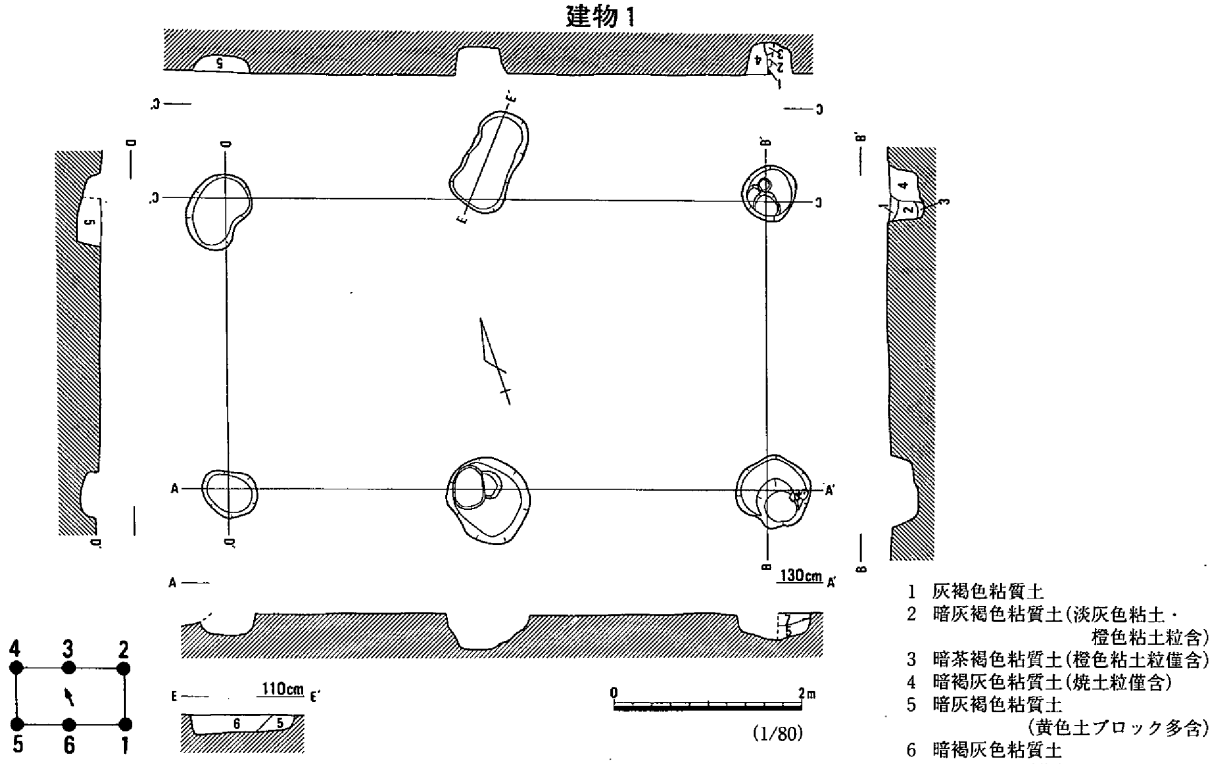


1 淡黄褐灰色粘質微砂
2 淡褐灰色粘質微砂
（やや黄色を帯びる）
3 灰色粘質微砂
4 淡灰色微砂（淡灰色粘土混）
5 淡灰色粘質微砂
6 灰色粘質土
7 淡褐灰色粘質微砂
8 褐灰色粘質微砂
9 淡暗灰褐色砂質土
10 淡灰褐色砂質土
11 茶灰色砂質土
12 灰褐色砂質土
13 灰褐色砂質土（Fe含）
14 暗灰色粘質土（下面に炭堆積）
15 緑灰色粘質微砂
16 淡灰色砂質土
17 緑褐灰色砂質土
18 緑褐灰色粘質土
19 暗緑灰色粘質土
20 暗褐灰色粘質土（木質遺物含）
21 暗灰色微砂混じり粘質土
22 暗灰色粘土
23 淡灰色粗砂
24 暗緑灰色粘土
25 黒灰色砂質土
26 灰色粘質土
27 灰色砂質土（粘質あり）
28 淡灰色砂質土（灰色粘質土混在）
29 暗灰色粘質土
30 淡青灰色粘質土
31 暗灰色粘質土（微砂混）
32 灰色粗砂
33 緑灰色粘土
34 暗灰色粗砂混じり粘質土
35 淡灰色微砂と灰色粘土の混在層
36 暗緑灰色粘質微砂（炭粒若干含）
37 暗灰色砂質土（炭粒若干含）
38 暗灰色弱粘質細砂
39 暗灰色粘質土
40 淡灰色粗砂
41 灰白色微砂と暗灰色粘土が
縞状に互層堆積
42 暗灰色砂質土と黄灰色細砂が
縞状に堆積
43 暗灰色微砂
44 暗灰色粘質微砂～細砂
45 淡灰色細砂と暗灰色細砂の
混在層
46 灰色粗砂
47 暗灰色砂質土
48 暗灰色砂礫層
49 暗灰色弱粘質微砂
50 淡褐灰色粗砂
51 淡紫灰色粘土
52 淡灰色砂礫層
53 暗灰色砂質土と黄灰色細砂が
縞状に堆積
54 暗灰色細砂
55 暗褐灰色弱粘質細砂
56 暗灰色細砂の割合多い
57 黄灰色細砂と暗灰色粘質細砂が
縞状に堆積
58 淡黄灰色細砂（木質多含）
59 淡灰色細砂
60 灰色細砂と黒灰色粘質細砂が
縞状に堆積（木質やや多含）
61 黒灰色粘質細砂
62 淡黄褐色細砂
63 灰色細砂（木質やや多含）
64 淡褐灰色弱粘質細砂
65 淡灰色細砂
66 暗灰色細砂（下部に木質含）
67 黄灰色細砂
68 灰色細砂（木質含）
69 明黄褐色～明灰色粗砂
70 淡灰色砂礫層
71 淡灰色細砂と黒灰色粘質細砂が
縞状に堆積
72 淡赤褐色粗砂～砂礫層
73 暗黄灰褐色細砂
74 明黄褐色～淡灰色細砂と
灰～暗灰色粘質細砂が縞状に堆積
75 明黄褐色～明黄褐灰色細砂
（76に比べきめが細かい）
76 淡黄灰色細砂
77 淡灰色細砂
78 淡灰色～淡赤褐色細砂
79 淡灰色粘質細砂
80 明赤褐色細砂（Fe多含）
81 淡灰色細砂（木質多含）
82 灰色弱粘質細砂
83 暗灰色細砂（木質多含）
84 灰色細砂
85 淡灰黄色粘質砂
86 淡赤褐色粘質土（Mn含）
87 黒灰色粘質土
88 淡灰白色粘土（Mn含）

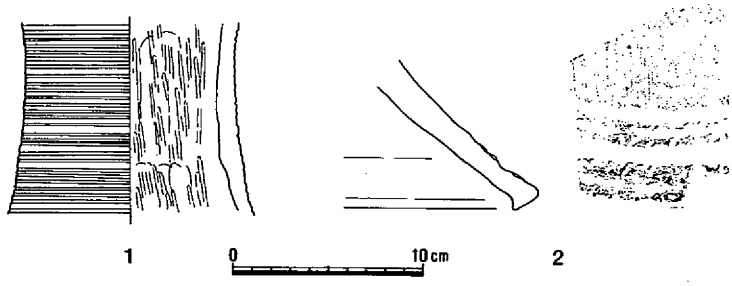
第3図　A－A′土層断面図(1/120)

（１）建物

建物は黄褐色基盤層の微高地下がり近くに２棟重複して検出され、いずれも梁間１間のものである。建物方向は北西－南東であるが、２棟はそれぞれ若干方向を違えている。検出された柱穴は、浅いことから、下庄Ib区と同様に削平を受けていたことが窺われる。　（下澤）



位置（調査区）	規模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm) 桁	柱間寸法(cm) 梁	面積(㎡)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期	備考
上東Ia	2×1	570～585	316～319	269～309	316～319	18.9	N-75°-W	円	55～90	弥・後	



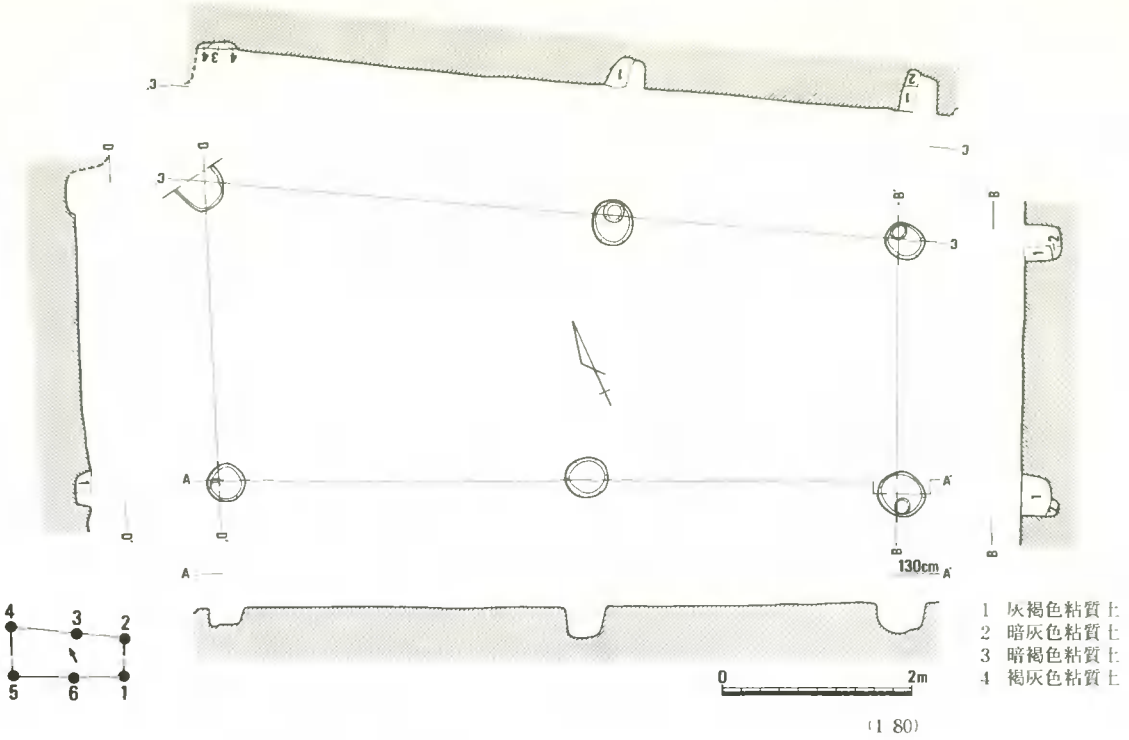
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底(脚)径	法量(cm) 器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1	弥生土器	長頸壺				良好	5YR6/6(橙)	砂粒	頸部に沈線
2	弥生土器	器台				良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	脚部に透し？　裾部に凹線と刺突文

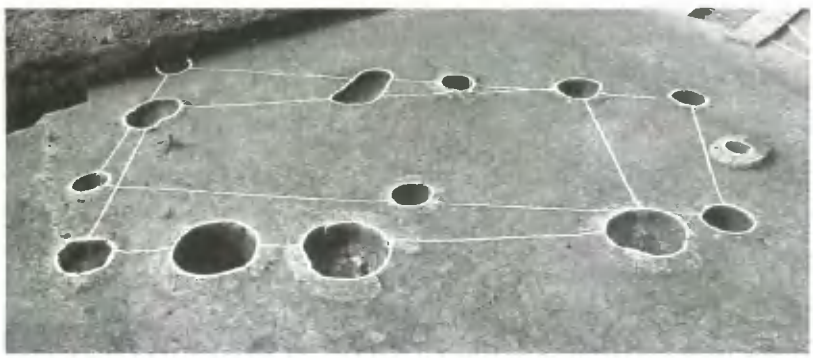
建物１は上東Ia区の北端近くの微高地上に位置する。梁間１間、桁行２間で、主軸は東西方向をとる。柱穴は径60～80cmほどの円形で、P1・2・6では径30～40cmの柱痕も確認された。

土器はP1から長頸壺の１、器台の２が出土している。長頸壺の沈線は螺旋状に巡っている。器台の裾部には凹線が巡らされ、凹線の間に刺突が施されている。またP1から上下に拡張した口縁部外面にヘラガキの鋸歯文を配した装飾性の高い壺の口縁部細片も出土している。

時期は弥生時代後期中頃でも新しい段階と考えられる。　（渡邉）

建物2





位置（調査区）	規模	桁行(cm)	梁間(cm)	柱間寸法(cm) 桁	柱間寸法(cm) 梁	面積(㎡)	棟方向	柱穴掘方	柱穴規模(cm)	時期	備考
I 東Ia	2×1	724～736	290～316	299～439	290～316	21.6	N-65°-W	円	40～50	弥・後	

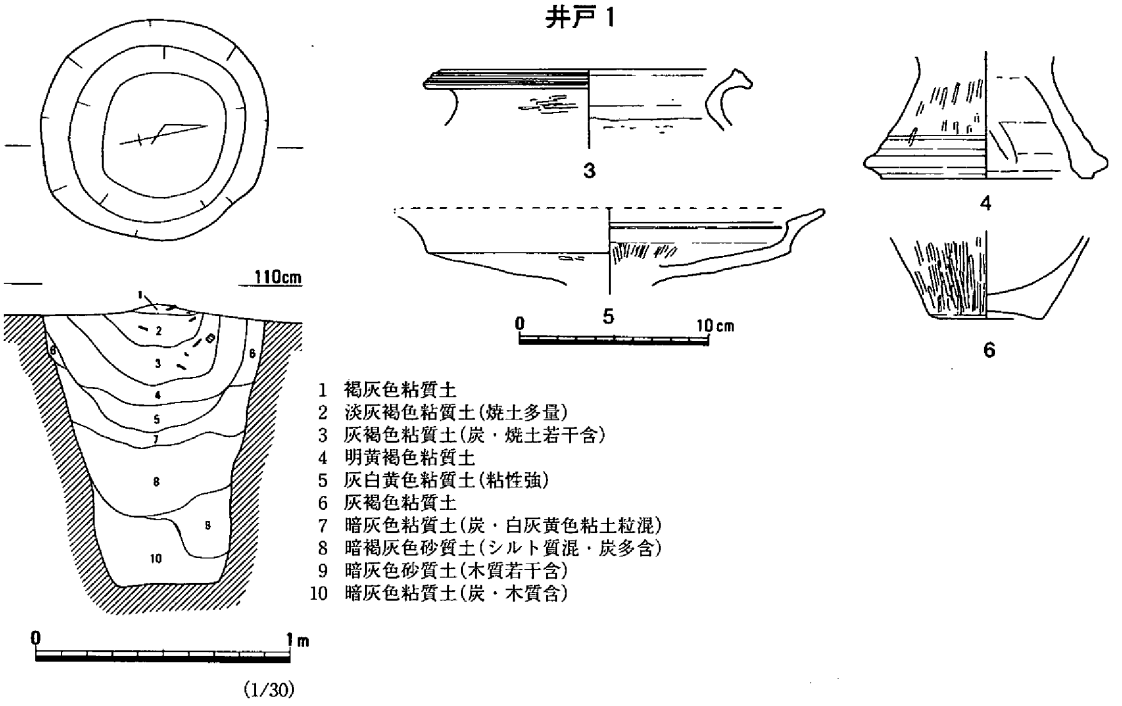
建物2は建物1に重複した形で検出された。梁間1間、桁行2間であるが、梁間の軸線からも桁行の軸線からもP4が北西側に外れて、歪な平面形となっている。柱穴は径40～50cmの円形で、P1～3と5では径15～20cmの柱痕が確認されている。

柱の構成は建物1と同じ構成であるが、建物1より桁側が2m近く長い、主軸が建物1より10°北に振っている、柱穴が建物1と比較して一廻り小さいなどの違いが認められる。また、北辺、南辺ともに中央の柱から東半と西半では柱間の距離に差が見られることから、P1～3と6が1間×1間の建物になり、P4と5とは分離される可能性も考えられる。

出土遺物はP1から土器細片が出土し、弥生時代後期に属すると考えられるが、建物1との時期差は判別できなかった。（渡邉）

（2）井戸

井戸は3基検出して、建物や溝と重複するものが認められる。いずれも微高地下がり寄りに認められるが、井戸1のように埋土が盛り上がって平面形態が確認されていることから削平を受けていることが知られる。いずれの井戸も湧水層には達していない。（下澤）



(1/30)

遺構名	位置（調査区）	規模(cm) 上面径	底面径	深さ(底面海抜高)	平面形	断面形	土器	時期	備考
井戸1	上東Ia	89×88	48×53	111(-10)	円	台形	○	弥・後	木の皮・木質

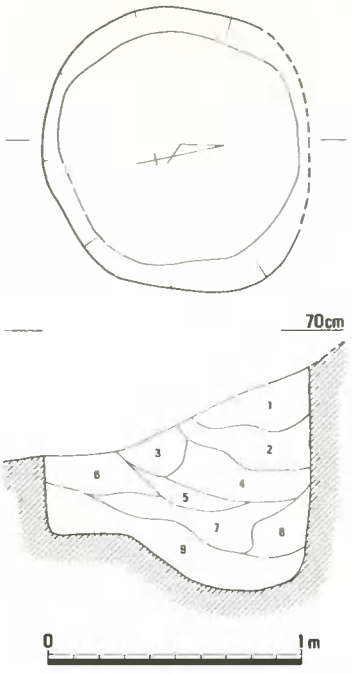
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
3	弥生土器	甕	15.8			良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線
4	弥生土器	鉢		11.2		良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	脚部彩色があるのか若干オレンジ色
5	弥生土器	高杯	(22.7)			良好	7.5YR6/1(褐灰)	砂粒	杯部内面に稜線
6	弥生土器	甕		5.6		良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒	

井戸1は建物1のP5とP6の間に位置する。上面は径約90cmの円形を呈するが、底面では径50cm前後の隅丸方形に近い円形を呈する。検出面からの深さは111cmで、底面の海抜高は－10cmを測る。

埋土は10層に分かれるが、第5層を境に堆積状況が大きく異なっており、井戸が第6層まで埋没した後に掘り直して使用された状況が看取される。ここで、第5層から上部を上層、第6層以下を下層に大きく2分して記述をすすめることとする。なお第10層には木質および炭が比較的多く混在しており、第9層との境には樹皮状のものが部分的に貼り付いていた。

遺物の多くは上層から出土しているが、図示した土器のうち、甕**3**は最下層にあたる第10層から、高杯**5**は下層から出土しており、下層が弥生時代後期前半のうちには埋没していたと考えられる。一方、上層からは台部**4**および甕**6**が出土している。上層の土器の中には下層と比較検討できる口縁部の資料が無いため細かな時期の特定はできないが、弥生時代後期中頃を前後する範囲での時期幅を想定する事ができる。しかし、建物1との関係から、少なくとも建物1が建てられるまでには埋没していたと考えられ、建物1より古く位置付けられる。（渡邉）

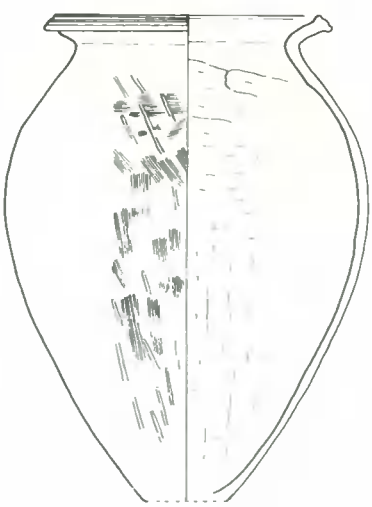
井戸2

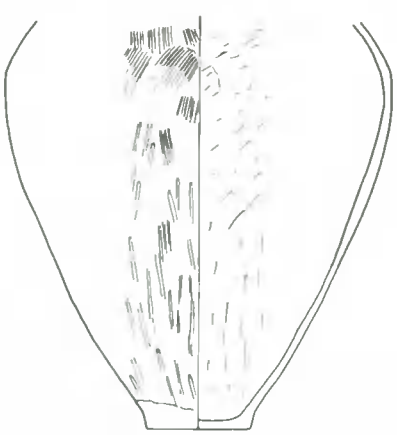


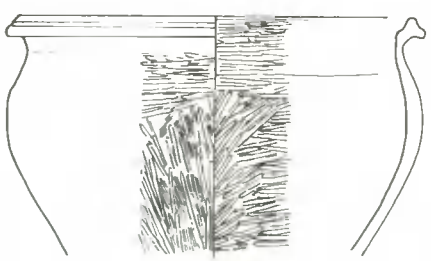
1　黒灰色粘質土(炭縞状に混)
2　暗灰色粘質土(暗緑灰色粘質土混)
3　暗緑灰色粘質土ブロック
4　暗緑灰色粘質土(暗灰色粘質土混)
5　黒灰色粘質土
6　淡暗灰色粘質土(暗緑灰色粘質土混)
7　暗緑灰色粘質土
8　黒灰色粘質土
9　暗灰色粘質土

(1:30)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 上面径	底面径	深さ(底面海抜高)	平面形	断面形	土器	時期	備考
井戸2	上東Ib	119×109	90×94	88(−34)	円	?		弥・後	


7


8


9

10

0　10cm

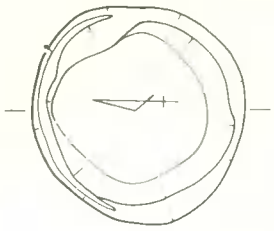
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
7	弥生土器	甕	14.0	(4.2)	(25.5)	良好	N2(黒)	砂粒	口縁部に凹線　外面全体に厚く煤付着
8	弥生土器	甕		5.5		良好	N2(黒)	砂粒	外面全体に厚く煤付着
9	弥生土器	鉢	20.6			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	胴部中位に煤付着　内面全体的に煤付着
10	弥生土器	鉢	5.0	2.3	4.5	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	手捏ね

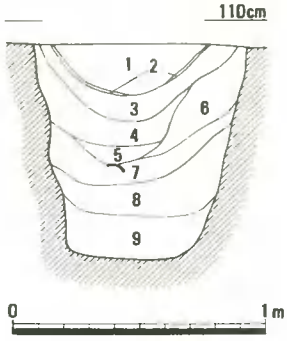
井戸2は井戸1の北で、北側への下がりの肩口近くに位置する。溝8の底面において検出された。上面径110～120cmほどの円形で、深さ88cm、底面の海抜高は約－30cmと深い。

出土遺物には甕7と8、鉢9、手捏ね土器10などがある。7～9は完形品ではないがあまり磨滅していないことおよび手捏ね土器も含まれることから意図的に投棄された可能性が考えられる。

時期は弥生時代後期中頃と考えられ、遺構の切り合いから溝8よりは古く位置付けられる。(渡邉)

井戸3

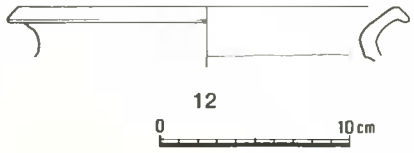




1　灰褐色粘質土(炭・土器片含)
2　褐黄色粘土粒の堆積層
3　褐灰色粘質土(炭少含)
4　灰色粘質土(淡黄色粘土粒混・炭含まない)
5　淡灰色粘質土(粘性強)
6　灰色粘質土(炭少含)
7　暗褐灰色粘質土
8　暗灰色粘質土(粘性強)
9　灰色粘質微砂(粘性強)

(1:30)

遺構名	位置(調査区)	規模(cm) 上面径	底面径	深さ(底面海抜高)	平面形	断面形	土器	時期	備考
井戸3	上東Ib	89×85	55	85(15)	円	台形	○	弥・後	樹皮



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
11	弥生土器	甕	(14.8)			良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒	口縁端部に凹線
12	弥生土器	甕	(20.0)			良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	表面磨滅
13	弥生土器	高杯				良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	表面磨滅
14	弥生土器	?		4.2		良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	

井戸3は井戸2の東で、井戸2と同じく北側への下がりの肩口近くに位置する。上面径90cm足らずの円形で、深さ85cm、底面の海抜高は－15cmを測る。

埋土は9層に分かれるが第5層以上と第6層以下では堆積状況に大きな差が認められ、第5層以上が第6層を切り込んで掘り込まれた状況が看取される。また、第4・5層と第1～3層の両者にも、後者の層には炭が含まれているなど埋土に差がみられることから埋没時期の違いを指摘することができ、井戸3の埋没過程が少なくとも3段階に分かれることが看取される。井戸1と同様に、井戸が埋没した後に土壙を掘削したものと考えられる。なお、第5層と第7層の間には樹皮状の木質が部分的に遺存していた。

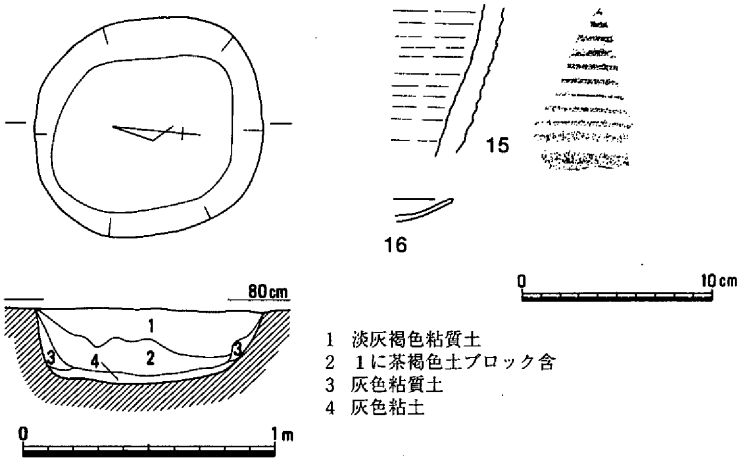
出土遺物には甕11と12、高杯13、底部14などがあるが層位別の取り上げを行っておらず、各段階の時期の特定はできないが、土器全体としては時期幅はあまり見受けられない。また、いずれの土器も細片で磨滅が著しく、井戸2のように意図的に土器を投棄したのではなく、埋没過程において堆積土中に自然に混入したと思われる。

時期は、弥生時代後期前半の範疇で捉えられ、井戸1より古く遡る可能性も考えられる。（渡邉）

（3）土壙

土壙は、基盤層である黄褐色土が認められる部分において検出された。いずれの土壙の時期も、伴う遺物から近世期と思われる。（下澤）

土壙1



1　淡灰褐色粘質土
2　1に茶褐色土ブロック含
3　灰色粘質土
4　灰色粘土

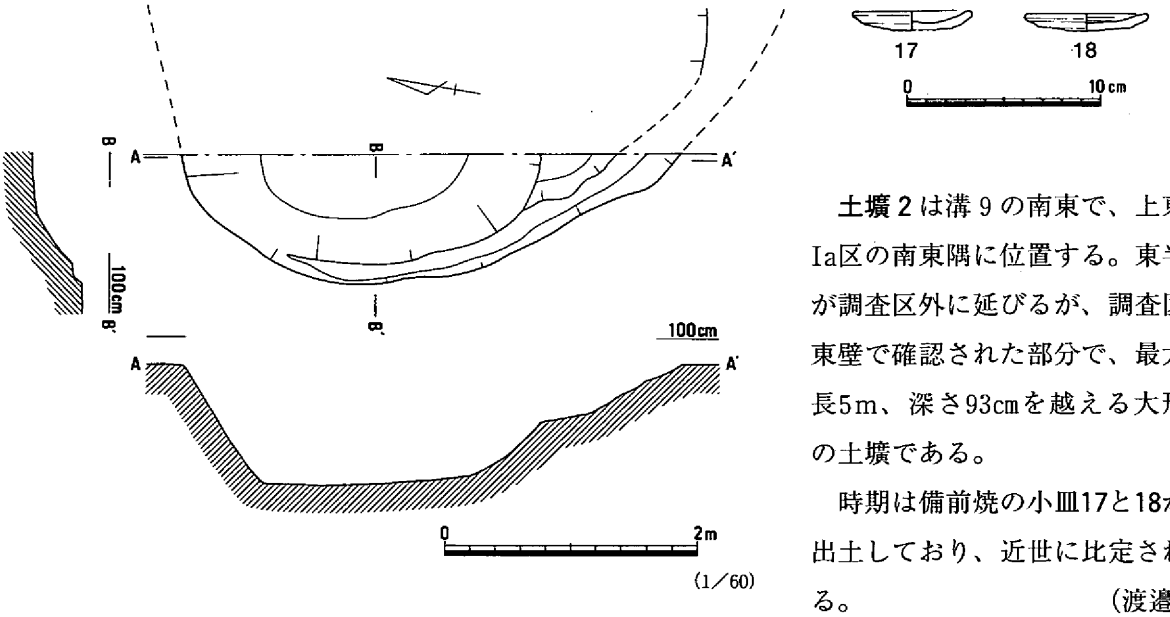
(1/30)

土壙1は、微高地下がり近くに位置する。第3層の灰色粘質土層が壁際に張り付くように認められることから、素掘りではなく木桶などの存在を考慮した。しかしながら、木片等は認めることができなかった。出土遺物は、備前焼の甕と灯明皿である。これらの遺物から時期は、江戸期と判断される。（下澤）

遺構名	位置（調査区）	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙1	上東Ib	90	86	30	隅丸方形	椀	○	江戸	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底（脚）径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
15	陶器	甕				良好	2.5Y R3/3(明赤褐)	砂粒	備前焼
16	陶器	灯明皿				良好	5Y R5/2(灰褐)	精良	備前焼

土壙2



(1／60)

土壙2は溝9の南東で、上東Ia区の南東隅に位置する。東半が調査区外に延びるが、調査区東壁で確認された部分で、最大長5m、深さ93cmを越える大形の土壙である。

時期は備前焼の小皿17と18が出土しており、近世に比定される。（渡邉）

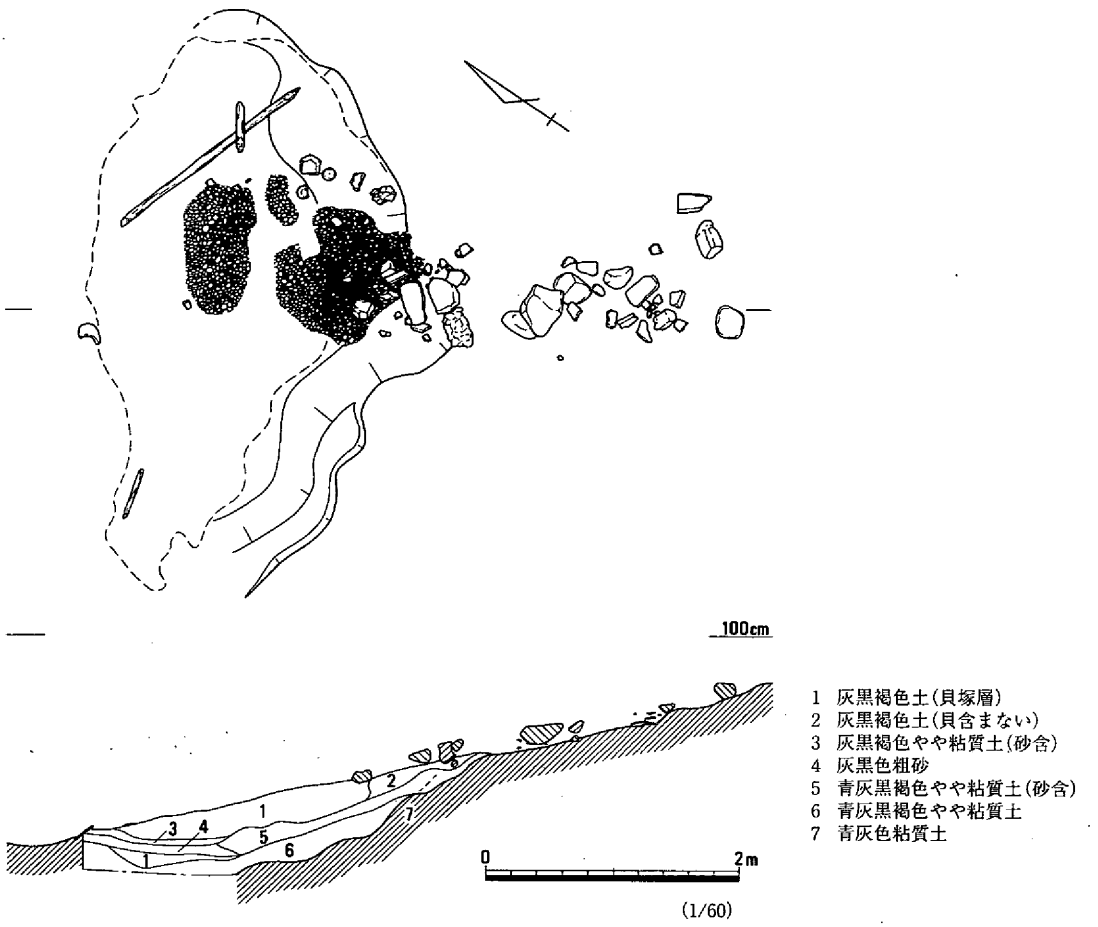
遺構名	位置（調査区）	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	土器	時期	備考
土壙2	上東Ia	(501)	(222)	93	不整形	?	○	近世	

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
17	陶器	小皿	6.1	5.3	10.5	良好	7.5Y R6/3(にぶい褐)	精良	底部ヘラ切り　備前焼
18	陶器	小皿	6.3	5.0	0.9	良好	7.5Y R6/3(にぶい褐)	精良	底部ヘラ切り　備前焼

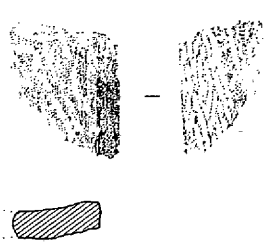
（４）貝塚

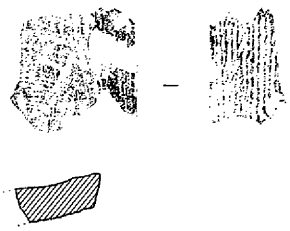
貝塚は、Ib区の微高地下がり部分において検出された。この下がりが、埋没していく最終段階と考えられる時期の底部分に形成されていた。この時期の埋土は、砂を含まない粘質系のもので早い埋没には至らなかったことが窺われる。（下澤）

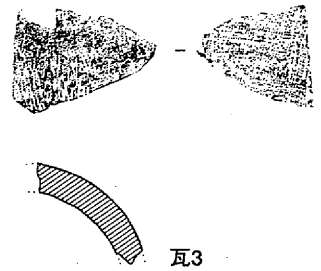
貝塚



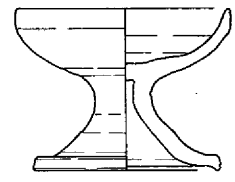
貝塚は土壙１の北に位置し、古墳時代の河道南側斜面の凹みに位置する貝塚である。この凹みが、自然のものか、人工的なものかは判断できなかった。しかし、河道の肩には、平坦面や急激な落ち込みなどが幾つか見られた。全体の規模は長さ470cm・幅290cm・深さ45cmを測る。貝塚に伴うものと考えられる飛び石状の礫が認められた。この礫は河道の堤平坦面からこの貝塚まで、斜面に沿ってほぼ等間隔に数個ずつ並べられていた。これらの礫は厚みが10cm前後で、縦と横の辺が20～40cm大の平坦面を持つものである。礫の下に小石や須恵器片などを挟み込んで、平坦面が水平になるようにしている。ずれた位置にある礫は、水平面を下や横にしており、元位置を動いていると考えられるが、他は当時のままであると推定される。礫の下にはハイガイ・ヤマトシジミなどの貝殻も見られた。また、この飛び石の貝塚側で3～5cm・5～10cm大の小円礫がかたまっている箇所が３ヵ所認められた。規模は100×50cm・40×20cm・100×100cmをそれぞれ測る。貝塚は、図の平面図に破線で示した範囲が上層の貝の分布範囲で、北東向きの楕円形状を呈し、規模は長さ440cm・幅200cm・厚み25cmほどを測る。第３層と第４層の間層を挟んで下層の貝層が認められた。この貝層の範囲は長さ290cm・幅120cm・厚み10cmであった。この遺構は飛び石状の部分を除き、標高0cm以下である。貝のほとんどはハイガイ

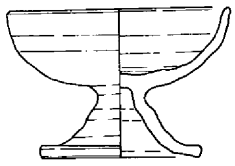

瓦1

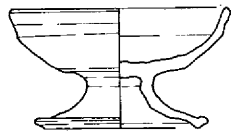

瓦2


瓦3

19

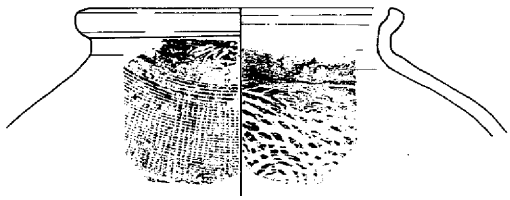

23

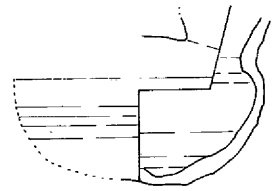

20

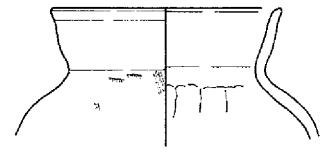

21

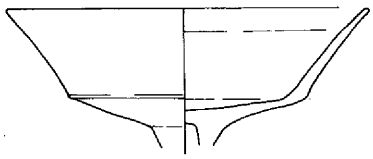
22

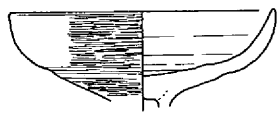
26

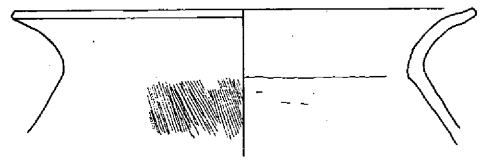

24

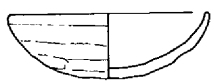

25

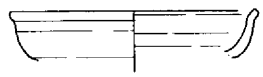

27


28


29

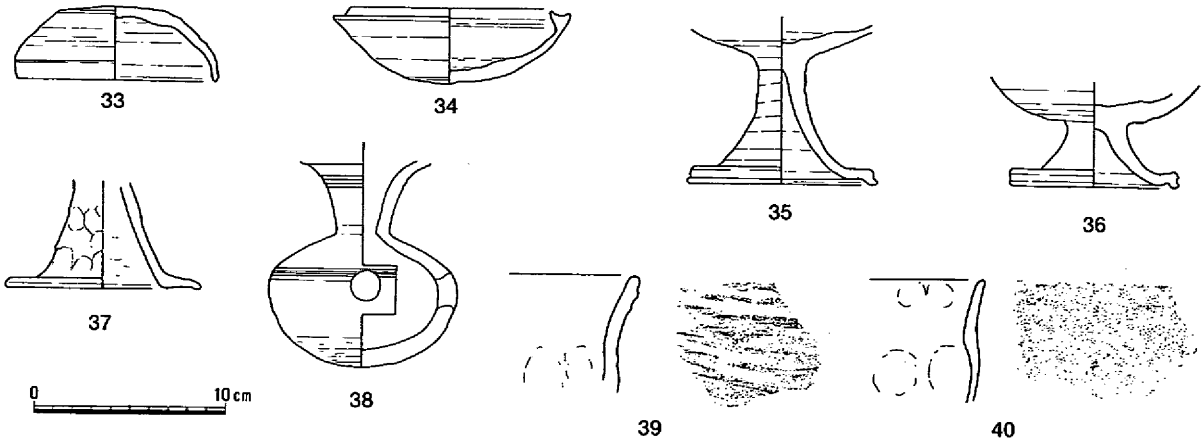

30


31

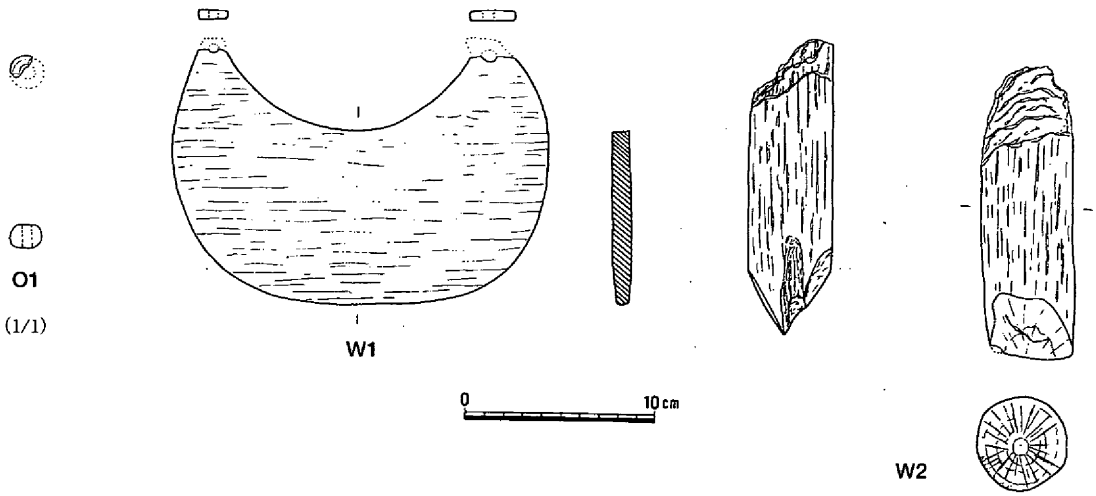

32

掲載番号	出土地点	種別	法量	特徴・備考
瓦１	貝塚上層	平瓦	現存長6.7cm　幅4.8cm　厚さ1.6cm	
瓦２	貝塚上層	平瓦	現存長6.6cm　幅4.5cm　厚さ1.9cm	
瓦３	貝塚上層	丸瓦	現存長5.1cm　幅7.2cm　厚さ1.5cm	

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
19	須恵器	杯蓋	11.6			良好	7.5Y7/1(灰白)	砂粒	ロクロ回転右
20	須恵器	高杯	11.7	8.3	7.9	良好	5Y7/1(灰白)	砂粒	ロクロ回転右
21	須恵器	高杯	11.5	8.1	6.4	良好	7.5Y7/1(灰白)	砂粒	ロクロ回転右
22	須恵器	高杯	12.7			良好	2.5Y6/1(黄灰)	砂粒	ロクロ回転右
23	須恵器	高杯	11.2	9.7	8.6	良好	5Y7/1(灰白)	砂粒	ロクロ回転右？
24	須恵器	甕	15.9			良好	7.5Y7/1(灰白)	精良	口縁部窯印か(線刻)
25	須恵器	横瓶				良好	7.5Y7/1(灰白)	砂粒	ロクロ回転右
26	須恵器	無頸壺	8.1			良好	N4/(灰)	精良	
27	土師器	壺	11.9			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	
28	土師器	高杯	19.3			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	
29	土師器	高杯	14.0			良好	5YR6/6(橙)	砂粒	二次焼成を受けたのか、杯内外面一部に煤付着
30	土師器	甕	24.2			良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	口縁部内外面も少量の煤付着
31	土師器	椀	10.6	2.3	3.4	良好	10YR7/1(灰白)	砂粒	
32	土師器	杯	13.1			良好	5YR6/4(にぶい橙)	水洗粘土	



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
33	須恵器	杯蓋	10.3	5.4	3.9	良好	N6/(灰)	礫(少)	
34	須恵器	杯身	10.4		4.0	良好	N6/1(灰)	砂粒	回転ナデ
35	須恵器	高杯		9.8		良好	N7/ ～N6/(灰)	砂粒	
36	須恵器	高杯		8.5		良好	7.5Y7/1(灰白)～6/1(灰)	砂粒	
37	土師器	高杯		9.9		良好	5YR7/4(にぶい橙)		
38	須恵器	壺				良好	6/ ～7/(灰白)	砂粒(少)	口縁部～胴部中位に自然釉　胴部に焼成後穿孔
39	土師器	製塩土器				良好	7.5YR7/3～6/2(灰褐)	砂粒	
40	土師器	製塩土器				良好	5Y6/1(灰)	砂粒	



掲載番号	器種	法量(cm) 長さ	幅・径	厚み	樹種	備考
W1	?	19.8	13.4+α	0.9		円形孔あり
W2	杭	15.6+α	4.8			

掲載番号	器種	材質	法量(mm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径	重量(g)	色調	特徴・備考
O1	玉	アルカリガラス	(4.0)		3.0	1.00		薄い青色	

とヤマトシジミで、他の斧足綱や腹足綱も幾種類か確認された。しかし、種の特定はできていない。極々まれに、中の身が残ったままで出土するものも見られた。食用になりにくい小さいものが多いものの、貝のサイズだけには因らない。アカニシのような大きな巻き貝では、側面が割れたものや、側面の殻がなく芯だけのものが多く見られた。また、割れた側面や殻幅が5cmくらいの上部片もあった。ヘナタリのような小型の巻き貝は、そのままの状態で出土している。カキは、2枚の殻が別々に出土するものが、ほとんどであった。中には、殻の縁が一部欠けたものも見られた。貝層で貝の種類は、

下層の方がシジミがやや多い傾向にあるが、絶対優位ではない。また、貝塚の堆積に厚さがないことから、貝の種類による分布の特徴などは明らかにできなかった。イノシシの頭骨・甲殻類の脚・タイやスズキ・フグなどの魚類やカメ目の骨、モモやウリ科などの種子も出土している。これら以外にも分析の結果、カヤツリグサ科・スゲ属・コナギの種実も出土している。すべての貝の成長線を観察した結果ではないが、晩秋から冬～春先にかけて捕集されたものではないかと想定している。

出土遺物には、河道の斜面で、貝塚よりも上層に堆積していた層からは、瓦１～３の瓦と19～32の遺物が検出されている。瓦１と瓦２は平瓦、瓦３は丸瓦で、いずれも外面に縄目タタキと布目を持つ。19の杯蓋は、天井部にケズリを認める。20～23の高杯は、脚端部に透しがない。24の甕は、外面にカキメとタタキが、内面には当て具痕が見られる。25の横瓶は、底部にヘラオコシが確認できる。26の無頸壺は、肩部に沈線を施す。以上が須恵器である。28は、口縁部が外広に広がるもので、29は、口縁部が内傾する高杯である。30の甕は口縁端部を平坦とし、外面に細かいハケの調整が認められる。31の椀は、内外面ともナデで調整されている。32の杯は、口縁部が外広に屈曲し、胎土は水簸粘土を用いている。33～40とＷ１・２は、貝塚中と同一層から出土したものである。33は杯蓋で、天井部にヘラケズリが認められる。34は杯身で、立ち上がりは短くなり、底部内面には、ヘラ調整が認められる。また、自然釉の付着が認められる。35と36の脚端部は、下方へ折り曲げられている。38は𤭯で、体部下半にヘラケズリが認められる。以上が須恵器である。土師器は、37と39、40の３点である。39は、口縁部に幅広のヨコのタタキを施し、40は押圧痕を顕著に残す製塩土器である。Ｗ１は、貝塚北端で貝塚上において検出された。隅丸方形の板の上端を丸く抉り込み、左右の端に紐の付くような孔が認められる。断面の形態は平たい内容を呈している。Ｗ２は、杭先と考えられるもので、貝層中から出土し、丸太の一端をＶ字形に尖らせ、もう一端は焦げていた。この他に、貝塚平面図中に先を尖らせた杭状の木が認められている。Ｏ１はガラス玉で、上層の貝層から１点出土した。遺物の多くは上層の貝層から出土し、下層の貝層からは年代が特定できる遺物は出土していない。遺物の時期は、TK-217に属するものと考えられる。貝層出土の須恵器から貝塚の形成時期は、７世紀前半になるものと考えられる。

表１　貝の種類とサイズ表

種類／サイズ	シジミ	ハイガイ
破片	4,590個	679個
1㎝未満	2,122個	310個
1～2㎝	1,446個	1,030個
2～3㎝	12,156個	1,288個
3～4㎝	9,517個	3,299個
4～5㎝	0個	2,369個
5～6㎝	0個	1,344個
6～7㎝	0個	181個
7～8㎝	0個	1個

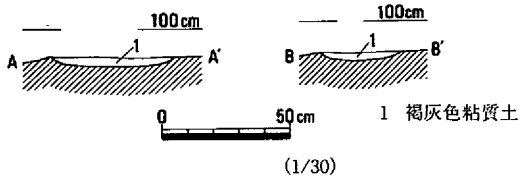
なお、ここでいう個数とは、貝殻のＬＲの区別をしていないので、貝の個体数でなく、貝殻の枚数である。また、シジミの破片は、コンテナにもう１箱分あるが、細片のため、個数のカウントはしなかった。もちろん、カウントした破片の中でも同一個体の破片をカウントしている可能性も高いことを断っておく。

サイズと個数の測定ができていないが、カキは、コンテナに５箱。その他、種が同定できていないが、外観で、数種類に分類したものがコンテナに２箱分ある。割合で言うと、ヤマトシジミとハイガイで、全体の約80％を占める。ただし、サトウガイはハイガイと、オキシジミはヤマトシジミとはっきりと区別できず、それぞれがハイガイやヤマトシジミの中に含まれているのではないかと、考えられることも付け加えておく。　（築地）

（5）溝

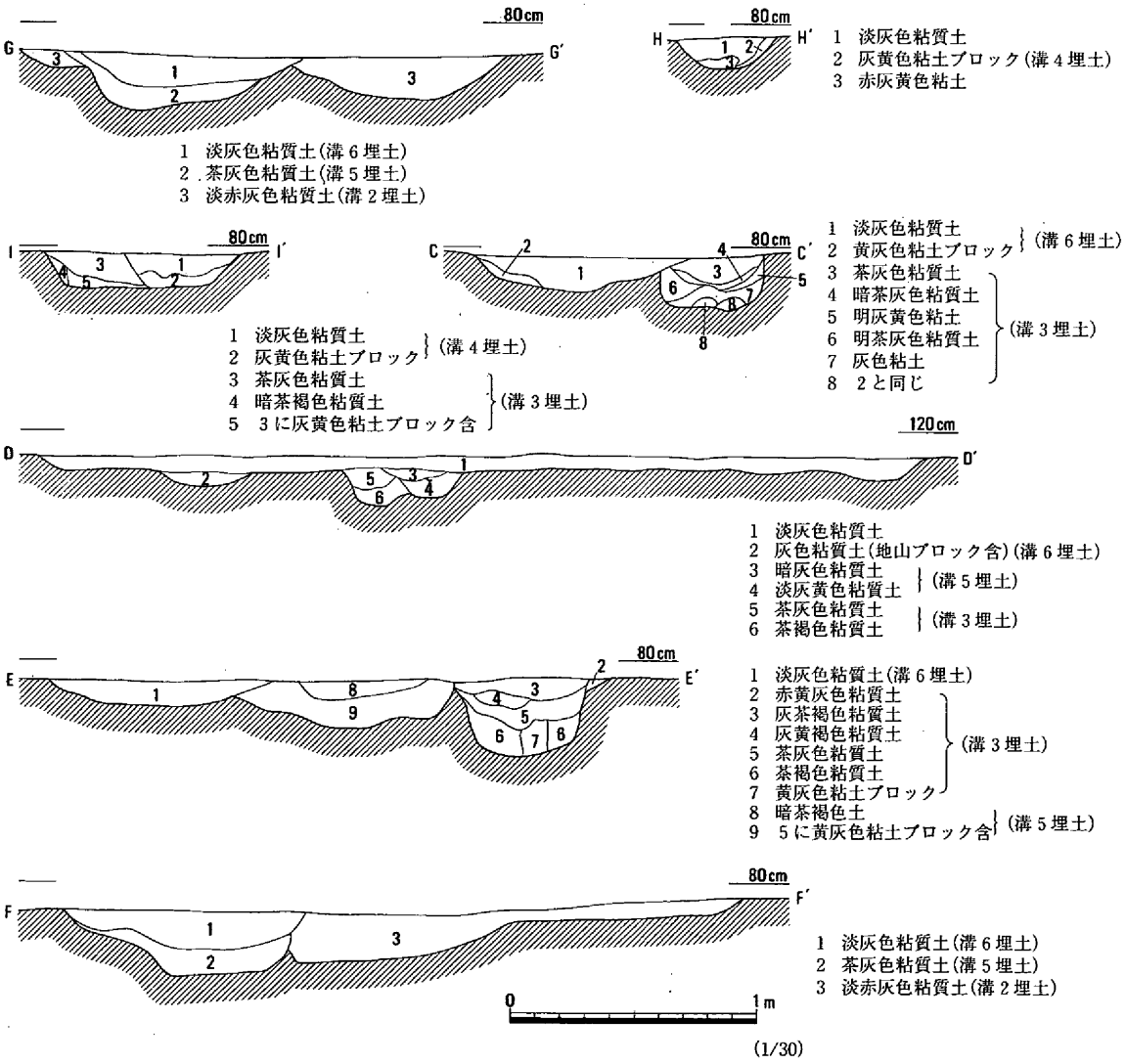
溝は、Ia区の微高地部分に集中する。特異な内容を示すのが、浅く掘り凹めた部分に細く掘り込みのしっかりした溝を穿つのである。これらの溝は、重複して認められている。Ia区南端から北西方向に延びる溝と北端の南東から北西に存在するものは、これらの溝を切って確認されている。この北端の溝は、微高地の下がりにより消失しているが、溝と同じ時期の下がりに連なっていたと想定される。中近世の溝では、途切れた状態のものが検出されているが、削平により深い部分が遺存した結果であると判断される。（下澤）

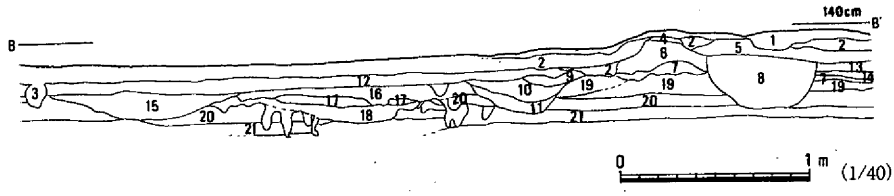
溝1



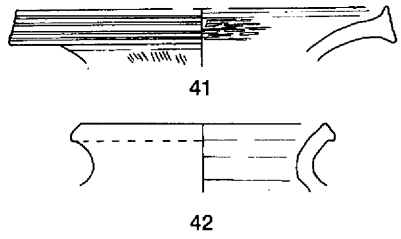
溝1は上東Ia区の南端に位置する。南北方向の細長い溝で幅35～50cm、深さ4cm前後、底面の海抜高は85cmを測る。後述する溝2～6と一連の水路と考えられ、時期も同じ弥生時代後期に属する。（渡邉）

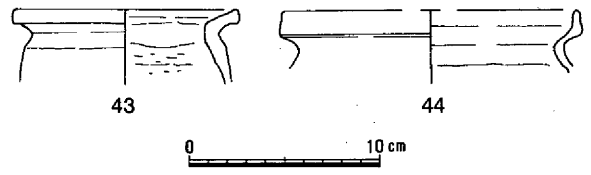
溝2・3・4・5・6





1　畦道
2　耕作土
3　暗渠
4　花崗岩風化土
5　灰褐色土
6　淡黄灰褐色土
7　茶褐色土
8　黄灰褐色土(近世土壙)
9　茶灰褐色砂質土
10　淡灰褐色土と淡青色灰粘質土のブロック　(近世土壙)
11　青灰色粘土と淡青色灰粘質土のブロック　(近世土壙)
12　黄灰褐色土
13　明黄灰褐色土
14　暗灰褐色土
15　淡黄灰褐色細砂(溝７)
16　黒褐色土　(土器溜り)
17　黄褐色土　(土器溜り)
18　灰茶褐色土(溝２.５)
19　黄褐色土(17より黄色が濃い)
20　淡灰褐色土
21　淡青灰色粘質土





掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
41	弥生土器	長頸壺	(19.7)			良好	2.5Y8/2(灰白)	砂粒	口縁部に沈線
42	弥生土器	甕	12.9			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	磨滅
43	弥生土器	甕	13.8			良好	5YR6/6(橙)	砂粒	
44	弥生土器	甕	(15.4)			良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	

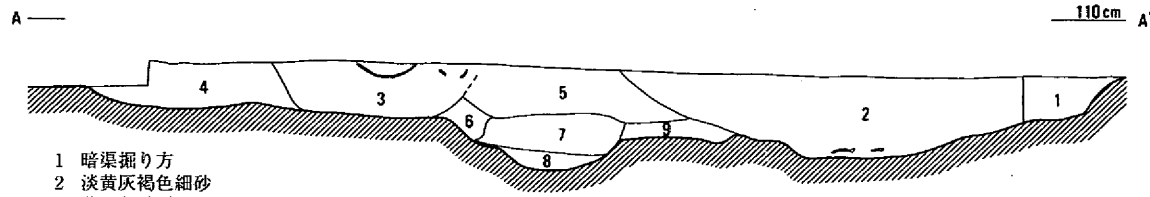
２～６の溝は3.5～6mの幅で十文字に浅く凹みとなる内側に、それらと沿うような状況で認められた。溝２は南北に延び、断面Ｆ－Ｆ´付近では幅広となるが両端においては、幅1mの溝になる。溝３は東西方向のもので、溝内に24cmほどの段を設け、底は西に下がる。この溝だけが凹みと重複する。溝４は凹みの東端に沿ってＶ字状に認められ、両端は立ち上がる。溝の幅は40～60cmを測り、深さはコーナー部分が深くなる。溝５は南から西に延び、中央部分で溝６と重複する。この溝は、溝３と同様に21cmの段を設けている。溝６は凹みのコーナー部分で溝５と重複する。溝は土層断面図Ｇ、Ｆのラインに見られるように、溝５の上に重なる状態で確認されている。溝の前後関係は、土層断面等から３－５－２で、この後に溝４と溝６が掘られるが、この両者の新旧は不明である。

この溝とたわみ１そして、土器溜りとの関係を明らかにする必要のため、ここで土層断面図Ｂ－Ｂ´において触れておく。第２・６・７層は埋没した畔で、それらに伴う水田が第２層である。この畔は、溝10の東側に沿うように認められる段との関係から、これらと同時期のものと思考される。近世土壙は、この畔を切って設けられるものと、それらの層より深くなるものが認められる。この土壙は第10と第11層を埋土とし、たわみ１と溝２そして土器溜りを切っている。たわみ１は、第19層を埋土としている。溝２は第18層を埋土とするが、その上層に堆積する第16と17層は土器溜りに相当する。溝７の埋土は第15層で、土器溜りの層を切って設けられている。

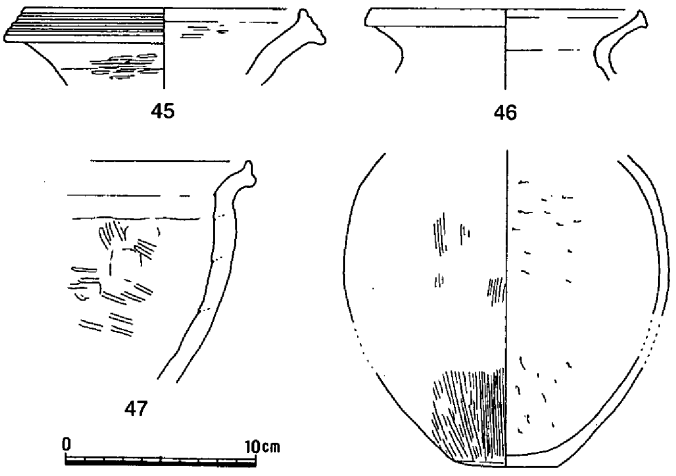
このような土層観察の結果、溝２と土器溜りは溝２の埋没が最終段階で、凹んだ状態の時に形成されたことが判断される。溝７は、それらが埋没し終わった後に設けられたと思われる。

なお、第18層や第20層などの下にピット状の土層が認められるが、それらはいずれもザリガニによりもたらされた穴である。　（下澤）

溝7



1 暗渠掘り方
2 淡黄灰褐色細砂
3 黄灰色粘質土
4 暗黄灰色土
5 極暗黄灰色粘質土
6 暗茶灰色粘質土
7 淡黄灰色粘質土
8 淡明黄灰色粘質土
9 灰黄色粘質土

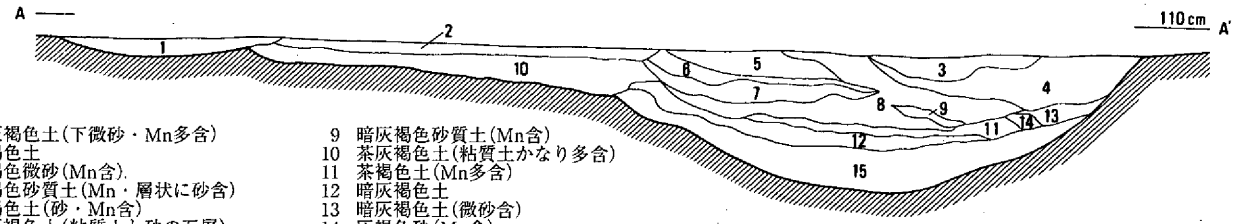


掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
45	弥生土器	壺	14.3			良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	口縁部に沈線
46	弥生土器	甕	14.3			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
47	弥生土器	鉢				良好	7.5YR5/4(にぶい褐)	砂粒	
48	弥生土器	甕		5.8		良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	

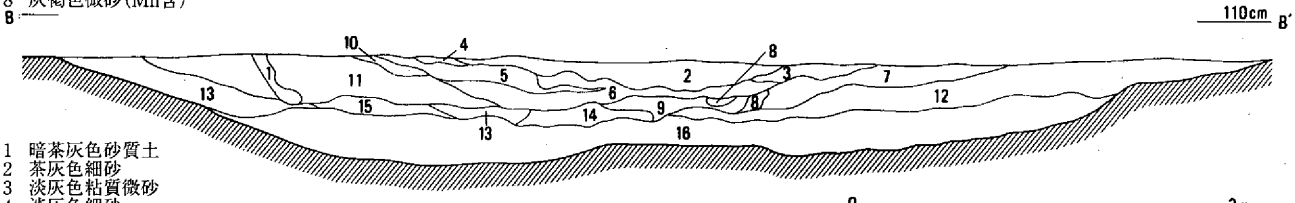
溝7は溝1の北に位置し、上東Ia区西端ほぼ中央から南東に延び、土器溜りのところから南に曲がる幅300cm・深さ30cm前後を測る溝である。西側4mほどは、中～近世の下がりにより上部を削平されているが、細くなり立ち上がってしまう。溝の流れは、底のレベルが西端で標高58cm、南端で38cmであり、その間も徐々に下がっていることから、北西から南東へと推測される。土器溜り、溝2・5・6、たわみ1と重複しているが、いずれの遺構よりも新しい状況を呈していた。溝7は、下庄遺跡へ延びており、下庄遺跡の溝2～4のいずれかとつながる可能性も考えられるが、当調査区の溝2・5・6のことも考慮しなければならず、どの溝とつながるのか、又はつながらないのかなどは明らかにできなかった。遺物は、底に張り付いた状態で検出された。

出土遺物は、**45～48**の遺物が検出されている。**45**は壺で、口縁部に沈線を施し、内外面にヘラミガキが認められた。**46**は甕で、口縁端部を肥厚させ、調整は表面が剝落していて不明瞭であった。**47**は鉢で、口縁端部を上方に拡張し、凹部を形成する。外面はハケ後ヘラミガキで内面はヘラケズリ後ユビオサエとヘラミガキで調整されていた。**48**は平底の甕で、外面にハケとナデ、内面にヘラケズリ後ナデが見られた。胴部と底部に接合面はなかったものの、調整などから同一個体であると判断した。出土遺物などから弥生時代後期の遺構と判断される。土層断面図A-A'においては、第2層が溝7であり、第3層と第5層が土器溜り、第4層がたわみ1、第7層と第8層が溝2の埋土である。ただし、第6層と第9層については、はっきりと遺構と結びつけることができていない。　（築地）

溝８

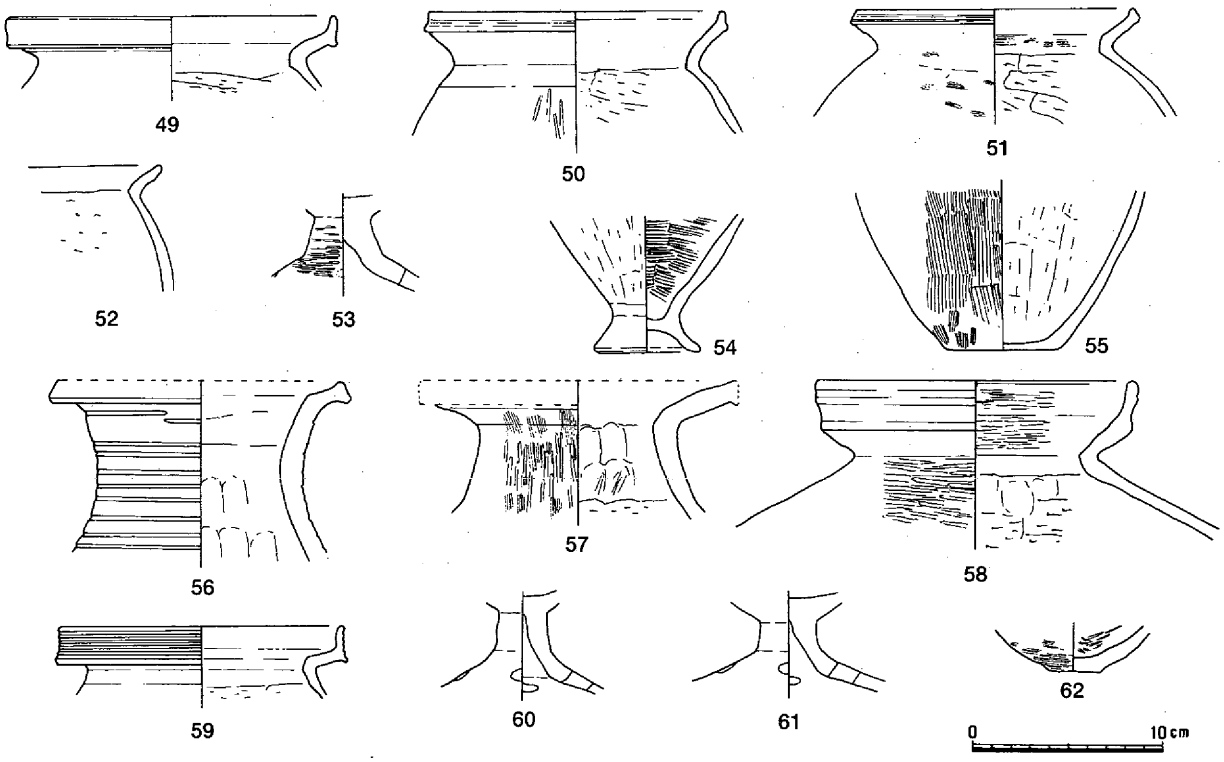


1　暗灰褐色土(下微砂・Mn多含)
2　灰褐色土
3　灰褐色微砂(Mn含)
4　灰褐色砂質土(Mn・層状に砂含)
5　灰褐色土(砂・Mn含)
6　暗灰褐色土(粘質土と砂の互層)
7　灰褐色砂質土(Mn少・層状に粘質土含)
8　灰褐色微砂(Mn含)
9　暗灰褐色砂質土(Mn含)
10　茶灰褐色土(粘質土かなり多含)
11　茶褐色土(Mn多含)
12　暗灰褐色土
13　暗灰褐色土(微砂含)
14　灰褐色砂(Mn含)
15　黒灰褐色粘土(中央下部炭化粒含)

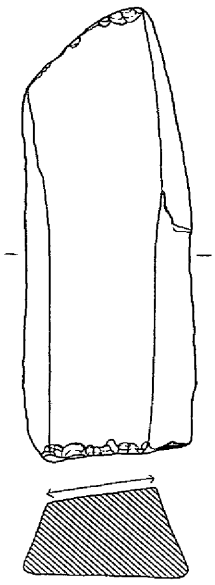


1　暗茶灰色砂質土
2　茶灰色細砂
3　淡灰色粘質微砂
4　淡灰色細砂
5　3と同一
6　淡灰色粘質砂
7　淡灰白色粘質砂
8　灰色砂
9　淡灰色砂質土
10　灰色細砂
11　淡灰色砂(やや粘質)
12　淡灰褐色砂質土
13　赤灰色細砂
14　赤灰色砂質土
15　淡赤灰色砂質土
16　暗灰色粘土

0　2m
(1/40)



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
49	弥生土器	甕	17.3			良好	10Y R7/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に煤付着
50	弥生土器	甕	15.5			良好	N2/(黒)	砂粒	全面に煤付着
51	弥生土器	甕	14.5			良好	10Y R7/3(にぶい黄橙)	砂粒	全面に煤付着　工具によるナデ？
52	弥生土器	甕				良好	5Y2/1(黒)	砂粒	口縁部内外面に煤付着
53	弥生土器	高杯				良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	脚部に穿孔の痕跡２個
54	弥生土器	台付鉢		5.3		良好	2.5Y8/2(灰白)	砂粒	
55	弥生土器	甕		6.0		良好	2.5Y4/1(黄灰)	砂粒	胴部中位に煤付着
56	弥生土器	長頸壺	(15.0)			良好	10Y R7/2(にぶい黄橙)	砂粒	頸部沈線は螺旋？　被熱？
57	弥生土器	壺	(16.6)			良好	10Y R7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
58	弥生土器	甕	16.7			良好	10Y R7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
59	弥生土器	甕	14.9			良好	10Y R8/2(灰白)	砂粒	口縁部にヘラガキ沈線・内外部に煤付着
60	弥生土器	高杯				良好	7.5Y R7/3(にぶい橙)	精良	表面剥離・磨滅　脚部に楕円形透し推定４個
61	弥生土器	高杯				良好	7.5Y R7/2(明褐灰)	砂粒	表面磨滅　脚部に楕円透し推定４個
62	弥生土器	甕		3.0		良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	



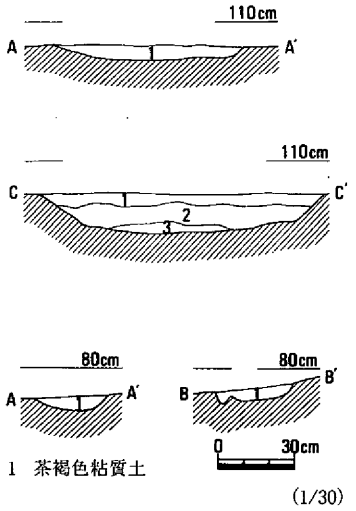
S1　(1/3)

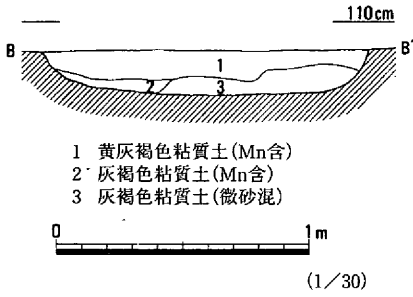
溝8は、微高地下がりの南側に位置する。溝は、南東端で二股に分かれる。二股の北側の幅は250cm、南側は370cm一本になる部分は290cmをそれぞれ測る。南と北の溝は、断面図B－B′に示されるように最下層の第16層の暗灰色粘土が同じように堆積し、埋没も一本の溝が埋まる状況を呈している。流れる方向は、北溝から微高地下がりまで徐々に高さを減じて行く。南溝は、同流部分から南東に高さを減じている。用排水の機能を備えた溝として設けられたことが窺われる。

出土遺物は、49～55が南の溝底に接して検出され、その他の56～62が埋土中から検出された。50と51は口縁部にナデによる凹みが見られ、51は沈線が2条施されている。55は平底になり、外面調整はタテハケによる。59の口縁部沈線は、ヘラガキである。56の頸部沈線は、螺旋に因ると思われる。このような出土遺物から、この溝は弥生後期の段階では機能していたことが判断される。　(下澤)

掲載番号	器種	材質	法量(mm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	特徴・備考
S1	砥石		181.0	68.0	45.0	737.4	

溝9





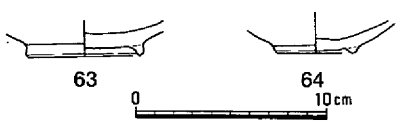
溝10

溝9は、土壙2の北西に位置する。幅120cmを測るが、溝は削平のためか途中で切れている。深さは7～15cmを測り、北西に行くにしたがい底が浅くなる。時期は、掘り込み層と埋土から中世以降と考えられる。　(下澤)

溝10は溝9の西に位置する。ほぼ南北方向で、幅15～32cm、深さ5cmを測る。溝の東側に平行して段が認められ、埋土の内容から比較的新しい水田に伴うものと思考される。　(下澤)

(6) 水田

Ib区の中央東寄りに認められた。微高地下がりに形成された旧河道の堆積である砂層上に検出された。この部分より広がる可能性は考慮されるが、調査時ではこの範囲のみの確認であった。　(下澤)



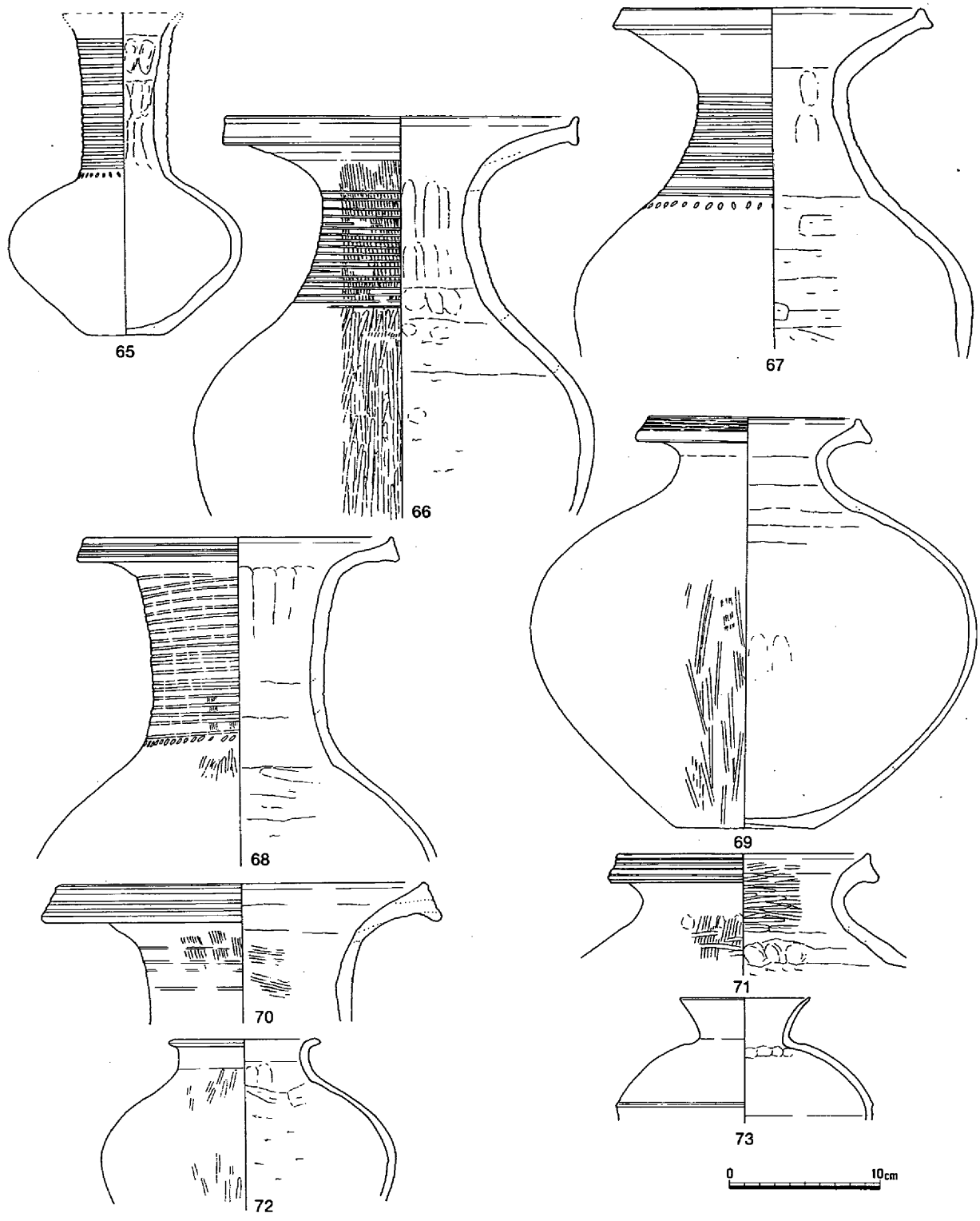
水田は、土壙1の北東に位置する。10×3mの範囲で灰色粘土を認める。出土遺物は、水田層上で63と64が検出されている。いずれも早島式の高台付椀で、時期は室町期とされる。　(下澤)

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
63	土師質土器	高台付椀		5.9		良好	2.5Y8/1～8/2(灰白)	砂粒	早島式
64	土師質土器	高台付椀		4.0		良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	早島式

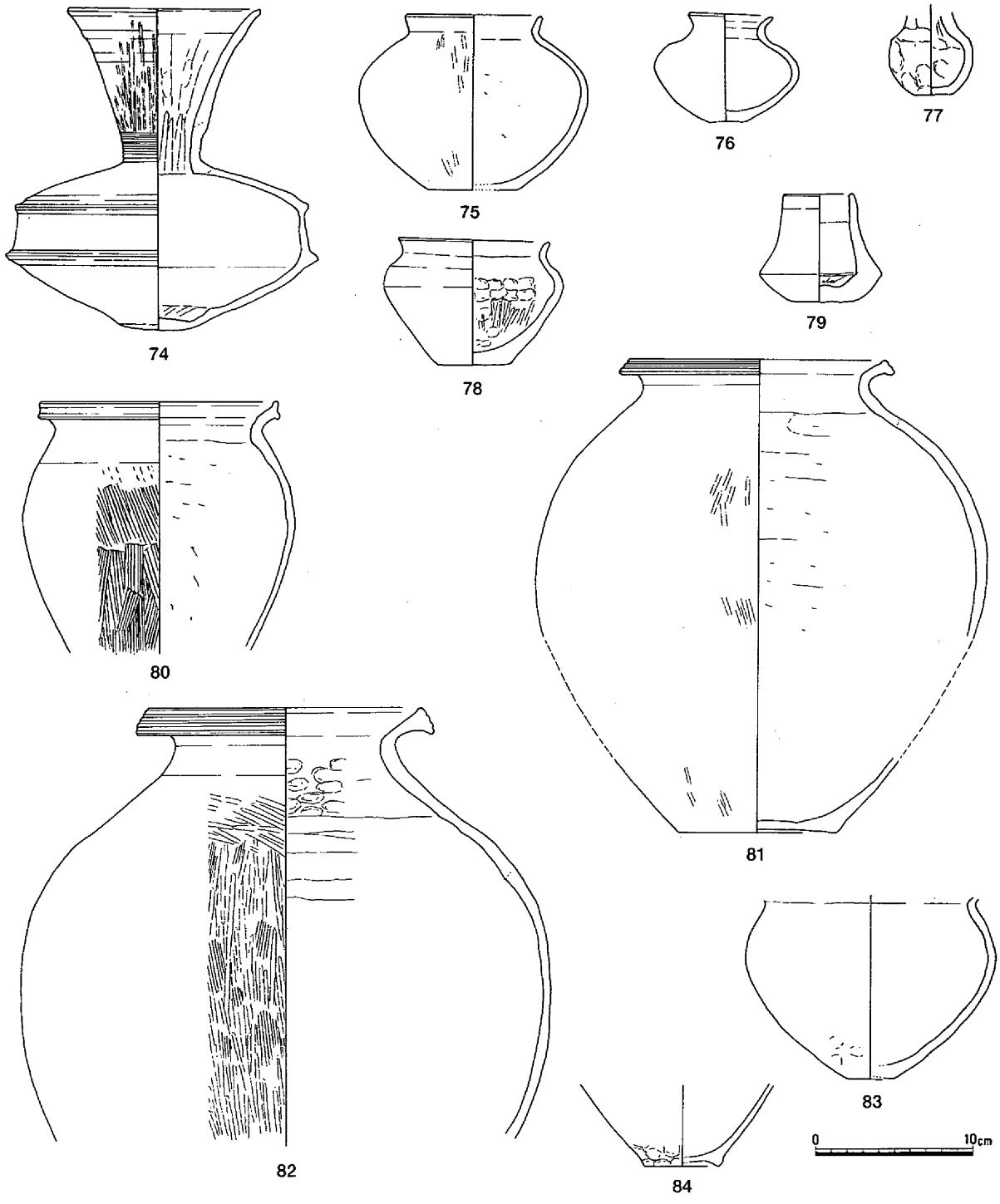
（７）土器溜り

土器溜りは、たわみ１と溝７と重複して検出された。土器溜りの南端は、上東と下庄の字境となる幅3.5mの用水が存在していることから比較的幅広く掘削を控えなければならなかった。このようなことから、下庄Ib区に認められた土器溜り２と当土器溜りと一連のものか判断しかねる。　（下澤）

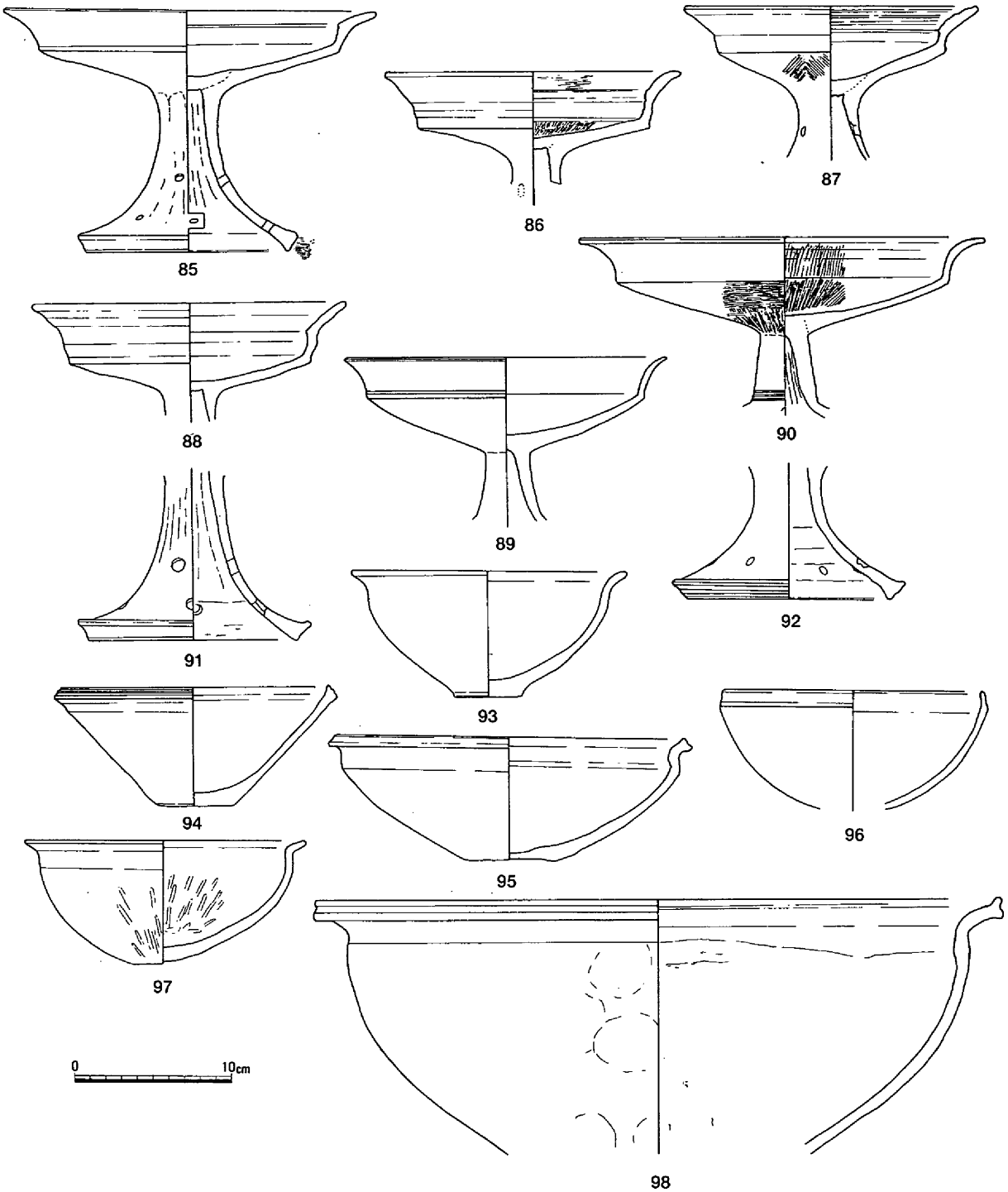
土器溜り



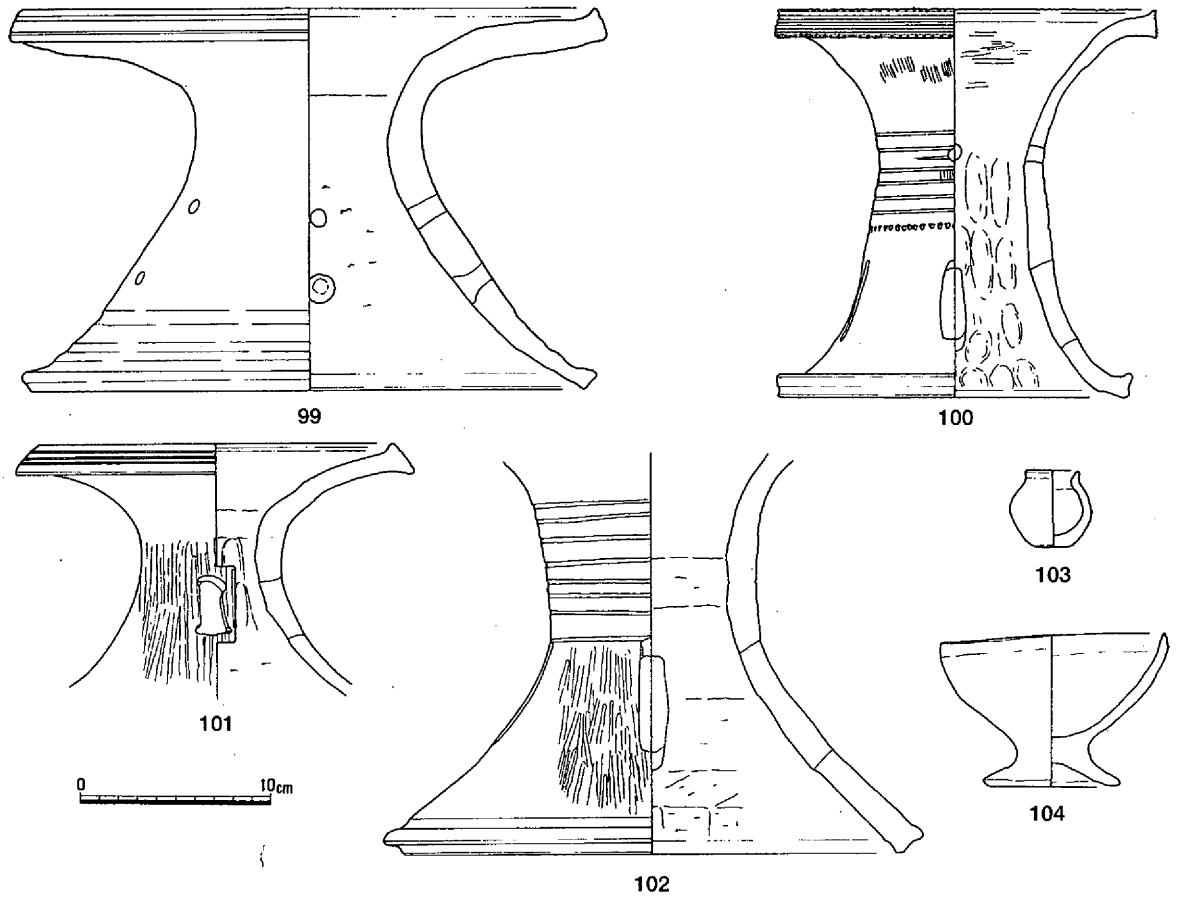
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
65	弥生土器	長頸壺		5.2		良好	7.5Y R7/4(にぶい橙)	砂粒	表面剥離　頸部に沈線　肩部に刺突文
66	弥生土器	長頸壺	22.9			良好	10Y R7/2(にぶい黄橙)	砂粒	頸部沈線は螺旋
67	弥生土器	長頸壺	19.7			良好	10Y R7/2(にぶい黄橙)	砂粒	頸部に沈線　肩部に刺突文
68	弥生土器	長頸壺	20.0			良好	2.5Y R5/6(明赤褐)	砂粒	口縁部に沈線　頸部沈線は螺旋・刺突文
69	弥生土器	壺	13.7	9.1	27.3	良好	5Y R6/6(橙)	砂粒	口縁部に沈線　表面剥離
70	弥生土器	長頸壺	23.6			良好	10Y R7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線　頸部に沈線
71	弥生土器	甕	16.5			良好	10Y R7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に沈線
72	弥生土器	壺	9.1			良好	7.5Y R8/2(灰白)	砂粒	
73	弥生土器	壺	8.6			良好	7.5Y R5/4(にぶい褐)	砂粒	表面磨滅



掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
74	弥生土器	広口直口壺	12.2	5.1	20.5	良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	丹塗り　頸部沈線は螺旋　凸帯２条　刷痕
75	弥生土器	壺	10.5	5.6	11.2	良好	7.5YR6/6(橙)	砂粒	
76	弥生土器	壺	5.2	2.2	6.9～6.7	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
77	弥生土器	壺	4.9	2.5		良好	5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒	手捏ね
78	弥生土器	広口壺	9.6	4.4	8.0～7.8	良好	7.5YR7/2(明褐灰)	砂粒	表面磨滅
79	弥生土器	壺	4.2	4.4	6.9	良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	
80	弥生土器	甕	15.0			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
81	弥生土器	甕	16.1			良好	2.5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒	口縁部に凹線　表面磨滅
82	弥生土器	壺	17.3			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線
83	弥生土器	鉢		3.0		良好	2.5YR5/6(明赤褐)	砂粒	
84	弥生土器	甕		4.7		良好	10YR3/1(黒褐)	砂粒	底部に押圧痕



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
85	弥生土器	高杯	23.3	12.7	15.7	良好	2.5YR5/6(明赤褐)	砂粒	脚柱部に円形透し3個・脚裾部に6個
86	弥生土器	高杯	19.3			良好	7.5YR6/2(灰褐)	砂粒	脚柱部に円形透し1個残存（3個？）
87	弥生土器	高杯	18.7			良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	口縁内部に凹線　脚柱部に円形透し3個
88	弥生土器	高杯	20.0			良好	5YR6/6(橙)	砂粒	表面剥落磨滅顕著　内部に稜線を持つ
89	弥生土器	高杯	20.5			良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	表面剥落
90	弥生土器	高杯	25.5			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁内部と脚柱部に沈線　脚部に円形透し？
91	弥生土器	高杯		13.1		良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	脚部に円形透し2段2個・4個
92	弥生土器	高杯		12.9		良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	裾部に円形透し6個(未貫通)
93	弥生土器	鉢	17.3	4.4	8.3	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	表面剥落
94	弥生土器	鉢	17.0	4.8	7.7	良好	5YR4/6(赤褐)	砂粒	口縁部に凹線　表面磨滅
95	弥生土器	鉢	22.2	5.8	8.1～7.8	良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	表面磨滅
96	弥生土器	鉢	16.6			良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	表面剥落
97	弥生土器	鉢	17.9	(3.7)	8.0	良好	7.5YR5/4(にぶい橙)	砂粒	
98	弥生土器	鉢	(43.5)			良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹部



掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
99	弥生土器	器台	30.0	29.1	20.3	良好	7.5ＹＲ7/1(明褐灰)	砂粒	脚柱部に円形透し２個１組３組残存　裾部に凹線
100	弥生土器	器台	19.7	17.9	20.7	良好	2.5ＹＲ5/6(明赤褐)	砂粒	口縁端部にキザミ　沈線　脚柱部に沈線　円形透し４個　刺突文　裾部に長方形透し４個　表面剥落
101	弥生土器	器台	18.5			良好	2.5ＹＲ6/6(橙)	砂粒	口縁部に沈線　脚柱部に長方形透し３個　刻痕
102	弥生土器	器台		25.7		良好	7.5ＹＲ7/3(にぶい橙)	砂粒	脚柱部に沈線　裾部に長方形透し４個
103	弥生土器	壺	2.7	2.1	4.1～4.0	良好	10ＹＲ7/2(にぶい黄橙)	砂粒	手捏ね
104	弥生土器	台付鉢	11.8	4.6	8.1～7.5	良好	10ＹＲ8/2(灰白)	砂粒	表面磨滅

土器溜りは上東Ia区の南端で溝１の東、溝７の西に隣接した位置にあり、現水田面下約20cmの床土直下で検出された。規模は、南北約560cm・東西240cm・深さ数cm～30cmを測る。しかし、上部は遺物とともに水平になっているところが多く認められ、削平されていることが想定されること、東側は検出状態から溝７に一部削られていること、南東と南西部には近世の土壙が存在すること、調査区の端であることなどから、本来はもう少し広がりを持っていたものと考えられる。南への広がりは、壁面の状態などからみて、それほどの広がりはないものと推測できる。この土器溜りは、若干の凹凸が認められる。溝２～６の土層断面Ｂ-Ｂ´では、第16層と第17層がこの土器溜りに相当する。また、溝７の土層断面図Ａ-Ａ´では、土層の堆積において前後関係を考えられる状況が認められている。しかしながら、明確に独立した遺構の重複として把握することはできなかった。底に下層遺構の関係で凹凸を生じさせ、その状態において土器溜りが形成されたと思考される。土器溜りの埋土は、黄褐色系の土層を主体とするもので、炭化粒も認められている。

出土遺物は、コンテナに19箱を数える。その多くは、一部を削られ、上からつぶされたような状態で細片化している。加えて、遺存状態が悪く、非常にもろくなっており、取り上げても復元には至ら

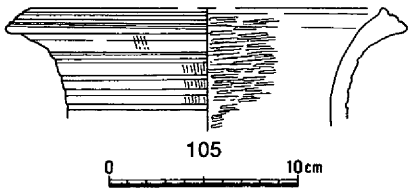
ないものも多くあった。また、表面の調整は、磨滅・剝落して、不明瞭なものが多い。したがって、図化に至ったのは、39個体であった。74の広口直口壺と78の広口壺は、ほぼ完形の状態で出土したものであり、69の壺と85の高杯は、ほぼ完形状態に復元できたものである。65～68・70は長頸壺で、口縁部の形状はまちまちであるが、頸部に沈線が施文され、胴部内面にはヘラケズリが見られるものがほとんどである。65は頸部内面にシボリが見られ、ユビオサエかナデを施している。66は口縁部に何も施さず、刺突文もない。頸部内面にシボリが見られ、丁寧にナデられている。67は頸部に沈線と肩部に刺突文を施文している。磨滅のため、ハケが施されているかどうかは不明である。68・70は頸部にハケの後、沈線を描いている。69・72・73・75・76・79・82・103は壺で、口縁端部を肥厚させる69・82と、端部を丸く処理するものが認められる。しかし同じ形態のものはない。また、内面をヘラケズリ、外面をヘラミガキで処理しているものが多い中で、73と82は頸部内面にユビオサエが見られ、82の外面にはナナメのハケが施されている。さらに、79は内面をナデ、外面をヘラミガキかナデで処理し、底部にはシボリ痕も見られる。74は広口直口壺で、丹が外面と内面も口縁部中位にまで観察された。口縁部は、ナデによる凹凸が認められ、下半には螺旋による沈線を施文している。胴部は、２条の凸帯を施している。籾痕が肩部に観察された。78は広口壺で、内面をヘラケズリ、ユビオサエ後ヘラミガキが認められる。71・80・81・84は甕である。71は外面をハケ後ミガキ。80は内面はケズリ、外面にハケが見られ、胴部下半には煤が付着していた。81は内面にヘラケズリ、外面にヘラミガキが見られる。接合面はないが、上下同一個体と考えられる。84は内面にナデ、外面に板状工具ナデ、底部はユビオサエで処理され、内外面ともに煤が付着していた甕の底部である。77はユビオサエが顕著で、底面はナデ、頸部にはシボリが見られた手捏ね土器である。83・93～98は鉢で、83は内面にナデ、外面にミガキの効果が見られるナデで調整されている。指頭圧痕も見られた。口縁部の形態は、面を持つ94と、内傾する96、外反する93・97、口縁部が横に引き出された面を持つ95・98に分けられる。調整は磨滅と剝落がひどく、97の内外面でヘラミガキ、98の内面でヘラケズリとミガキ、外面に平坦面が認められ、無文のタタキと考えられるが、判断できかねている。85～92は高杯で、口縁部の形状で、口縁部に稜を持つものと、外反するものとに大別できる。85～87は前者に当たり、円盤充塡で、やや古い形態を示す。90は後者に当たり、差し込みだと思われる。脚部の透しはすべて円形だが、数や位置は一定しない。86・87・90は表面をヘラミガキで調整されている。88・89は表面が剝落して調整は不明である。99～102は器台で、99は内面にヘラケズリとナデが確認された。100は表面剝落で不明瞭だが、外面にハケと一部にミガキ、内面上部にミガキ・下部ではユビオサエが観察できた。筒部沈線は螺旋である。101は内面にシボリが認められ、ユビオサエを施している。また、脚裾部内面で籾痕が認められた。102は外面をヘラミガキ、内面をヘラケズリ後ナデで調整され、一部に工具痕が残っていた。103はミニチュアタイプの壺で、丁寧にナデられ作られている。104は台付鉢で、調整は表面が磨滅して不明である。遺構の時期は、69・71・74・100～102が、古いと考えられる層からの出土遺物で、65・70・72・79・82・85・87・92が、新旧の土層の境目あたりと考えられる位置からの出土である。このことを加味して考えても、時期的な幅は、後期前葉～中葉の範疇にある。遺構の形成された時期もこの間であると考えられる。（築地）

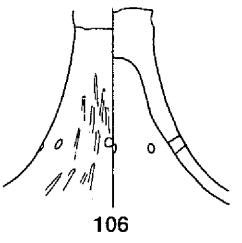
（８）たわみ

たわみは幅が狭く、錯綜して掘られている溝の外縁部分を沿うようにやや凹んだ状態のものと、細長い土壙状のものとの２種類が認められている。したがって、前者はそれら溝との重複はない。しかし、後者はこれらの溝と溝８と重複している。（下澤）

たわみ１

遺構名	位置（調査区）	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	土器	時期	備考
たわみ１	上東Ia	－	－	20	不整形		弥・後	





(1/2)

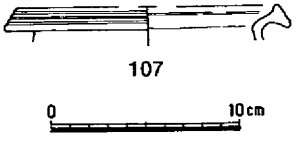
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
105	弥生土器	壺	(18.7)			良好	10ＹＲ7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線　頸部に凹線
106	弥生土器	高杯				良好	5ＹＲ6/4(にぶい橙)	砂粒	脚柱部に円形透し８個？

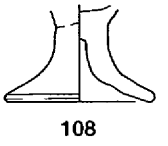
掲載番号	器種	材質	法量(mm) 最大長	最大幅	最大厚	重量（g）	備考
Ｓ２	石鏃	サヌカイト	20.0	15.0	2.3	0.5	

たわみ１は溝８の南の調査区やや東よりに北から南にあり、その中ほどでは東西方向にも延びている。掘り込みはなだらかであり、深さは20cm前後を測る。北側は溝８に切られ、南も溝７に切られる。東部分は一部側溝により確認できていないが、この付近で終わるものと思考される。西側は調査区外に延びている。このたわみと密接に関わる溝が、この中に認められている。溝２は南北のたわみに、溝４は東のたわみに、溝５と溝６は南から西のたわみにそれぞれ沿うように検出されている。そしてその中で終わっていることが認められるが、溝３の東西に沿うものは、東端においてたわみより外へ延びていることを確認している。これらの溝とたわみとの関係については、小規模な水田の用排水に関わると想定し、花粉分析をしたがプラント・オパールは検出されなかった。したがって、その性格については不明である。遺構の時期は、出土遺物と溝との重複関係から弥生後期前半と考えている。（下澤）

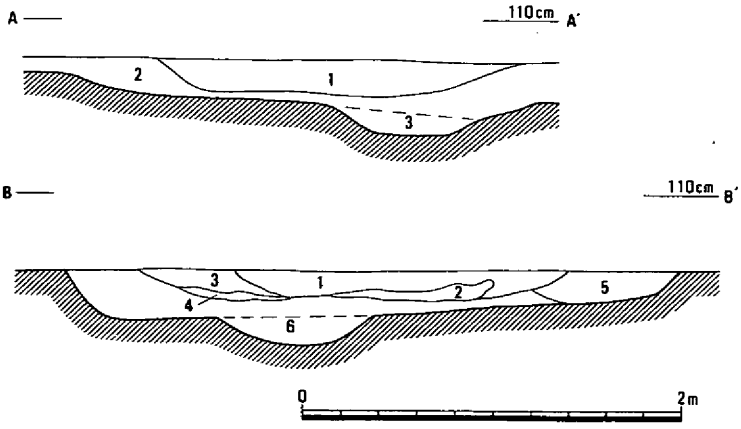
たわみ２

遺構名	位置（調査区）	規模(cm) 長さ	幅	深さ	平面形	土器	時期	備考
たわみ２	上東Ia	874	239	13	隅丸方形	○	弥生	





掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
107	弥生土器	甕	(13.9)			良好	2.5Ｙ6/1(黄灰)	砂粒	口縁端部に凹線
108	弥生土器	高杯？		7.6		良好	5ＹＲ6/6(橙)	砂粒	表面磨滅



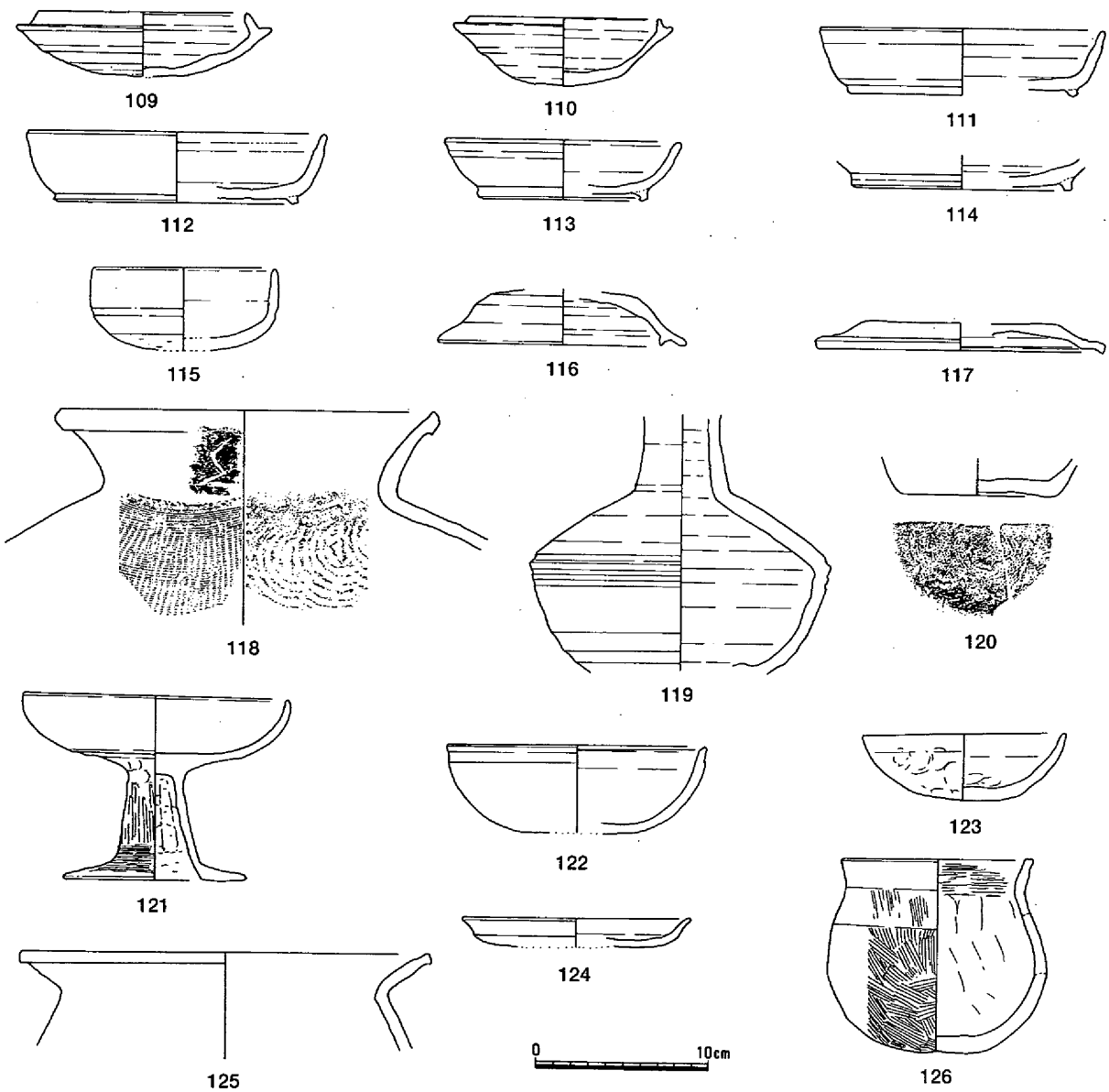
1　黒褐色土(炭化粒含)
2　淡灰黄褐色粘質土
3　黄灰褐色粘質土

1　黒褐色土(炭化粒含)
2　灰黒褐色土
3　灰褐色粘質土
4　暗灰色粘質土
5　淡灰黄褐色粘質土
6　明黄灰色粘質土

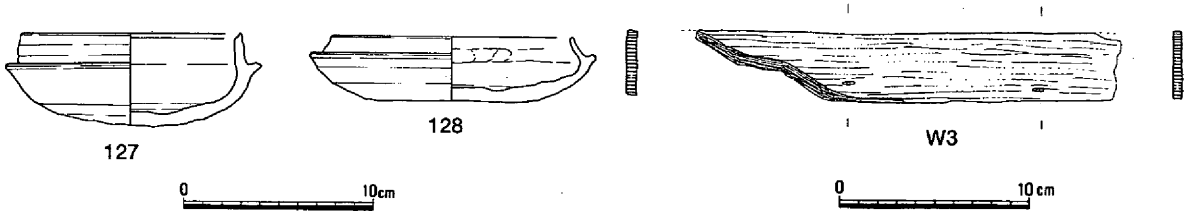
(1/40)

たわみ２は、溝８の南側に位置する。規模は長さ90cm、幅25cmで長方形の形態を呈する。深さは20cm前後を測り底の平面形態は平坦となるが、第３と第６層は溝２の埋土である。出土遺物は、**107**と**108**であり、他の遺構との関係と**108**の土器から弥生後期後半期とされる。　（下澤）

（９）その他の遺構・遺物

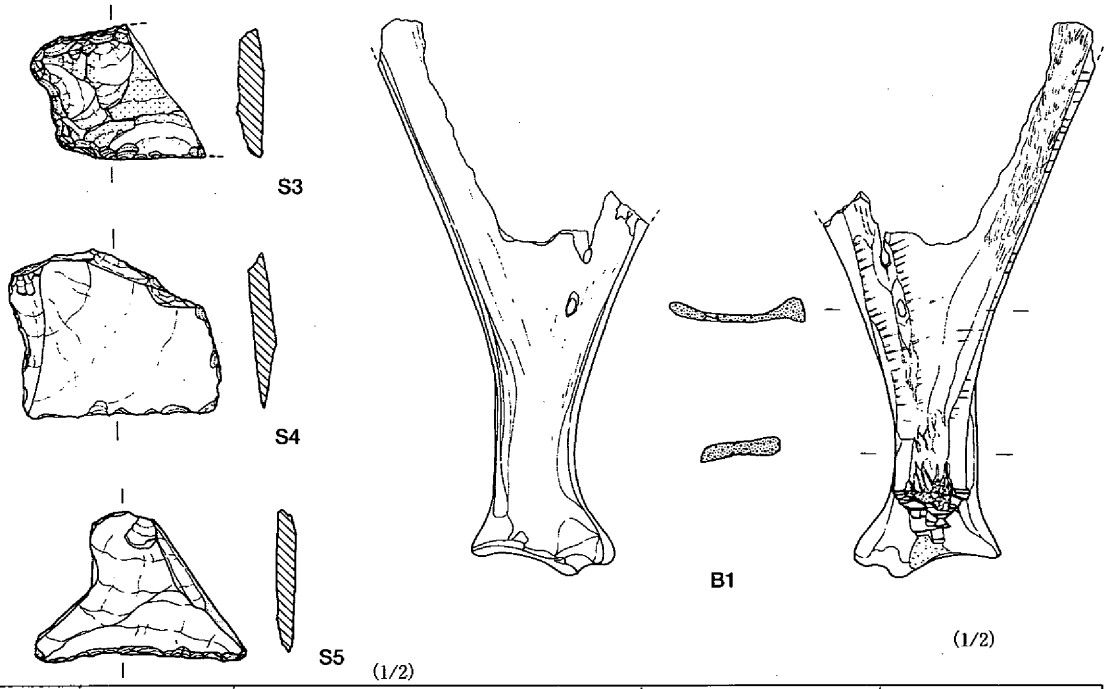


掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
109	須恵器	杯身	11.8		3.7	良好	5Y6/1(灰)	砂粒	
110	須恵器	杯身	10.9		4.0	良好	5Y5/1(灰)	砂粒	重ね焼き痕　二次的に火を受けている
111	須恵器	杯身	16.4	12.9	3.9	良好	N4 /(灰)	砂粒	ロクロ回転右？
112	須恵器	杯身	17.0	13.6	4.1	良好	N6/(灰)	精良	
113	須恵器	杯身	13.5	9.2	3.5	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁外面に煤付着
114	須恵器	杯身		12.0		良好	N7/0(灰白)	砂粒	貼付高台
115	須恵器	杯身	10.3		(4.9)	良好	N5/(灰)	砂粒	ロクロ回転左
116	須恵器	杯蓋	11.4			良好	7.5Y8/1(灰白)	砂粒	
117	須恵器	杯蓋	(16.5)	(11.7)	(1.6)	良好	5Y6/1(灰)	砂粒	つまみ部分欠損
118	須恵器	甕	20.8			良好	5Y7/1(灰白)	精良	口縁部に窯印か(線刻)
119	須恵器	壺				良好	N6/0(灰)	砂粒	胴部に沈線
120	須恵器	杯		8.9		良好	5YR6/4(にぶい橙)	精良	底部糸切り
121	土師器	高杯	15.1	10.3	10.7	良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒	
122	土師器	椀	14.9		5.1	良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	口縁内面に凹部
123	土師器	椀	11.8		3.6～4.0	良好	5YR5/3(にぶい赤褐)	砂粒	内面使用による磨滅　内面丹塗りか
124	土師器	杯	13.1	(6.8)	(1.7)	良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	
125	土師器	甕	23.3			良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	口縁部～肩部に煤付着
126	土師器	甕	11.0		11.5	良好	10Y6/1(灰)	砂粒	内外面に煤付着



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
127	須恵器	杯身	11.6	7.8	4.9	良好	N5/(灰)	砂粒	ロクロ回転左
128	須恵器	杯身	12.8	8.0	3.4	良好	N6/(灰)	砂粒	

掲載番号	器種	法量(cm) 長さ	幅・径	厚み	樹種	備考
W3	部材	22.6+α	3.5+α	0.5	スギ	孔あり



掲載番号	器種	材質	法量(mm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	備考
B1	卜骨	鹿の肩胛骨	147.0	71.0	26.3	19.9	ケズリ

掲載番号	器種	材質	法量(mm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	備考
S3	石包丁	サヌカイト	46.0	36.0	8.0	13.6	
S4	スクレイパー(R.F)	サヌカイト	55.5	44.5	10.0	21.5	
S5	スクレイパー	サヌカイト	55.5	40.0	7.0	11.9	

獣骨は、Ib区(第2図)の北東端に認められた。分布範囲は510×320cmにおいて、床土直下から検出された。検出された獣骨の遺存状態は良くなかったが、鑑定の結果、馬と牛の二種であった。時期は、検出の状態から近世以降と思考される。

109～128の出土土器は第3図の土層断面図における第22層から上層に出土したものである。109は、受部の凹みがなくなり、口縁端部は丸く納める。110は、受部が短くなる。111～114は、高台付杯身である。いずれも、底部端に外方に開く短めの貼り付けの高台を付す。115は、ほぼ垂直に立ち上がり、下端には沈線を施す杯身である。116と117は杯蓋である。116は欠損しているが、天井部に擬宝珠様のつまみが付されるものであり、内面端部に内傾するかえりを持っている。118は、頸部に窯印が認められる。120の底部は、糸切りが認められる。121～126は、土師器である。121は内傾気味の口縁となる高杯である。脚部は「ハ」の字状に開き、裾部は逆「L」字状に屈曲する。外面調整は杯部がヨコナデ、脚部との接合部分は押圧が認められる。脚部はタテヘラミガキ、裾部はヨコヘラミガキである。脚部から裾部内面は、ヨコヘラケズリが行われる。122の口縁部外面には、ヨコナデによる凹部、内面にも認められる。123は器面に押圧痕を残すが、内面に丹の痕跡が認められる。器種を杯身としたが蓋の可能性もある。124は口縁部を外方に屈曲させる杯であり、水漉粘土を用いている。125は甕の破片で、内外面ともハケによる調整がみられる、内面には押圧も認められる。126は下膨れ気味の胴部を有するもので、口縁端部はヨコナデにより外方に出る部分も認められる。頸部屈曲下半から口縁部内面においては、ハケの調整が認められる。このような出土遺物から時期を推定すると、7世紀前半から9世紀代を示している。

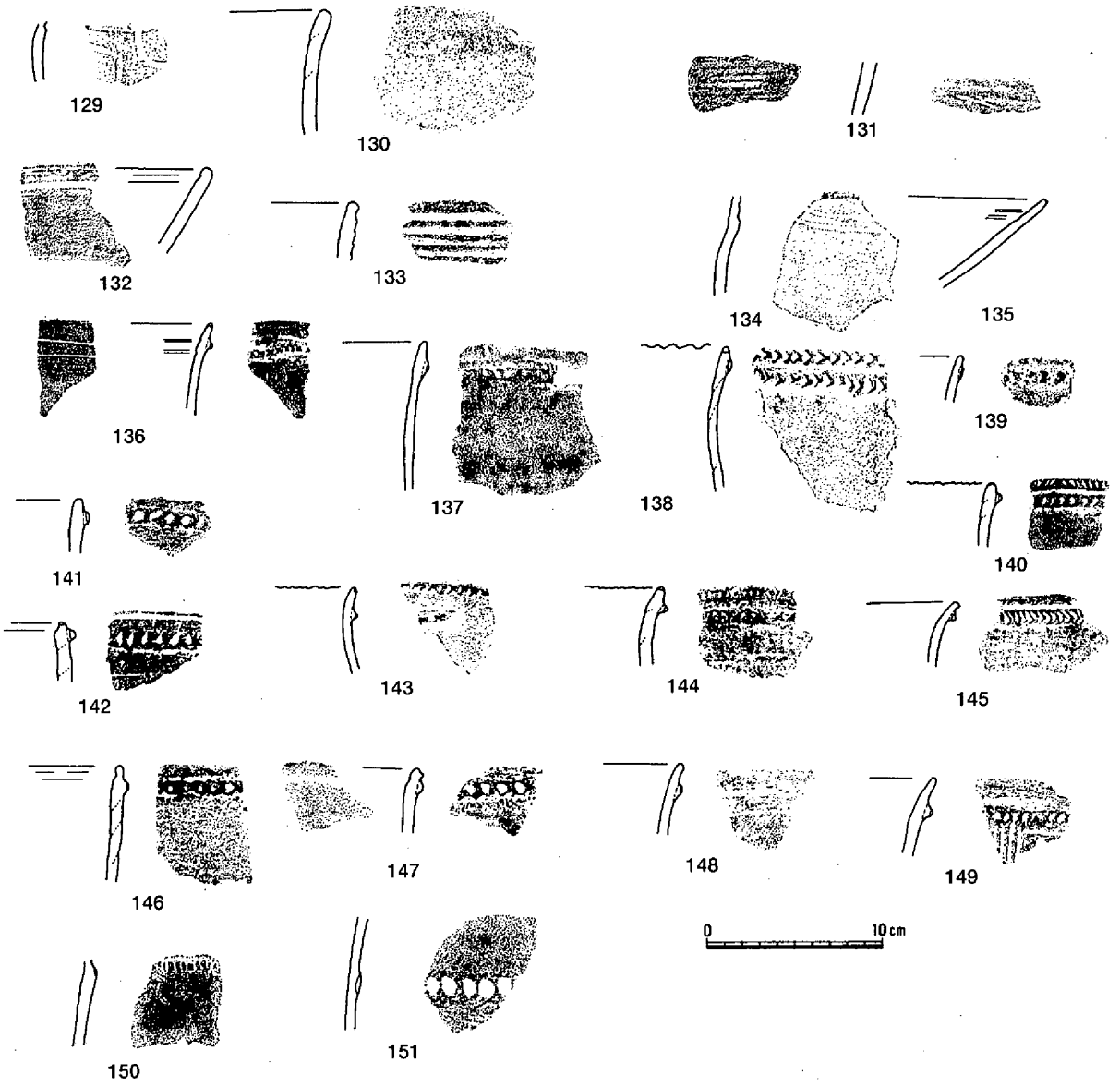
127・128・W3は、貝塚である第25層の下層から出土した。127の口縁端部は段を、128は丸く納めている。W3は幅3.5cm前後厚さ0.5cmを測り、両端は欠失している。長辺側の一方には、裏側に抜ける細い孔が認められる。この出土遺物から、貝塚を形成していた下層の時期は6世紀代と考えられるのである。

B1の卜骨は、第47層の暗灰色砂質土からの出土である。卜骨は肩甲棘部分を基底部から削り取り、全体を平たい板状に形成している。このため、頸部には深い切り込みの痕が細かい段状に認められる。内面の整形は認められなかった。肩甲棘の削り部分に楕円形の掘り込みを2ヵ所、さらに上方にもその可能性が考えられる。楕円形の掘り込みは、さらに削ったと見られる稜が観察される。この部分に孔が認められる。しかしながら、灼痕が行われた痕跡は認められなかった。この卜骨を出土した層の時期を判断できる遺物は認められなかったが、第3図にみられる堆積状況から6世紀代として把握しても可能であろうと思考する。

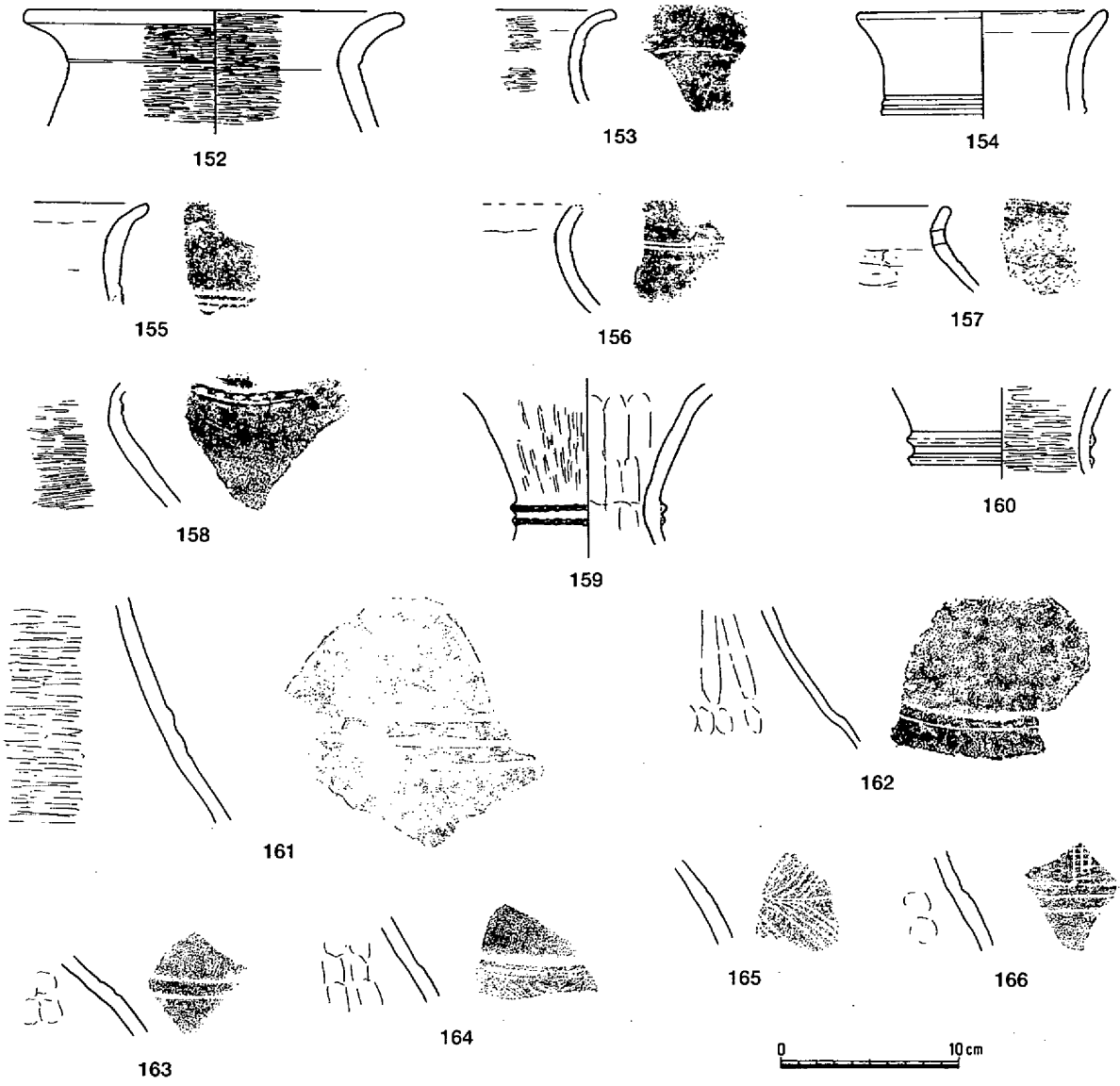
129～375は、第3図の土層断面の第50と主に第51層の掘り下げで出土したものである。129～133は縄文後期前半から後半の時期にあたるもので、129は磨消縄文を持ち、施文内容は風化が著しく不詳である。130は口縁端部を丸くする。131は内面に巻き貝の条痕が認められ、外面は平滑にしている。132は内面に沈線とキザミメ、133は文様として巻き貝で施文する。134～151は、縄文後期後半から末の時期を示す。134の沈線はヘラで、135の内面沈線もヘラによる施文である。148・149には、文様としてヘラガキ沈線を施す。

152～188は、弥生前期の土器である。185～187は、沈線が多条化するが施文具はヘラである。188は、沈線間に鋸歯文を施文する。

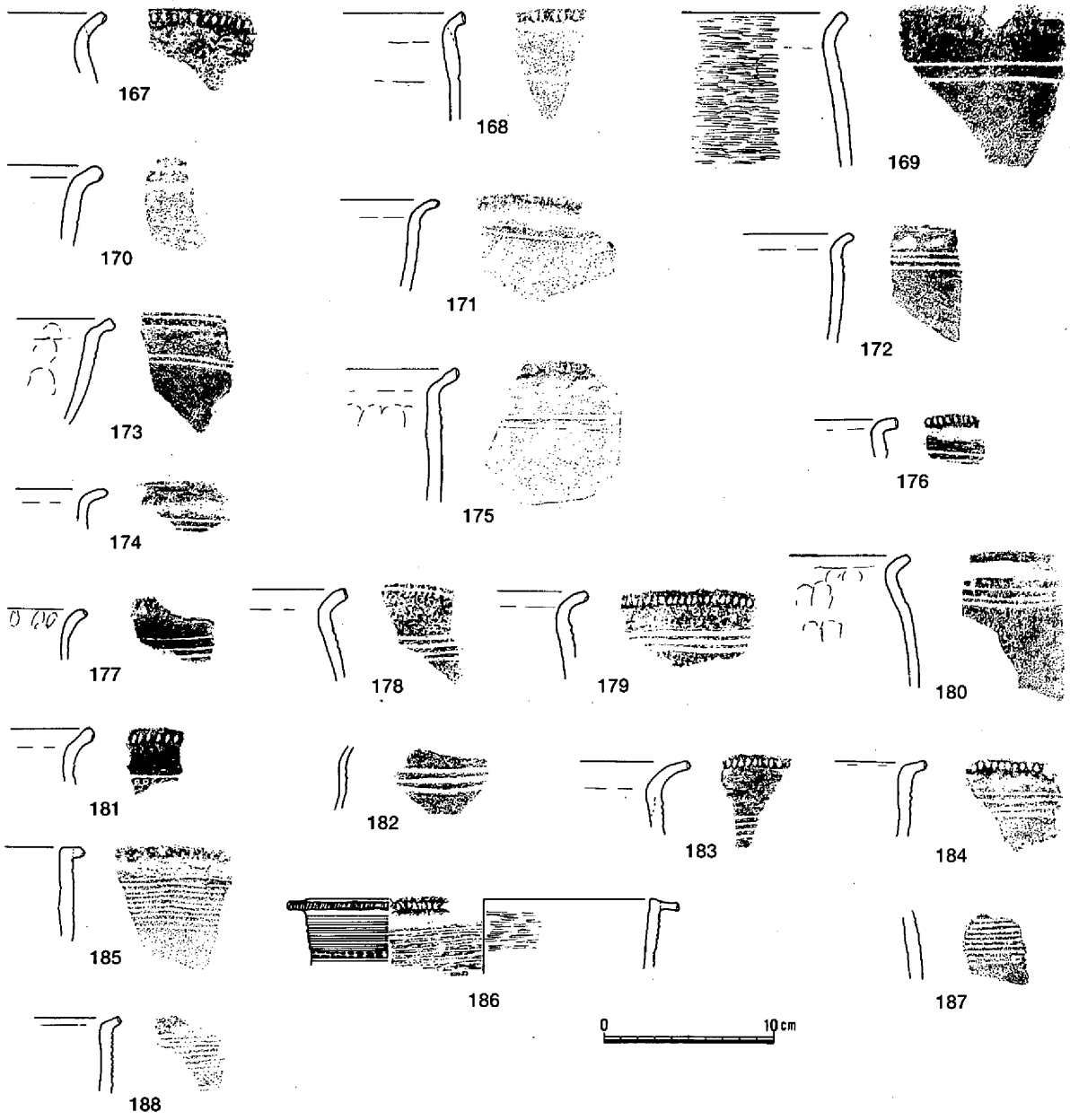
189～234は、弥生中期の土器である。211・213・214の沈線は、クシガキにより施される。208・209



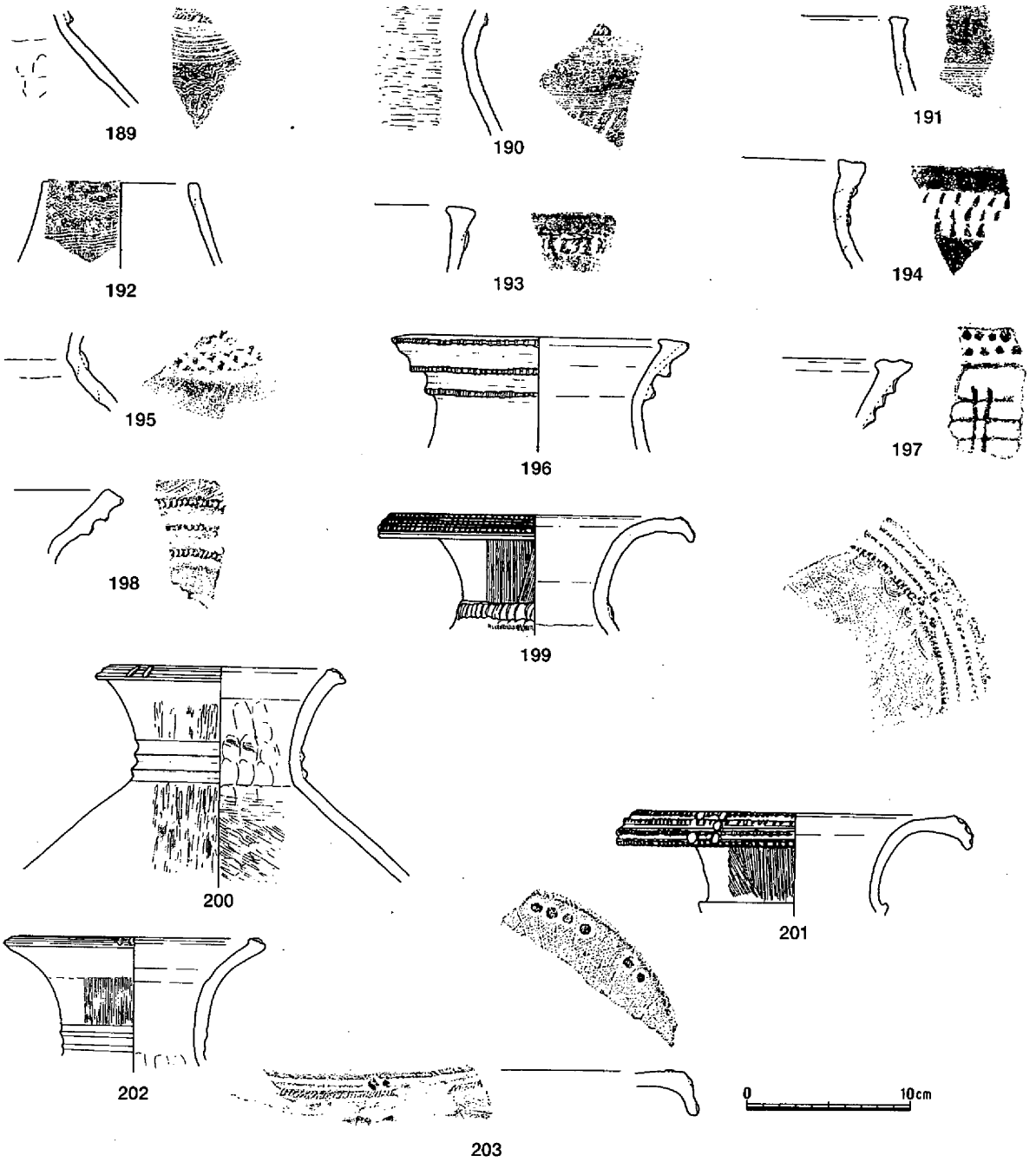
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
129	縄文土器	鉢				良好	N3/1(暗灰)	砂粒(多)	磨消縄文
130	縄文土器	深鉢				良好	7.5Y5/1(灰)	砂粒	表面風化
131	縄文土器	深鉢				良好	10YR5/1(褐灰)	砂粒	内面巻き貝条痕
132	縄文土器	鉢				良好	10YR7/2(にぶい黄橙)～6/2(灰黄褐)	砂粒	口縁部内面キザミメ・段あり
133	縄文土器	深鉢				良好	N3/(暗灰)	砂粒	貝殻沈線
134	縄文土器	深鉢				良好	7.5Y3/1(オリーブ黒)	砂粒(多)	表面風化　沈線
135	縄文土器	鉢				良好	7.5Y5/1(灰)	砂粒(多)	口縁内面に沈線
136	縄文土器	深鉢				良好	2.5Y5/2(明灰黄)～6/2(灰黄)	砂粒(多)	口縁内部に沈線２条　口縁部にキザミメ凸帯
137	縄文土器	深鉢				良好	5Y7/1(灰白)	砂粒	口縁部にキザミメ凸帯
138	縄文土器	深鉢				良好	2.5Y5/1(黄灰)	砂粒	口縁部にキザミメ凸帯
139	縄文土器	深鉢				良好	N2/1(黒)	砂粒(多)	口縁部に凸帯・キザミメ　表面磨滅
140	縄文土器	深鉢				良好	10YR3/1(黒褐)	砂粒	口唇部にキザミメ　口縁部にキザミメ凸帯
141	縄文土器	深鉢				良好	10YR5/2(灰黄褐)	砂粒	口縁部にキザミメ凸帯
142	縄文土器	深鉢				良好	2.5Y6/1(黄灰)	砂粒	口縁部にキザミメ凸帯・内面に沈線
143	縄文土器	深鉢				良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒(多)	口縁部にキザミメ・キザミメ凸帯
144	縄文土器	深鉢				良好	5Y4/1(灰)	砂粒	口縁部にキザミメ凸帯
145	縄文土器	深鉢				良好	5Y4/1(灰)	砂粒	口縁部にキザミメ凸帯
146	縄文土器	深鉢				良好	5Y6/1(灰)～7/1(灰白)	砂粒	内面に沈線
147	縄文土器	深鉢				良好	2.5Y5/1(黄灰)	砂粒	口縁内部に沈線　口縁部にキザミメ凸帯
148	縄文土器	深鉢				良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	口縁部にキザミメ凸帯・ヘラガキ沈線
149	縄文土器	深鉢				良好	5Y3/1(オリーブ黒)	砂粒	キザミメ凸帯　ヘラガキ沈線
150	縄文土器	深鉢				良好	10YR5/1(褐灰)	砂粒	キザミメ
151	縄文土器	深鉢				良好	2.5Y6/1(黄灰)	砂粒	爪形文



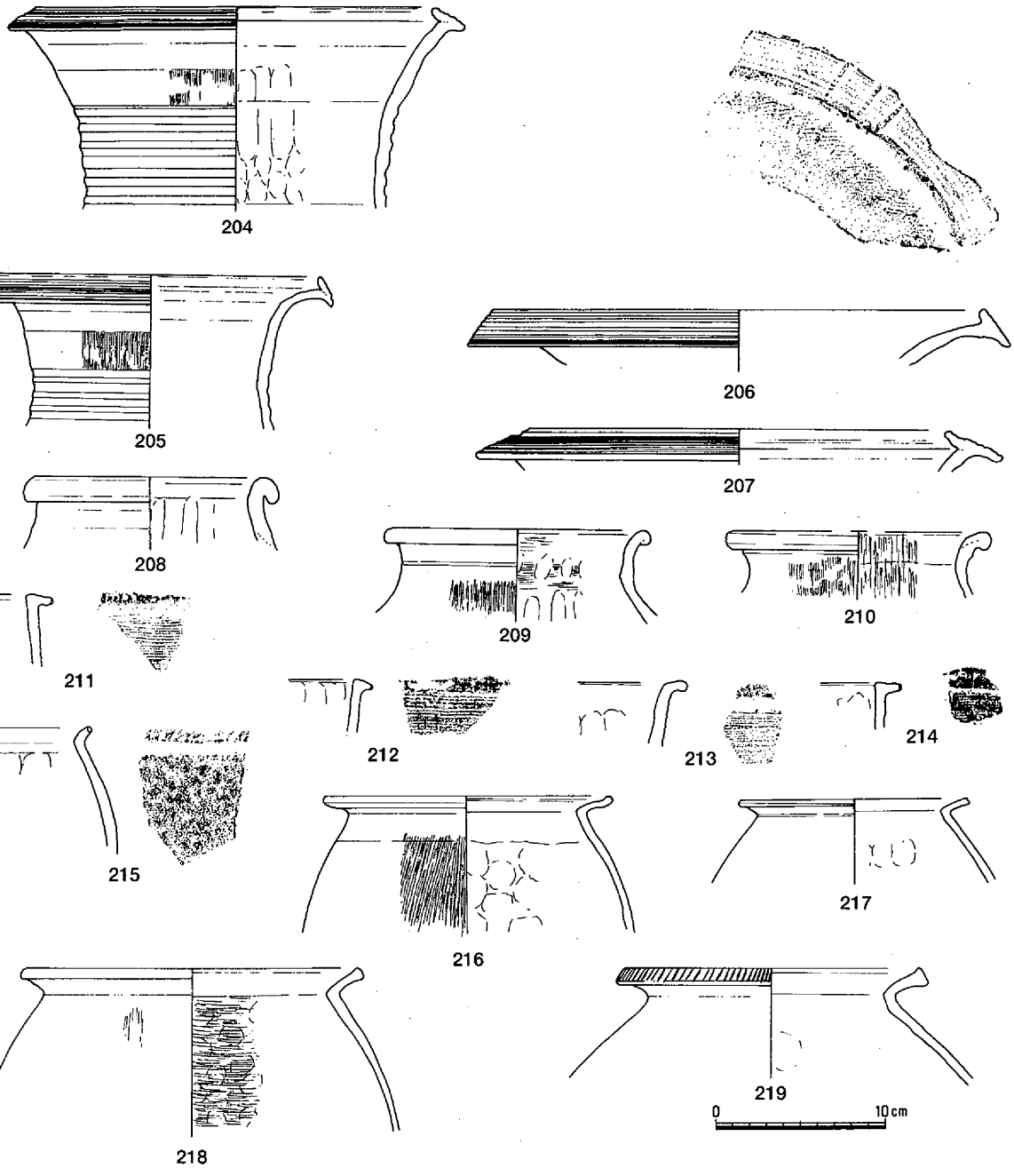
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底(脚)径	法量(cm) 器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
152	弥生土器	壺	20.4			良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	頸部に段
153	弥生土器	壺				良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	頸部に沈線
154	弥生土器	壺	13.5			良好	10YR7/3～6/3(にぶい黄橙)	砂粒	頸部に沈線
155	弥生土器	壺				良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	削り出し凸帯
156	弥生土器	壺				良好	7.5YR6/6(橙)	砂粒	頸部に沈線
157	弥生土器	壺				良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	口縁部に円形穿孔　竹管文　波状文
158	弥生土器	壺				良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	肩部に刺突文
159	弥生土器	壺				良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	貼付凸帯文２本
160	弥生土器	壺				良好	7.5YR5/2(灰褐)	砂粒	頸部に貼付凸帯
161	弥生土器	壺				良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	肩部に削り出し凸帯
162	弥生土器	壺				良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	削り出し凸帯
163	弥生土器	壺				良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	削り出し凸帯
164	弥生土器	壺				良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	沈線文
165	弥生土器	壺				良好	N3/(暗灰)	砂粒	沈線文
166	弥生土器	壺				良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	肩部に段



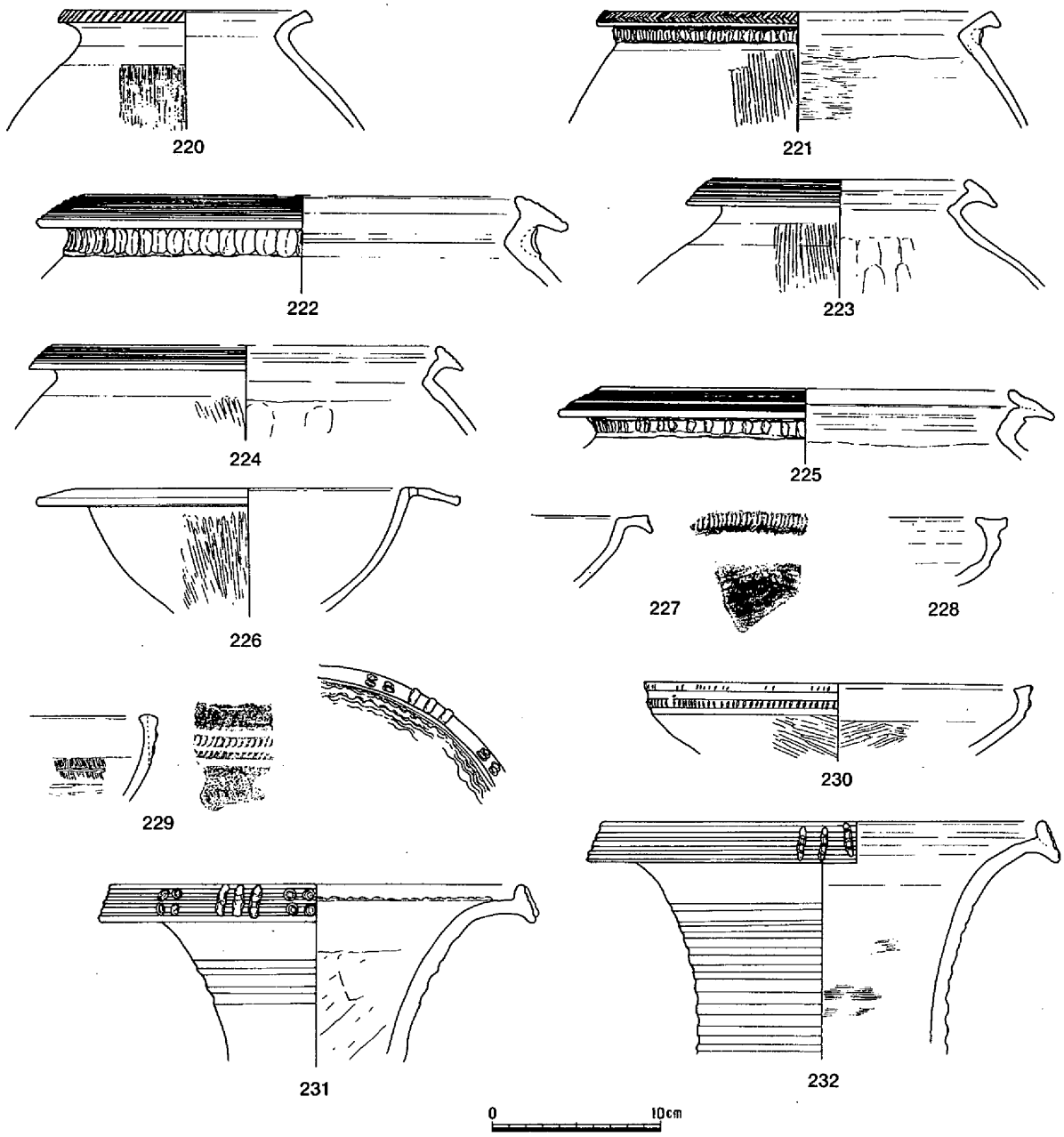
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
167	弥生土器	甕				良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	口唇部にキザミメ
168	弥生土器	甕				良好	5YR6/3(にぶい橙)	砂粒	口唇部にキザミメ　沈線１本
169	弥生土器	甕				良好	7.5YR7/2(明褐灰)	砂粒	沈線２本
170	弥生土器	甕				良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	口唇部にキザミメ　沈線１本
171	弥生土器	甕				良好	10YR6/4(にぶい黄橙)	砂粒(多)	口唇部にキザミメ　沈線３本
172	弥生土器	甕				良好	2.5Y6/1(黄灰)	砂粒	沈線３本
173	弥生土器	甕				良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒	沈線２本
174	弥生土器	甕				良好	2.5Y5/4(暗灰黄)	砂粒	沈線２本？
175	弥生土器	甕				良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒(多)	口唇部にキザミメ　沈線２本
176	弥生土器	甕				良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	口唇部にキザミメ　胴部に沈線２本？
177	弥生土器	甕				良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	口唇部に刺突文　胴部に沈線
178	弥生土器	甕				良好	10YR4/1(褐灰)	砂粒	口唇部に沈線とキザミメ　沈線４本
179	弥生土器	甕				良好	10YR5/2(灰黄褐)	砂粒	口唇部にキザミメ　沈線３本
180	弥生土器	甕				良好	10YR4/1(褐灰)	砂粒	口唇部にキザミメ　沈線３本
181	弥生土器	甕				良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口唇部にキザミメ　沈線間に竹管文
182	弥生土器	甕				良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	ヘラガキ沈線
183	弥生土器	甕				良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	口唇部にキザミメ　ヘラガキ沈線
184	弥生土器	甕				良好	2.5Y6/1(黄灰)	礫(少)	口唇部にキザミメ　胴部に沈線４本
185	弥生土器	甕				良好	7.5Y2/1(黒)	砂粒(多)	口唇部にキザミメ　胴部にヘラガキ沈線10本
186	弥生土器	甕	(19.8)			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口唇部にキザミメ　胴部にヘラガキ沈線・刺突文
187	弥生土器	甕				良好	2.5Y6/1(黄灰)	砂粒	ヘラガキ沈線
188	弥生土器	甕				良好	10YR4/1(褐灰)	砂粒	口唇部にキザミメ　胴部にヘラガキ沈線・鋸歯文



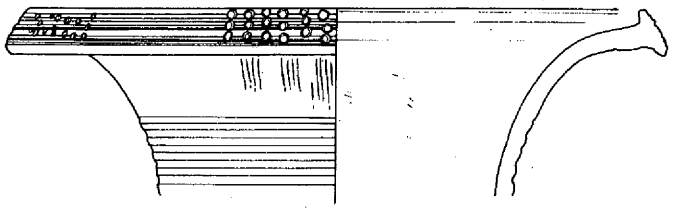
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
189	弥生土器	壺				良好	10YR4/2(灰黄褐)	砂粒	キザミメ凸帯　沈線　波状文
190	弥生土器	壺				良好	7.5YR7/2(明褐灰)	砂粒	肩部にキザミメ凸帯　ヘラガキ沈線と波状文
191	弥生土器	壺				良好	7.5YR6/2(灰褐)	砂粒	ヘラガキ沈線
192	弥生土器	壺	9.2			良好	10YR5/2(灰黄褐)	砂粒	クシガキ沈線と波状文
193	弥生土器	壺				良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	貼付凸帯
194	弥生土器	壺				良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	３条の貼付凸帯に押圧
195	弥生土器	壺				良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	頸部にキザミメ凸帯
196	弥生土器	壺	14.6			良好	7.5YR6/2(灰褐)	砂粒	口縁端部にキザミメ・キザミメ凸帯
197	弥生土器	壺				良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	口唇部に浮文２列　口縁部に凸帯と棒状浮文２本１組
198	弥生土器	壺				良好	5Y6/1(灰)	砂粒(少)	口縁端面に斜格子文　キザミメ凸帯
199	弥生土器	壺	17.4			良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒(多)	口縁部に凹線・キザミメ　頸部貼付凸帯に押圧
200	弥生土器	壺	13.1			良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	口唇部棒状浮文(２個１対５組？)頸部に凸帯文
201	弥生土器	壺	(19.2)			良好	10YR5/2(灰黄褐)	砂粒(少)	口縁内面に重弧文・格子文　口縁部にキザミメ凸帯・円形浮文(６個１組)　頸部に凸帯
202	弥生土器	壺	14.1			良好	10YR6/4(にぶい黄橙)	砂粒	口唇部に凹線・貼付凸帯３カ所　頸部に凹部
203	弥生土器	壺	(22.0)			良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	口唇部内面に円形浮文２対・斜格子文



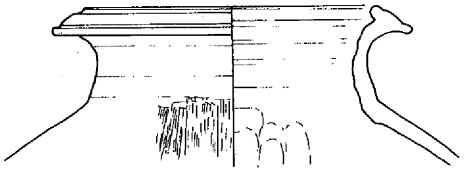
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
204	弥生土器	壺	23.7			良好	2.5Y7/2～6/2(灰黄)	砂粒	口縁部に凹線　頸部に凹線
205	弥生土器	壺	20.0			良好	10YR8/2(灰白)～8/3(浅黄橙)	砂粒	折り返し口縁部　口縁部に凹線　頸部に凹線
206	弥生土器	壺	28.4			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒(多)	口縁部に凹線・棒状浮文　口縁内面に波状文
207	弥生土器	壺	24.2			良好	5Y6/1(灰)	砂粒	口縁部に凹線
208	弥生土器	壺	(13.6)			良好	5YR6/6(橙)	砂粒	口縁垂下
209	弥生土器	壺	(15.0)			良好	10YR5/1～4/1(灰)	砂粒	口縁部折り曲げて玉縁状
210	弥生土器	壺	(14.7)			良好	5YR4/3(にぶい赤褐)	砂粒	頸部に煤付着
211	弥生土器	甕				良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒(多)	口唇部にキザミメ　胴部にクシガキ沈線
212	弥生土器	甕				良好	7.5YR6/6(橙)	砂粒	クシガキ沈線
213	弥生土器	甕				良好	7.5YR4/3(褐)	砂粒	上半クシガキ沈線
214	弥生土器	甕				良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	口唇部にキザミメ・煤付着　クシガキ沈線
215	弥生土器	甕				良好	10YR8/2(灰白)～7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口唇部にキザミメ
216	弥生土器	甕	16.6			良好	10YR5/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部～胴部上半に煤付着
217	弥生土器	甕	13.2			良好	7.5YR5/3(にぶい褐)	砂粒	口唇部に沈線
218	弥生土器	甕	(20.0)			良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒	
219	弥生土器	甕	17.2			良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒	口唇部に刺突文



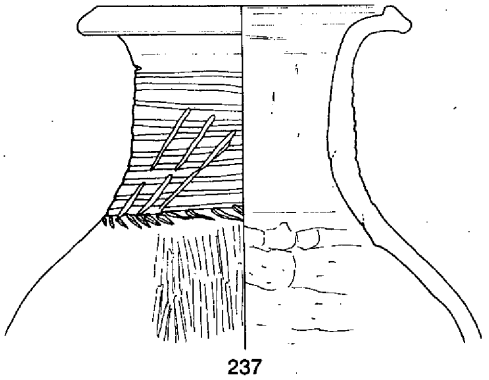
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
220	弥生土器	甕	14.0			良好	5Y6/1(灰) ～6/2(灰オリーブ)	砂粒	口唇部にキザミメ
221	弥生土器	甕	(22.7)			良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	口唇部にキザミメ　頸部に凸帯
222	弥生土器	甕	(25.4)			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	口縁部に凹線・凸帯文(凸帯文上に指頭圧痕)
223	弥生土器	甕	15.2			良好	5Y5/1(灰)	砂粒	口縁部に凹線
224	弥生土器	甕				良好	10YR5/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線
225	弥生土器	甕	24.4			良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	口縁部に沈線　頸部に凸帯文(凸帯文上に刺突文)
226	弥生土器	高杯	24.8			良好	5YR6/3(にぶい橙)	砂粒	口縁部に穿孔2個
227	弥生土器	高杯				良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	口唇部にキザミメ
228	弥生土器	高杯				良好	5YR4/6(赤褐)	砂粒	口縁部に凹線
229	弥生土器	高杯				良好	5YR5/2(灰褐)	砂粒	口縁部に凹線・キザミメ
230	弥生土器	高杯	(23.0)			良好	2.5Y5/2(暗灰黄)	砂粒	口縁部に凹線とキザミメ
231	弥生土器	器台	24.0			良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	口縁内面に波状文　口縁部に凹線・棒状浮文・竹管文・頸部に凹線
232	弥生土器	器台	24.8			良好	2.5Y8/3(浅黄)	砂粒	口縁部に凹線・棒状浮文　頸部に凹線

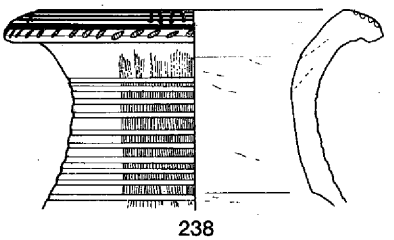

233

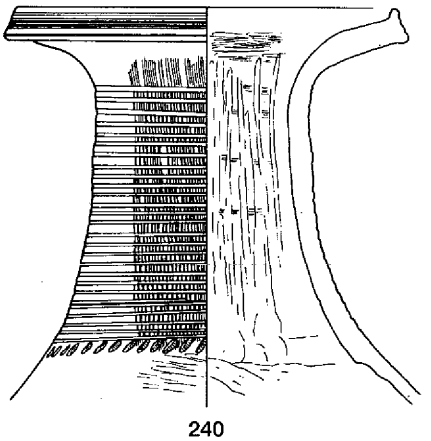
234

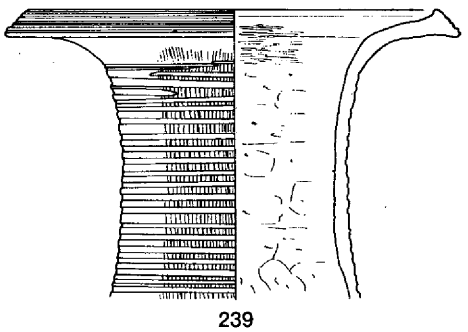

235

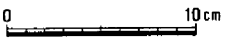
236


237

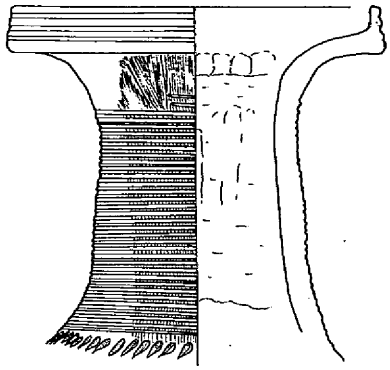

238

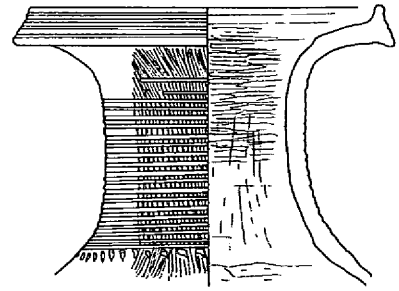

240

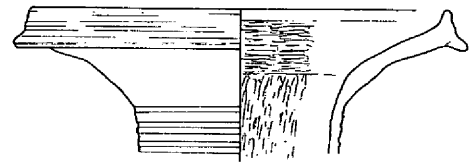

239

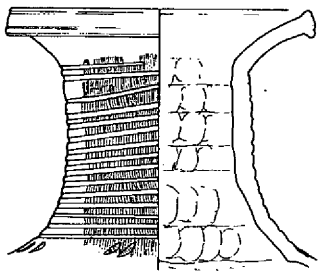


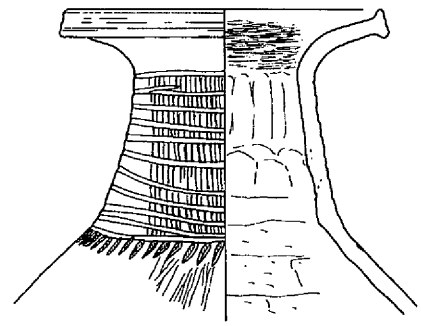
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
233	弥生土器	器台	32.3			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口唇部に凹線と竹管文　頸部に凹線
234	弥生土器	鉢？				良好	5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒	口縁部に穿孔　胴部にタテ凸帯
235	弥生土器	壺	15.2			良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	
236	弥生土器	壺	(13.8)			良好	2.5YR6/6(橙)	砂粒	頸部に沈線
237	弥生土器	長頸壺	15.5			良好	2.5Y6/1(黄灰)	砂粒	頸部沈線は単線・刺突文
238	弥生土器	長頸壺	(16.0)			良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	口縁部に4列4個組竹管文3組残存・キザミメ頸部に沈線
239	弥生土器	長頸壺	21.5			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	口縁部に沈線　頸部沈線は螺旋？
240	弥生土器	長頸壺	19.6			良好	7.5YR5/2(灰褐)	砂粒	口縁部に沈線　頸部沈線は螺旋？・刺突文

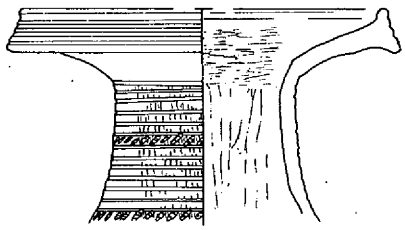

241

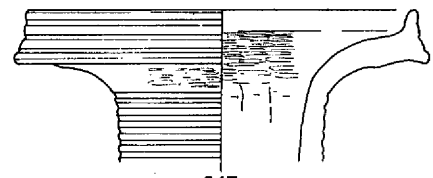

242

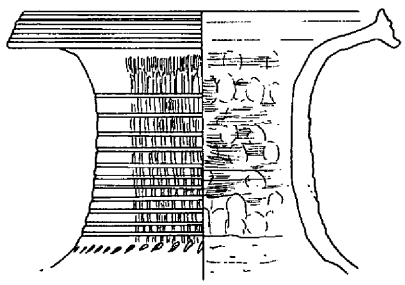

243


244

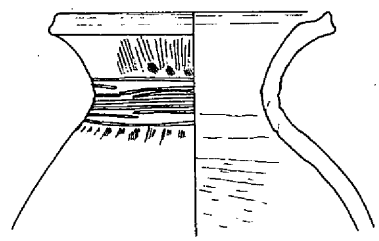

245

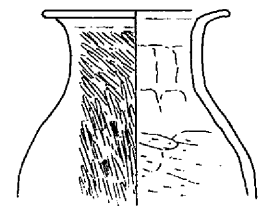

246


247


248

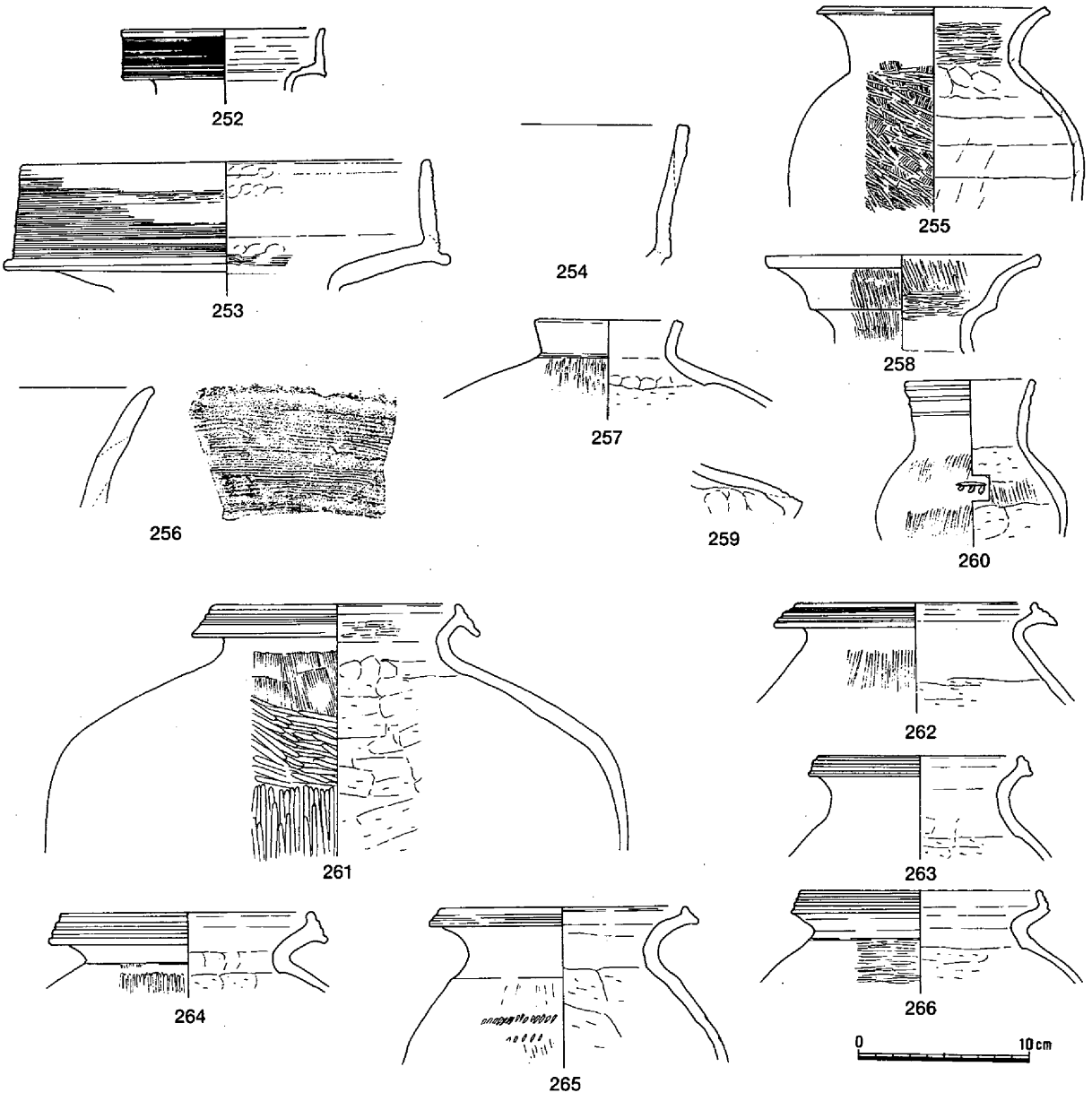
249


250

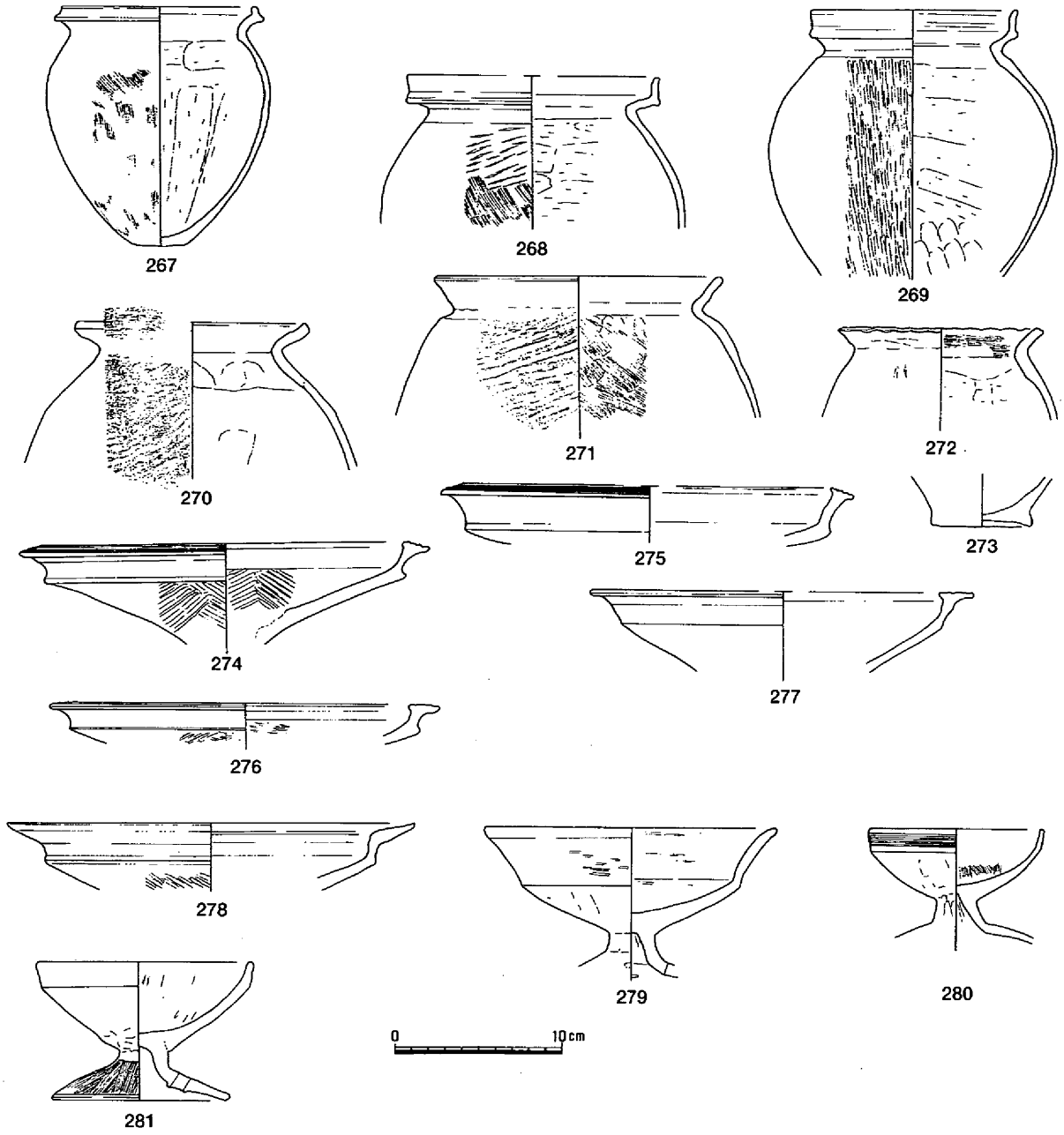

251

0　10 cm

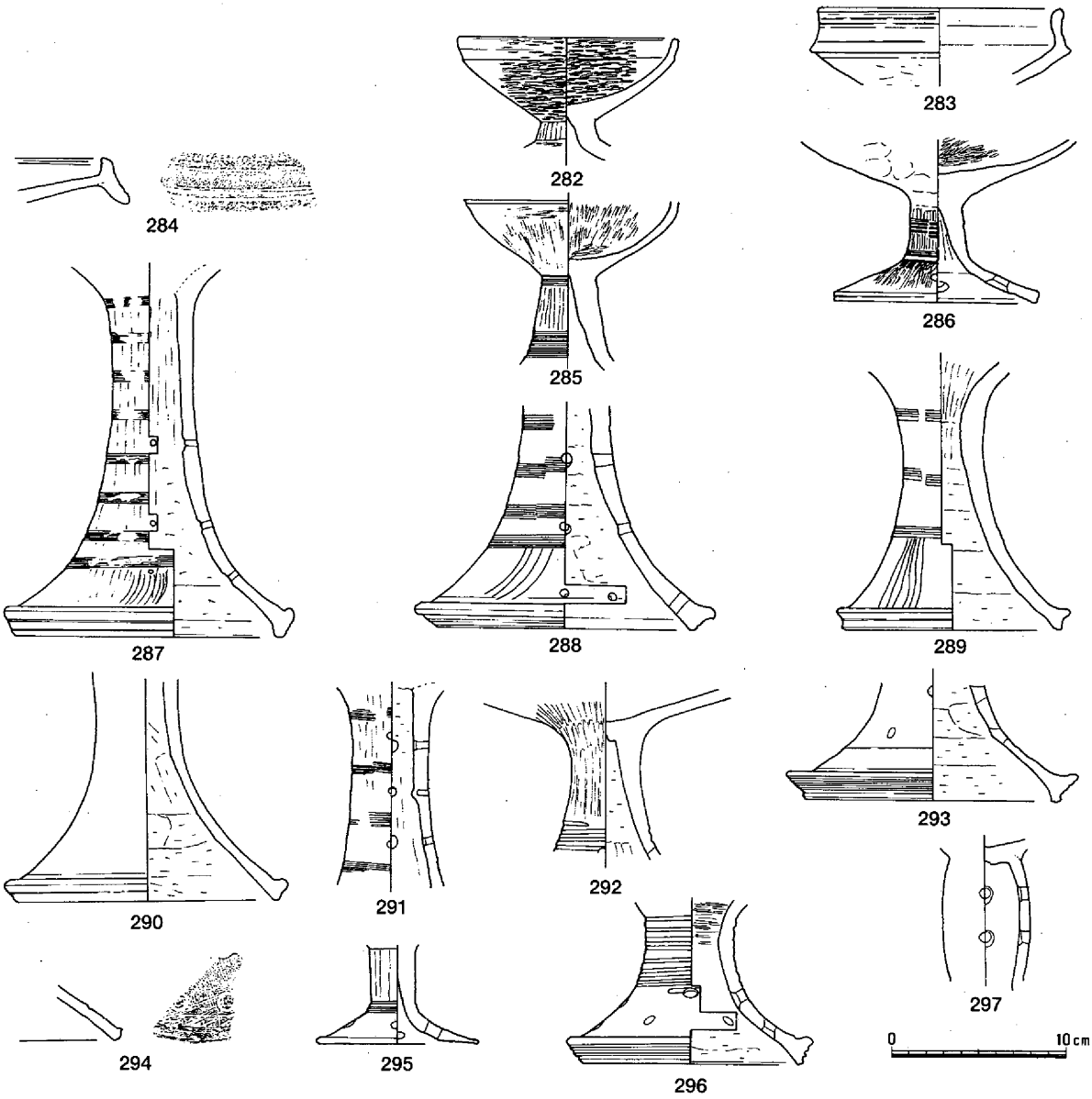
掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底（脚）径	器高				
241	弥生土器	長頸壺	(18.6)			良好	7.5YR7/3(にぶい橙)～5YR7/3	砂粒	口唇部に沈線　頸部沈線は螺旋（2本対）・刺突文
242	弥生土器	長頸壺	18.5			良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	口唇部沈線　頸部沈線は螺旋(2本対)・刺突文
243	弥生土器	長頸壺	21.6			良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	頸部沈線は螺旋？
244	弥生土器	長頸壺	15.4			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	頸部沈線は螺旋　肩部に刺突文
245	弥生土器	長頸壺	16.5			良好	10YR6.5/3(にぶい黄橙)	砂粒	頸部に沈線　肩部に刺突文
246	弥生土器	長頸壺	(18.4)			良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線　頸部に沈線・刺突文2段
247	弥生土器	長頸壺	20.3			良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	口縁部に凹線　頸部に沈線
248	弥生土器	長頸壺	(18.6)			良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	口縁部に凹線　頸部に沈線　肩部に刺突文
249	弥生土器	長頸壺	19.6			良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	
250	弥生土器	壺	14.1			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	頸部に貝殻圧痕3個・沈線　肩部に貝殻押圧文
251	弥生土器	壺	9.5			良好	5YR6/3(にぶい橙)	砂粒	



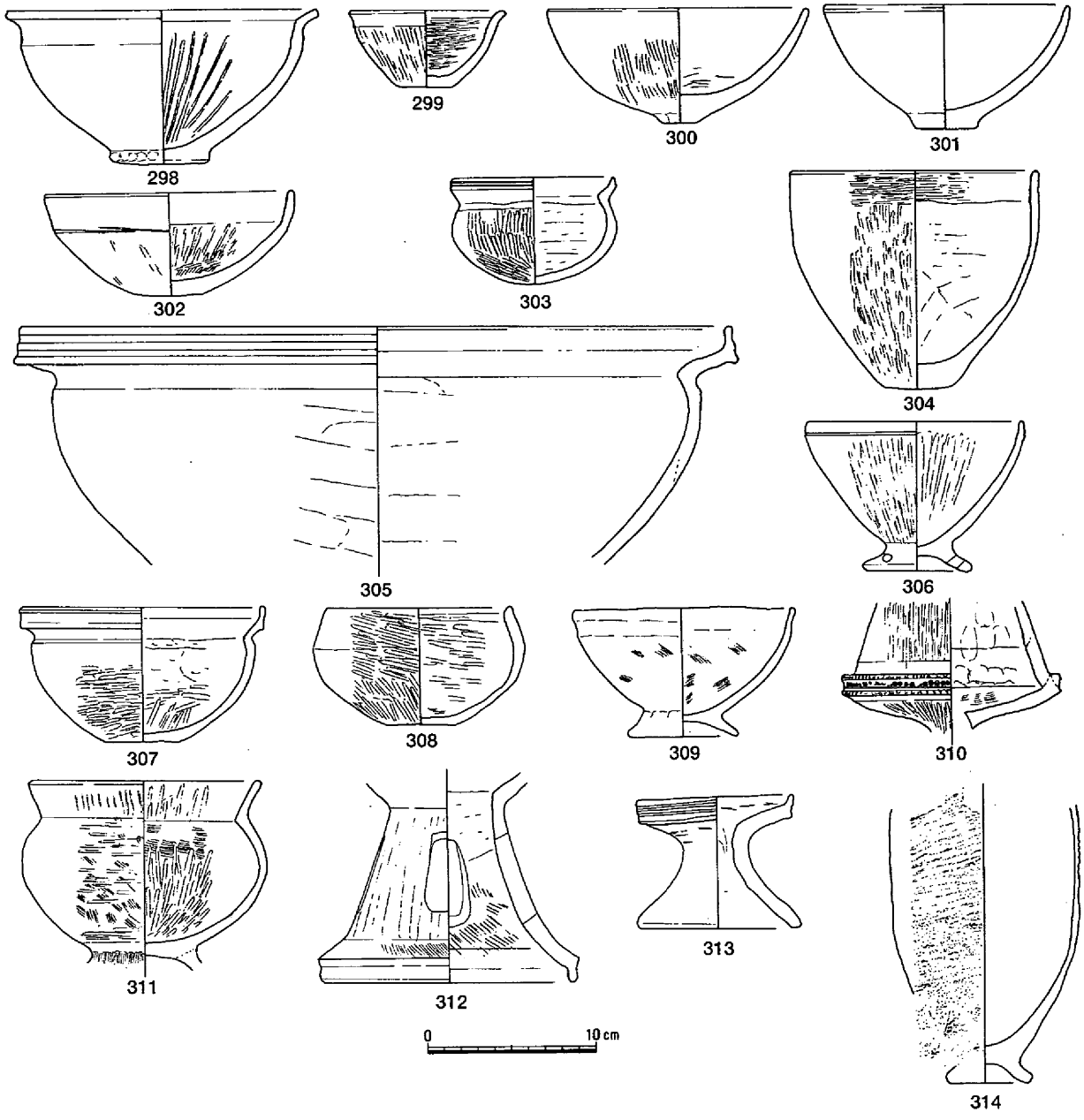
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
252	弥生土器	壺	11.8			良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	口縁部にクシガキ沈線　内外面丹塗り
253	弥生土器	壺	(24.0)			良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒(多)	口縁部外面に沈線　内外面丹塗り
254	弥生土器	壺				良好	5YR6/6(橙)	砂粒	口唇部に沈線　二次焼成か全面に煤付着
255	弥生土器	壺	12.8～13.3			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	水漉粘土	
256	弥生土器	壺				良好	2.5Y6/2(黄灰)	砂粒	
257	弥生土器	壺	10.1			良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	口唇部に沈線
258	弥生土器	壺	(15.8)			良好	2.5Y5/1～6/1(黄灰)	砂粒(多)	
259	弥生土器	壺				やや不良	10YR5/2(灰黄褐)	砂粒(僅)	肩部に沈線・線の間に丹残
260	弥生土器	壺	7.3			良好	2.5Y7/1(灰白)～6/2(灰黄)	砂粒	口縁部に沈線
261	弥生土器	甕	14.4			良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	口縁部に凹線
262	弥生土器	甕	13.9			良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線
263	弥生土器	壺	11.8			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線　外面全体に煤付着
264	弥生土器	甕	14.7			良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	
265	弥生土器	甕	(14.2)			良好	10YR5/4(にぶい黄橙)	砂粒	肩部に刺突文２段(全周しない)
266	弥生土器	壺	14.0			良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	口縁部にヘラガキ沈線　口縁部～肩部に煤付着



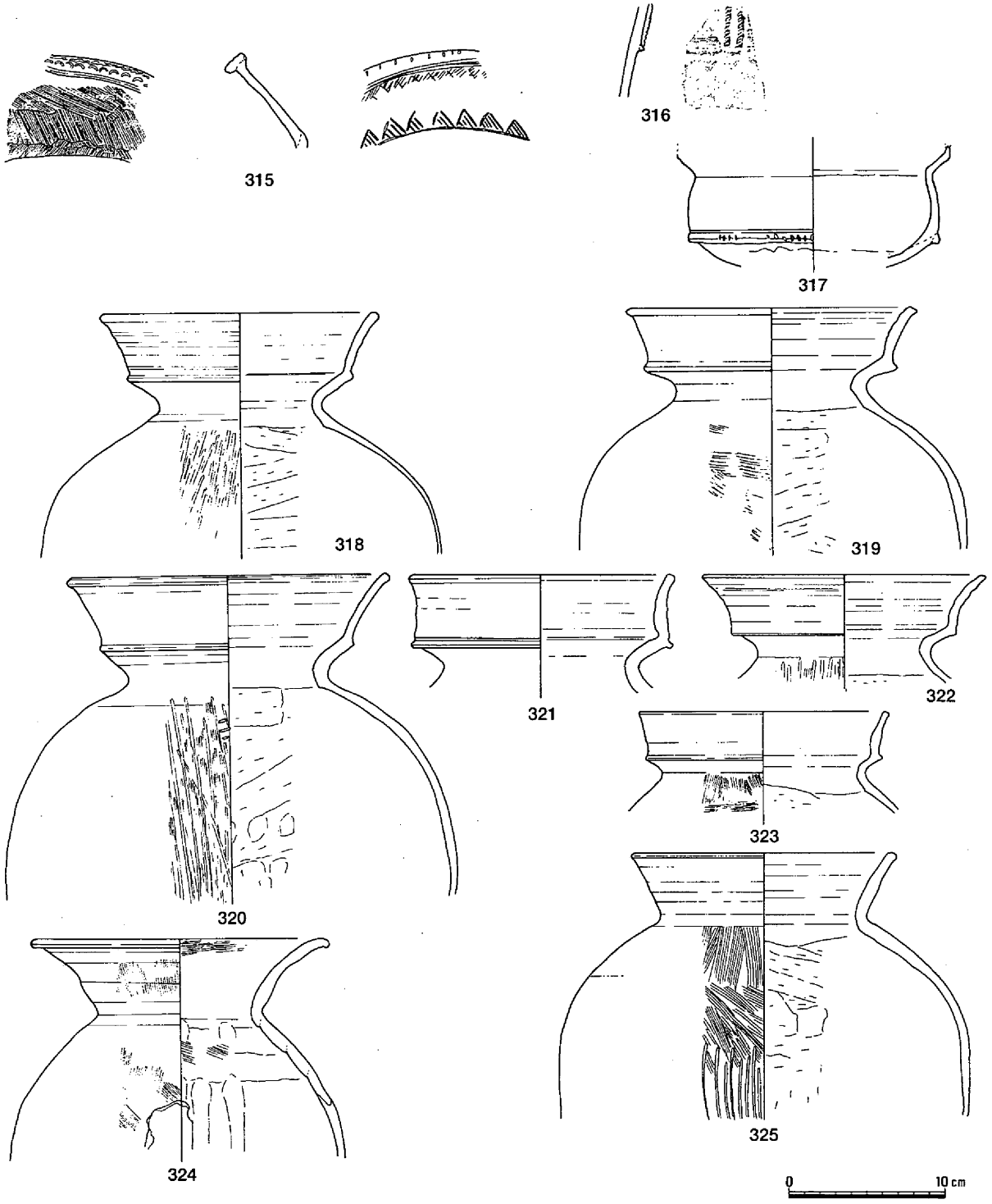
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
267	弥生土器	甕	11.2	3.0	14.3	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	
268	弥生土器	甕	(14.7)			良好	2.5Y6/1(黄灰)	砂粒	タタキ
269	弥生土器	甕	12.0			良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	
270	弥生土器	甕	13.2			良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	タタキ
271	弥生土器	甕	16.6			良好	2.5Y7/1(灰白)～7/2(灰黄)	砂粒	太いタタキ
272	弥生土器	甕	11.4			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	口縁部押圧で波状
273	弥生土器	甕		5.6		良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	上げ底
274	弥生土器	高杯	(21.3)			良好	5YR6/6(橙) 7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	口唇部に凹線　杯部内外面に綾杉状のヘラミガキ
275	弥生土器	高杯	(24.7)			良好	7.5YR4/4(褐)	砂粒	口唇部に凹線
276	弥生土器	高杯	19.8			良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	口唇部に凹線
277	弥生土器	高杯	(22.7)			良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	口唇部に凹線
278	弥生土器	高杯	(24.0)			良好	10YR6/4(にぶい黄橙)	砂粒(少)	
279	弥生土器	高杯	17.2			良好	7.5YR6/2(灰褐)	砂粒	杯部内面丹塗りか　脚部に透し2個残存
280	弥生土器	高杯	10.2			良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	清良	口縁部に沈線
281	弥生土器	高杯	(12.7)	10.3	8.2	良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	脚部に透し4個



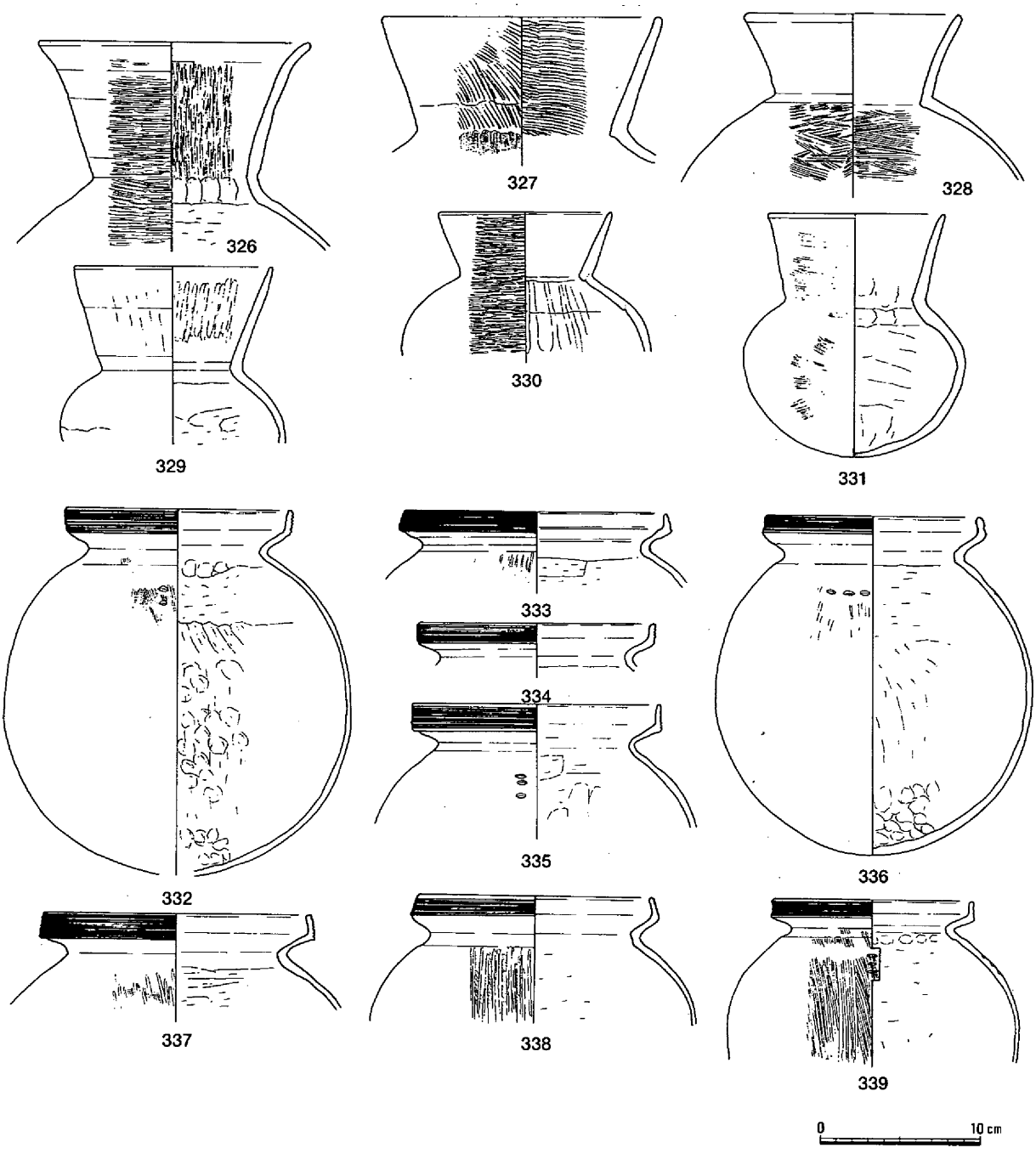
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
282	弥生土器	高杯	12.2			良好	5YR7/6(橙)	水漉粘土	
283	弥生土器	高杯	(13.8)			良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	口縁部に退化凹線
284	弥生土器	高杯				良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	砂粒	口縁内面に刺突文・鋸歯文　口縁部に鋸歯文
285	弥生土器	高杯				良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒	口縁部に沈線　脚柱部沈線は螺旋
286	弥生土器	高杯		11.2		良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	脚柱部沈線２段　脚部に刺突文・円形透し４個
287	弥生土器	高杯		15.3		良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	脚柱部にクシガキ沈線８段・円形透し３段３組
288	弥生土器	高杯		14.2		良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	脚柱部にクシガキ沈線(４段)・円形透し(２段)裾部に円形透し
289	弥生土器	高杯		12.2		良好	7.5YR7/1(明褐灰)	砂粒	脚柱部にクシガキ沈線３段　裾部に沈線４組
290	弥生土器	高杯		14.6		良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒(多)	外面風化
291	弥生土器	高杯				良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	脚柱部にクシガキ沈線４段・円形透し３段４個
292	弥生土器	高杯				良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	脚柱部下半沈線は螺旋
293	弥生土器	高杯		14.3		良好	5YR6/6(橙)	砂粒	脚柱部円形透し１個　裾部円形透し１個残存
294	弥生土器	高杯？				良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	裾部に透し１個残存・鋸歯文・竹管文
295	弥生土器	高杯		(9.0)		良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	脚柱部下に沈線　裾部に楕円形透し４個
296	弥生土器	器台		12.3		良好	7.5YR6/4～7/4(にぶい橙)	砂粒(多)	脚柱部沈線は螺旋　脚柱部～裾部に円形透し２段(上段３個、下段５個)
297	弥生土器	高杯				良好	10YR7/3～6/3(にぶい黄橙)	砂粒	脚柱部に２段２個対円形透し４個



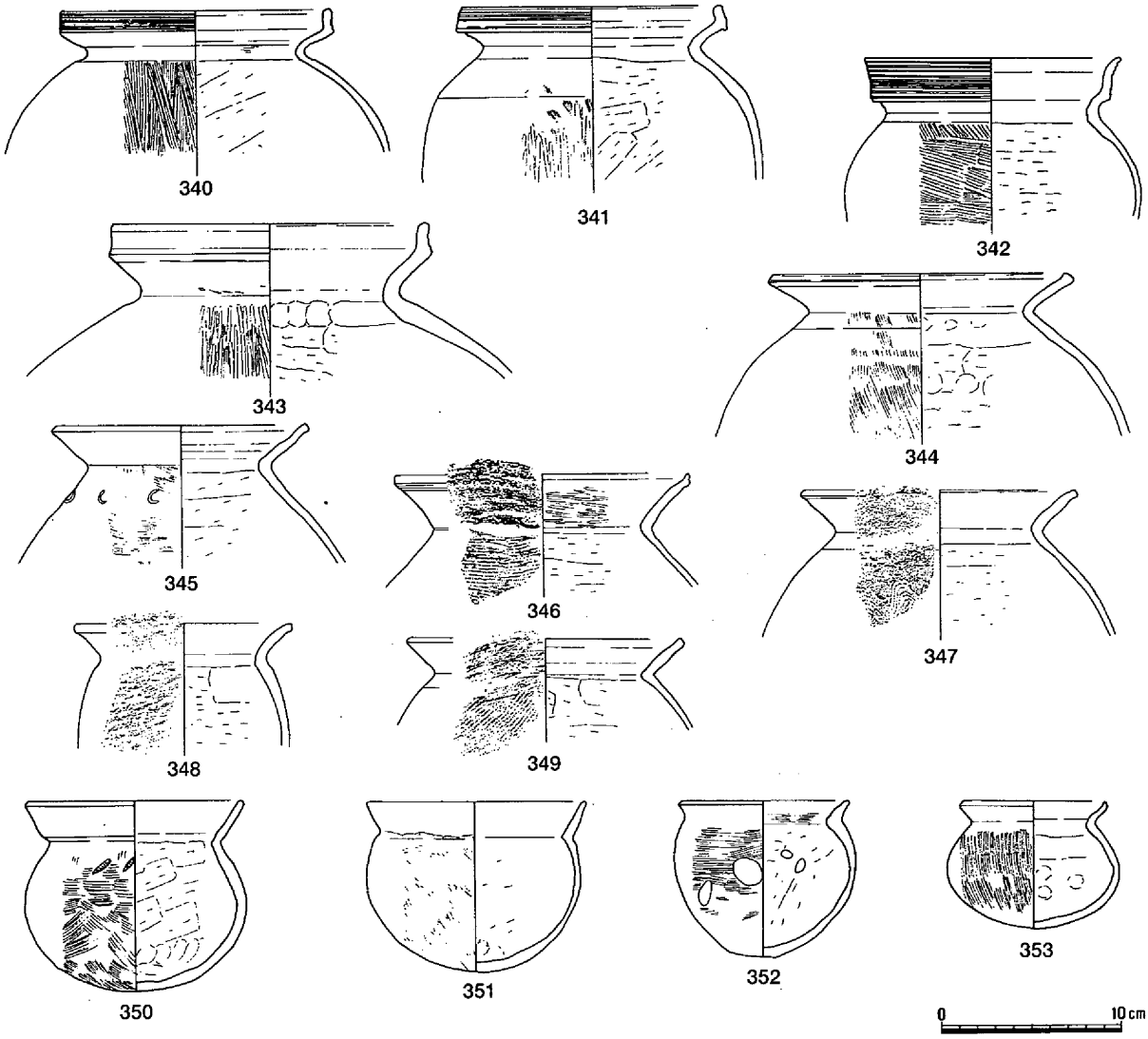
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
298	弥生土器	鉢	18.0	5.5	9.3	良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	内面に暗文風ヘラミガキ
299	弥生土器	鉢	9.0	3.2	4.6	良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	
300	弥生土器	鉢	15.4	2.15～2.8	6.9	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
301	弥生土器	鉢	(14.5)	3.4	7.4	良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒(僅)	
302	弥生土器	鉢	14.4	4.0	6.2	良好	5YR6/4(にぶい橙)	水漉粘土	
303	弥生土器	鉢	9.5	2.1	6.3	良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に沈線
304	弥生土器	鉢	14.6	4.9	13.1	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	胴部に爪痕
305	弥生土器	鉢	41.8			良好	2.5YR6/3(にぶい黄)	砂粒	口縁部に凹線
306	弥生土器	台付鉢	(13.0)	(6.0)	(9.0)	良好	2.5Y6/3(にぶい黄)	砂粒	口縁部に沈線　脚部に円形透し4個
307	弥生土器	鉢	14.1	4.0	8.2	良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒(少)	口縁部に沈線
308	弥生土器	鉢?	10.7	3.8	7.0	良好	7.5YR5/3(にぶい褐)	砂粒	
309	弥生土器	台付鉢	12.9	6.7	7.8	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
310	弥生土器	脚付直口壺				良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	凸帯文・竹管文3段
311	弥生土器	台付鉢	13.4			良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	
312	弥生土器	器台		14.7		良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	脚柱部に長方形透し4個
313	弥生土器	器台	9.3	9.4	7.6～8.0	良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に沈線　表面磨滅
314	弥生土器	製塩土器		4.7		良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	タタキ



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底(脚)径	法量(cm) 器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
315	弥生土器	手焙り形土器				良好	10ＹＲ6/2(灰黄褐)	砂粒(僅)	覆部口唇部に波状文・竹管文　覆部外面にキザミメ・沈線・鋸歯文
316	弥生土器	器台？				良好	7.5Ｙ6/2(灰褐)	砂粒(少)	棒状浮文(キザミメ)・鋸歯文・貼付凸帯
317	弥生土器	手焙り形土器				良好	10ＹＲ5/2(灰黄褐)	砂粒	キザミメ凸帯
318	土師器	壺	17.6			良好	2.5Ｙ6/1(黄灰)	砂粒	
319	土師器	壺	17.5			良好	2.5Ｙ6/1 (黄灰)	砂粒	
320	土師器	壺	20.2			良好	2.5Ｙ8/3(淡黄)	砂粒	
321	土師器？	壺	16.4			良好	2.5Ｙ7/2(灰黄)	砂粒	
322	土師器	壺	17.7			良好	10ＹＲ7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
323	土師器	甕	15.8			良好	10ＹＲ8/2(灰白)	砂粒	
324	土師器	壺	18.6			良好	7.5ＹＲ7/2(明褐灰)	砂粒	穿孔
325	土師器	壺	(16.4)			良好	10ＹＲ6/2(灰黄褐)	砂粒	



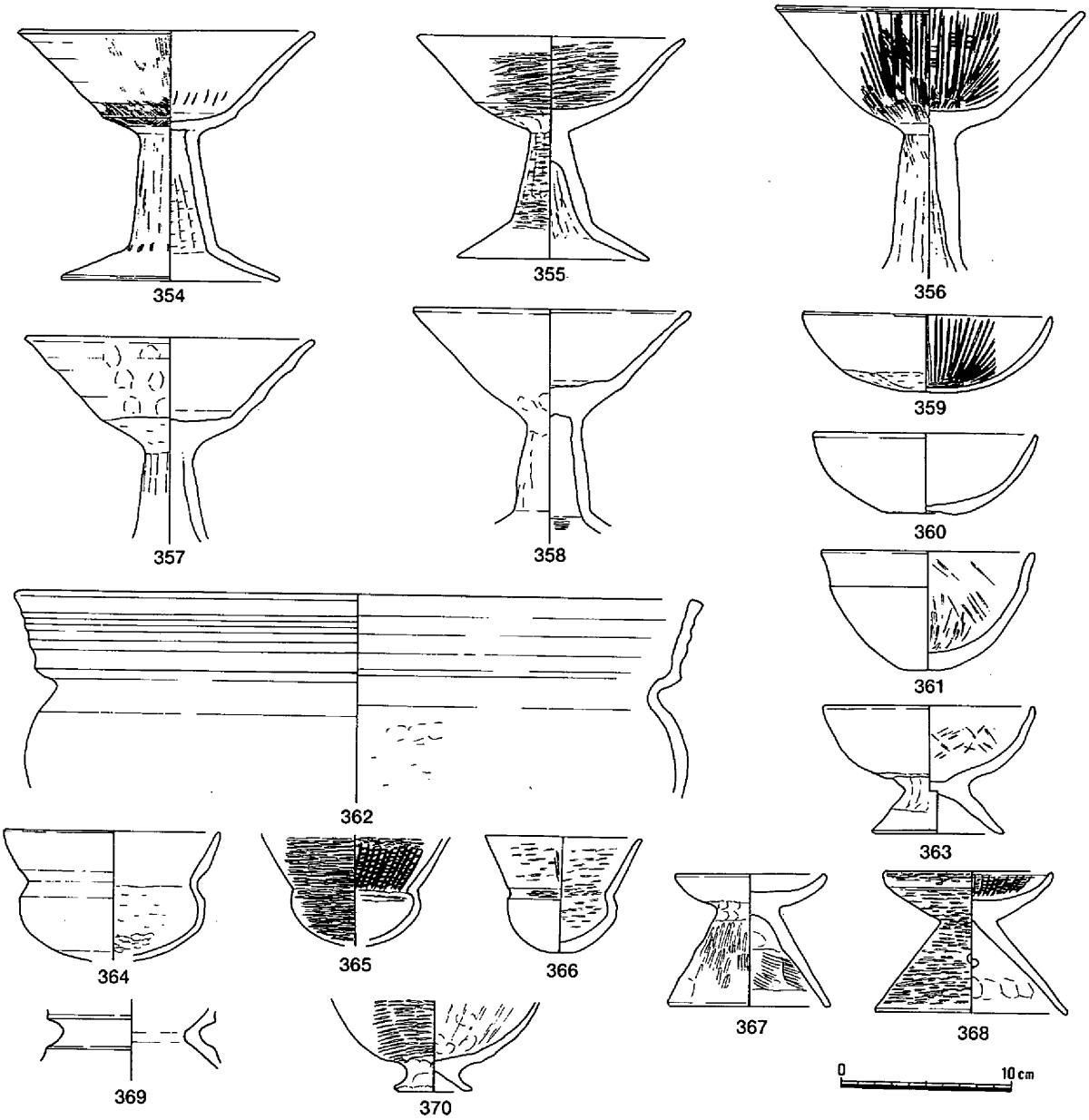
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
326	土師器	壺	16.7			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
327	土師器	壺	16.6			良好	2.5Y5/2(暗灰黄)	砂粒	
328	土師器	壺	13.0			良好	10YR8/1.5(灰白)	砂粒	タタキ
329	土師器	壺	12.0			良好	2.5Y6/1(黄灰)	砂粒	
330	土師器	壺	(10.5)			良好	5YR7/6(橙)	水漉粘土	
331	土師器	壺	11.0		15.2	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	砂粒	
332	土師器	甕	(13.6)		(22.9)	良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	口縁部にクシガキ沈線　肩部に刺突　胴部中位～底部に煤付着(お焦げ状の炭化物)
333	土師器	甕	20.0			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部にクシガキ沈線
334	土師器	甕	14.3			良好	10YR3/1(黒褐)	砂粒	口縁部にクシガキ沈線
335	土師器	甕	(15.0)			良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒(多)	口縁部にクシガキ沈線　肩部に刺突文
336	土師器	甕	13.1		21.2	良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒	口縁部にクシガキ沈線　肩部に刺突　内面底部に炭化物　吹きこぼれ
337	土師器	甕	16.2			良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	口縁部にクシガキ沈線
338	土師器	甕	14.2			良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部にクシガキ沈線
339	土師器	甕	12.3			良好	10YR7/2～7/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部にクシガキ沈線　肩部に刺突文



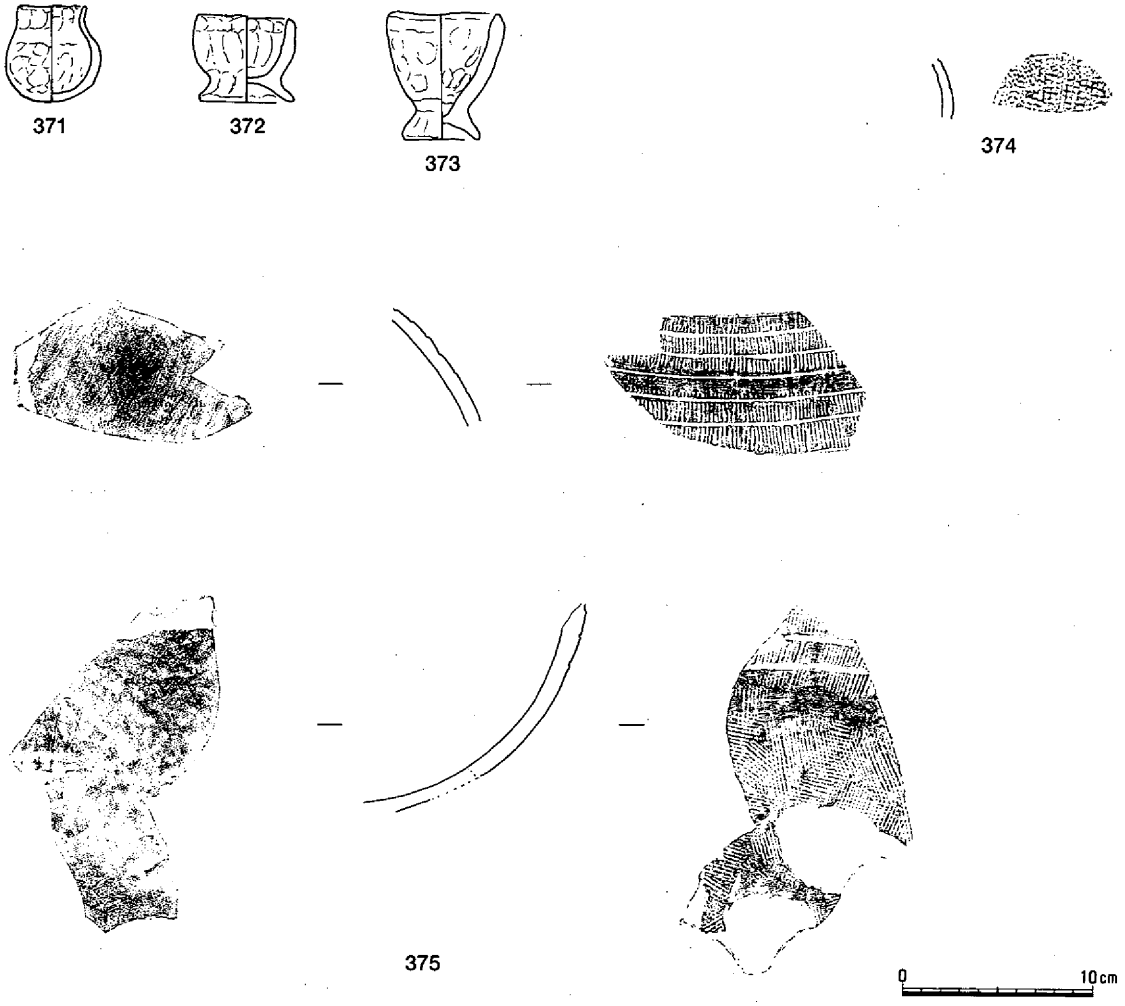
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
340	土師器	甕	14.6			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	口縁部にクシガキ沈線
341	土師器	甕	14.2			良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	口縁部にクシガキ沈線
342	土師器	甕	14.0			良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	口縁部に沈線　口縁部～胴部上半に煤付着
343	土師器	甕	17.2			良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒	
344	土師器	甕	16.5			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部～胴部上半に煤付着
345	土師器	甕	13.6			良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	肩部に竹管文
346	土師器	甕	16.2			良好	10YR6/1(褐灰)	砂粒	タタキ
347	土師器	甕	14.8			良好	2.5Y8/1(灰白)	砂粒	肩部に波状文
348	土師器	甕	11.8			良好	10YR5/2(灰黄褐)	砂粒	胴部外面にタタキ
349	土師器	甕	14.9			良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	細いタタキ
350	土師器	甕	12.0		10.6	良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	肩部に刺突文
351	土師器	甕	12.0～12.5		9.5	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	
352	土師器(?)	甕	9.2		8.7	良好	10YR5/1(褐灰)	砂粒(少)	胴部中位に穿孔５個
353	土師器	甕	7.8		7.0	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	

は口縁端部が、玉縁状になるものである。

235～317は、弥生後期の土器である。253は、特殊壺の胎土と同様な内容を示す。266の口縁部沈線は、ヘラガキである。297の高杯脚柱部は、エンタシス状となる。316は横位のキザミメ貼り付け突帯の上下に充填鋸歯文を施文し、上側に２本のキザミメ棒状浮文を付す。下方の調整は、タテのハケが文様風に施される。一応、器台としたが判断しがたい。



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
354	土師器	高杯	16.8	12.3	14.6	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	
355	土師器	高杯	15.6	11.1	13.0	良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒(僅)	
356	土師器	高杯	17.8			良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	杯部内部外面に暗文風ミガキ
357	土師器	高杯	16.6			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	
358	土師器	高杯	16.0			良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	
359	土師器	鉢	14.4		4.6	良好	7.5YR6/2(灰褐)	砂粒	内面に放射状の暗文
360	土師器	鉢	13.0	4.7	3.8	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	
361	土師器	鉢	12.0	2.0	6.9	良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	内面剥落　外面風化
362	土師器	鉢	39.0			良好	10YR7/3～6/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線
363	土師器	脚付鉢	12.2	(7.7)	7.5	良好	10YR6/4(にぶい黄橙)	砂粒	内面に工具痕？
364	土師器	坩	12.3		7.6	良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	
365	土師器	坩				良好	5YR7/6(橙)	水簸粘土	
366	土師器	坩	8.9		6.7	良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	外面口縁部～肩部に煤付着　内面に煤付着
367	土師器	器台	8.6	9.3	7.8	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	
368	土師器	器台	9.7	10.9	8.2	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	杯部内面に暗文　脚部に円形透し4個
369	土師器	鼓形器台				良好	5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒	内外面に丹塗り
370	土師器	製塩土器		4.2		良好	2.5Y6/1(黄灰)	砂粒	籾痕あり



掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
371	土師器	甕	3.4		5.1	良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	手捏ね
372	土師器	台付鉢	4.9	5.1	4.35～4.55	良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒(僅)	シボリ　手捏ね
373	土師器	台付鉢	5.5	3.7	6.5	良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	手捏ね
374	陶質土器					良好	7.5Y6/1(灰)	密	格子タタキ　沈線
375	瓦質土器					良好	7.5Y5/1(灰)N2/(黒)	精良	肩部～胴下半に沈線・平行タタキ　内面工具ナデ

318～375は、古墳時代前半の土器である。332～342の口縁部沈線は、クシガキである。332と336は、底部内面に押圧痕を顕著に残している。345の肩部に竹管文、347の肩部には波状文が施される。349のタタキは、細い施文内容を示す。352は胴部に5ヵ所の穿孔が認められる。354～358の高杯は、杯部の深さがなくなるとともに脚柱部が長脚となる。374は陶質土器で、375は瓦質土器である。前者は小片ではあるが、格子のタタキとヨコの沈線が認められる。後者は、外面にタテのタタキの後ヨコの沈線を施す。タタキは、丸底と考えられる底部にまで施される。内面は、工具によるナデと見られる細い条痕が認められる。（下澤）

2　Ic区の調査

Ic区は、Ib区の調査内容によって旧河道の存在が判断されたことから、この旧河道の大半に含まれることが想定された。このことから、調査区の中央に幅2mのトレンチを設け、土層観察で済ませる方向であった。床土直下では、トレンチの南北側で砂層を認めるが中央付近で粘質土が確認された。粘土層との間で近世磁器の小片が検出されたことから、この粘質土はかなり新しい時期に堆積したと判断したのである。この面から1mほど掘り下げた状態では南北の砂層の堆積に変化は認められないが、中央付近の粘質土部分は、その堆積状態から人為的な手が加わった土手状の遺構の可能性が生じてきた。しかし、その構築時期を江戸期以降のかなり新しい時期とする考えから離れられないでいたのである。このことは、さらに掘り下げて、弥生後期の2点の土器が検出された時点においてもまだ時期の判断を躊躇していた。最終的に判断をして調査することになったのは、Ib区から認められる古墳時代の砂の堆積層がこの人為的な土盛りの下に入っていかないことが確認されてからである。

（下澤）

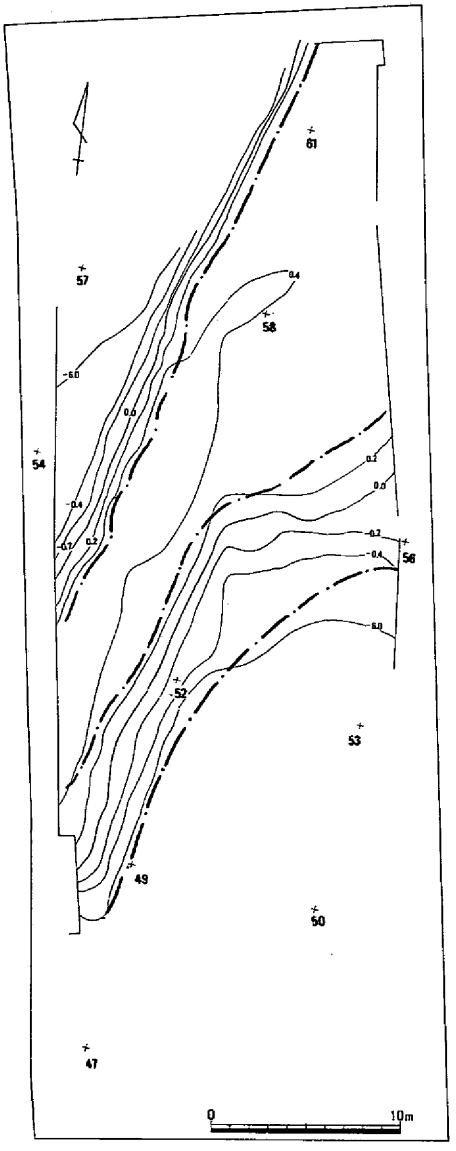
波止場状遺構

盛り土

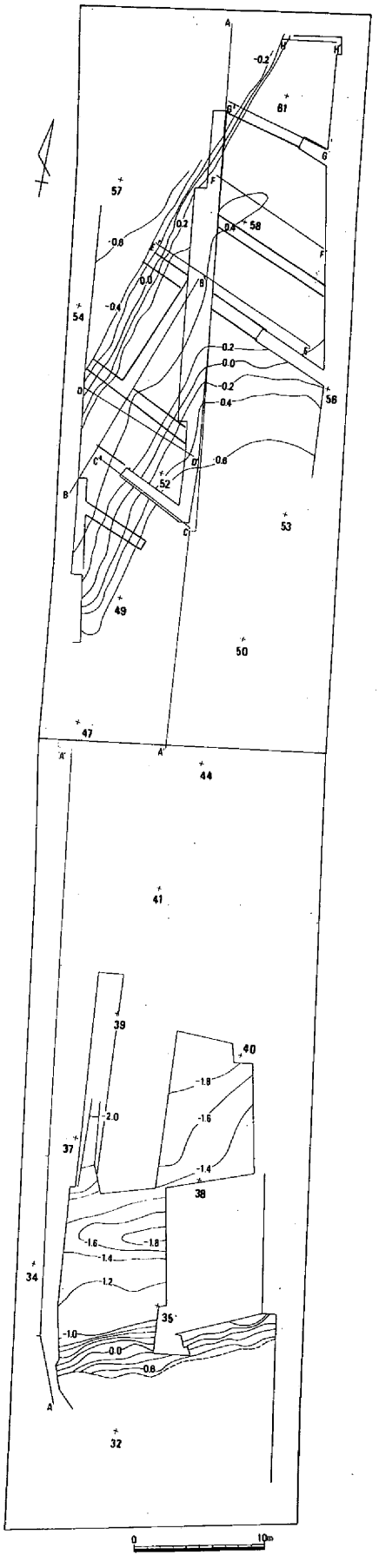
調査区の北東から南西にかけて検出された。規模は、長さ45m、幅5～14m、高さ120cmを越え、平面形態は北西側が直線で、南東側が弧を描く形状で確認された。波止場状遺構は、Ib区で検出した旧河道と関わりを有することから、この関係から記していく。

Ib区で認められた黄褐色土の微高地北側の河道は、平面的に把握できなかったが第3図で土層第50・54～56層の南側堆積層がそれとして認識された。この河道は、第50層から瓦質土器と口縁部にクシガキ沈線を施文する甕、第34層からは6世紀代の須恵器、第25層は7世紀前半の貝塚など時期を判断する遺物が検出されている。この間の流路は、時代が下るにつれ、その流れの方向は南の微高地よりかなり幅は狭くなる。

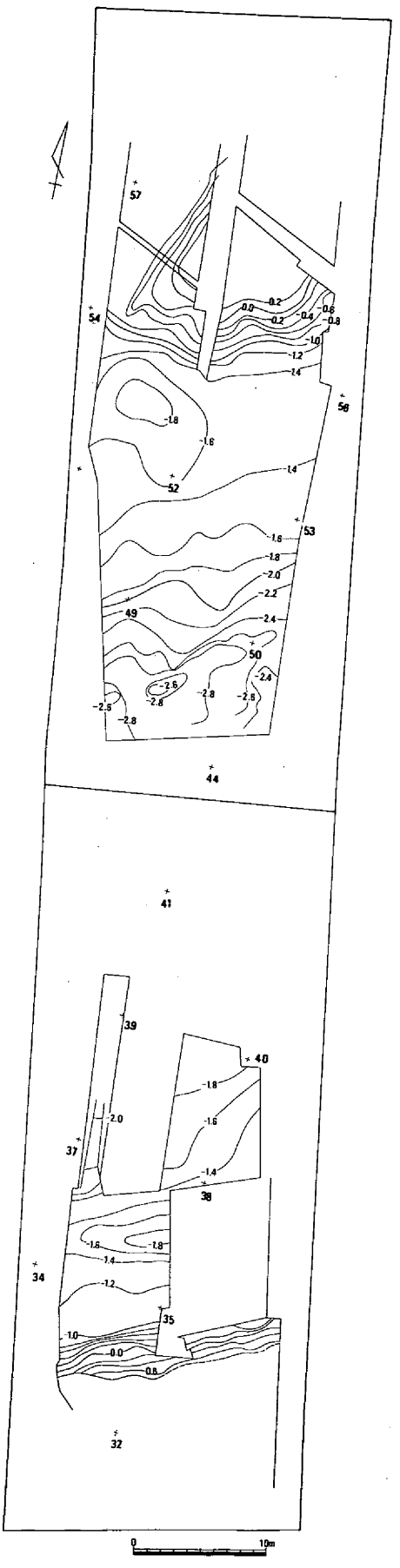
これらの河道から北側は、北から南に下がる堆積を示している。堆積層は、河道であることを示す砂が主体で、流れた痕と見られる縞模様や、木質が溜まり堆積した層などが存在している。これらの層から遺物の出土が認められたのは、第52と70層である。前者は、縄文後期から古墳前半までの遺物を多量に包含していた。後者は、遺構確認の段階で近くの土層が細砂及び粗砂であり、砂礫で弥生後期の土器を含む土層は容易に認識された。この2層の関係は、堆積層序と遺物の時期が異なることが明らかとなったが土層断面で見ら



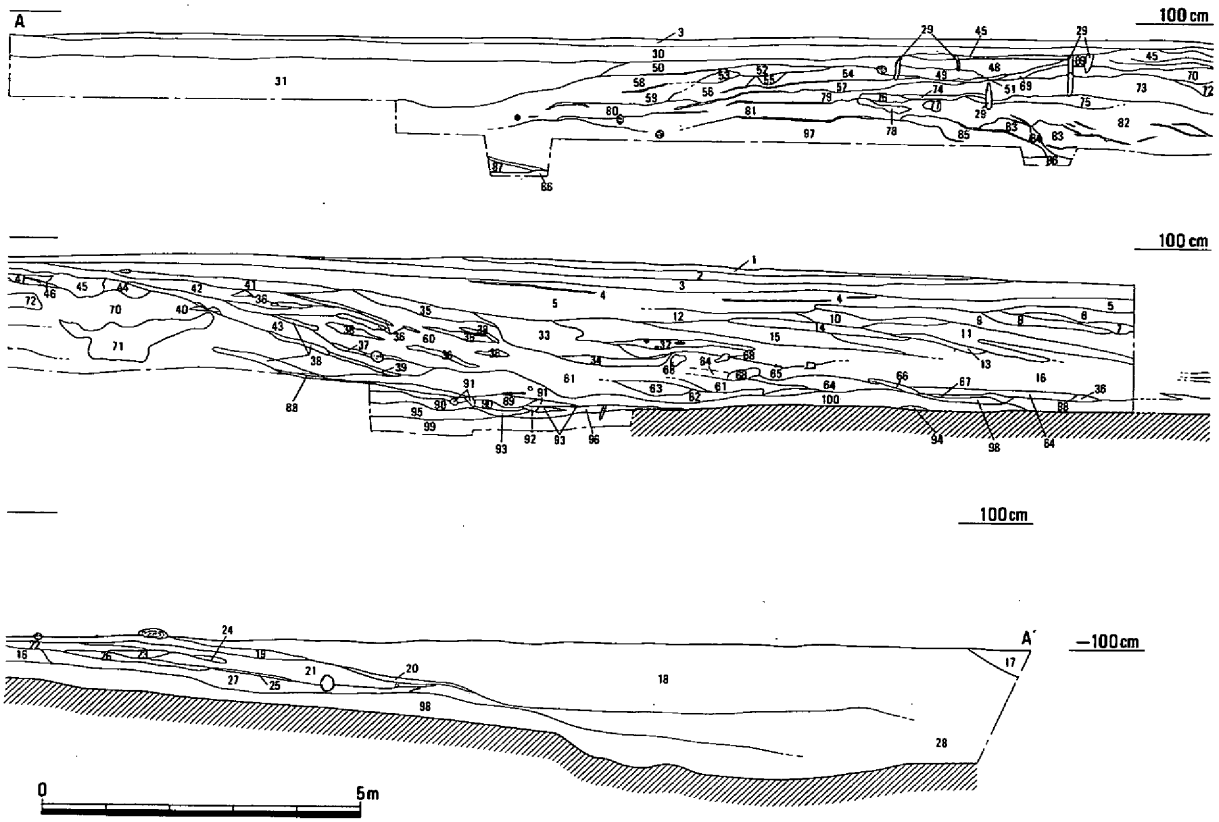
第4図　波止場状遺構図(1/400)



第５図　Ｉｂ・ｃ区土層断面位置図 (1/500)



第６図　Ｉｂ・ｃ区関係図 (1/500)



1　淡黄灰白色土
2　灰白色土
3　灰黄褐色土
4　淡黄褐色土
5　灰色粘質土(Fe含)
6　淡黄白色砂と灰色粘質土の互層
7　明灰色砂質土(灰色粘質土混)
8　灰色微砂
9　明灰色砂
10　灰色微砂(８より粘質)
11　灰色土(やや粘質で、微砂含)
12　灰色粘質土(微砂含)
13　灰色砂(やや粘質土混)
14　明灰色砂(粘質土混、下層木片多含)
15　明灰色砂質土
16　明灰色砂(木片・炭化粒多含)
17　暗茶褐灰色粘質土
(暗灰色砂と木片の互層)
18　淡黄茶灰色砂
19　暗褐色砂質土(18混)
20　黄茶灰色砂(暗褐色土を層状含)
21　黄茶灰色砂(暗褐色土を網目状含)
22　黄茶灰色砂
23　暗灰褐色砂
24　暗茶灰色砂(暗褐色粘質土、層状含)
25　暗灰色砂
26　暗褐灰色砂質土
27　暗黄茶灰色砂
28　暗青灰色粗砂
29　杭痕
30　淡黄灰褐色粘質土
31　暗青灰色粘土
32　明灰色砂(木片・炭、密含)
33　淡灰色粘質土
34　灰色砂(炭化粒含)
35　明灰色砂
36　灰色粗砂
37　灰色土(木片と炭層)
38　灰色土(粘質土混)
39　明灰色砂(木片多含)
40　灰色粘質土(炭含・微砂混)
41　濃灰色粘質土
42　明灰色粘質土
43　淡明灰色砂
44　明灰色粘質土(70より黄味を帯びる)
45　明黄灰色粘質土
46　炭
47　灰色砂質土(木片多含)
48　暗黄灰褐色土
49　黄灰褐色砂質土
50　灰褐色粘質土
51　暗灰色粘質土
52　黄灰褐色土
53　明灰色粘土
54　淡灰色粘質土
55　灰色粘質土
56　淡暗灰色粘質土
57　明灰色粘土(黒灰色ブロック含)
58　暗灰色砂質土(粘質土混)
59　暗灰色粘土
60　明灰色砂質土
61　明灰色粘質砂
62　茶灰色粘質砂(木片多含)
63　暗青灰色粗砂
64　灰色粘質砂(木片含)
65　明茶灰色粘質砂
66　灰色粘質土
67　灰色細砂
68　炭化木材
69　黄灰褐色粘質土
70　明灰色粘質土
71　明白灰色粘質土
72　明灰色粘質土
73　70と灰色砂層の互層
74　暗灰褐色粘質土
75　淡灰色粘質土(細砂含)
76　74より砂が多い
77　明灰色粘土(暗灰色粘質土ブロック含)
78　暗灰色粘質土
79　暗灰色微砂
80　淡灰色粘質土(砂質土混)
81　淡灰色微砂
82　淡黄褐色粘質土
83　82より砂が多い
84　噴砂
85　暗灰色粘質土(炭化粒含む)
86　黒灰色粗砂
87　青灰色粘土(敷葉含)
88　灰茶色粘土(木片含)
89　暗灰色粘質土と明灰色粘土ブロック
90　茶灰色粘質土(木片多)
91　灰色砂(ブロック状)
92　暗茶灰色粘土(炭化粒・木片含)
93　95と96の混ざり
94　灰色粘質砂
95　暗灰粗砂
96　暗灰色粘土(青みを帯びる)
97　淡暗灰色粘質土(微砂多含)
98　灰色砂
99　青灰色粘土
100　黒色粗砂(木片含)

第７図　Ａ－Ａ′土層断面図 (1/120)

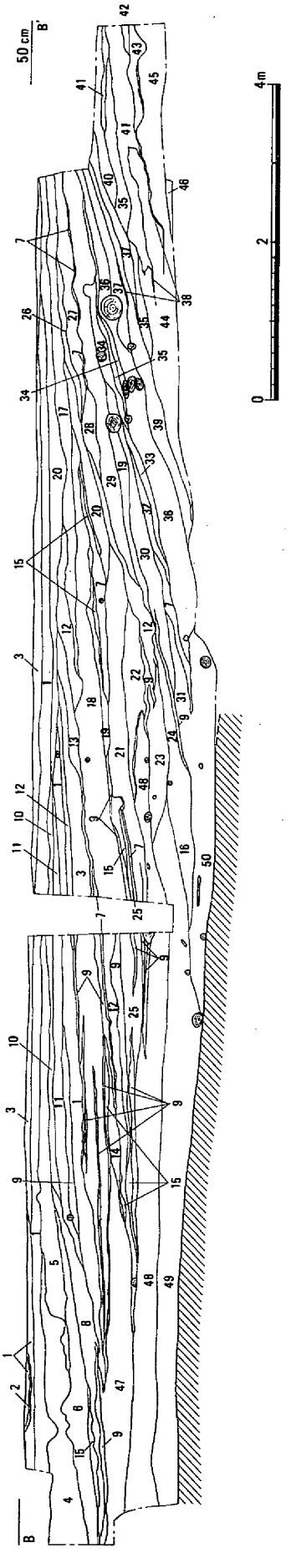
れる通りであり、何故このような堆積を呈するのか判断できていないのが現状である。

第７図はIc区中央部分の土層断面で、一部を平行移動することで対応した。この断面図には、南より連続する土層は図示されていない。これは、堆積層の砂層の崩落を防ぐために角度を付けて掘り下げ、さらにほとんど遺物が認められない層まで機械により排土したことによるものである。このＡ-Ａ′の土層断面でIb区の土層と対応できうるのは、第18層の淡黄茶灰色砂である。この層の上層から

は、口縁部にクシガキ沈線を施文する甕が検出されている。しかしながら、その下層については、先の理由により追及できなかった。

第６図のIb区は微高地下がりを掘り上げた状態の地形図であり、下がった所に６世紀代の流路の底が認められ、さらに北に下がって行くのである。このIb区とIc区に検出された波止場状遺構との間は、土層断面の状況からも河道の存在とその河道が流路を南西に向けて北から幅を狭めていったことが判断できるのである。

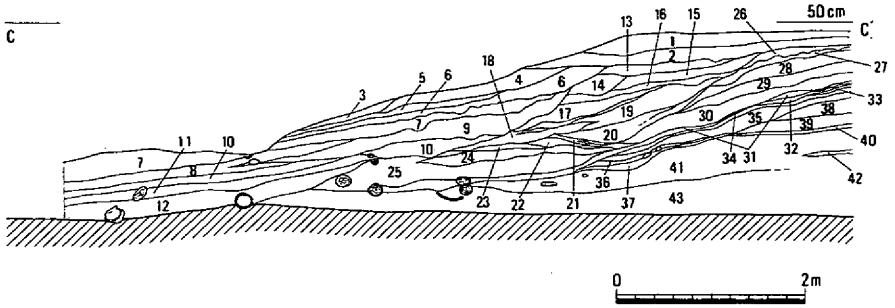
このような状態を示す南側を背景として、土層断面図から波止場状遺構について述べていく。確認用に設定した調査区中央トレンチがA-A´であり、遺構に対して斜めの位置になる。第３図で調査区南側の第３図で第18層より上層の堆積状況が、これより北寄りで知ることができる。これによると、第５と15層から上の堆積層は砂を主体とし、第14層などはその下層に木片などが多量に認められる。これらの層は、人為的な手が加わった形跡は認められず、小規模な流路により形成されたものとして理解している。したがって、人為的な手が加えられた状況が認められるのは、それらの層の下層ということになる。この部分で基盤層として把握されたのは、第99層の断面図で左下がりの斜線部分の青灰色粘土である。この青灰色粘土上に土盛りをするが、南北側ではその様相が異なる。南側では、第41・35・33層上面、第61層上面、第43層下面において、大略ではあるが３回の造成面が認められる。これらの堆積層は粘質土で、間に認められるのは砂が主であり木片なども認められ、いずれも盛り土の傾斜に沿う状態で認められている。一方、北側は粘質土で、その間に敷葉を用いている層が



1 暗灰褐色粘質土
2 黄白色細砂
3 灰褐色粘質細砂
4 灰色粘質土と灰色粘質微砂の混在層
5 灰色粘土と暗灰色粘質土の互層
6 淡灰色砂と暗褐灰色粘質土
7 灰色粘質土
8 灰色粘質微砂(灰白色砂混)
9 暗褐灰色粘質土(木片・炭を多含)
10 暗灰褐色砂質土
11 淡灰色粘質砂
12 灰褐色砂質土
13 褐灰色粘質土
14 暗灰褐色粘質土と黄白色砂の混在層
15 黄白色砂
16 暗灰色粗砂
17 灰褐色細砂混じり粘質土
18 灰褐色砂質土(炭・木質含)
19 暗灰色粘質土
20 灰褐色粘質土
21 灰色粘質土(細砂混・木材片少含)
22 灰色砂質土(木材片少含)
23 黄灰色粗砂と暗灰色粘土の混在層(木質少含)
24 暗灰～黒灰色粗砂
25 暗灰褐色砂質土(炭・木材片若干含)
26 淡褐灰色砂質土
27 淡黄褐色砂質土
28 褐灰色粘質細砂(炭・木小片少含)
29 褐灰色砂質土(炭・木小片少含)
30 褐灰色砂質土
31 暗灰色粗砂混じり粘質土
32 木材チップ・小枝類による層
33 灰色粘質微砂
34 暗灰褐色砂混じり粘土
35 淡灰色粘土
36 暗灰褐色砂質土(木材片多含)
37 淡灰褐色粘土(木質少含)
38 淡灰色細砂
39 淡灰褐色粘土(木質含)
40 黒灰細砂(非常にしまりがよい)
41 黒灰色細砂と淡灰色細砂ブロック状に混在
42 黒灰色細砂と淡青灰色粘土ブロック状に混在
43 淡灰色細砂ブロックと黒灰色細砂粒と淡青灰色粘土粒の混在層
44 褐灰色粘土(木質極僅含)
45 淡褐灰色粘土(木質少含)
46 灰色粗砂
47 黄白色砂と灰色粘質土の縞状堆積
48 黄灰色粗砂(最下層上半)
49 暗灰色粗砂(最下層下半)
50 暗灰色粗砂混じり粘質土(杭・木片多い)

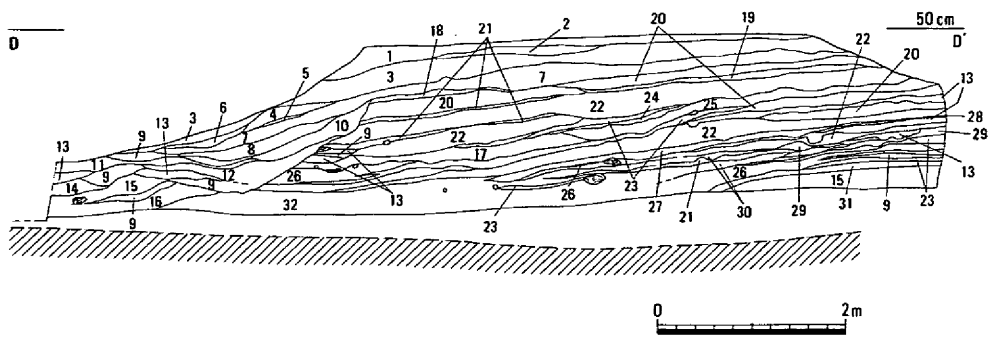
第８図　B－B´土層断面図 (1/80)

幾層も確認される。これらの堆積状況は、ほぼ水平の様相を示している。第8図の土層は、この遺構を理解する上で重要な判断資料となったものである。第37と39層から北側は粘土を主とし、その間に敷葉あるいは樹皮とみられる層が幾層も存在している。この内容とほぼ同様な堆積を見せるのは、第7図の北側部分である。しかしながら、第8図第36層に見られる横木から南側の土層は砂質土を主とし、砂や木質を多く含む層などが認められ先のそれと内容を異にしている。第9と10図は、さらに南よりの部分で遺構に対し直交する断面で、盛り土の基盤となるのは青灰色粘土の上層に堆積する暗灰色粗砂である。この両者にみられる盛り土は砂質土を主とし、その間に薄い砂層を用い、さらに木材のチップ状のものが層として認められる。このチップ状の木片は、海岸や河口に流木が漂着して溜った木片の状態を想起させる。



1　褐灰色粘質土(微砂混)
2　灰褐色砂質土
3　灰褐色細砂混じり粘質土
4　褐灰色粘質土
5　黄白～淡灰色砂
6　灰褐色粘質土
7　黄白～淡灰色砂
8　灰色粘質細砂
9　褐灰色細砂混じり粘質土
10　灰色砂質土
11　灰色砂質土(木質やや多含)
12　暗灰色砂質土(木質やや多含)
13　褐灰色粘質土(微砂混)
14　暗灰色粘質土
15　暗褐灰色粘質土(微砂混・炭含)
16　暗褐灰色砂質土
17　淡灰色粘質土
18　褐灰色粘質土(炭・木材チップ多含)
19　灰色粘質土
20　灰色粘質微砂(底に炭・木片含)
21　黄白～淡灰色砂
22　褐灰色粘質土(炭・木材チップ多含)
23　黄白～淡灰色砂
24　褐灰色粘質土(炭・木材チップ多含)
25　黄白～淡灰色砂
26　暗灰褐色砂質土
27　淡灰色粘質土
28　暗灰褐色砂質土
(木片・チップやや多含)
29　褐灰色粘質土と黄灰色砂の混在層
30　灰色粘質細砂
31　褐灰色粘質土(炭・木材チップ多含)
32　黄灰～淡灰色砂
33　灰色粘質土
34　淡灰色細砂
35　灰色粘質土(炭・木片少含)
36　黄白～淡灰色砂
37　褐灰色粘質土(炭・木材チップ多含)
38　淡褐灰色粘質土
39　黄白～淡灰色砂
40　褐灰色粘質土(炭・木材チップ多含)
41　黄白～淡灰色砂
42　褐灰色粘質土(炭・木材チップ多含)
43　暗灰色粗砂

第9図　C－C′土層断面図 (1/80)



1　橙灰褐色粘質土
2　黄灰色砂
3　灰褐色粘質細砂
4　淡褐灰色粘質土
5　炭及び木材チップによる層
6　灰褐色細砂混じり粘質土
7　淡褐灰色粘質土
8　黄白色細砂と灰褐色粘質土の混在層(炭粒混)
9　灰色粘土(木材・木材チップ多含)
10　淡褐灰色粘質土
(褐色細砂及び木材チップ混)
11　灰褐色粘質土
(炭・木材チップやや多含)
12　灰褐色微砂混じり粘質土
(木材チップやや多含)
13　黄灰色砂
14　褐灰色粘質土
15　灰色粗砂
16　黄白色粗砂
17　暗褐灰色粘質細砂
18　暗褐灰色粘質土(細砂混)
19　暗褐灰色粘質土(木質若干含)
20　暗灰褐色砂質土(炭混)
21　褐灰色粘質土(木材片・炭混)
22　灰褐色砂質土(炭混・粘質土と黄色砂が混在)
23　褐灰色細砂混じり粘質土(炭・木材チップ多含)
24　灰色粘土(きめが細かい)
25　灰褐色砂質土(炭・木材チップやや多含)
26　灰色砂
27　褐灰色細砂混じり粘質土(炭・木材チップやや多含)
28　黒褐色粘質土(炭及び木材チップ含)
29　褐灰色砂質土
30　暗灰色粗砂
31　灰色粘土と灰色粗砂の混在層
32　暗灰色粗砂(褐灰色粘土のブロック含)

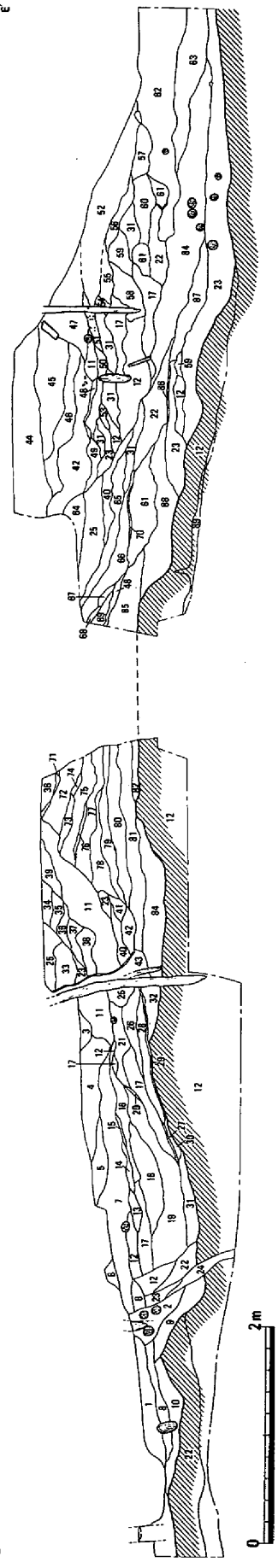
第10図　D－D′土層断面図 (1/80)

第9・10図の第13～24層と第3～13層は、斜面が崩落し再度土盛りをしたことが窺われる。3ヵ所の土層断面からは、南側に細くなる部分と北側の盛り土の内容が異なることが明らかとなった。さらに、第8図で明らかなように両者の接する部分には、横木を据えて土盛りがずれないようにされている。

第11図の土層断面は遺構の東西端を通した状態のもので、盛り土の造成内容を具体的に知ることができた。これによると、断面中ほどで上端200cm、下端280cm、高さ30cmの壇状の高まりを造り出す。この南東側の160cmの間は掘り、凹み状に平坦面を、さらに250cm間は緩やかな傾斜を付け、第12層の下層の第22層である暗オリーブ灰色粘質土の堆積土を掘り下げた状況を呈する。北西側では凹凸がある状態で傾斜をつけて掘り下げをして、先は平坦としている。

盛り土は第43層に見られる杭に樹皮を沿わせ、その後に土盛りを行っている。さらに、第24層はその遺存の内容から杭が朽ちた状態を示し、その存在が知られる。この杭に第12と22層を壁のように用いて、土盛りを行っている。

一方、幅を広げている北側部分は、第12～14図から知ることができる。第12図では粘質土を主とし、その間に敷葉を用いている。第13図は砂と粘土の互層が細かく認められ、これまでの盛り土の内容と異なる様相を示している。これらの基盤層は黒灰色砂であるが、下層に存在すると考えられる青灰色粘土層は確認で

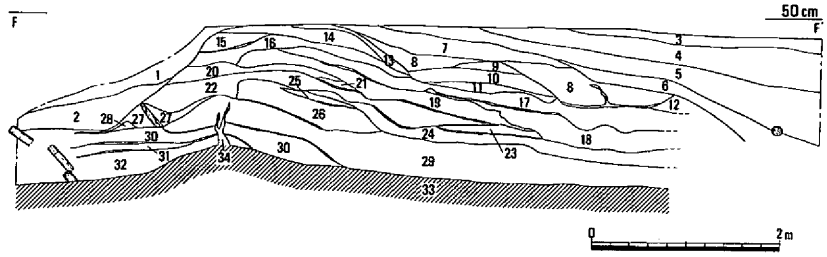


1 暗褐灰色粘質砂質土
2 暗灰色粘質土(杭含)
3 灰色粘質微砂～細砂
4 暗灰黄色粘質微砂(有機物・木枝など含)
5 褐灰色粘質微砂
6 浅黄色細砂～粗砂
7 暗褐色粘質土(木枝含)
8 暗灰色粘質細砂～粗砂
9 灰色粗砂
10 暗灰黄褐色粗砂
11 灰色粘質微砂
12 暗灰色粘質土
13 暗灰色粘質微砂～粘土
14 暗灰色粘質微砂(黄灰色粘土混)
15 暗灰褐色粘質砂(粗砂混)
16 暗灰色粘質砂(粗砂混)
17 オリーブ灰色粘質土
18 灰色粘質土(オリーブ灰と暗灰色粘質土混)
19 暗灰色粘質土(灰オリーブ色粘質土混)
20 粗朶
21 灰色粘質土と暗灰色粘性砂質土の混ざり
22 暗オリーブ灰色粘質土
23 灰色粘質土
24 灰褐色粘質土(樹皮含)
25 暗灰色粘質微砂
26 灰オリーブ粘質細砂と暗灰色粘質微砂混
27 粗朶
28 灰黄色砂質土(暗灰色粘質土混)
29 粗朶
30 オリーブ黄色粘質土
31 灰オリーブ色粘質土
32 灰色粘質微砂～粘土
33 暗灰色粘質微砂と灰色粘質土混
34 褐灰色粘質微砂
35 暗灰褐色粘質砂
36 暗灰褐色粘質微砂～細砂
37 暗青灰色粘質微砂(灰色粘質土混)
38 暗青灰色粘質微砂
39 灰白色粘質微砂
40 褐灰色粘質土
41 灰色粘質土と明褐灰色粘質土混
42 明褐灰色粘質土
43 暗灰色細砂～粗砂
44 灰褐色粘質細砂～微砂
45 褐灰色粘質土(若干・微砂～細砂含)
46 明褐灰色粘質微砂
47 暗灰黄色粘質微砂
48 暗灰色粘質土
(有機物をやや多含　小枝や葦類)
49 灰褐色粘質土
50 明灰黄褐色粘質土
51 暗灰色粘質土
(φ1cmほどの枝片など・有機物を含)
52 黄灰色粘質微砂～細砂
53 浅黄色粘質土
54 暗灰色粘質土
(灰オリーブ色粘質土がブロック状に混)
55 黄灰色粘質微砂～細砂
56 明青灰色粘質土
57 暗灰褐色粘質微砂～粗砂
(有機物・小枝片などを含む)
58 黄灰色粘質土
59 青灰色粘質土
60 暗褐灰色粘質土　(黄褐色粘質土少混)
61 灰色粘質土(粗砂混)
62 灰色粘質土(灰白色粘質土少量混)
63 暗黄灰色粘質土
64 灰白色粘質土
65 暗灰色細砂(灰白色粘質微砂含)
66 暗灰色細砂と灰色粘質微砂がまだら状
67 オリーブ黄色粘質微砂
68 暗灰色粘質細砂(黄褐色砂質土少混)
69 灰黄色粘質微砂と暗灰色粘質微砂混
70 粗朶
71 灰黄褐色微砂
72 灰黄色微砂と暗灰色微砂の互層
73 暗灰色微砂(灰黄色微砂混)
74 灰黄色微砂(暗灰色微砂混)
75 暗灰～黄灰～明褐白色微砂の混濁層
76 黄灰微砂～細砂
77 暗灰～黄灰～明褐白色微砂の混濁層
78 灰黄色微砂(暗灰色微砂土若干混)
79 暗灰色粘質微砂～細砂
80 暗灰色粘質微砂～細砂
(灰色粘質土ブロック含)
81 暗灰色細砂(灰色粘質土含)
82 暗灰色粘質土と灰色粘質土混
83 暗灰色細砂(灰色粘質土ブロック含)
84 オリーブ黒色粘質土
85 暗灰色砂質土(黄灰色粘質土含)
86 粗朶
87 暗青灰色粗質土
88 褐灰色粘質土(粗砂・細砂混)
89 灰色粗砂　黒灰色粗砂

第11図　E－E'土層断面図(1/60)

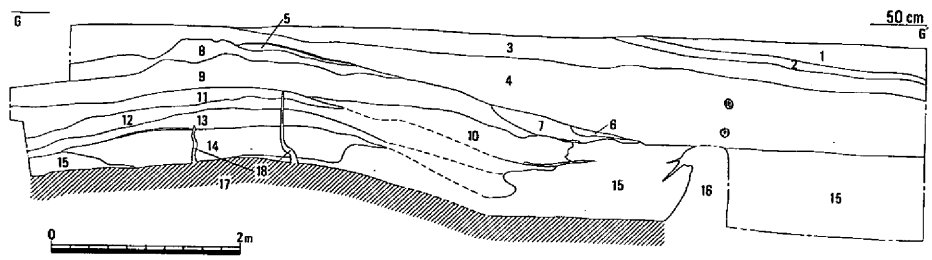
きていない。第11層は調査区北東端で、北西側の下がりを把握することができた。主な盛り土の内容は粘質土で、その間に敷葉を用いている。盛り土の北西側は砂を主体とするもので、明らかに先の盛り土部分とは異なっている。

このように見ていくと、細長く南に延びる部分と北側の平坦な広い部分とでは、その構築の内容に明らかな差異があることが確認された。また、構築の工法も北側部分を第Ⅰ工程として造成し、その後に斜面に横木などを置いて、第Ⅱ工程として南に細長い部分を取り付けるように付設したことが理解されるのである。（下澤）



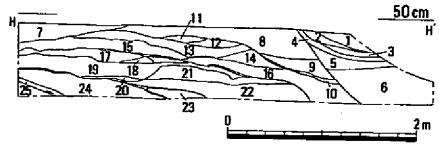
1 灰色砂質土
2 暗灰色粘質土
3 暗灰色粘質土(砂粒含)
4 黒灰色粘質土
5 暗灰色粘質土
6 暗灰色粘質土(砂粒含)
7 暗灰色粘質土(粘性強・しまりよい)
8 暗灰色粘質土
9 灰色粘質土(粘性強)
10 暗灰色粘質土
11 暗紫色粘質土(砂粒含　敷葉)
12 こげ茶色粘質土(木質含)
13 灰色粘質土(粘性強)
14 暗灰色粘質土(砂粒含)
15 暗灰色粘質土
16 暗灰色粘質土(砂粒含)
17 暗青灰色粘質土
18 暗紫色粘質土(砂粒含　敷葉)
19 暗青灰色粘質土
20 暗灰色粘土(砂粒多含)
21 暗青灰色粘質土
22 暗青灰色粘質土
23 暗青灰色粘質土
24 暗青灰色粘質土
25 こげ茶色粘質土(木質含)
26 暗灰色粘質土(やや木質含)
27 暗灰色粘質土(砂粒含)
28 暗青灰色砂質土
29 暗灰色粘質土(木質含)
30 暗灰色粘質土
31 暗灰色粘質土
32 暗灰色粘質土
33 黒灰色砂
34 噴砂

第12図　F－F′土層断面図(1/80)



1 暗青灰色粘質土(やや砂粒含)
2 灰色粘質土
3 灰褐色粘質土(やや砂粒含)
4 暗青灰色粘質土
5 暗青灰色粘質土(やや砂粒含　敷葉)
6 暗青灰色粘質土(砂粒多含)
7 暗青灰色粘質土(やや砂粒含)
8 灰色と黒褐色砂質土(黒色と灰色粘土粒含)
9 灰色と黒褐色砂質土(砂粒と粘土の互層　黒色粘土多)
10 灰色と黒褐色砂質土(砂粒と粘土の互層　9より灰色粘土多)
11 灰色と黒褐色砂質土(砂粒と粘土の互層　砂粒多)
12 灰色と黒褐色砂質土(砂粒と粘土の互層　黒色粘土多)
13 灰色と黒褐色砂質土(黒色と灰色粘土粒含　砂粒多)
14 灰色と黒褐色砂質土(黒色と灰色粘土粒含　13より粘土多)
15 灰褐色粘質土(木材含)
16 灰褐色粘質土(木材多含)
17 黒灰色砂
18 噴砂

第13図　G－G′土層断面図(1/80)



1 暗灰色砂質土と粘質土の混合
2 灰色砂質土
3 灰色砂質土(粘土含)
4 暗灰色粘質土(砂粒含)
5 暗灰色砂質土(粘土含)
6 暗灰色砂質土
7 暗灰色粘質土
(暗灰色と灰色粘土・砂粒混)
8 暗灰色粘質土
(暗灰色と灰色粘土含)
9 灰色粘質土
(灰色と暗灰色粘土含)
10 黒灰色粘質土(木質含)
11 暗灰色粘質土(砂粒含)
12 灰色粘質土
13 暗灰色粘質～砂質土
14 灰色粘質土(灰色と暗灰色粘土含)
15 暗灰色粘質土
16 暗灰色粘質土(砂粒と黒色粒含)
17 暗灰色粘質土
18 暗灰色粘質土(木質含)
19 暗灰色粘質～砂質土
20 暗灰色粘質～砂質土(砂粒多含)
21 暗灰色粘質土
22 暗灰色粘質土
23 暗灰色粘質土
24 暗灰色粘質土
25 暗灰色砂質土(粘土含)

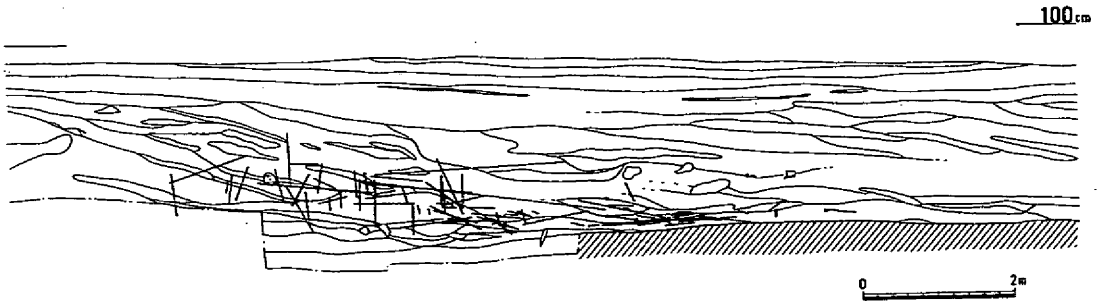
第14図　H－H′土層断面図 (1/80)

盛り土内の木

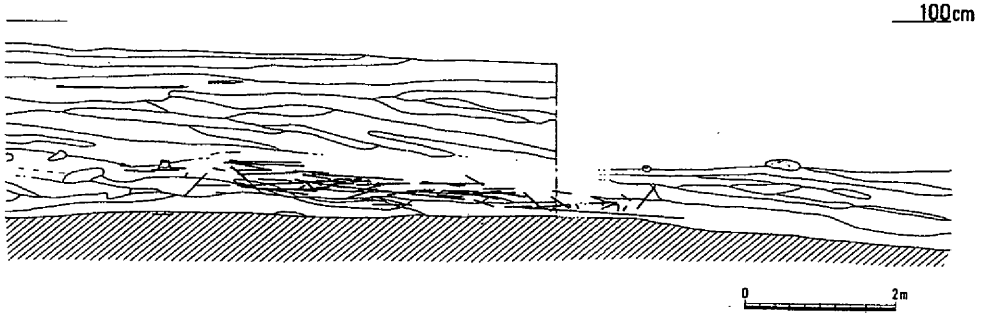
木は盛り土を掘り下げる過程で、グリット杭52の周辺とグリット杭53の北西方向の2ヵ所が検出された。第15図は後者で、長くなる東斜面部付近に平面的に検出した。検出時においてはまだ遺構の性格が十分理解していなかったことから、流木として把握していた。しかしながら、検出された木のほとんどが先端を尖らせた杭状の形状を示していた。さらに、そのあり方の状態を見ていくと傾斜に沿うもの、直交するものなど人の手が加えられた内容であることが窺われるのである。第16図はA-A´の土層断面図に第15図を見通とし断面状に表現するが、地形的には南東方向に下がる傾向にある。これによると、盛り土内の木は、第61、62層と第91層に含まれ、盛り土の支持材として用いられていたことが思考される。

第17図はグリット杭52周辺の木を第16図と同様に付したが、地形的にはほぼ平坦で南に下がる傾向を示す。ここでは第16層と第64層に含まれ、青灰色粘土層の上に堆積する黒色粗砂上面に存在する。第10図では斜面の崩落の可能性を示唆したが、この木を通る断面の第９図でも第19～24層に崩落を窺わせる土層が認められる。この先にもこれらが存在することから、崩落の後にこの材を用いて盛り土を行ったと判断される。（下澤）

第15図　盛り土崩落内材検出図(1/100)



第16図　グリット53北側の材と土層関係図(1/100)



第17図　グリット52周辺の材と土層関係図(1/100)

杭列

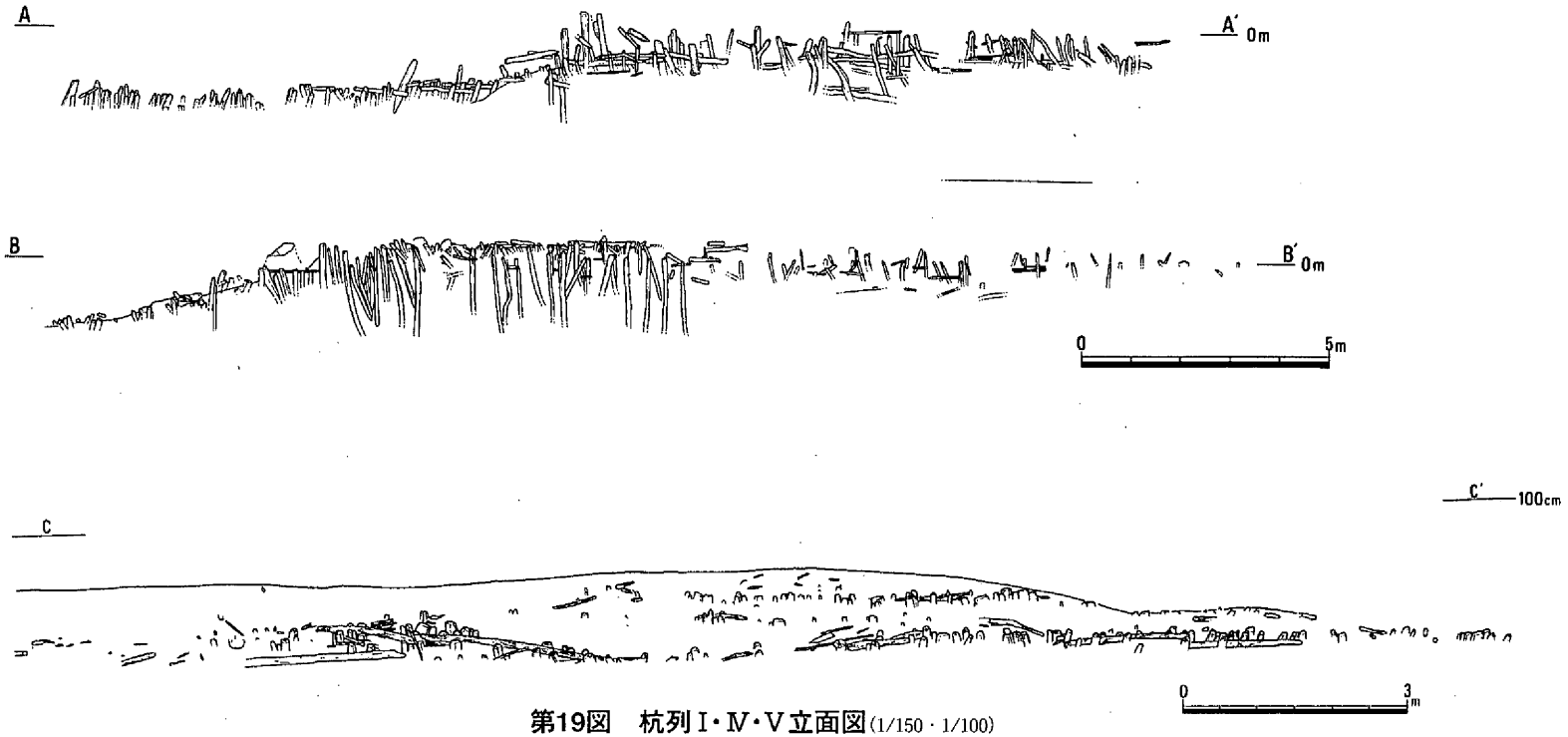
波止場状遺構を平面的に掘り下げる過程では、先に述べた第Ⅰ工区部分で数センチ程度の杭が認められたに過ぎない。この時点では北西側斜面で、上下二段の杭を確認したが詳細は不明であった。この杭列の内容が明らかとなったのは、第Ⅰ工区部分を30cm前後掘り下げ、さらに第Ⅱ工区部分を全て取り除いた段階で把握することができた。第18図は後者の調査時での検出状態で、Ⅰ～Ⅴの杭列が認められた。これらの杭列については、この検出と遺構の性格の把握ができたのは調査終了近くであった。さらに、遺構の内容から保存の方向へと流れがなったために、これ以上遺構に手を加えずに極力残すことで調査をすすめざるを得なくなったのである。このようなことから、杭列については十分な調査ができていない。

杭列Ⅰは調査区東寄りの第Ⅰ工区内で、長さ16mにわたって検出された。平面ではやや弧を描く状況を示し、北側は調査区外となるため詳細は不明であるが壁面からはさらに延びると判断される。杭の長さは120cmを越え、太さは6～10cm前後のものが主である。杭の形状は真直ぐなものの他に、曲がった形状のものが多く認められる。第19図のA-A´は立面であり、杭の上端には数本の横木が縫うように組まれている。掘り下げができた一部においては下方にも認められるが、しがらみのように密には組んでいないようである。第11図の断面の第2層中に認められる杭がこれに相当する。

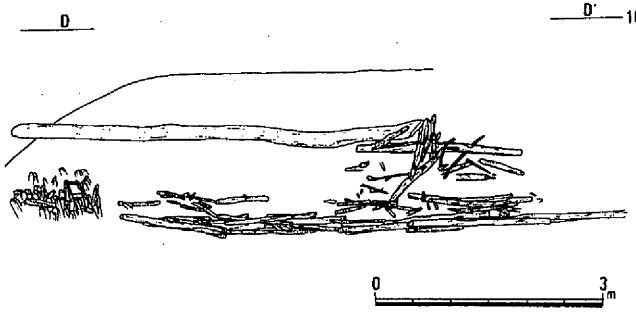
杭列Ⅱは杭列Ⅰの2.5mほど西側に、ほぼ並行して長さ23mほどにわたって検出された。杭の内容は杭列Ⅰと同様で第19図のB-B´はこの立面であるが、一部掘り下げた箇所では杭の長さが160cmをこえるものが認められ、密に打ち込まれている状況が確認された。また、横木は一本の状態で認められているが、削平により失われている可能性が高いと考えられる。斜面にかかる部分は、傾斜に沿うように杭の頭が認められている。第11図の断面において説明を加えたが、第43層の杭はこれに伴うもので土が流れ出さないように樹皮をあてがっている。

杭列Ⅲは杭列Ⅱの2.5mほど西に、ほぼ並行して長さ約6mにわたって第Ⅰ工区の斜面部にかけて検出された。第21図はその部分を拡大し立面図を付している。この部分で検出された杭のうち、方位近

第18図　立面ポイント位置図(1/150)

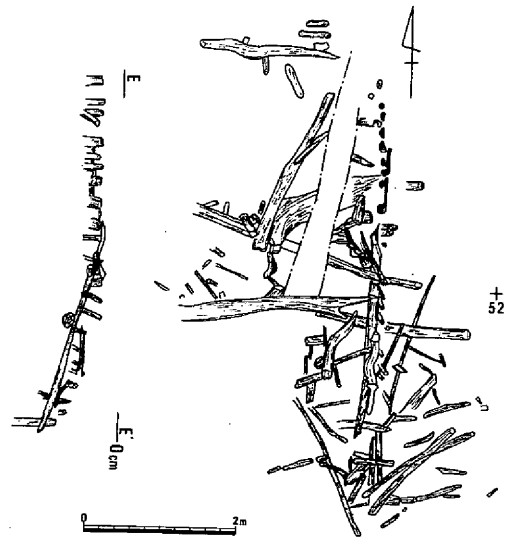


第19図　杭列Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ立面図(1/150・1/100)



第20図　Ⅰ工区立面図(1/100)

くの南方向に直線的に認められた部分は15cm前後の丸太を半截したものを用いている。この杭の半截した側平面を東にそろえ板状の木をあてがっているのが確認されている。この杭列が第Ⅰ工区の斜面部に相当することから、立面図に見られるように傾斜に沿って横木が認められる。



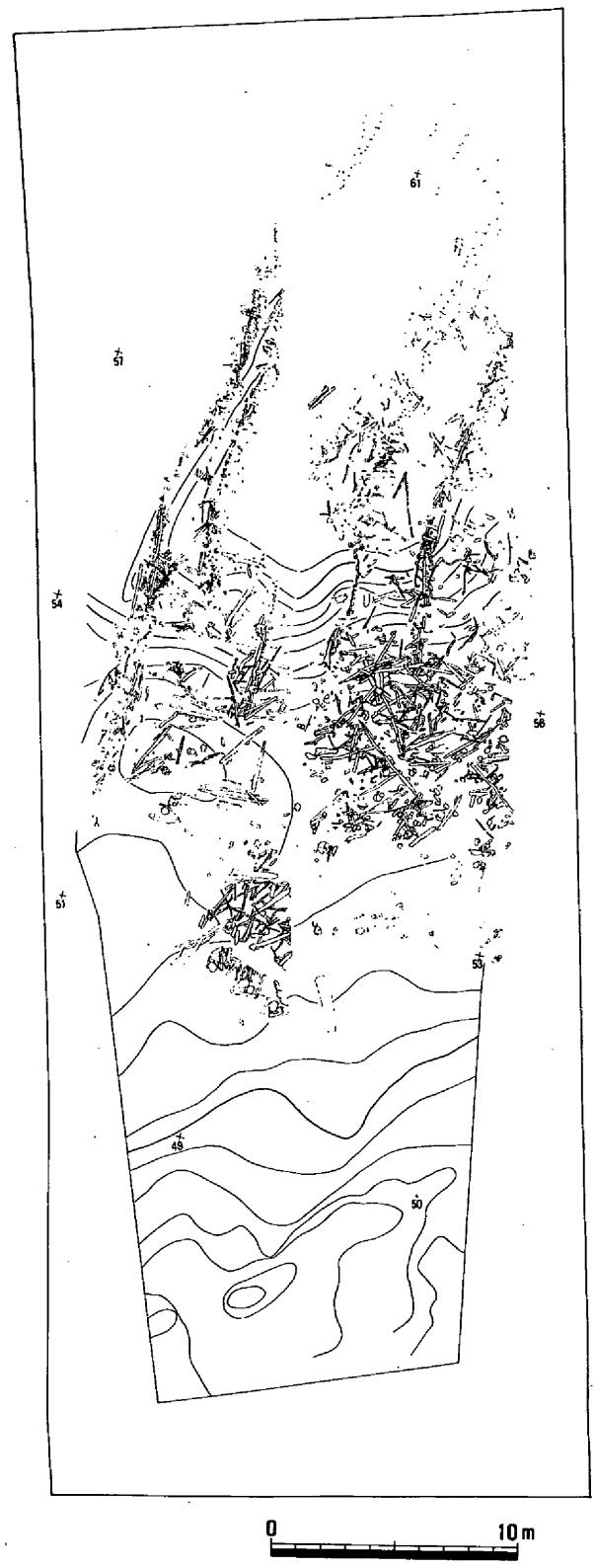
第21図　杭列Ⅲと立面図(1/100)

杭列Ⅳは杭列Ⅲの3mほど西側に、長さ12.5mにわたって検出された。この杭列の検出位置は盛り土の西下がり部分の斜面であり、第Ⅰ工区の斜面部の途中で終わっている。第19図のC-C´立面図の上段部分、第11図の土層断面では第47層から認められる杭がそれぞれ相当する。杭は丸木を主にしているが、北寄りでは板状に加工したものが認められる。幅10cm前後、厚さ3～4cmのものが比較的密に打ち込まれている。また、他の杭列に伴って認められている横木との組み合わせは、掘り下げをほとんど行っていないことからこの杭列では明確ではないが、他がすでに上面段階で検出されていることから板材を用いることで対応したと思考される。

杭列Ⅴは杭列Ⅳの1～2mほどの西側に、長さ16.7mにわたって検出された。第Ⅰ工区西斜面の掘り下げ末端部分に位置し、直線的にはならず、クランク状に認められたが一応一連のものとして扱う。この杭列が垂直に打ち込まれた状態で検出されたのは第Ⅱ工区との接合斜面部の横木付近であり、それより北側は杭の打ち込みの角度が20度近くでかなり寝た状態で認められた。第19図のC-C´立面図の下段部分がそれに相当する。横杭との関係は縦杭に横木を縫うように据えられていたが、この部分では横木に縦杭を「ハ」の字状に打ち込んでいるのが認められた。また、横木がずれないようにその先に縦杭が打ち込まれている状況が検出されている。杭の倒れた状態は掘り下げができなかったので判断しがたいが、第12図の土層断面の端では、杭の倒れに因る土層の変化は認められていない。倒れであれば最も影響を受けると思えるのは、この杭列の上段で盛り土の途中にある杭列Ⅳである。この杭列は下方の杭列が倒れれば何らかの影響が出るはずであるが、これらに影響された状況では検出されていない。このように考えれば、構築時からこのような工法がとられた可能性もある。しかしながら、杭列Ⅳの北端では同様に倒れた状態を呈していること、一般的には構築時には縦杭として打ち込まれ土圧により倒れたとも理解されることから最終的な判断ができかねている。杭列Ⅴは第Ⅱ工区との接合斜面の横木からさらに7mほど南に延びる。第20図のD-D´がその立面図であるが、第Ⅱ工区との接合斜面を南から見たものである。この部分は先の北側で見られた状況はなく、縦に打ち込まれた杭に横木を挟むようにしている。他の杭列が第Ⅰ工区の中で留まっているが、杭列Ⅴは連続して構築された可能性が窺われる。これを確認するための掘り下げができなかったが、工区の接合部の斜面にまばらながら連続して杭が認められることから想定される。

これらの杭列の他に、第Ⅰ工区の北寄りには３～４列の杭が認められている。これらの杭列が説明を加えた杭列とがどのような関係になるかは詳細は全く不明である。これらの杭列は、何れも平面的に杭の頭部を2～3cmほど露出させただけであり、これ以上の調査ができなかったことによる。

第22図　波止場状遺構と杭(1/300)



第23図　波止場状遺構除去後の杭(1/300)

杭列の他に第Ⅱ工区のⅢとⅤ杭列間の暗灰色粗砂層には粗ではあるが、遺構に対し平行して横木が認められている。このような状況で横木を用いた内容は、これまでの調査では確認されていない。このことから、この部分は第Ⅰと第Ⅱ工区との接合部に相当することから、土盛りの基礎としてこれらの横木を用いたことが思考される。

第22図は検出された杭列と木を、土盛りの平面形態検出時におけるものとで作図した。第Ⅱ工区のグリット52付近に見られる木は第９図に示したように、盛り土の崩落によるあらたな基礎として用いられたものとした。このようなことから、盛り土の幅が広くなっていた可能性が考えられる。さらに、北西側の斜面部の杭列は、調査で認められた下がりより外側へ延びることからも同様なことが思考される。この盛り土との関係は、数回の崩落とそれに伴う補修でもたらされたと判断されるが、北西部分については調査が十分行えなかったことからそこまで言い切ることには躊躇するものである。第23図は第Ⅱ工区を取り除き、基盤層である青灰色粘土検出時のものである。第15図で示した盛り土内の材が多く認められた箇所が盛り土の斜面部で、さらにはその変換部分の土層中に存在することから支持材としての内容を持っていたと思考される。（下澤）

杭の樹種

杭列に用いられた木の種類はその数が多く、全てについてその樹種を特定することはできなかった。したがって、樹種が明らかにできたのは428点についてである。樹種の詳細は附編で示すが、ここではそのあり方について見ていく。第24図は樹種を番号で示したもので、表２はその名称である。分類群では「属」において行なうと分類対象が多くなることから、分類群でこれより上の「科」で行った。これによると、ブナ科66.3%、ツバキ科9.1%、バラ科5.4%で他は３～0.2%である。

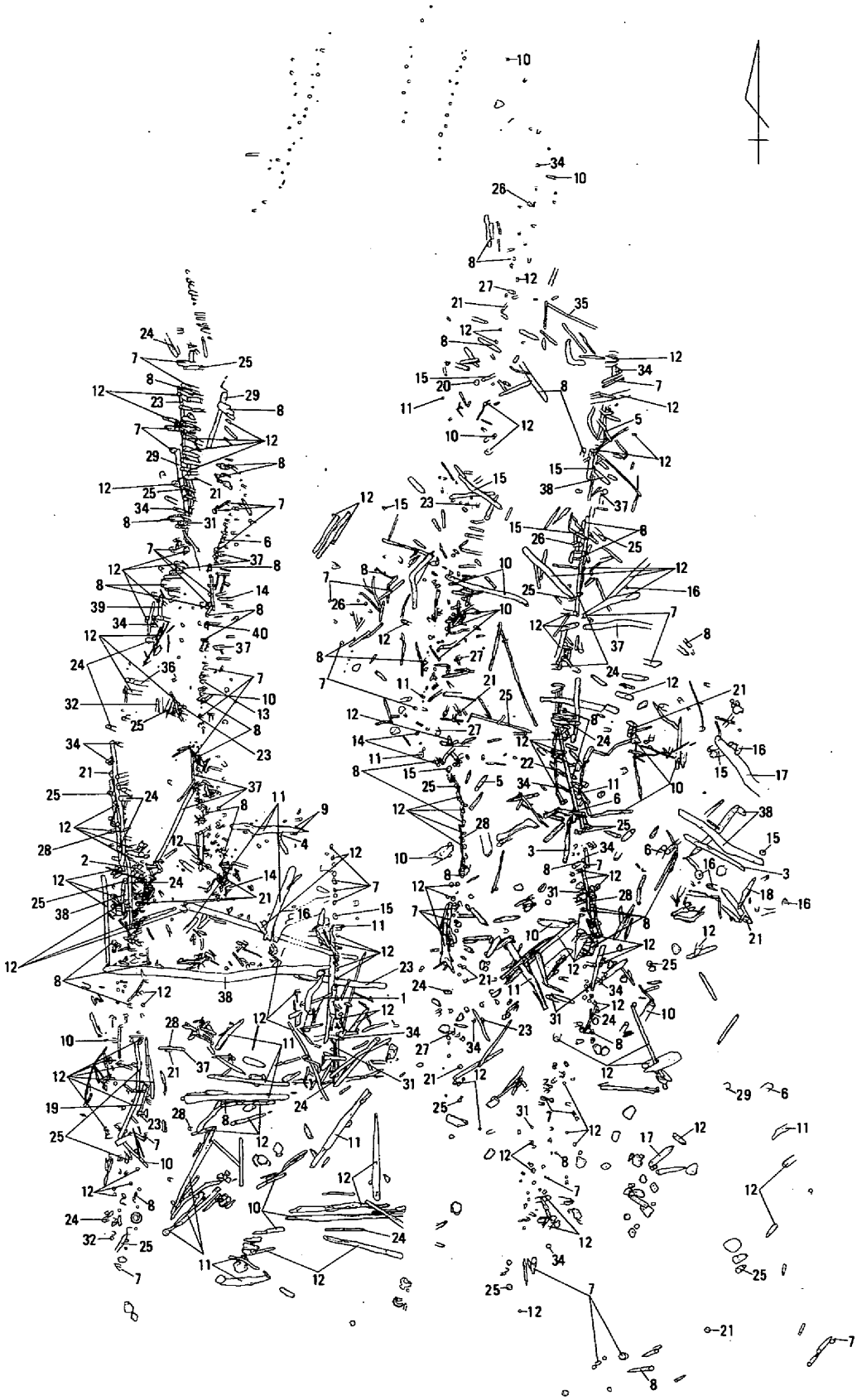
杭の樹種による分布は、個々ばらばらではなくある程度まとまる傾向にあるが、明瞭ではない。材を特定せずに、周辺丘陵部に分布する木を用いていたことが知られる。（下澤）

表２　樹種名一覧表

番号	和　名	学　名	番号	和　名	学　名／他
1	ヤブツバキ	Camellia japonica Linn.	21	マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon.
2	クリ	Castanea crenata Sieb. et Zucc.	22	モミ属	Abies
3	ツブラジイ	Castanopsis cuspidata Schottky	23	カエデ属	Acer
4	クスノキ	Cinnamomum camphora Presl	24	シキ属－コナラ亜属	Castanopisis-Lepidobalanus
5	サカキ	Cleyera japonica Thunb.	25	シイ属	Castanopsis
6	タブノキ	Machilus thunbergii Sieb. et Zucc.	26	エノキ属	Celtis
7	ヤマグワ	Morys australis Poiret	27	ミズキ属	Cornus
8	シロダモ	Neolitsea sericea Koids.	28	カキノキ属	Diospyros
9	アカマツ	Pinus densiflora Sieb. et Zucc.	29	ヒサカキ属	Eurya
10	クロマツ	Pinus thunbergii Parl.	30	モチノキ属	Ilex
11	ムクロジ	Sapindus mukorossi Gaertn.	31	サクラ属	Prunus
12	ケヤキ	Zelkova serrata Makino	32	コナラ属	Quercus
13	ナシ亜科	Subfam. Maloideae	33	ハイノキ属	Symplocos
14	クスノキ科	Lauraceae	34	ニレ属	Ulmus
15	ブナ科	Fagaceae	35	スノキ属	Vaccinium
16	クマシデ属イヌシデ節	Carpinus sect. Carpinus	36	ガマズミ属	Viburnum
17	コナラ属クヌギ節	Quercus sect. Aegilops	37	散孔材	diffuse-porous wood
18	コナラ属コナラ節	Quercus sect. Prinus	38	環孔材	ring-porous wood
19	コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. Cyclobalanopsis	39	広葉樹	Brod-Leaved tree
20	コナラ属コナラ亜属	Quercus subgen. Lepidobalanus	40	樹皮	bark

順不同

参考資料　北陵館　牧野新日本植物図鑑
著者　牧野富太郎



第24図　杭の樹種(1/150)

遺物の出土状態

遺物の出土は第７図の第18層から下層において認められ、それより上層からはほとんど検出をみていない。したがって、今回の調査で検出された木器及び土器も下層のものである。第25図は第Ⅱ工区を取り除き、第Ⅰ工区の基盤である青灰色土面での図である。これによると、遺物は盛り土部分の南東側に認められ、遺構の先端部分側に密度が濃く分布する。第26図は遺物が、波止場状遺構検出時のプランと最終面での杭列とどのような関係となるかを示したものである。波止場状遺構の盛り土のなかに**379・396・512・528・566・761・978・1057**の土器の分布が認められるが、いずれも第８図の第49層の暗灰色粗砂での出土である。第Ⅰ工区東よりの斜面部分にも認められるが、これらは盛り土中に含まれるものが存在している。出土した樋と思われるものの一つは第９図の第43層に見られる凹状の木が、他の一つは大量の土器群とともに検出されている。

第25図　遺物出土位置図(1/300)

杭列Ⅴの第Ⅱ工区では、高杯が興味ある出土状態で認められた。出土した高杯は**759**である。この高杯が写真図版28－1で明らかなように、杭の間に置かれた状態で検出されている。さらに、貨泉は第Ⅱ工区の基礎部分となる横木を用いた箇所から出土している。

土器の出土位置は主要な器種について、第28～33図に示した。このうち**874**の弧帯文土器は近くの土層から検討すると、第10図の第98層付近からの出土である。漆容器のうち**1036**の脚付直口壺は、第７図の第28層からの出土であり、**976**の絵画文土器はその最下層の灰色砂層から検出されている。なお、樋も、この第98層の灰色砂から出土している。第29図は壺であり、ほぼ全体に分布が認められるがグリット49から南東側にまとまっている状況を示している。第30図は甕であり、壺と同様な分布を示すが、グリット49の南東側には２ヵ所の集中部分が認められる。第31図は高杯であり、出土個体数が少ないことから全体的にまばらな分布を示すが、少ないなり

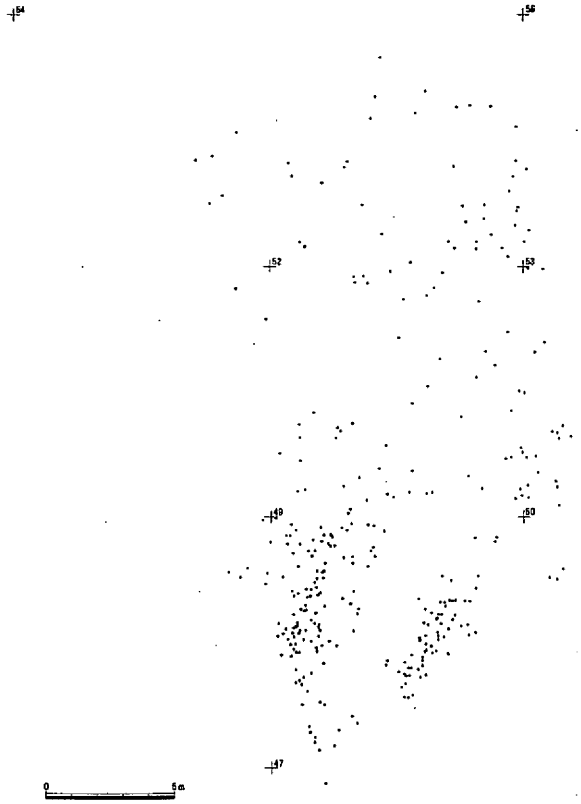
にグリット49の南東側にかたまる状況が認められる。第32図は鉢であり、甕とほぼ同じような分布を示す。第33図は器台と製塩土器であるが、この両者の出土量は極めて少ない。しかし、分布の内容は器台が全体に、製塩土器はグリット49の南東側にかたまる傾向が認められる。　（下澤）

第26図　波止場状遺構最終検出杭と遺物位置図(1/300)

第27図　波止場状遺構除去後の最終検出杭と遺物位置図(1/300)

第28図　遺物出土位置図(1/300)

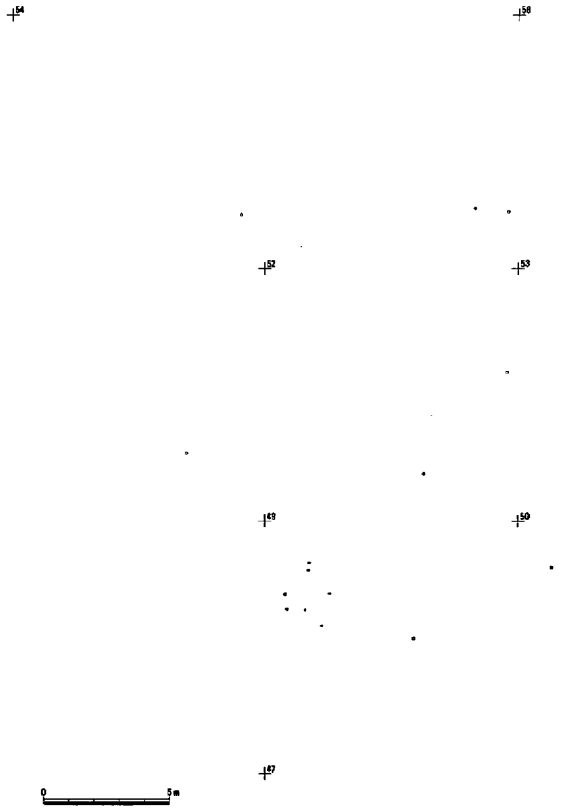
第29図　壺出土位置図(1/300)



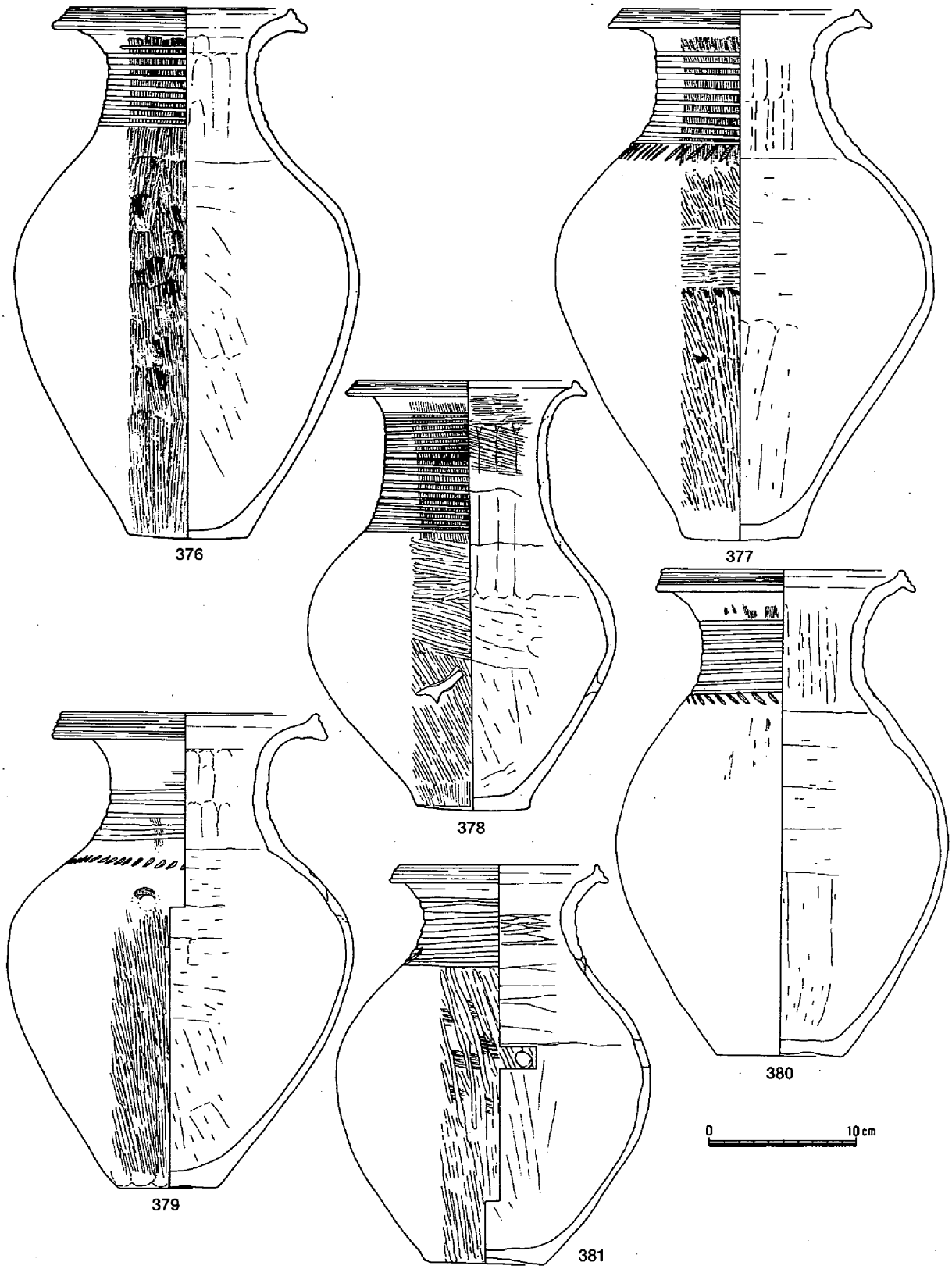
第30図　甕出土位置図(1/300)

第31図　高杯出土位置図(1/300)

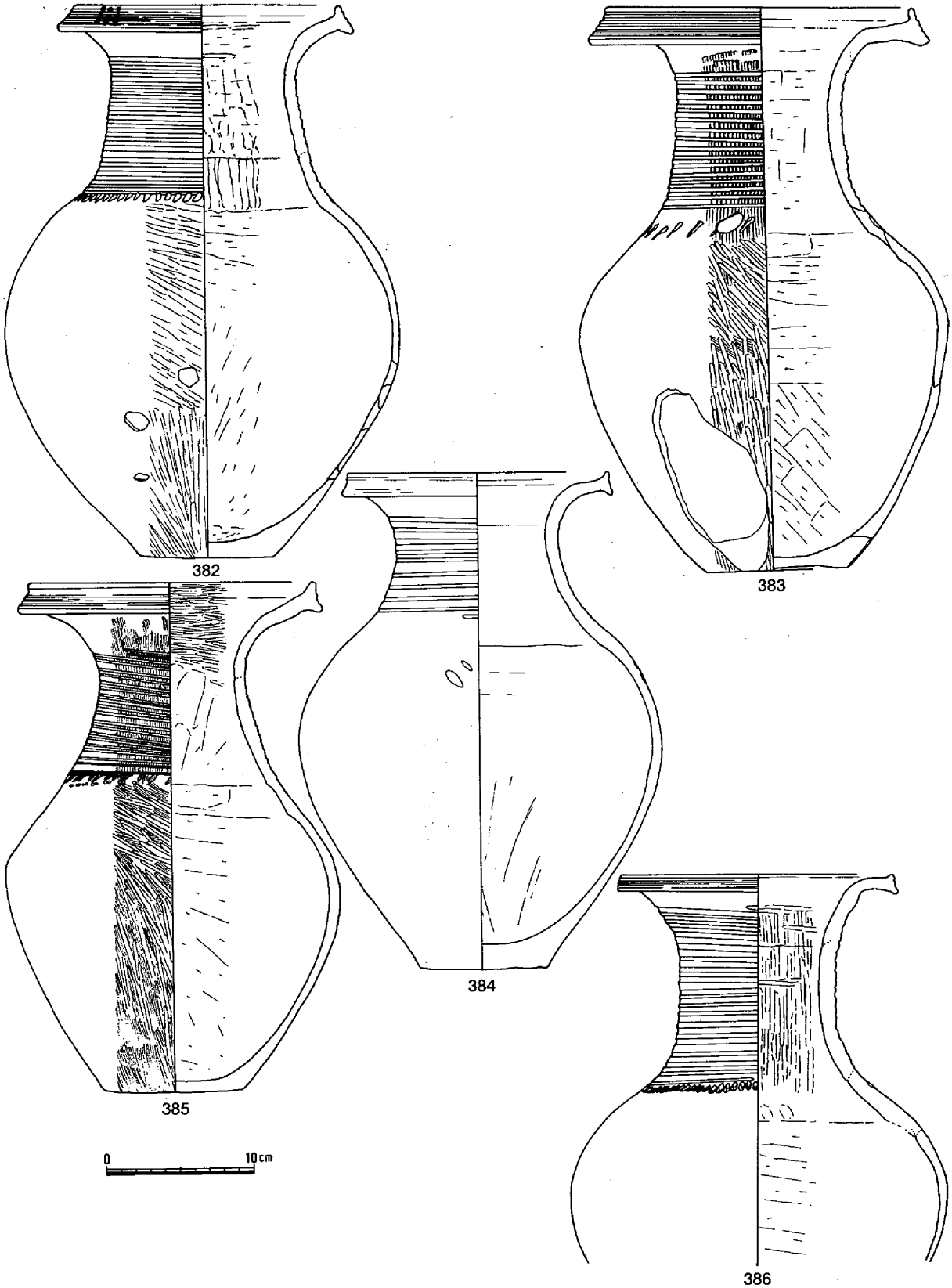
第32図　鉢出土位置図(1/300)



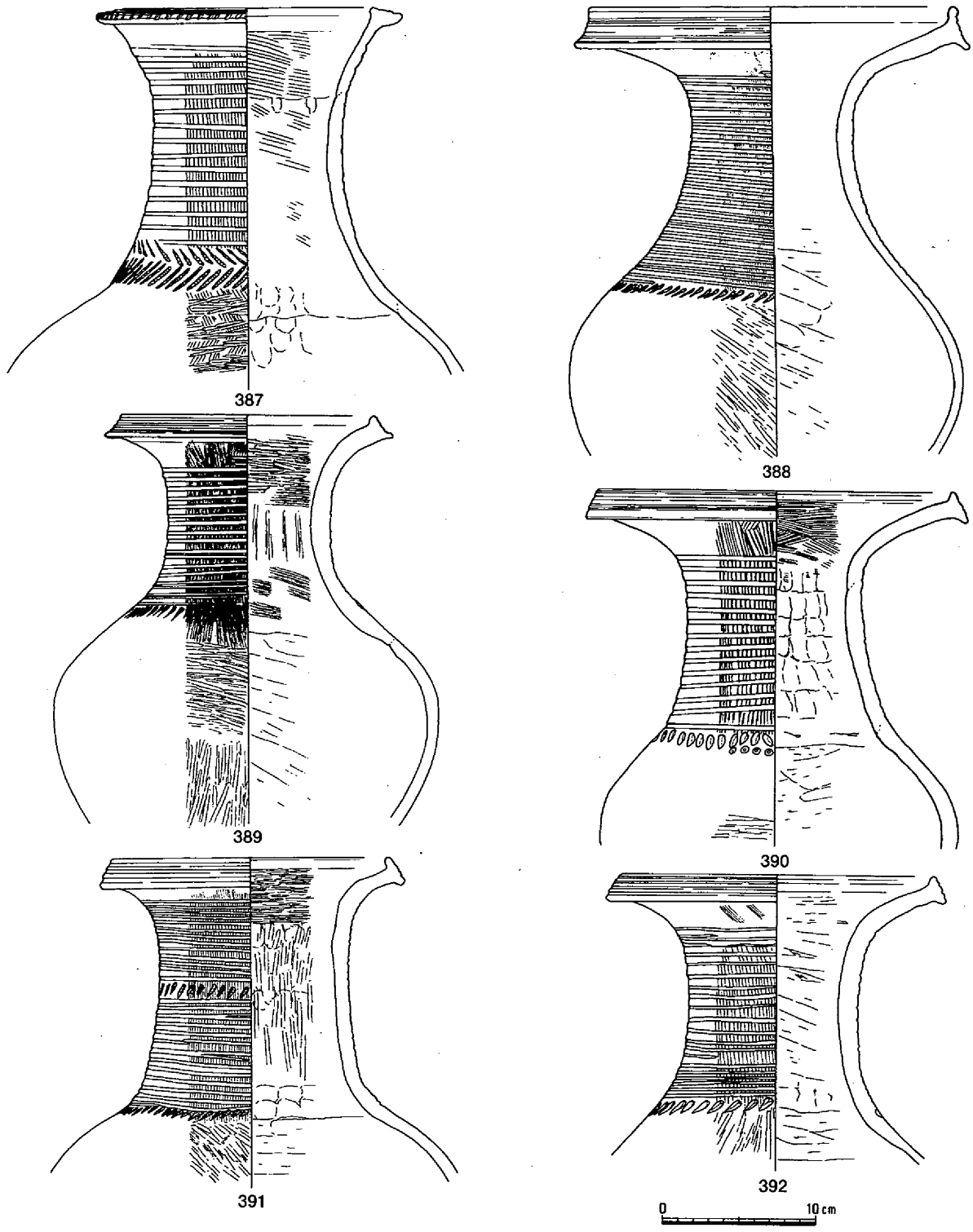
第33図　器台・製塩土器出土位置図(1/300)



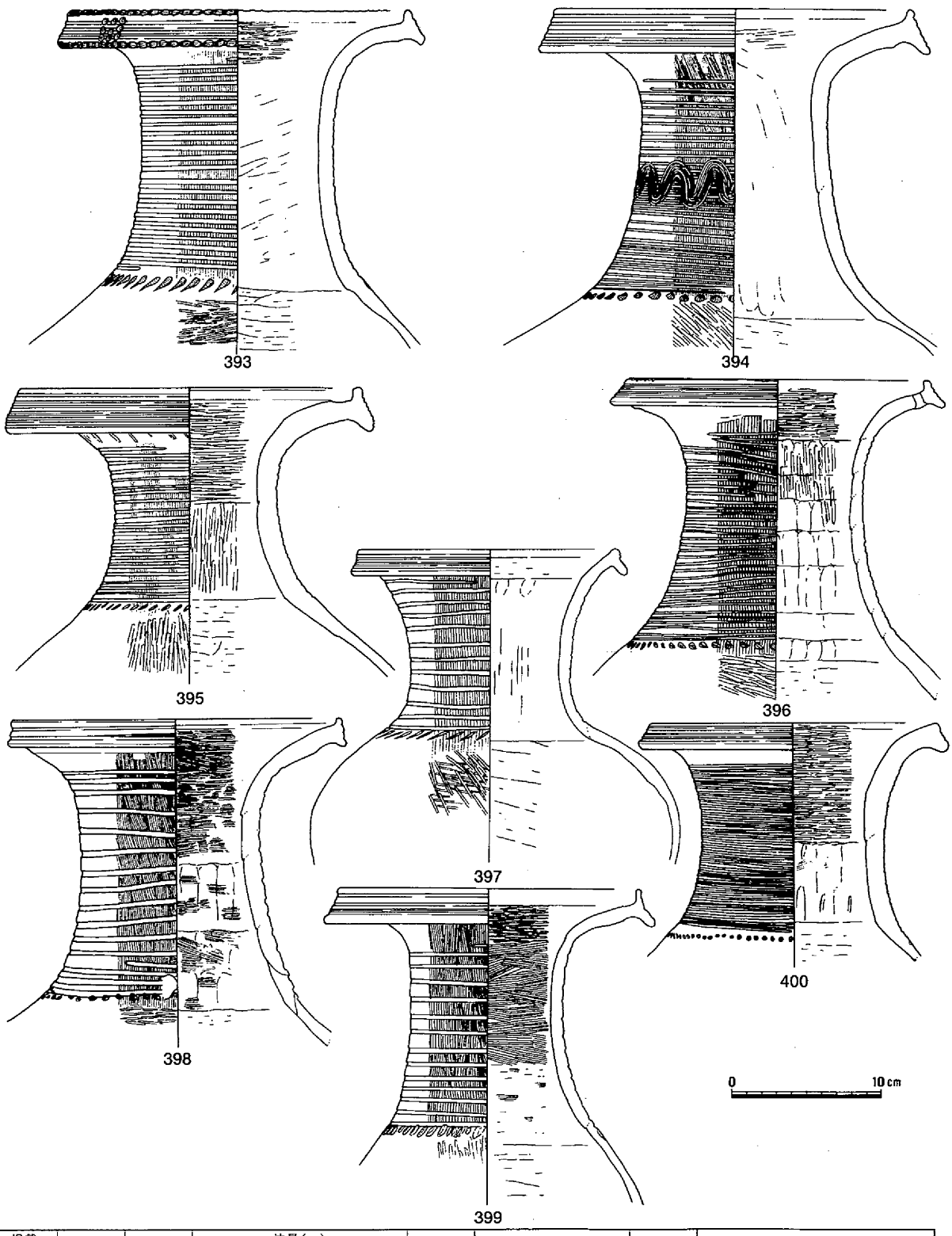
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
376	弥生土器	長頸壺	14.7	8.0	36.1	良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒	口縁部に凹線3本　頸部沈線は螺旋
377	弥生土器	長頸壺	16.0	7.9	36.0	良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は螺旋　肩部に刺突文
378	弥生土器	長頸壺	14.6	7.5	29.2	良好	7.5YR4/6(褐)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は単線　胴部下位に穿孔
379	弥生土器	長頸壺	17.0	6.7	32.3	良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	口縁部に凹線3条　頸部に沈線　肩部に刺突文　肩部に穿孔
380	弥生土器	長頸壺	16.4	8.6	33.1	良好	2.5Y7/4(浅黄)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は螺旋　肩部に刺突文　底部に煤付着
381	弥生土器	長頸壺	13.4	8.0	27.3	良好	10YR6.5/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は単線　胴部と肩部に穿孔　タタキ



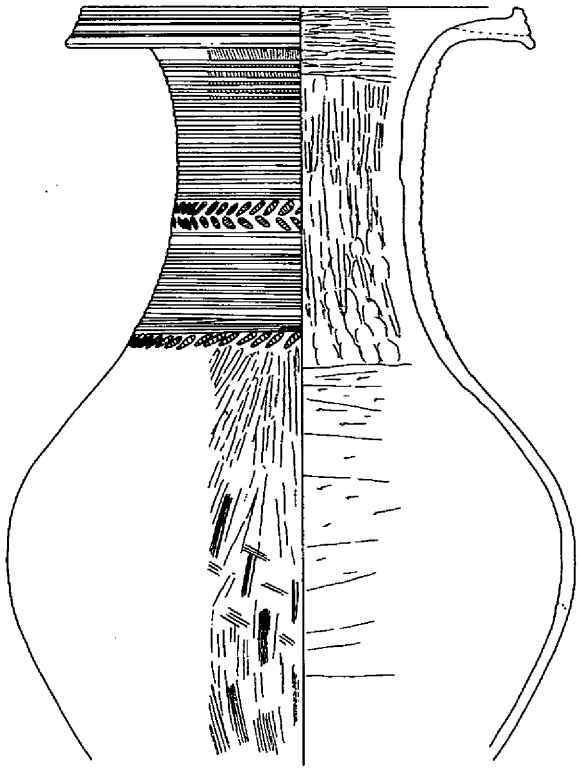
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底(脚)径	法量(cm) 器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
382	弥生土器	長頸壺	17.8～18.2	9.0	37.3	良好	2.5Y6/3(灰黄)	砂粒	口縁部に凹線・竹管文　頸部沈線は螺旋・穿孔４カ所
383	弥生土器	長頸壺	20.0	9.5	37.9	良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	頸部沈線は単線・刺突文・打ち欠き 胴部下半と肩部に穿孔　肩部に敲打痕
384	弥生土器	頸壺	17.4	8.6	33.5	良好	10YR7/1(灰白)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は螺旋　肩部穿孔の打撃痕
385	弥生土器	長頸壺	19.3	9.5	34.5	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は螺旋　肩部に刺突文・半截竹管文２個一組６～７組で２カ所
386	弥生土器	長頸壺	18.1			良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒(少)	口縁部に凹線３条　頸部沈線は螺旋　肩部に刺突文

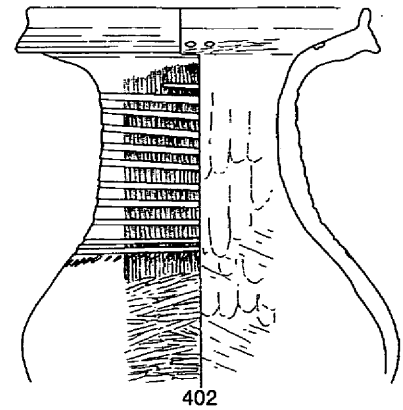


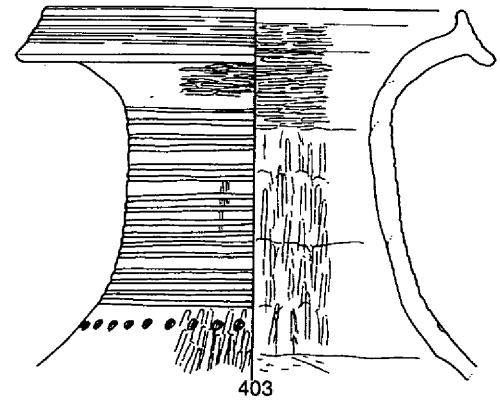
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
387	弥生土器	長頸壺	15.7			良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線3条　頸部沈線は単線 口縁部に刺突文
388	弥生土器	長頸壺	23.4			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は螺旋　肩部に刺突文
389	弥生土器	長頸壺	16.1			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は螺旋　肩部に刺突文
390	弥生土器	長頸壺	27.8			良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒	頸部沈線は単線　肩部に刺突文・竹管文
391	弥生土器	長頸壺	17.6			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線3条　頸部沈線は螺旋　肩部に刺突文
392	弥生土器	長頸壺	20.2			良好	10YR6.5/2(灰黄褐)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は2本1対で螺旋　肩部に刺突文

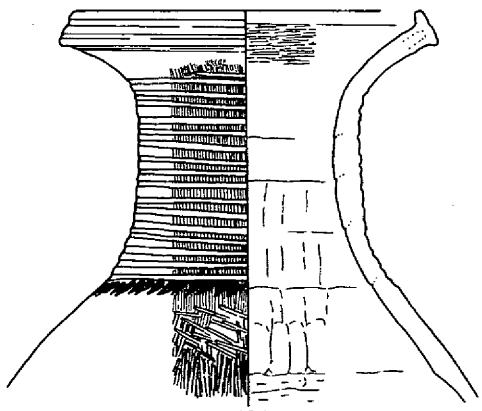


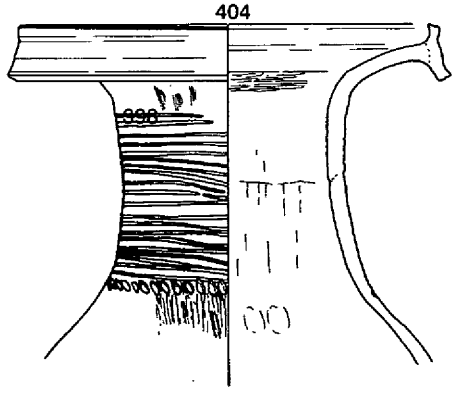
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
393	弥生土器	長頸壺	22.0			良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線４条・キザミ・竹管文３段３列９個　頸部沈線は螺旋　肩部に刺突文
394	弥生土器	長頸壺	23.4			良好	10YR5/4(にぶい黄褐)	砂粒	口縁部に凹線・頸部沈線は２本１対の螺旋・頸部中位に波状文　肩部に貝殻刺突文
395	弥生土器	長頸壺	22.3			良好	5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒	口縁部に凹線・頸部に沈線　肩部に刺突文　丹塗り?
396	弥生土器	長頸壺	20.0			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に沈線・孔　口縁端部にキザミ　頸部沈線は２本１対の螺旋　肩部に刺突文
397	弥生土器	長頸壺	17.1			良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒(少)	口縁部に凹線　頸部沈線は螺旋　肩部に刺突文　タタキ
398	弥生土器	長頸壺	21.9			良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は螺旋・穿孔　肩部に刺突文
399	弥生土器	長頸壺	18.9			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は螺旋・肩部に刺突文
400	弥生土器	長頸壺	20.1			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒(多)	口縁部に凹線　頸部沈線は螺旋　頸部に刺突文

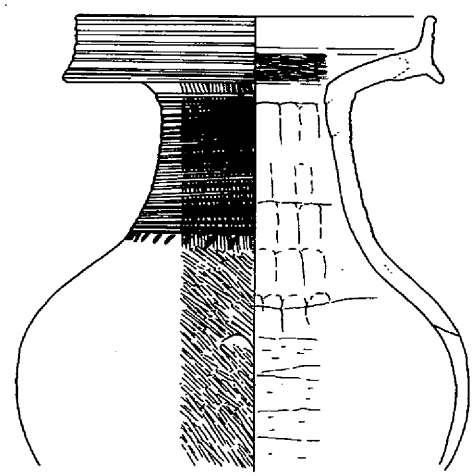

401


402

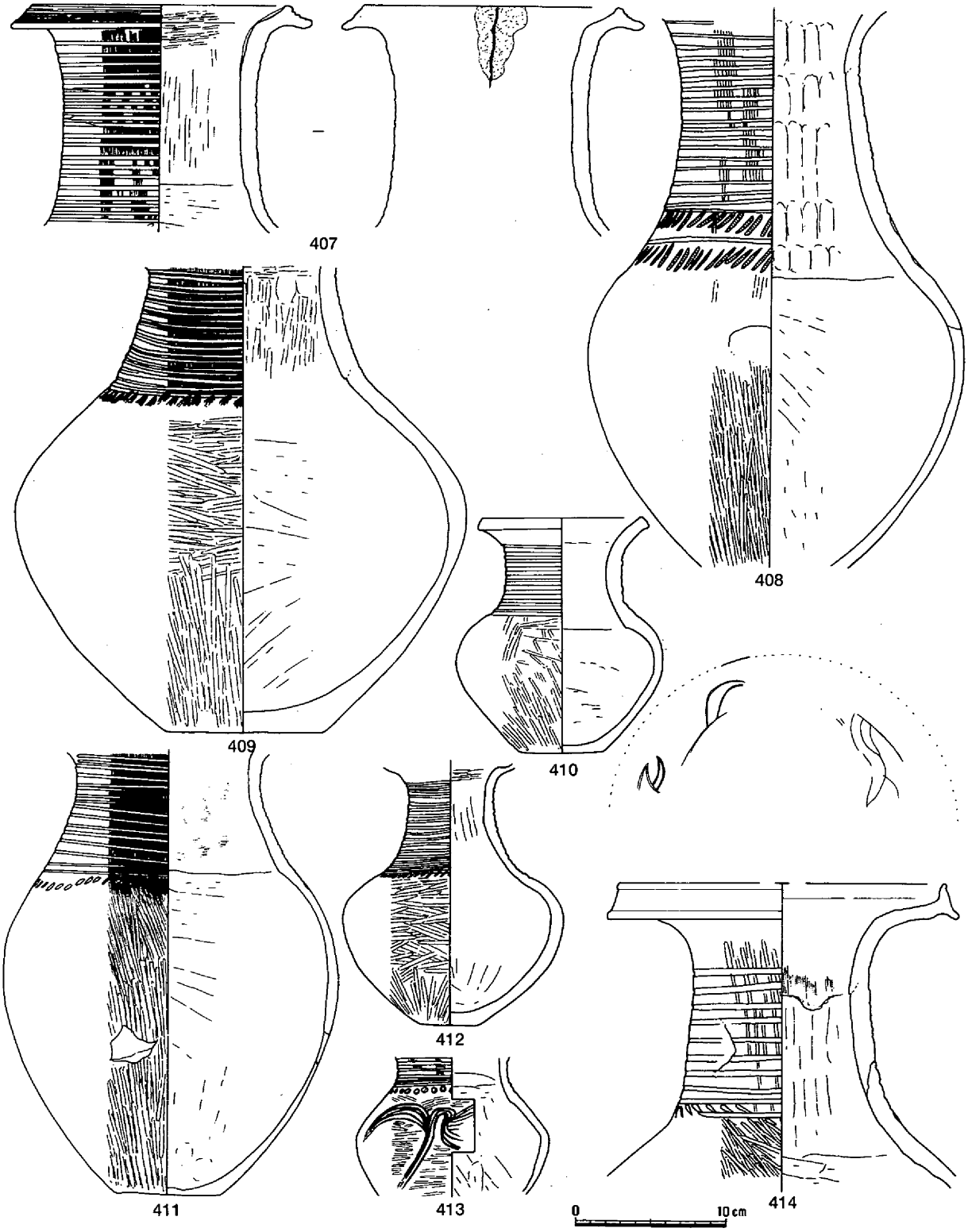

403


404

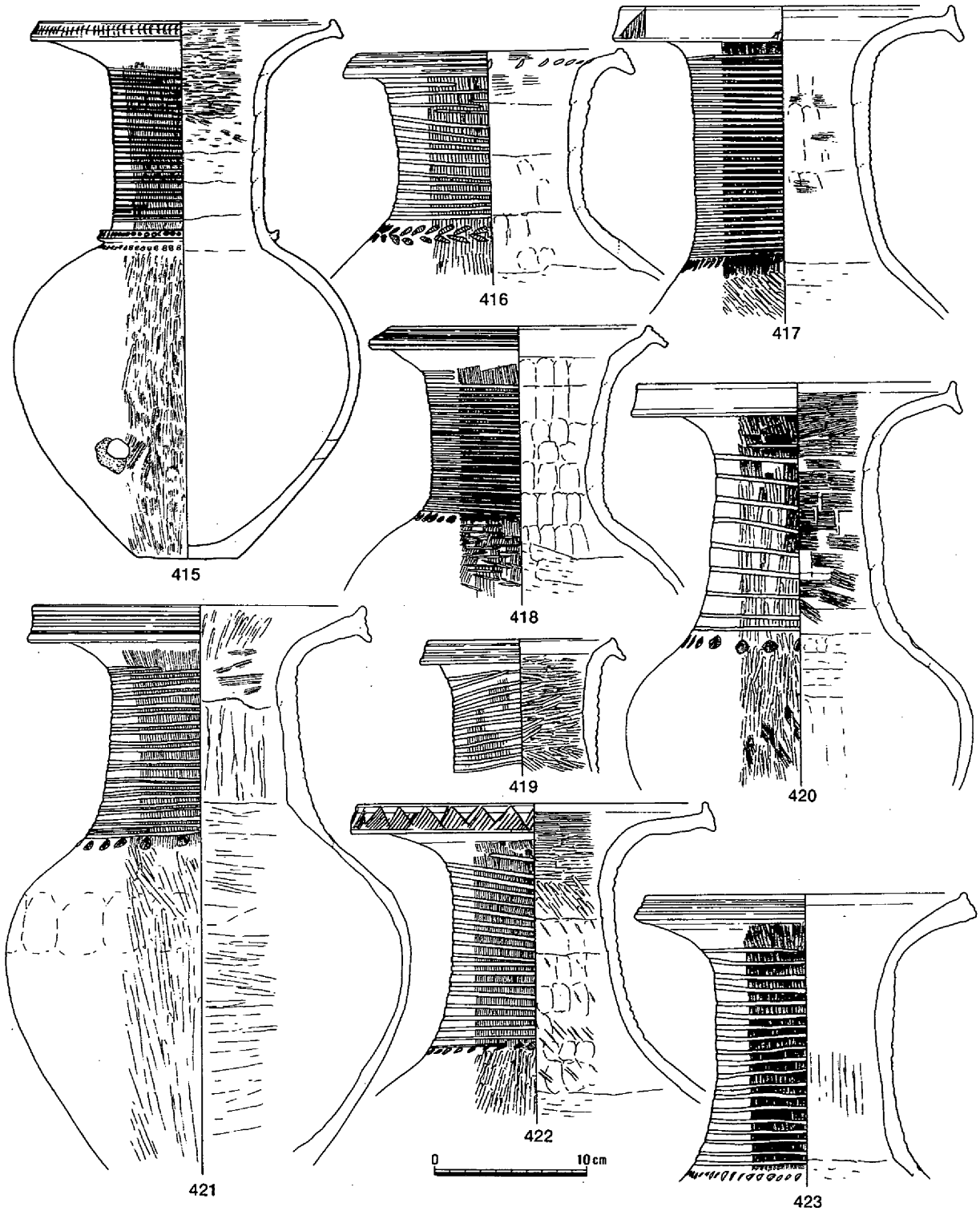

406


405

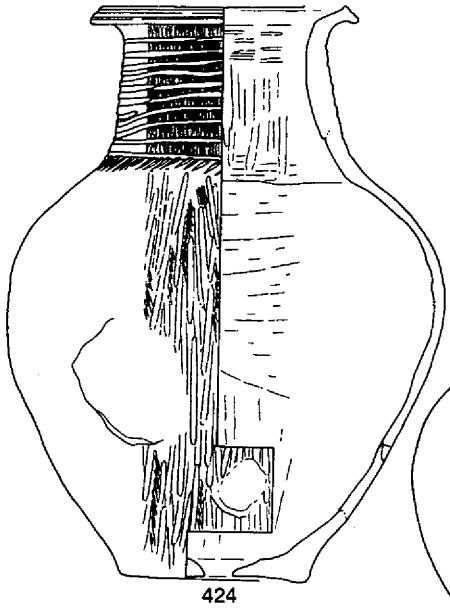
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
401	弥生土器	長頸壺	22.8			良好	10YR6/1(褐灰)～6/3 (にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は2段とも単線・刺突文2段
402	弥生土器	長頸壺	17.9			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁内面に竹管文2個1組　口縁部に凹線　頸部沈線は螺旋　肩部刺突文
403	弥生土器	長頸壺	21.8			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は単線　肩部に刺突文
404	弥生土器	長頸壺	18.3			良好	10YR7/1(灰白)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は螺旋　肩部に刺突文
405	弥生土器	長頸壺	18.7			良好	10YR8/2(灰白)	砂粒	口縁部に沈線　頸部沈線は単線？肩部に刺突文　胴部上半に穿孔
406	弥生土器	長頸壺	22.1			良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	口縁部に沈線　頸部沈線は2本1対の螺旋　肩部に刺突文

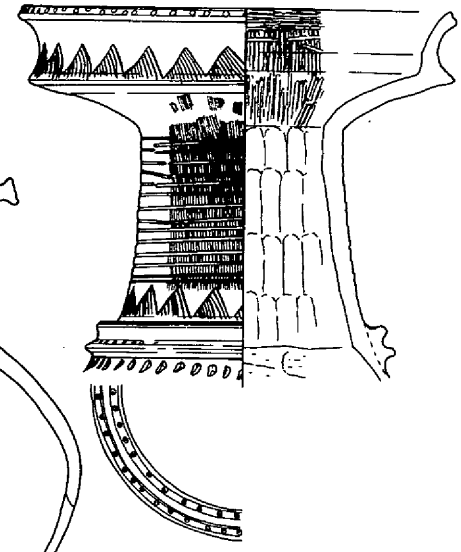


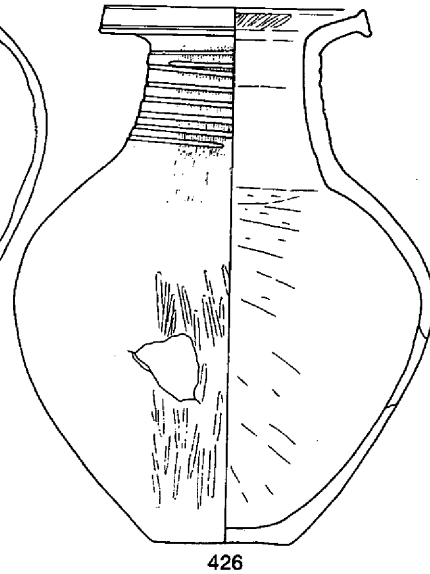
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
407	弥生土器	長頸壺	16.7			良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線５～６条　頸部沈線は単線　肩部に刺突文　口縁部～頸部にかけて補修痕
408	弥生土器	長頸壺				良好	10YR6/4(にぶい黄橙)	砂粒	頸部沈線は螺旋？肩部に刺突文２段　胴部に穿孔
409	弥生土器	長頸壺		10.6		良好	10YR6/1(褐灰)	砂粒(少)	頸部沈線は２本１対の螺旋　肩部に貝殻文
410	弥生土器	長頸壺	10.5	5.8	15.8	良好	7.5Y8/2(灰白)	砂粒	頸部沈線は螺旋・単線
411	弥生土器	長頸壺		7.0		良好	N6/(灰)	砂粒	頸部沈線は２本１対の螺旋　肩部に刺突文　胴部下半に穿孔
412	弥生土器	長頸壺		4.1		良好	2.5Y6/4(にぶい黄橙)	砂粒	頸部沈線は螺旋　肩部に刺突文
413	弥生土器	長頸壺				良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒(少)	頸部に沈線　肩部に竹管文　胴部に線刻
414	弥生土器	長頸壺	(21.6)			良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	頸部沈線は螺旋？・穿孔　肩部に刺突文　口縁内面に線刻(竜)

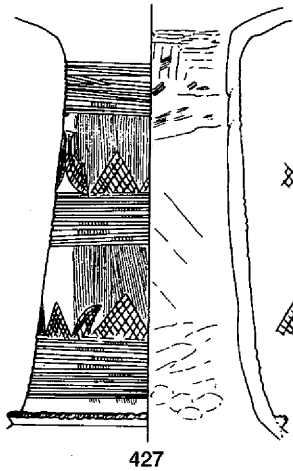


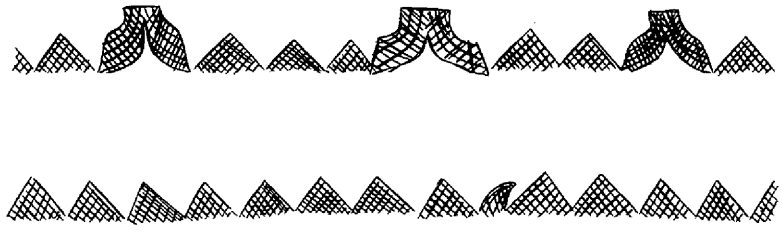
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
415	弥生土器	長頸壺	19.1	6.6	35.3	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	口縁部に半截竹管文　頸部沈線は螺旋　肩部に凸帯上に竹管文　胴部下半に穿孔
416	弥生土器	長頸壺	17.2			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線　口縁内面に刺突文　頸部沈線は単線　肩部に綾杉状の刺突文
417	弥生土器	長頸壺	21.7			良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒(少)	口縁部に鋸歯文　頸部沈線は螺旋　肩部に刺突文
418	弥生土器	長頸壺	17.0			良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	口縁部凹線　頸部沈線は螺旋　肩部に貝殻押圧文
419	弥生土器	長頸壺	12.0			良好	5Y7/1(灰白)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は螺旋？
420	弥生土器	長頸壺	21.0			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	頸部沈線は螺旋　肩部に貝殻押圧文
421	弥生土器	長頸壺	21.6			良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は2本1対の螺旋
422	弥生土器	長頸壺	22.9			良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	口縁部に鋸歯文　頸部沈線は螺旋　肩部に刺突文
423	弥生土器	長頸壺	20.9			良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は螺旋　肩部に刺突文

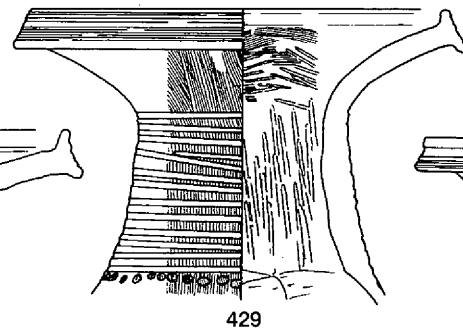

424

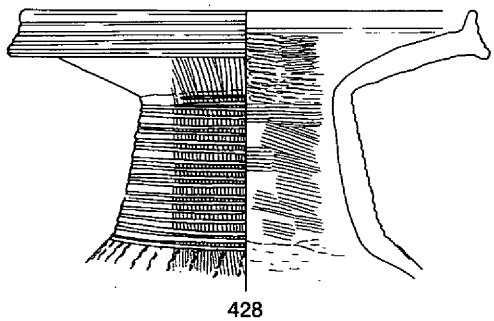

425


426

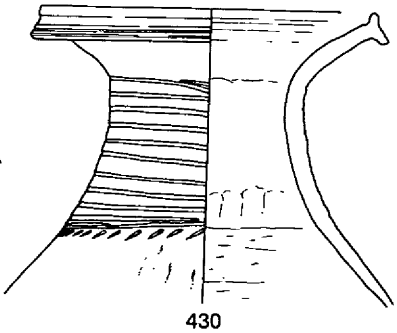

427



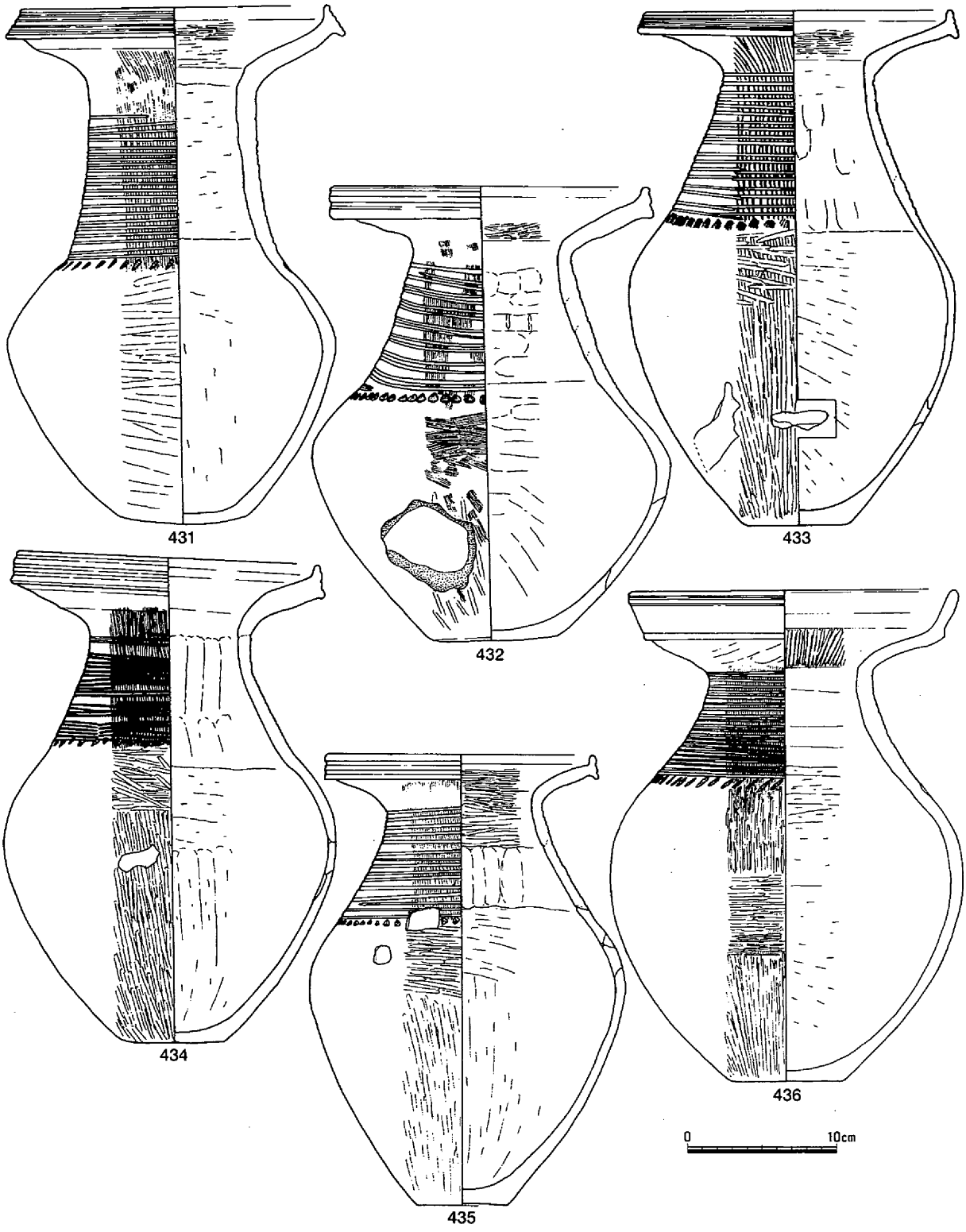

429


428

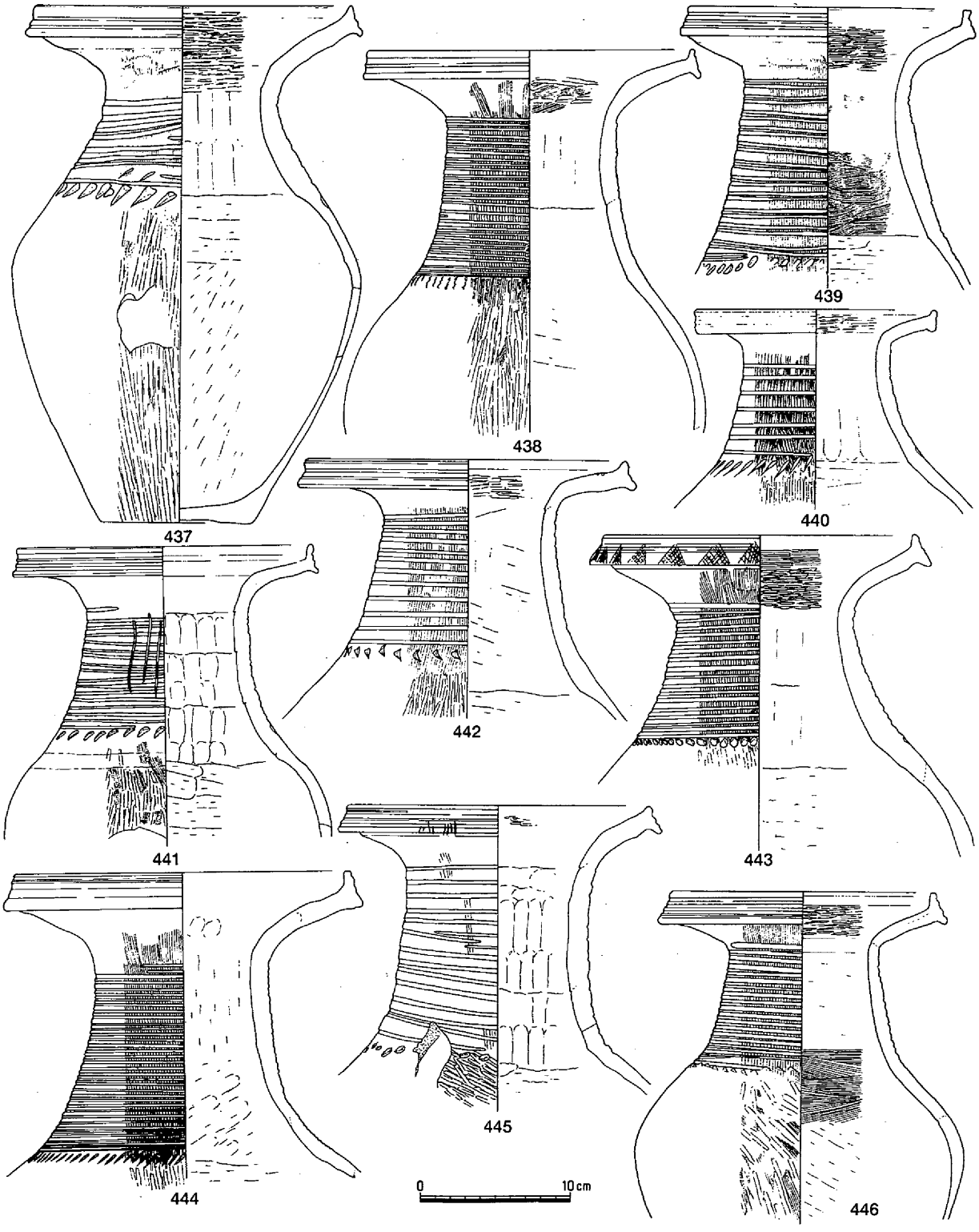
0　10cm


430

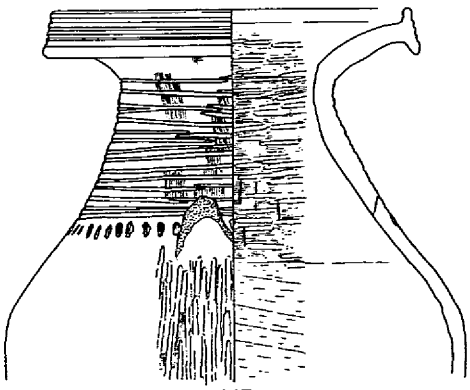
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
424	弥生土器	長頸壺	12.9	9.8	30.2	良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は単線　肩部に刺突文 胴部中位と下位に穿孔　底部に焼成後の穿孔
425	弥生土器	長頸壺	22.6			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に鋸歯文　口縁端部に竹管文　頸部沈線は単線　肩部に鋸歯文・凸帯文・刺突文
426	弥生土器	長頸壺	13.6	7.6	28.4	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	頸部沈線は螺旋　胴部下半に穿孔
427	弥生土器	長頸壺				良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒(多)	頸部沈線は単線３段・鋸歯文２段 肩部にキザミメ凸帯
428	弥生土器	長頸壺	24.0			良好	2.5Y8/2(灰白)	砂粒	口縁部に凹線　口縁外面に煤付着　頸部沈線は２本１対の螺旋　肩部に貝殻圧痕
429	弥生土器	長頸壺	21.6			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は単線(上)と螺旋(下)　肩部に刺突文
430	弥生土器	長頸壺	17.5			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は螺旋　肩部に刺突文



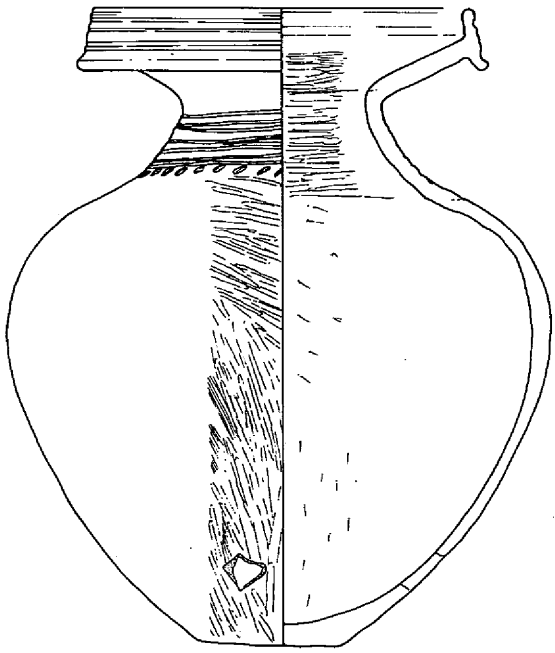
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
431	弥生土器	長頸壺	20.4	8.6	34.5	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は螺旋　肩部に刺突文
432	弥生土器	長頸壺	20.7	8.4	30.2～30.45	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は2本1対の螺旋　肩部に貝殻刺突文　胴部下半に穿孔
433	弥生土器	長頸壺	20.3	7.2	34.4	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	頸部沈線は単線　肩部に貝殻圧痕　胴部下半に穿孔2カ所
434	弥生土器	長頸壺	19.0	6.8	32.0～33.1	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線　頸部に沈線　肩部に刺突文　胴部に穿孔
435	弥生土器	長頸壺	17.5	6.0～6.5	30.0	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	肩部に2カ所の穿孔　頸部沈線は螺旋
436	弥生土器	長頸壺	21.5	8.0	32.9	良好	5Y7/2(灰白)	細砂	口縁部に凹線　頸部沈線は単線　肩部に刺突文



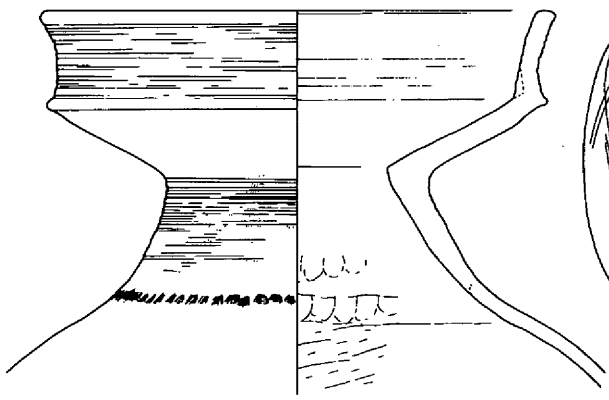
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
437	弥生土器	長頸壺	20.8	10.0	33.8～34.0	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	頸部沈線は螺旋　肩部刺突文　胴部中位に穿孔
438	弥生土器	長頸壺	21.2			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	頸部に沈線　肩部に貝殻刺突文
439	弥生土器	長頸壺	18.2			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線　口唇部に凹部　頸部沈線は２本１対の螺旋　肩部に刺突文
440	弥生土器	長頸壺	15.5			良好	2.5Y7/4(浅黄)	砂粒(少)	口縁部に凹線　頸部沈線は螺旋　肩部に刺突文
441	弥生土器	長頸壺	19.5			良好	10YR8/2(灰白)	砂粒	口縁部に沈線　頸部沈線は２本１対の螺旋
442	弥生土器	長頸壺	22.8			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線　口縁内面に３個と４個の竹管文　頸部沈線は単線　肩部に刺突文
443	弥生土器	長頸壺	20.5			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	口縁部に凹線・鋸歯文　頸部沈線は２本１対の螺旋
444	弥生土器	長頸壺	22.2			良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は２本１対の螺旋
445	弥生土器	長頸壺	19.7			良好	10YR5/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線　胴部中位に穿孔・鋸歯文に似た線刻３カ所　頸部沈線は単線と螺旋　肩部に穿孔・刺突文
446	弥生土器	長頸壺	17.2			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は螺旋　肩部に刺突文



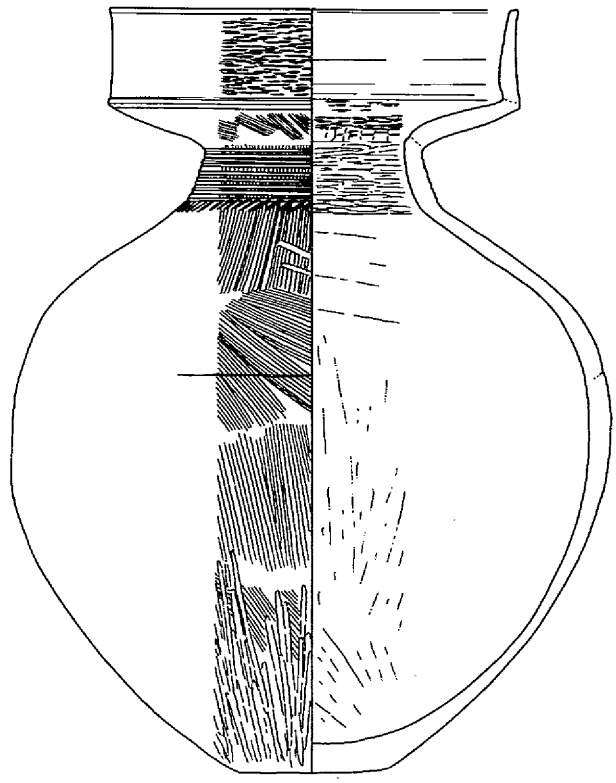
447

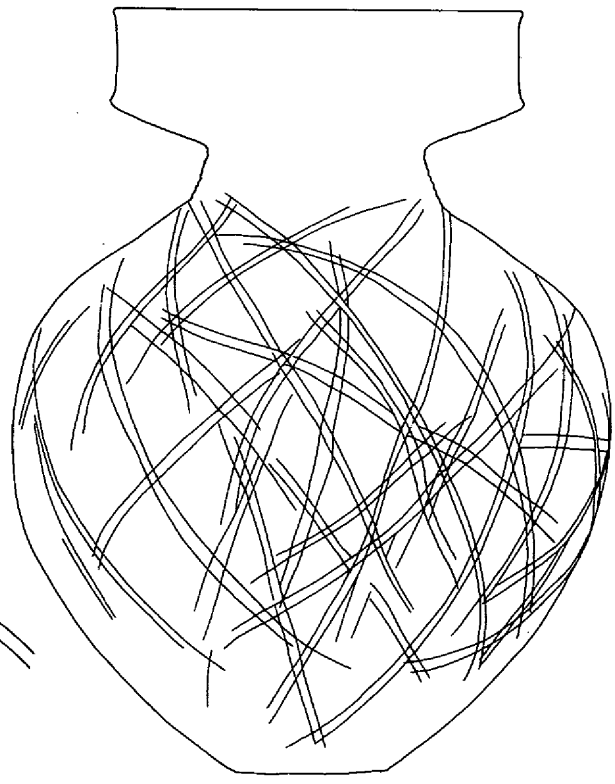


448



449

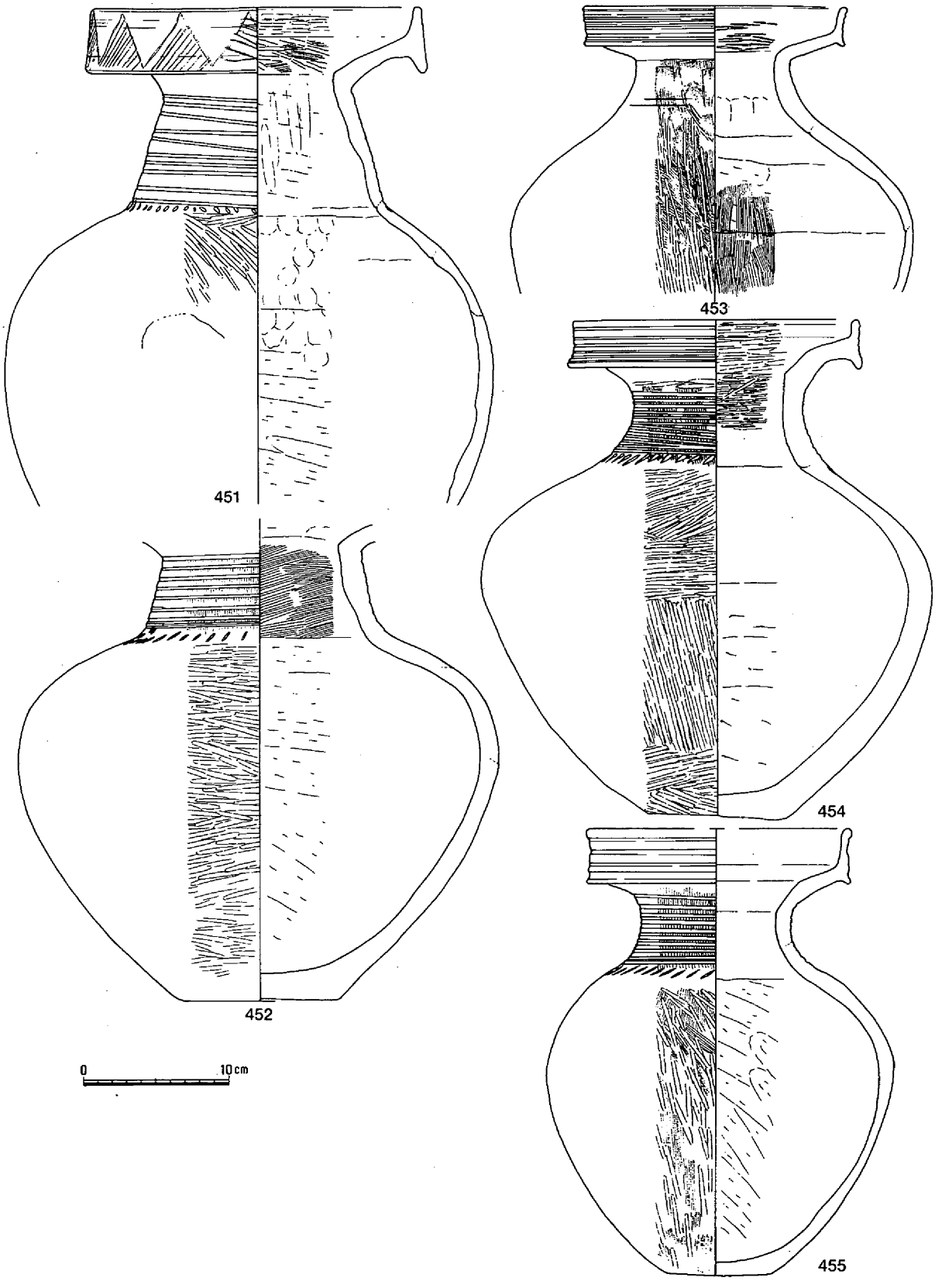




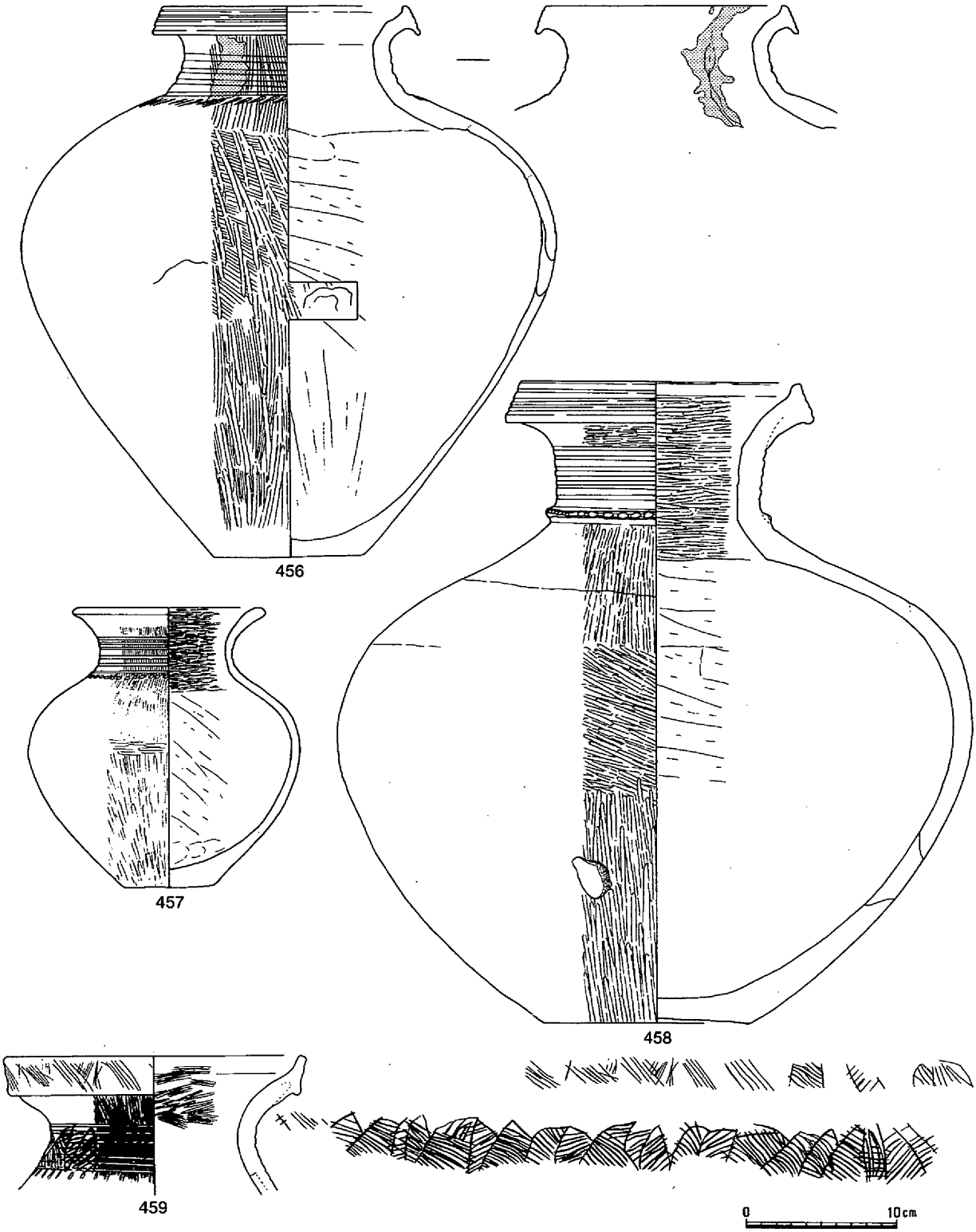
450

0　10cm

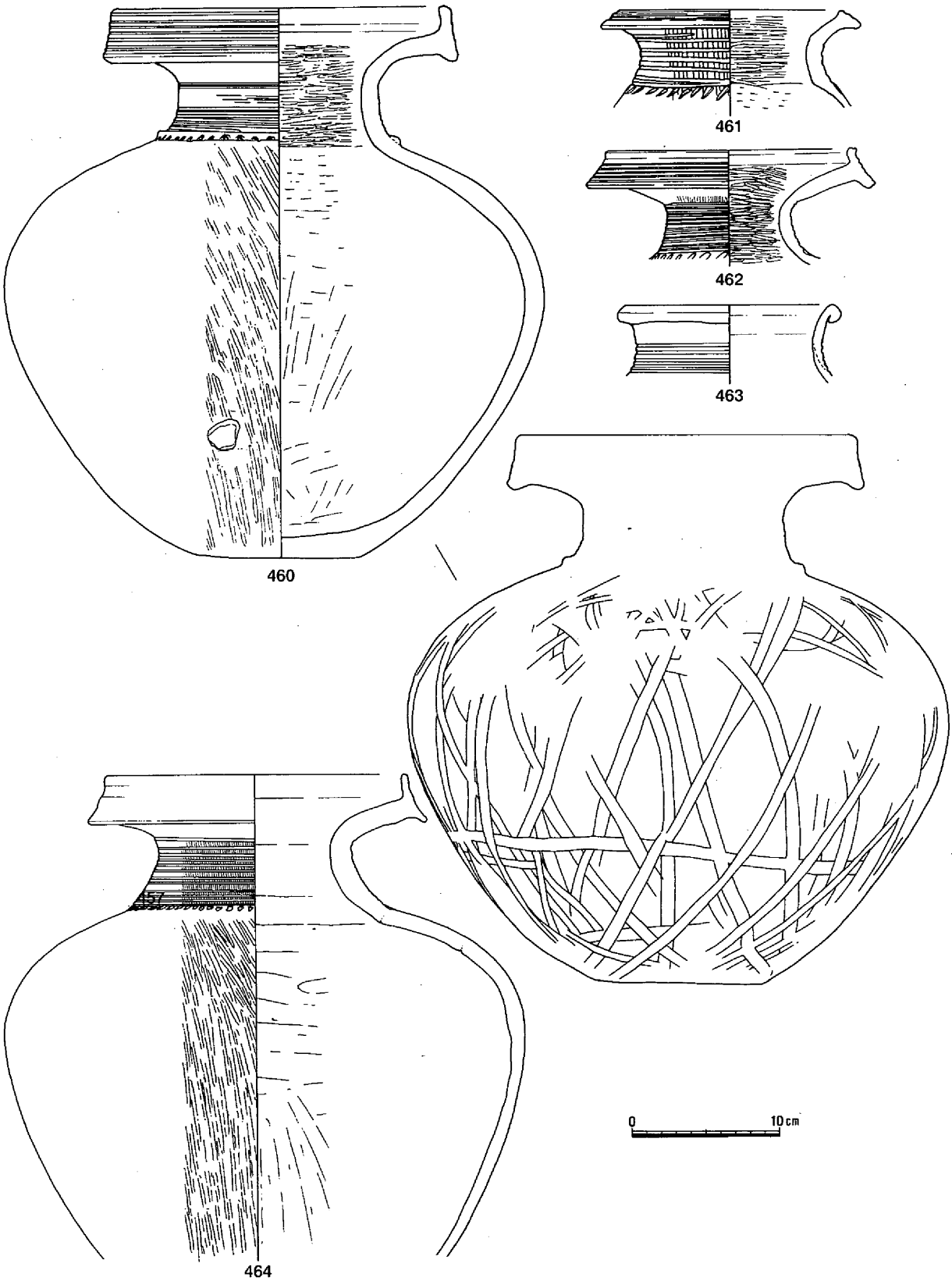
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
447	弥生土器	長頸壺	18.5			良好	2.5Y6/1(黄灰)	砂粒	口縁部に沈線　頸部沈線は単線　肩部に刺突文・穿孔
448	弥生土器	壺	19.6	7.7	34.0	良好	2.5Y6/2.5(灰黄)	砂粒	口縁部に凹線　頸部に沈線　肩部に刺突文　胴下半に穿孔
449	弥生土器	壺	26.1			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	口縁部に沈線　口縁部端面に凹線　頸部沈線は2対の螺旋　肩部に貝殻刺突文　器面の風化著しい
450	弥生土器	壺	(21.6)	8.3	40.5	良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒(少)	口唇部に凹線　頸部沈線は螺旋？肩部に刺突文　籠目痕



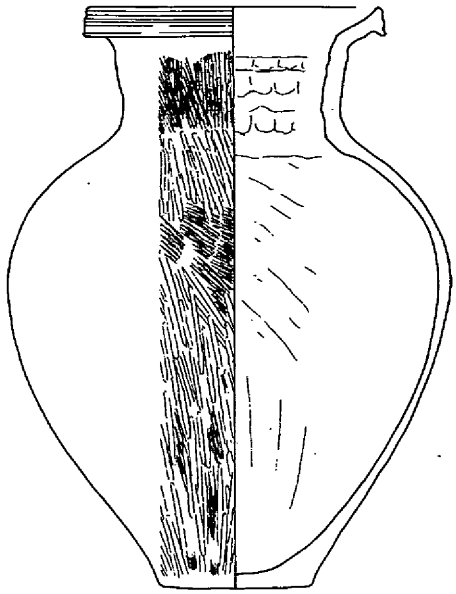
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
451	弥生土器	壺	21.9			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	口縁部に鋸歯文　頸部沈線は螺旋状と単線　肩部に刺突文　胴部上半に穿孔
452	弥生土器	壺		10.9		良好	7.5YR5/4(にぶい褐)	砂粒(多)	頸部沈線は単線　底部に木葉痕
453	弥生土器	壺	17.4			良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	口縁部に凹線
454	弥生土器	壺	19.2	9.4	34.2	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は２本１対の螺旋　肩部に刺突文
455	弥生土器	壺	(17.7)	7.3	30.5	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は単線・刺突文

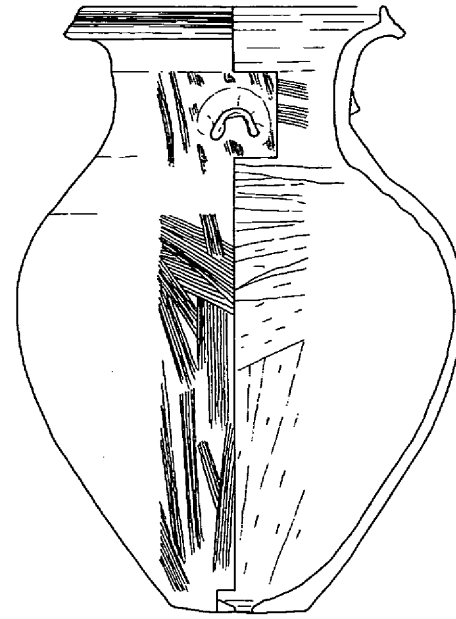


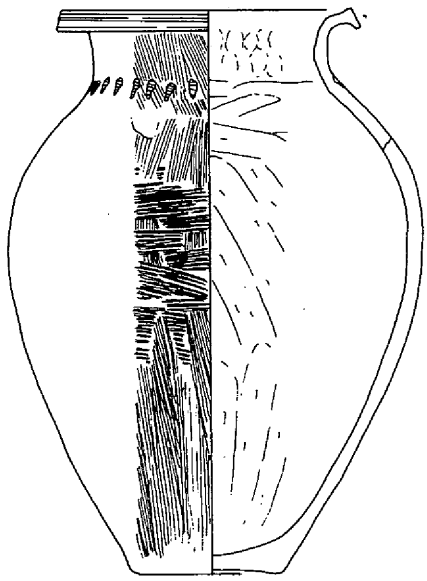
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
456	弥生土器	壺	15.8	9.9	37.0	良好	7.5YR4/4(褐)	砂粒	口縁部に凹線　頸部に凹線４条　肩部に刺突文　胴部中位に穿孔２カ所（内からと外から）　口縁部～頸部に漆による補修あり
457	弥生土器	壺	12.0	6.0	18.7	良好	5Y7/1(灰白)	砂粒	頸部沈線は螺旋　肩部に刺痕
458	弥生土器	壺	18.4	13.9	42.6～42.8	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は単線　肩部に押圧の凸帯　胴部下半に穿孔
459	弥生土器	壺	19.5			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒(多)	口縁部と頸部に線刻　頸部沈線は単線？　肩部に刺突文

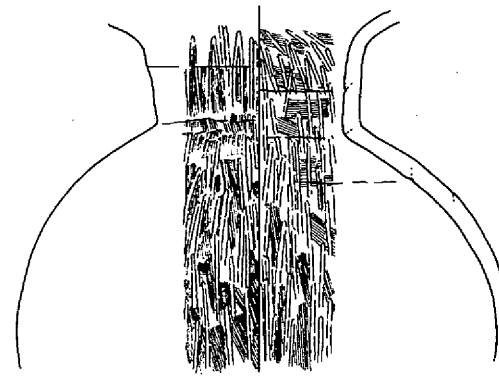


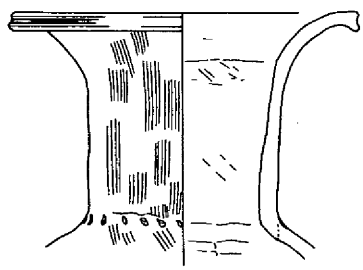
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
460	弥生土器	壺	22.1	10.9	37.6	良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は螺旋・貝殻押圧　胴部下半に敲打痕　胴部に篦目痕
461	弥生土器	壺	14.9			良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	口縁部に凹線　頸部沈線は螺旋　肩部に刺突文
462	弥生土器	壺	16.7			良好	5Y7/2(灰白)	砂粒	口縁部に凹線　口唇部に凹部　頸部沈線は螺旋　肩部に刺突文
463	弥生土器	壺	(14.0)			良好	10YR6/3.5(にぶい黄橙)	砂粒	頸部凹線は沈線状
464	弥生土器	壺	20.2			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒(少)	頸部沈線は2本1対の螺旋　肩部に刺突文

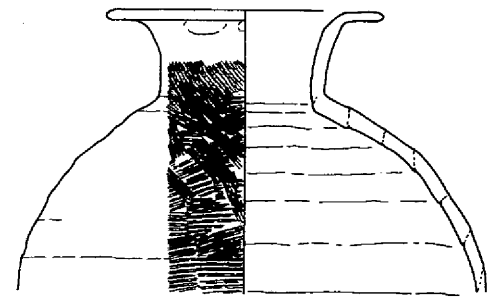

465


466

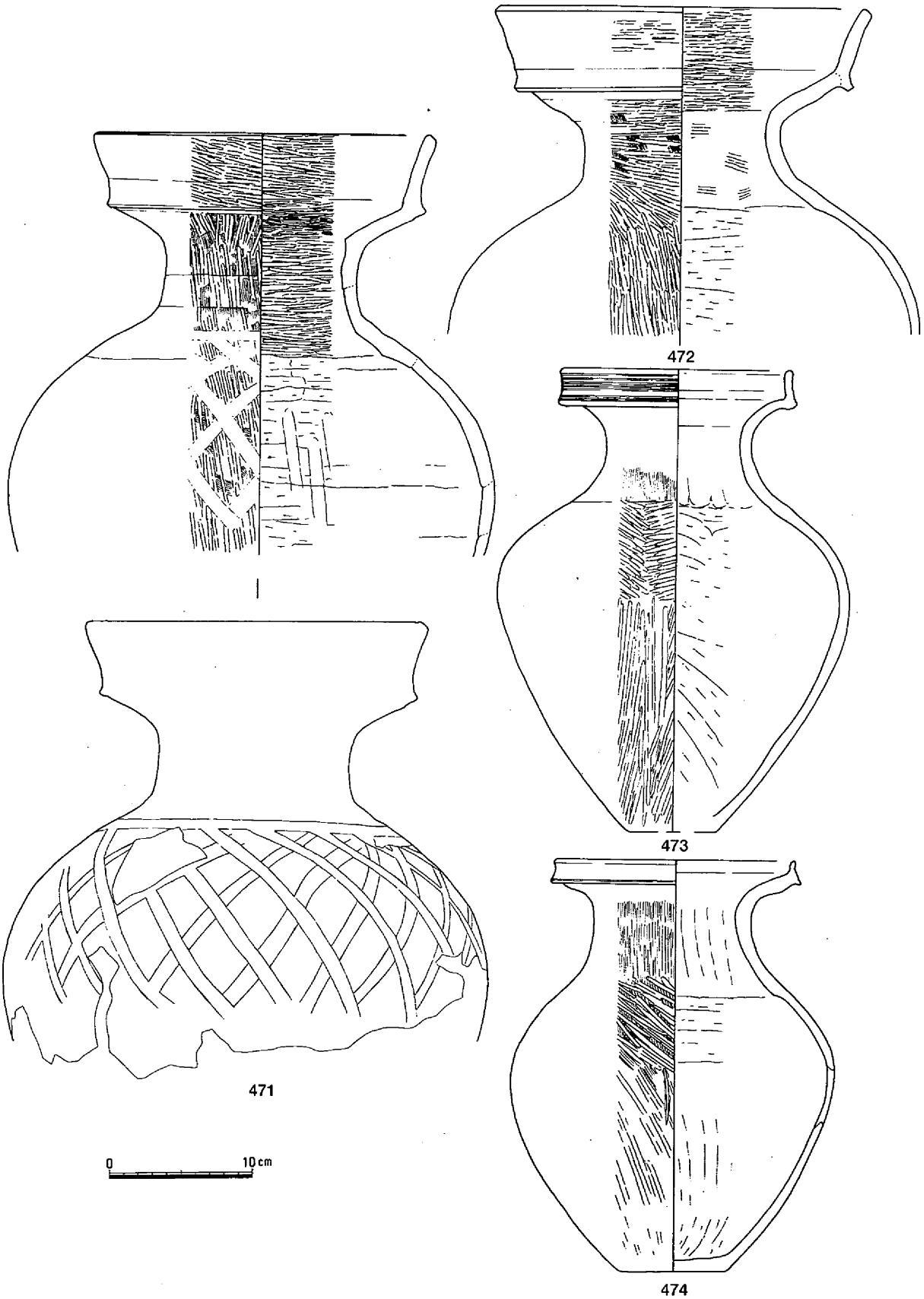

467


468

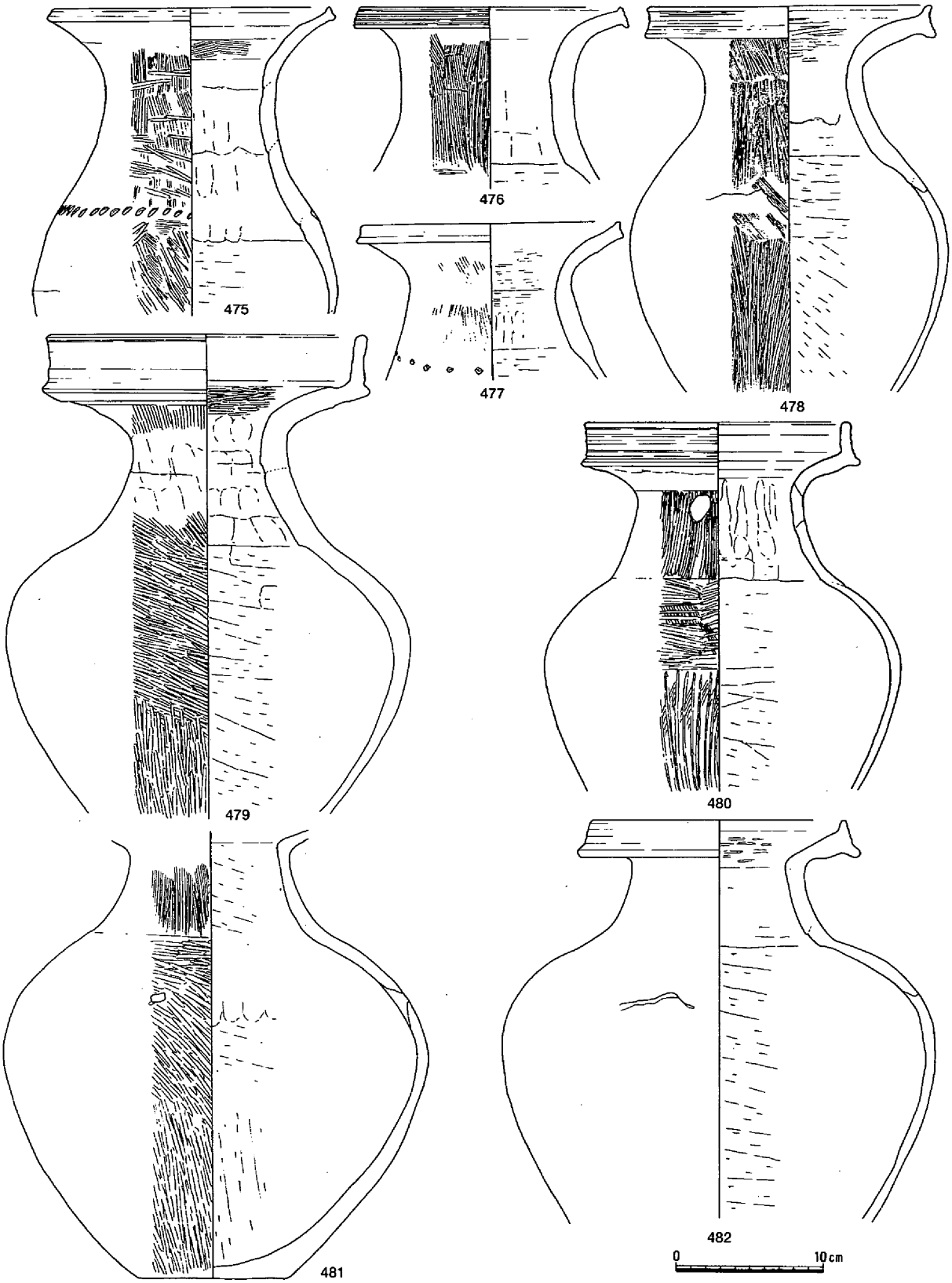

469


470

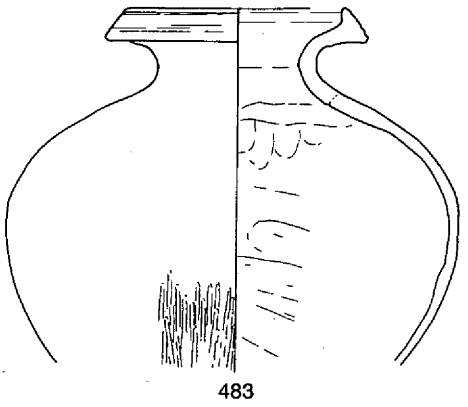
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
465	弥生土器	壺	15.4	7.9	30.9	良好	2.5Y7/4(浅黄)	砂粒(少)	口縁部に凹線
466	弥生土器	壺	16.0	7.2	32.2	良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線　頸部に把手　底部に穿孔　口縁部～底部にかけて煤付着
467	弥生土器	壺	18.2	8.0	28.0	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒(少)	口縁部に凹線　肩部に刺突文　肩部に穿孔
468	弥生土器	壺				良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	肩部に文様風にハケメの工具痕　胴部中位に煤付着
469	弥生土器	壺	18.1			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	口縁部に凹線　肩部に刺突文
470	弥生土器	壺	13.7			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	タタキ　輪積み痕を残す

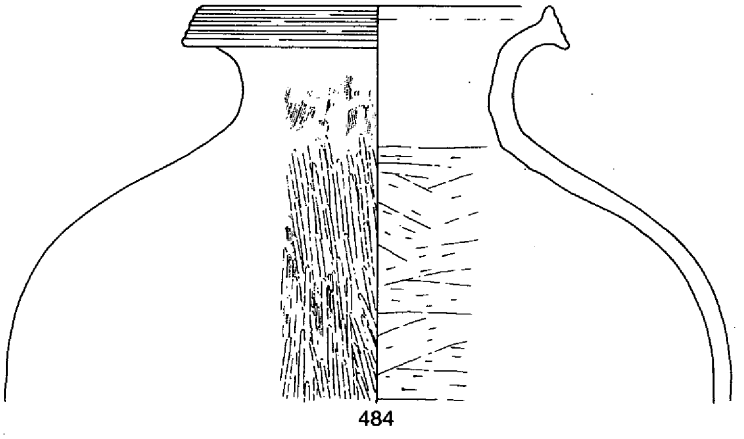


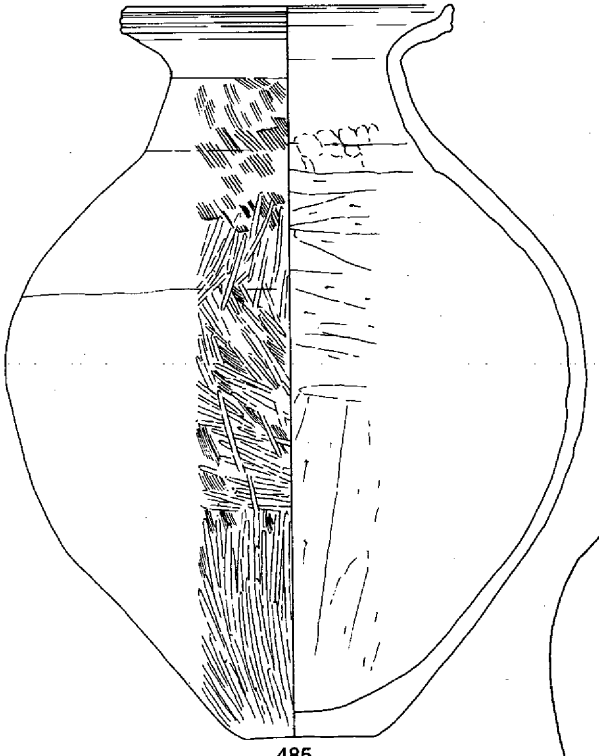
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
471	弥生土器	壺	22.7			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	胴部に暗文風の格子ヘラミガキ
472	弥生土器	壺	25.2			良好	5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	
473	弥生土器	壺	15.8	(6.2)	32.3	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線
474	弥生土器	壺	16.4	7.4	28.8	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	胴部中位に細長い穿孔

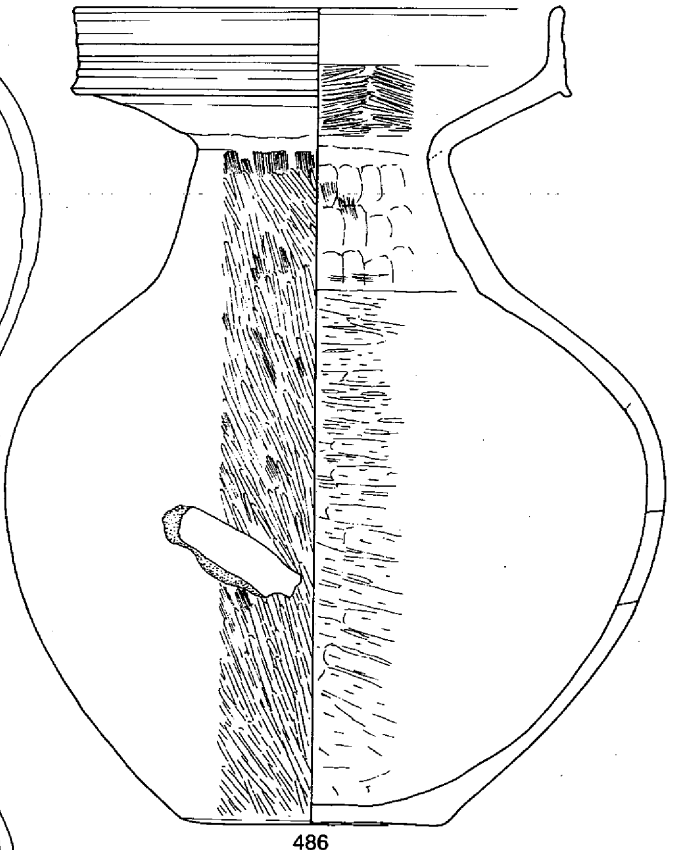


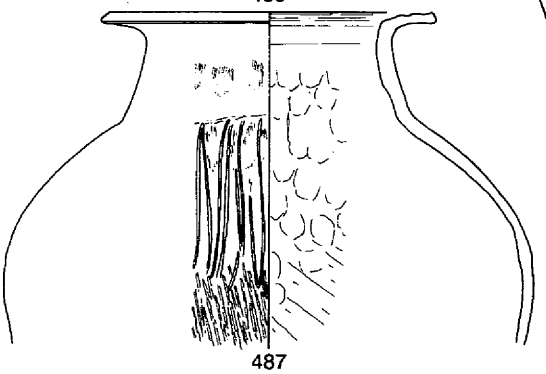
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
475	弥生土器	壺	18.2			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒(少)	口縁部ナデによる凹部　肩部に刺突文
476	弥生土器	壺	17.3			良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線
477	弥生土器	壺	17.0			良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒(少)	肩部に刺突文
478	弥生土器	壺	19.1			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	胴部上半に穿孔　口縁部と胴部に煤付着
479	弥生土器	壺	21.0			良好	10YR7/1(灰白)	砂粒	
480	弥生土器	壺	17.5			良好	2.5Y5.5/1(黄灰)	砂粒	口縁部に凹線　頸部に穿孔
481	弥生土器	壺		10.0		良好	7.5YR6/2(灰褐)	砂粒	胴部に穿孔
482	弥生土器	壺	17.0			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	肩部外面から穿孔

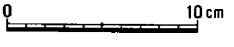

483


484

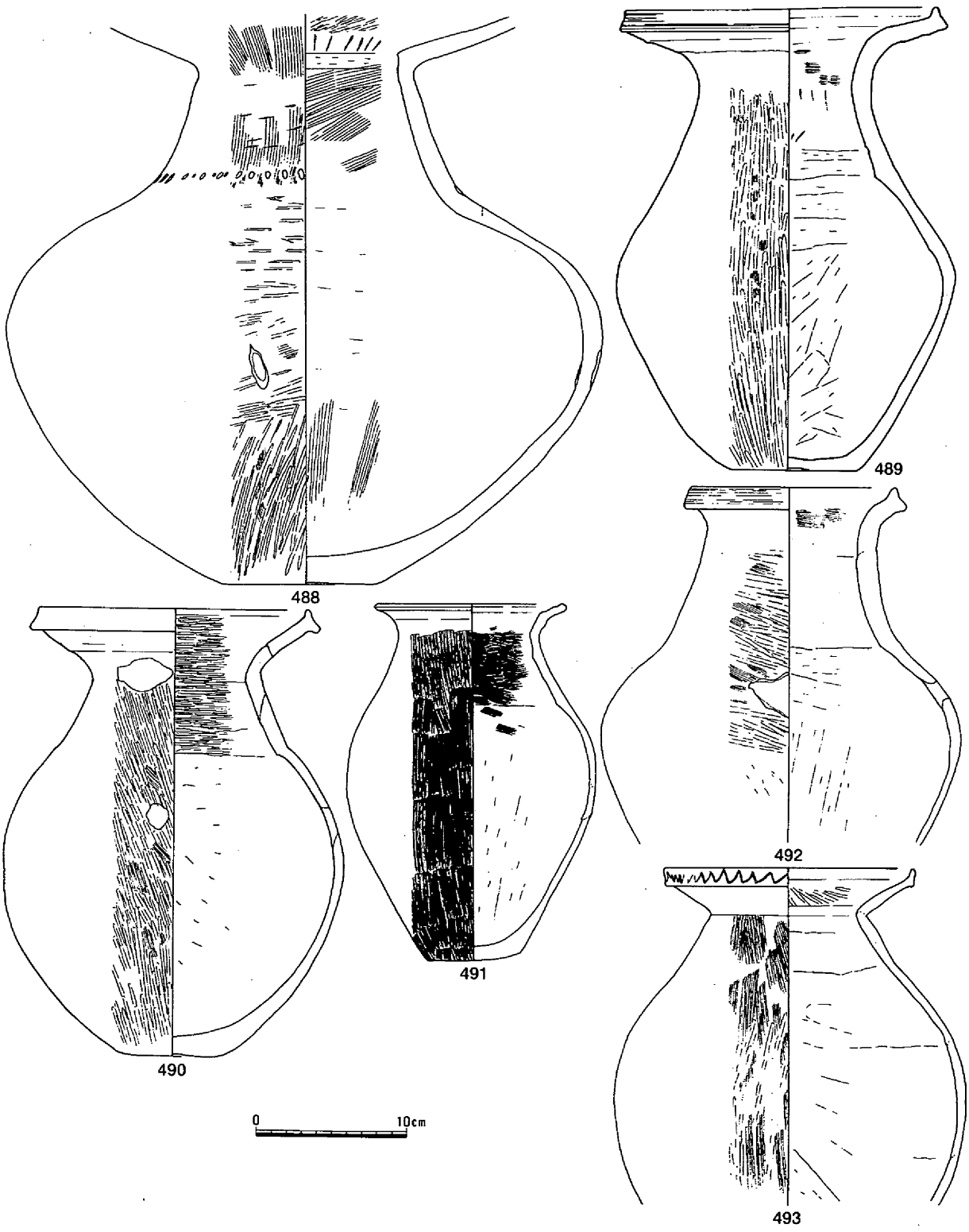

485


486

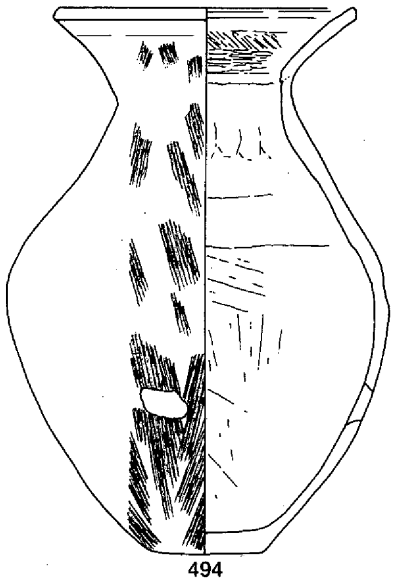

487

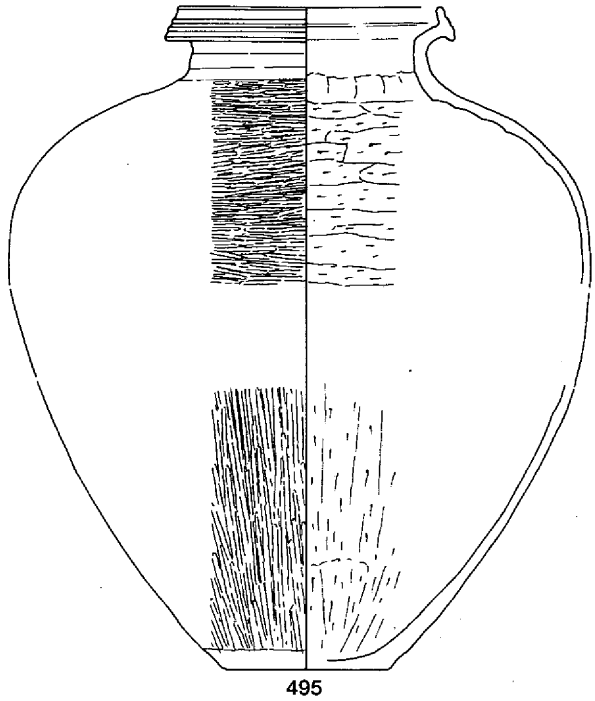


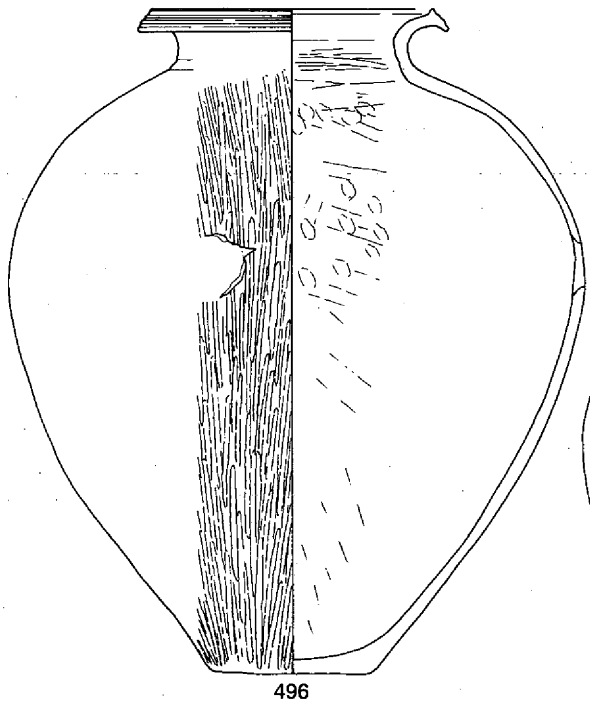
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
483	弥生土器	壺	11.3			良好	10YR6/4(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線
484	弥生土器	壺	18.0			良好	10YR6/6(明黄褐)	砂粒(多)	口縁部に凹線
485	弥生土器	壺	17.2	6.0	38.7	良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線
486	弥生土器	壺	25.5	13.9	43.4	良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	胴部下半に穿孔　二次焼成による赤色変化
487	弥生土器	壺	17.0			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	頸部から暗文風ヘラミガキ

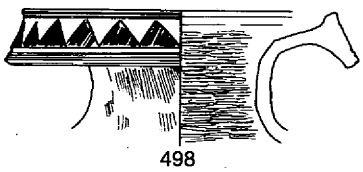


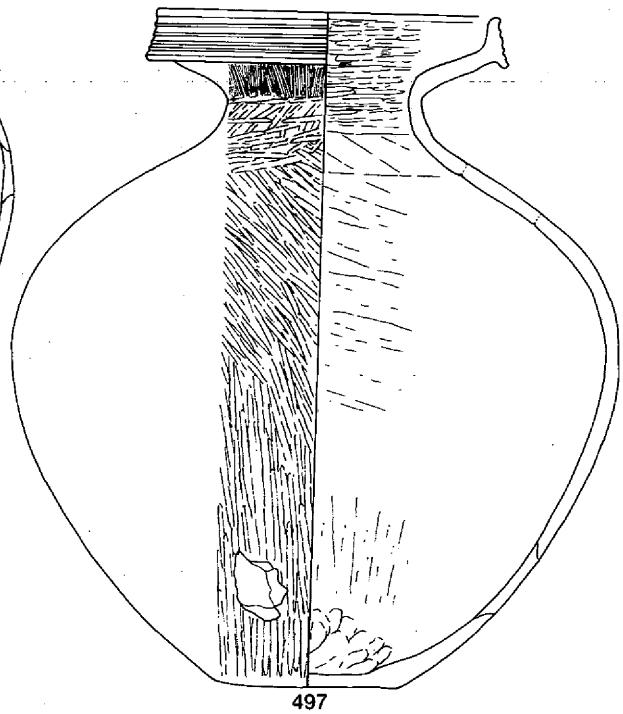
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
488	弥生土器	壺		10.7		良好	10Y R6/2(灰黄褐)	砂粒	肩部に刺突文　胴部中位に敲打痕
489	弥生土器	壺	20.8	8.5	30.65～31.1	良好	2.5Y8/2(灰白)	砂粒	口縁部に凹線
490	弥生土器	壺	17.6	6.8	29.8	良好	7.5Y R7/4(にぶい橙)	砂粒	頸部と胴部に穿孔
491	弥生土器	壺	12.0	6.0	23.8	良好	10Y R8/2(灰白)	砂粒	胴部中位に敲打痕　底部使い込みで磨滅
492	弥生土器	壺	13.6			良好	10Y R7/2(にぶい黄橙)	砂粒	肩部に穿孔
493	弥生土器	壺	16.7			良好	2.5Y6/3(にぶい黄)	砂粒(少)	口縁部に櫛描文

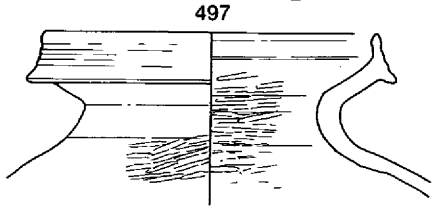

494


495


496

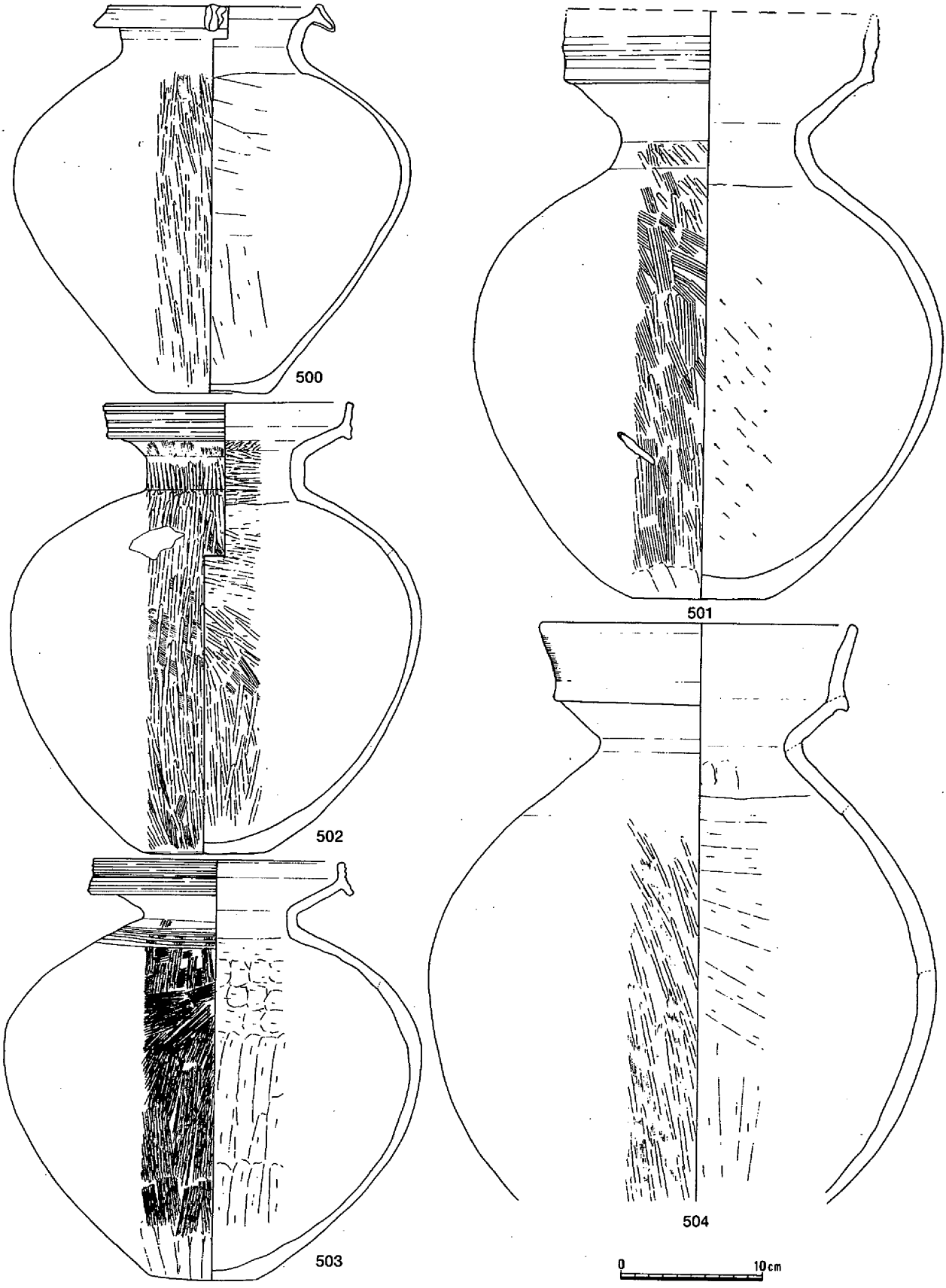

498


497

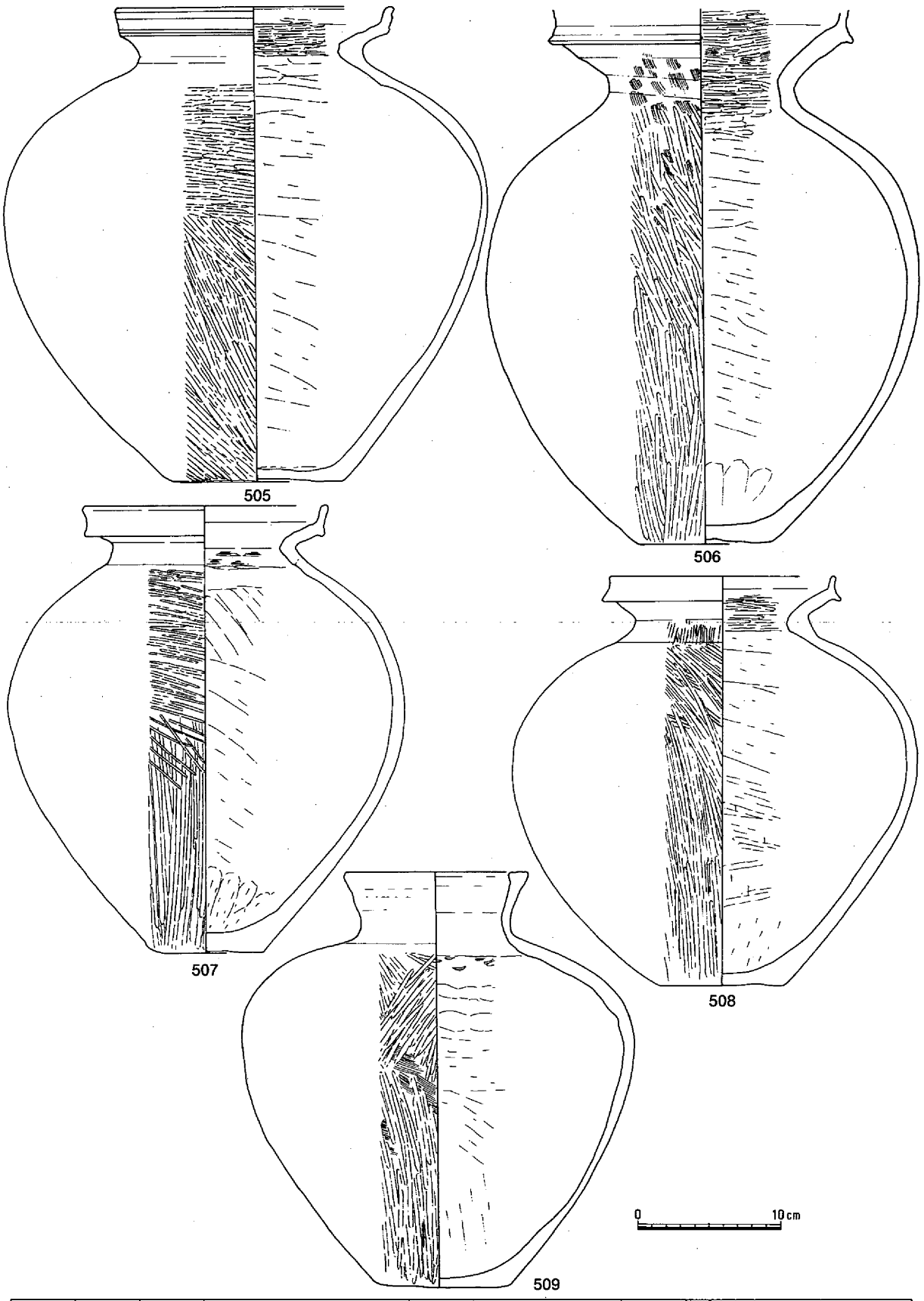

499

0　10cm

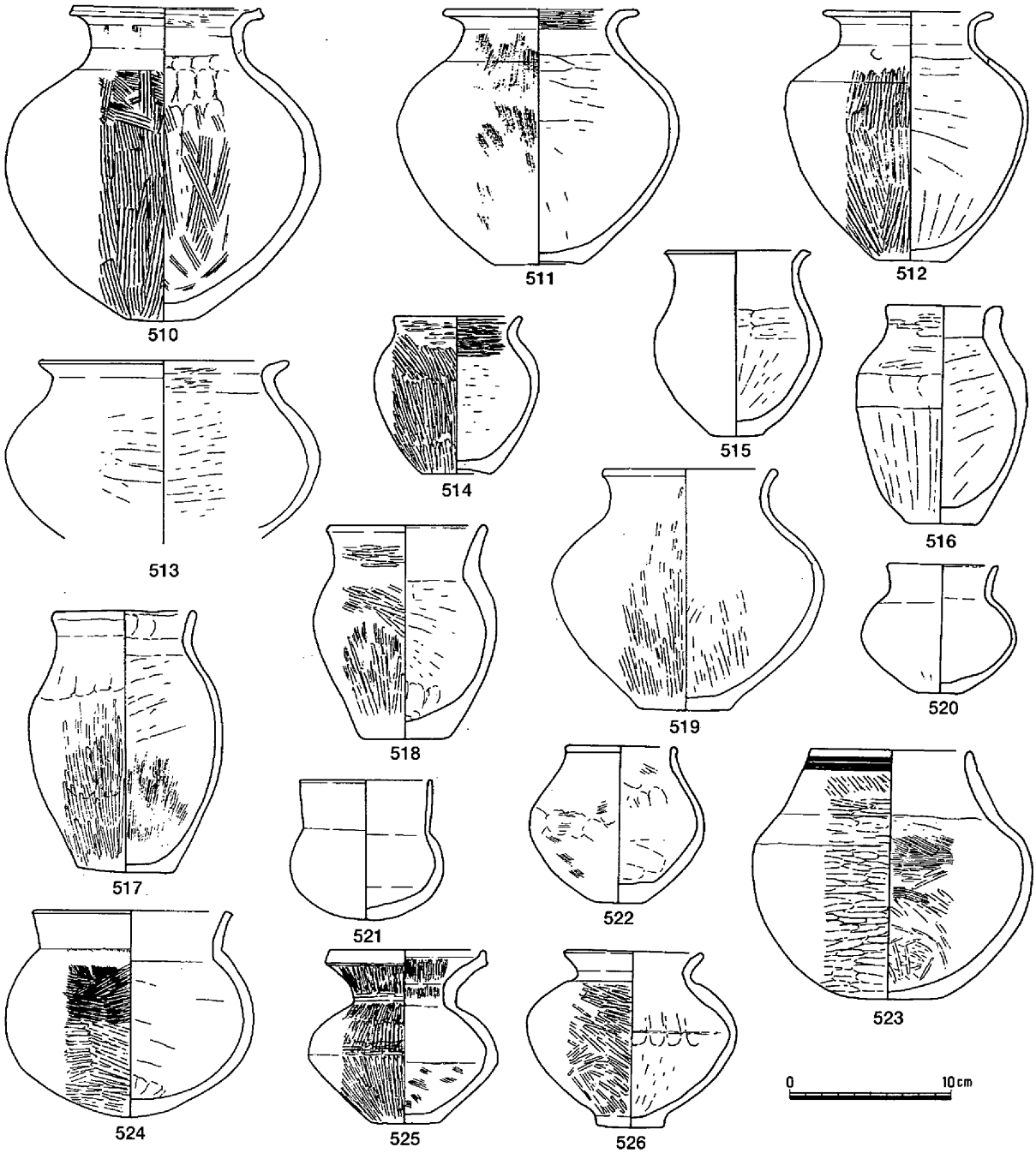
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
494	弥生土器	壺	15.5	6.3	28.9	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒(多)	胴部下半に穿孔
495	弥生土器	壺	15.8			良好	N6/(灰)	精良	口縁部に凹線　頸部に凹線
496	弥生土器	壺	14.8	8.5	35.5	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒(少)	口縁部に凹線　胴部中位に穿孔
497	弥生土器	壺	17.6	9.4	36.1	良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線　胴部下半に穿孔
498	弥生土器	壺	16.3			良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	口縁部に沈線と鋸歯文
499	弥生土器	壺	17.2			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	



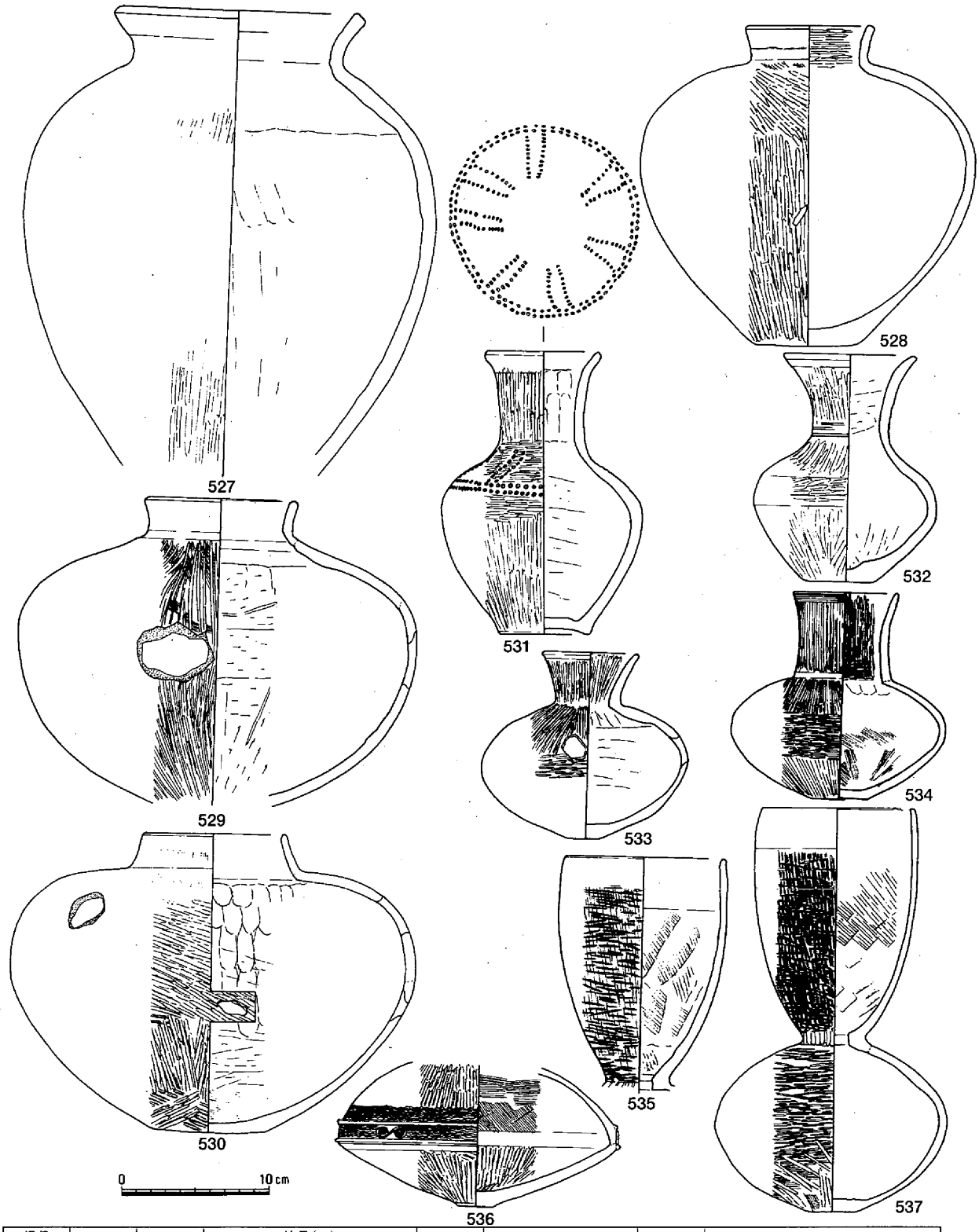
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
500	弥生土器	壺	14.2	8.1	27.3	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	口縁部浮文1カ所
501	弥生土器	壺	(21.8)		(41.4)	良好	7.5YR7/2(明褐灰)	砂粒	口縁部に凹線　胴部下半に穿孔
502	弥生土器	壺	17.0	8.7	31.8	良好	5Y7/1(灰白)	砂粒	口縁部に凹線　口縁端に凹部　肩部に穿孔
503	弥生土器	壺	17.2	7.4	29.7	良好	10YR6/1(褐灰)	砂粒	口縁部に凹線　肩部暗文風の沈線
504	弥生土器	壺	22.2			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒(少)	外面ハケ後ヘラミガキ



掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
505	弥生土器	壺	19.0	12.0	33.5	良好	10Y R 7/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線
506	弥生土器	壺		9.4		良好	10Y R 7/1(灰白)	砂粒	
507	弥生土器	壺	16.8	8.0	31.5	良好	10Y R 6/1(褐灰)	砂粒	底面二次的に火を受けている
508	弥生土器	壺	15.6	8.6	28.9	良好	2.5Y 7/3(浅黄)	砂粒	
509	弥生土器	壺	12.8	9.3	28.8	良好	10Y R 7/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部端面に凹線



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
510	弥生土器	壺	11.6	4.3	19.5	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
511	弥生土器	壺	12.1	5.5	15.9	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒(少)	タタキ　内外面全体に煤付着
512	弥生土器	壺	(10.6)	4.4	15.6	良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒(少)	肩部に穿孔　肩部～底部に煤付着
513	弥生土器	壺	15.4			良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	砂粒	
514	弥生土器	壺	7.8	4.3(4.0～4.3)	9.8	良好	2.5Y7/4(浅黄)	砂粒	
515	弥生土器	壺	8.2	3.2	11.6	良好	7.5YR4/6(褐)	砂粒(多)	
516	弥生土器	壺	7.0	4.4	13.6	良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒(多)	
517	弥生土器	壺	8.4	5.9	16.3	良好	10YR5/4(にぶい黄橙)	砂粒	内面肩部～底部に煤付着
518	弥生土器	壺	9.3	5.3	13.3	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	砂粒	
519	弥生土器	壺	10.3	5.5	15.1	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒(少)	内面丁寧なヘラケズリ
520	弥生土器	壺	6.8	3.1	8.0	良好	10YR6/4(にぶい黄橙)	砂粒	鉄分付着で調整不詳
521	弥生土器？	壺	7.8		8.8	良好	10YR5/3(にぶい黄橙)	砂粒	
522	弥生土器	壺	6.6	3.3	9.8	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	表面剥離
523	弥生土器	壺	9.8	6.9	15.5	良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	口縁部に沈線
524	弥生土器	壺	11.5(11.3～11.5)		12.9	良好	N3/(暗灰)	砂粒	外面に煤付着　内面胴部中位～底部にお焦げ
525	弥生土器	壺	9.4	4.0	10.8	良好	7.5YR7/6(橙)	砂粒	
526	弥生土器	壺	8.2	4.2	10.9	良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	



掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
527	弥生土器	壺	16.0			良好	10YR4/4(褐)	砂粒	口縁部端面凹部
528	弥生土器	壺	8.7	6.8	21.7	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	胴部中位に敲打痕
529	弥生土器	壺	(9.8)			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	胴部に穿孔
530	弥生土器	壺	9.3	7.9	20.0	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	肩部と胴部中位に穿孔
531	弥生土器	壺	7.4	5.6	19.0	良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	肩部に竹管文凝2列(1列8～11個)7組・横2列
532	弥生土器	壺	8.8	4.7	15.4	良好	2.5Y6/3(にぶい黄)	砂粒(少)	頸部に沈線
533	弥生土器	壺	6.2	2.4	12.6	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	胴部中位に穿孔
534	弥生土器	直口壺	6.9	3.8	14.0	良好	10YR8/3(浅黄橙)	砂粒	口縁部に沈線(内外)
535	弥生土器	直口壺	10.6			良好	5YR7/6(橙)	水漉粘土風	
536	弥生土器	直口壺		2.4		良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	凸帯文・S字の渦巻き状浮文6個・波状文
537	弥生土器	直口壺	10.1	3.2	27.2	良好	5YR7/6(橙)	砂粒	

出土遺物

376～447は、頸部に沈線を施文する長頸壺で、376～414は頸部が湾曲を呈するものである。376は外反する口縁部の器壁は厚さを増し、端部で内傾して張り出す。底部は丸みを持ち、ナデによる調整が認められる。内面調整は頸部がユビナデ、肩部にヨコヘラケズリ、以下はナナメのヘラケズリであるが、その後にナデを施している。377の口縁部凹線は、一部3本から4本になる部分が認められる。外面調整はハケの後ヘラミガキで胴部最大径部分にはヨコヘラミガキを施す。内面は頸部がユビナデ、肩部から胴下半にヨコヘラケズリで以下タテヘラケズリを施す。底部はやや丸みが認められる。378は口縁端部を内傾して張り出す。外面調整は肩から胴部下半にかけヨコヘラミガキ、以下は斜めのヘラミガキを施す。内面は胴上半までユビナデで口縁部近くはヨコハケが行われる。胴部最大径部分はヨコヘラケズリ、以下はタテヘラケズリが施される。底部はヘラミガキされ、丸みを有する。胴下半側に外側からの穿孔が行われる。379の口縁端部は内傾して肥厚させ、頸部沈線は磨滅のため不明瞭である。外面調整は胴上半までタテヘラミガキ、内面は頸部にユビナデ、肩部から胴下半はヨコヘラケズリ、以下はタテヘラケズリが認められる。肩部には外側からの穿孔が行われる。380は口縁端部を内傾させ拡張させるが、下方の張り出しが大きい。外面調整はハケが認められ、内面頸部はユビナデ、肩部から胴下半にかけヨコヘラケズリ、以下はタテヘラケズリが施される。381は口縁端部を内傾させ拡張する。外面調整はタタキの後タテのヘラミガキ、内面は頸部中ほどから胴部中ほどにかけてヘラケズリの後ナデ、以下はタテヘラケズリとナデが施される。穿孔は肩部と胴部中ほどに2ヵ所、外からのものが認められる。底部は、上げ底となる。382は口縁端部を内傾させて拡張し、端面に3列3段の竹管文が5ヵ所施文されている。外面調整は肩部から胴下半にナナメ、以下はタテのヘラミガキを施す。内面は口縁屈曲部にヨコヘラミガキ、頸部にユビナデ、肩部から胴部中ほどにかけヨコヘラケズリ、以下はタテヘラケズリを施す。穿孔は、胴部下半の4ヵ所に外からのものが認められる。383は口縁部を水平に開き、端部を内傾させ拡張する。外面調整はタテハケの後、ナナメからタテのヘラミガキを施す。内面は口縁部ヨコナデ、頸部が板状工具のナデ、頸部から胴下半にかけヨコヘラケズリで以下はナナメヘラケズリを施す。底部は、上げ底となる。穿孔はいずれも外側からによるもので肩部に小さいものが、さらに胴下半から底部にかけて大きいものが認められる。384は口縁端部を拡張し、退化凹線を施文する。外面調整は鉄分付着のため不詳であるがハケが認められる。内面は肩部から胴中ほどにかけヨコヘラケズリ、以下はタテのヘラケズリが認められる。穿孔はされていないが、そのための敲打痕が肩部に2ヵ所残されている。386は口縁部が水平に開き、端部を肥厚させる。外面調整は磨滅のため不明、内面は肩部までタテヘラミガキで一部ヨコが認められる。肩部には押圧痕が、以下はヨコヘラケズリが施される。387は口縁端部を外方に肥厚させ、端に刺突文を施す。外面調整はナナメハケの後ヨコヘラミガキを施す。内面は頸部に粗いハケ、肩部には押圧が認められる。388は頸部から外方へ開く口縁で、端部を上下に垂直気味に拡張する。外面調整はナナメヘラミガキ、内面頸部はナデ、頸部下半から胴部にかけてナナメヘラケズリを行う。389は口縁端部を肥厚させる。口縁部沈線は2本1対で施文する。外面調整は胴部最大径から肩部にかけてヨコ、以下はタテのヘラミガキを行う。390の外面調整は胴部にヨコヘラミガキ、内面口縁部はヨコハケ、頸部は押圧、肩部から以下はヨコヘラケズリを施す。391は口縁部が短く外反し、端部をナナメに拡張する。外面調整はナナメの細かいハケの後ヨコヘラミガキ、内面は口縁部にヨコヘラミガキ、頸部に押圧の後タテヘラミガキ、それ以下はヨコヘラケズリを施す。392は口縁部が外反し、端部を肥厚する。外面調整は

肩部にタテヘラミガキ、内面は口縁部にヨコヘラミガキで、以下はヨコヘラケズリを施す。393は口縁部を外反し、端部を内傾して拡張する。外面調整は肩部にヨコヘラミガキ、内面は口縁部にヨコヘラミガキ、頸部にナナメで肩部からはヨコヘラケズリを施す。394は口縁部は外反し、端部を内傾して拡張する。外面調整は肩部にナナメヘラケズリ、内面は口縁部にヨコヘラミガキ、頸部はユビと工具によるナデ、肩部からはヨコヘラケズリを施す。395の外面口縁屈曲部に認められるのは、ヘラミガキを文様風に付すものである。外面調整はタテヘラミガキ、内面は口縁から頸部中ほどまでヨコ、肩部にかけてはタテヘラミガキで、以下はヨコヘラケズリを施す。396の口縁端のキザミは全周しない。2個1対の孔は、対するところの2ヵ所に認められる。外面調整はヨコとナナメヘラミガキ、内面は口縁部にヨコヘラミガキ、頸部にユビオサエとナデで上半にタテヘラミガキ、肩部以下はヨコヘラケズリを施す。397は口縁部は頸部から開き、端部を下方に拡張する。外面調整は平行タタキの後ナナメヘラミガキを施す。内面は口縁部にヨコヘラケズリ、頸部に押圧とナデ、肩部以下はヨコヘラケズリを施す。398は口縁端部を垂直近く拡張する。外面調整は肩部にヨコヘラミガキ、内面はヨコハケの後口縁部にヨコヘラミガキで頸部から肩部にかけてユビオサエ、以下はヨコヘラケズリを施す。穿孔は頸部下半に、外側から行われる。399は頸部から大きく外反する口縁部の端部を内傾して拡張する。外面調整はタテヘラミガキ、内面は口縁部にヨコヘラミガキ、頸部から肩部にかけヨコハケで頸部下半からヨコヘラケズリを施す。400は口縁端部を下方に拡張する。内面調整は頸部中ほどまでヨコヘラミガキ、肩部までは押圧とナデで、以下はヨコヘラケズリを施す。401は頸部から水平方向に屈曲した口縁部で、端部を内傾して拡張する。外面調整はハケの後タテヘラミガキ、内面は口縁部にヨコヘラミガキ、頸部から肩部にかけてナデアゲの後タテヘラミガキ、以下はヨコヘラケズリを施す。402は外面調整はヨコヘラミガキ、内面は口縁部にヨコヘラミガキ、頸部から肩部下半にかけてハケ後ナデアゲ、肩部から胴部にかけナナメヘラケズリを施す。403の外面調整は口縁部にヨコヘラミガキ、肩部にタテヘラミガキ、内面は口縁部から頸部にかけてヨコヘラミガキ、頸部にナデアゲの後タテヘラミガキで、以下はヨコヘラケズリを施す。404は口縁端部を上方に拡張する。外面調整はタテの後ヨコヘラミガキ、内面は口縁部にヨコヘラミガキ、頸部から肩部にかけてナデで、以下はヨコヘラケズリを施す。405は頸部から強く外方へ開き、端部を垂直に拡張する。外面調整はナナメヘラミガキ、内面は口縁部にヨコヘラミガキ、頸部から肩部にかけてユビナデで、以下はヨコヘラケズリを施す。穿孔は、胴部に外からのものが認められる。406は口縁端部に粘土を足して拡張する。内面調整は、口縁屈曲部にヨコヘラミガキを施す。407は口縁部を短く屈曲し、端部を斜め下方に拡張する。内面調整は口縁部にヨコヘラミガキ、頸部にタテヘラミガキで、以下はヨコヘラケズリである。内面に焼成前の補修痕が認められる。408の外面調整はタテヘラミガキ、内面は頸部にユビナデで、以下はナナメヘラケズリを施す。胴下半の穿孔は外側から敲いている。409の外面調整は胴下半までヨコ、以下はタテのヘラミガキである。底部には木葉痕が認められ、ヘラミガキを施す。内面は口縁部にヨコヘラミガキ、頸部はハケ、タテヘラミガキの後押圧、胴下半までヨコで以下はナナメのヘラケズリを施す。410の頸部沈線は肩部付近が単線で、それより上は螺旋となる。外面調整はタテ、胴最大径付近までその後ヨコのヘラミガキを施す。内面は、口縁部から頸部にかけヨコヘラミガキ、頸部にナデで以下はヨコヘラケズリを施す。411の外面調整はタテハケ後タテヘラミガキを施す。内面は頸部にヨコハケ、肩部から胴下半にヨコで以下はタテのヘラケズリを施す。胴下半の穿孔は外側から敲いている。412の外面調整は胴下半までヨコで、以下はタテのヘラミガキを施す。内面は口縁屈

曲部にヨコヘラミガキ、頸部にシボリ痕、以下は方向は不明であるがヘラケズリを認める。413の頸部沈線内容は、不詳である。外面調整はヨコヘラミガキ、内面は頸部にヨコヘラミガキ、胴上半にナデで以下はナナメヘラケズリを施す。胴部には線刻がなされているが、その内容は不詳である。414の外面調整はナナメヘラミガキ、内面は口縁部にヨコナデ、頸部に押圧とナデアゲ、肩部以下はヨコヘラケズリを施す。穿孔は外側から敲かれている。口縁部内面には「記号文」と見られる竜の線刻が描かれている。

415～430は頸部が内傾あるいは直線的になるものである。415の頸部沈線の施文は螺旋であるが、数条ずつ施す。外面調整はハケの後タテヘラミガキ、内面は頸部中ほどまでヨコヘラミガキでハケも認められる。以下は不詳であるが、ヘラケズリとナデが認められる。穿孔は外側から敲かれている。416の口縁部は短く外反し端部を肥厚させて下方に拡張する。外面調整はタテハケ、内面は口縁部にヨコハケ、頸部に押圧とナデ、肩部以下はヨコヘラケズリを施す。417の口縁端面には、6個の鋸歯文を施文する。外面調整はナナメヘラミガキ、内面は口縁部にヨコナデ、頸部に押圧とハケ、以下はヨコヘラケズリを施す。418の頸部沈線は、2本対の螺旋である。外面調整はハケの後ヨコヘラミガキ、内面は口縁部にヨコナデ、頸部に押圧とナデで、肩部以下はヨコヘラケズリを施す。419は頸部から短く開き気味の口縁部の端部をナナメ下方に拡張する。内面調整はタテハケの後、ヨコとナナメのヘラミガキを施す。420の口縁端面には、条線が認められる。外面調整は頸部から胴部にかけてタテハケ後タテヘラミガキ、内面は口縁から頸部にかけヨコハケ、肩部にヨコヘラケズリ以下はタテヘラケズリを施す。421の外面調整は胴部最大径上半部分に連続した平面が認められていることから、無文のタタキを施す。内面はタテヘラミガキ、頸部上半ヨコハケ、頸部にナデ、以下はヨコヘラミガキに近いケズリを施す。422の口縁端面には斜線充填の鋸歯文を施文する。外面調整はタテヘラミガキ、内面は口縁にヨコ、頸部上半にはナナメヘラミガキ、以下は押圧で肩部にはヨコヘラケズリを施す。423の口縁端は肥厚させる。424は頸部から短く開く口縁端が内傾して肥厚する。外面調整はタテハケの後タテヘラミガキ、内面は頸部上半にヨコ、頸部にはタテヘラミガキ、肩部から胴下半にヨコ、以下はタテヘラケズリを施す。穿孔は、胴下半に2ヵ所外から敲かれる。425の内面調整は口縁上半にヨコ、屈曲部までタテヘラミガキ、頸部にユビナデ、以下はヨコヘラケズリを施す。426の口縁端面下方に沈線が施文される。頸部沈線は最上段の1本は単線で、他は螺旋で施文されている。外面調整は胴部以下はタテヘラミガキ、内面は口縁にナナメヘラミガキ、頸部にナデ、以下はヨコからナナメヘラケズリを施す。穿孔は胴下半に、外側から敲かれる。427の頸部には充填鋸歯文の他に、「几」字状の文様を施文する。428の肩部には、アルカ属の貝殻腹縁の押圧を施文する。内面調整は口縁にヨコヘラミガキ、頸部にヨコハケ後ナデ、以下はヨコヘラケズリを施す。429の頸部沈線は、上の3本が単線で下方は螺旋で施文されている。内面調整は口縁にハケ後ヨコヘラミガキ、頸部にタテヘラミガキ、以下はヨコヘラケズリを施す。430は外面調整が板状工具でその条線がほとんど認められない。

431～447は、長い頸部が下方に開くものである。431の底部は、丸みを強く持つ。外面調整は幅広のヨコヘラミガキ、内面は口縁部にヨコヘラミガキ、頸部にヨコヘラケズリ、肩から胴上半にかけヨコ、以下はタテヘラケズリを施す。432の口縁はほぼ垂直に立ち上がり、底部は平底の鋭さを失う。外面調整はヨコからナナメの細かいハケで底部近くでタテヘラケズリを施す。内面は口縁にヨコヘラミガキ、頸部に押圧とナデ、以下はヨコで底部近くにナナメのヘラケズリを施す。433の外面調整はタテ後胴上半にはヨコヘラミガキ、内面は口縁にヨコヘラミガキ、頸部にナデアゲ、以下はナナメヘ

ラケズリを施す。穿孔は、胴下半に2ヵ所外側から敲かれる。434の口縁端は上方に摘みだし、底部は平底の鋭さを失う。頸部沈線は2本単位で単線として施文するが、不規則な沈線となる。外面調整は肩部にヨコハケ後ヨコヘラミガキ、以下はタテヘラミガキ、内面は頸部に押圧とナデ、肩から胴中ほどはヨコで以下はタテのヘラケズリを施す。穿孔は胴中ほどにあり、外側から敲かれる。435の口縁端はほぼ垂直に上下に拡張し、底部は上げ底ぎみとなる。外面調整は胴最大径までヨコで以下はタテのヘラミガキ、内面は口縁から頸部中ほどまでヨコヘラミガキ、肩部までナデ、以下はヨコで胴上半からはタテのヘラケズリを施す。436の口縁端は、斜め上方に拡張する。外面調整はタテハケ後タテヘラミガキで、胴中ほどから下半にかけさらにヨコヘラミガキを施す。内面は口縁にタテヘラミガキ、頸部にナデ、以下はヨコヘラケズリを施す。437の外面調整はタテヘラミガキ、内面は口縁にヨコハケ後ヨコヘラミガキ、頸部に押圧とナデ、肩部にヨコで以下はナナメのヘラケズリを施す。穿孔は、胴中ほどにあり、外から敲かれる。438の肩部には、アルカ属の貝殻腹縁の刺突文が施文される。外面調整はタテからナナメのハケ後タテヘラミガキ、内面は口縁屈曲部にハケの後ヨコヘラミガキ、頸部にナデ、以下はヨコヘラケズリを施す。439の内面調整は口縁にヨコヘラミガキ、頸部に細かいヨコハケ、以下はヨコヘラケズリを施す。440の内面調整は口縁から頸部中ほどにかけヨコヘラミガキ、下半は押圧とナデ、以下はヨコヘラケズリを施す。441の頸部沈線上に3本のタテ方向のヘラの沈線が認められる。外面調整はハケ後タテヘラミガキ、内面は頸部上半から肩部にかけ押圧とナデ、以下はヨコヘラケズリを施す。穿孔は胴中ほどにあり、外側から敲かれる。442の口縁内面の竹管文は、相対しての施文が認められる。外面調整はタテヘラミガキ、内面は屈曲部にヨコヘラミガキ、頸部中ほどまでナデ、以下はヨコヘラケズリを施す。443の外面調整はタテヘラミガキ、内面は口縁にヨコハケ後ヨコヘラミガキ、頸部にナデ、以下はヨコヘラケズリを施す。444の内面調整は屈曲部に押圧、頸部中ほどまでタテで肩部まではナナメ、それ以下はヨコのヘラケズリを施す。445の口縁端面に鋸歯文状のものが、4個施文される。外面調整はヨコとナナメのヘラミガキ、内面の口縁にヨコヘラミガキ、頸部に押圧とナデ、以下はヨコヘラケズリ後ナデを施す。446の外面調整はナナメハケ後ナナメのヘラミガキ、内面は口縁にヨコヘラミガキ、頸部にヨコヘラケズリ、頸部下半から胴上半にハケ、以下はナナメのヘラケズリを施す。447の外面調整は細かいタテハケ後タテヘラミガキ、内面は頸部のナデ、胴部のヘラケズリなどの調整の後ヨコヘラミガキを施す。穿孔は肩部にあり、外側から敲かれる。

448～464は、短い頸部を持つものである。448の頸部沈線は、雑な施文となる。外面調整は胴上半までヨコハケ後ヨコヘラミガキ、以下はタテハケ後タテヘラミガキ、内面は口縁部から頸部にヨコヘラミガキ、肩部から胴下半にナナメで、以下はタテのヘラケズリを施す。穿孔は底部近くに、外側から敲かれる。449は頸部が「ハ」の字状に開き、口縁端部は上方へ大きく拡張する。450の外面調整は口縁にヨコヘラミガキ、肩部にタテで胴中ほどにかけナナメそして底部にかけては粗いタテのハケを施す。内面は屈曲部から頸部にナデ後ヨコヘラミガキ、以下はヨコで胴上半からタテのヘラケズリを施す。胴部外面には、籠目痕が認められる。451の頸部沈線は上半が単線、下半が螺旋となる。外面調整は肩部にヨコとナナメで、以下は磨滅しているがタテのヘラミガキが認められる。内面は口縁部にヨコハケ後ヨコヘラミガキ、頸部はナデ、肩から胴中ほどにかけ押圧、以下はヨコヘラケズリを施す。452の頸部沈線は、暗文に近い内容の施文である。外面調整は底部までヨコヘラミガキ、内面の頸部はヨコハケ、胴中ほどまでヨコで、以下はナナメのヘラケズリを施す。453の頸部沈線は暗文風の内

容で、全周はしていない。外面調整はタテハケ後肩部からタテヘラミガキを施す。内面は口縁にヨコヘラミガキ、頸部に押圧とナデ、肩部にヨコヘラケズリ、以下はタテのハケを施す。454は曲線を描く頸部となる。外面調整は肩部にナナメ、胴最大径部分にヨコ、胴下半にかけタテそして底部近くでヨコのヘラミガキを施す。内面は口縁から頸部中ほどにかけヨコヘラミガキ、肩にかけナデ、以下はヨコヘラケズリを施す。455の外面調整はハケ後ナナメからタテのヘラミガキ、内面の肩部以下は、ナナメヘラケズリを施す。底部は鋭さを失う。口縁部には、吹きこぼれと思われる痕が認められる。456の外面調整はハケ後タテヘラミガキ、内面は肩部から胴下半にヨコ、以下はタテのヘラケズリを施す。穿孔は胴部に2ヵ所あり、外と内の両方から敲かれている。頸部の内外面には、焼成後に生じた亀裂を補修したと思われる漆が認められる。457の口縁は素縁で、端部近くをやや肥厚気味にする。外面調整は胴中ほどまでタテハケで胴最大径部分にヨコヘラミガキ、以下はタテヘラミガキを施す。内面は口縁から肩部にかけヨコヘラミガキ、以下はナナメヘラケズリ、底部はナデを施す。458の外面調整は胴部上半にタテ、中ほどにヨコ、以下はタテのヘラミガキを施す。内面は口縁から頸部下半にヨコヘラミガキ、胴中ほどまでヨコで以下はタテのヘラケズリを施す。穿孔は胴下半にあり、外から敲かれる。459の口縁端面と頸部に不規則な線刻が認められる。460の口縁部凹線は施文の後にナデを行い、凹線がつぶれる内容を示す。外面調整はナナメヘラミガキであるが、胴下半ではハケさらにヨコヘラミガキの後に施される。内面は頸部にヨコヘラミガキ、肩から胴部中ほどにかけヨコヘラケズリ、以下は比較的丁寧なヘラケズリを施す。穿孔のための敲打が胴部下半に認められるが、孔を開けることができずその痕が残されている。胴部には、籠目痕が残されている。461の内面調整は口縁から頸部にヨコヘラミガキ、以下はヨコヘラケズリを施す。462の内面調整は、口縁から頸部にヨコヘラミガキを施す。463は口縁端を外側に丸め、玉縁状の口縁を形成する。内面調整はナデを施す。464の口縁部は、条線が認められる。外面調整はタテヘラミガキ、内面は口縁から肩部にナデ、胴下半にヨコで以下はタテのヘラケズリを施す。

465～484は頸部に沈線の施文が無いものである。465は、内傾する頸部を形成する。外面調整は頸部にタテハケ、肩部にタテヘラミガキ、以下はナナメからタテのハケ後タテヘラミガキを施す。内面は頸部に押圧ナデ、肩から胴下半にヨコで以下はタテのヘラケズリを施す。466は頸部に把手状の粘土を付す。外面調整は粗いタテハケ、内面は頸部にヨコハケ、肩から胴中ほどにヨコで以下はタテのヘラケズリを施す。底部には、焼成後の穿孔がある。467の外面調整は頸部から胴上半にタテハケ、胴部中ほどに平行タタキ、以下はタテハケを施す。内面は頸部に押圧とナデ、肩部にヨコで以下はタテヘラケズリを施す。底部は、上げ底気味となる。468の外面調整は細かいタテハケ後タテヘラミガキ、内面は口縁部にヨコヘラミガキ、頸部から肩部にヨコで以下はタテのハケ、後タテヘラミガキを施す。469の外面調整は粗いタテハケ、内面は頸部にナデ、肩部にヨコヘラケズリを施す。470は外方に開く頸部を水平方向に屈曲させ口縁部を形成させるが、外面に口縁屈曲に伴う押圧をとどめる。外面調整は肩部から胴部にヨコとナナメのタタキ、後頸部中ほどから胴上半にハケを施す。内外の器面では、粘土の接合痕を顕著にとどめる。471の外面調整は口縁部にヨコヘラミガキ、頸部から胴部にタテ、ヨコのハケで後タテヘラミガキを施す。内面は口縁から肩部にヨコヘラミガキ、以下はヨコヘラケズリとユビナデを施す。文様は肩部から胴部に認められるが、確認時では籠目痕として判断していた。しかしながら、この部分の状態は色の変色ではなく、その交差箇所の砂粒の移動が認められることから、暗文風の籠目状の文様であることが実測図作成時において確認された。472の外面調整は頸

部にタテの粗いハケ後ヨコ、以下はナナメからタテのヘラミガキを施す。内面は口縁部にヨコヘラミガキ、頸部に粗いハケ、以下はヨコヘラケズリを施す。473の外面調整は頸部にタテハケ、胴部中ほどまでヨコ、以下はタテヘラミガキを施す。内面は頸部にナデ、胴部中ほどまでにヨコ、以下はナナメのヘラケズリを施す。474の外面調整は頸部から底部にかけてタテ、ナナメのハケ、後肩部以下にナナメヘラミガキ、内面は頸部にナデ、肩部から胴中ほどにヨコで以下はタテのヘラケズリを施す。穿孔は胴部中ほどに、外側から敲かれた長さ4.1cm、幅1.5cmのものが認められる。この痕跡から、穿孔に用いられた道具が細みのものであることが推測される。475の外面調整はタテハケ後頸部にまばらにヨコ、胴部にタテのヘラミガキ、内面は口縁にヨコハケ、頸部に押圧とナデで以下はヨコヘラケズリを施す。476の外面調整は頸部にタテハケ、肩にヨコヘラミガキ、内面は頸部にナデで以下はヨコヘラケズリを施す。477の外面調整は頸部にタテハケ、内面は口縁部から頸部にヨコヘラミガキ、頸部中ほどに押圧で以下はヨコヘラケズリを施す。478は口縁端の拡張は、部分的ではあるが粘土を足している。外面調整は頸部から胴下半にタテハケ、内面は口縁にヨコハケ後ヨコヘラミガキ、肩部から胴中ほどはヨコで以下はナナメのヘラケズリを施す。穿孔は胴上半にあり、外側から敲かれる。479は口縁端部を上方に拡張し、端面にはナデによる条線が認められる。外面調整は頸部に面取り状の面を形成、肩部から胴下半にナナメで以下はタテのヘラミガキを施す。内面は口縁にヨコヘラミガキ、頸部に押圧とナデ、以下はヨコヘラケズリを施す。480の口縁端面には、ヨコナデによる凹部が認められる。外面調整は頸部にタテヘラミガキ、胴部中ほどにナナメハケ後ヨコヘラミガキ、以下はナナメハケ後タテヘラミガキを施す。内面は頸部にシボリ痕とナデ、以下はヨコヘラケズリを施す。穿孔は頸部上半に外から敲き、丸い孔を作る。481の外面調整は頸部にタテハケ、肩部にヨコ、胴下半にナナメで以下はタテのヘラミガキを施す。内面は頸部にヨコヘラケズリ、胴部上半に押圧とナデ、以下はタテヘラケズリを施す。穿孔は胴部上半に外から敲き、小さい孔を作る。482は頸部から外方に屈曲する口縁を肥厚させ、端部を張り出す。内面調整は口縁部から頸部にヨコヘラミガキ、以下はヨコヘラケズリを施す。穿孔は胴最大径部分にあり、外側から敲かれる。483の外面調整は胴下半にタテヘラミガキ、内面は肩部に押圧とナデ、以下はヨコヘラケズリを施す。484の外面調整は頸部から胴部に細かいタテハケ、内面は肩からヨコヘラケズリを施す。

485～494は頸部が、直線的に下方に開くものである。485は「ハ」の字状に開く頸部を持つもので外反し、上方へ張り出す口縁を形成する。外面調整は頸部から胴下半にハケ、後胴上半にタテ、中ほどやや下にヨコで以下は夕テのヘラミガキを施す。内面は頸部下半に押圧、胴中ほどまでヨコで以下はタテのヘラケズリを施す。486の外面調整は頸部から胴下半にナナメハケ後、底部までナナメヘラミガキを施す。内面は口縁部にヨコヘラミガキ、頸部には押圧とナデさらにタテハケ、肩から胴上半にヨコヘラミガキ、以下はヨコヘラケズリを施す。穿孔は胴部やや下方にあり、外から敲かれる。487は頸部から水平方向に屈曲するもので、端部は拡張しない。外面調整は頸部から肩にかけタテハケ、肩部から胴部にかけ暗文風のヘラミガキ、以下はタテヘラミガキを施す。内面は頸部から胴部にかけ押圧とナデ、以下はナナメヘラケズリを施す。なお、口縁内面にはヨコナデによる凹凸が見られ、文様として意識される。488の外面調整は頸部にタテハケ、胴下半までヨコで以下はタテハケ、後胴下半までヨコで底部にかけてはタテのヘラミガキを施す。内面は口縁にナナメヘラミガキ、頸部上半に帯状のヘラケズリとナナメハケ、以下は不詳であるがヨコのヘラケズリと後胴下半にタテハケが認められる。穿孔は胴部中ほどやや下方に2.6×0.9cmの敲打痕があり、内壁にもその影響が出ているが孔

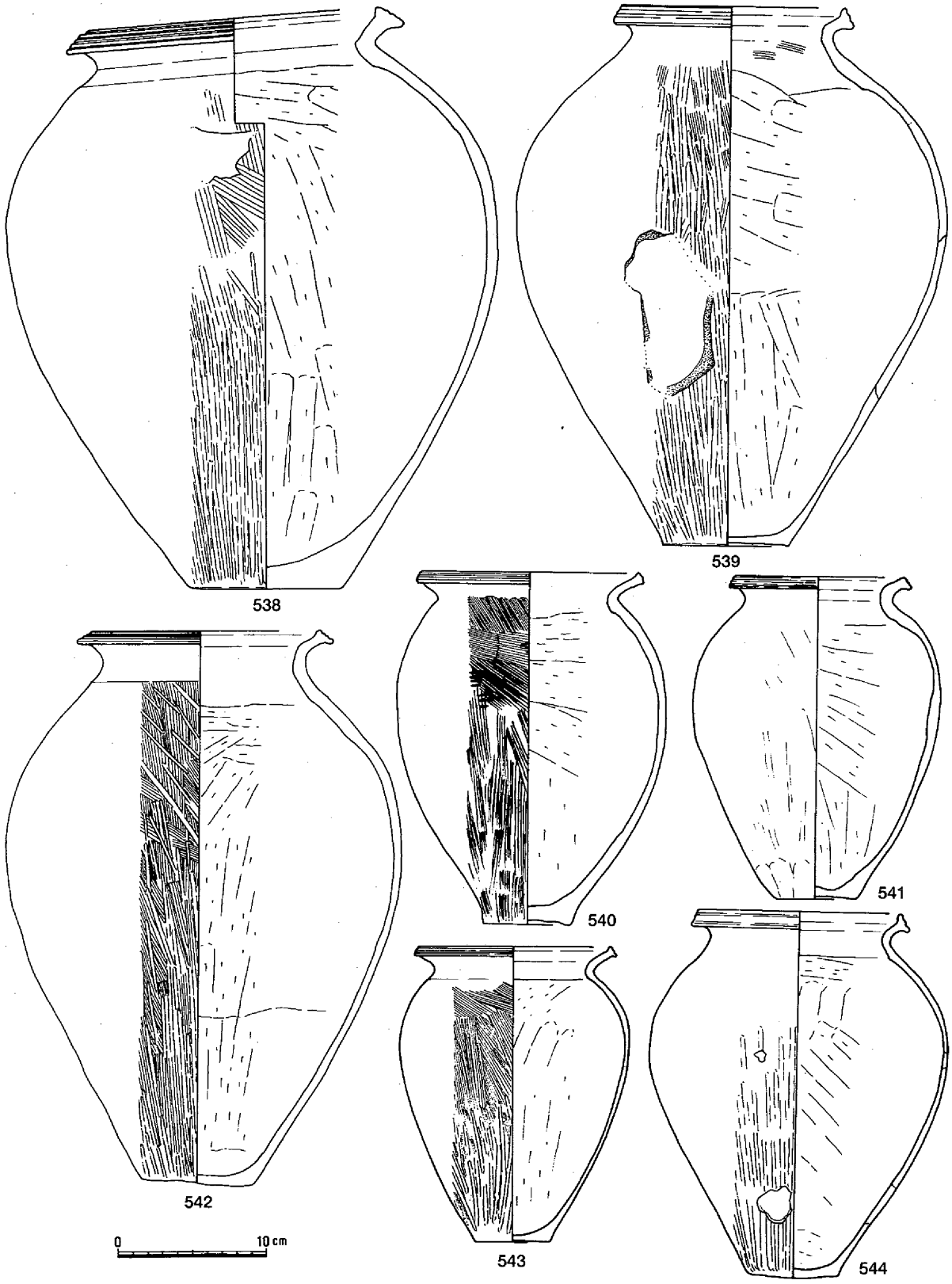
となっていない。489の外面調整は頸部から胴下半にタテハケ後タテヘラミガキ、内面は頸部にヨコハケ、胴上半までヨコ、以下はナナメのヘラケズリを施す。490の外面調整は胴上半にハケ後タテとナナメのヘラミガキ、内面は口縁から肩部にヨコヘラミガキ、胴中ほどにヨコ以下はナナメのヘラケズリを施す。穿孔は頸部屈曲部と胴中ほどやや上の2ヵ所にあり、いずれも外から敲かれる。491の外面調整はタテハケ、内面は頸部にヨコヘラケズリ後ヨコハケ、以下はナナメとタテのヘラケズリを施す。穿孔は胴部下半に1.7×0.2cmの敲打痕があり、内壁にもその影響が出ているが孔となっていない。底部は、使い込みにより磨滅し丸くなっている。492の外面調整は頸部から胴中ほどまでナナメハケ後ナナメヘラミガキ、以下はナナメハケ、内面は頸部上半にヨコナデ、肩部にヨコで以下はタテのヘラケズリを施す。穿孔は胴部上半にあり、外側から敲かれる。493は、口縁部に鋸歯文状のクシガキを施文する。外面調整は細かいタテハケ後胴部中ほどにタテヘラミガキ、内面は口縁部にナナメヘラミガキ、肩部にナデ、以下はナナメヘラケズリを施す。494は頸部から胴部への変化がほとんど認められない。外面調整は粗いタテハケ、内面は口縁部にナナメとヨコのヘラミガキ、頸部にナデ、胴上半にヨコで以下はタテのヘラケズリを施す。穿孔は胴部下半にあり、外側から敲かれる。

495～509は、短い口縁部を持つものである。495は胴部との接合点がないが、胎土と焼成同内容であることから同一個体とした。頸部には強いヨコナデにより、凹凸が形成される。外面調整は肩から胴部はヨコで以下はタテのヘラミガキ、内面は頸部にナデ、胴部にヨコで以下はタテのヘラケズリを施す。底部外面には、ヘラミガキが認められる。496の外面調整は肩部以下にタテヘラミガキ、内面は頸部にヨコハケ、肩から胴中ほどに押圧後胴下半までヨコで以下はタテのヘラケズリを施す。穿孔は胴部最大径付近にあり、外から敲かれる。497の外面調整は口縁から頸部にタテハケ後ヨコヘラミガキ、胴部下半までナナメで以下はタテのヘラミガキを施す。内面は口縁にヨコハケ後頸部までヨコヘラミガキ、胴下半にヨコで以下はタテのヘラケズリ、底部にかき取り状のヘラケズリが認められる。穿孔は底部近くにあり、外側から敲かれる。498は外方に屈曲する口縁端部を拡張し、その端は面取りをする。外面調整はタテハケ、内面はヨコヘラミガキを施す。499の外面調整はナナメハケ後ヨコとナナメのヘラミガキ、内面は頸部にヨコヘラミガキ、肩部にヘラケズリを施す。500は口縁部に、浮文を1ヵ所付している。外面調整は肩から胴上半にタテハケ後タテヘラミガキを施す。内面は口縁から頸部にヨコナデ、胴部にヨコで以下はタテのヘラケズリを施す。501の外面調整はナナメとタテのハケ後タテヘラミガキ、底部近くには工具痕が残る。内面は頸部から上は磨滅で不詳であるが、以下はナナメヘラケズリが認められる。穿孔は胴下半に3.4×0.6cmの孔があり、外側から敲かれる。502の外面調整は口縁から頸部にタテハケ後タテヘラミガキ、以下はタテ、ナナメのハケ後タテヘラミガキを施す。内面は頸部にナナメ、ヨコのヘラミガキ、胴上半にヨコヘラケズリ後ヨコ、ナナメのヘラミガキ、以下はナナメハケ後タテヘラミガキを施す。穿孔は肩部にあり、外側から敲かれる。503は、頸部の屈曲が一定していない。文様は肩部に認められるが、内容は沈線とはならず暗文状となる。外面調整はヨコ→タテ→ナナメの順でハケ調整され、胴下半は底部までタテハケ、後底部近くにタテヘラケズリを施す。内面は口縁から頸部にヨコナデ、胴上半にヨコヘラケズリ後押圧、以下はタテヘラケズリを施す。底部は、丸みを帯びる。504の口縁屈曲から上方への拡張は、粘土を足して形成する。口縁部には、ナデによる細かい条線が認められる。外面調整はタテハケの後タテヘラミガキ、内面は肩部に押圧、胴下半にヨコ、ナナメのヘラケズリ、以下はタテヘラケズリを施す。505の外面調整は胴中ほどまでヨコで以下はナナメのヘラミガキ、内面は口縁から頸部にヨコヘラミガキ、

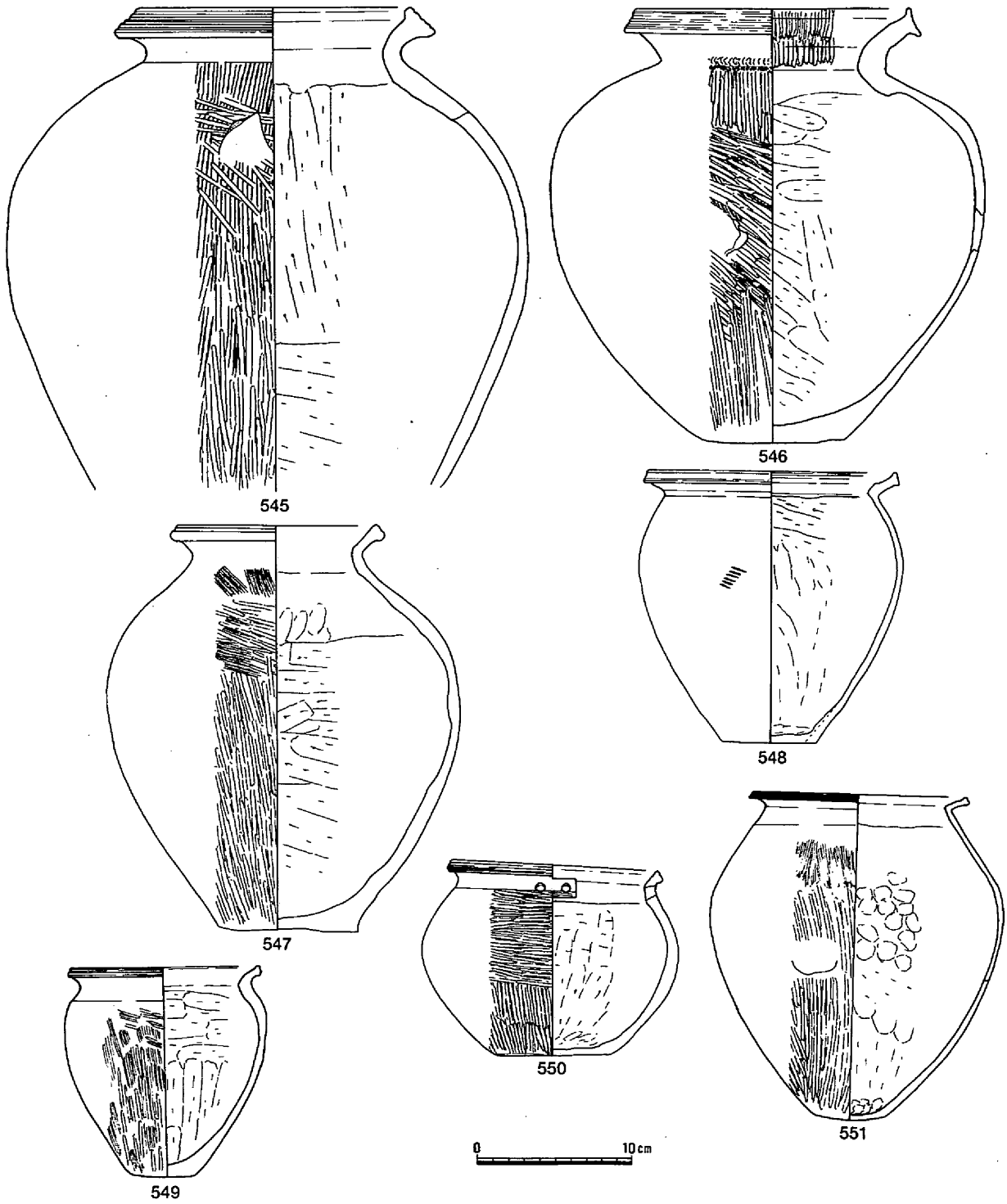
胴中ほどにヨコで下半にナナメさらに底部近くでヨコのヘラケズリを施す。底部外面は、ヘラミガキが認められる。506の外面調整は頸部から胴部上半にタテハケ後肩部からタテヘラミガキ、内面は口縁から頸部にヨコハケ後ヨコヘラミガキ、以下胴部下半までヨコヘラケズリ、底部にタテヘラケズリを施す。507の外面調整は胴部中ほどまでヨコ、以下はタテのヘラミガキ、内面は頸部にヨコヘラミガキ、肩部にヨコヘラケズリ、胴下半までナナメヘラケズリで上半にナデ、底部には、タテヘラケズリを施す。508の外面調整は粗いタテハケ後タテヘラミガキ、内面は口縁にヨコヘラミガキ、胴中ほどまでヨコヘラケズリ、以下タテヘラケズリ後ヨコヘラミガキを施す。底部には、ナデが認められる。509は外反気味の口縁部端を肥厚させ、ナデによる凹凸が認められる。外面調整は胴中ほどまでナナメヘラミガキ、以下はヨコとナナメのハケ後タテヘラミガキを施し、底部はヘラミガキを行う。内面は肩部までナデ、胴上半に2段の押圧、中ほどにヨコ、下方にナナメとタテのヘラケズリを施す。

510～537は、その他の頸部の特徴を持つものである。510は外反する口縁端部をナデにより、わずかに張り出し気味となる。外面調整は肩部にタタキ後ナナメのハケ、底部まで粗いタテハケ、内面は口縁にヨコハケ、頸部から肩部にナデと押圧、以下はタテヘラケズリ後タテハケを施す。511は水平方向に屈曲させ、端部は丸く納める。外面調整は細かいナナメハケ、内面は口縁部にヨコハケ、頸部にナデ、胴部中ほどまでヨコヘラケズリ、以下はナデを施す。512は、外反する口縁端部を丸く納める。外面調整はタテヘラミガキ、内面は口縁から肩部にナデ、胴下半までヨコで以下タテのヘラケズリを施す。穿孔は肩部にあり、外側から敲かれる。513は外反する口縁端部を丸く納める。外面調整は胴部にヨコヘラミガキ、内面は口縁から頸部にヨコヘラミガキ、以下はヨコヘラケズリを施す。514は緩やかに外反する口縁端部を丸く納める。外面調整は口縁から肩部にヨコ、以下ナナメからタテのヘラミガキを施す。内面は口縁から肩部にヨコヘラミガキ、胴下半までヨコヘラケズリを施す。515は緩やかに外反する口縁端部に、面取りを行う。外面調整は不詳であるが、ハケが認められる。内面は頸部に押圧とナデ、胴中ほどまでヨコで以下はナナメのヘラケズリを施す。516の外面調整は口縁にヨコヘラミガキ、胴部中ほどまでヨコヘラケズリ、以下は丁寧なタテヘラケズリを施す。内面は口縁にヨコナデ、以下はナナメヘラケズリを施す。517の口縁は、緩やかに外反気味の口縁端を丸く納める。外面調整は胴部中ほどから下半にかけ無文のタタキの面が認められ、後タテヘラミガキを施す。内面は口縁部に押圧、肩から胴中ほどにヨコヘラケズリ、以下はハケ状工具でのケズリを施す。518の外面調整は口縁にヨコ、肩部にナナメのヘラミガキ、以下タテハケ後タテヘラミガキ、内面は頸部までナデ、以下はナナメヘラケズリを施し、底部は強めのケズリである。519は鉄分の付着で調整が不詳であるが、外面調整は口縁部にヨコとタテで以下はタテのヘラミガキ、内面には胴下半に丁寧なナナメのヘラミガキが認められる。520は鉄分の付着で調整が不詳となる。521は鉄分の付着で調整が不詳となる。522は頸部が「ハ」の字状に内傾し、端部を肥厚して丸くする。523は、口縁部に5本の沈線を施文する。外面調整は口縁部にナナメヘラミガキ、胴上半から底部にヨコヘラケズリ後ミガキを施す。内面は頸部までナデ、以下はヨコヘラケズリ後胴部中ほどにヨコハケ、さらに雑なヘラミガキを施す。524の口縁端部は、面取りを行う。底部は器壁が厚くなり、張り出し気味の丸底となる。外面調整は口縁はナデ、肩部にタテで胴中ほどまでヨコのハケ、以下はヨコヘラミガキを施す。内面は胴部に丁寧なヘラケズリを施す。525は「く」の字状に屈曲し、端部を拡張する。胴部から底部は、算盤玉状を呈する。外面調整は口縁にタテヘラミガキ、屈曲部に沈線を思わせるヨコのヘラミガキ、以下、底部までタテのヘラミガキであるが、胴部最大径部分はヨコヘラミガキを施す。内面は頸部ま

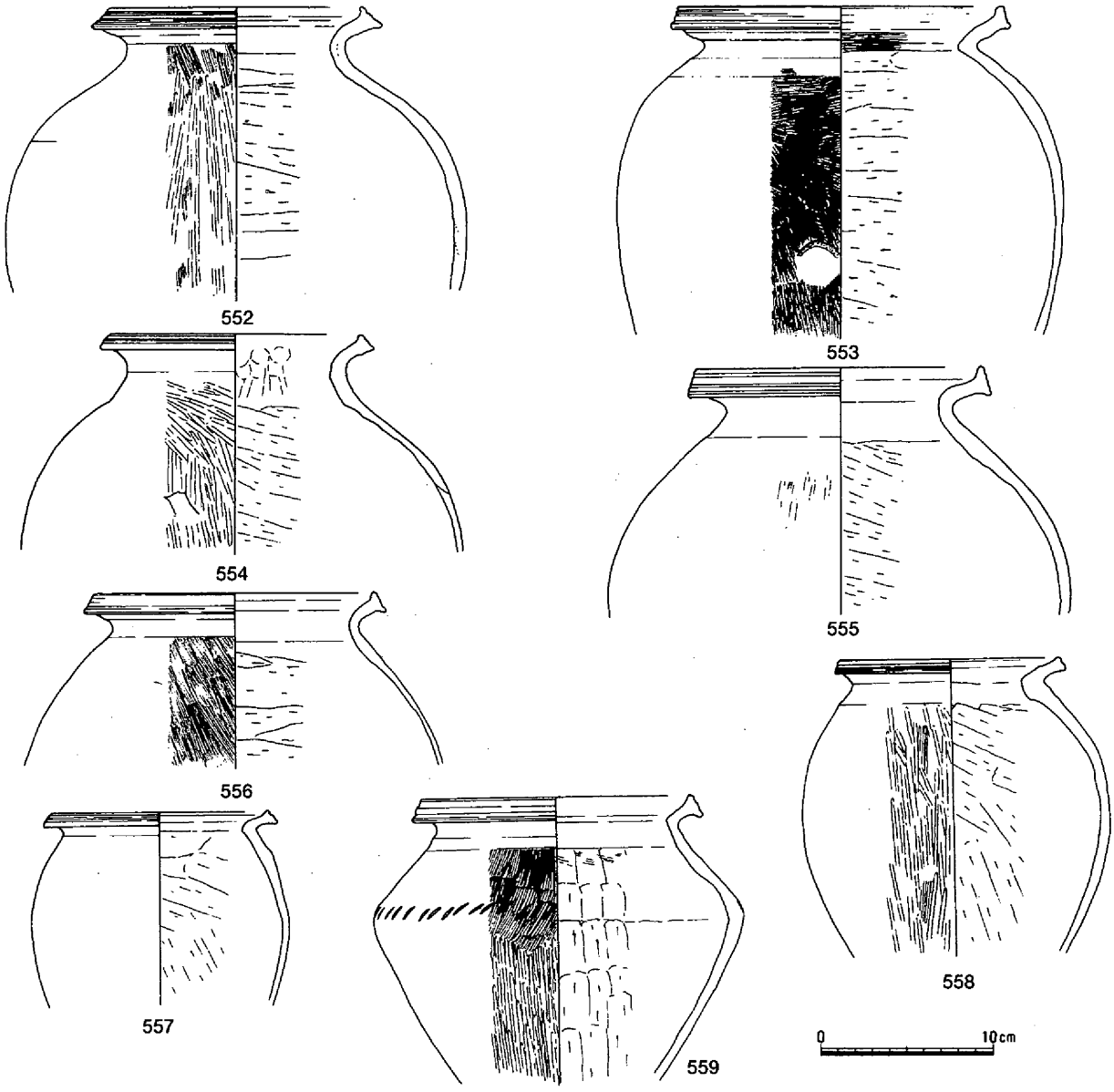
でタテヘラミガキ、胴部下半にナナメハケを施す。526の外面調整は胴部にナナメヘラミガキ、底部にヘラミガキ、内面は肩部までヨコナデ、胴中ほどにナデ、以下はタテヘラケズリを施す。527の口縁部は一部肥厚気味にする。外面調整は鉄分の付着により不詳であるが、胴部上半にタテハケ、下半にタテヘラミガキ、内面はナデが認められる。528は、短く口縁が立ち上がる。外面調整は頸部中ほどにヘラの痕が認められる。肩部から胴部上半にナナメで胴下半にタテヘラケズリ、内面は口頸部にヨコヘラミガキを施す。穿孔は胴下半に1.6×0.4cmの敲打痕があるが、孔となっていない。529は横長の胴部に直口する口縁を形成する。外面調整は胴上半にナナメヘラミガキとヨコハケ後、胴部下半までタテヘラミガキを施す。内面は肩部までヨコナデ、胴下半にヨコ以下はタテヘラケズリを施す。穿孔は胴部中ほどに見られ、内側から敲かれる。530は肩の張る胴部から内傾する口縁を形成する。外面調整は胴部下半から底部にかけて、ナナメのタタキを行う。その後に口縁から胴部上半にタテハケ、中ほどにナナメ、下半にタテ、底部までナナメのヘラミガキを施す。内面は頸部にヨコナデ、胴部中ほどにヘラケズリ後ナデ、下半にヨコヘラケズリ、底部に細かいハケを施す。穿孔は肩部と胴部の2ヵ所にあり、外側から敲かれる。531は長く立ち上がる頸部端を外方に開き、口縁を形成する。文様は肩部から胴部上半に、竹管の刺突文を施文する。外面調整は頸部にタテ、胴部中ほどにヨコで以下はタテのヘラミガキ、底部はヘラミガキを施す。内面は頸部に押圧とナデ、工具によるヨコナデの痕が認められる。532は細い頸部から、外方に開く口縁を形成する。文様は頸部に、3本の沈線が認められる。外面調整は口縁部から胴部上半にタテ、中ほどにヨコで以下はナナメのヘラミガキを施す。内面口頸部にヨコで胴部下半から底部にタテ、ナナメのヘラケズリを認める。533は、口縁部に沈線状の凹部を施文する。外面調整は口頸部から胴部中ほどにタテ、胴中ほどにヨコのヘラミガキが認められるが、以下は磨滅で調整不詳である。内面は口頸部にタテヘラミガキ、肩部にナデ、以下はヨコヘラケズリを施す。穿孔は胴部中ほどやや上にあり、外側から敲かれる。534は、あまり開かない口縁となる。文様は口縁部に沈線、内面の口縁やや下方に沈線が1条施文される。外面調整は口頸部から胴下半までタテヘラミガキ、内面は頸部下半にヨコ、後タテヘラミガキ、肩部にナデ、胴部下半にナナメハケを施す。底部の外面には、ヘラミガキが認められる。535の外面調整はタテハケ後ヨコの細かいヘラミガキ、内面はナナメハケが施される。536は算盤玉状の胴部を形成する。文様は、胴部中ほどに2条の貼付け凸帯を付し、その間に波状文を施文した後横位のS字状の浮文を付す。また、上の凸帯側には、同様の波状文が施文されている。外面調整はタテヘラミガキ、内面は胴部上中ほどにヨコ、中ほどでナナメハケ、下方にタテヘラミガキを施す。537の外面調整は口縁から頸部にタテ後ヨコのヘラミガキ、胴部中ほどにヨコハケ後ヨコヘラミガキ、さらに底部にかけ幅広のタテ、ナナメのヘラミガキを施す。口縁にナナメハケを認めるが胴部は不詳である。



掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
538	弥生土器	甕	19.5	10.1	38.7	良好	10Y R7/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線、肩部に穿孔、内面底部に炭化物付着
539	弥生土器	甕	14.8	8.4	35.9	良好	2.5Y8/2(灰色)	砂粒	口縁部に凹線、胴部中位に穿孔、胴部下半に煤付着
540	弥生土器	甕	14.4	5.6	23.4	良好	2.5Y6/4(にぶい黄)	砂粒	口縁部に凹線、ほぼ全面に厚く煤付着
541	弥生土器	甕	11.0	5.2	21.8	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	口縁部に凹線、外面磨滅調整不明
542	弥生土器	甕	15.2	7.5	37.1	良好	10Y R8/7(灰白)	砂粒	口縁部に凹線、内面に炭化物付着
543	弥生土器	甕	12.6	4.9	19.7	良好	2.5Y6/4(にぶい黄)	砂粒	胴部に敲打痕、口縁部に凹線、内外面に煤付着
544	弥生土器	甕	13.3	6.0	24.4	良好	2.5Y8/3(淡黄)	砂粒	内外面に煤付着、胴部中位と下半に２カ所穿孔



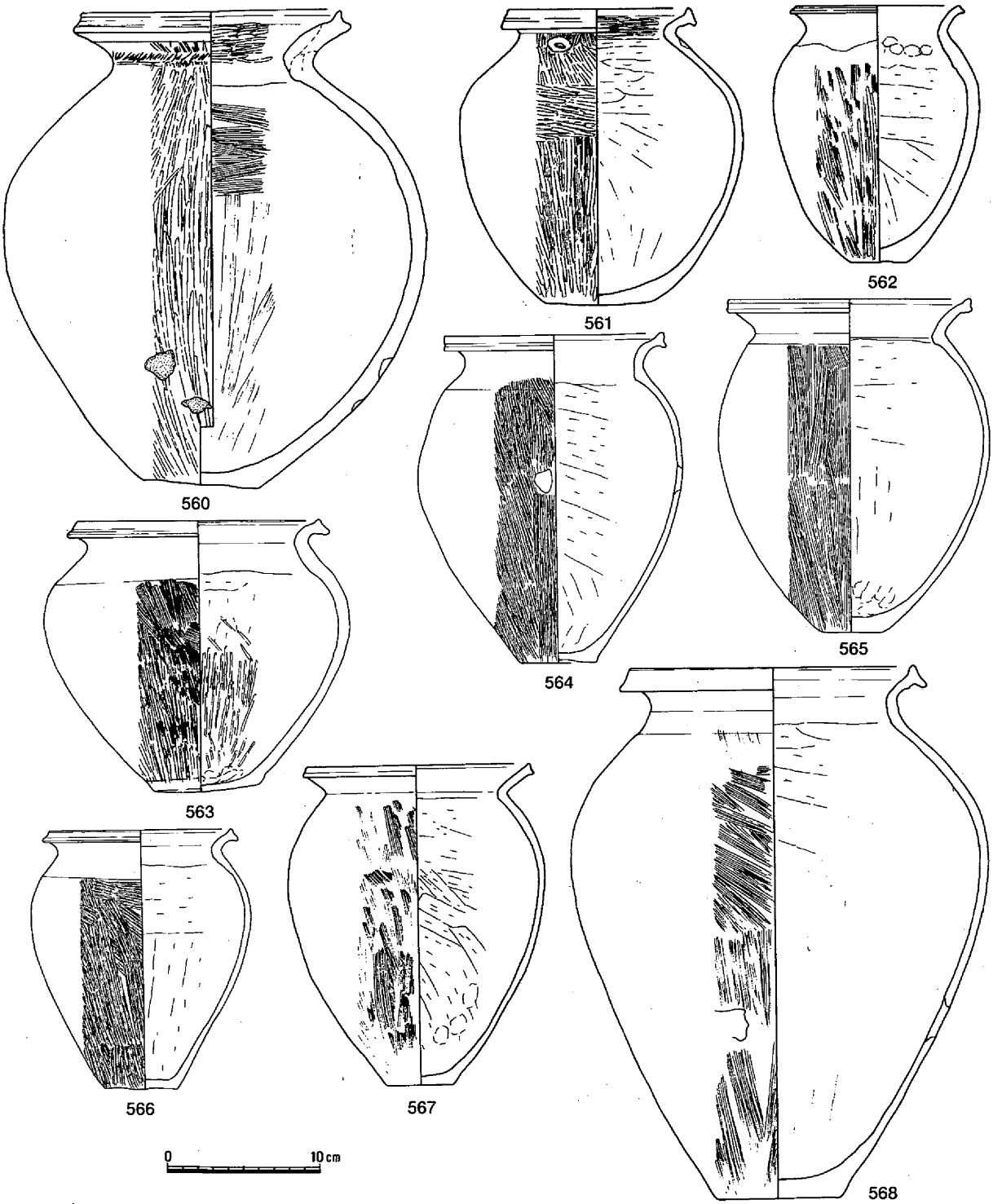
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
545	弥生土器	甕	17.2			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	口縁部に凹線、肩部に穿孔、内面胴部下半に炭化物付着
546	弥生土器	甕	17.6	9.2	28.2	良好	2.5Y6/3(にぶい黄)	砂粒	胴部に穿孔
547	弥生土器	甕	12.7	8.05～9.0	26.15～26.55	良好	2.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線
548	弥生土器	甕	(15.8)	6.0	17.6	良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	タタキ　外面ほぼ全体に煤付着
549	弥生土器	甕	12.0	4.1	14.6	良好	2.5Y2/1(黒)	砂粒	口縁部に凹線、外面全体に煤付着
550	弥生土器	甕	13.1	7.2	12.1	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	口縁部に凹線、頸部に穿孔2個1対
551	弥生土器	甕	13.7	4.6	21.3	良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒(少)	口縁部に沈線、胴部に穿孔、内面に押圧痕



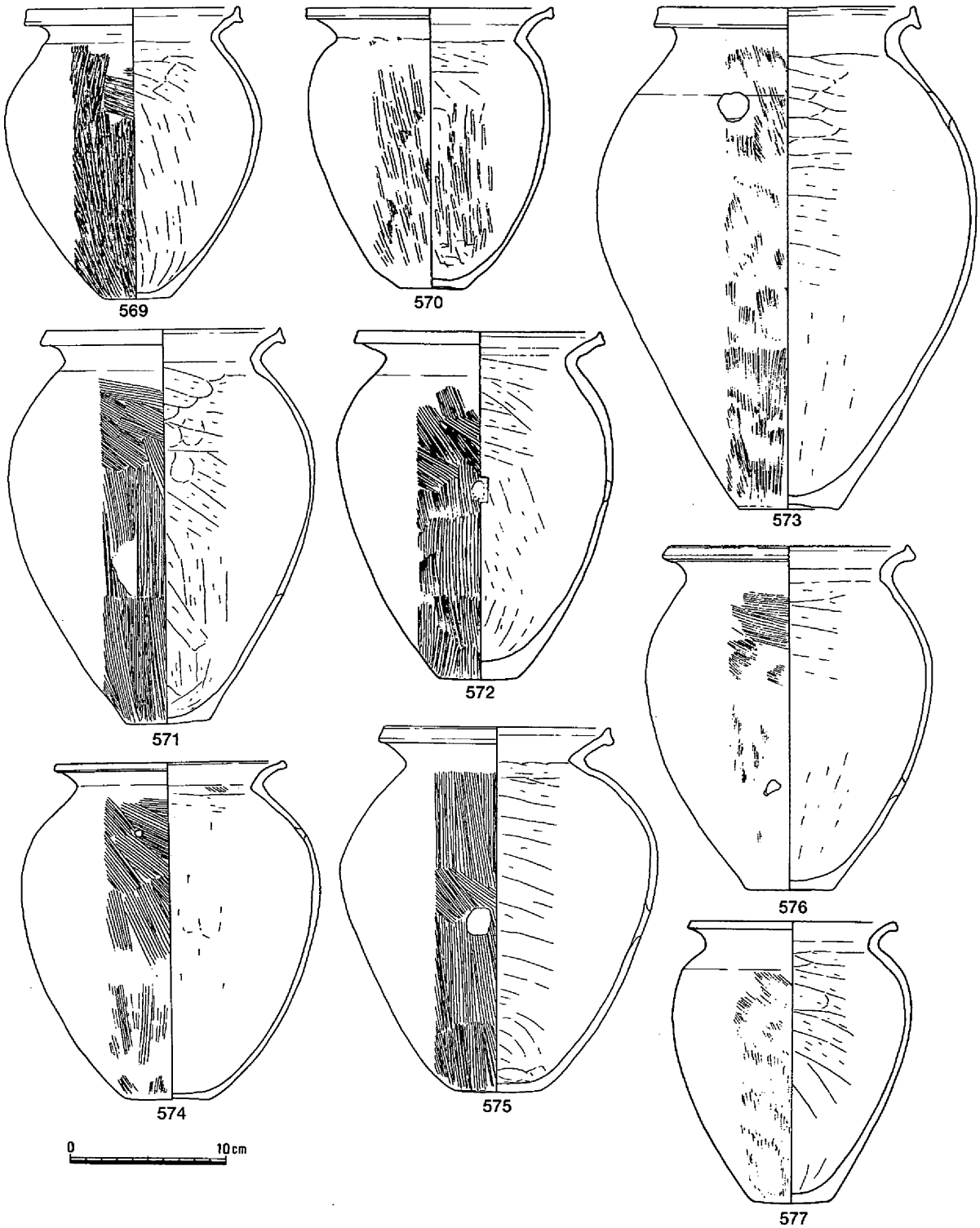
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
552	弥生土器	甕	14.6			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線3条
553	弥生土器	甕	18.6			良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	胴部に穿孔
554	弥生土器	甕	14.3			良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒(多)	口縁部に凹線2条　胴部に穿孔
555	弥生土器	甕	16.5			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線3条
556	弥生土器	甕	(16.2)			良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線　頸部と胴部上半に煤付着
557	弥生土器	甕	12.4			良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線2条
558	弥生土器	甕	12.6			良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	口縁部に凹線　外面全体と内面に煤付着
559	弥生土器	甕	15.6			良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	肩部に刺突文

538～755は甕で、538～559は口縁端部を肥厚し凹線、沈線を施文するものである。538は屈曲する口縁端部をヨコナデにより、内傾して肥厚させ凹線を施文する。外面調整はタテ、ナナメのハケ後タテヘラミガキ、内面は口頸部にナデ、肩部にヨコ、以下はナナメ、タテのヘラケズリを施す。胴部下半から底部やや上まで、炭化物の付着が認められた。穿孔は肩部にあり、外から敲かれる。539は口縁端部の上方への張り出しが大きい。外面調整は胴部下半部までタテ、ナナメのハケ、後タテヘラミガキ、内面は肩部にヨコハケ後ナデ、胴部中ほどにヨコ、以下はタテのヘラケズリを施す。底部はヘラミガキで、上げ底を呈する。穿孔は胴中ほどにあり、外から敲かれる。540の底部は、押圧で上げ底

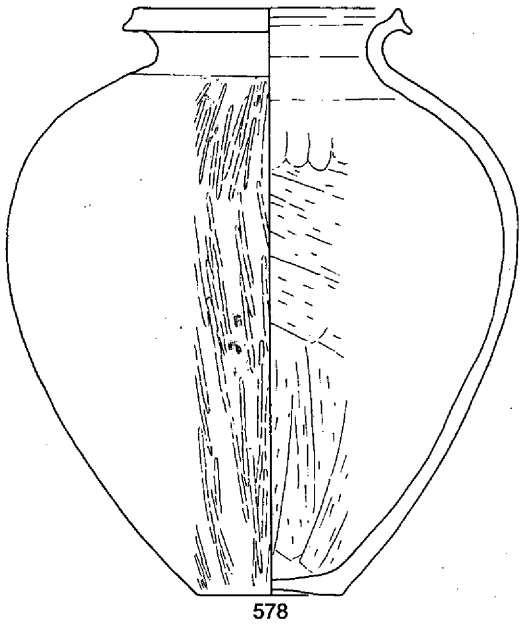
となる。外面調整は胴部中ほどまでヨコのタタキ後細かいナナメハケ、以下は粗いタテハケ、内面は肩部から胴部中ほどにヨコ、以下はタテのヘラケズリを施す。底部は、ナデが認められる。541の外面調整は磨滅のため不詳、内面は肩部から胴部下半にヨコ、ナナメ、以下はタテのヘラケズリを施す。542は強いヨコナデにより、頸部に稜ができる。外面調整は胴部下半までナナメとタテのハケ後胴中ほどにヨコハケ、さら肩部から胴部中ほどにナナメ、以下はタテのヘラミガキを施す。内面は口頸部にヨコナデ、肩部にヨコ、以下はナナメからタテのヘラケズリを施す。内面の胴部下半から底部やや上までは、煤と炭化物が付着した状態で認められる。543の外面調整は肩部にヨコの粗いハケ、以下はタテの細かいハケ後胴部中ほどから底部にタテヘラミガキ、内面は肩部にナナメヘラケズリ、以下はタテヘラケズリ後ヘラミガキを施す。穿孔は胴部上半にあり、外から敲かれる。544は口縁端部をナデによる張り出しではなく、拡張の内容を呈する。底部は、張り出す。外面調整は胴部上半が磨滅で不詳、以下はタテヘラミガキ、内面は肩部にヨコヘラケズリ、胴部上半にヘラの押圧、胴部下半までナナメ、底部にヨコのヘラケズリを施す。穿孔は胴部最大径部分と下半の2ヵ所にあり、いずれも外から敲かれる。545は頸部のヨコナデが強く、稜ができる。外面調整はタテの粗いハケ後胴部上半にヨコ、以下タテのヘラミガキ、内面は肩部から胴部中ほどにタテ、以下はヨコヘラケズリを施す。穿孔は肩部にあり、外から敲かれる。内面胴部下半に、炭化物の付着が認められる。546の口縁部には、ヨコナデによる条痕が認められる。外面調整は胴部下半までタテハケ後肩部にタテ、胴部中ほどにナナメ、以下タテのヘラミガキを施す。内面は口頸部にタテヘラミガキ、肩部にナデ、胴部中ほどにヨコ、以下にナナメのヘラケズリを施す。547の外面調整は胴部上半にナナメ、ヨコのハケ後ヨコヘラミガキ、以下タテヘラミガキ、内面は胴部上半に押圧、以下はヨコヘラケズリを施す。548の外面調整は胴下半に、二次的な火を受け剝落して不詳であるが、タタキが内面の当て具の痕から認められる。内面は肩部にナナメ、以下タテヘラケズリを施す。しかし、粘土が削り取られずに残されている。549の外面調整はタテハケ後胴部上半にヨコ、以下タテのヘラミガキ、内面は胴部中ほどまでヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。550は甕としたが、壺としても問題はない。外面調整は胴部下半までヨコ、以下タテのヘラミガキ、内面は肩部から胴部中ほどヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。551の底部は、丸みを持つ。外面調整は肩部から胴部上半にハケ、以下タテヘラミガキ、内面はヘラケズリ後ナデ、押圧を施す。底部にも押圧痕を残す。穿孔は胴中ほどにあり、外から敲かれる。552の外面調整は頸部から胴部にタテハケ後タテヘラミガキ、内面は口頸部ヨコナデ、以下はヨコヘラケズリを施す。553の外面調整は不定方向のハケ、内面は口縁にヨコハケ、以下はヨコヘラケズリを施す。穿孔は胴部中ほどにあり、内側からの敲きの可能性が考えられる。554の外面調整は肩部にナナメ、以下タテのヘラミガキ、内面は口頸部に押圧とナデ、以下はヨコヘラケズリを施す。555の外面調整は磨滅のため不詳であるが、ハケ後ヘラミガキの調整が認められる。内面は胴部上半からヨコヘラケズリを施す。556の外面調整はナナメの細かいハケ、内面は肩部からヨコヘラケズリを施す。557の外面調整はナデの痕跡が認められるが図化するに至っていない。内面は胴中ほどまでヨコ、以下ナナメのヘラケズリを施す。558の外面調整はタテハケ後タテヘラミガキ、内面は口頸部にヨコナデ、胴部中ほどまでナナメ、以下はタテのヘラケズリを施す。559は、胴部が強く屈曲する。文様は、この屈曲部に刺突文を施文する。外面調整は胴部中ほどまでナナメの細かいハケ、以下タテヘラミガキ、内面は胴部上半にヨコハケ後屈曲部まで押圧、以下はタテのヘラケズリを施す。

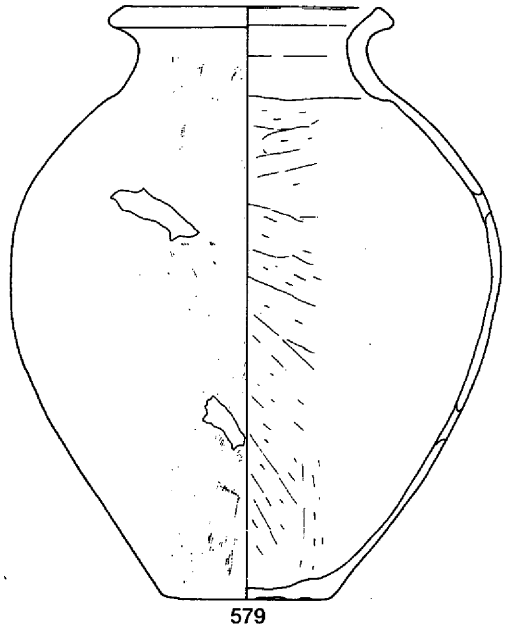


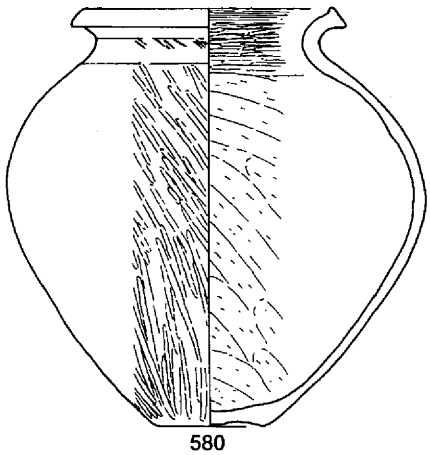
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
560	弥生土器	甕	(16.8)	7.5	30.9	良好	7.5YR6.5/3(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹部　胴部下半に敲打痕２カ所
561	弥生土器	甕	11.7	7.1	19.3	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	頸部に刻痕
562	弥生土器	甕	10.4	3.6	16.6	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	表面全体に煤付着　口縁部に凹部表面剥離
563	弥生土器	甕	15.7	6.8	17.7	良好	10Y7/2(にぶい黄橙)	砂粒	外面胴部下半に煤付着
564	弥生土器	甕	14.0 (13.6～)	4.9 (～5.5)	21.3	良好	5YR7/6(橙)	砂粒	口縁部に凹線　胴部中位～底部に煤付着　胴部中位に穿孔　内面胴部中位～底部にお焦げ
565	弥生土器	甕	15.4	4.2	21.7	良好	7.5YR4/2(灰褐)	砂粒	表面に濃く煤付着　内面にお焦げ
566	弥生土器	甕	11.8	4.9	16.7	良好	N3/0(暗灰)	砂粒	外面全体に煤付着　内面胴部中位に炭化物付着
567	弥生土器	甕	14.3	4.2	20.7	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	ほぼ全面に煤付着　ふきこぼれ痕あり
568	弥生土器	甕	18.3	8.0	34.6	良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	胴部に穿孔

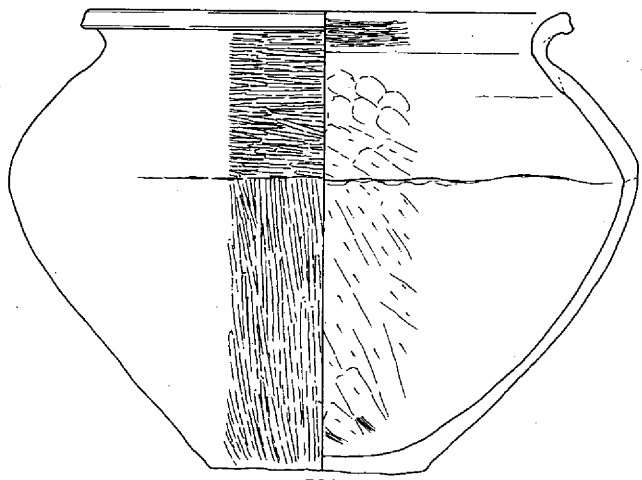


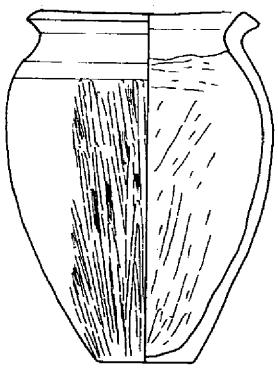
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
569	弥生土器	甕	13.4	4.4	18.9	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	
570	弥生土器	甕	15.8	4.2	18.3	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	外面に煤付着
571	弥生土器	甕	14.8	5.4	25.7	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	胴部に穿孔　内面にお焦げ
572	弥生土器	甕	15.6	5.0(5.6)	22.7	良好	7.5YR6/3(にぶい褐)	砂粒	外面全体に煤付着　胴部中位に穿孔
573	弥生土器	甕	16.3	6.4	32.9	良好	2.5Y7/4(浅黄)	砂粒	肩部に穿孔　ほぼ全面にお焦げ付着
574	弥生土器	甕	14.3	5.6	22.0	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒(少)	肩部に穿孔　底部内面にお焦げ付着
575	弥生土器	甕	14.5	5.1	23.8	良好	2.5Y7/4(浅黄)	砂粒	胴部中位に穿孔
576	弥生土器	甕	15.4	5.8	22.6	良好	2.5Y(にぶい黄)	砂粒(少)	胴部下半に穿孔
577	弥生土器	甕	13.2	5.2	18.5	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	ほぼ全体に煤付着

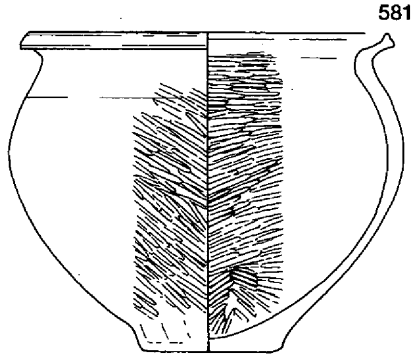

578

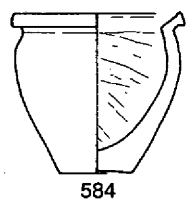

579

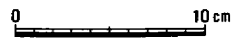

580


581

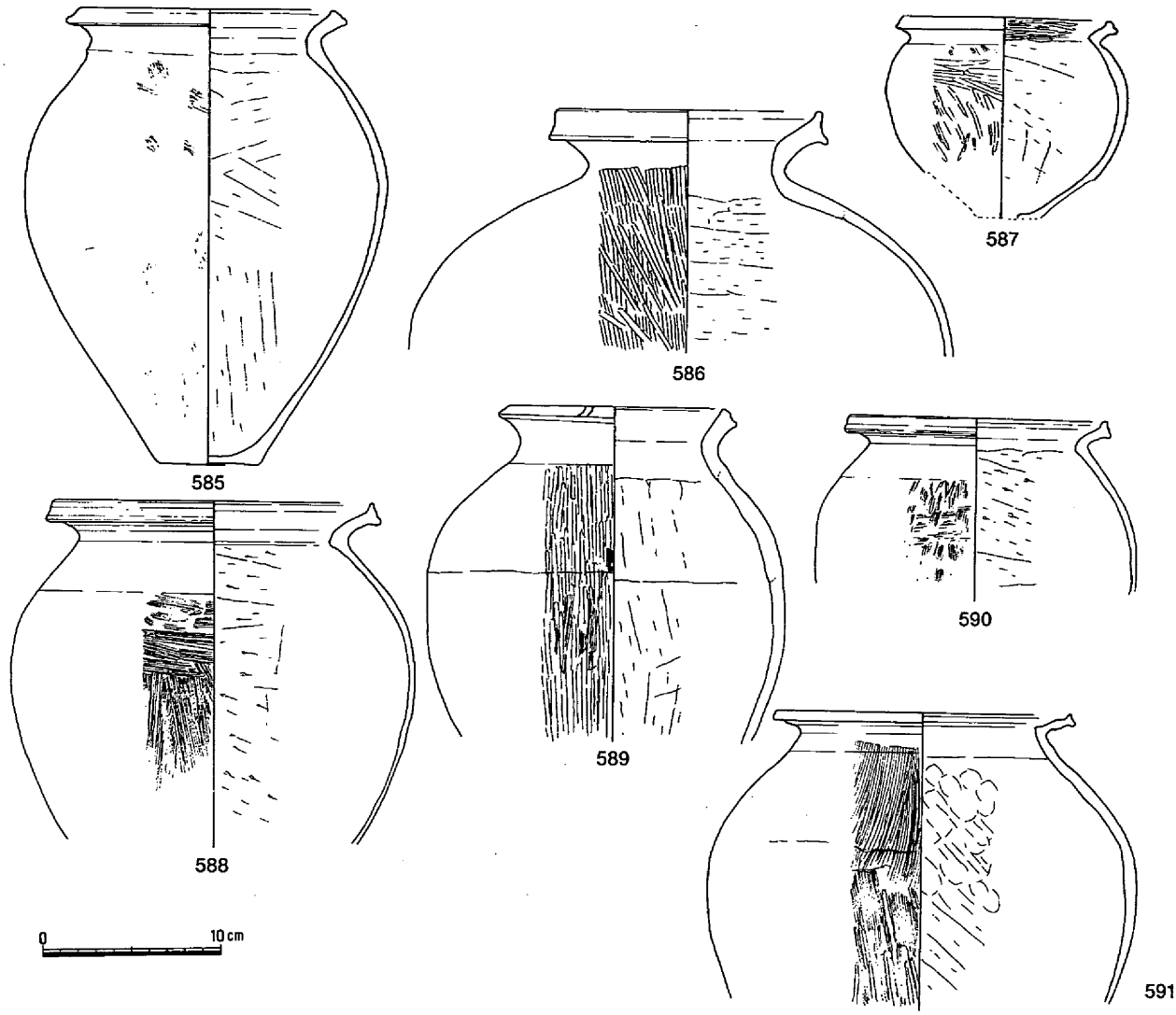

582


583


584



掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
578	弥生土器	甕	13.7	7.5	30.8	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒(多)	口縁部にナデによる凹部、底部は上げ底
579	弥生土器	甕	13.4	8.9	31.3	良好	5Y7/1(灰白)	砂粒(多)	肩部・胴部下半に穿孔各1個 胴部中位～底部に煤付着
580	弥生土器	甕	13.1	5.5	22.3	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	
581	弥生土器	甕	24.9	11.3	24.7	良好	2.5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒	
582	弥生土器	甕	11.0	5.1～5.3	18.6	良好	5YR6.5/7(にぶい橙)	砂粒	外面と内面胴部中位に煤付着
583	弥生土器	甕	19.0	7.4	16.9	良好	2.5Y7/4(浅黄)	砂粒(少)	
584	弥生土器	甕	8.8	3.8	8.4	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
585	弥生土器	甕	14.1	5.7	25.8	良好	2.5Y4/3(オリーブ褐)	砂粒(少)	外面細かいハケ　煤付着
586	弥生土器	甕	14.6			良好	2.5YR5/4(にぶい赤褐)	砂粒	
587	弥生土器	甕	11.6		(11.4)	良好	10YR6/3((にぶい黄橙)	砂粒	底部表面剝離著しい
588	弥生土器	甕	(17.7)			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	胴部に煤付着　内面に有機物付着
589	弥生土器	甕	11.7~12.15			良好	10YR7/1(灰白)	砂粒	口縁部に線刻(2本1対で1組)
590	弥生土器	甕	(14.4)			良好	10YR6/3.5(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部と胴部に煤付着
591	弥生土器	甕	16.7			良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒(僅)	ほぼ全面に煤付着　胴部中位までヘラミガキ

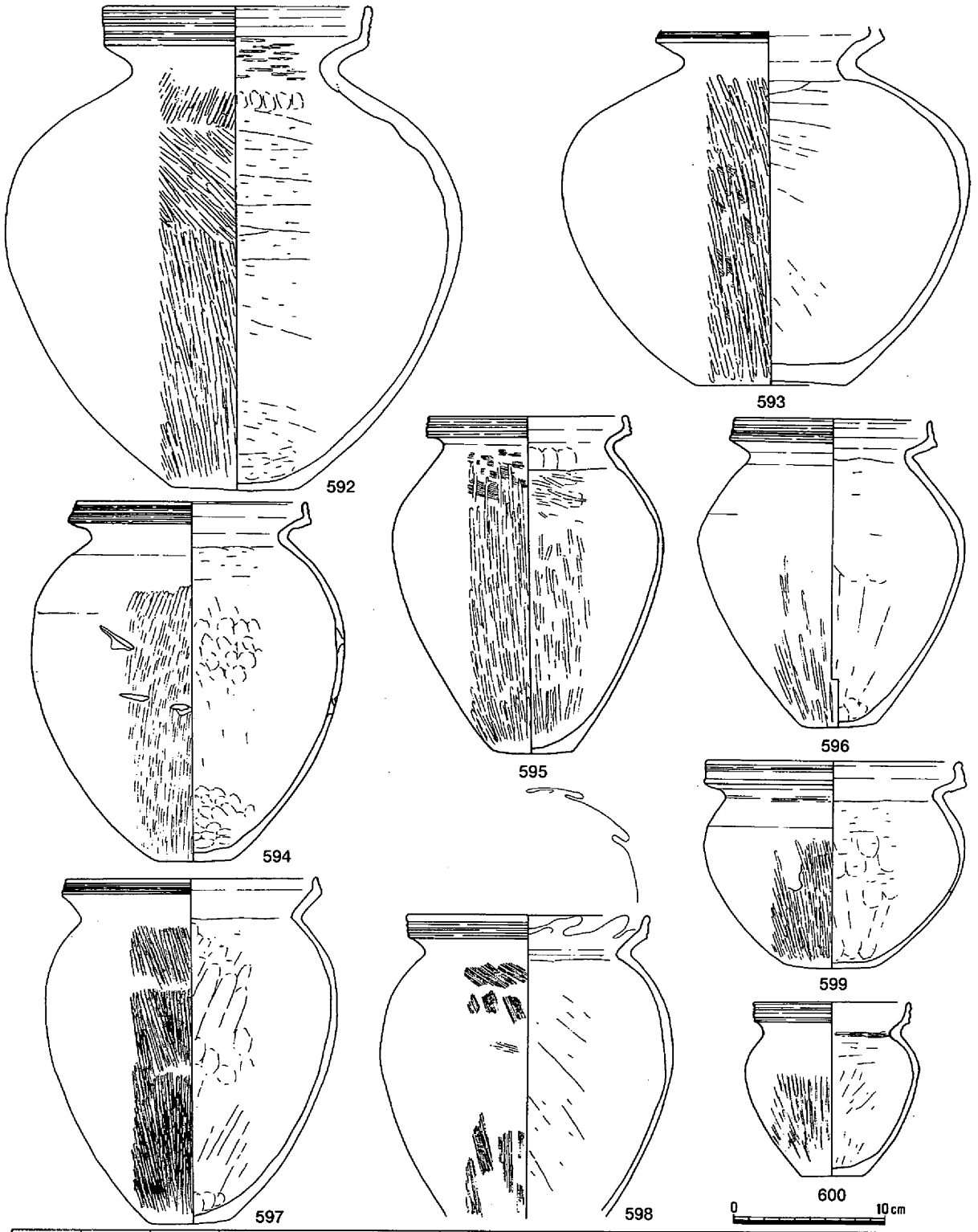
560~591は、肥厚した口縁端部に凹線、沈線を施文しないものである。560は口縁端部をヨコナデで凹部とする。文様は頸部に認められるがヘラの当り痕であり、それとして認識をするには躊躇する。外面調整はナナメハケ後タテヘラミガキ、内面は口縁にヨコヘラミガキ、頸部にナデ、胴部上半にヨコハケ、以下にはヘラケズリの後タテハケを施す。穿孔は胴部下半に2ヵ所あり、いずれも敲打痕で器壁が剝離している状態で孔を開けるに至っていない。561の外面調整はタテハケ後肩部にタテ、上半にヨコ、以下タテのヘラケズリを施し、底部にはヘラミガキが認められる。内面は口頸部にヨコヘラミガキ、上半にヨコで以下タテのヘラケズリを行い、さらにナデを施す。562は口縁端部を下方に張り出し気味にし、凹部を設ける。外面調整はタテハケ後タテのヘラミガキが認められるが、剝離のため不詳である。内面は頸部に押圧、胴中ほどにヨコ、以下ナナメからタテのヘラケズリを施す。563は底部が、張り出し気味を呈する。外面調整はナナメハケ後胴部中ほどからタテヘラミガキ、内

面は胴部上半にヨコ、以下タテのヘラケズリ後タテヘラミガキを施すが、底部には押圧が認められる。穿孔は、その可能性のある部分が認められるが確証がない。564は口縁部に、一部2本となる所が認められることから凹線としたほうが妥当であろう。外面調整はタテとナナメのハケ、底部もハケ、内面は肩部から胴部下半にナナメ、以下タテのヘラケズリを施す。穿孔は胴部中ほどにあり、外側から敲かれる。565の外面調整は肩部にヨコナデ、以下タテハケ、内面は胴部中ほどまでヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。566の外面調整は肩部にヨコナデ、以下タテハケ、内面は胴部中ほどまでヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。567の外面調整は細かいタテハケ、内面は胴部上半にヨコ、以下ナナメのヘラケズリを施し、胴部下半には押圧痕が認められる。568の外面調整は肩部にヨコナデ、胴部上半にタテ、胴部中ほどにナナメ、以下タテのハケ、底部はハケ、内面は胴部上半にヨコ、以下はタテのヘラケズリを施す。569の外面調整は肩部にヨコナデ、胴部上半にヨコ、後タテハケを底部まで認める。内面は胴部上半にヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。570の外面調整は肩部までヨコナデ、以下は細かいタテハケ後タテヘラミガキ、内面は胴部上半にヨコ、以下タテのヘラケズリ後タテヘラミガキを施す。571の外面調整は肩部までヨコナデ、胴部上半にナナメ、以下タテのハケ、内面は胴部上半にヨコ、中ほどにナナメ、以下タテのヘラケズリを施す。胴部上半には押圧が認められる。穿孔は胴部下半にあり、外側から敲かれる。572の外面調整は肩部までヨコナデ、胴部中ほどまでナナメ、タテのハケ、底部もハケ、内面は胴部中ほどまでヨコ、ナナメで以下はタテのヘラケズリを施す。穿孔は胴部中ほどにあり、外側から敲かれる。573の外面調整はタテハケ、内面は胴部中ほどまでヨコヘラケズリ、以下ナデを施す。穿孔は胴部上半にあり、外側から敲かれる。574の外面調整は胴部下半までナナメ、以下タテの粗いハケ、内面は頸部にナナメハケ、肩部にヨコヘラケズリ、以下タテのヘラケズリとナデを施す。穿孔は肩部にあり、外側から敲かれる。575の外面調整は胴部上半までタテ、中ほどでナナメ、以下はタテのハケ、内面は胴部下半までヨコ、以下ナナメのヘラケズリを施す。穿孔は胴部中ほどにあり、外側から敲かれる。576の外面調整は胴部最大径までナナメ、以下タテのハケ、内面は胴部中ほどまでヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。577の外面調整は肩部までヨコナデ、胴部上半にナナメ、以下タテの細かいハケ、内面は胴部上半にヨコ、以下ナナメからタテのヘラケズリ後ナデを施す。578の外面調整は頸部でヨコナデ、以下はタテハケ後タテヘラミガキ、内面は肩部にナデ、胴部中ほどにナナメ、以下タテのヘラケズリを施す。579の外面調整は頸部にタテ、肩部にヨコ、胴部中ほどにナナメ、以下タテのハケ、内面は肩部にヨコ、胴部上半にナナメ、以下タテのヘラケズリを施し、後胴部中ほどから底部にナデが認められる。穿孔は肩部と胴部下半の2ヵ所あり、外から敲かれる。580は口縁端部内面に、沈線状の施文が認められる。外面調整は粗いタテハケ後ナナメからタテのヘラミガキ、底部はヘラケズリ、内面は口頸部にヨコヘラミガキ、以下ナナメヘラケズリを施す。581の胴下半は被熱で器面剝離している。外面調整は胴部最大径までヨコ、以下タテのヘラミガキ、内面は口縁部にヨコヘラミガキ、肩部に押圧、以下ナナメヘラケズリを施し、底部にハケを認める。582の外面調整は肩部までヨコナデ、以下タテハケ後タテヘラミガキ、内面は肩部にヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。583は、内面調整内容から鉢と考えられるが甕とした。外面調整は肩部までナデ、以下ナナメヘラミガキ、内面は頸部から胴部下半までヨコヘラミガキを施す。584の外面調整はナデ、内面はナナメヘラケズリを施す。585の頸部は強いヨコナデにより、明瞭な稜を形成させる。外面調整は煤が付着し不詳であるが、細かいハケが認められる。内面は肩部にヨコ、胴部中ほどまでナナメ、以下タテのヘラケズリを施す。586の外面調整はタテの粗いハケの後ナナメ

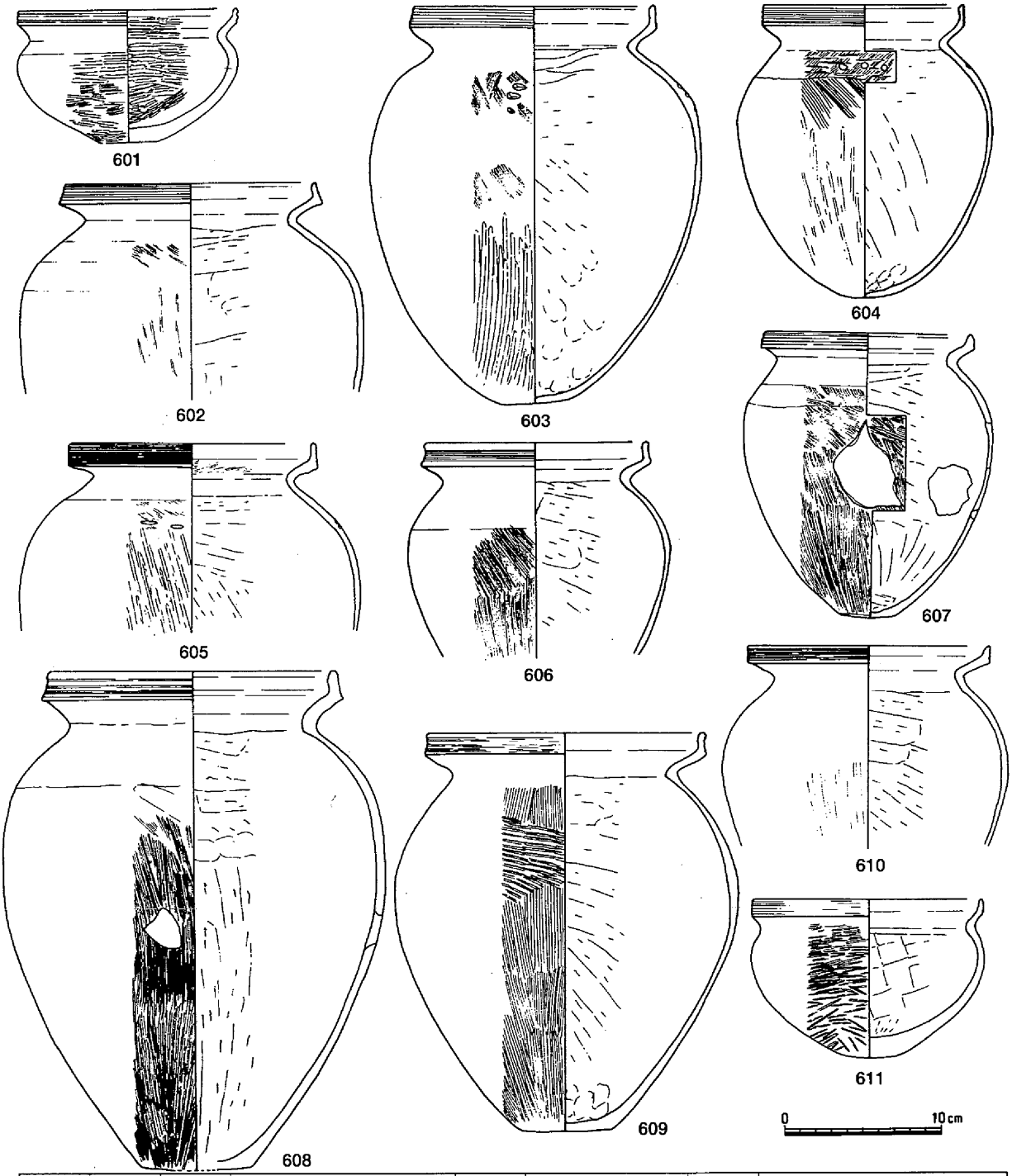
ヘラミガキ、内面は肩部以下にヨコヘラケズリを施す。587の外面調整は肩部にナナメハケ、胴部上半にヨコ、以下タテのヘラミガキ、内面は口頸部にヨコヘラミガキ、胴部中ほどまでヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。588の外面調整は肩部までヨコナデ、胴部上半にヨコ、以下タテの細かいハケ、内面は肩部にヨコ、以下ナナメのヘラケズリを施す。589は口縁端部に、２本１対の線刻が施文される。外面調整はタテの細かいハケ後タテヘラミガキ、内面は口頸部にヨコナデ、以下タテヘラケズリを施す。590の外面調整は肩部までヨコナデ、以下はヨコ後タテの細かいハケ、内面は肩部以下にヨコヘラケズリを施す。591の口縁部は、ナデによる凹凸を作る。文様は胴部上半に雑な沈線が認められるが、文様として施文されたかについては判断しかねる。外面調整はタテハケ、後胴部中ほどから下方にまばらにタテヘラミガキを施す。内面は胴部上半までナデ後押圧、以下ナナメヘラケズリを施す。592～611は口縁部が上方に拡張し、沈線やヨコナデにより沈線状の文様を施文するものである。592は口縁部に凹線を施文し、後ヨコナデを、その影響で内面に凹凸が形成される。外面調整は肩部にタテ、胴部上半にナナメ、以下タテのヘラミガキ、内面は頸部にヨコヘラミガキ、肩部に押圧、胴部下半までヨコ、以下タテ、底部にヨコのヘラケズリを施す。593は口縁部に凹線を施文し、後ヨコナデを行う。外面調整はナナメハケ後タテヘラミガキ、内面は胴部中ほどまでヨコヘラケズリ、以下ナデを施す。594の外面調整は肩部までヨコナデ、以下タテヘラミガキ、底部はヘラミガキ、内面は肩部にヨコヘラケズリ、胴部中ほどに押圧後タテヘラケズリ、底部には押圧を施す。穿孔は胴部に3ヵ所認められ、その内の1ヵ所は貫通していない。孔には2.7×0.2cmの細長いものが認められる。595は口縁部に凹線を施文し、後にヨコナデを行う。外面調整は肩部にナナメハケ、後胴部下半までタテヘラミガキ、底部は不定方向のヘラミガキ、内面は肩部に押圧、胴部上半にヨコヘラケズリ後ナナメヘラミガキ、以下タテヘラケズリ後タテヘラミガキを施す。596の外面調整は胴部上半までヨコナデ、以下タテヘラミガキ、底部は一定方向のヘラミガキ、内面は肩部から胴部中ほどまでヨコヘラケズリ後ナデ、以下タテヘラケズリ後ナデを施す。597の外面調整はタテヘラミガキ、内面は胴部下半までヨコからナナメのヘラケズリ、後押圧とナデ、以下ナナメハケ、底部に押圧を施す。598の口縁部内面には、髪の毛と思われる圧痕が文様風に認められる。外面調整は胴部上半までナナメ、以下タテのハケ、後胴部最大径部分でヨコヘラミガキ、内面は、丁寧なナナメヘラケズリを施す。599は、甕として扱った。頸部に沈線を施文する。外面調整は肩部にナデ、以下タテヘラミガキ、内面は胴部上半までヨコヘラケズリ、以下はナデと押圧を施す。600の外面調整は胴部上半にヘラミガキ、以下タテハケで一部ヘラミガキ、内面は頸部にヨコヘラミガキ、肩部にヨコ、胴部下半にタテのヘラケズリ、以下ハケを施す。601は図で甕としたが、鉢というべきである。外面調整は肩部から底部にナナメヘラミガキ、内面は口頸部から底部にナナメヘラミガキを施す。602の口縁部には、クシガキ沈線を施文する。外面調整は肩部にナナメの細かいハケ、以下タテヘラミガキ、内面は胴部中ほどまでヨコヘラケズリを施す。603の口縁部には、クシガキ沈線を施文する。文様は肩部に３個、タテの刺突文が認められる。外面調整は胴部中ほどまでナナメハケ、以下タテヘラケズリ、底部にヘラミガキ、内面は胴上半までヨコ、胴中ほどにナナメのヘラケズリ、下半から底部に押圧とナデを施す。604の口縁部には、クシガキ沈線を施文する。文様は肩部にヨコに、３個刺突文が認められる。外面調整は胴部上半までナナメハケ後ヨコヘラミガキ、以下タテヘラミガキ、内面は胴部上半までヨコヘラケズリ、胴下半までタテヘラケズリ、以下押圧とナデ、底部に押圧を施す。605の口縁部には、クシガキ沈線を施文する。文様は肩部に２個、ヨコの刺突文が認められる。外面調整は胴部上半までナナメハケ後タ

テヘラミガキ、内面は口縁にヨコハケ、肩部にヨコ、以下ナナメのヘラケズリを施す。606の外面調整は肩部にヨコナデ、胴部中ほどにナナメ、以下タテのハケ、内面はナナメヘラケズリを施す。607の底部は、張り出し気味となる。外面調整は肩部にナナメとタテ、胴部最大径部分にナナメ、以下タテのハケ、底部にハケ、内面は胴部下半までヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。穿孔は胴部に2ヵ所あり、外側から敲かれる。608の外面調整は肩部に丁寧なヨコナデ、胴部上半にナナメ、以下タテのハケ、内面は胴部上半にヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。胴部内面には、胴部下半から底部上に炭化物が付着している。穿孔は胴部中ほどにあり、外から敲かれる。609の口縁部には、ヨコナデの条線が明瞭に認められる。外面調整は肩部にタテハケ、胴部上半にナナメのタタキ、以下タテハケ、内面は胴部中ほどまでヨコ、以下ナナメのヘラケズリ、底部に押圧とナデを施す。610の口縁部には、ヨコナデの条線が明瞭に認められる。外面調整は胴部にタテハケ、内面は胴部中ほどまでヨコ、以下ナナメのヘラケズリを施す。611は鉢としたほうがよいものである。口縁部には、ヨコナデの条線が明瞭に認められる。外面調整はヨコヘラミガキ、内面はヘラケズリ、後ハケを施す。

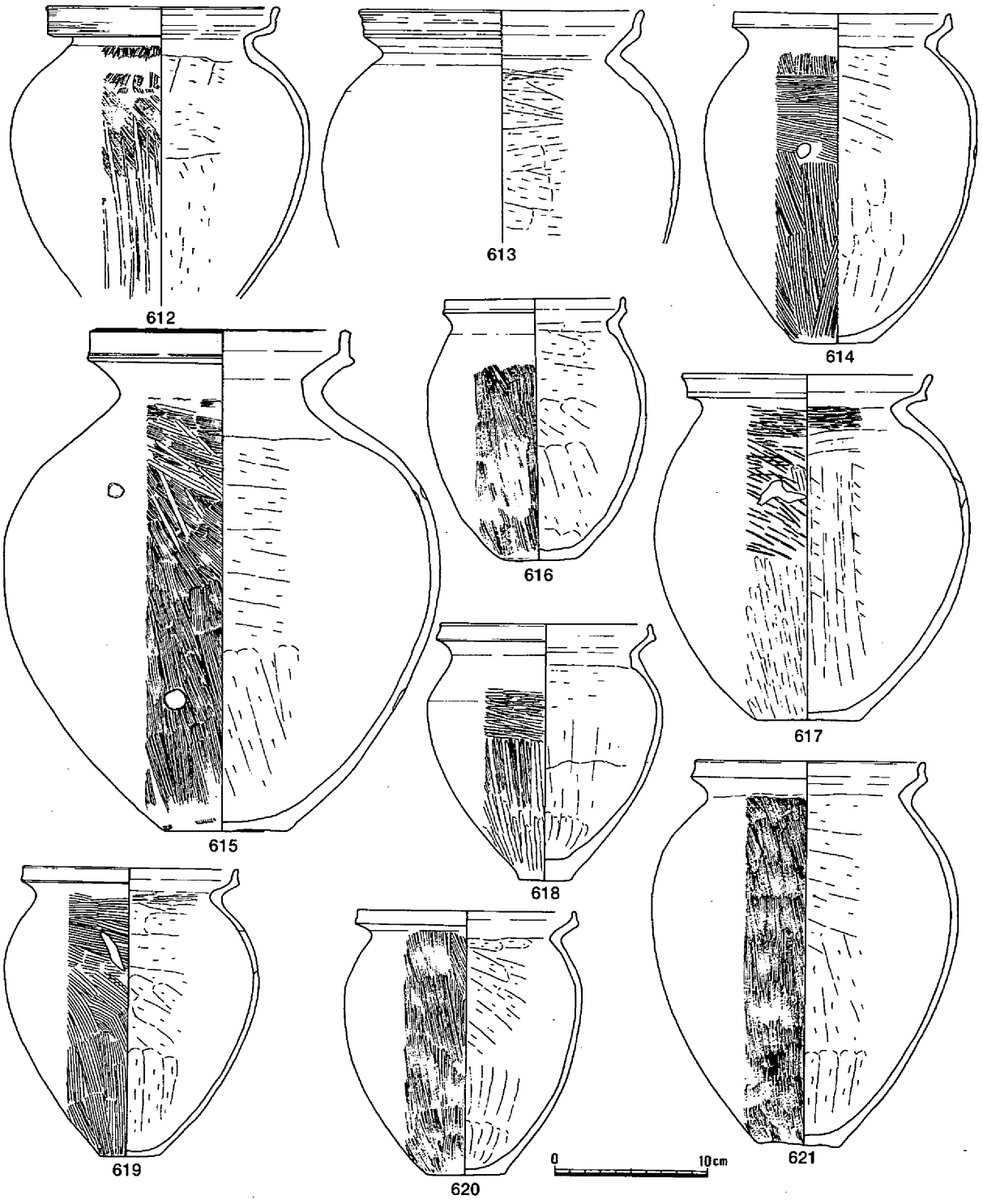
612～630は、上方に拡張する口縁部に凹線や沈線などの文様を持たないものである。612の口縁部には、ヨコナデの条線がわずかに認められる。外面調整は肩部にタテ、以下ナナメのハケ、後胴部上半からタテヘラミガキを施す。内面は胴部中ほどまでヨコ、以下タテのヘラケズリを行う。煤は、厚く付着する。613の外面調整は煤付着で不詳であるが、ハケとヘラミガキが認められる。内面は、ヨコヘラケズリを施す。器壁は胴部下方に行くにしたがい、肩部の厚さに比較しかなり薄くなる。614の外面調整は肩部にタテ、胴部上半にヨコ、以下タテのハケ、内面は胴部中ほどまでナナメ、以下タテのヘラケズリ、後下半部にナデを施す。穿孔は胴部中ほどに円形の敲打痕を残すが、孔となっていない。615の口縁端部は、凹部を形成する。外面調整は肩部にヨコハケ後ナナメヘラミガキ、以下ナナメの細かいハケ、内面は胴下半部までヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。穿孔は胴部上半と下半の2ヵ所にあり、いずれも円形の敲打痕のみで孔となっていない。616の外面調整はタテの細かいハケ、内面は胴部上半にヨコ、以下ナナメのヘラケズリ後ナデを施す。617の外面調整は肩部にヨコ、胴部中ほどにナナメ、以下タテのヘラミガキ、底部はヘラミガキ、内面は頸部にヨコヘラミガキ、肩部にヨコ、以下ナナメのヘラミガキ状のケズリ、後タテヘラケズリを施す。穿孔は胴部上方にあり、外側から敲かれる。618の外面調整は胴部上中ほどから下半までタテハケ、後胴部最大径部分にヨコ、以下タテのヘラミガキ、内面は胴部上中ほどまでヨコ、以下タテのヘラケズリで底部には丁寧なヘラケズリを施す。619の外面調整は胴部中ほどまでヨコの粗いハケ、後下半までタテの細かいハケ、内面は頸部にヨコヘラミガキ、胴部下半までヨコ、以下タテのヘラミガキを施す。穿孔は肩部にあり、外側から敲かれる。620の外面調整は雑なタテハケ、内面は肩部にヨコ、胴部中ほどまでナナメ、以下タテのヘラケズリを施す。621の外面調整はタテの細かいハケ、内面は胴部中ほどまでヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。底部内面には、底より上に炭化物が認められる。622の外面調整は磨滅のため不詳であるが、胴部下半部にはタテヘラミガキが認められる。内面は胴部上半にヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。623の外面調整は被熱により器面が剝落し、不詳であるがタテの細かいハケとヘラミガキが認められる。内面は肩部にヨコヘラケズリ、以下はヘラケズリの後ナデを施す。624は器高が低く、底部径の大きい器形を呈する。外面調整は胴部中ほどまで鉄分の付着があり不詳であるが、下半はタテハケ後ナナメのヘラミガキを認める。内面は口頸部にヨコヘラミガキ、胴部中ほどまでナナメヘラケズリ、以下ヨコのヘラミガキ状の丁寧なヘラケズリを施す。625の外面調整は肩部から底



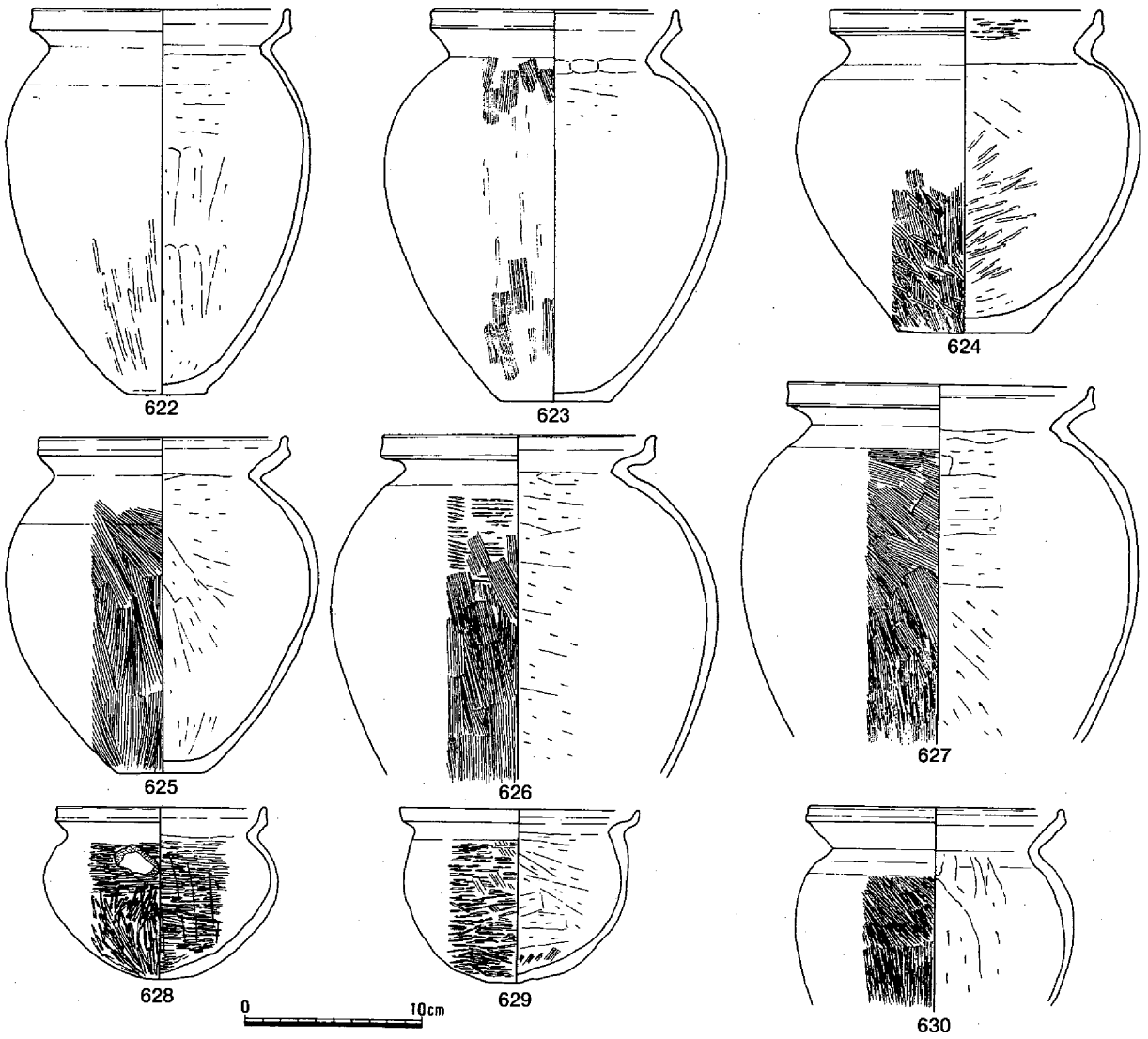
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
592	弥生土器	甕	17.1	8.5	32.3	良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線
593	弥生土器	甕		9.8		良好	5YR7/6(橙)	砂粒(多)	口縁部に凹線3条　底部に籾痕
594	弥生土器	甕	14.8	5.1	23.9	良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線　内外面に煤付着　内面にお焦げ　胴部に穿孔3カ所(内1カ所未貫通)
595	弥生土器	甕	12.9	5.1	22.5	良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	口縁部に凹線　内外面ほぼ全体に煤付着
596	弥生土器	甕	12.6	4.9	20.4	良好	10YR6.5/3(にぶい黄褐)	砂粒	口縁部に凹線　外面全体に煤付着
597	弥生土器	甕	16.3	5.2	22.9	良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	頸部以外に煤付着　胴部内面下半に炭化粒付着
598	弥生土器	甕	15.6			良好	2.5Y6/1(黄灰)	砂粒(少)	口縁部に凹線　口縁部内面に髪の毛か紐(糸)の痕外面全体に煤付着
599	弥生土器	甕	16.6	6.0	13.9	良好	10YR8/3(浅黄橙)	砂粒	口縁部に凹線　胴部中位に穿孔
600	弥生土器	甕	10.2	4.1	11.5	良好	5Y7/2(灰白)	砂粒(多)	口縁部・胴部に煤付着　口縁部に凹線



掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
601	弥生土器	鉢	14.0	3.6	8.6	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線
602	土師器	甕	(16.0)			良好	10YR5/2(灰黄褐)	砂粒	口縁部にクシガキ沈線　口縁部～胴部に煤付着
603	土師器	甕	15.3	4.1	25.6	良好	5Y5/1(灰)	砂粒(少)	口縁部にクシガキ沈線　肩部に刺突文３個　口縁部にかけて煤付着
604	土師器	甕	12.5		19.0	良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒(少)	口縁部にクシガキ沈線　全面に煤付着　肩部に刺突　文横３個
605	土師器	甕	15.4			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部にクシガキ沈線　肩部に刺突文２個　煤付着
606	土師器	甕	14.0			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	口縁部にクシガキ沈線
607	弥生土器	甕	12.8	4.5	18.3	良好	5Y5/1(灰)	砂粒	胴部に穿孔２ヵ所　外面ほぼ全体に煤付着
608	弥生土器	甕	(18.1)	(7.0)	31.9	良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	口縁部に凹線　内面胴部中位～底部に煤付着　胴部に穿孔
609	弥生土器	甕	17.3	5.7	25.6	良好	10YR7/3(にぶい黄褐)	砂粒	ほぼ全面に煤付着
610	土師器？	甕	15.4			良好	5YR6/6(橙)	砂粒(少)	口縁部と胴部に煤付着
611	弥生土器	鉢	14.5	3.7	10.2	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	

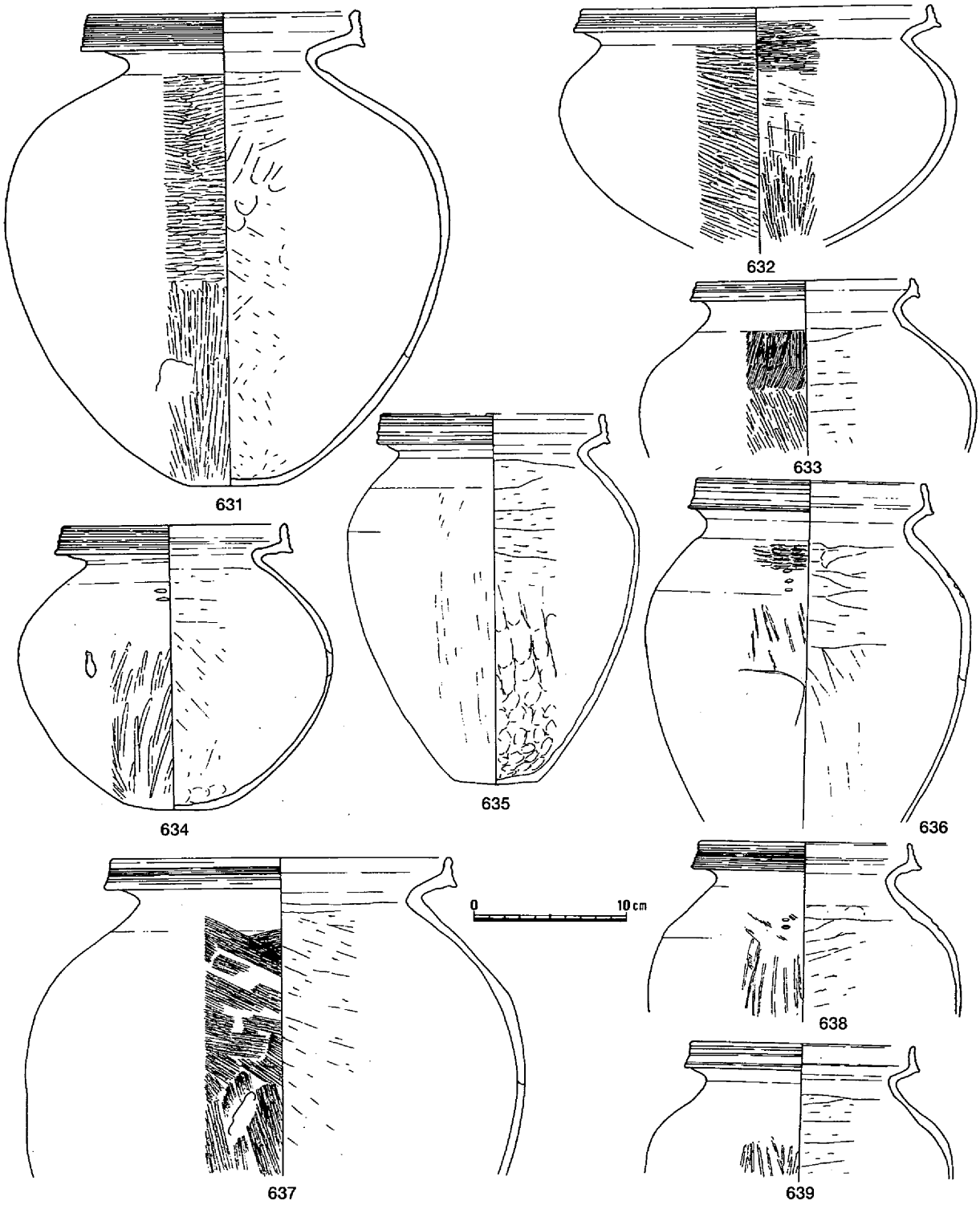


掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
612	弥生土器？	甕	14.8			良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	内外面口縁部・肩部～底部に煤付着
613	弥生土器？	甕	18.2			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	煤付着　吹きこぼれ痕あり
614	弥生土器	甕	14.0	5.2	21.8	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒(少)	肩部～底部に煤付着　胴部中位に敲打痕　胴部内面中位に炭化粒付着
615	弥生土器	甕	16.7	7.9	32.9	良好	7.5YR7/2(明褐灰)	砂粒	肩部と胴部に敲打痕
616	弥生土器	甕	11.5	5.0	17.3	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	外面部に煤付着
617	弥生土器	甕	16.0	6.8	22.7	良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	外面全面に煤付着　胴部上半に穿孔
618	弥生土器	甕	13.4	3.4	16.9	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	砂粒(多)	口縁部～肩部片側と肩部～底部に煤付着
619	弥生土器	甕	13.9	3.8	19.0	良好	2.5Y8/2(灰白)	砂粒	肩部に穿孔　外部全面に煤付着
620	弥生土器	甕	14.1	5.1	17.3	良好	2.5Y8/3(浅橙)	砂粒	内外面全体に煤付着
621	弥生土器	甕	15.0	5.3	25.1	良好	5Y7/2(灰白)	砂粒	底部に炭化物　肩部～底部に煤付着

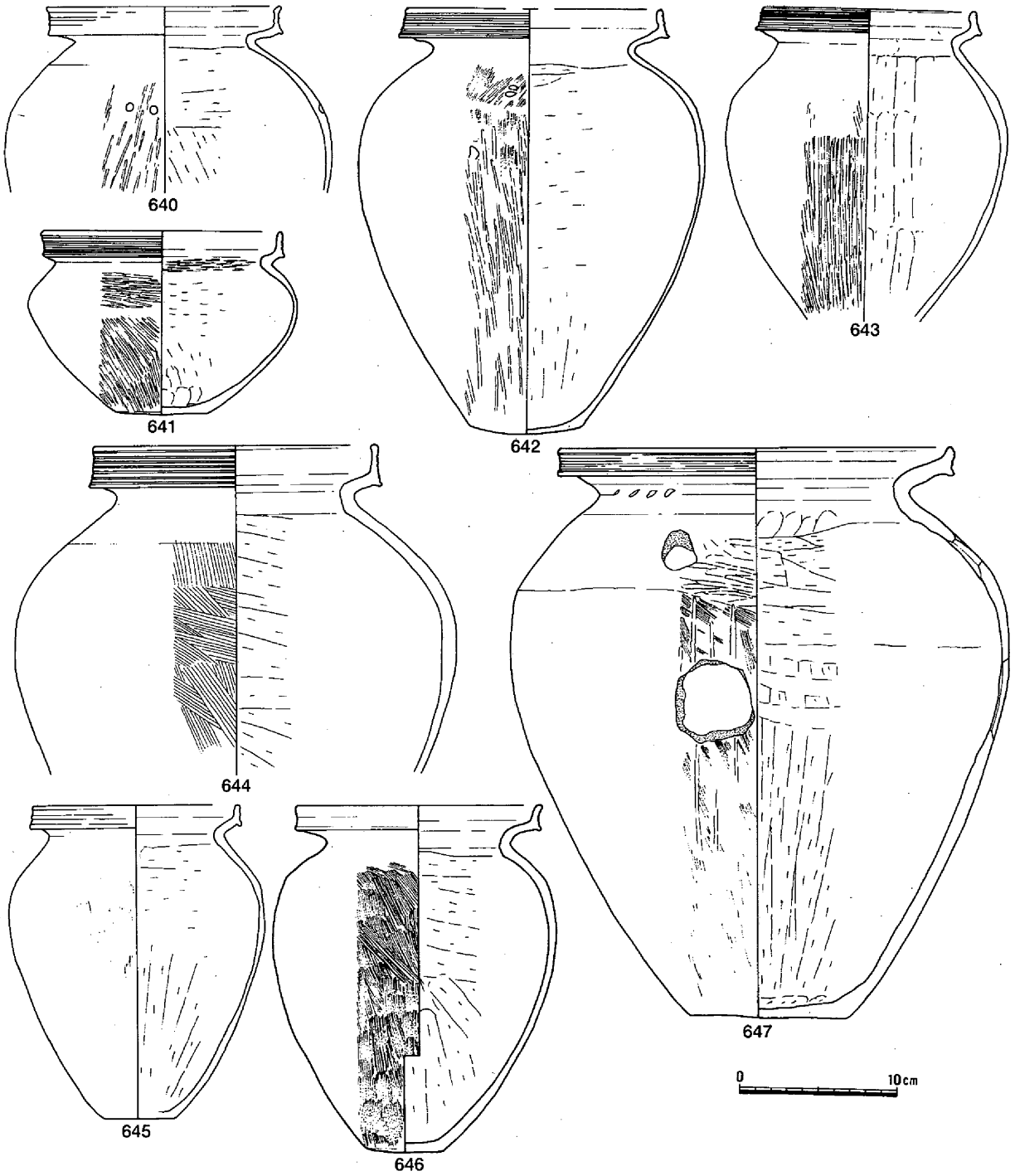


掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
622	弥生土器	甕	13.6	4.4～4.6	21.7	良好	2.5Y8/3(淡黄)	砂粒	外面胴部全体に煤付着
623	弥生土器	甕	13.5	6.0	21.9	良好	N2/0(黒)	砂粒	外面全体に煤付着
624	弥生土器	甕	15.0	7.5	18.1	良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	外面全体に煤付着
625	弥生土器	甕	13.8	5.1	19.1	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	口縁部・肩部～底部に煤付着
626	弥生土器	甕	15.1			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	タタキ後ハケ
627	弥生土器	甕	16.9			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	胴部に煤付着
628	弥生土器	甕	11.7	3.2	9.7	良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	肩部に穿孔
629	弥生土器	甕	13.4		9.8	良好	7.5YR8/4(浅黄橙)	砂粒	丸底に近い
630	弥生土器？	甕	14.0			良好	10YR5/2(灰黄褐)	砂粒	内外面ほぼ全体に煤付着

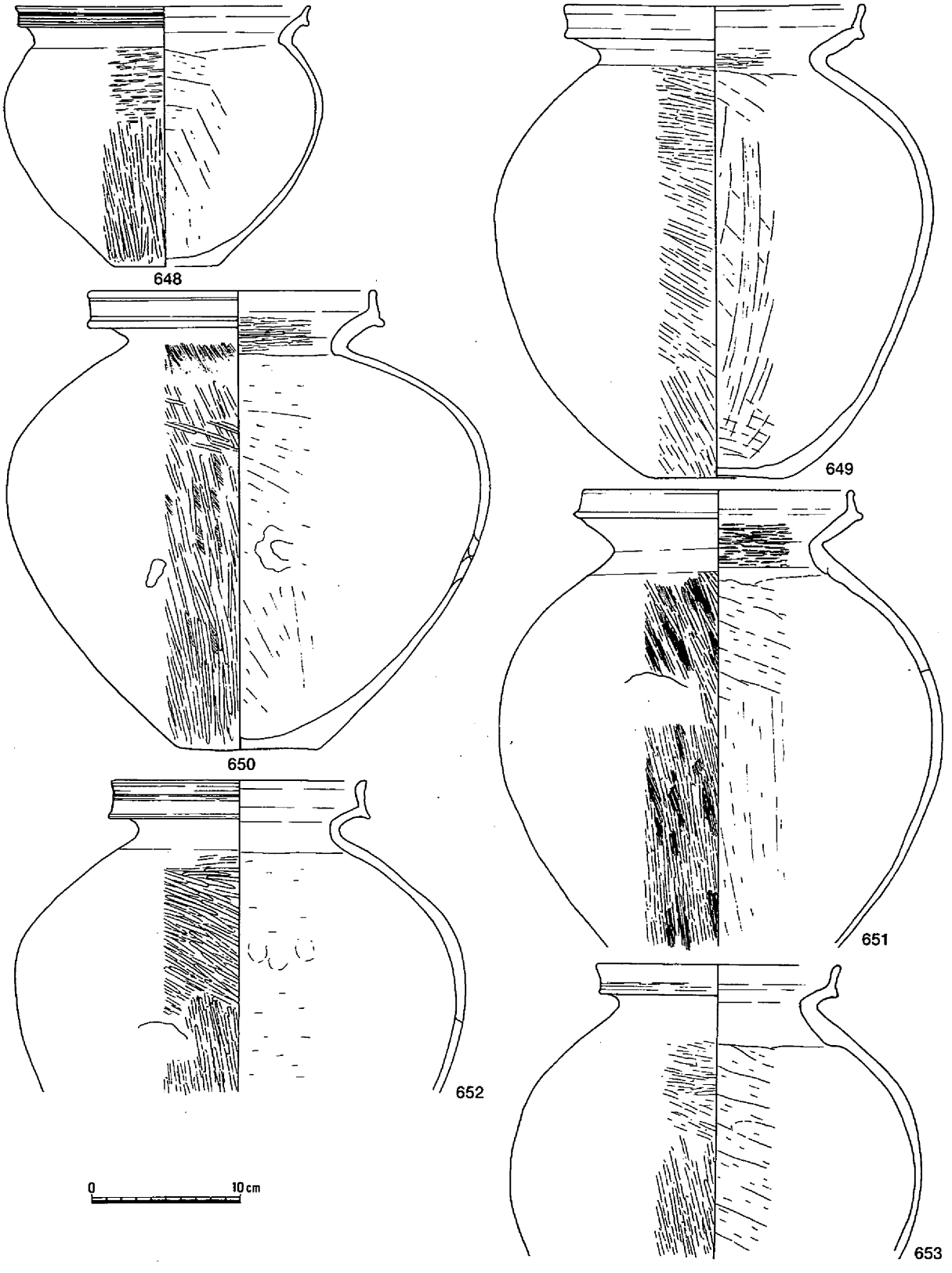
部までナナメからタテのハケ、内面は肩部にヨコ、以下ナナメからタテのヘラケズリを施す。626の頸部には、強いヨコナデで稜線ができる。外面調整は肩部にヨコのタタキ、以下ナナメからタテの細かいハケ、内面はヨコヘラケズリを施す。627の外面調整は肩部にヨコナデ、以下ナナメからタテの細かいハケ、後タテヘラミガキ、内面は胴部中ほどまでヨコ、以下ナナメのヘラケズリを施す。628は甕としたが、鉢としても問題はない。外面調整は胴部中ほどまでヨコ、以下底部までタテのヘラミガキ、内面はヨコヘラケズリ後ヨコヘラミガキを施す。穿孔は肩部にあり、内側から敲かれる。629は628と同様に、鉢として問題はない。外面調整はタテハケ後ヨコヘラミガキ、内面は胴下半までヨコヘラケズリ、底部はハケを施す。630の外面調整は肩部までヨコナデ、以下ナナメからタテのハケ、



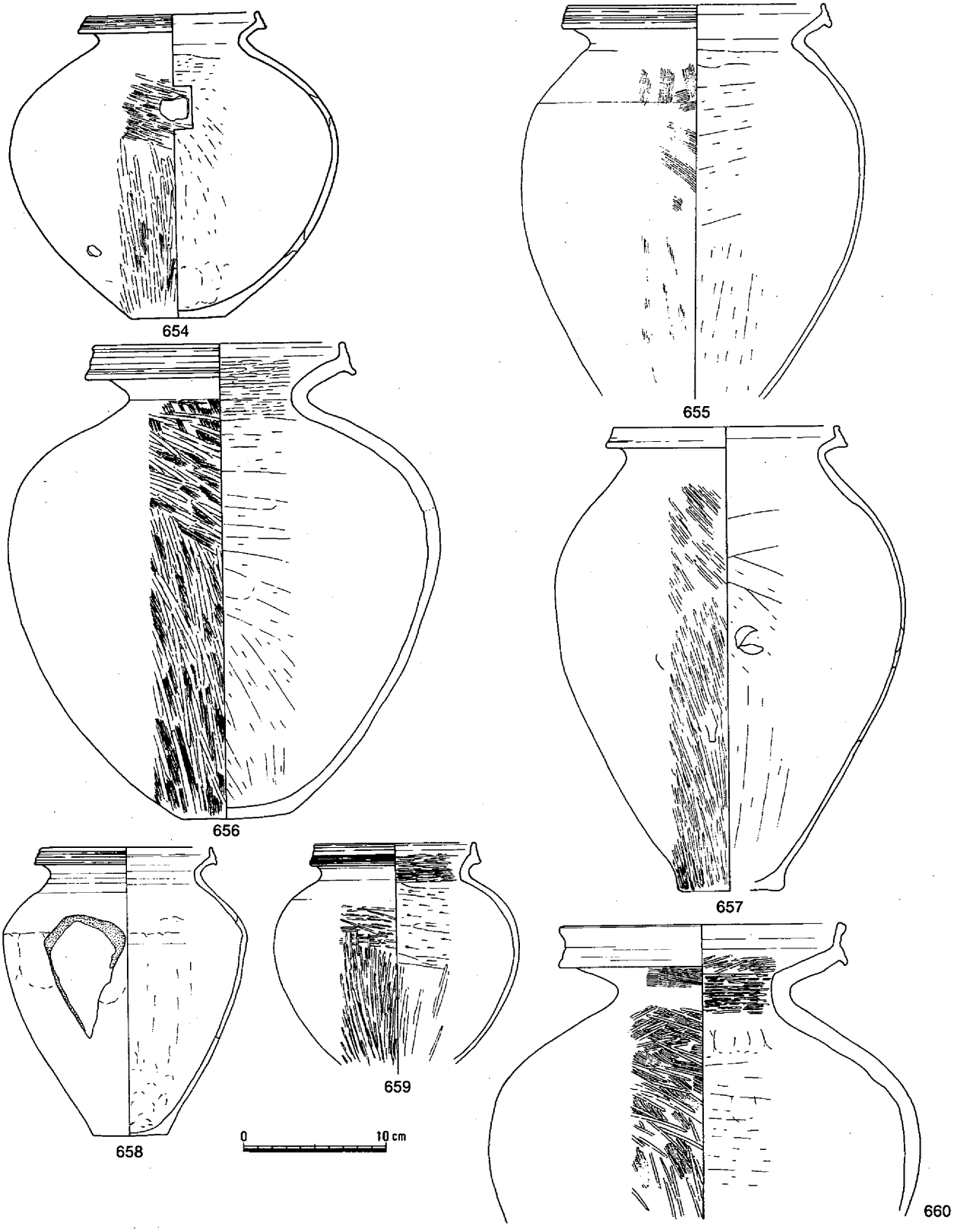
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
631	弥生土器	甕	17.4	6.0	31.5	良好	7.5Y R6/3(にぶい褐)	砂粒(多)	口縁部に凹線　胴部下半に穿孔
632	弥生土器	甕	22.7			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	口縁部に凹線3条
633	弥生土器	甕	14.1			良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒(少)	口縁部に凹線　肩部～胴部に煤付着
634	弥生土器	甕	14.5	7.0	19.0	良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒(少)	口縁部に凹線　肩部に刺突文　内面胴部下半に炭化物付着
635	弥生土器	甕	(14.4)	(5.4)	24.5	良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	口縁部に凹線　外面に煤と炭化物多く付着
636	弥生土器	甕	14.8			良好	10Y R6/3(にぶい黄橙)	砂粒	胴部に穿孔　外面と内面肩部と底部に煤付着
637	弥生土器	甕	22.0			良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒(少)	口縁部に凹線　胴部中位に穿孔
638	弥生土器	甕	13.8			良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	口縁部に凹線　肩部に刺突文2個
639	弥生土器	甕	14.6			良好	10Y R7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線



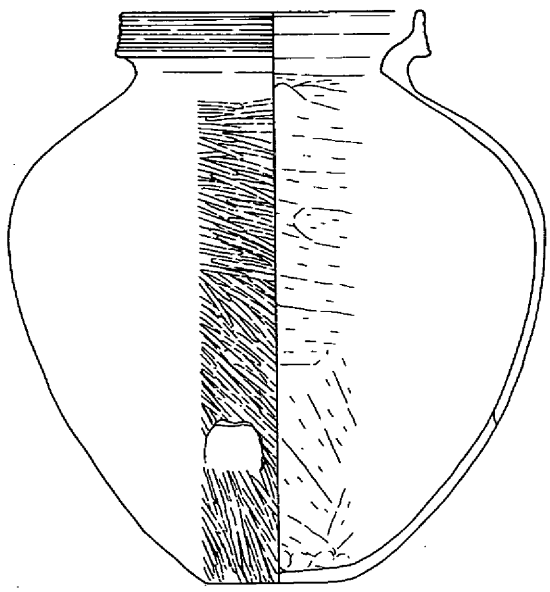
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
640	弥生土器	甕	15.0			良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒(少)	口縁部に凹線　肩部に刺突文2個　煤付着
641	弥生土器	甕	15.0	6.0	11.6	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に沈線
642	弥生土器	甕	(16.1)	7.2	27.1	良好	2.5Y6/3(にぶい黄)	砂粒	口縁部に沈線　肩部に刺突文　胴部上半に穿孔　全面に煤付着
643	弥生土器	甕	13.1			良好	10YR7/1(灰白)	砂粒	口縁部にヘラガキ沈線　胴部下半に煤付着
644	弥生土器	甕	17.8			良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に沈線
645	弥生土器	甕	13.0	4.5	19.9	良好	5YR7/1(明褐灰)	砂粒	口縁部と肩部～底部に煤付着
646	弥生土器	甕	15.6	5.1	22.2	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	全面に煤付着
647	弥生土器	甕	24.6	10.1	36.4	良好	7.5YR6/2.5(にぶい褐)	砂粒	肩部・胴部に穿孔各1個　胴部中位～底部に煤付着

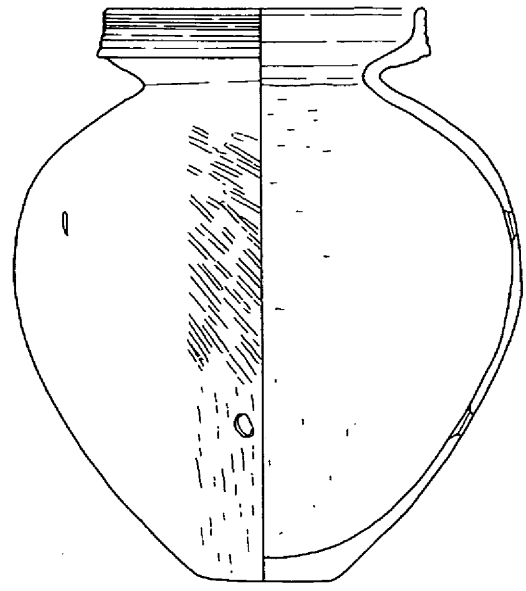


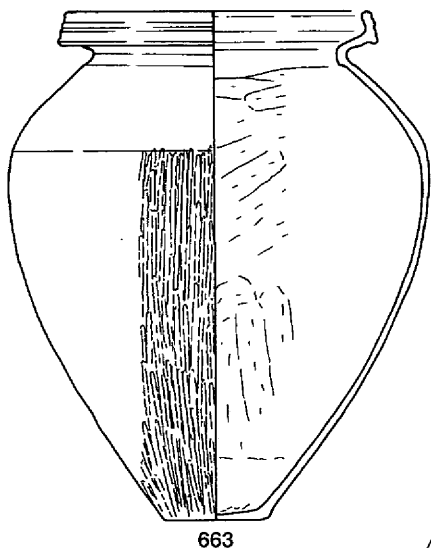
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
648	弥生土器	甕	19.7	7.2	17.5	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒(少)	
649	弥生土器	甕	20.0	9.6	32.2	良好	10YR7/1(灰白)	砂粒	内面口縁部～胴部中位に煤付着　表面剥離顕著
650	弥生土器	甕	18.8	9.4	31.5	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒(多)	胴部に穿孔3カ所
651	弥生土器	甕	17.9			良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	胴部中位に穿孔
652	弥生土器	甕	16.9			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	胴部中位に穿孔　胴部下半に煤付着
653	弥生土器	甕	16.2			良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	

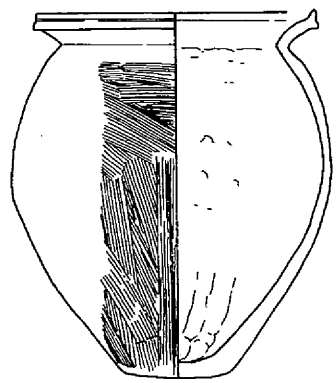


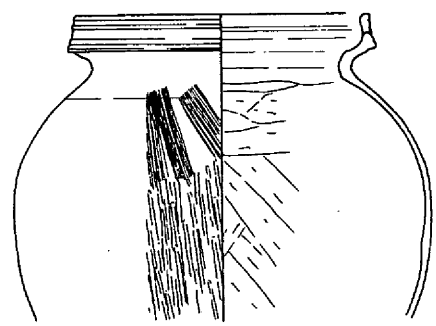
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
654	弥生土器	甕	11.8	6.6	21.1	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	口縁部に凹線　胴部上半と下半に穿孔
655	弥生土器	甕	17.5			良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線　外面肩部に刺痕
656	弥生土器	甕	17.1	7.8	33.4	良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒(多)	口縁部に凹線
657	弥生土器	甕	15.3	7.3	32.4	良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒(僅)	口縁部に凹線　胴部に穿孔3ヵ所
658	弥生土器	甕	(11.7)	5.1	20.1	良好	2.5Y6/1(黄灰)	砂粒	口縁部に凹線　内外面に煤付着　胴部上半に穿孔
659	弥生土器	甕	11.0			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	
660	弥生土器	甕	19.0			良好	2.5Y5/1(黄灰)	砂粒(少)	

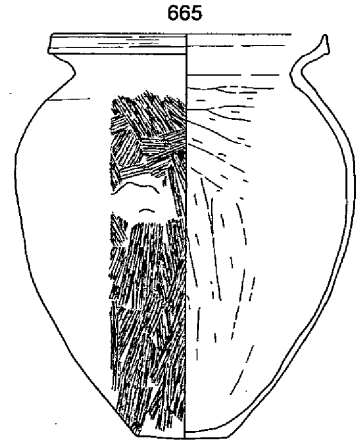

661

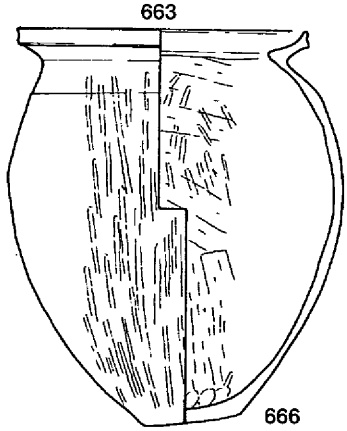

662

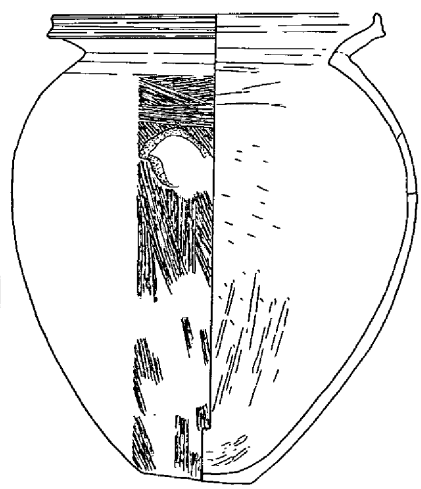

663


664


665

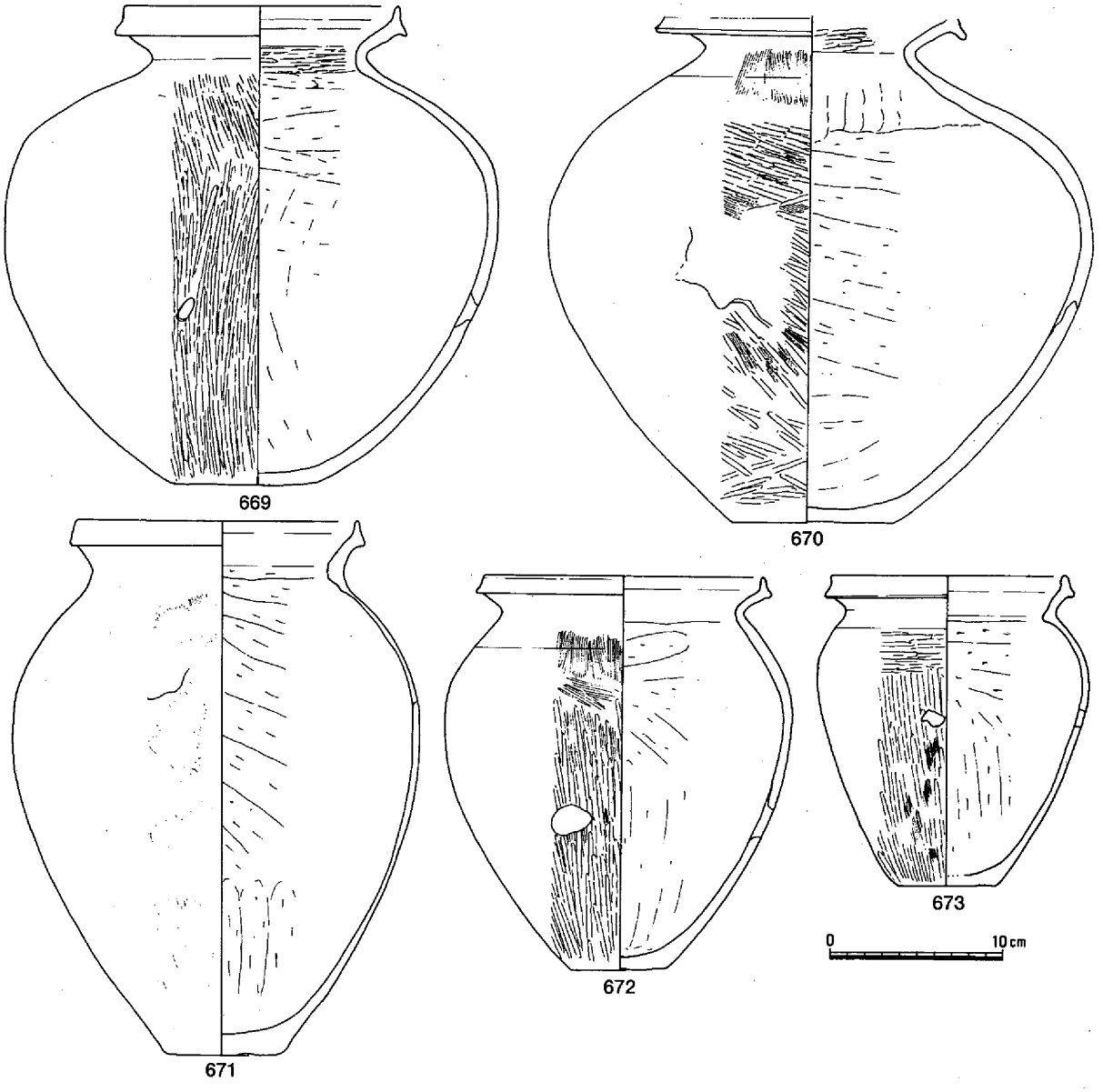

668


666


667

0　10cm

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
661	弥生土器	甕	15.6	7.6	30.6	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	口縁部に凹線　胴部下半に穿孔　肩部に刺圧痕
662	弥生土器	甕	16.6	7.3	30.4	良好	2.5Y5/2(暗灰黄)	砂粒	口縁部に凹線　肩部と胴部下に穿孔各1個
663	弥生土器	甕	15.9	5.5	27.1	良好	N2/(黒)	砂粒	外面全体に煤付着　内面にお焦げ
664	弥生土器	甕	14.5	5.5	19.5	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	ふきこぼれ痕あり　内面にお焦げ
665	弥生土器	甕	15.4			良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線　口縁部内面に沈線
666	弥生土器	甕	15.0	5.1	20.4～21.05	良好	2.5YR6/2.5(灰黄)	砂粒	全面に煤付着　内面にお焦げ
667	弥生土器	甕	16.7～17.2	5.8	24.7	良好	7.5YR6/2(灰褐)	砂粒	肩部に穿孔　外面全体に煤付着
668	弥生土器	甕	14.3	4.9	21.4	良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒(少)	胴部中位に穿孔



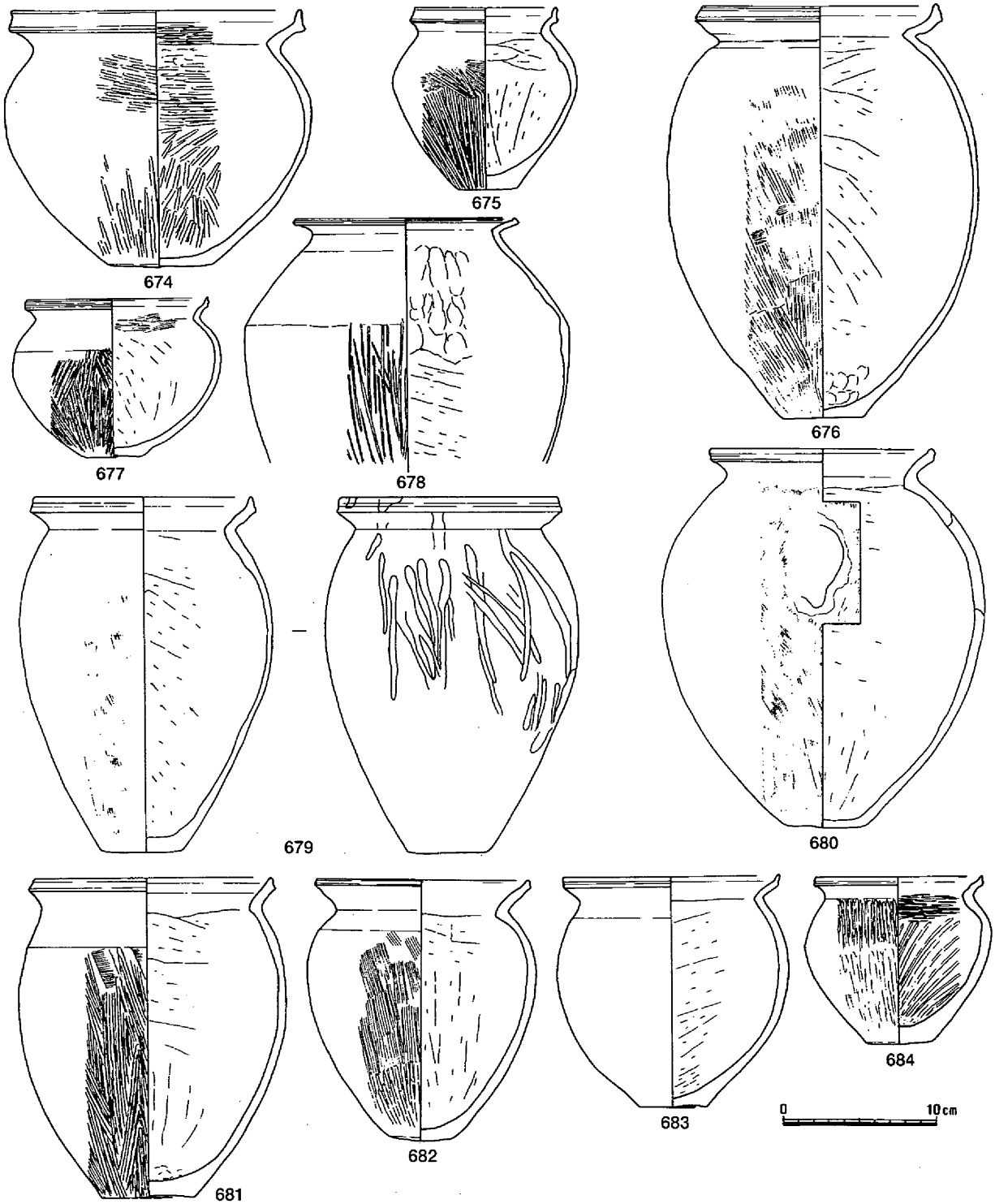
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
669	弥生土器	甕	15.8	8.3	28.2	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	胴部中位に穿孔
670	弥生土器	甕		9.5		良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線　胴部に穿孔
671	弥生土器	甕	16.5	7.2	31.2	良好	7.5YR7/2(明褐灰)	砂粒(多)	肩部に穿孔
672	弥生土器	甕	16.0	5.4	23.2	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒(少)	胴部に穿孔
673	弥生土器	甕	13.5	5.8	18.1	良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	胴部中位に穿孔

内面はタテヘラケズリを施す。

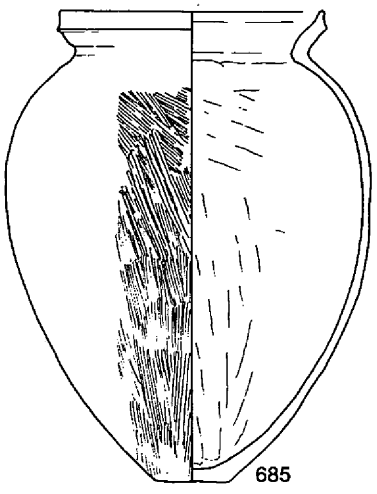
631～665は上方への拡張に対し、下方のそれが極めて少ないものである。631の外面調整は、頸部のヨコナデが強く稜線をつくる。胴部中ほどまでヨコ、以下タテヘラミガキ、内面は肩部にヨコ、以下ナナメのヘラケズリ、後胴部上半にナデを施す。底部外面は、ヘラミガキが認められる。632の外面調整は肩部にヨコ、以下ナナメのヘラミガキ、内面は口縁にヨコヘラミガキ、胴部にヨコヘラケズリ、後肩部にヨコ、胴部中ほどから下半にタテのヘラミガキを施す。633の外面調整は肩部にタテの細かいハケ、以下ナナメヘラミガキ、内面はヨコヘラケズリを施す。634の文様は、肩部に刺突文を縦に施文する。外面調整は胴部中ほどから下半にタテヘラミガキ、内面は肩部にヨコ胴部中ほどから下半にナナメのヘラケズリを施す。底部内面は押圧で、底部外面にはヘラミガキを用いる。穿孔は胴

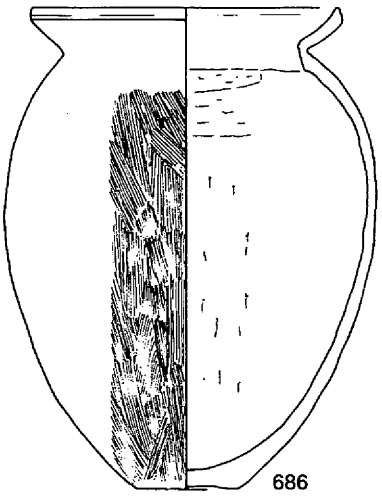
部にあり、外側から敲かれる。635の器面には煤が付着し調整が不詳であるが、ハケとヘラミガキを認める。内面は胴部上半にヨコ、下半にタテのヘラケズリ後ナデ、底部に押圧を施す。底部はやや張り出し気味で、一定方向のヘラミガキを行う。636の文様は、肩部にタテの刺突文が施文される。外面調整は煤が付着し不詳であるが、肩部にヨコのタタキ、以下タテのヘラミガキが認められる。内面は肩部から胴部上半にヨコ、以下タテのヘラケズリ、後ナデを施す。穿孔は胴部中ほどにあり、外側から敲かれる。637の外面調整は胴部上半にナナメ、以下タテのハケ、内面は肩部にヨコ、以下ナナメのヘラケズリを施す。638の文様は、肩部に縦の刺突文が施文される。外面調整は肩部にナナメハケ、以下タテヘラミガキ、内面は肩部以下にヨコヘラケズリを施す。639の外面調整は胴部上半にタテヘラミガキ、内面は肩部以下にヨコヘラケズリを施す。640の文様は、肩部に円形の刺突文が横に施文される。外面調整は肩部からタテヘラミガキ、内面は胴部上半までヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。641の外面調整は肩部にヨコ、以下タテのヘラミガキ、内面は頸部にヨコヘラミガキ、胴部中ほどまでヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。642の文様は肩部に縦2列の刺突文が施文される。底部は、張り出す形態となる。外面調整は肩部にナナメハケ、以下底部までタテヘラミガキ、内面は肩部から胴部下方までヨコ、以下タテのヘラケズリ、底部には押圧が施される。穿孔は胴部最大径部分にあり、外側から敲かれる。643の外面調整は胴部下半までタテヘラミガキ、内面は頸部にナデ、胴部にタテヘラケズリ、後ナデを施す。644の外面調整は胴部上半にタテ、胴部最大径部にナナメ、以下タテで細く幅広のハケ、内面は胴部にヨコヘラケズリを施す。645の外面調整は胴部にハケ、内面は胴部中ほどまでヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。646の外面調整は底部までタテとナナメの細かいハケ、内面は胴部中ほどまでヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。647の頸部には、工具の当たり痕が残る。外面調整は肩部にヨコヘラミガキ、以下ナナメハケ、後幅の狭いハケをタテに用いる。内面は頸部下に押圧、肩部にヨコ、以下タテのヘラケズリ、後ヨコヘラケズリ、タテヘラミガキを施す。内面の胴部下半から底部近くに炭化物の付着が認められる。穿孔は肩部と胴部の2ヵ所にあり、いずれも外側から敲かれる。648の外面調整は胴部上半にヨコ、以下タテのヘラミガキ、内面はヨコからタテのヘラケズリを施す。649は、一応甕とした。外面調整は胴部上半までヨコ、以下ナナメ、内面は頸部にヨコヘラミガキ、以下ナナメ後タテのヘラケズリ、底部はヨコヘラケズリを施す。650の口縁部上下端には、沈線が施文される。外面調整は胴部にヨコからナナメのハケ、後肩部にヨコ、以下タテのヘラミガキ、内面は口頸部にヨコヘラミガキ、胴部中ほどにヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。穿孔は胴部に3ヵ所あり、いずれも外側から敲かれる。651の外面調整は胴部にタテに粗いハケ、後タテヘラミガキ、内面は口頸部にヨコヘラミガキ、胴部上半までヨコ、以下タテのヘラミガキを施す。穿孔は胴部上半にあり、外から敲かれる。652の外面調整は胴部中ほどまでヨコからナナメ、以下タテのヘラミガキ、内面は胴部最大径部に押圧、後ヨコヘラケズリを施す。穿孔は胴部中ほどにあり、外から敲かれる。653の外面調整は肩部にヨコ、以下タテのヘラミガキ、内面はヨコからナナメのヘラケズリを施す。654の外面調整は胴部上半にナナメ、以下タテのハケ、後ヨコとタテのヘラミガキ、内面は肩部にヨコ、以下タテのヘラケズリ、底部に押圧とナデを施す。穿孔は胴部上半と下半の2ヵ所にあり、いずれも外側から敲かれる。655の外面調整は肩部にタテ、胴部上半にナナメ、以下タテのハケ、内面は胴部中ほどまでヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。656の外面調整はナナメからタテのハケ、後ナナメからタテのヘラケズリ、内面は口頸部にヨコヘラミガキ、胴部中ほどまでヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。657の口縁部凹線は、施文のあとヨコナデでつぶれる。

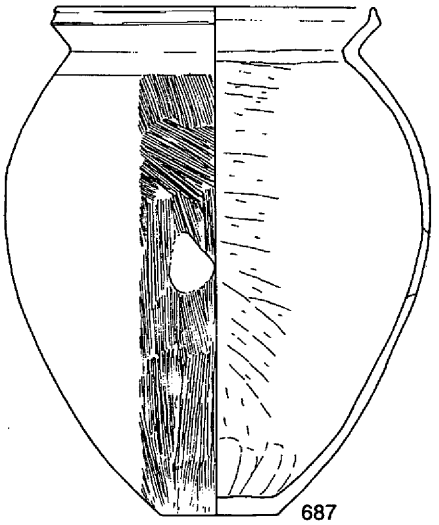
外面調整は胴部上半にナナメ、以下タテのヘラミガキ、内面は胴部上半にヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。穿孔は胴部中ほどに3ヵ所あり、いずれも外側から敲かれる。658の底部は、張り出し気味となる。外面調整は胴部最大径下に平たい面が平行に連続することから、無文のタタキを施したことが知られる。内面は肩部にヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。底部内面には爪痕をとどめる押圧が認められる。659の外面調整は胴上半にヨコ、以下タテのヘラミガキ、内面は口頸部にヨコヘラミガキ、胴部中ほどにヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。660は、甕とした。外面調整はヨコからタテのハケ、後肩部にヨコ、以下タテのヘラミガキ、内面は口頸部にヨコヘラミガキ、肩部に押圧、以下ヨコヘラケズリを施す。また、内面ヘラケズリの凹凸を削る。661の外面調整は胴部上半までヨコ、以下タテのヘラミガキ、内面は肩部から胴部中ほどまでヨコ、以下タテのヘラケズリ、底部には押圧とナデを施す。穿孔は胴部下半にあり、外側から敲かれる。662の外面調整は胴部下半までナナメ、以下タテのヘラミガキ、内面は肩部にヨコ、以下ナナメからタテのヘラケズリを施す。穿孔は胴部最大径部分と胴下半の2ヵ所にあり、いずれも円形で外から敲かれる。663の口縁部には、ヨコナデによる凹部を形成する。外面調整は肩部までヨコナデ、以下タテのヘラミガキ、内面は肩部にヨコ胴中ほどまでナナメ、以下タテのヘラケズリを施す。底部内面は押圧とナデで爪痕が認められ、外面はヘラミガキを行う。664の口縁部には、凹線というよりも沈線が認められる。外面調整は肩部にヨコ、胴部上半にナナメ、以下タテのハケ、内面は肩部にヨコ、胴部中ほどにナナメ、以下タテのヘラケズリを施す。また、底部内面は押圧とナデで、外面はハケメを用いる。665の口縁部は、粘土を継ぎ足して拡張していることが認められる。外面調整は肩部に細いハケ、以下タテヘラミガキ、内面は肩部にヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。666の口縁部はヨコナデで、凹み状となる。外面調整はタテヘラミガキ、内面は胴部中ほどまでヨコからナナメ、以下タテのヘラケズリを施す。また、底部内面は押圧で、外面にはヘラミガキを用いる。667の外面調整は肩部にヨコ、胴部最大径部にナナメ、以下タテのハケ、内面は肩部にヨコ、胴部中ほどにナナメ、以下タテのヘラケズリを施す。穿孔は胴部上半にあり、外側から敲かれる。668の外面調整は胴部上半にヨコとナナメ、以下タテのハケ、内面は肩部にヨコからナナメ、以下タテのヘラケズリを施す。穿孔は胴部中ほどにあり、外側から敲かれる。669の頸部には、工具の当たり痕が認められる。外面調整はタテヘラミガキ、内面は頸部にヨコヘラミガキ、肩部にヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。穿孔は楕円形となり、外から敲かれる。670の外面調整は肩部にタテ、胴部上半にヨコ、以下ナナメのハケ後ナナメのヘラミガキ、内面は口縁部にヨコヘラミガキ、肩部に押圧とナデ、以下ヨコヘラケズリを施す。穿孔は胴部中ほどにあり、外側から敲かれる。671の外面調整はナナメのハケ、内面は胴部下半までヨコからナナメ、以下タテのヘラケズリを施す。穿孔は肩部にあり、外側から敲かれる。672の外面調整は肩部にタテ、胴部上半にヨコ、以下タテのハケ、後胴部最大径以下にタテヘラミガキ、内面は肩部にヨコ、胴部中ほどにナナメ、以下タテのヘラミガキを施す。また、底部内面には押圧とナデで、外面にはヘラミガキがなされる。穿孔は胴部下にあり、外側から敲かれる。673の外面調整は肩部にヨコヘラミガキ、以下タテの細いハケ後タテヘラミガキ、内面は肩部にヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。穿孔は胴部中ほどにあり、外側から敲かれる。

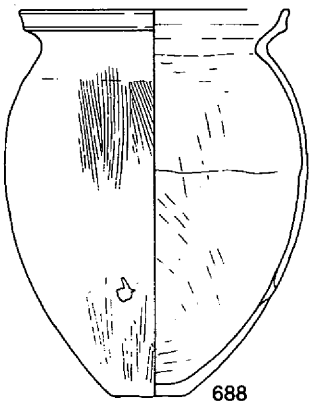


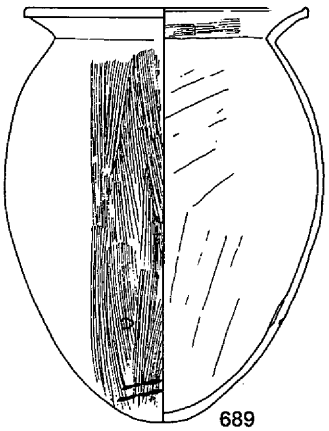
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底(脚)径	法量(cm) 器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
674	弥生土器	甕	18.5	6.7	16.6	良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	外面肩部～底部と内面底部に煤付着
675	弥生土器	甕	9.1	3.7	11.9	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	
676	弥生土器	甕	15.2	5.3	26.9	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	口縁部に凹線　肩部～底部に煤付着 内面に煤付着
677	弥生土器	鉢	11.5	3.7	10.3	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に沈線
678	弥生土器	甕	(14.0)			良好	7.5Y5.5/4(にぶい橙)	砂粒	
679	弥生土器	甕	13.8	5.0～5.3	23.2	良好	2.5Y6/3(にぶい黄)	砂粒	口縁部に凹線　外面全体に煤付着・一部タール状　口縁部～胴部上半に吹きこぼれ痕
680	弥生土器	甕	14.6	5.5	24.9	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	肩部～胴部上半に穿孔
681	弥生土器	甕	15.3	6.0	20.9	良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	肩部～底部に煤付着
682	弥生土器	甕	13.8	4.2	17.1	良好	2.5Y2/1(黒)	砂粒	外面全体に煤付着
683	弥生土器	甕	14.2	4.4	15.0	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	外面全体に煤付着　表面剥離
684	弥生土器	甕	10.8	4.5	10.9	良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	外面に厚く煤付着　内面ヘラミガキは渦巻状

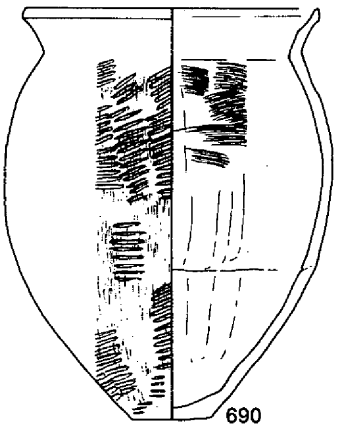

685

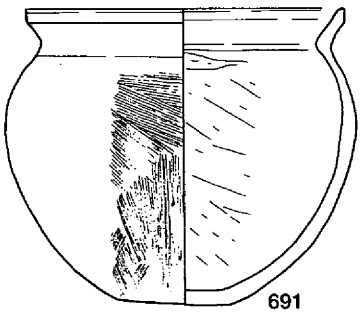

686

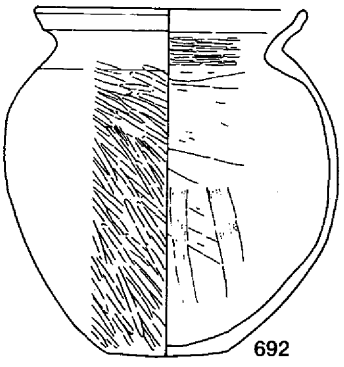

687

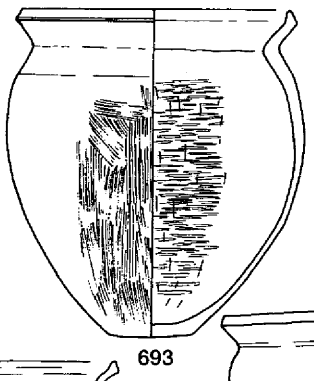

688

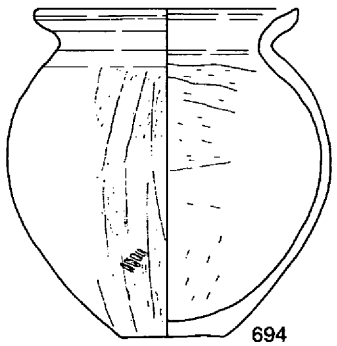

689

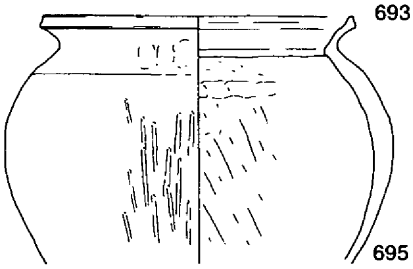

690

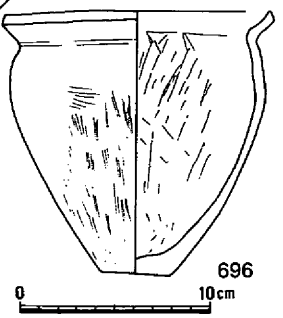

691


692


693


694

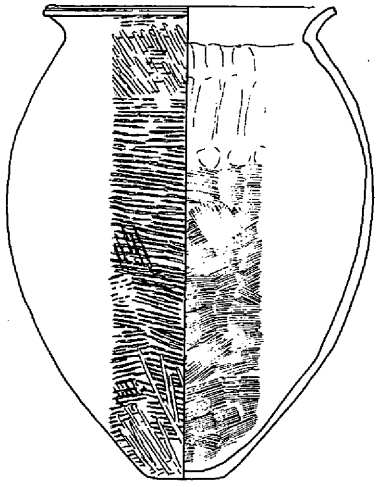

695

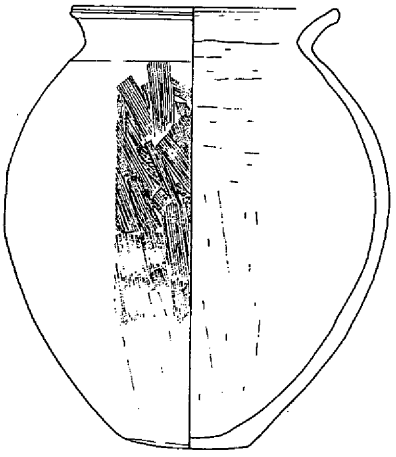

696

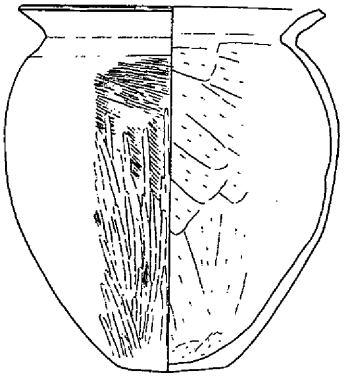
0　10cm

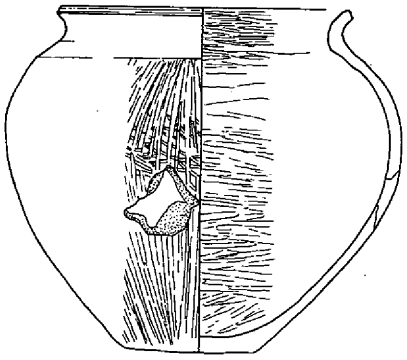
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
685	弥生土器	甕	13.7	3.9	24.9	良好	10YR5/1(褐灰)	砂粒	煤全面に付着　内面にお焦げ
686	弥生土器	甕	16.0	5.4	25.4	良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	内外面全体に煤付着
687	弥生土器	甕	16.4	6.2	26.9	良好	10YR7/6(明黄褐)	砂粒	肩部～底部に煤付着　胴部中位に穿孔
688	弥生土器	甕	13.9	3.8	20.5	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒(少)	口縁部と胴部煤付着　胴部下半に穿孔
689	弥生土器	甕	14.8	4.0	22.1	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒(少)	タタキ後ハケ　胴部下半に敲打痕
690	弥生土器	甕	15.3	4.1	22.0	良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	タタキ後ハケ
691	弥生土器	甕	16.7	6.1	15.7	良好	2.5Y6/3(にぶい黄)	砂粒(少)	
692	弥生土器	甕	(14.1)	6.6	18.5	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	
693	弥生土器	甕	13.9	4.4	17.4	良好	5YR7/2(明褐灰)	砂粒	ふきこぼれ痕あり　煤付着　内面にお焦げ
694	弥生土器	甕	13.3～14.2	5.5	17.4	良好	2.5Y6/2.5(灰黄)	砂粒	全体にタール状の煤付着
695	弥生土器	甕	16.1			良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	口縁部に凹部
696	弥生土器	甕	11.6～14.0	3.7	14.0	良好	10YR6/4(にぶい黄橙)	砂粒	ほぼ全体に煤付着

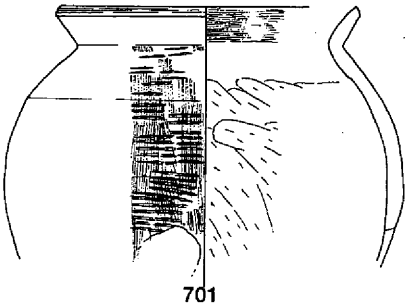
674～696は、口縁端部を摘み上げるように短く立ち上げるもので、内面の屈曲は目立たない。674は口縁部に条線が認められるが、後にナデで消えている。外面調整は肩部にヨコ、以下タテのヘラミガキ、内面は口頸部にヨコヘラミガキ、胴部中ほどまでヨコヘラケズリ後ヨコヘラミガキ、以下ナナメとタテのヘラミガキを施す。675の外面調整は肩部までヨコナデ、胴部最大径部にナナメ、以下タテの粗いハケ、内面は肩部にヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。676の外面調整は胴部中ほどにヨコハケが認められ、後タテハケ、内面は肩部にヨコ、以下ナナメのヘラケズリを施す。また、底部内面に押圧で、外面にはハケが認められる。677の外面調整は肩部にヨコナデ、以下タテハケ、内面は頸部から肩部にヨコハケ、後胴部下半までナナメからタテのハケを施す。678の口縁部には、ヨコナデによる凹線が施文される。外面調整は肩部に丁寧なヨコナデ、以下タテヘラミガキ、内面は肩部から胴部上半に押圧とナデ、以下ヨコヘラケズリを施す。679は口縁部から胴部下半にかけて、吹きこぼれと思われる痕が明瞭に認められる。外面調整はタテハケ、内面はナナメヘラケズリを施す。680の外面調整はタテとナナメの細いハケ、内面は胴部下半までヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。穿孔は胴部上半にあり、外側から敲かれる。681の外面調整は肩部にヨコナデ、胴部上半にヨコ、以下タテの粗いハケ、内面は胴部中ほどまでヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。底部内面は押圧が認められ、外面は未調整である。また、底部内面にナデが認められ、外面は凹凸が残る。682の外面調整はタテハケ、内面は肩部にヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。683は口縁端部に、ヨコナデによる凹部を形成する。外面調整は器面剝離のため不詳であるが、ハケが認められる。内面はナナメのヘラケズリ、底部に押圧を施す。684の外面調整はタテヘラミガキ、内面は口縁部にナナメ、肩部にヨコ、以下巻き込むようなヘラミガキを施す。685の外面調整は胴部上半にナナメ、以下タテのハケ、後胴部上半の一部にナナメのヘラミガキを施す。内面は肩部にヨコ、以下タテのヘラケズリを行う。686の外面調整はタテハケ、内面は肩部にヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。また、底部外面はヘラケズリが認められ、上げ底気味となる。687の外面調整は肩部にタテ、胴部上半にナナメ、以下タテのハケ、内面は胴部下半までヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。穿孔は胴部中ほどにあり、外から敲かれる。688の外面調整は胴部中ほどまでタテの粗いハケ、胴部下半にタテヘラミガキ、内面は肩部にヨコヘラケズリ後胴部中ほどまでヘラミガキ状のヘラケズリ、以下ナナメのヘラケズリを施す。穿孔は胴部下半にあり、外から敲かれる。689の底部は、丸底を呈する。外面調整は底部近くにヨコのタタキが認められ、その後タテハケ、内面は口縁にヨコハケ、胴部中ほどまでナナメ、以下タテのヘラミガキを施す。穿孔は胴部下半に認められ、径5cm前後の円形で貫通していないが、内面の相当する部分に剝離が認められる。690の口縁端部は、凹みを形成しない。外面調整はヨコタタキ、後タテの細いハケ、内面は肩部から胴部上半にヨコ、後中ほどまでタテのハケ、以下ナデアゲを施す。また、底部内面には押圧が認められる。691の外面調整は胴部中ほどにヨコからナナメ、以下タテのハケ、内面は肩部にヨコ、以下ナナメのヘラケズリを施す。692の外面調整は胴部上半にナナメのハケ、後胴部下半までナナメヘラミガキ、内面は口頸部にヨコヘラミガキ、胴部中ほどにヨコ、以下ナナメとタテのハケ状工具によるケズリを施す。693の外面調整は胴部上半にナナメ、後胴部下半までタテのハケ、内面はタテヘラケズリ後ヨコヘラケズリを施す。694の外面調整はタタキ後タテハケ、内面は胴部中ほどまでヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。695の頸部に押圧痕が残る。外面調整はタテのヘラミガキ、内面は肩部にヨコヘラケズリ後押圧、以下ナナメのヘラケズリを施す。696の外面調整は胴部上半にヨコ、以下タテのハケ、内面はタテのヘラケズリを施す。

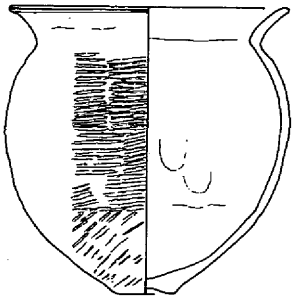

697

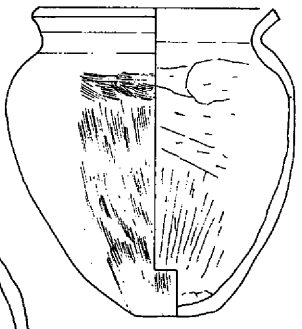

698

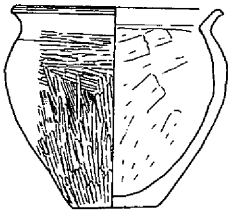

699

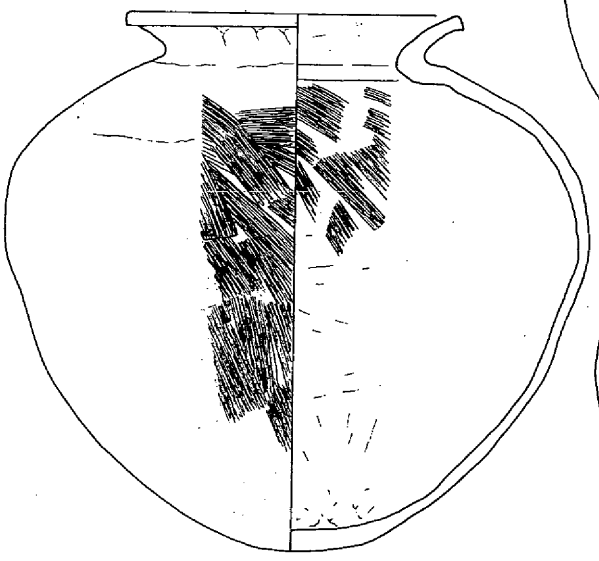

700

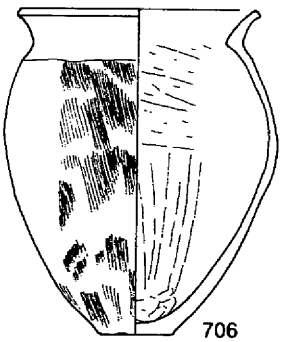

701

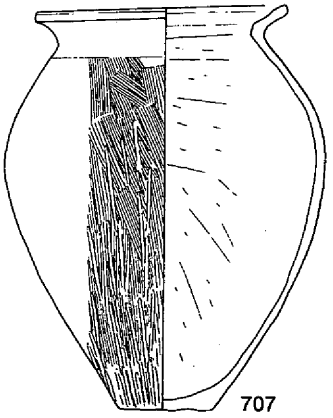

702


704

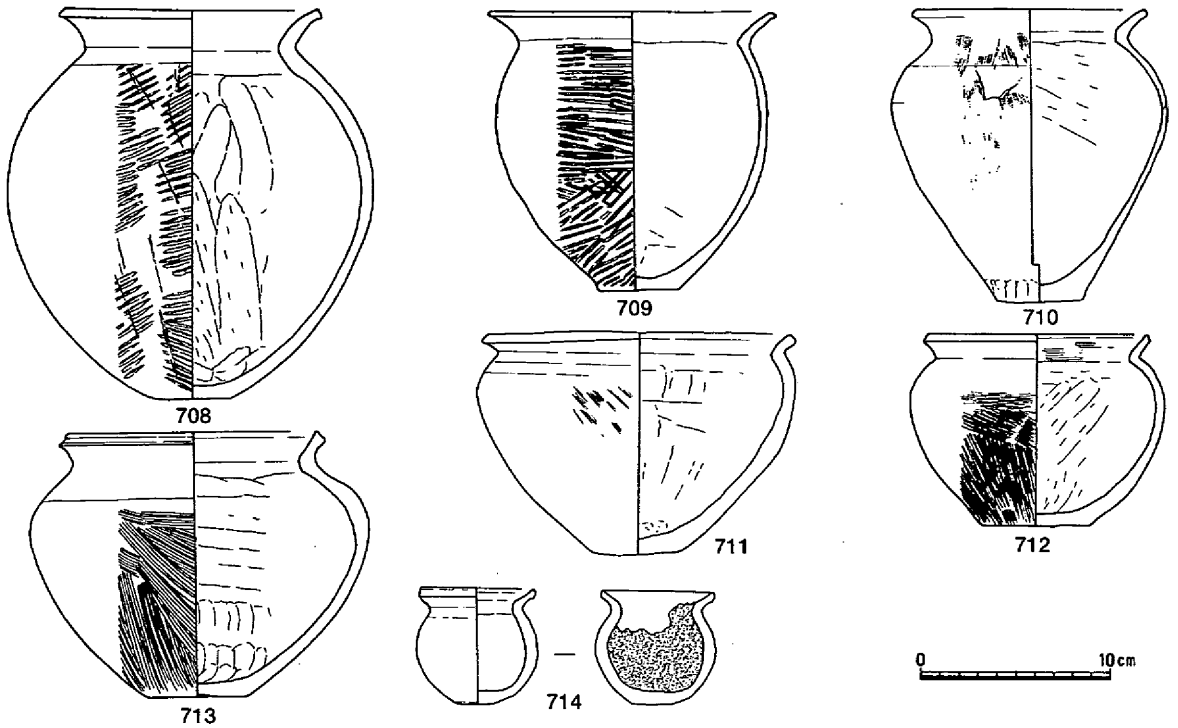

705


703


706

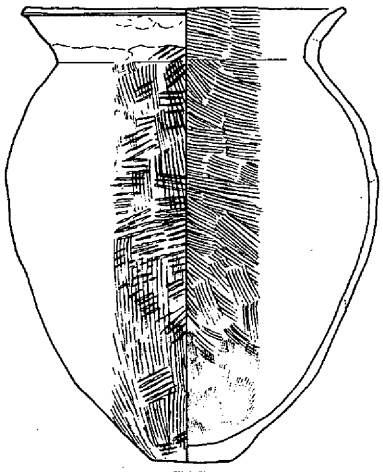

707

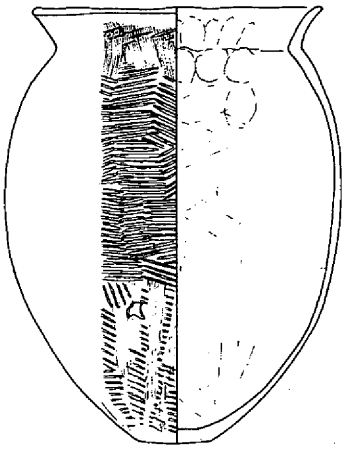
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
697	弥生土器	甕	15.1	4.0	25.1	良好	10YR8/2(灰白)	砂粒	口縁部に沈線　内外面に煤付着
698	弥生土器	甕	13.7	6.4	23.2	良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹部
699	弥生土器	甕	15.3	5.7	19.4	良好	5YR7/6(橙)	砂粒	口縁端部に凹み　ほぼ全面に煤付着　内面にお焦げ
700	弥生土器	甕	15.3	7.0	18.3	良好	10YR6.5/3(にぶい黄橙)	砂粒	胴部に穿孔２カ所
701	弥生土器	甕	15.6			良好	2.5Y6/1(黄灰)	砂粒	口縁部に沈線　胴部に穿孔・タタキ
702	弥生土器	甕	14.6	3.3	15.3	良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	口縁端部に沈線　タタキ　胴部中位～底部に煤付着
703	弥生土器	甕	17.2		28.6	良好	2.5Y6/3(にぶい黄)	砂粒	
704	弥生土器	甕	12.2	4.4	16.5	良好	2.5Y6/1.5(灰黄)	砂粒	内外面に煤付着
705	弥生土器	甕	10.7	4.2～4.4	10.6～10.7	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁端部に沈線
706	弥生土器	甕	12.1	3.6	17.2	良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	内外面全体に煤付着
707	弥生土器	甕	13.0	4.9	20.9～21.45	良好	2.5Y5/3(黄褐)	砂粒	外面ほぼ全面と内面一部に煤付着

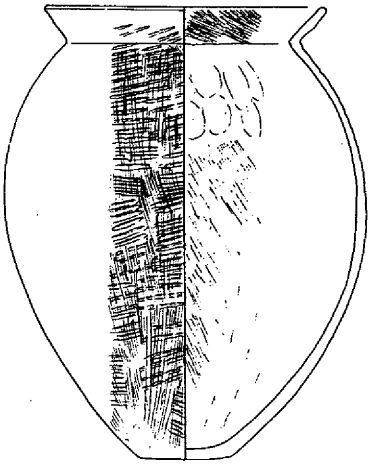


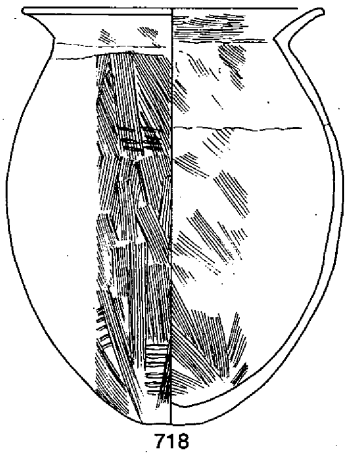
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
708	弥生土器	甕	13.0	3.9	20.7	良好	2.5Y8/2(灰白)	砂粒	ほぼ全面に煤付着　タタキの後ナデ
709	弥生土器	甕	14.8	3.9	14.5	良好	N1.5/(黒)	砂粒	外面全体に煤付着　タタキ
710	弥生土器	甕	12.0	4.0	15.5	良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	肩部に穿孔　外面全体と内面肩部～底部に付着物
711	弥生土器	甕	15.85	4.5	11.8	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
712	弥生土器	甕	11.6	5.6	10.1	良好	2.5Y6/1(黄灰)	砂粒	肩部～底部に煤付着
713	弥生土器	甕	12.9	5.1	14.0	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒(多)	
714	弥生土器	甕	5.9	2.1	6.1～6.2	良好	10YR6/2(灰黄褐)	精良	内面に漆

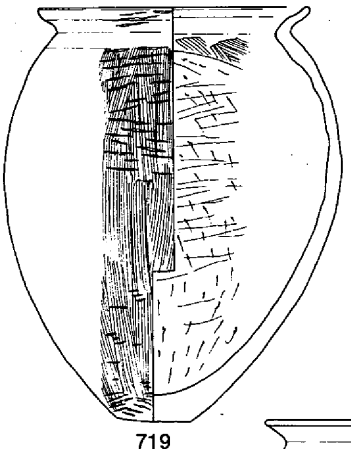
697～714は口縁端部の拡張が無いものである。697の口縁端部は沈線が施文されるが、その影響で端部が出る状態を呈する。外面調整はヨコのタタキ後頸部から肩部にナナメ、胴部下半から底部にタテのヘラミガキ、内面は肩部に押圧とナデアゲ、以下ナナメハケを施す。698の胴部下半までナナメの細かいハケ、内面は胴部上半にヨコ、以下タテのヘラミガキを施す。699の外面調整はヨコ、ナナメのハケ後胴部上半からタテのヘラミガキ、内面は胴部中ほどにナナメ、以下タテのヘラケズリを施す。700の外面調整は胴部最大径部分にナナメ後タテのヘラミガキ、内面は口頸部から底部にヨコヘラミガキを施す。穿孔は胴部に2ヵ所あり、その1ヵ所は内側から敲かれる。701の口縁部の沈線は、条線状となる。外面調整はヨコのタタキ後タテの細かいハケ、内面ナナメヘラケズリを施す。穿孔は胴部中ほどにあり、外から敲かれる。702の外面調整は胴部下半までヨコのタタキ、以下はナナメのタタキ、内面はナデを施す。703の外面調整はヨコ、ナナメのハケ、内面は肩部にナナメのハケ、後胴部下半までヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。704の外面調整は肩部にヨコ、以下タテのハケ、内面は胴部中ほどにヨコヘラケズリ、以下タテのヘラケズリを施す。705の外面調整はタテハケ後肩部にヨコ、以下タテのヘラミガキ、内面はヨコとタテのヘラケズリを施す。706の外面調整はタテのハケで2種類の工具が使用されている。内面は肩部から胴上半にヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。707の外面調整はタテの細かいハケ後胴部上半からタテヘラミガキ、内面は胴部上半にヨコヘラケズリ、以下ナナメの丁寧なヘラケズリを施す。708の外面調整はナナメのタタキ後ハケ状工具によるナデ、内面はタテヘラケズリを施す。また、底部外面には、タタキの後ナデを行う。709の外面調整は胴部中ほどにヨコ、以下ナナメのタタキ、内面はナデを施す。710の外面調整は細いタテハケ、底部

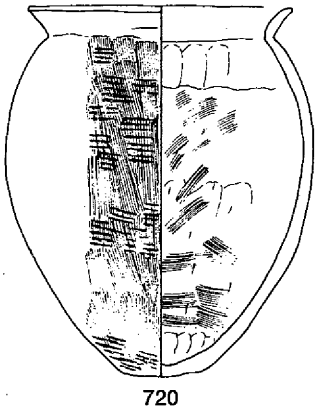

715

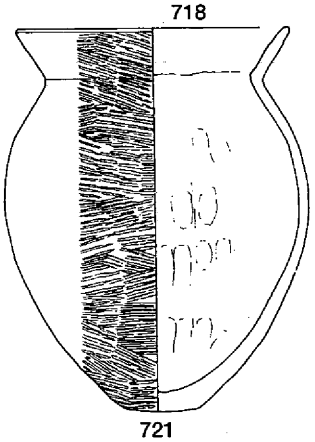

716

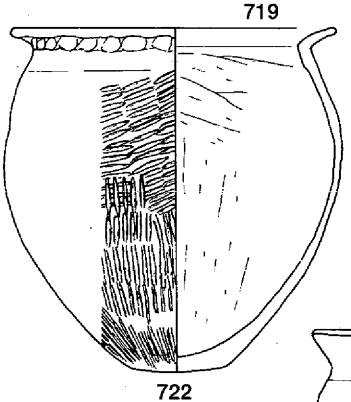

717

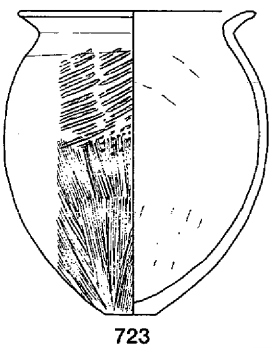

718

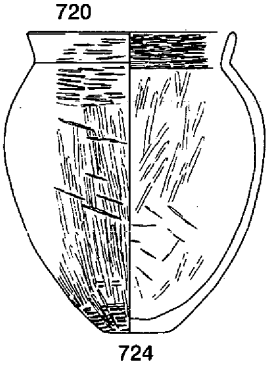

719

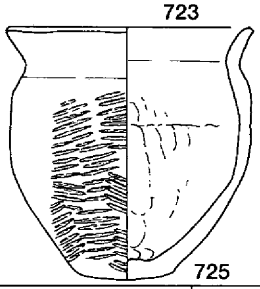

720

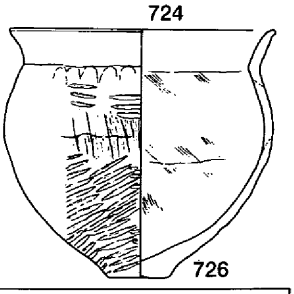

721


722


723

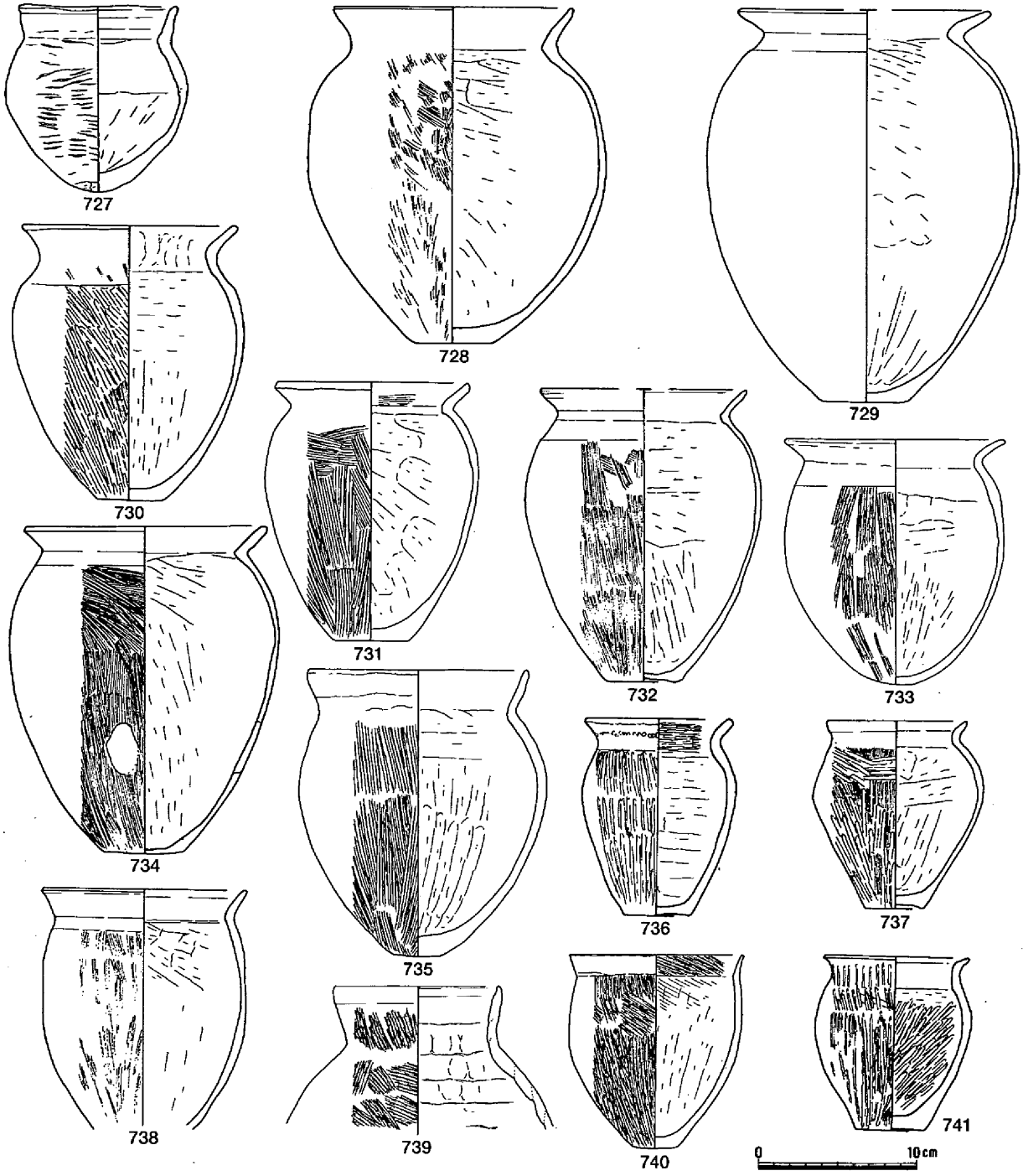

724


725

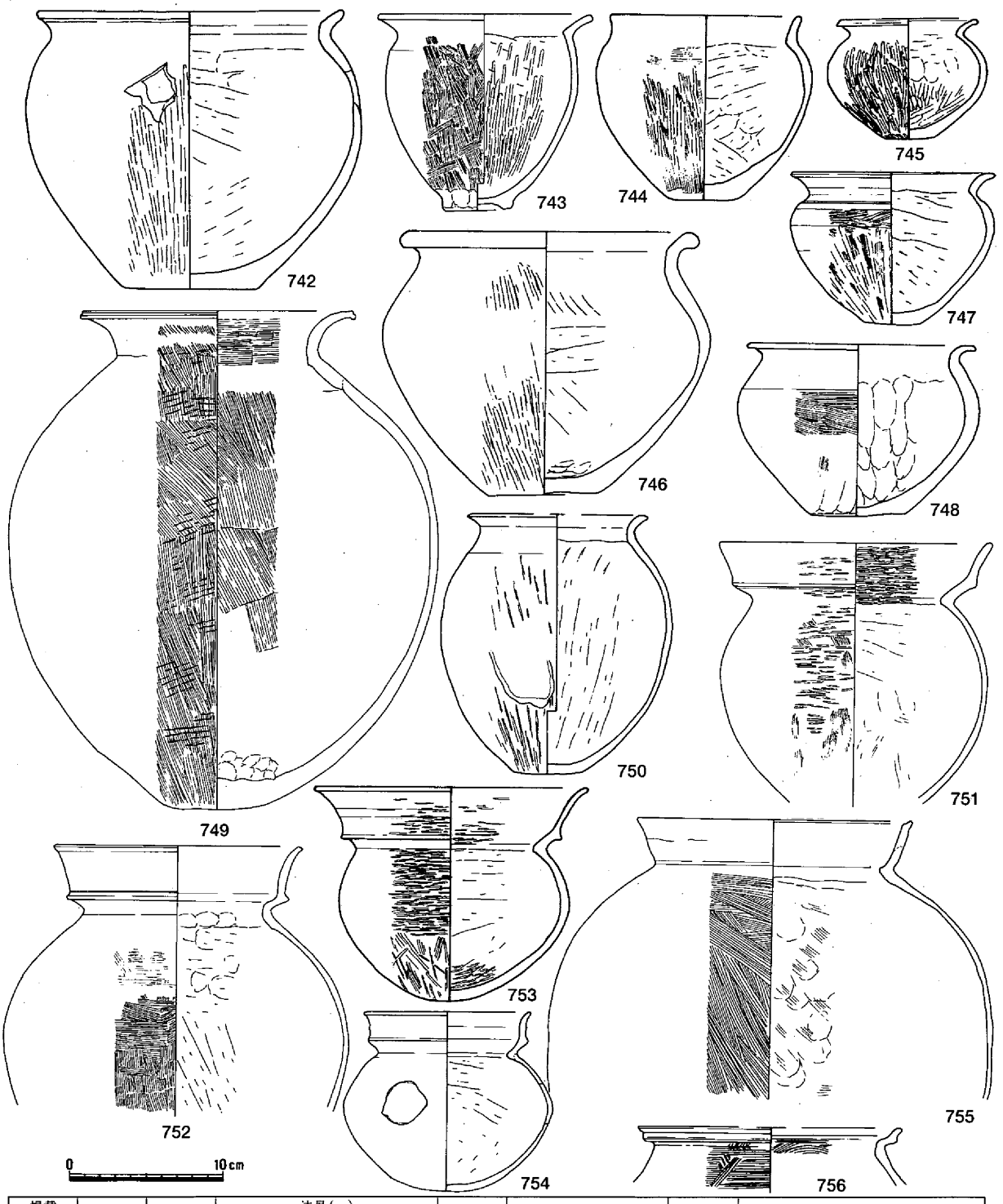

726

0　10cm

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
715	弥生土器	甕	16.9	4.2	24.1	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	タタキの後ハケ
716	弥生土器	甕	14.7	3.9	23.1	良好	10YR6/6(明黄褐)	砂粒	胴部下半に穿孔　タタキ
717	弥生土器	甕	14.9	4.9	24.2	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	外面ほぼ全体に煤付着　タタキの後ハケ
718	弥生土器	甕	15.5	3.1	22.1	良好	2.5Y7/4(浅黄)	砂粒	外面ほぼ全体に煤付着　肩部に刺痕
719	弥生土器	甕	13.8～14.7	3.6	22.1	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	タタキ後ハケ
720	弥生土器	甕	13.5	4.0	19.7	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	タタキ後細いハケ
721	弥生土器	甕	14.3	3.7	20.1	良好	2.5Y6/1(黄灰)	砂粒	タタキ　内面押圧痕をナデで消す
722	弥生土器	甕	17.0	5.0	18.4	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	胴下半にタタキ
723	弥生土器	甕	12.5	2.6	16.2	良好	10YR6/4(にぶい黄橙)	砂粒	タタキ後ハケ
724	弥生土器	甕	10.9	3.9	16.0	良好	2.5Y6/1(黄灰)	精良	タタキ後ヘラミガキ
725	弥生土器	甕	12.4	5.0	13.5	良好	2.5Y5/1(黄灰)	砂粒(多)	ほぼ全面に煤付着　タタキ後ナデ
726	弥生土器	甕	13.9	3.2	13.2	良好	10YR6/1(褐灰)	砂粒	外面全体に煤付着　内面下に煤付着・お焦げ



掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
727	弥生土器	甕	9.2	3.5	11.7	良好	2.5Y6.5/1(灰黄)	密	外面ほぼ全体に煤付着　タタキ
728	弥生土器	甕	14.7	5.0	21.2	良好	5Y8/2(灰白)	砂粒	口縁部・肩部～底部に煤付着
729	弥生土器	甕	(15.6)	5.5	24.8	良好	N3/1(暗灰)	砂粒	外面に煤付着　内面に炭化物付着
730	弥生土器	甕	13.0	4.0～4.5	17.4	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	砂粒	ほぼ全体に煤付着　内面中位～底部にお焦げ
731	弥生土器	甕	11.8	4.7	16.5	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	
732	弥生土器	甕	(12.7)	4.5～4.8	18.4	良好	10YR6.5/3(にぶい黄橙)	砂粒	肩部に穿孔　外面全体に煤付着
733	弥生土器	甕	13.6	2.0～2.5	15.6	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	内外面に煤付着　内面有機物の炭化物・外面吹きこぼれ
734	弥生土器	甕	14.3	5.2	20.9	良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	外面と内面肩部～底部に煤付着　胴部下半に穿孔
735	弥生土器	甕	13.5	2.8	18.1	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	外面ほぼ全面に煤付着
736	弥生土器	甕	9.0	4.2	12.4	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒(多)	
737	弥生土器	甕	8.6	3.6	11.8	良好	10YR7/8(黄橙)	砂粒	
738	弥生土器？	甕	12.6			良好	10YR6/3.5(にぶい黄橙)	砂粒	外面頸部を除き煤付着　内面下半に煤付着
739	弥生土器	甕	10.3			良好	5Y7/1(灰白)	砂粒(少)	
740	弥生土器	甕	11.0	2.8(～3.25)	12.2	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部～胴部中位に煤付着　内面お焦げ
741	弥生土器	甕	9.0	4.4	11.0	良好	2.5YR6/6(橙)	砂粒	内面ヘラミガキは渦巻状



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
742	弥生土器	甕	19.8	8.7	18.1	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	胴部に穿孔
743	弥生土器	甕	13.3～13.7	3.7～4.25	12.8	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	外面胴部中位～底部に煤付着　上げ底
744	弥生土器	甕	12.0	4.8	12.0	良好	2.5Y6/3(にぶい黄)	砂粒	外面に煤付着
745	弥生土器	甕	8.4	3.0	7.7	良好	5Y8/2(灰白)	砂粒	
746	弥生土器	甕	17.6	7.2	17.0	良好	7.5YR5/4(にぶい褐)	砂粒(多)	
747	弥生土器	甕	12.4	3.5	9.8	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	肩部に凹部
748	弥生土器	甕	15.5	6.2	11.2	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	肩部～底部に煤付着
749	弥生土器	甕	17.6	6.4	32.2	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線　底部にユビオサエ　タタキ
750	弥生土器	甕	(10.9)	4.4	(16.7)	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	胴部に穿孔　内外面に煤付着
751	弥生土器	甕	17.3			良好	7.5YR4/1(褐灰)	砂粒	外面に煤付着
752	土師器	甕	15.8			良好	2.5Y8/1(灰白)	砂粒	
753	土師器	甕	17.6		13.7	良好	5Y4/1(灰)	砂粒	全体に煤付着
754	土師器	甕	10.7		11.7	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	砂粒(少)	胴部中位に穿孔
755	土師器	甕	17.4			良好	5Y8/3(淡黄)	砂粒	肩部～胴部に煤付着
756	弥生土器？	台付甕	(17.0)			良好	7.5YR6/2(灰褐)	微砂	S字状口縁

近くに押圧、内面は肩部にナナメのヘラケズリを施す。711は鉢としてもよいが、甕として扱った。肩部にナナメハケ、内面はナデアゲ後胴部中ほどまでヨコナデを施す。712の外面調整は胴部中ほどにヨコ、以下タテのハケ、内面は口縁部にヨコハケ、肩部にヨコ、以下ナナメからタテのヘラケズリを施す。713の外面調整は胴部最大径部にヨコからナナメ、以下タテのハケ、内面は肩部から胴中ほどにヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。714は漆が入った状態で出土したことから、漆容器として用いられたと思われる。検出時には半分に割れた状態であったが、その割れ口が新しいことから出土時に割れたと考えられ、周辺を探したが検出することはできなかった。漆は頸部まで詰まり、口縁部には薄く付着した状態である。外面調整は明瞭な調整痕が認められず、ナデによると思われる。

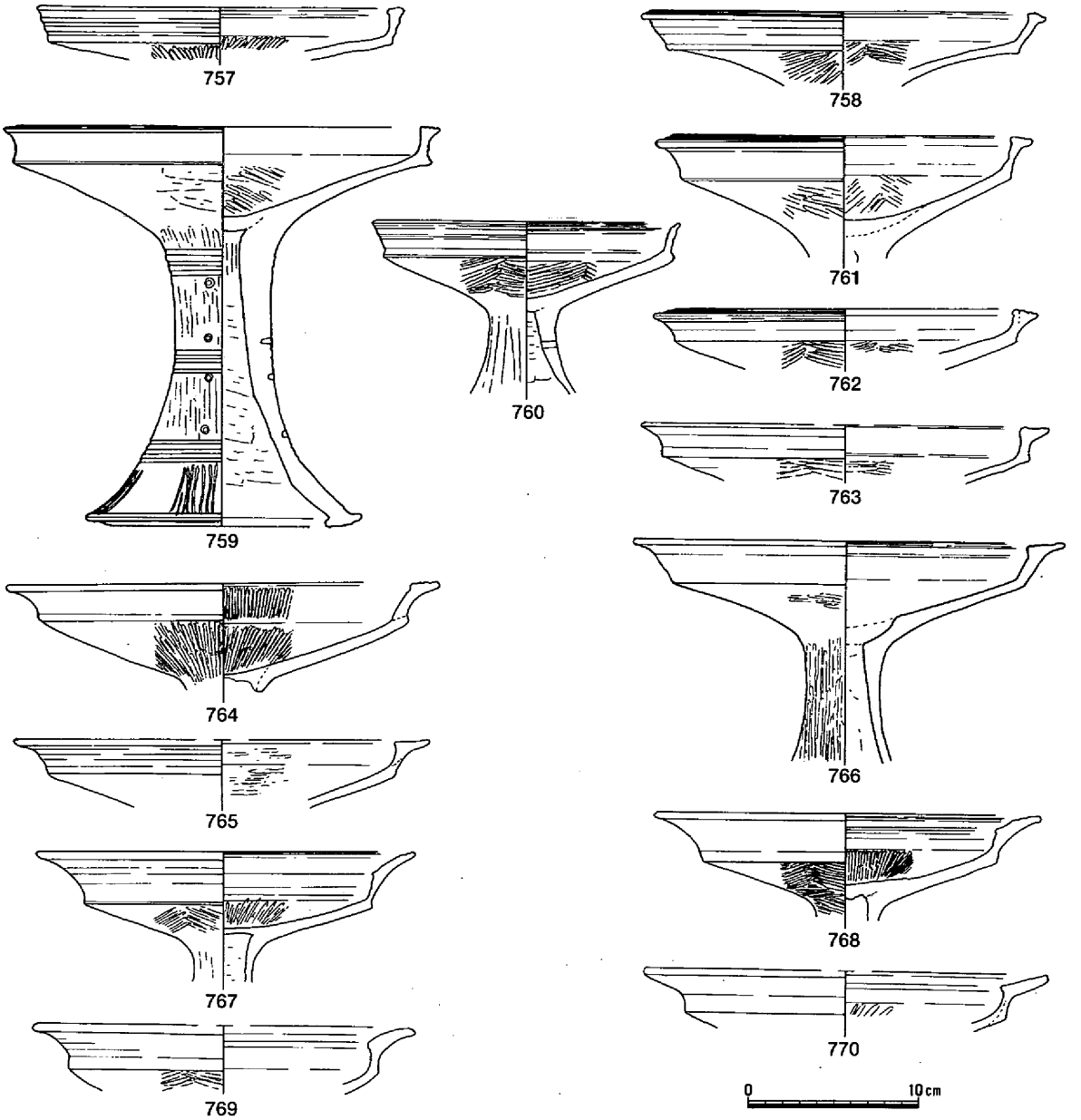
715～750は、口縁端部を丸く終わらせるものである。715の口縁端部は押圧とナデとにより、平坦となる部分も認められる。外面調整はタタキ後タテハケ、内面は口頸部から胴部中ほどにヨコ、以下ナナメで底部にタテのハケを施す。ハケは、粗いものと細いものとの2種類が認められる。716の口縁端部には、沈線を施文する。外面調整は口頸部から底部にタタキ、後口頸部と胴部下半にタテのハケを施す。内面はタテヘラケズリ後口頸部から肩部に押圧とナデ、以下ハケを施す。穿孔は胴部下半にあり、外から敲かれる。717の外面調整はタタキ後頸部以下にハケ、内面は口縁部にナナメハケ、頸部以下はハケ状工具のナデで肩部にはさらに押圧とナデを施す。718の外面調整はタタキ後タテハケ、内面は口縁部にヨコハケ、以下はヘラケズリ後ナナメのハケ、肩部にはさらにナデアゲを施す。719は口縁部内面の強いヨコナデによりやや受け口状を呈する。外面調整はタタキ後タテハケ、内面は肩部にナナメハケ、以下タテヘラケズリ後ヨコナデを施す。720の外面調整はタタキ後タテの細かいハケ、内面は肩部に押圧とナデ、以下タテのヘラケズリ後不定方向のハケを施す。底部内面には、押圧が認められる。721の外面調整はタタキ、内面は押圧とナデアゲで肩部には丁寧なナデを施す。722の頸部には、押圧痕を顕著に残す。外面調整は胴部中ほどまでヨコのタタキであるが、以下はタテのタタキとなる。胴部上半の一部には、細いハケが認められる。内面は肩部にはナナメ、以下タテのヘラケズリを施す。723の外面調整は胴部中ほどまでタタキ、以下はタテの細いハケを施す。内面には、工具のナデが認められる。724の口縁部は強く屈曲することなく、緩やかに開き気味となる。外面調整はタタキ後胴部上半からタテヘラミガキ、内面は口縁部にヨコヘラミガキ、以下タテヘラミガキ後丁寧なナデを施す。725の口縁端部はナデにより一定していない。外面調整は肩部以下にタタキ後ハケ状工具のハケ、内面は押圧とナデを施す。726の内面胴部下半から底部にお焦げの付着が認められる。外面調整は肩部に押圧痕を顕著に残す。胴部上半から底部にタタキ後胴部上半にナデ、内面はヘラケズリ後ハケ状工具によるナデを施す。727の口縁端部は、ヨコナデの影響で一定しない。外面調整はタタキ、内面は胴部中ほどまでナデ、以下ヘラケズリを施す。また、底部外面は、ヘラケズリで多面体となる。728の外面調整はナナメとタテのハケ、内面は肩部にヨコ、以下ナナメのヘラケズリを施す。729の外面調整は煤の付着が著しく、調整不明である。内面は肩部から胴部中ほどにヨコからナナメ、以下タテのヘラケズリを施す。また、胴部中ほどの接合部分には、押圧が認められる。730の外面調整はタテハケ後ナナメヘラミガキ、内面は口縁部に押圧後胴部中ほどまでヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。また、底部外面には、ヘラミガキを認める。731の外面調整は胴部上半にヨコ、以下タテのハケ、内面は口縁部にヨコハケ、肩部にヨコ、以下ナナメのヘラケズリ後底部にかけて押圧とナデを施す。732の外面調整は胴部最大径部分に押圧、後肩部以下にタテのハケ、内面は胴部中ほどまでヨコ、以下タテのヘラケズリ後ナデを施す。733の口縁部には、押圧痕を残す。外

面調整は粗いハケ、内面は胴部上半にヨコヘラケズリ、以下タテヘラケズリ後ナデを施す。734の外面調整は胴部上半にナナメ、以下タテのハケ、内面は胴部上半にヨコからナナメ、以下タテのヘラケズリを施す。穿孔は胴部下半にあり、外から敲かれる。735の口縁部には、粘土の継ぎ足しが認められる。外面調整は底部までタテハケ、内面は肩部にヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。736の外面調整は口縁部にヘラの当り痕が認められる。頸部以下はタテヘラミガキ、内面は口頸部にヨコヘラミガキ、以下ヨコヘラケズリを施す。737の外面調整はタテハケ後肩部にヨコ、以下タテのヘラミガキ、内面は胴部中ほどまでヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。また、底部内面は押圧が認められ、外面は上げ底となる。738の外面調整はタテハケ、内面は胴上半にナナメ、以下タテのヘラケズリ後ナデを施す。739の内面には接合痕をとどめる。外面調整は口縁部にタテ、肩部にナナメのハケ、内面は押圧とナデを施す。740の外面調整は胴部上半にナナメ後底部までタテのハケ、内面は口頸部から胴部上半にナナメハケ後頸部下半にタテのヘラケズリを施す。741の外面調整は肩部以下にタテハケ後口縁部から底部にタテヘラミガキ、内面は渦巻き状のヘラミガキを施す。742の外面調整はタテヘラミガキ、内面は胴部中ほどにヨコヘラケズリ、以下丁寧なヘラケズリを施す。穿孔は肩部にあり、内側から敲かれる。743の外面調整は不定方向のハケ、底部には押圧痕、内面は胴部中ほどまでヨコ、以下タテのヘラケズリ後タテのヘラミガキを施す。744の口縁部の屈曲は強くなく、緩やかに開く。外面調整は肩部にヨコ、以下タテのハケ後タテのヘラミガキ、内面はナナメのヘラケズリを施す。745の口縁端部は、平坦となる。外面調整はタテヘラミガキ、内面は胴部中ほどにヨコヘラケズリ後押圧、胴部以下にヘラミガキを施す。746の口縁端部は肥厚させて丸く納める。外面調整は肩部にタテのハケ、以下タテのヘラミガキ、内面は肩部にナナメ、胴部中ほどにヨコ、以下ナナメのヘラケズリを施す。747の肩部には、凹部が見られる。外面調整は胴部上半にヨコ、以下タテのハケ後タテヘラミガキ、内面は胴部中ほどまでヨコ、以下ナナメのヘラケズリを施す。748の外面調整は肩部から胴部にタテ後胴部上半にヨコハケ、内面はナデアゲを施す。749は口縁部の拡張がないもので、沈線を施文する。口縁部は外反する頸部をさらに水平方向に屈曲させ、端部には凹線を施文する。外面調整はタタキ後ナナメハケ、内面は口頸部にヨコ、胴部下半にタテのハケ、以下ナデを施す。また、底部には押圧痕が認められる。750の外面調整はタテヘラミガキ、内面はタテヘラケズリを施す。

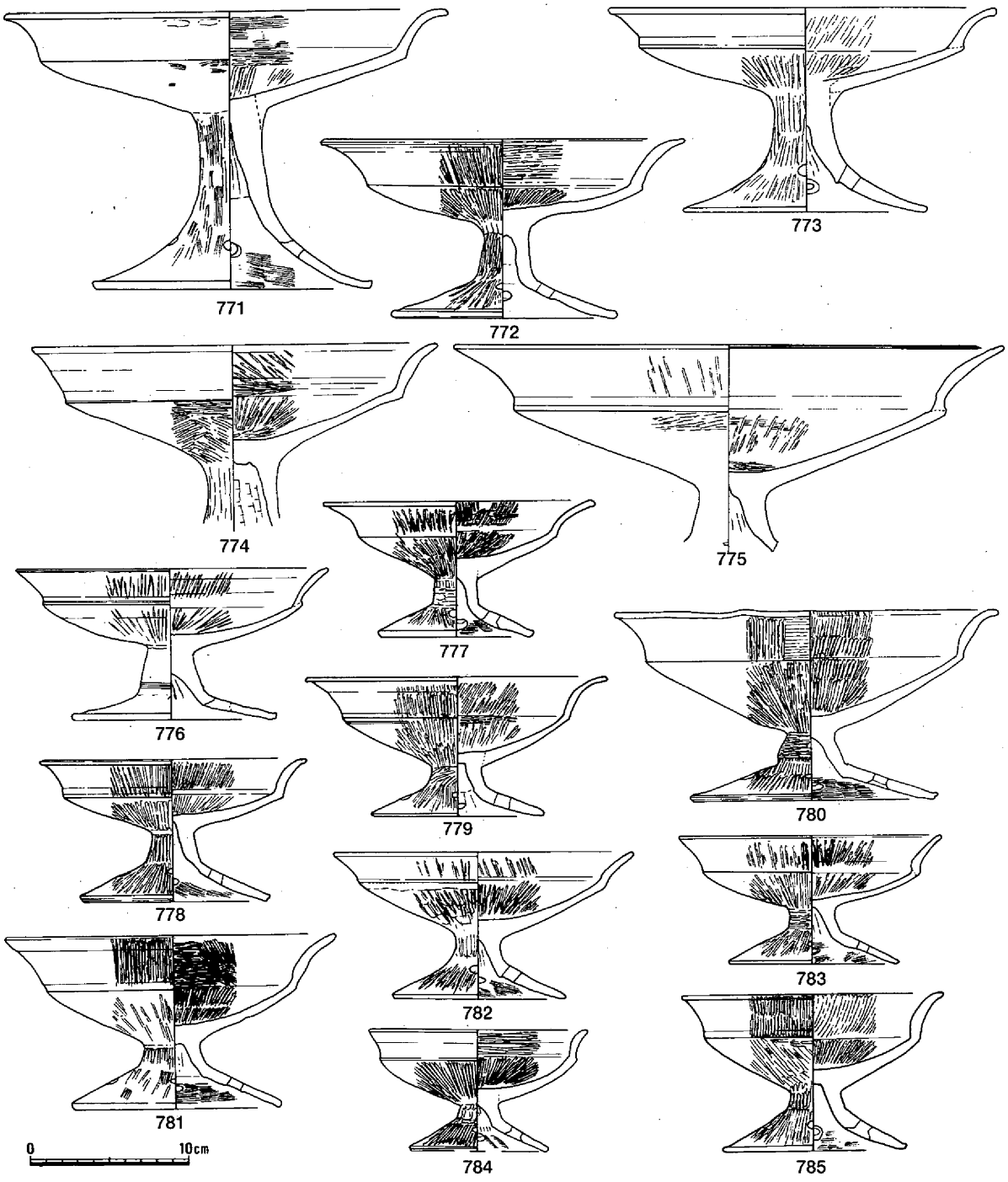
751～754は「く」の字状に屈曲する口縁からさらに外方に開く、二重口縁とされるものである。751の口縁端部は、丸く終わらせる。外面調整は口頸部にヨコヘラミガキ、以下タテの細いハケ後ヨコヘラミガキ、内面は口頸部にヨコヘラミガキ、胴部中ほどにヨコ、以下タテのヘラケズリ後ナデを施す。内面底部近くに、炭化物が付着している。752の口縁端部は、平坦となる。外面調整は肩部に工具によるヨコのナデ、以下タテとヨコの細かいハケ、内面は頸部に押圧、肩部にヨコヘラケズリ後ナデ、以下タテヘラケズリ後ナデを施す。753の口縁端部は、丸く終わらせる。外面調整は口縁部から胴部中ほどにヨコヘラミガキ、以下タテのハケ後タテのヘラミガキを施す。内面は口縁部にヨコヘラミガキ、頸部から胴部半ばにヨコヘラケズリ、底部にヘラミガキ状のナデが認められる。754の口縁部は上方に立ち上がり、端部を外方に短く屈曲させる。外面調整は口頸部にヨコナデ、胴部にタテハケ、内面は肩部にヨコにナナメのヘラケズリを施す。穿孔は胴部最大径部分にあり、外側から敲かれている。

755は、「く」の字状に屈曲する口縁端部に凹部を形成する。外面調整は肩部にナナメ、ヨコ、以下タテのハケ、内面は押圧とナデ後ハケを施す。また、内外面とも成形時の指頭圧痕が明瞭に認められる。

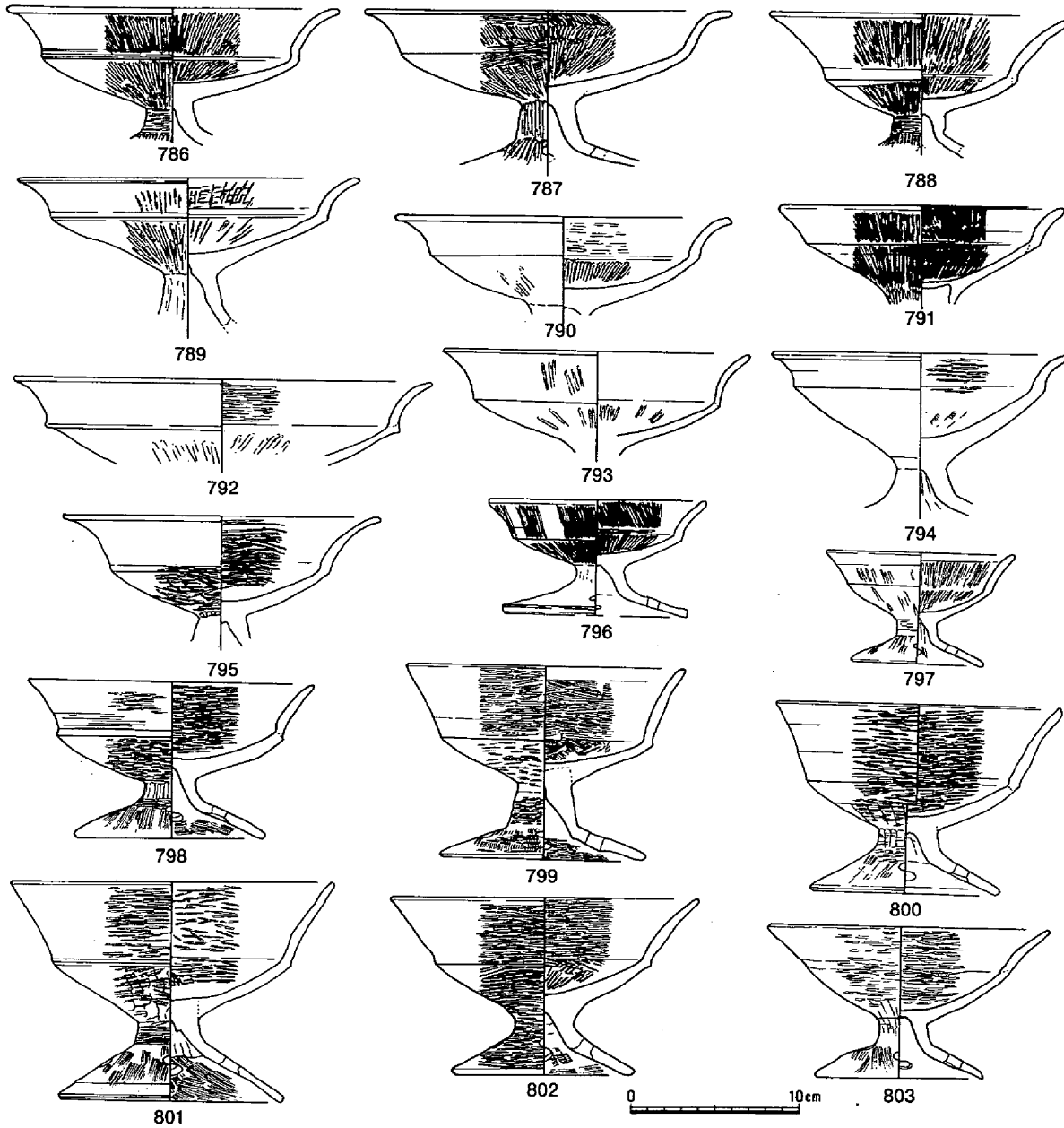
756は、いわゆるS字状口縁である。外面調整は肩部にヨコ、内面にもナナメの太いハケを施す。



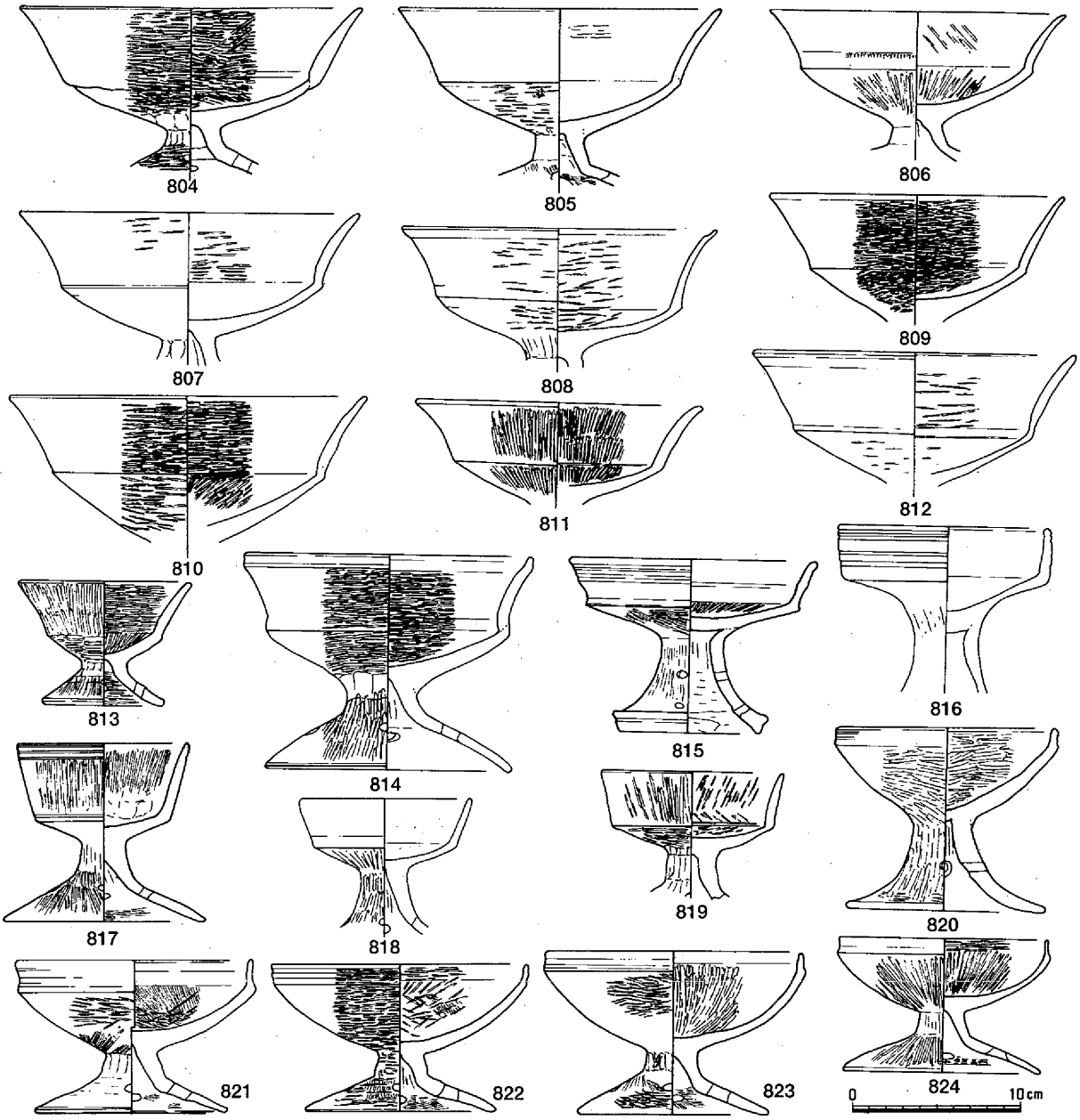
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
757	弥生土器	高杯	(20.8)			良好	10YR7/2.5(にぶい黄橙)	精良	口縁部に凹線
758	弥生土器	高杯	(22.0)			良好	10YR6/2.5(にぶい黄橙)	精良	口縁端部に凹線
759	弥生土器	高杯	25.0	15.8	23.5	良好	5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	脚柱部に未貫通の円形透し4段3方12個
760	弥生土器	高杯	17.5			良好	10YR6/2.5(灰黄褐)	精良	口縁内面に凹線　脚部に透し孔3個
761	弥生土器	高杯	22.1			良好	5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	口唇部に凹線
762	弥生土器	高杯	(20.0)			良好	2.5Y5.5/2(灰黄)	精良	口縁端部に凹線
763	弥生土器	高杯	(23.6)			良好	10YR6.5/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁端部に凹線
764	弥生土器	高杯	25.0			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	杯部と脚部の接合部に補強粘土
765	弥生土器	高杯	(23.6)			良好	10YR6.5/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁端部に凹線
766	弥生土器	高杯	25.1			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	口唇部に凹線　円盤充填
767	弥生土器	高杯	21.8			良好	10YR6/4(にぶい黄橙)	砂粒(少)	
768	弥生土器	高杯	22.4			良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	杯部内面に凹部
769	弥生土器	高杯	(21.4)			良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	
770	弥生土器	高杯	(23.6)			良好	10YR5.5/1(褐灰)	精良	口縁部に煤付着



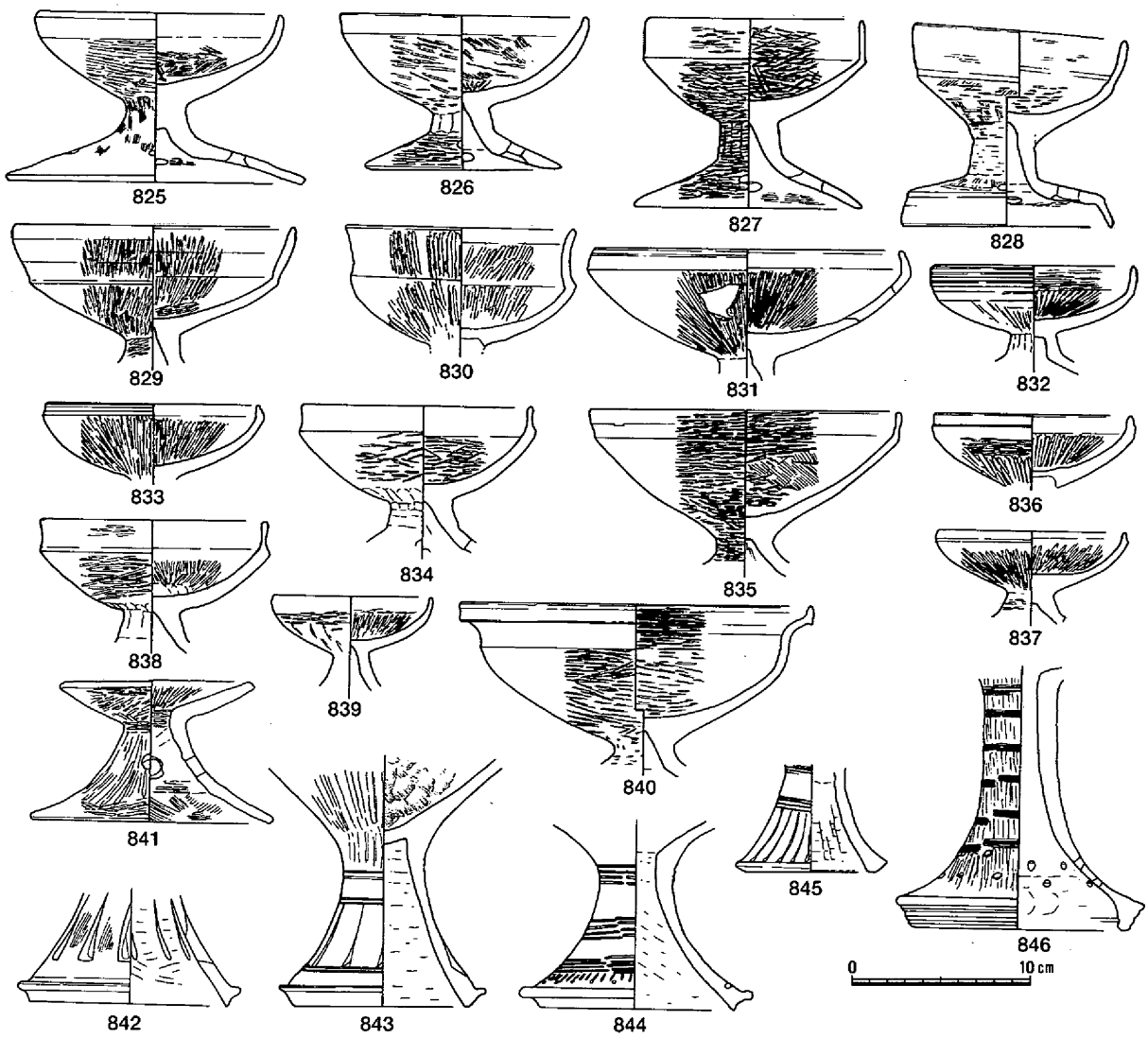
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
771	弥生土器	高杯	27.6	17.1	17.35～17.6	良好	10Y R6/3(にぶい黄橙)	砂粒	脚部に円形透し４個
772	弥生土器	高杯	22.6	13.5	11.3	良好	2.5Y6/3(にぶい黄)	砂粒	脚部に透し４個
773	弥生土器	高杯	24.3	15.3	(12.9)	良好	2.5Y R6/6(橙)	砂粒(多)	杯部と脚部の接合部に補強粘土　脚部に透し
774	弥生土器	高杯	25.0			良好	2.5Y6/4(にぶい黄)	砂粒	
775	弥生土器	高杯	34.6			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒(少)	口縁内面端部に沈線
776	弥生土器	高杯	(19.7)	9.6	9.5	良好	7.5Y R7/3(にぶい橙)	水漉粘土	脚下端に沈線
777	弥生土器	高杯	16.6	9.4	8.5	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	脚部に円形透し４個
778	弥生土器	高杯	16.7	11.6	9.0	良好	10Y R7/2(にぶい黄橙)	良好	脚部に円形透し４個
779	弥生土器	高杯	18.9	10.7	8.8	良好	10R6/6(赤橙)	砂粒	脚部に円形透し４個
780	弥生土器	高杯	23.6	15.0	12.0	良好	2.5Y6/2(灰黄)	精良	脚部に円形透し
781	弥生土器	高杯	20.8	13.1	10.9	良好	10Y R7/2(にぶい黄橙)	精良	脚部に円形透し４個
782	弥生土器	高杯	19.0	11.0	9.3	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒(少)	脚部に透し４個
783	弥生土器	高杯	16.6	10.8	8.1	良好	10Y R6/4(にぶい黄橙)	砂粒(少)	脚部に透し４個
784	弥生土器	高杯	13.5	8.5	7.7	良好	10Y R6/3(にぶい黄橙)	水漉粘土風	脚部に円形透し４個
785	弥生土器	高杯	16.4	11.2	9.8	良好	5Y R7/6(橙)	砂粒	脚部に円形透し４個



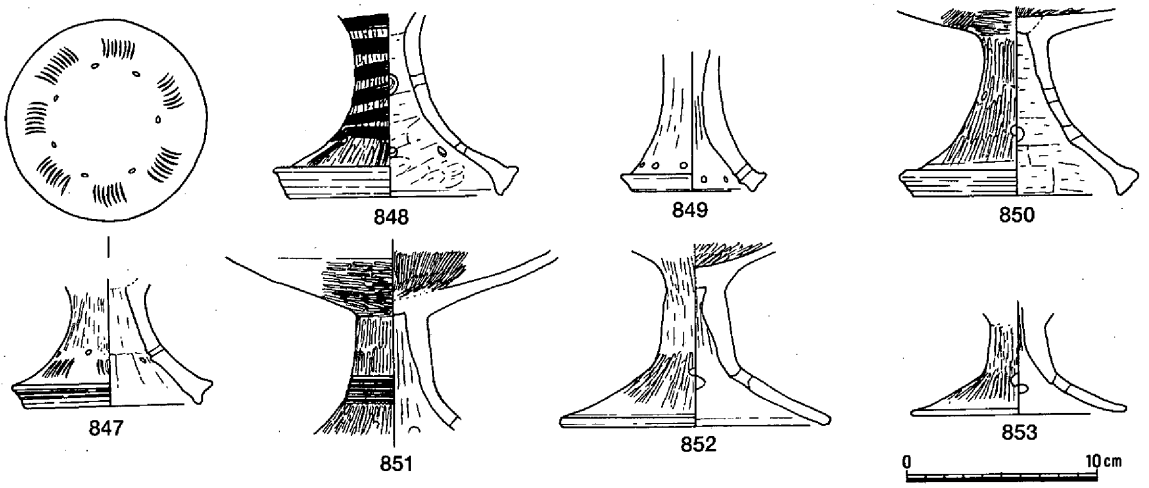
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
786	弥生土器	高杯	19.3			良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	
787	弥生土器	高杯	21.6			良好	2.5Y8/2(灰白)	砂粒	脚部に円形透し4個
788	弥生土器	高杯	17.8			良好	7.5YR7/2(明褐灰)	砂粒	脚部に透し？
789	弥生土器	高杯	19.5			良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	
790	弥生土器	高杯	19.4			良好	10YR6/1(褐灰)	精良	口縁部外面に煤付着
791	弥生土器	高杯	16.4			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	精良	内外面に煤付着
792	弥生土器	高杯	24.6			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒(少)	
793	弥生土器	高杯	17.9			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	精良	
794	弥生土器	高杯	17.2			良好	7.5YR7/2(明褐灰)	砂粒	
795	弥生土器	高杯	18.6			良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	
796	弥生土器	高杯	12.7	10.8	7.0	良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	脚部に円形透し4個
797	弥生土器	高杯	11.1	7.4	6.6～6.8	良好	10R6/6(赤橙)	精良	脚部に円形透し
798	弥生土器	高杯	16.7	11.0	9.2～9.5	良好	5YR6/4(にぶい橙)	精良	脚部に円形透し4個
799	弥生土器	高杯	16.3	11.8	11.5	良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	脚部に円形透し4個
800	弥生土器	高杯	16.8	9.9	11.3	良好	7.5YR6.5/3(にぶい橙)	水簸粘土風	脚部に透し4個
801	弥生土器	高杯	18.9	12.8	13.0～13.2	良好	5YR6/3(にぶい橙)	砂粒	脚部に円形透し4個
802	弥生土器	高杯	18.0	10.4	10.5	良好	7.5YR8/3(浅黄橙)	砂粒	杯部内面に煤付着　脚部に円形透し4個
803	弥生土器	高杯	16.4	9.8	9.1	良好	5YR6/4(にぶい橙)	密	脚部に円形透し4個　口縁の一部に煤付着



掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
804	弥生土器	高杯	20.4			良好	7.5Y R7/2(明褐灰)	砂粒	脚部に円形透し４個　杯部に煤付着
805	弥生土器	高杯	19.0			良好	2.5Y R6/6(橙)	精良	内面に煤付着
806	弥生土器	高杯	17.4			良好	10Y R8/3(浅黄橙)	砂粒	
807	弥生土器	高杯	20.1			良好	10Y R8/2 (灰白)	砂粒(少)	表面剝離で調整不詳
808	弥生土器	高杯	(18.7)			良好	2.5Y R6/6(橙)	水漉粘土	
809	弥生土器	高杯	17.2			堅緻	5Y R8/4(淡橙)	砂粒	
810	弥生土器	高杯	21.3			良好	10Y R7/2(にぶい黄橙)	精良	
811	弥生土器	高杯	16.6			良好	10Y R7/3(にぶい黄橙)	砂粒	
812	弥生土器	高杯	18·8			良好	2.5Y6.5/2(灰黄)	水漉粘土	
813	弥生土器	高杯	10.3	6.9	7.4	良好	7.5Y R6/4(にぶい橙)	砂粒	脚部に円形透し４個
814	弥生土器	高杯	17.1	14.4	12.9	良好	10Y R7/2(にぶい黄橙)	精良	脚部に円形透し４個　裾端部に沈線
815	弥生土器	高杯	14.4	8.2	10.5	良好	10Y R7/4(にぶい黄橙)	砂粒	脚部に円形透し２段１対が２組
816	弥生土器	高杯	12.2			良好	7.5Y R4/3(褐)	砂粒	杯部に凹線４条
817	弥生土器	高杯	10.1	12.0	10.6	良好	10Y R6/4(にぶい黄橙)	砂粒	脚部に円形透し４個　口縁部に沈線
818	弥生土器	高杯	10.0			良好	10Y R7/2(にぶい黄橙)	砂粒(少)	脚部に透し
819	弥生土器	高杯	10.3			良好	10Y R6.5/2(にぶい黄橙)	砂粒	脚部に透し４個
820	弥生土器	高杯	12.9	11.5	10.8~11.1	良好	2.5Y6/3(灰黄)	砂粒	脚柱部に円形透し４個
821	弥生土器	高杯	13.9	(11.0)	9.1	良好	11Y R7/3(にぶい黄橙)	水漉粘土	脚部に透し４個
822	弥生土器	高杯	15.2	11.0	(8.7)	良好	5Y R7/6(橙)	砂粒	脚部に円形透し４個
823	弥生土器	高杯	15.0	11.0	9.7	良好	5Y7/1(灰白)	砂粒	脚部に円形透し４個
824	弥生土器	高杯	12.4	11.6	8.0	良好	10Y R7/3(にぶい黄橙)	砂粒	脚部に円形透し４個



掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
825	弥生土器	高杯	12.9	16.4	9·6	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	脚部に円形透し4個
826	弥生土器	高杯	13.7	10.3	8.65～8.8	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	脚部に円形透し4個
827	弥生土器	高杯	12.9	12.7	10.7	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	脚部に円形透し4個
828	弥生土器	高杯	11.8	11.8	10.5～11.4	良好	2.5YR6.5/6(橙)	水漉粘土風	脚部に円形透し4個　裾端が立ち上がる
829	弥生土器	高杯	15.4			良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	
830	弥生土器	高杯	12.7			良好	2.5Y7/2(灰黄)	精良	
831	弥生土器	高杯	17.2			良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹部　杯部に穿孔
832	弥生土器	高杯	(11.1)			良好	10YR7/2.5(にぶい黄橙)	水漉粘土	口縁部にナデによる凹部
833	弥生土器	高杯	11.8			良好	5Y7/3(浅黄)	砂粒	口縁部に凹線
834	弥生土器	高杯	12.7			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒(少)	脚部に透し4個
835	弥生土器	高杯	17.2			良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	
836	弥生土器	高杯	10.9			良好	5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	
837	弥生土器	高杯	10.5			良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒(少)	口縁部に凹み　脚部に透し4個
838	弥生土器	高杯	12.6			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒(少)	脚部に透し1個残存
839	弥生土器	高杯	8.8			良好	2.5Y7/4(浅黄)	砂粒	
840	弥生土器	高杯？	19.7			良好	5YR5.5/4(にぶい赤褐)	砂粒	
841	弥生土器	高杯	10.4	13.3	8.0	良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒(僅)	脚部に円形透し
842	弥生土器	高杯		10.9		良好	10YR8/2(灰白)	砂粒(僅)	脚部に透し(貫通)推定12個(現存4個)
843	弥生土器	高杯		9.8		良好	10YR6/4(にぶい黄橙)	砂粒	脚部に沈線　未貫通の透し12個
844	弥生土器	高杯		10.7		良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒(少)	脚柱部に沈線3段　脚部に透かし(未貫通 20個残存)
845	弥生土器	高杯		7.5		良好	2.5Y6/2.5(灰黄)	砂粒	脚柱部にヘラガキ沈線　裾部に櫛状透し28本
846	弥生土器	高杯		12.0		良好	10YR6/1(褐灰)	砂粒(少)	脚柱部にクシガキ沈線4条1組？6段　脚部に円形透し11方2段　裾端部に凹線



掲載番号	種別	器種	法量（cm）			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
847	弥生土器	高杯		9.1		良好	5Y5/4(オリーブ)	砂粒(少)	脚裾部に円形透し７個・縦方向ヘラガキ沈線　脚部端面に凹線２～３条
848	弥生土器	高杯		11.2		良好	2.5YR6/6(橙)	砂粒(少)	脚柱部にクシガキ沈線６段　脚部にクシガキ沈線透し２段上方４個下方８個
849	弥生土器	高杯		7.6		良好	7.5YR4/3(褐)	砂粒	脚部に円形透し11個
850	弥生土器	高杯		11.0		良好	7.5YR7/2(明褐灰)	砂粒	脚柱部と脚部に透し
851	弥生土器	高杯				良好	2.5YR5/3(にぶい赤褐)	砂粒	脚柱部に沈線　裾部に透し６個
852	弥生土器	高杯		13.8		良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	砂粒(少)	脚裾部に円形透し４個
853	弥生土器	高杯		11.4		良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒(僅)	裾部に円形透し４個　裾端部に沈線

757～853は、高杯である。757～770は、口縁端部を肥厚または拡張させるものである。757は口縁端部を肥厚し、外面に凹線を施文する。内外面の調整は、ヘラミガキを施す。758は口縁部が外方に開き、端部を肥厚させ凹線を施文する。内外面の調整は、ヘラミガキを施す。759は口縁端部は上方に拡張し、その端部を肥厚させ凹線を、脚部には単線の沈線と未貫通の円孔を施す。裾部にはクシガキ沈線を施文する。裾端部は拡張し、凹線を施す。外面調整は杯部にヨコヘラケズリ、脚部にタテヘラミガキ、内面は杯部にヘラミガキ、脚部にはヨコヘラケズリを施す。760は口縁端部に肥厚がなく、内面に凹線を施文する。杯部内外面の調整は、ヘラミガキを菱形状に施す。脚部外面はタテヘラミガキで幅が広く面を持ち、内面はヨコヘラケズリを施す。761は、口縁端部を下がり気味に肥厚させ凹線を施文する。内外面の調整は、ヘラミガキを施す。762は口縁端部を粘土を足して肥厚させ、凹線を施文する。内外面の調整は、ヘラミガキを施す。763は口縁端部を外方に拡張し、凹線を施文する。内外面の調整は、ヘラミガキを施す。764の杯部と外方に屈曲する口縁部との形成は、別作りである。さらに、杯部と脚部との接合も別作りであり、補強の粘土が認められる。口縁端部を外方に拡張し、凹線を施文する。内外面の調整は、タテのヘラミガキを施す。765は口縁端部を外方に拡張し、凹線を施文する。内面の調整は、ヨコヘラミガキを施す。766は口縁端部を外方に拡張し、凹線を施文する。外面調整は杯部にヨコ、脚部にタテのヘラミガキ、内面の杯部は磨滅で不詳、脚部はヨコヘラケズリを施す。767は杯部から外方に屈曲する口縁端部の拡張がなくなり、内面のみに残される。この内面には、凹線を施文する。外面調整は杯部に菱形状のヘラミガキ、内面はハケ後タテヘラミガキを施す。脚部内面は、ヨコヘラケズリが認められる。768は口縁部内面が屈曲し、ヨコナデによる凹部を施す。杯部外面調整は菱形のヘラミガキ、内面はタテヘラミガキを施す。769は口縁部内面が屈曲する。杯部外面調整は、菱形のヘラミガキが認められる。770は口縁部内面が屈曲し、外方への拡張は粘土を足して行う。杯部外面調整はヨコヘラケズリ、内面はタテヘラミガキを施す。

771～798の杯部は、口縁部には杯部から外反する口縁部を形成するもので、杯部と脚部は別作りとな

る。771の杯部外面調整は不定方向のハケ後ヘラミガキ、脚部はタテハケ後タテヘラミガキ、杯部内面は中ほどまでヨコハケ以下タテヘラミガキ、脚部はシボリ痕で裾部にヨコハケを施す。772は、脚部から裾への移行が鋭角になる。外面調整はタテヘラミガキ、内面は口縁部にヨコ、杯部にタテのヘラミガキ、裾部にはヨコナデを施す。773の杯部と脚部との接合部分には、補強用の粘土を用いている。杯部内面の調整は、タテヘラミガキを施す。774の杯部外面調整は菱形のヘラミガキ、内面は屈曲部にヨコヘラミガキ、脚部にヨコヘラケズリを施す。この内容から、別作りはなされていないと考えたほうが妥当であろう。775は杯部口径に比較し、短い脚部を形成する。杯部外面調整は口縁部にタテ、杯部にヨコのヘラミガキ、内面は口縁部にタテハケ、杯部にヨコハケ後タテヘラミガキを施す。776の脚下端には、沈線を施文する。777の内外面の調整は、タテのヘラミガキで裾部内面にヨコハケを施す。778の内外面の調整は、タテのヘラミガキで裾部内面にヨコハケを施す。779の内外面の調整は、タテのヘラミガキで杯部内面の屈曲部にヨコヘラミガキを施す。780の杯部外面調整は、口縁部にヨコヘラミガキ後に等間隔にタテのヘラミガキを施し、文様としての効果を出している。781の裾部外面にタテハケ後タテヘラミガキ、杯部内面は、ヨコ後ナナメのヘラミガキを施す。782の杯部外面調整は、丁寧なヘラケズリ後ヘラミガキを施す。783の内外面の調整は、タテのヘラミガキで裾部内面にヨコハケを施す。784の杯部内面調整は、口縁部にヨコヘラミガキを施す。785の外面調整は、ハケ後タテヘラミガキを施す。786の杯部屈曲外面には、沈線状の凹部が認められる。脚部の外面調整は、ヨコヘラミガキを施す。787の杯部屈曲は角がなく、緩やかなカーブを描く。そして、この部分にはヨコヘラミガキを施す。788の脚部には、ヨコヘラミガキを施す。789の杯部内面調整は、口縁部にヨコヘラミガキ後タテヘラミガキを文様風に施す。790の杯部内面調整は、口縁部にヨコヘラミガキを施す。791の内外面の調整は、細いヘラミガキを施す。792の杯部内面調整は、口縁部にヨコヘラミガキを施す。794の杯部内面調整は、杯部にハケ後ヘラミガキを施す。795の杯部外面調整はタテとヨコのヘラミガキ、内面はヨコヘラミガキを施す。796の口縁部外面には、タテのヘラミガキが文様風に施される。797は口縁端部の内面に、沈線の施文が認められる。798の屈曲部には、ヨコナデの条線が残る。杯部内面調整は、ヨコヘラミガキを施す。

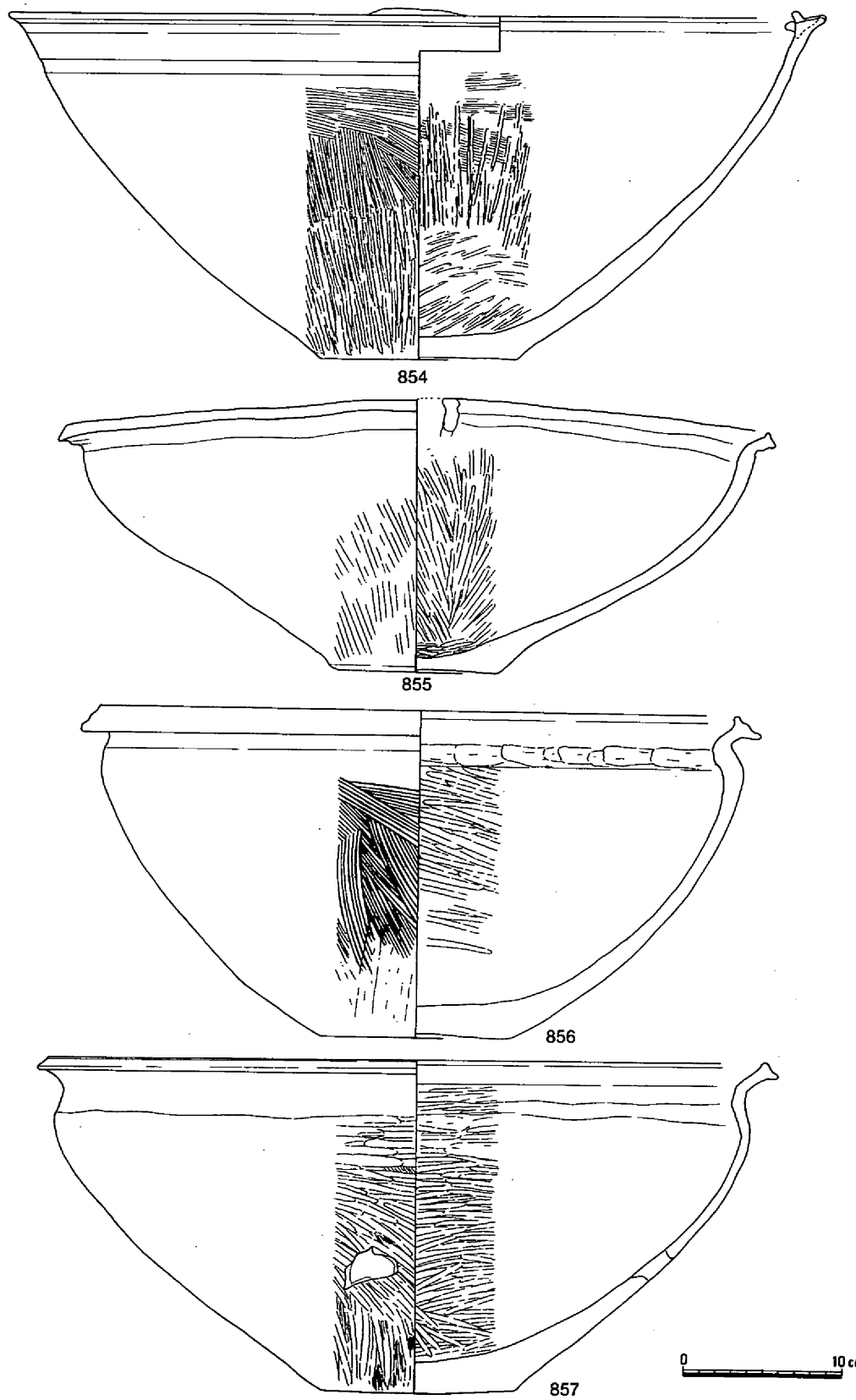
799～814は口縁部が立ち上がり、杯部に対し口縁の占める割合が大きく、杯部が浅い。799の裾部は、膨らみを持つ。外面調整は杯部と裾部にハケ後細いヨコヘラミガキ、内面の口縁部と杯部は不定方向のハケ後細いヘラミガキを施す。800の杯部の調整は、ヨコヘラミガキによる。801の裾端部は、凹部となる。杯部と脚部の調整はヨコヘラミガキで、裾部にハケを施す。802の口縁から裾部までの外面調整はヨコヘラミガキを施す。803は杯部と口縁部との屈曲が明確ではないが、接合痕が認められる。脚部のヘラミガキは、面取り状となる。804の脚部調整は面取り状のヘラ、他はヨコヘラミガキを施す。805の杯部外面調整はタテ後ヨコのヘラミガキを施す。他は、器面の荒れが著しく不詳である。806の調整は、タテのヘラミガキを施す。807の口縁部の内外面調整はヨコヘラミガキで、他は剝離して不詳である。808は口縁端部内面には、ヨコナデによる幅の広い凹部を認める。調整は、ヨコヘラミガキを主として施す。809と810の調整は、細いヨコのヘラミガキを主として施す。811の内外面の調整は、タテヘラミガキによる。812の内外面の調整は、ヨコヘラミガキによる。813の外面調整は口縁部にタテ、杯部にヨコ、裾部にタテのヘラミガキ、内面口縁部にヨコ、杯部にタテ、裾部にヨコのヘラミガキを施す。814は口縁端部を上方へ短く立ち上げ、裾端部に沈線を施文する。調整は杯部内外面にヨコヘラミガキ、裾部外面にタテヘラミガキを施す。

815～819は直線的に開く杯部から、同様に口縁部も上方に立ち上がるものである。815は口縁部にヨコナデによる凹凸が認められる。脚部は緩やかに外反し、端部を肥厚させる。裾部内面調整は、ヨコヘラケズリを施す。816の口縁部には、凹線を施文する。調整は鉄分の付着が著しく、不詳である。817は、口縁端部と杯屈曲部に沈線を施文する。内外面ともタテのヘラミガキを主とするが、杯部内面には押圧が施される。818の口縁部内外面はハケ状工具のナデが認められる。819の調整はタテヘラミガキを主とするが、杯部外面にはヨコヘラミガキを施す。

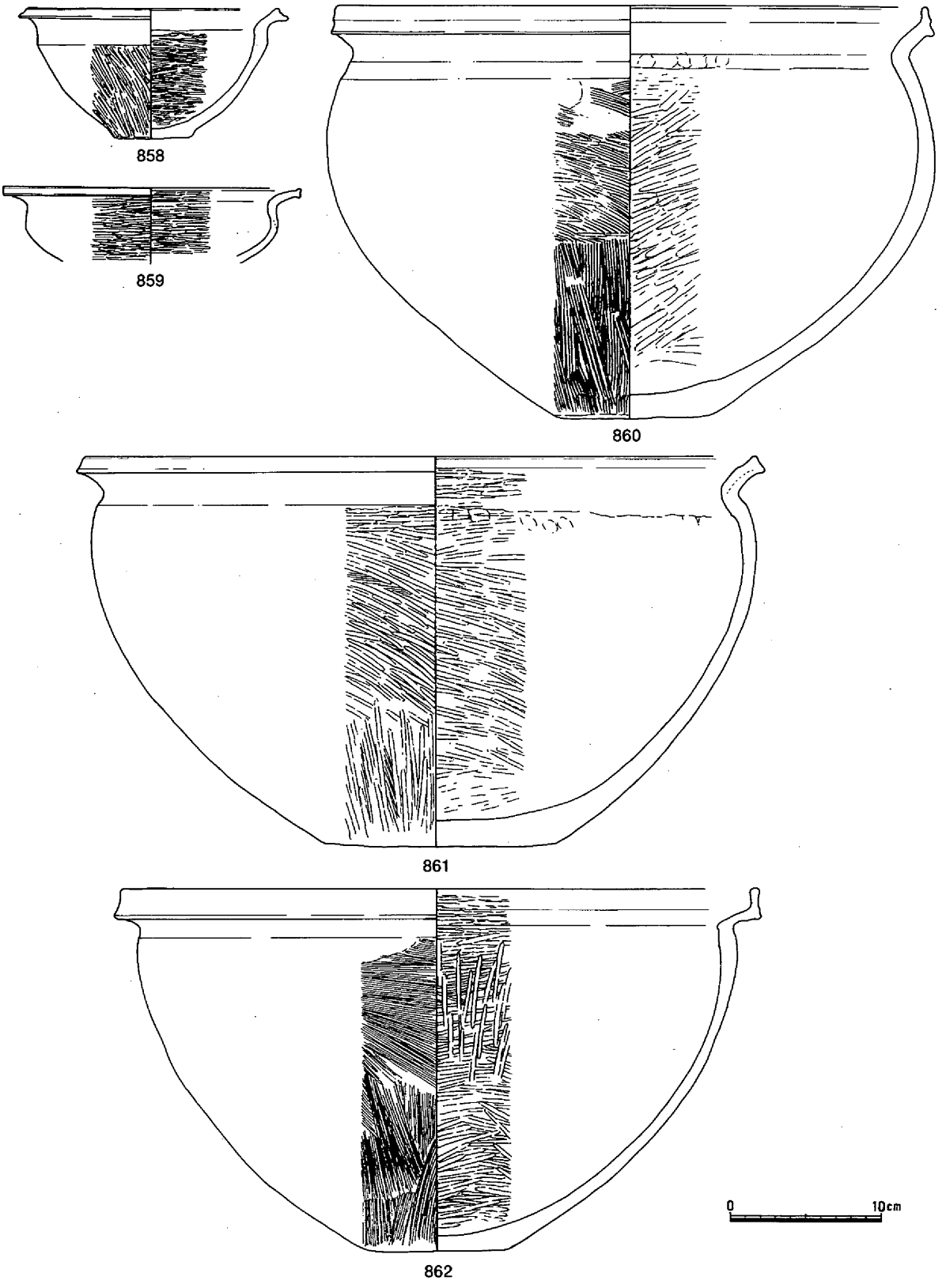
820～839は内湾する杯部に口縁部が短く立ち上がり、端を丸く終わらせ口縁部を作る。820は口縁部外面に工具によるナデの条線が認められる。杯部外面調整はヨコ、裾部にヨコ後タテのヘラミガキ、内面はヨコヘラミガキ、脚部にはナデを施す。821の杯部外面調整は杯部下半にハケ後ヨコヘラミガキ、内面は放射状のハケ後不規則なヘラミガキ、裾部にヨコハケを施す。822の口縁部はヨコナデにより、凹線状となる。外面調整は細いヨコヘラミガキを主として施す。内面裾部は、ヨコハケが認められる。823の杯部外面調整はハケ後ヨコヘラミガキ、下半はナデを施す。内面はヨコハケ後タテヘラミガキを施す。824の外面調整はタテヘラミガキ、内面は口縁部にヨコ、杯部にタテのヘラミガキを施す。裾部はヨコハケ後ヨコナデを施す。825は杯部と口縁部との境となる屈曲がなく、その境はヨコナデにより判断できる。杯部外面調整は杯部下方から脚部にハケ、後杯部にヨコヘラミガキ、内面は細いハケを施す。826の外面調整はヨコヘラミガキ、内面はハケ後ヨコヘラミガキを施す。827の外面調整はヨコヘラミガキ、内面はハケ後口縁部にヨコ、杯部にタテのヘラミガキを施す。828は裾端部が下方に立ち上がる。外面調整はハケ後ヨコヘラミガキ、内面は杯部にヨコヘラミガキを施す。829と830は高い口縁部を持つ。調整は主に、タテヘラミガキを施す。831の口縁部には、凹部が認められる。調整は、タテヘラミガキを施す。穿孔は杯部に認められ、内側から敲かれる。832は、口縁部に凹線を施文する。内面調整は口縁部にヨコ、杯部にタテのヘラミガキを施す。833は、口縁部に凹線を施文する。内外面の調整は、タテヘラミガキを施す。834は杯部外面調整はヨコヘラミガキで下半にヘラによる押圧、内面はハケ後ヨコヘラミガキを施す。835は口縁部にヨコナデによる凹凸が認められる。外面調整はヨコヘラミガキ、内面は杯部にハケ後口縁部から杯部にヨコヘラミガキを施す。836は杯部上半にヨコで以下タテヘラミガキを施す。837の杯部内外面の調整には、タテヘラミガキを施す。838の杯部外面調整はヨコヘラミガキで、内面はハケ後ヘラミガキを施す。839の杯部外面調整は上半にヨコで、以下タテのヘラミガキを施す。

840は台付鉢とも考えられるが、高杯とした。杯部から外方に屈曲し、端部を拡張する。外面調整はハケ後ヨコヘラミガキ、内面は口縁部から杯部にヨコヘラミガキを施す。841は器台の形態をとるが、杯端部からの口縁部の形成が無いものと判断し、さらに時期的な問題からも現段階では高杯とした。杯端部にはヨコナデがなく、ヘラミガキを行っている。

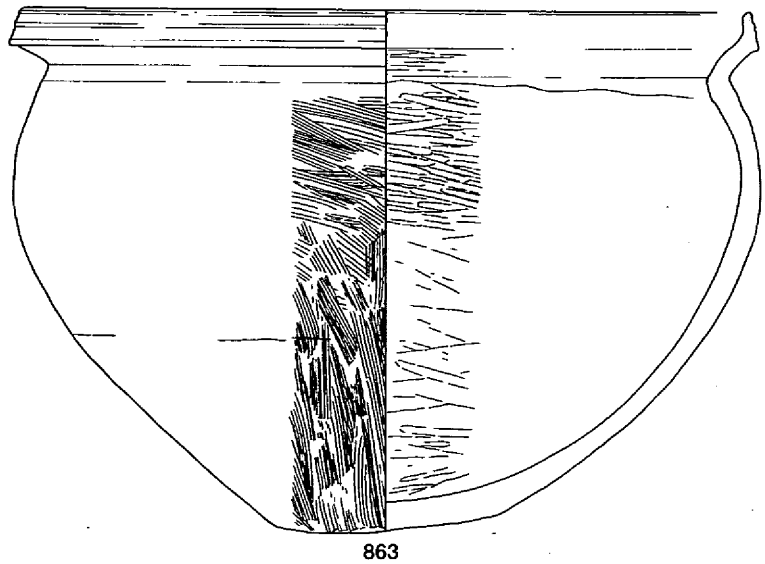
842～853は、脚部の破片である。842は裾端部が張り出し、透し孔は裏面に抜ける。843はヘラガキ沈線を施文し、透し孔は、裏面に抜けていない。844は裾端部を外方に張り出させ、ヘラガキ沈線と刺突状のヘラガキを施文する。透し孔は、円形が認められるが裏面には抜けていない。845は裾端部を肥厚させ、螺旋のヘラガキ沈線と裾にヘラを深めに用いたタテの沈線を施文する。846と848は裾端部を内傾して肥厚させ、文様はクシガキで、円形の透し孔は裏面に抜ける。847は、裾端部を肥厚させ凹線を施す。文様は、ヘラガキ沈線が認められる。849は円形の透しを持つ。850は裾端部を肥厚させ凹線を施す。851は脚部下端にヘラガキ沈線を施文し、852と853の裾端部は丸く納める。

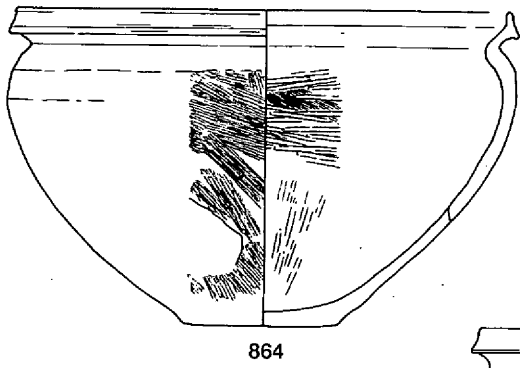


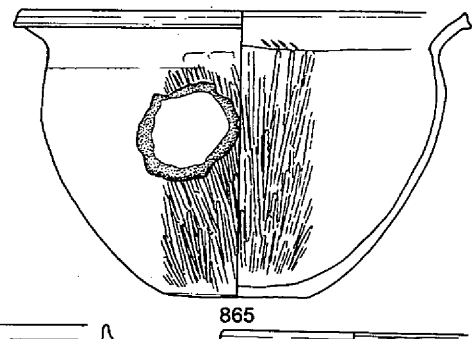
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
854	弥生土器	鉢	50.8	12.1	22.1	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒(少)	口唇部に凹線　内面丹付着　片口
855	弥生土器	鉢	43.6	10.3	17.4	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒(少)	
856	弥生土器	鉢	39.6	11.8	20.7	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	
857	弥生土器	鉢	44.5	12.2	21.0	良好	2.5Y7/4(浅黄)	砂粒	体部に内側から穿孔

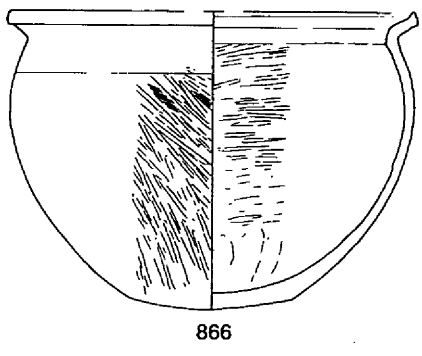


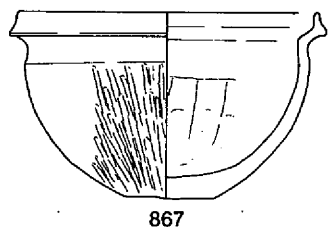
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
858	弥生土器	鉢	16.6	5.2	8.7	良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	
859	弥生土器	鉢	(19.7)			良好	2.5Y6/3(にぶい黄)	砂粒	
860	弥生土器	鉢	38.8	10.4	27.3	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
861	弥生土器	鉢	44.7	15.5	26.4	良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒(少)	
862	弥生土器	鉢	42.1	9.6	24.5	良好	2.5Y6/3(にぶい黄)	砂粒	内外面ほぼ全体に煤付着

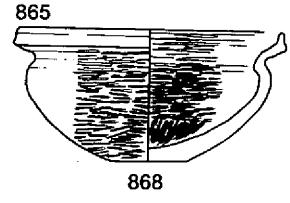

863

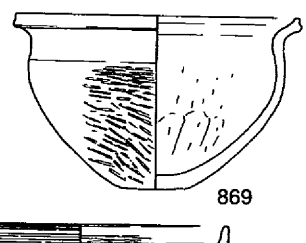

864

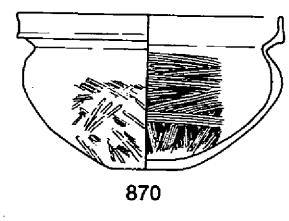

865

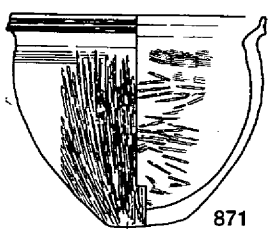

866

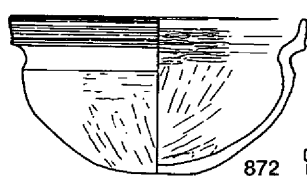

867

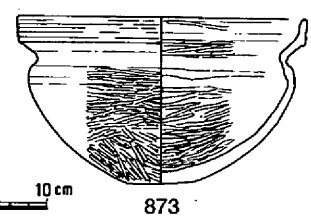

868


869


870

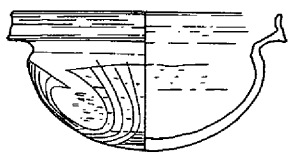

871

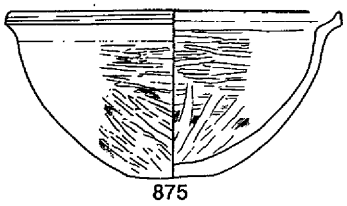

872


873

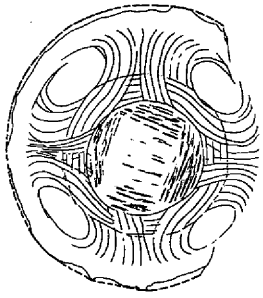
0　10cm

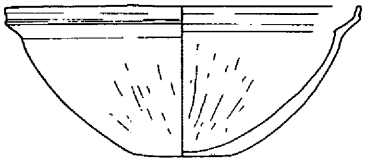
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
863	弥生土器	鉢	38.0	10.5～12.0	28.0	良好	10YR6/2.5(灰黄褐)	砂粒	口縁部に凹線
864	弥生土器	鉢	25.6	8.2	16.9	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒(少)	口縁部にナデの条線　底面髪の痕？
865	弥生土器	鉢	23.4	7.7	15.05～15.3	良好	7.5Y7/1(灰白)	砂粒	口縁部に凹線　胴部中位に穿孔
866	弥生土器	鉢	(21.1)	8.4	15.9	良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒(少)	
867	弥生土器	鉢	15.8	4.8	10.1	良好	N1.5/(黒)	砂粒	外面全体と内面口縁部以外に煤付着
868	弥生土器	鉢	(14.0)	4.2	7.1	良好	10YR6.5/3(にぶい黄橙)	水漉粘土風	
869	弥生土器	鉢	14.9	3.9	9.3	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	外面全体に煤付着
870	弥生土器	鉢	13.9	4.1	8.2	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	砂粒	
871	弥生土器	鉢	13.3	4.1	10.75～11.15	良好	5YR6/4(にぶい橙)	精良	口縁部に凹線　胴部上半に横方向に凹凸
872	弥生土器	鉢	15.3	4.2	8.2	良好	10YR6.5/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線
873	弥生土器	鉢	15.2	4.0	8.8	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	砂粒	

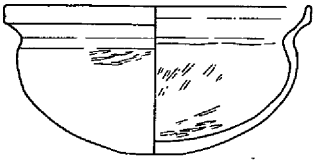



875

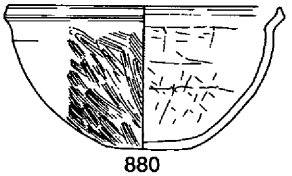
876

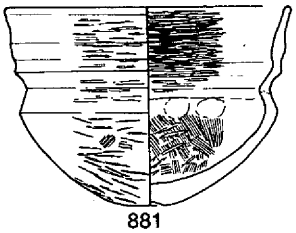

874

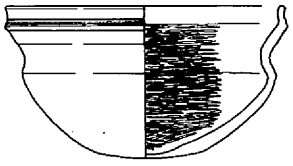

877

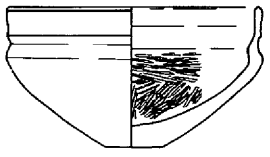

878

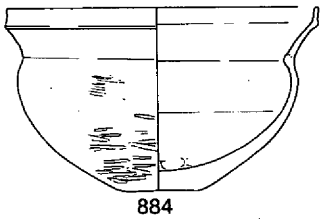
879

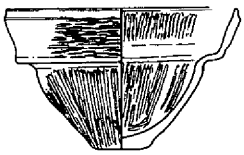

880

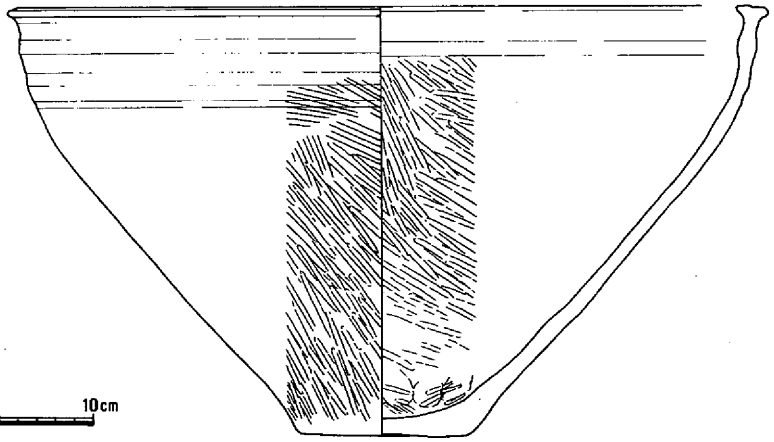

881


882


883

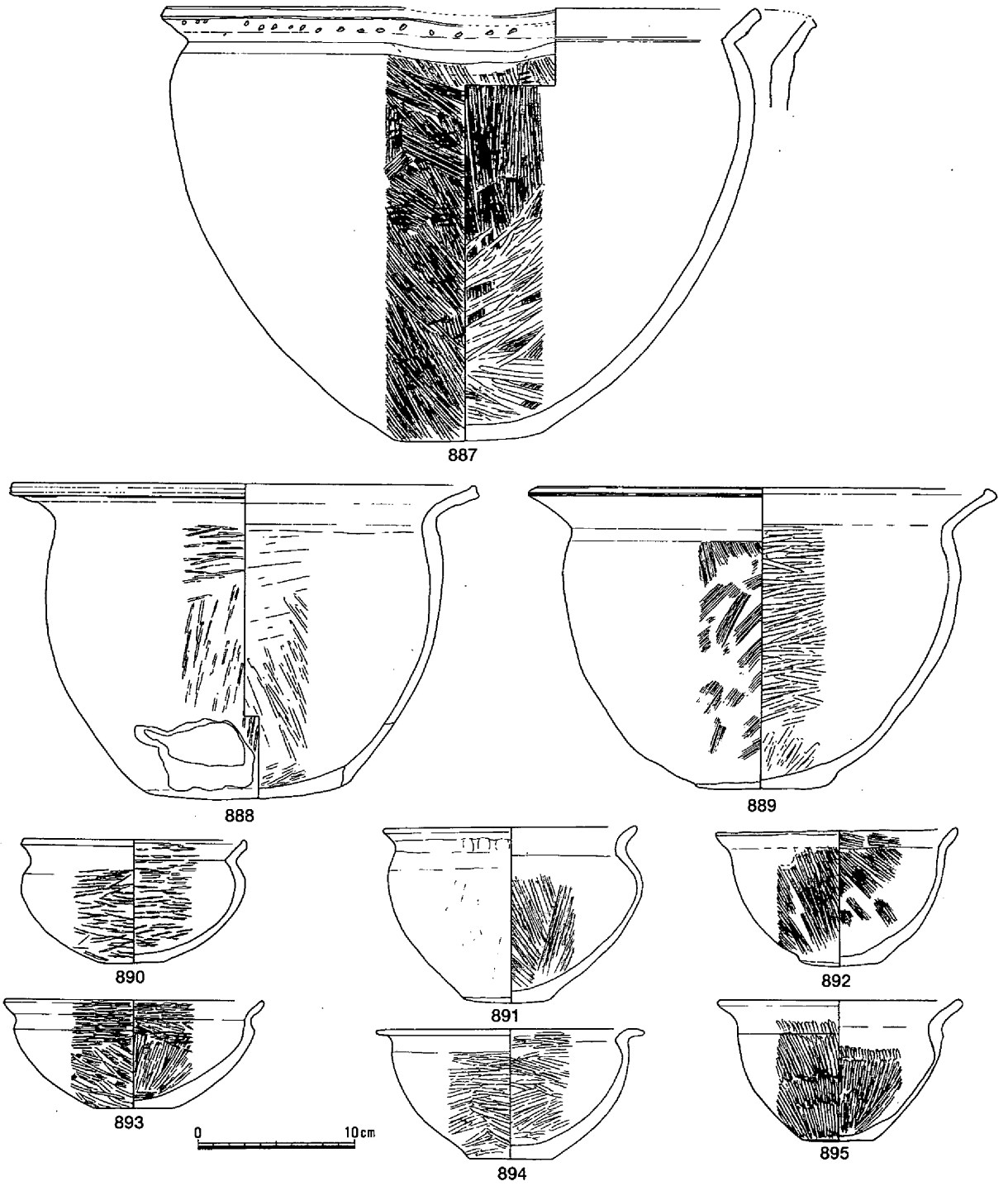

884


885

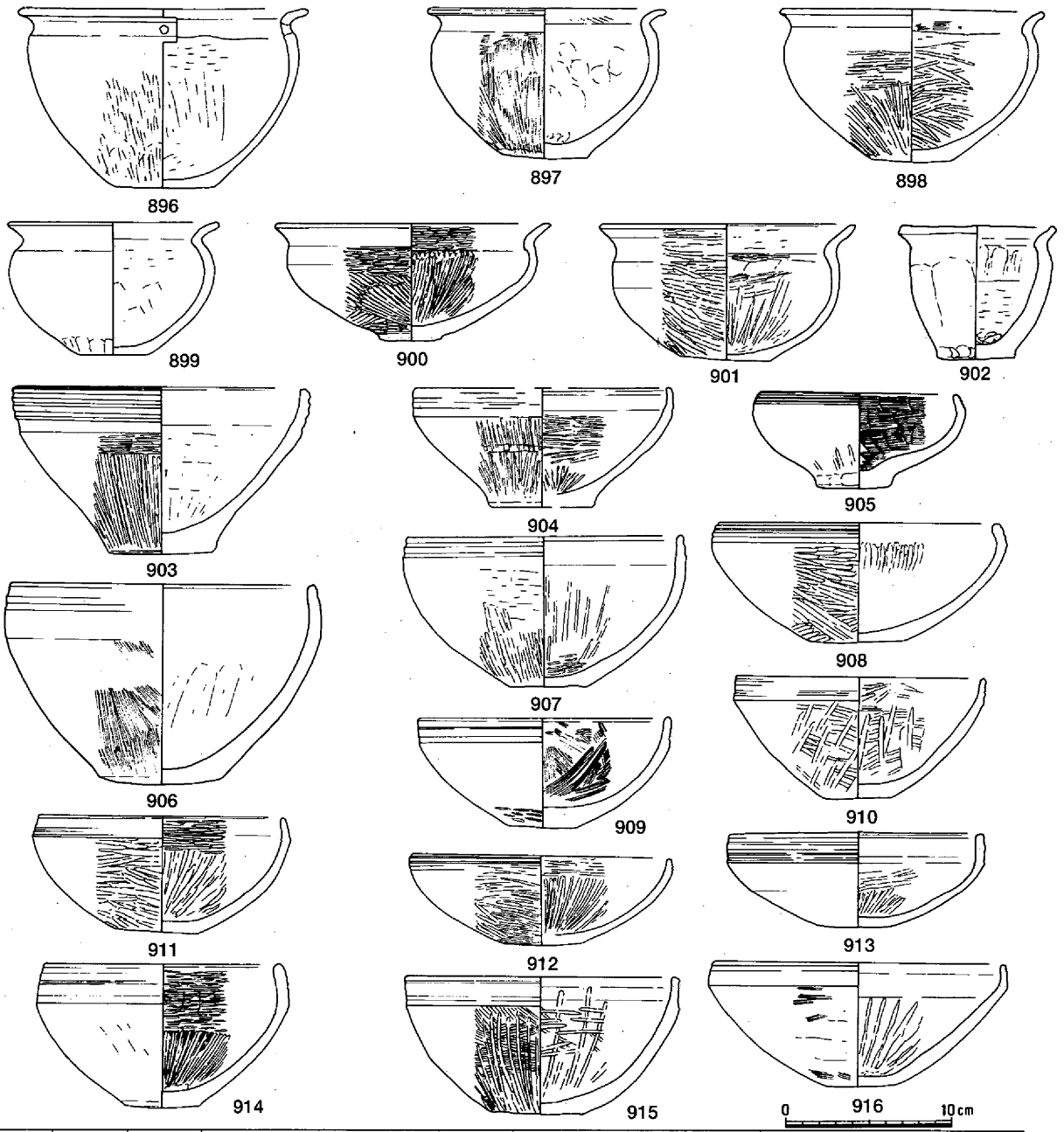

886

0　10cm

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
874	弥生土器	鉢	(14.4)		7.3	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	弧帯文の線刻
875	弥生土器	鉢	17.3	4.3	8.9	良好	10YR7.5/3(浅黄橙)	砂粒	口縁部に凹部　内外面に煤付着
876	弥生土器	鉢	15.2	4.9	8.1	良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	
877	弥生土器	鉢	18.7	5.0	8.0	良好	10YR6.5/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹み
878	弥生土器	鉢	15.9	3.1	7.8	良好	5YR4/3(にぶい赤褐)	砂粒(少)	
879	弥生土器	鉢	14.5	4.5	8.3	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
880	弥生土器	鉢	14.4	4.0	7.6	良好	10YR6.5/4(にぶい黄橙)	砂粒	
881	弥生土器	鉢	14.9	1.8	10.6	良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	外面丁寧なミガキ
882	弥生土器	鉢	14.6		8.1	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に沈線
883	弥生土器	鉢	13.2	3.0	7.5	良好	2.5Y6/2(灰黄)	精良	口縁部に沈線
884	弥生土器	鉢	16.2	4.4	9.8	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒(少)	底部に煤付着
885	弥生土器	鉢	12.2	3.0	7.4	良好	5Y7/2(灰白)	砂粒	
886	弥生土器	鉢	39.9	9.1	23.0	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	砂粒	口唇部に凹線　口縁部に凹線

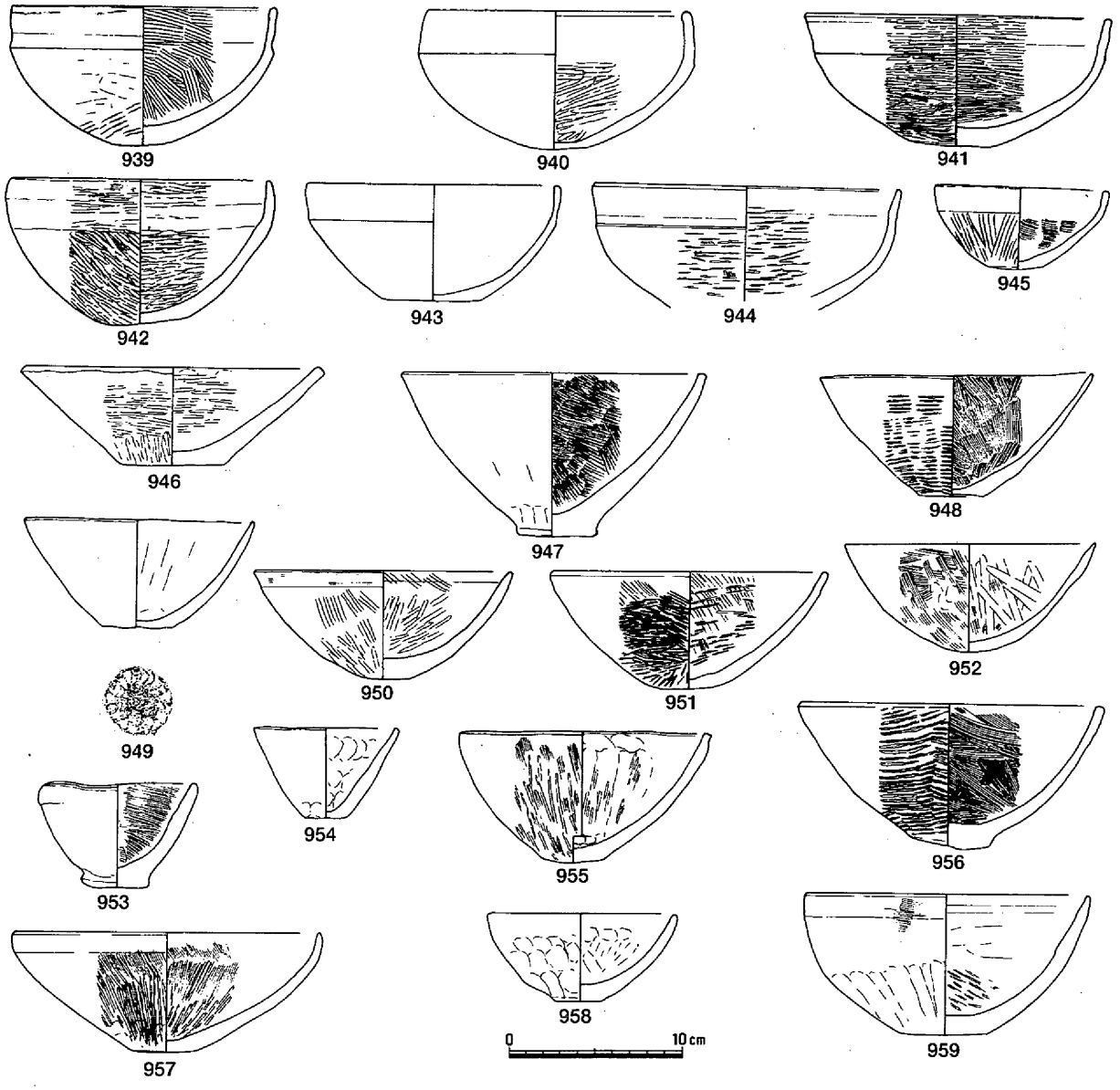


掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
887	弥生土器	鉢	38.0	9.3	28.1	良好	10YR6.5/3(にぶい黄橙)	砂粒	タタキ後ハケ　片口
888	弥生土器	鉢	(28.9)	12.9	20.4	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒(少)	口縁部に凹部　底部近くに穿孔
889	弥生土器	鉢	28.7	8.4	19.4	良好	2.5Y6/3(にぶい黄)	砂粒(少)	口縁端部に沈線　底部に木葉痕
890	弥生土器	鉢	14.0	4.0	8.0	良好	2.5Y8/2(灰白)	砂粒	
891	弥生土器	鉢	16.1	5.7	11.3	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒(少)	
892	弥生土器	鉢	15.5	5.4	8.8	良好	7.5YR6/1(褐灰)	砂粒(少)	
893	弥生土器	鉢	(16.4)	(5.3)	6.9	良好	2.5YR6/5(橙)	砂粒	
894	弥生土器	鉢	17.0	5.4	8.3	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	
895	弥生土器	鉢	15.3	4.6	9.2	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	

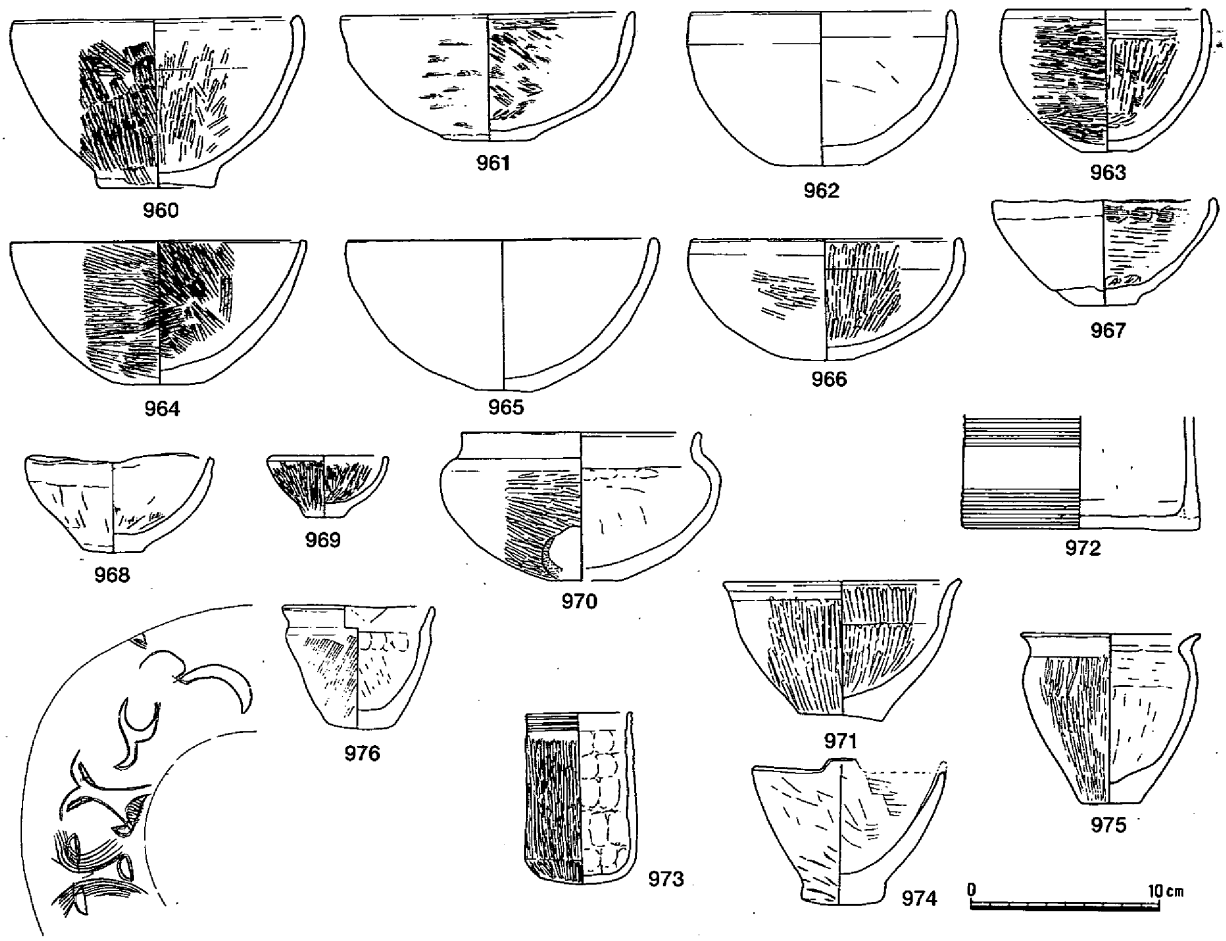


掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
896	弥生土器	鉢	17.5	6.1	11.0	良好	2.5Y7/4(浅黄)	砂粒(少)	頸部に２個１対の円孔
897	弥生土器	鉢	14.2	5.2	9.2	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
898	弥生土器	鉢	15.2	4.8	9.3	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	ほぼ全面に煤付着
899	弥生土器	鉢	12.5	4.3	8.0	良好	2.5Y7/6(明黄褐)	砂粒	外面磨滅
900	弥生土器	鉢	16.3	3.6	7.2	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	底部使用による磨滅著しい
901	弥生土器	鉢	15.0	5.4	8.0～8.3	良好	2.5Y6.5/1(灰白)	精良	外面に煤付着
902	弥生土器	鉢	9.0	4.6(4.3～4.6)	8.1	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	
903	弥生土器	鉢	17.1	6.1	10.2	良好	5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線
904	弥生土器	鉢	(15.1)	(6.4)	7.3	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒(少)	口縁部に凹部
905	弥生土器	鉢	11.5	4.0	5.7	良好	2.5Y8/2(灰白)	砂粒	口縁部に沈線　内外面に煤付着
906	弥生土器	鉢	18.2	7.6	12.3	良好	10YR6/4(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線(風化で不詳)
907	弥生土器	鉢	16.5	4.6	9.2	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線
908	弥生土器	鉢	16.6	5.8	7.3	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線
909	弥生土器	鉢	14.8	4.1	6.8	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線
910	弥生土器	鉢	14.8	4.1	7.5	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	ヨコナデにより条線
911	弥生土器	鉢	14.8	5.3	7.2	良好	5YR6/5(にぶい橙)	水漉粘土風	ヨコナデにより条線
912	弥生土器	鉢	15.4	(4.8)	5.5	良好	10YR6/2(灰黄褐)	水漉粘土	口縁部に沈線３条
913	弥生土器	鉢	15.0	4.5	5.8	良好	2.5YR6/6(橙)	水漉粘土	口縁部に凹線
914	弥生土器	鉢	14.2	5.6	8.8	良好	5Y7/3(浅黄)	砂粒	口縁部の凹線
915	弥生土器	鉢	16.0	5.6	8.4	良好	2.5Y6/1.5(灰黄)	砂粒	ヨコナデにより条線
916	弥生土器	鉢	17.5	4.0	7.6	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に凹線　外面口縁部以外に煤付着

掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
917	弥生土器	鉢	16.6	4.1	7.1	良好	10YR8/3(浅黄橙)	砂粒	口縁部に沈線
918	弥生土器	鉢	16.8	5.2	6.5	良好	2.5YR6/6(橙)	砂粒	口縁部に凹線
919	弥生土器	鉢	13.7	5.2	7.3	良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	口縁下に円孔
920	弥生土器	鉢	14.8	4.6	6.4	良好	7.5YR7/2(明褐灰)	砂粒	口唇部に凹線
921	弥生土器	鉢	(14.8)	4.0	6.7	良好	7.5YR6/3(にぶい橙)	精良	
922	弥生土器	鉢	15.6	4.6	8.0	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	
923	弥生土器	鉢	13.8	4.6	6.1	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	底部未調整
924	弥生土器	鉢	16.6	4.9	7.5	良好	5YR6/3(にぶい橙)	砂粒(少)	
925	弥生土器	鉢	14.7	3.2	8.0	良好	7.5YR7/2(明褐灰)	精良	
926	弥生土器	鉢	12.4	3.9	5.3	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒(少)	
927	弥生土器	鉢	15.6	5.0	5.6	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	
928	弥生土器	鉢	15.45～15.9	4.2	6.6	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	胴部に穿孔
929	弥生土器	鉢	15.5	4.0	7.0	良好	2.5Y8/3(淡黄)	砂粒	
930	弥生土器	鉢	14.6	4.5	6.3	良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒(多)	外面に煤付着
931	弥生土器	鉢	15.1	4.5	6.3	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	精良	
932	弥生土器	鉢	14.2	5.4	6.5～6.75	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
933	弥生土器	鉢	16.1	8.3	7.8	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	
934	弥生土器	鉢	17.5	4.4	7.4	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	
935	弥生土器	鉢	14.7～15.25	5.6	6.0～6.15	良好	7.5Y7/3(にぶい橙)	砂粒	
936	弥生土器	鉢	16.4	4.4	7.9	良好	2.5Y8/4(浅黄)	砂粒	
937	弥生土器	鉢	16.0	5.0	8.8	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	
938	弥生土器	鉢	18.6	5.3	9.1	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	タタキ



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
939	弥生土器	鉢	15.1		8.1	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	タタキ
940	弥生土器	鉢	14.9	3.7	8.1	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	
941	弥生土器	鉢	17.3	4.7	7.7	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
942	弥生土器	鉢	14.8	5.0～5.5	8.4	良好	10YR6.5/3(にぶい黄橙)	砂粒	
943	弥生土器	鉢	14.5	5.5	6.8	良好	7.5YR7/6(橙)	砂粒	表面磨滅
944	弥生土器	鉢	(17.4)			良好	10YR6.5/3(にぶい黄橙)	水簸粘土風	内外面とも丹塗り
945	弥生土器	鉢	9.4	3.3	4.8	良好	5Y6/1(灰)	砂粒	
946	弥生土器	鉢	17.6	6.1	5.8	良好	10YR4/1(褐灰)	砂粒(少)	外面に煤厚く付着
947	弥生土器	鉢	17.3	4.3	9.6	良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	
948	弥生土器	鉢	14.6	3.7	7.0	良好	10YR6/1(褐灰)	砂粒	タタキ
949	弥生土器	鉢	13.2	4.1	7.3	良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	
950	弥生土器	鉢	14.7	3.4	6.3	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	
951	弥生土器	鉢	15.6	3.5	6.8	良好	5YR7/6(橙)	砂粒	外面口縁部以外に煤付着
952	弥生土器	鉢	14.2		6.3	良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	全面に煤付着　内面に煤付着
953	弥生土器	鉢	9.0	3.6～4.0	6.2	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	密	押圧痕
954	弥生土器	鉢	8.4	2.4	5.2	良好	5Y7/2(灰色)	砂粒	内面底・口縁部に煤付着
955	弥生土器	鉢	14.2	3.5	7.6	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	押圧痕
956	弥生土器	鉢	17.0	4.6	8.5	良好	7.5YR7/2(明褐灰)	砂粒	外面に煤付着
957	弥生土器	鉢	17.6	3.8	7.0	良好	10YR6/4(にぶい黄橙)	砂粒	
958	弥生土器	鉢	10.7	3.1	5.1	良好	2.5Y4/6(オリーブ褐)	砂粒	ユビオサエ顕著
959	弥生土器	鉢	16.0	5.2	8.2	良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	



掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
960	弥生土器	鉢	14.8	5.9	8.9～9.05	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	外面全体に煤付着
961	弥生土器	鉢	15.2	4.7	6.7	良好	10YR7/6(明黄褐)	砂粒	
962	弥生土器	鉢	13.7	3.7	9.3	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	
963	弥生土器	鉢	10.4	2.9	7.5	良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	
964	弥生土器	鉢	15.2	4.7	7.6	良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒(多)	
965	弥生土器	鉢	16.0	2.9	8.2	良好	7.5YR4/1(褐灰)	砂粒	二次的な火を受け剝離
966	弥生土器	鉢	14.2	3.5	6.5	良好	2.5YR6/3(にぶい黄)	砂粒	
967	弥生土器	鉢	11.6	3.4	5.5	良好	10YR7/6(明黄褐)	砂粒	籾圧痕2ヵ所
968	弥生土器	鉢	9.5～10.1	3.0～3.2	5.2	良好	2.5Y7/1.5(灰黄)	砂粒	
969	弥生土器	鉢	6.0	2.0	3.3	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	
970	弥生土器	鉢	12.2	(3.3)	(8.0)	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	底部に穿孔　外面に煤付着
971	弥生土器	鉢	12.1	4.3	7.05～7.5	良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	外面に煤付着？
972	弥生土器	鉢		12.4		良好	2.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒(少)	沈線4条と5条の2段(単線？)
973	弥生土器	鉢	5.5		9.2	良好	5Y7/1(灰白)	砂粒	口縁部に沈線
974	弥生土器	鉢	10.0	4.2	7.2～7.8	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁に突出部あり
975	弥生土器	鉢	9.4	3.1	9.1	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	
976	弥生土器	鉢	8.0	4.9	6.6	良好	5Y7/3(浅黄)	精良	線刻画

854～976は鉢で、そして854～890は口縁部を拡張、あるいは端部を肥厚させるものである。854は片口となり、口縁部にヨコナデによる凹部を、端部には凹線を施文する。外面調整は中ほどまでタテ後上半にヨコのハケで下半にタテヘラミガキ、内面は中ほどまでヨコハケ後タテで、以下ヨコのヘラミガキを施す。また、内面には丹の痕跡が認められる。855は内面に、薄い粘土を付す部分が認められる。外面調整は粗いタテとナナメのハケ、内面はヘラケズリ後ヘラミガキを施す。856は口縁端部が剝離しているが、肥厚し凹線の施文が認められる。外面調整は上半にヨコで、以下タテのハケ後タテヘラケズリ、内面は頸部にヨコヘラケズリで、以下ヨコヘラミガキを施す。857は、口縁端部を肥

厚させる。外面調整は肩部にヘラケズリで以下ナナメとタテのハケ後ヨコ、ナナメ、タテの順でヘラミガキを施す。内面は中ほどにヘラケズリ後ヨコヘラミガキを施す。穿孔は下半にあり、内側から敲かれる。858は、口縁端部を下方に肥厚させる。外面調整はナナメのヘラミガキ、内面はヘラケズリ後ヨコヘラミガキで底部には押圧を施す。859は、口縁端部を肥厚気味にする。内外面とも調整は、ヨコのヘラミガキを施す。860は口縁端部を下方よりも上方へ拡張する。外面調整は中ほどまでヨコで以下タテの粗いハケ、内面は頸部に押圧で、以下ヘラケズリ後ナナメのヘラミガキを施す。861は、口縁端部を肥厚気味にする。外面調整はハケ後肩部にヨコ、中ほどにナナメ、以下タテのヘラミガキ、内面は肩部に押圧が、口縁部から底部にヨコヘラミガキを施す。862は、口縁端部が上方に拡張する。外面調整は中ほどまでヨコで以下タテのハケ、内面はヘラケズリ後ヨコで、上半にはタテのヘラミガキを施す。863の口縁部は下方よりも上方に拡張し、凹線を施文する。底部は、安定した平底にはならない。外面調整はヨコで、以下ナナメからタテのハケ後胴部最大径部分にヨコヘラミガキ、内面は頸部にヨコヘラミガキ、中ほどまでヨコヘラケズリ後ヨコヘラミガキで、以下雑なヘラミガキを施す。864の口縁端部は、下方よりも上方に拡張する。外面調整は細いヨコからナナメのハケ、内面は中ほどまでヨコハケ後ヨコのヘラミガキ、底部にかけてタテのヘラミガキを施す。穿孔は胴部下半にあり、内側から敲かれる。865の口縁端部は上下に摘み出し状にし、凹部を形成する。外面調整はタテヘラミガキ、内面はヨコのヘラケズリ後タテヘラミガキを施す。穿孔は胴部上半にあり、内側から敲かれる。866の口縁端部は、上下に摘み出し状に張り出す。外面調整は細く深いハケ後ナナメヘラミガキ、内面は胴部下半までヨコヘラミガキで、底部にはナデを施す。867の口縁端部は上方へ拡張する。外面調整は肩部までヨコナデ、以下タテヘラミガキ、内面は板状工具のナデを施す。868の口縁端部は上方へ拡張し、凹部を形成する。調整は内外面ともヨコヘラミガキで、内面の底部にはタテヘラミガキを施す。869の口縁端部は、上方に摘み出し状に張り出す。外面調整は肩部までヨコナデ、以下ヨコとナナメのヘラケズリ後ヨコヘラミガキ、内面はタテとナナメのヘラケズリで、底部にはナデを施す。870の口縁端部は、上方へ拡張する。外面調整はハケ後ヘラミガキで、底部もヘラミガキ、内面は細かいハケ後粗いハケ、そしてヘラミガキを施す。871の口縁端部は上方へ拡張し、凹線を施文する。肩部の凹線状の凹凸は、一部分に認められ全周していない。外面調整はタテハケ後タテヘラミガキ、内面は工具ナデ後ナナメヘラミガキを施す。872の口縁端部は上方へ拡張し、凹線を施文する。外面調整は肩部にヨコ以下タテのヘラミガキ、内面は口縁部にヨコ、以下にタテのヘラミガキを施す。873は、口縁端部を上方へ拡張する。外面調整は口縁部の一部にヘラミガキ、胴部中ほどにヨコ、以下ナナメのヘラミガキ、内面は口縁部と肩部から以下にヨコのヘラミガキを施す。874の口縁端部は、下方よりも上方に拡張し、凹線を施文する。外面には弧帯文が線刻されている。外面調整は上半にタテハケ、以下にヨコとナナメのヘラミガキ、内面は胴部下半までヘラケズリで、底部に押圧を施す。この土器については、結語の中で検討する。875の口縁部は上方に拡張し、凹部を形成する。外面調整はヨコとナナメハケ後上半にヨコ、以下にナナメのヘラミガキ、内面は胴部中ほどにヨコヘラミガキ、底部にはハケ後胴部中ほどまでナデを施す。876は口縁端部を上方へ摘み出し状に張り出す。外面調整はハケ後ヨコヘラミガキ、内面は中ほどまでハケで、以下ヘラケズリ後ヘラミガキを施す。877は、上方に拡張する口縁部に凹部を形成する。鉄分の付着が多く、調整が不詳である。878の調整は外面胴部上半にヨコヘラミガキを認めるが、他は鉄分の付着で不詳である。879の外面調整はヨコヘラミガキ、内面はハケ後頸部から底部にかけてヨコヘラミガキを施す。880の外面調整はナナメハ

ケ、内面は上半にヨコヘラケズリ、下半にヨコ後タテのヘラケズリを施す。881の口縁部は頸部に粘土を足して、大きく上方へ拡張し、底部は凹む。外面調整は胴部中ほどにハケ、後口縁から底部にかけヨコヘラミガキ、内面は胴屈曲部に押圧、以下にハケ後ヘラミガキを施す。882は、口縁部下方に沈線を施文する。外面調整は磨滅で不詳、内面は頸部から底部にかけヨコヘラミガキを施す。883は、口縁部上端に細い沈線を施文する。外面調整はヘラミガキと思われるが磨滅のため不詳、内面は胴部上半にヨコ、以下にタテのヘラミガキを施す。884の外面調整は胴部上半にヨコハケ以下にヨコヘラミガキを施す。内面は磨滅のため不詳であるが、底部には押圧とナデが認められる。885の口縁部は杯端部を水平方向に短く外反し、さらにナナメ上方に大きく拡張させ、端部はヨコナデによる稜を形成する。外面調整は口縁部にヨコ、胴部にタテのヘラミガキ、内面は口縁部と胴部に暗文風のタテのヘラミガキを施す。886の口縁部はヨコナデによる凹部となり、端部は水平方向に肥厚させ凹線を施文する。外面調整は胴部上半に粗いヨコハケ、以下にナナメヘラミガキ、内面はナナメヘラミガキで底部には押圧ナデを施す。887の口縁部は僅かに張り出しが認められ、片口となる。文様は口縁部に、刺突文が施文される。外面調整はタタキ後ハケ、内面は胴部下半までタテで、以下ナナメ後底部にヘラミガキを施す。888の口縁部は、凹部を形成する。外面調整は細いハケ後上半にヨコ、以下にタテのヘラミガキ、内面は中ほどまでヨコヘラケズリ、以下にタテヘラミガキを施す。穿孔は底部付近に、内側から敲かれる。889の口縁端部は、内側に肥厚気味にさせる。外面調整はタテとナナメの粗いハケ、内面はヘラケズリ後胴部下半までヨコ、底部はヨコとタテのヘラミガキを施す。890の外面調整は不定方向の細かいヘラミガキ、内面は口縁部から底部に細かいヘラミガキを施す。

891～976は、口縁端部を丸く終わらせるもので、891～902・975は、頸部が外方に屈曲するものである。891の外面調整は頸部に押圧、内面は上半にヨコ、以下タテとナナメのハケを施す。892の頸部の屈曲は、緩やかに外反する。内外面の調整は、粗いハケによる。893の外面調整は胴部中ほどから底部にかけハケの後ヘラミガキで、口縁部までの上半は細かいヘラミガキ、内面は口縁から胴部上半に細かいヨコヘラミガキ以下にハケ後タテヘラミガキを施す。894の口縁部は、ほぼ水平方向に外反させる。外面調整はヨコヘラミガキ、内面は口縁部にヨコ以下にナナメヘラミガキを施す。895の内外面調整は、タテヘラミガキで外面底部にも施される。896は、頸部下に2個1対の孔が認められる。外面調整は一部磨滅で不詳であるが、タテのヘラミガキと底部付近に平坦面を認める。内面は上半にヨコ以下タテのヘラケズリを施す。897の外面調整は胴部中ほどにヨコ後タテのハケ、内面は口縁部にヨコとナナメのハケ、胴部には押圧とナデを施す。898の口縁部下端は、僅かに張り出し気味となる。外面調整は胴部中ほどにヨコ以下タテのヘラミガキ、内面は頸部にヨコハケ、肩部にヨコヘラケズリ後底部までナナメヘラミガキを施す。899の調整は磨滅のため不詳であるが、内面にはヘラケズリが認められる。900の底部は、使用による磨滅が著しい。外面調整は上半にヨコ、以下ナナメのヘラミガキ、内面は口縁部にヨコ、以下タテのヘラミガキを施す。901の口縁部は、頸部のヨコナデにより、僅かに膨らみを持たす口縁部を形成する。外面調整はヨコヘラミガキで一部にヘラケズリによる面を認める。内面は口縁部から胴部上半にヨコ、以下タテのヘラミガキを施す。902の外面調整は、幅広の面を持って削られる。内面は上半にタテ、以下ヨコのヘラケズリで、底部に押圧を施す。975は鉢としたが、甕としたほうが妥当であろう。外面調整は底部までヘラミガキ、胴部内面は上半にヨコ、以下タテのヘラケズリを施す。

903～945は、屈曲する頸部を持たないものである。903は内傾する口縁部に凹線、端部にも沈線を

施文する。外面調整は口縁部下にヨコ、以下にタテのヘラミガキで、底部にもヘラミガキ、内面はヨコで、以下にタテのヘラケズリを施す。904は口縁部にヨコナデによる凹部を形成する。外面調整はヘラオサエ後タテヘラミガキで、底部にもヘラミガキ、内面は下半までヨコ、底部にタテのヘラミガキを施す。905は磨滅が著しいが、口縁部には沈線の施文が認められる。内面調整はヨコハケを施す。906は風化で不詳であるが、口縁部に凹線が認められる。調整は外面にハケ、内面にヘラケズリが認められる。907の口縁部には凹部が認められる。外面調整は胴部中ほどにヨコヘラケズリ、底部までタテヘラミガキ、内面は胴部下半までタテ、底部にヨコのヘラミガキを施す。908の口縁部には凹線が認められる。外面調整は下半にヨコ、以下ナナメのヘラミガキ、内面はタテのヘラミガキを施す。909の口縁部に凹線が認められる。外面調整は胴部下半にタタキ、内面は渦巻くようにハケを施す。910の口縁部にはヨコナデによる条線が認められる。外面調整はハケ後ナナメさらにタテのヘラミガキ、内面は口縁部からヨコヘラミガキ、後頸部以下にタテのヘラミガキを施す。911の口縁部には、ヨコナデによる条線が認められる。外面調整は底部までヘラミガキ、内面は口縁部にヨコ、以下タテのヘラミガキを施す。912の口縁部には、沈線が認められる。外面調整は底部まで丁寧なヘラミガキ、内面は口縁部にヨコ、以下にタテのヘラミガキを施す。913の口縁部には、凹線が施文される。外面調整は鉄分の付着が多く不詳、内面はヨコ、タテのヘラミガキを施す。914は口縁部にヨコナデによる凹部が認められる。外面調整はタテヘラケズリ、内面は屈曲部に押圧後中ほどまでヨコ、以下ハケ後タテのヘラミガキを施す。915の口縁部にヨコナデによる条線が認められる。外面調整はハケ後タテの暗文風ヘラミガキ、内面はハケ後上半にヨコ、以下タテのヘラミガキを施す。916は、口縁部に凹線が認められる。外面調整は鉄分が付着し不詳であるが、粗いハケが認められる。内面はタテヘラミガキを施す。917の口縁部には、沈線が認められる。外面調整は丁寧なヘラケズリ、内面はハケ後口縁部からヨコ、ナナメのヘラミガキを施す。918の口縁部には凹線、端部には凹部を認める。外面調整は口縁部近くにヨコヘラミガキ、以下ハケ後タテヘラミガキ、内面は口縁部にヨコヘラミガキ、以下ハケ後タテヘラミガキで、底部はヨコヘラミガキを施す。919の口縁部には、ヨコナデによる条線が認められる。外面調整は底部までハケ後ヘラミガキ、内面はハケ後タテヘラミガキを施す。920の口縁部には、ヨコナデによる条線が認められる。外面調整はハケ後ヘラケズリ、内面はヘラミガキを施す。921の口縁部には、凹線が認められる。外面調整はタテ後ヨコで最後にタテのヘラミガキ、内面はヘラミガキを施す。922の外面調整は、口縁部下にヨコヘラケズリ後底部までヘラミガキ、内面は胴部上半にヨコヘラケズリ後口縁部から胴部にヨコ、以下タテのヘラミガキを施す。923の外面調整はタテハケ、内面はヨコ、ナナメのヘラミガキを施す。924の口縁部は、内面を肥厚させる。外面調整はハケ後ヘラミガキ、内面はハケ後中ほどにヨコ、以下にナナメのヘラミガキを施す。925の外面調整はナナメハケ後ヨコ、ナナメのヘラミガキ、内面はハケを施す。926の調整は内外面とも、板状工具のナデが認められる。927の調整は磨滅のため不詳であるが、内面にはハケが認められる。928の外面調整はヨコハケ後ヨコヘラミガキ、内面は上半に押圧、以下タテヘラミガキを施す。穿孔は胴部にあり、内側から敲かれる。929の外面調整はハケ後ヨコヘラミガキ、内面は口縁部から胴部上半にヨコ、以下タテのヘラミガキを施す。930の外面調整はタテのヘラミガキ、内面は口縁部から胴部下半にタテ、以下ヨコのヘラミガキを施す。931の外面調整は工具ナデ後上半にヨコヘラケズリ、内面はハケ後ヨコ、タテのヘラミガキを施す。932の外面調整は細いタテハケ後工具ナデ、内面は口縁部にヨコ、上半と底部に押圧後ヘラミガキを施す。933の外面調整は底部にヘラケズリ、内面はヨ

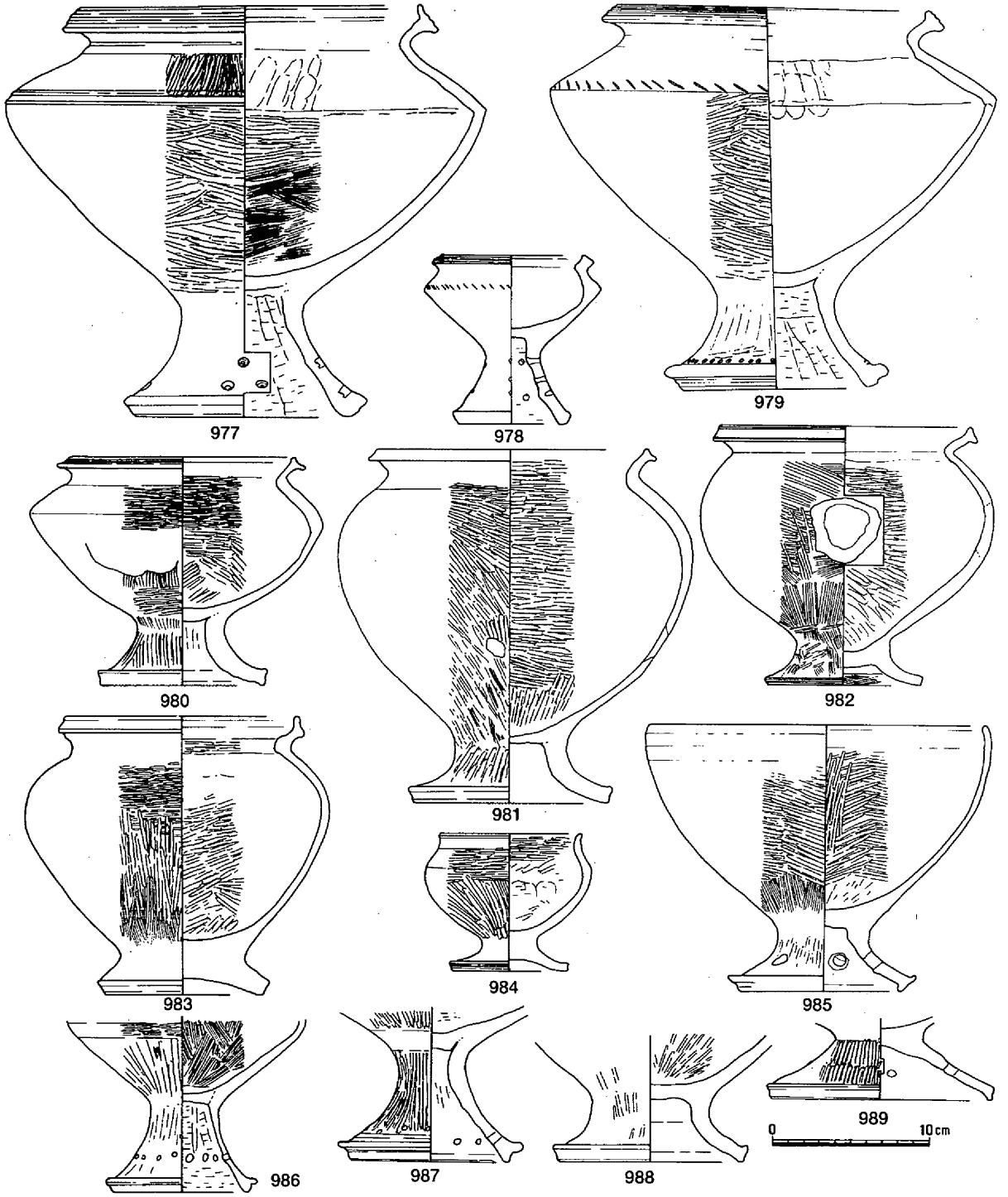
コヘラケズリ後タテヘラミガキを施す。934の外面調整は口縁部からヨコヘラミガキ、内面はヨコハケ後ヨコヘラミガキを施す。935の外面調整はヨコヘラケズリ、内面は工具のナデを施す。936の内外面調整はヨコハケを施す。937の外面調整は上半にヨコ、以下タテのヘラミガキ、内面はタテヘラミガキを施す。938の胴部下半にタタキを認める。内面は口縁部にヨコヘラミガキ、以下ハケ後ヘラミガキを施す。939の底部は、丸底を呈する。外面調整はタタキ後丁寧なヘラケズリ、内面は口縁部から粗いハケを施す。940の外面調整は剝離で不詳であるがヘラミガキが認められる。内面はヘラミガキを施す。941の外面調整は胴部上半にヨコヘラケズリ後口縁部から底部にヨコヘラミガキ、内面は口縁部から丁寧なヨコヘラミガキを施す。942の外面調整はハケ後口縁部から底部にヘラミガキ、内面は口縁部から底部にヨコヘラミガキを施す。943の内外面調整は磨滅のため不詳である。944の外面調整はハケ後丁寧なヨコヘラミガキ、内面はヨコヘラミガキを施す。

946～969はヨコナデによる明瞭な口縁部を形成しないものである。946は平底の底部から逆「ハ」の字状に開く。外面調整は半ばまでヨコ、以下タテのヘラミガキ、内面は端部に押圧、以下ヨコヘラミガキを施す。947の外面調整は磨滅のため不詳、内面はハケを施す。948の底部はヘラケズリが見られるが、その状態は全く新鮮であり使用されたことがないことが判断される。外面調整はタタキ、内面は不定方向のハケを施す。949の口縁部は一部未調整の状態であり、底部には工具痕が認められる。950の口縁部はヨコナデの条線が認められることから、先の分類に入るものである。外面調整は粗いハケ後ヘラミガキ、内面は口縁部に粗いハケ、以下ヘラミガキを施す。951の内外面調整は、ハケ後ヘラミガキを施す。952の外面調整は胴部中ほどに押圧後ハケ、内面はハケ後ミガキ状のヘラケズリを施す。953の内面調整は、左回りのハケを施す。954の調整は、外面の胴部下半と内面に押圧を施す。955の外面調整はタテハケ後タテヘラミガキ、内面は押圧とナデ後ヘラミガキを施す。956の外面調整はタタキ、内面はハケを施す。957の外面調整はハケ後タテヘラミガキで、下半にヘラケズリ、内面は細いハケ後タテヘラミガキを施す。958の内外面調整は押圧、内面はハケとヘラミガキを施す。959の外面調整は口縁部に工具によるヨコナデ、胴部下半にミガキ状のヘラケズリを施す。内面はハケ後ヘラミガキを施す。960は底部は、上げ底となる。外面調整はハケ、内面は工具ナデ後タテヘラミガキを施す。961の外面調整はハケ、内面はハケ後ヘラケズリとヘラミガキを施す。962の内外面調整は、鉄分の付着で不詳である。963の外面調整はヨコハケ後底部までヨコヘラミガキ、内面はハケ後胴部上半にヨコ、以下タテのヘラミガキを施す。964の内外面調整は、粗いハケを施す。965の内外面調整は、煤の付着で不詳である。966の外面調整はヨコヘラミガキ、内面は口縁部からタテヘラミガキを施す。967の外面調整はナデ、内面は押圧後ヨコハケを施す。968の口縁端部は平坦となる。外面調整はナデ、内面はハケを施す。969の外面調整はハケ後ヘラミガキ、内面は押圧後タテヘラミガキを施す。

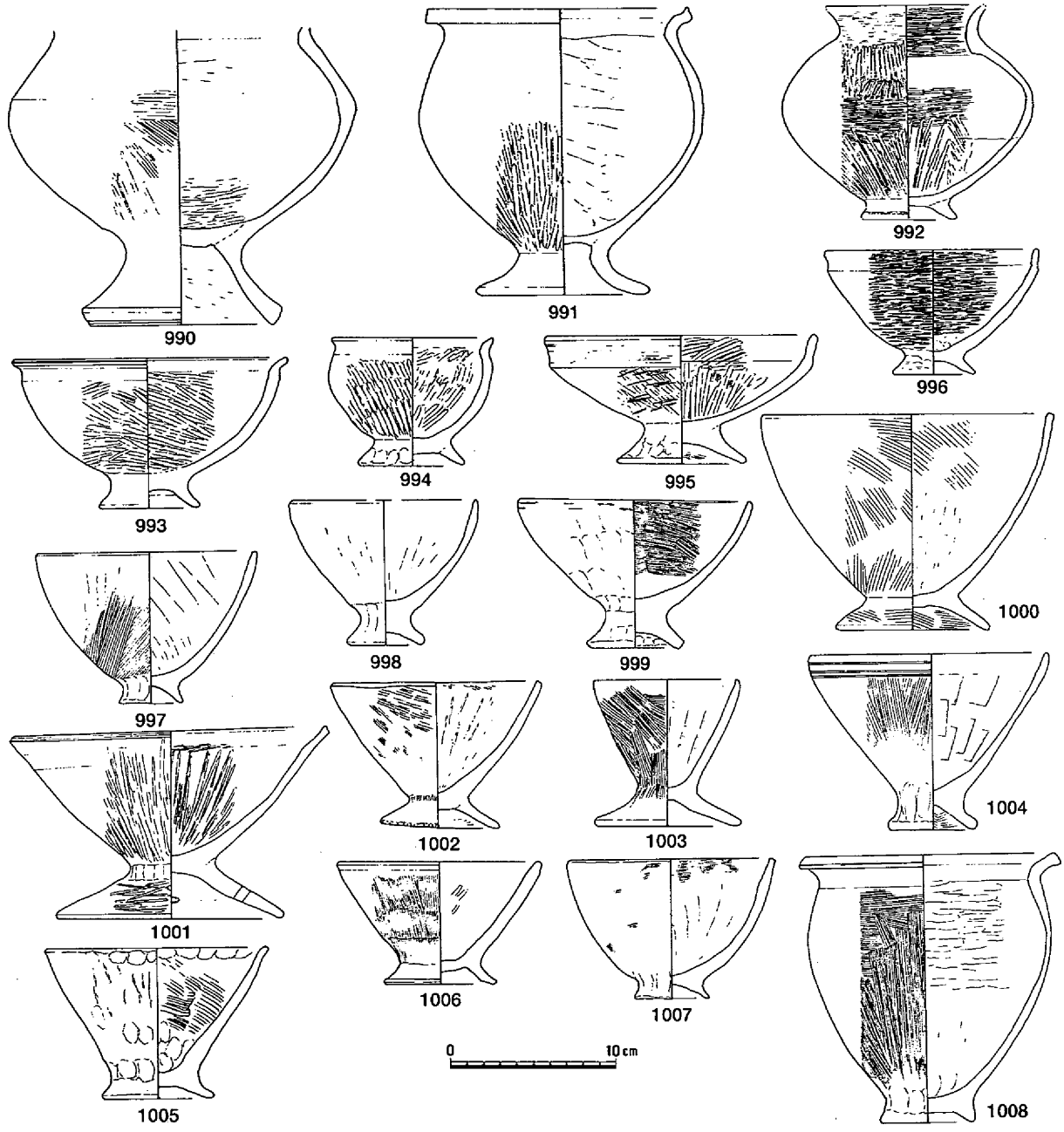
970は鉢としたが、壺の範疇で扱うのが妥当であろう。穿孔は胴部下半にあり、内側から敲かれる。

971は口縁部が、開くものである。内外面調整とも、タテのヘラミガキを施す。

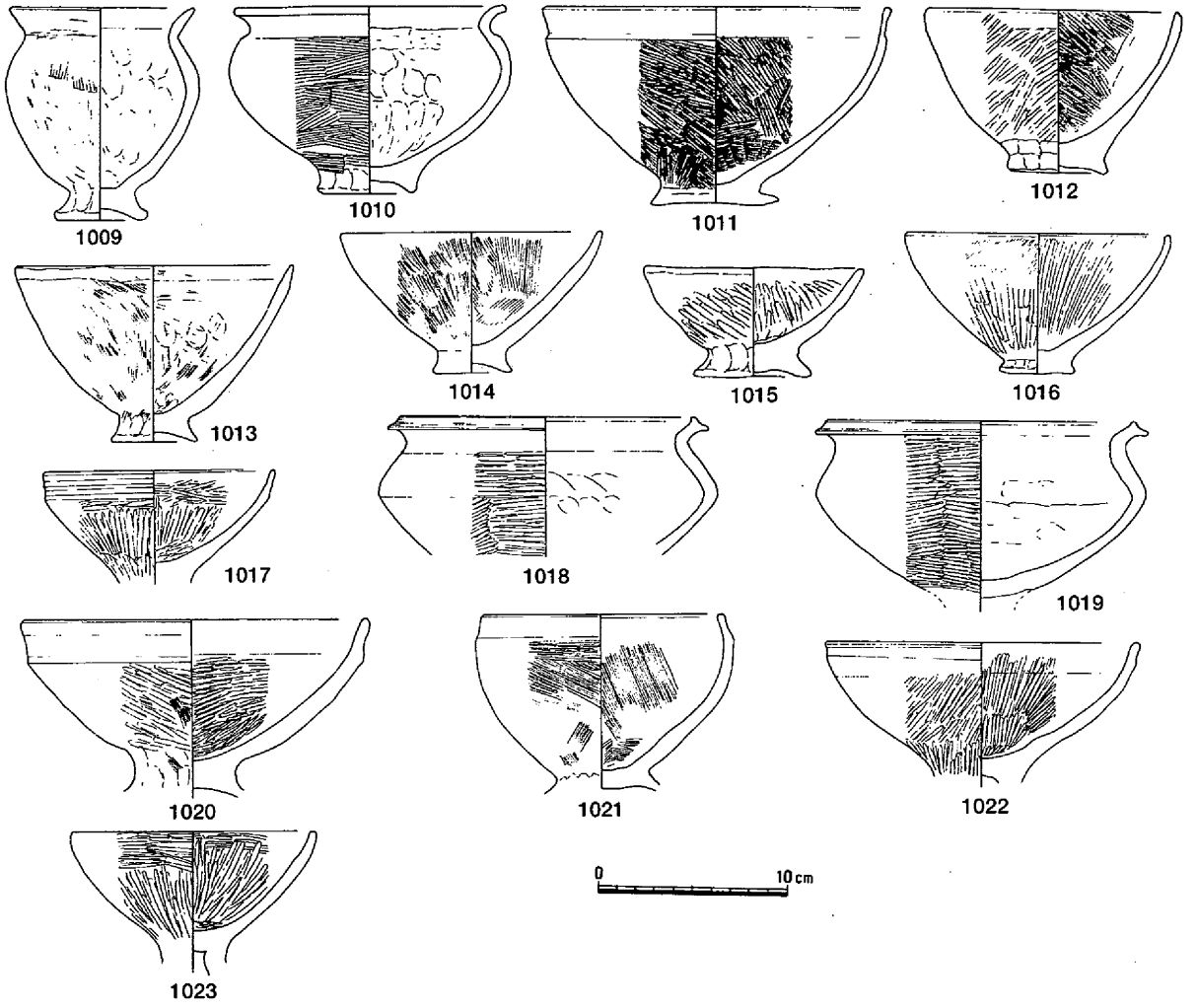
972と973は、底部からほぼ垂直に立ち上がる胴部を持つものである。972は底部となる丸い粘土板の上に胴部となる粘土を乗せ、内面には両者の接合を補強するように粘土を付す。文様は2段の沈線帯が施文される。沈線の施文内容は、単線で丁寧な施文を行っている。外面調整は胴部と底部ともナデ、内面はヘラケズリ後ナデを施す。973は、丸い底部から口縁部まで垂直に立ち上がる。文様は口縁部に、沈線が施文される。外面調整は底部までタテヘラミガキ、内面は押圧を施す。



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
977	弥生土器	台付鉢	21.7	13.7	26.7	良好	7.5YR7/3.5(にぶい橙)	砂粒	口縁部に凹線　肩部に凹線　脚部に竹管文
978	弥生土器	台付鉢	9.0	3.4	10.7	良好	5Y6/4(オリーブ)	砂粒	口縁部に凹線　肩部にキザミ　脚部に円形透し2個1組3カ所・3個1組1カ所
979	弥生土器	台付鉢	(19.5)	11.6	24.2	良好	10YR6/2.5(にぶい黄橙)	砂粒	肩部に刺突文　脚裾部に竹管文
980	弥生土器	台付鉢	14.2	10.4	14.7	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	口縁部に凹線
981	弥生土器	台付甕	17.0	12.4	22.6	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	胴部下半に穿孔
982	弥生土器	台付甕	15.8	9.7	16.6	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	胴部中位に穿孔
983	弥生土器	台付鉢	14.8	10.3	17.9	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
984	弥生土器	台付鉢	8.9	7.3	8.8	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	口縁部に沈線
985	弥生土器	台付鉢	21.1	10.1	17.1	良好	2.5Y6/3(にぶい黄)	砂粒	台部円形透し５個　端部拡張
986	弥生土器	台付鉢		8.5		良好	10YR7/2.5(にぶい黄橙)	砂粒	台部に透し16個(内４個貫通)
987	弥生土器	台付鉢		10.0		良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	台部に円形透し12個・円盤充填
988	弥生土器	台付鉢		11.4		良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	
989	弥生土器	台付？		13.8		良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	台部に穿孔４個(未通)



掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
990	弥生土器	台付鉢		10.9		良好	2.5Y R6/3(にぶい橙)	砂粒	脚部端面に沈線
991	弥生土器	台付鉢	15.6	10.5	17.5	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	
992	弥生土器	台付鉢		5.7		良好	7.5Y R7/2(明褐灰)	砂粒	胴部に煤付着
993	弥生土器	台付鉢	16.5	6.0	9.2	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒(少)	口縁部に沈線
994	弥生土器	台付鉢	9.6	6.2	7.9	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	
995	弥生土器	台付鉢	16.2	7.9	7.9	良好	2.5Y R6/6(橙)	砂粒	
996	弥生土器	台付鉢	12.7(~13.0)	4.8	7.7	良好	7.5Y R8/3(浅黄橙)	砂粒	
997	弥生土器	台付鉢	13.1	3.7	9.3	良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	
998	弥生土器	台付鉢	11.1	4.3	8.8	良好	2.5Y6/3(にぶい黄)	砂粒	
999	弥生土器	台付鉢	14.0	5.4	8.9~9.1	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	
1000	弥生土器	台付鉢	17.5	8.8	13.2	良好	2.5Y5/2(暗灰黄)	砂粒	外面に煤付着
1001	弥生土器	台付鉢	18.7	13.3	11.2~11.9	良好	10Y R7.5/2(にぶい黄橙)	精良	口縁端部に凹線
1002	弥生土器	台付鉢	(12.3)	6.8	9.1	良好	7.5Y R6.5/3(にぶい橙)	水漉粘土風	裾端部にキザミ
1003	弥生土器	台付鉢	8.8	8.8	8.9	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	
1004	弥生土器	台付鉢	14.4	5.5	10.8	良好	10Y R7/2(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に沈線
1005	弥生土器	台付鉢	13.2	(6.4)	(9.2)	良好	2.5Y6/6(明黄褐)	砂粒	
1006	弥生土器	台付鉢	12.0	6.3	7.5	良好	10Y R7/3(にぶい黄橙)	砂粒	
1007	弥生土器	台付鉢	12.2	(4.1)	8.6	良好	10Y R7/2(にぶい黄橙)	砂粒	外面に刻痕
1008	弥生土器	台付鉢	15.1	5.8	16.5	良好	2.5Y R6/4(にぶい橙)	砂粒(少)	外面に煤付着



掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
1009	弥生土器	台付鉢	9.8	4.8	11.4	良好	10YR7/1(灰白)	砂粒	外面全面に煤付着
1010	弥生土器	台付鉢	14.4	4.7	10.2	良好	2.5Y6/2(灰黄)	良好	
1011	弥生土器	台付鉢	18.1	6.8	10.6	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	
1012	弥生土器	台付鉢	13.0	4.35～4.85	8.9	良好	2.5Y8/2(灰白)	砂粒	
1013	弥生土器	台付鉢	14.8	4.4	9.5	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	タタキ
1014	弥生土器	台付鉢	13.8	4.0	7.5	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
1015	弥生土器	台付鉢	11.5	6.3	5.9	良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒(少)	
1016	弥生土器	台付鉢	13.8	4.0 (3.6～4.0)	7.6	良好	5YR4/4(にぶい赤褐)	砂粒	
1017	弥生土器	台付鉢	12.4			良好	5YR6/6(橙)	砂粒	口縁部に凹線
1018	弥生土器	台付鉢	15.7			良好	2.5Y8/2(灰白)	砂粒	
1019	弥生土器	台付鉢	15.0			良好	2.5Y8/2(灰白)	砂粒	口縁部に凹部
1020	弥生土器	台付鉢	18.3			良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	胴部上位に沈線
1021	弥生土器	台付鉢	12.7			良好	2.5Y7/4(浅黄)	砂粒	内外面ほぼ全体に煤付着
1022	弥生土器	台付鉢	16.2			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	
1023	弥生土器	台付鉢	12.9			良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	

974は口縁部の一部が、張り出すものである。内外面調整はナデが認められるが、器面には亀裂をとどめる。

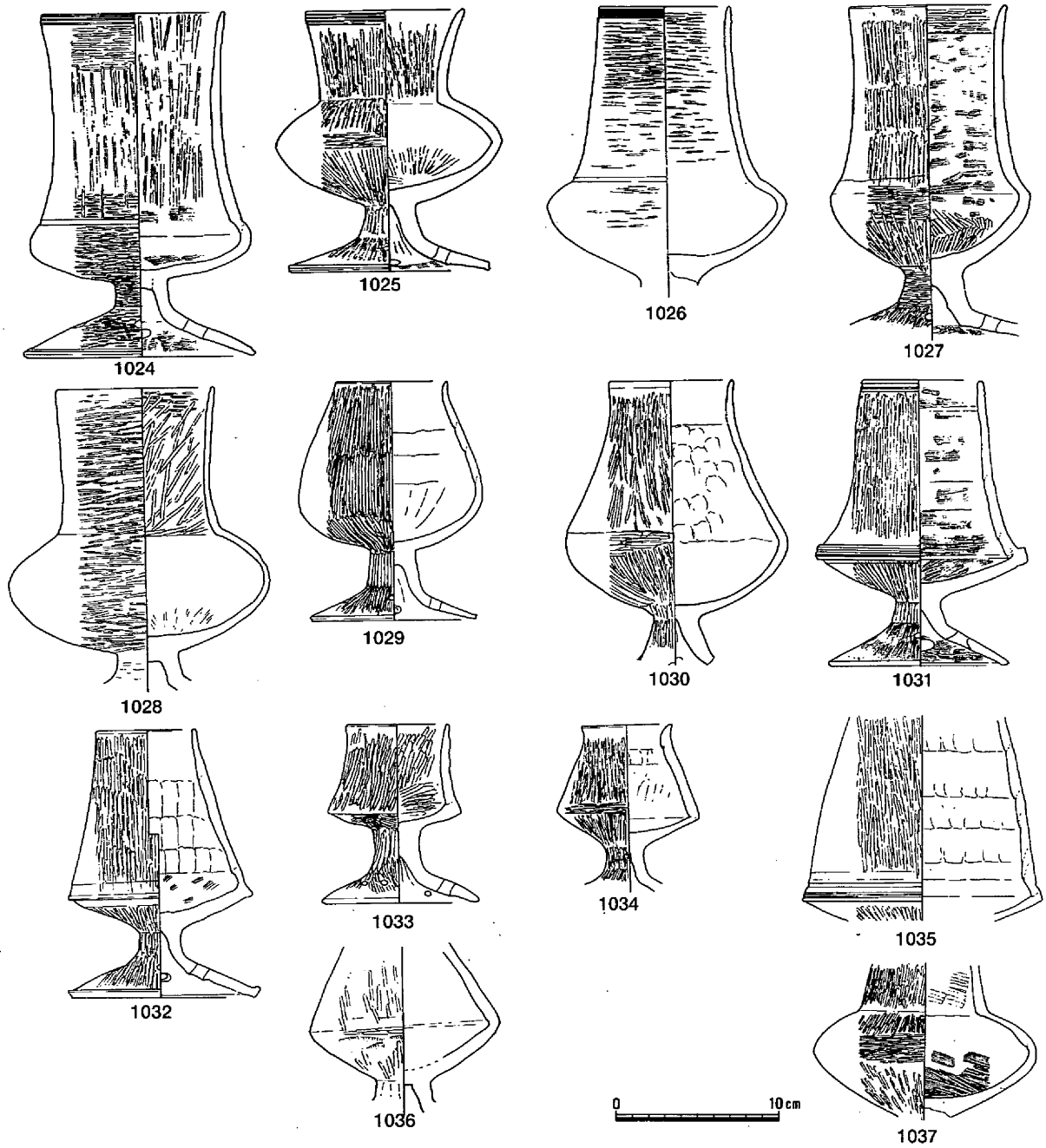
976は外面に線刻画が描かれているもので、結語で検討する。

977～1023は、台付鉢である。977～990は、台端部が肥厚、平坦となるものである。977は肩部が強く屈曲するもので、口縁端部には内傾して拡張し凹線を、肩部にも施文が認められる。台端部は肥厚するが鋭さに欠き、端面は凹部となる。裾部には竹管の刺突文を付す。外面調整は肩部にタテ、胴部にヨコのヘラミガキ、内面は肩部にナデアゲ、胴部にヨコハケ後上半にヨコヘラミガキを施す。台部

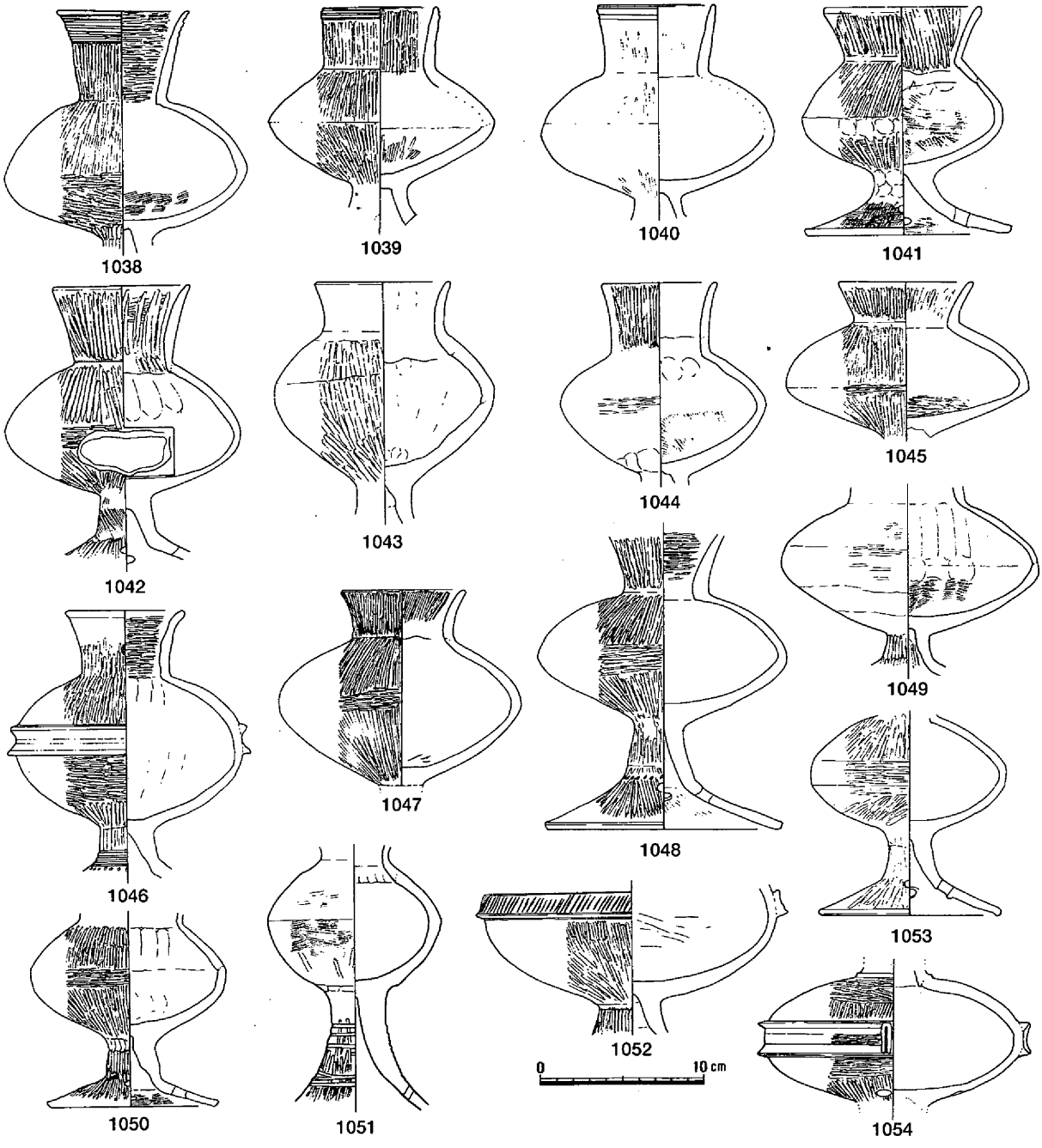
内面には、ヨコヘラケズリを行う。978は口縁端部をナナメに摘み出し、凹線を施文する。肩部にはキザミを付す。台部には円形の透し孔を設け、その内の1ヵ所は貫通していない。調整は鉄分が付着し、不詳である。979は肥厚する口縁端部に凹線を施文し、強く屈曲する肩部にキザミを付す。台端部は外方に肥厚し、凹線と竹管文を施す。外面調整は胴部に菱形状のヘラミガキ、台部にタテ、下半にヨコのヘラミガキを施す。内面は肩部にナデアゲ、胴部にナデ、底部には細かいハケ、台部にヨコヘラケズリを施す。980の口縁端部は内傾して肥厚し、凹線を施文する。台端部は、張り出し気味となる。外面調整は肩部から胴部上半にヨコヘラミガキ、胴部にタテハケ、下半にヨコヘラミガキ、台部にはタテのハケを施す。内面は肩部にヨコヘラミガキ、以下はケズリ状のヘラミガキ、台部にはヨコナデを施す。穿孔は胴部にあり、敲く方向は不明である。981は胴部が球形を呈し、口縁端部は内傾して肥厚する。外面調整は胴部下半にハケ後頸部から台部にヘラミガキ、内面は口縁部から胴部下半にヨコ、底部にタテのヘラミガキを施す。穿孔は胴下半にあり、外側から敲かれる。982は口縁端部を肥厚し沈線、台端部にも沈線を施文する。外面調整は粗いハケ後ヘラミガキ、内面はヘラケズリ後ヘラミガキ、台部にはハケが施される。穿孔は胴部中ほどにあり、内側から敲かれる。983は口縁端部は上方に拡張し、ナデの条線、台端部にも認められる。外面調整は胴部下半にタテハケ後上半にヨコ、以下にタテのヘラミガキを施す。内面は頸部にヨコヘラミガキ、胴部にヘラケズリ後ヘラミガキ、台部はナデを施す。984は上方に立ち上がる口縁部で沈線、台端部にも沈線を施す。外面調整は胴部中ほどにヨコ、以下タテのヘラミガキ、内面は口縁部にヨコヘラミガキ、胴部に押圧後ヘラケズリを施す。985の台端部は拡張するが内側部分には、粘土を足して行う。外面調整は胴下半にタテの粗いハケ後ヨコヘラミガキ、台部にはタテヘラミガキ、内面はヨコ後一部にタテヘラミガキ、底部にヘラケズリ、台部はヨコナデを施す。986の台端部は肥厚し、外端部分が張り出す。外面調整は上半にヨコハケ後ヨコヘラミガキ、以下タテハケとタテヘラミガキ、内面はハケ、台部にはヘラケズリを施す。987の台端部は肥厚し、外端部分が張り出す。外面調整は、ヘラミガキを施す。988は、台端部を肥厚させる。外面調整はヘラミガキ、内面はヘラミガキで台部にナデを施す。989の台端部は下方に立ち上がる。透し孔は半截竹管を用いるが、貫通されていなく裏面に膨らみが残る。外面調整はタテヘラミガキ、内面はナデを施す。990の台端部には、沈線が認められる。外面調整は粗いハケ後ヘラミガキ、内面はヘラケズリ後底部にヘラミガキ、台部にヘラケズリを施す。

991～1016は台端部を丸く終わらせるものである。991は、横に広がる安定した台を作る。外面調整は胴部中ほどまで磨滅で不詳、下半はタテヘラミガキ、内面はヘラケズリ後ナデを行う。992は短く開く台部を付す。外面調整はハケ後口縁部にヨコ、胴部上半にタテ、中ほどにヨコ、以下タテのヘラミガキ、内面は口縁部にヨコ、胴部中ほどにヨコ、以下タテのヘラミガキを施す。台部には、ヘラ状工具の痕が認められる。993は、口縁部に沈線を施文する。内外面の調整はヘラミガキ、台部はヨコナデを施す。994の外面調整はタテヘラミガキ、内面は押圧後ヘラミガキを施す。台部には、押圧が認められる。995の口縁部には、ヨコナデによる条線が認められる。外面調整はヘラミガキ、内面口縁部はヨコヘラミガキ、胴部にヘラケズリ後ハケで最後にタテヘラミガキを施す。996の内外面調整は、ヨコヘラミガキを施す。997の外面調整はタテハケ、内面は上半に工具ナデ、以下ヘラケズリを施す。台部には押圧ナデが認められる。999の口縁部には沈線の施文が認められるが、ヨコナデによりほとんどがつぶされる。外面調整は工具ナデ、内面はヨコハケを施す。1000の外面調整は粗いハケ、内面は上半に粗いハケ、以下押圧後ヘラケズリを施す。台部にも、粗いハケが認められる。1001の口

縁端部には凹線を施文し、台部には透し孔を設けている。外面調整はタテヘラミガキ、内面は口縁部にヨコ、以下タテのヘラミガキを施す。1002の台端部には、キザミが施されている。内外面の調整は工具によるナデが認められる。1003の外面調整はハケ、内面はハケ状工具によるナデを施す。台部には、ヨコナデを行う。1004の口縁部には、沈線が施文される。外面調整はタテハケ、内面は工具ナデを施す。台部外面に押圧、内面にはハケの調整を行う。1005の外面には、亀裂が多く残される。外面調整は押圧、内面は粗いのと細いハケを施す。1006の外面調整はタテハケ、内面はヘラミガキを施す。台部には、ヨコナデを行う。1007の外面には、籾痕が認められる。1008は台付鉢としたが、甕に台が付されているものである。外面調整は上半にヨコハケ、以下タテハケ、内面は胴部中ほどにヨコヘラミガキ、以下ヘラケズリ、底部に押圧を施す。1009も1008と同様な器形である。1010の外面調整はヨコの粗いハケ、内面は胴部中ほどにヨコヘラケズリ後押圧、以下タテヘラケズリを施す。1011の台部は、空間を設けない。口縁部は、ヨコナデによる条線が認められる。内外面の調整は、ハケを施す。1012の外面調整は、タタキ、内面はハケを施す。台部には、押圧とナデを行う。1013の外面調整はタタキ後ヘラケズリとハケ、内面は押圧とハケを施す。1014の内外面調整は、ハケを施す。台部には、ヨコナデを行う。1015の内外面調整は、ヘラミガキを施す。台部には押圧ナデを行う。1016の外面調整は上半にナナメハケ、以下タテヘラミガキ、内面にタテヘラミガキを施す。台部には、押圧を行う。1017の口縁部には、凹線を施文する。外面調整は上半にヨコ、以下ヘラケズリ後タテヘラミガキ、内面は口縁部にヨコヘラミガキ、以下ヘラケズリ後タテヘラミガキを施す。1018は鉢部だけの破片であるため、台が付されない可能性もある。外面調整は上半にヨコ、以下稜を形成するヘラミガキ、内面は押圧を施す。1019の口縁部には、凹部を形成する。外面調整はヨコヘラミガキ、内面はヘラケズリを施す。1020の外面調整はハケ後ヘラミガキ、内面はヘラミガキを施す。1021の口縁部は、ヨコナデにより口縁部を形成する。内外面の調整は、ハケを施す。1022の外面調整は胴部にナナメ、以下タテのヘラミガキ、内面はタテのヘラミガキを施す。1023の外面調整は口縁部にヨコ、以下タテのヘラミガキ、内面は口縁部にヨコ後胴部下半までタテヘラミガキ、底部にはハケを施す。



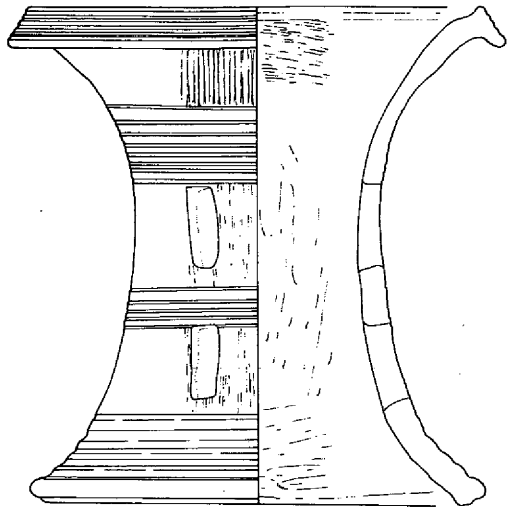
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
1024	弥生土器	脚付直口壺	10.9	13.5	21.1	良好	2.5Y7/2(灰黄)	精良	口縁部に沈線3本　胴部中位に沈線1条　脚裾部に円形透し4個　裾端部に沈線1本
1025	弥生土器	脚付直口壺	9.5	12.0	16.1	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に沈線　脚部に円形透し4個
1026	弥生土器	脚付直口壺	8.0(~8.5)			良好	2.5YR7/6(橙)	砂粒	口縁部に沈線
1027	弥生土器	脚付直口壺	9.5			良好	2.5YR6/6(橙)	精良	裾部に円形透し4個　丹塗り
1028	弥生土器	脚付直口壺	9.4			良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	外面ヘラミガキ
1029	弥生土器	脚付直口壺	6.7	9.9	14.7	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	脚部に円形透し4個
1030	弥生土器	脚付直口壺	7.5			良好	7.5YR6/4(にぶい橙)	砂粒	脚部に円形透し4個
1031	弥生土器	脚付直口壺	7.1	10.7	17.6	良好	7.5YR7/3(にぶい橙)	精良	口縁部に沈線　屈曲部に沈線　裾部に透し4個
1032	弥生土器	脚付直口壺	5.8	11.0	16.4	良好	7.5YR5/4(にぶい褐)	砂粒	脚部に円形透し4個
1033	弥生土器	脚付直口壺	6.1	9.2	10.9	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	脚部に円形透し7個
1034	弥生土器	脚付直口壺	5.4			良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	
1035	弥生土器	脚付直口壺				良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒(少)	
1036	弥生土器	脚付直口壺				良好	7.5YR5/3(にぶい褐)	砂粒	内面に漆
1037	弥生土器	脚付直口壺				良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒(僅)	



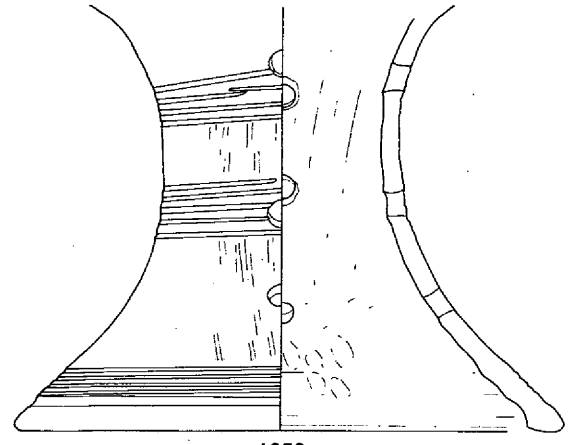
掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
1038	弥生土器	脚付直口壺	8.0			良好	10YR6/4(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部に沈線
1039	弥生土器	脚付直口壺	7.0			良好	2.5Y8/2(灰白)	砂粒	口縁部に沈線3条　脚部に透し4個
1040	弥生土器	脚付直口壺	7.0			良好	10YR8/2(灰白)	砂粒	口縁部に沈線2条　内面底部に煤付着
1041	弥生土器	脚付直口壺	(9.5)	12.1	14.1	良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒	脚部に円形透し4個
1042	弥生土器	脚付直口壺	8.4			良好	2.5Y6/3(にぶい黄)	砂粒	脚部に円形透し4個　胴部に穿孔
1043	弥生土器	脚付直口壺	8.2			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	
1044	弥生土器	脚付直口壺	6.9			良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	
1045	弥生土器	脚付直口壺	8.1			良好	7.5Y7/4(にぶい橙)	砂粒	
1046	弥生土器	脚付直口壺	7.0			良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	胴部に凸帯2条　脚部に竹管文・沈線
1047	弥生土器	脚付直口壺	7.6		(12.2)	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
1048	弥生土器	脚付直口壺		14.2	(18.3)	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	砂粒	脚部に刺突文・円形透し4個
1049	弥生土器	脚付直口壺				良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	
1050	弥生土器	脚付直口壺		10.0		良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	裾部に円形透し4個
1051	弥生土器	脚付直口壺				良好	5YR7/3(にぶい橙)	砂粒	裾部沈線は螺旋2段・2個1対の穿孔
1052	弥生土器	脚付直口壺				良好	2.5Y5.5/1(黄灰)	精良	胴部に貼付凸帯
1053	弥生土器	脚付直口壺		11.1		良好	10YR6/3(にぶい黄橙)	砂粒(少)	脚部に透し4個
1054	弥生土器	脚付直口壺				良好	7.5YR8/2(白灰)	砂粒	胴部に貼付凸帯と棒状浮文(1対)　胴部下半に穿孔

1024～1054は、脚付直口壺である。1024は遺存状態も良く丁寧に作られ、口縁部と脚部・胴部と頸部の間に沈線を施文する。外面調整は頸部上半と下半にヨコ後タテのヘラミガキ、胴部から脚部には、脚部にハケが認められるが、ヨコのヘラミガキを施す。内面は頸部下半にヨコハケ後ヨコヘラケズリとヨコヘラミガキ、底部にはハケが認められる。脚部内面は、ヨコハケを行う。1025は口縁部に沈線を施文し、脚端部は凹部となる。外面調整は頸部にタテヘラミガキ、胴部中ほどにヨコ後タテのヘラミガキ、脚部にもタテのヘラミガキを施す。内面は口縁部にタテヘラミガキ、胴部下半にヘラミガキ状のヘラケズリ、脚部はハケ状工具のナデが認められる。1026の口縁部には、沈線を施文する。頸部と胴部の間にも沈線が認められる。内外面調整は砂粒の付着が多く不詳であるが、ヨコヘラミガキを認める。1027の外面調整は、口縁部から脚部までタテハケ後胴部上半と脚柱部にヨコヘラミガキを行い、さらにタテヘラミガキを施す。内面は口縁部にヨコヘラミガキ、以下胴部上半までヨコハケ後工具ナデ、下半にヘラミガキを施す。脚部内面には、細かいヨコハケを行う。1028の外面調整はヨコヘラミガキ、内面は口縁部にヨコ後タテ、ナナメのヘラミガキ、胴部にもヘラミガキを施す。1029はブランデーグラスの器形に似るもので、口縁端部をわずかに立ち上がらせている。外面調整は口縁部から脚部までタテヘラミガキ、内面は主にナデが認められる。1030の外面調整は頸部にタテ、胴部上半にヨコ、以下脚柱部までタテのヘラミガキ、内面は頸部に顕著な押圧を施す。1031は、口縁部に沈線を施文する。頸部との接合部分は帯状となり、沈線を施している。外面調整はタテヘラミガキで脚裾部にはタテハケ、内面はヨコの細かいハケを施す。1032の外面調整はタテヘラミガキ、内面は工具によるナデとハケを施す。1033の内外面調整は、ヘラミガキを施す。1034は屈曲部にヨコ、他はタテのヘラミガキ、内面は押圧とヘラケズリを施す。1035の屈曲部には、沈線を施す。外面調整はタテヘラミガキ、内面は接合痕が顕著に残る。1036は、漆容器として用いられていたものである。漆は、遺存している部分まで満たされた状態で認められている。外面調整は、ハケ後ヘラミガキを施す。1037の外面調整は胴部中ほどにヨコ、他はタテのヘラミガキである。内面はハケを施す。

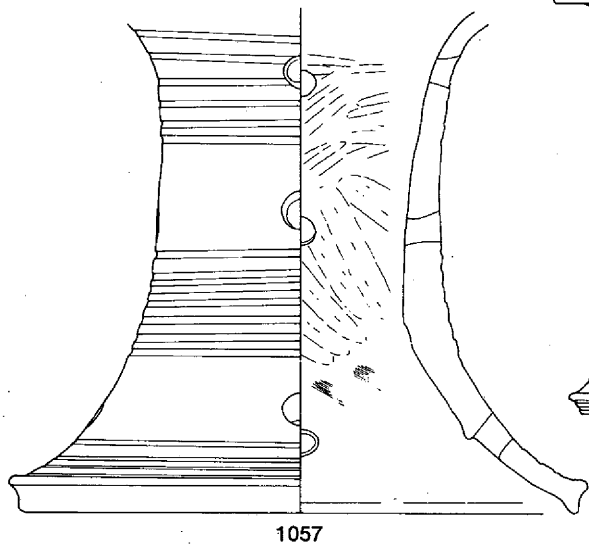
1038～1040は、口縁部に沈線を施文する。調整はタテヘラミガキで、1038の胴下半と内面口縁部にはヨコヘラミガキを施す。1038の内面と1039の脚柱部にハケを施す。1041の外面調整はハケ後ヘラミガキで胴部に押圧、内面は口縁部にタテヘラミガキ、他はハケを施す。1042の外面調整は口縁部にハケ後タテヘラミガキ、胴部中ほどにヨコ他はタテのヘラミガキ、脚柱部にはハケを施す。内面口縁部はヨコ後タテのヘラミガキ、胴部にナデを施す。穿孔は胴部下半にあり、外から敲かれる。1043～1045の外面調整はヘラミガキを主とし、内面にはハケが施されるのも認められる。1046・1052・1054は胴部に貼り付け凸帯を付す。1046の脚部には、沈線と竹管文の施文がなされる。凸帯上には1052がキザミ、1054では逆U字状の棒状浮文を認める。1054の脚部との接合近くで、外からの敲いた痕跡が丸く認められる。1047の外面調整は胴部中ほどにヨコ、他はタテのヘラミガキ、内面は口縁部にタテヘラミガキを施す。1048・1050・1051・1053の脚では、1048は脚柱部下端に刺突文、1051には螺旋による沈線を2段に施文し、また1053の脚端部は凹部となる。調整はヘラミガキを主とするが、1051はハケが認められ、口縁部にはヨコナデが施されている。1049は外面に粘土の接合痕をとどめている。



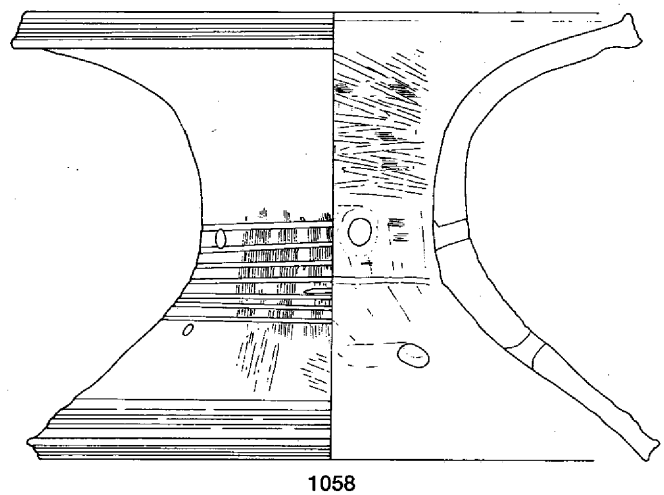
1055



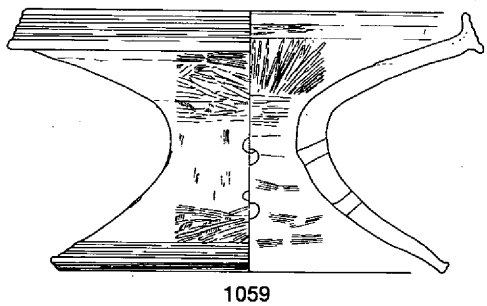
1056



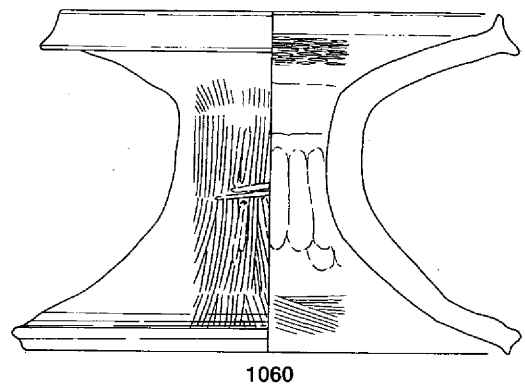
1057



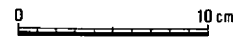
1058



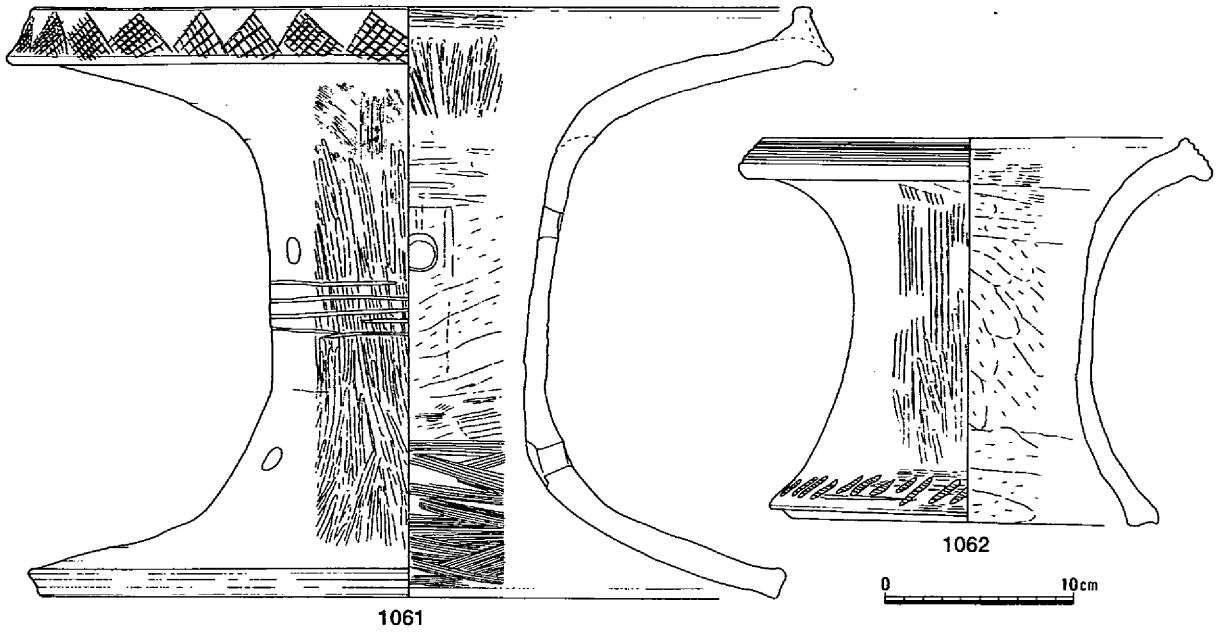
1059



1060

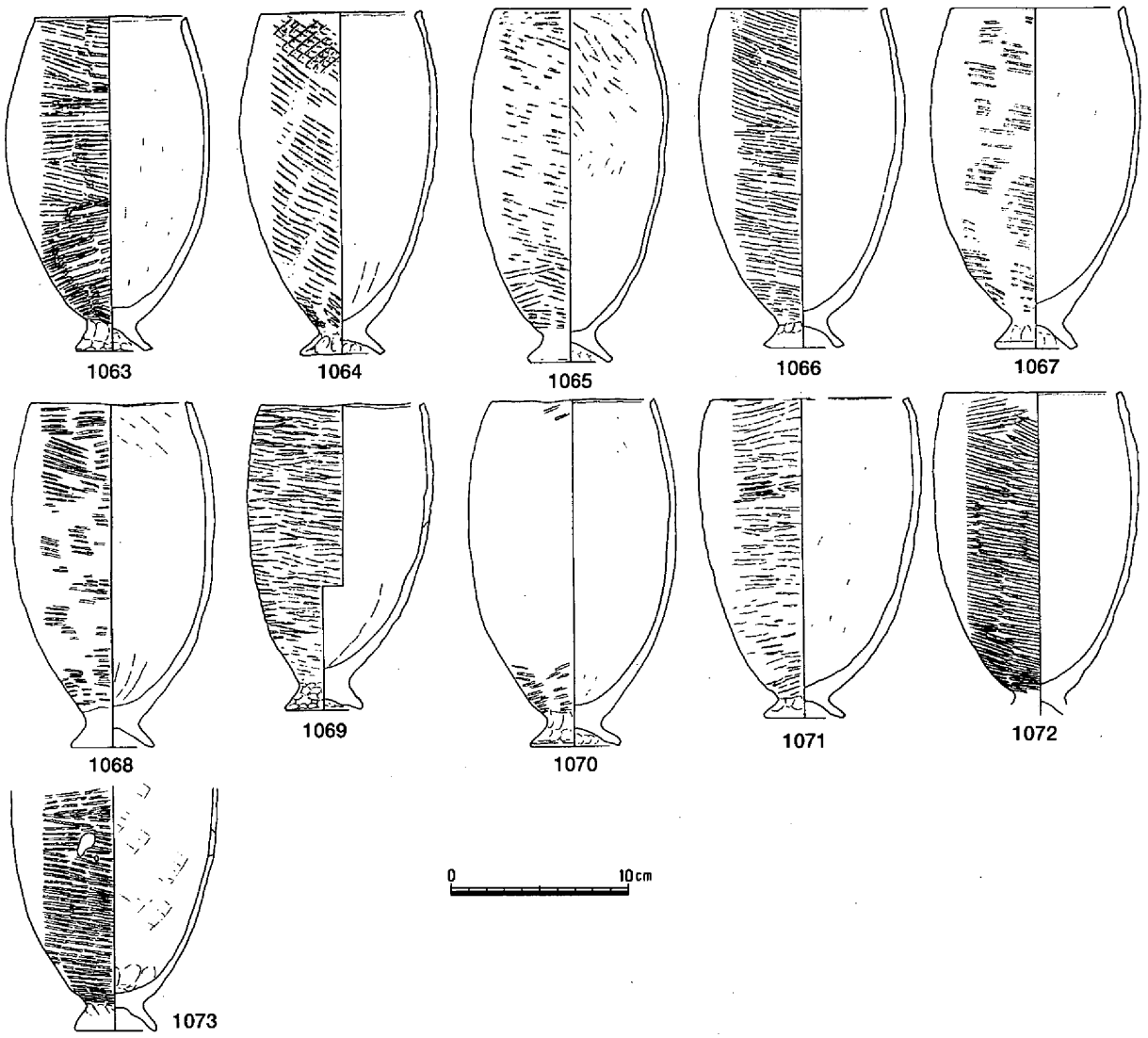


掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・備考
			口径	底(脚)径	器高				
1055	弥生土器	器台	24.0	22.5	26.3	良好	10YR7/4(にぶい黄橙)	砂粒	口縁部凹線５条　筒部沈線８条と５条２段・方形透し２段１対３　脚裾部凹線５条
1056	弥生土器	器台		28.7		良好	7.5YR7/4(にぶい橙)	砂粒	筒部沈線は螺旋２段・円形透し３段１対４　脚裾部沈線は螺旋？
1057	弥生土器	器台		29.2		良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒(多)	沈線は単線２段　脚部に沈線　円形透し３段４ヵ所
1058	弥生土器	器台	31.5	31.7	23.8	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒(少)	口縁部凹線３条　筒部沈線は螺旋・円形透し２段１対５　脚裾部凹線２～３条　脚部端面凹線２条
1059	弥生土器	器台	23.3	20.4	13.9	良好	2.5Y6.5/3(にぶい黄)	精良	口縁部に凹線　筒部に円形透し２段４方向　裾部に凹線
1060	弥生土器	器台	23.2	25.2	18.1	良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	



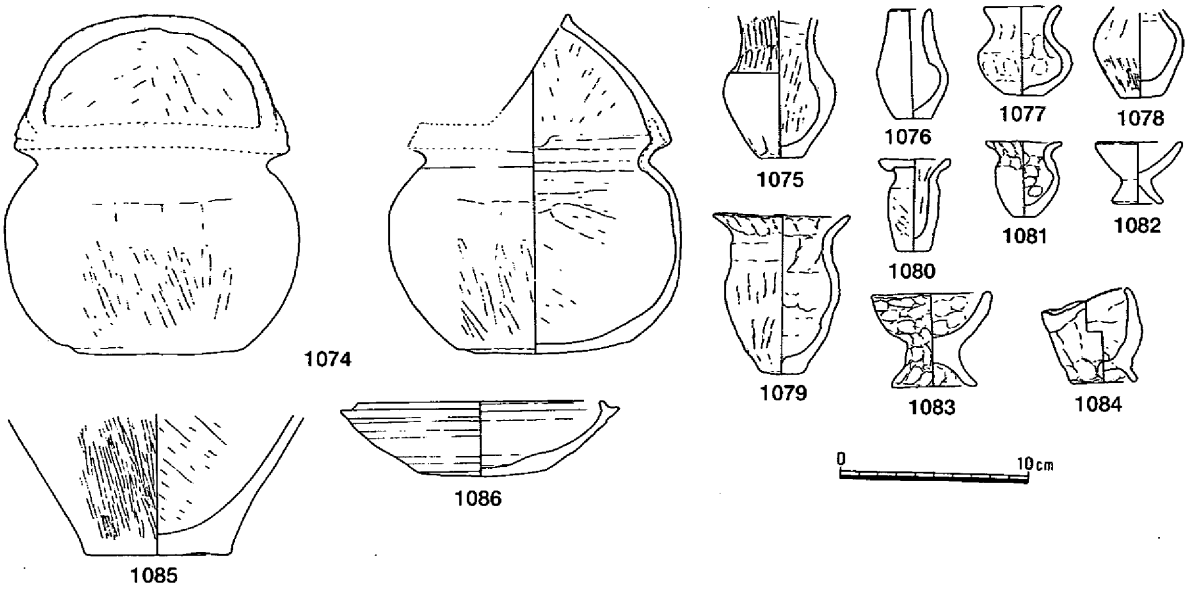
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1061	弥生土器	器台	(40.5)	38.4	31.6	良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒	口縁部に鋸歯文　筒部に5個・4個の円形透し　沈線は螺旋
1062	弥生土器	器台	22.2	17.7	20.6	良好	2.5Y7/1(灰白)	砂粒	口縁部沈線5本　脚裾部刺突文

1055～1062は、器台である。1055は口縁部を内傾して肥厚させ、凹線を施文する。筒部には2段の沈線帯を施文し、その間に方形の透しを設ける。裾部には凹線を施し、端部は凹部となる。この端部には、一部ではあるが粘土を足して肥厚させている。外面調整はタテヘラミガキ、内面は口縁部にヨコヘラミガキ、筒部中ほどから裾部にかけタテ、以下ヨコのヘラケズリを施す。1056は筒部と裾部に沈線を施文するが、筒部の2段は螺旋により施す。円形透しは、沈線施文の後である。裾部内面調整は押圧後ヘラケズリを施す。1057は筒部と裾部に、単線の沈線を施文する。内面調整は筒部中ほどに丁寧なヘラミガキ、以下ヘラケズリ、裾部にハケ状工具のナデを施す。1058の口縁端部は、肥厚気味で凹線を施す。筒部に螺旋の沈線、裾部には凹線で端部にも凹線を施文する。外面調整は筒部にタテハケ、以下ヘラミガキ、内面はハケ後ヘラミガキを施す。1059は筒部が短く屈曲し、拡張する口縁部を作り、凹線を施文する。裾部は凹線、端部にはナデが沈線状となる。外面調整はハケ後ヘラミガキ、内面は口縁部から筒部にヘラミガキ、裾部にハケを施す。1060は文様の施文がない。外面調整はタテハケで、筒部に部分的にヨコヘラミガキを施す。内面は口縁部にヨコヘラミガキ、筒部にナデ、裾部にハケを施す。1061の口縁部は、素縁の口縁端部に粘土を乗せて拡張する。筒部は上方に開き、口縁端部は拡張し鋸歯文を施文する。筒部の沈線は螺旋であるが、5本目は単線である。外面調整は口縁部にハケ、筒部から裾部にヘラミガキ、内面は口縁部にヨコ、以下タテのヘラミガキ、筒部上半にヘラケズリ後ヨコヘラミガキ、以下ナナメヘラケズリ、裾部にヨコハケを施す。1062は口縁端部を肥厚させ、螺旋による沈線を施した後ヘラミガキを行う。裾部には、刺突文を施す。外面調整は、筒部中ほどまでタテの粗いハケ後タテヘラミガキ、内面は口縁部にヨコの粗いハケ、以下ヨコからナナメのヘラケズリ、裾部にヨコヘラケズリを施す。



掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1063	弥生土器	製塩土器	8.6	3.55～4.1	18.9	良好	2.5Y8/2(灰白)	砂粒	タタキ
1064	弥生土器	製塩土器	8.9	4.8	19.3	良好	2.5Y8/1(灰白)	砂粒	
1065	弥生土器	製塩土器	8.6	4.4	19.9	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	焼成前の補修痕
1066	弥生土器	製塩土器	9.6	4.0	19.2	良好	2.5Y8/3(浅黄)	砂粒	全面にタタキ
1067	弥生土器	製塩土器	9.5	4.6	19.2	良好	10YR7/6(明黄褐)	砂粒(多)	平行タタキ
1068	弥生土器	製塩土器	(8.6)～9.0	4.6	19.4	良好	10R7/4(にぶい黄橙)	砂粒(多)	
1069	弥生土器	製塩土器				良好	5YR6/5(にぶい橙)	砂粒	胴部中位に穿孔
1070	弥生土器	製塩土器	9.0	4.8	19.5	良好	10YR7/6(明黄褐)	砂粒(多)	
1071	弥生土器	製塩土器	(11.2)	(4.3)	18.0	良好	10YR5/6(赤)	砂粒(多)	外面全体に煤付着
1072	弥生土器	製塩土器	9.6			良好	10YR5/6(黄褐)	砂粒(多)	平行タタキ
1073	弥生土器	製塩土器		4.4		良好	10YR6/6(明黄褐)	砂粒(多)	胴部中位に穿孔

1063～1073は、製塩土器である。これらの製塩土器の外面調整はタタキで内面にはナデを施し、脚部には押圧が行われる。1064は上半のタタキが格子となり、下半にはタタキの後に押圧を施している。1065はタタキの後に、タタキが目立たなくなるようなナデを施す。内面はヘラケズリを想定できる砂粒の移動が目立つ。1067は、内面の一定部分に押圧が認められる。この部分は、親指と人さし指の間に粘土を挟み調整することにより、内側になる4本の指の跡と思われる。また、当て具として手の甲を用いていることが、内面の凹みと口縁から判断される。1068はタタキが、ナデにより消える部分が認められる。1069は、胴部中ほどに穿孔が認められる。1071の内面には、4×3.4cmの円形の当て具痕が認められる。1073は、内面底部に押圧を施す。穿孔は胴中ほどに2ヵ所認められる。



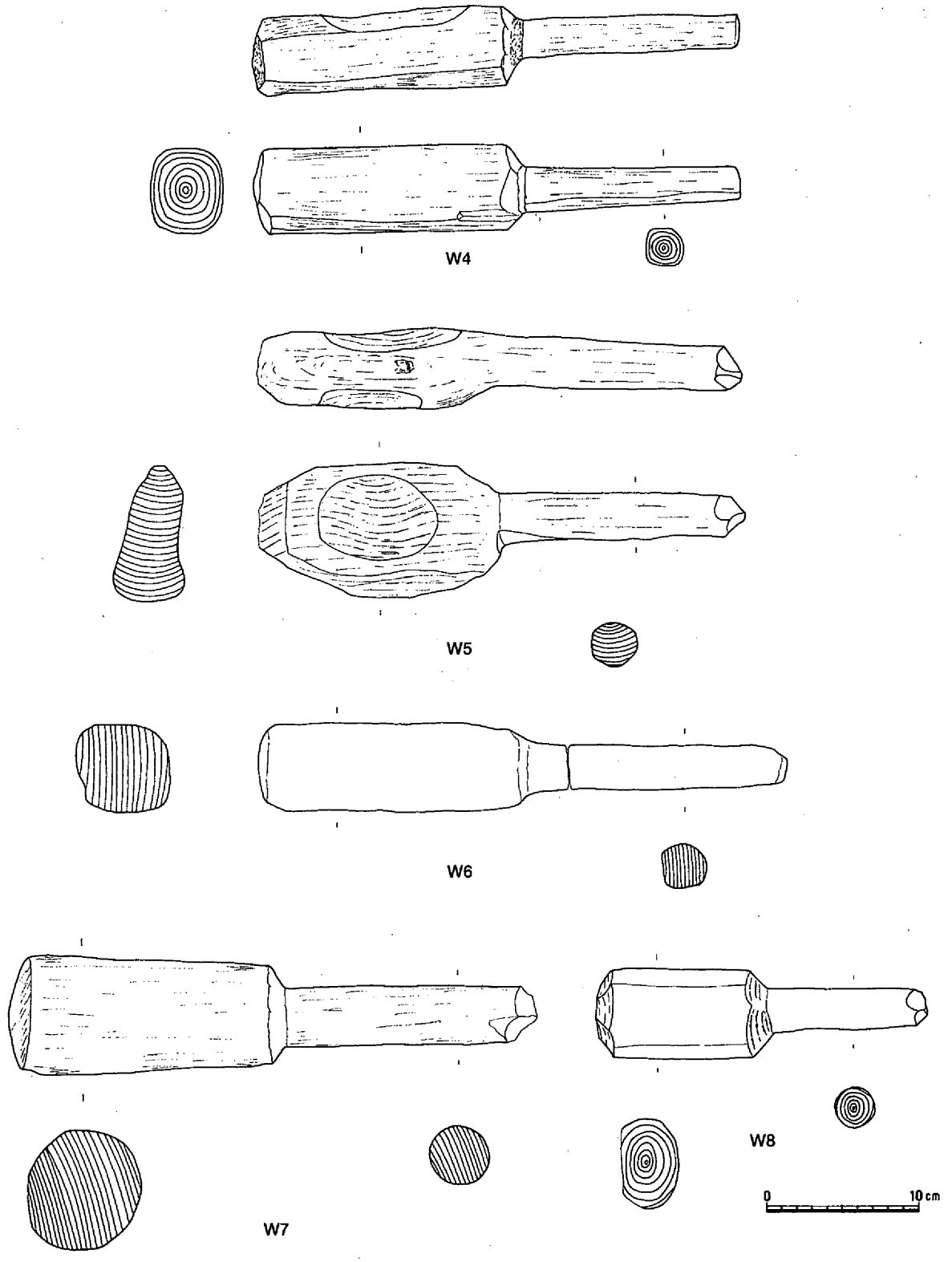
掲載番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底(脚)径	器高	焼成	色調	胎土	特徴・備考
1074	弥生土器	手焙形土器		8.5	18.1	良好	2.5Y7/3(浅黄)	砂粒	
1075	弥生土器	壺		2.2		良好	10YR7/2(にぶい黄橙)	砂粒	
1076	弥生土器	壺	2.0	2.0	5.8	良好	2.5Y7/4(浅黄)	砂粒	
1077	弥生土器	壺	4.0	2.1	4.7	良好	5Y7/1(灰白)	砂粒	
1078	弥生土器	壺		2.4	(4.6)	良好	2.5Y7/2(灰黄)	砂粒	
1079	弥生土器	甕	7.0	2.4	8.5	良好	7.5Y7/1(灰白)	砂粒	手捏ね
1080	弥生土器	甕	3.6	1.8	4.8	良好	2.5Y8/1(灰白)	砂粒	ほぼ全面に煤付着　手捏ね
1081	弥生土器	甕	3.8	1.4	4.0	良好	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒	手捏ね
1082	弥生土器	台付鉢	4.6	2.4	3.3	良好	7.5YR5/3(にぶい褐)	砂粒	
1083	弥生土器	台付鉢	6.2	4.4	5.0	良好	10YR7/3(にぶい黄橙)	砂粒	手捏ね
1084	弥生土器	台付鉢	4.6～4.9	3.3～3.7	3.9～5.0	良好	2.5Y6.5/2(灰黄)	密	手捏ね
1085	弥生土器	甕		7.7		良好	2.5Y6/2(灰黄)	砂粒(少)	内面に煤付着
1086	須恵器	杯身	12.8	6.8	4.0	良好	2.5Y6/1(黄灰)	砂粒	

1074は、手焙形土器である。この土器は、斜め外方に拡張する鉢を作った後被いを付している。被い部外面調整はヘラミガキ、内面はヘラケズリが認められる。鉢胴部外面はハケ状工具のナデ後ヘラミガキ、内面はヨコヘラケズリを施す。

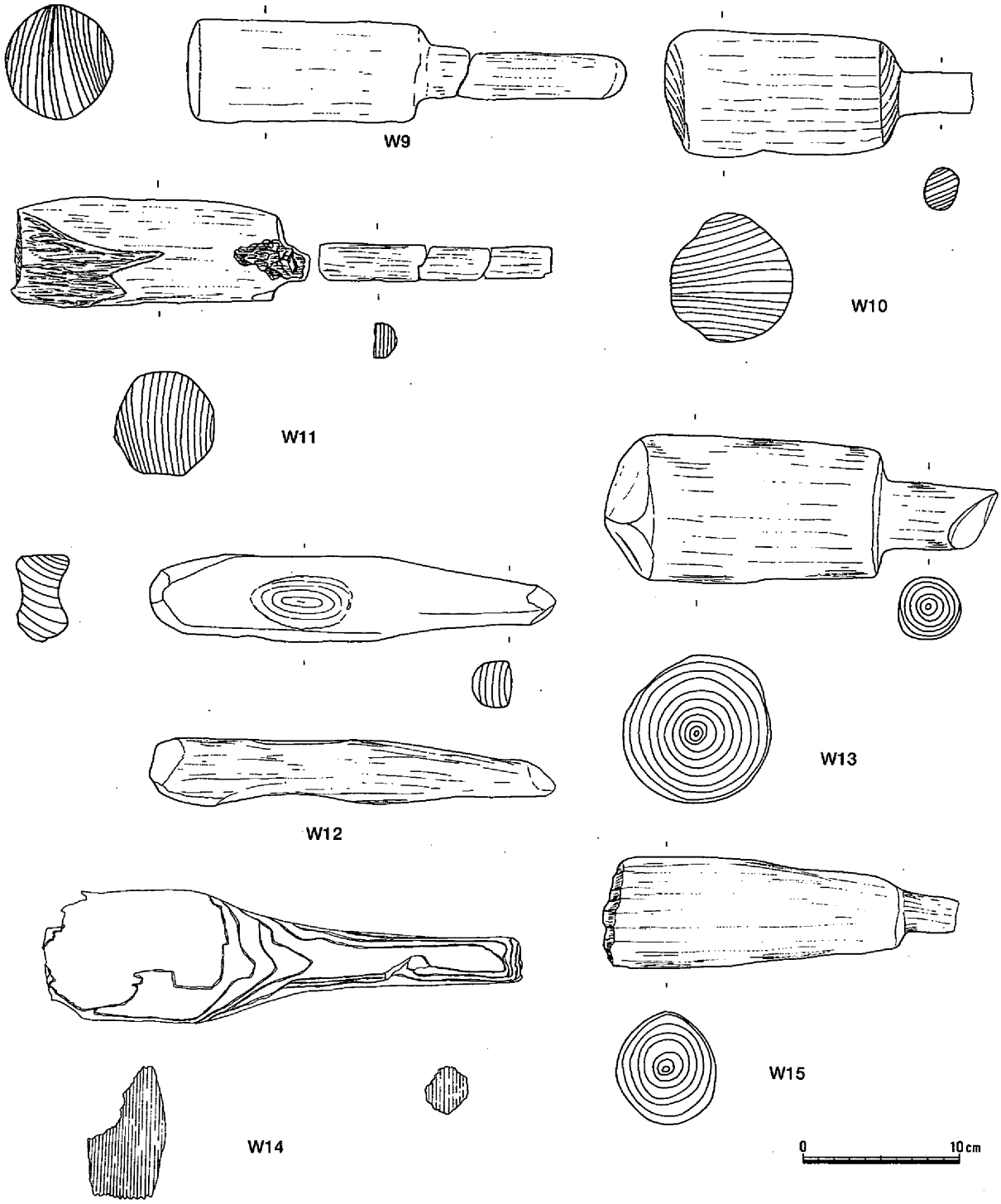
1075～1084は、手捏ねによるものである。1075は手捏ねというよりも、ミニチュアとしたほうが妥当と思われる。長頸壺で、頸部にはタテヘラミガキを施す。1076も顕著な押圧痕が認められない。調整は明確ではないが、比較的丁寧な作りである。1077は内面には押圧痕を顕著に残すが、外面にはヘラミガキ、ナデなどが認められる。1078は顕著な押圧痕がなく、内外面の調整はヘラとハケを行う。1079は顕著に押圧痕を残すもので、口縁部は押圧により波状になる。胴部の押圧は、雑なナデにより凹凸が目立たなくなる。1080の口縁端部は、一部肥厚させるが雑である。外面調整はナデと一部ヘラケズリを認める。内面はナデを施す。1081は口縁部は押圧で波状を呈し、内面にも顕著に残る。外面胴部には、ヘラミガキを施す。1082は丁寧な作りであり、ミニチュアとしたほうが妥当と思われる。1083は、内外面に押圧が顕著に残る。1084はいびつな形を呈し、押圧とナデをとどめる。

1085は底部破片で、外面調整はハケ後タテヘラミガキ、内面はナナメヘラケズリを施す。内面には、底部からやや上に煤が付着している。

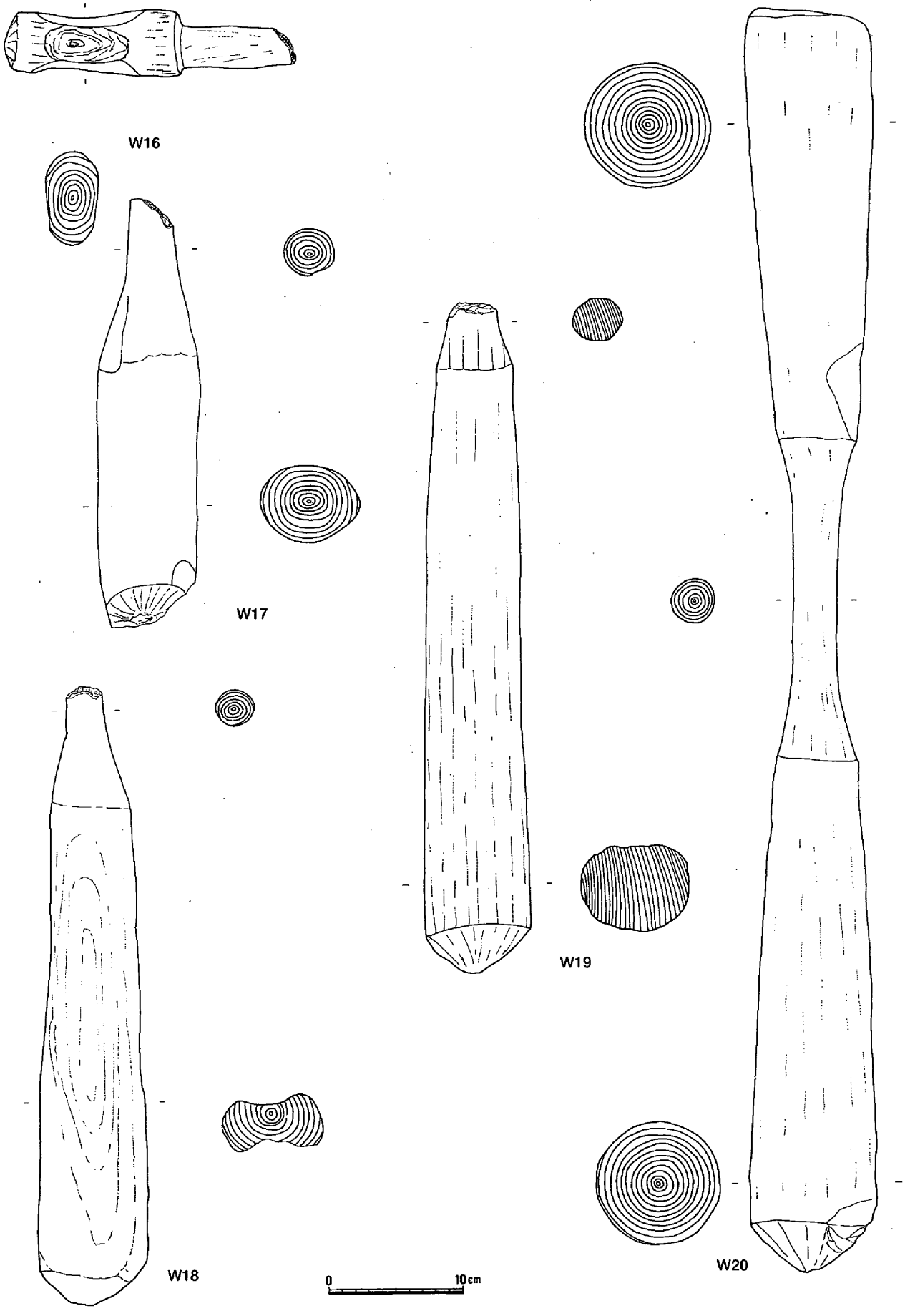
1086は、Ic区から検出された唯一の須恵器である。検出地点は調査区西側の側溝からで、調査開始してまもなくの出土である。



掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W4	横槌	32.1, a18.0	c5.5×4.7, d2.5		サカキ	
W5	横槌	32.1, a16.0	c8.7×5.0, d2.8		カヤ	使用痕
W6	横槌	34.9, a17.5	c5.7×6.1(円), d2.8		コナラ属アカガシ亜属	
W7	横槌	35.2+α, a13.5	c7.4×7.8(円), d3.8		コナラ属アカガシ亜属	
W8	横槌	21.9, a11.3	c5.7×3.7+α, d2.5		ムクノキ	

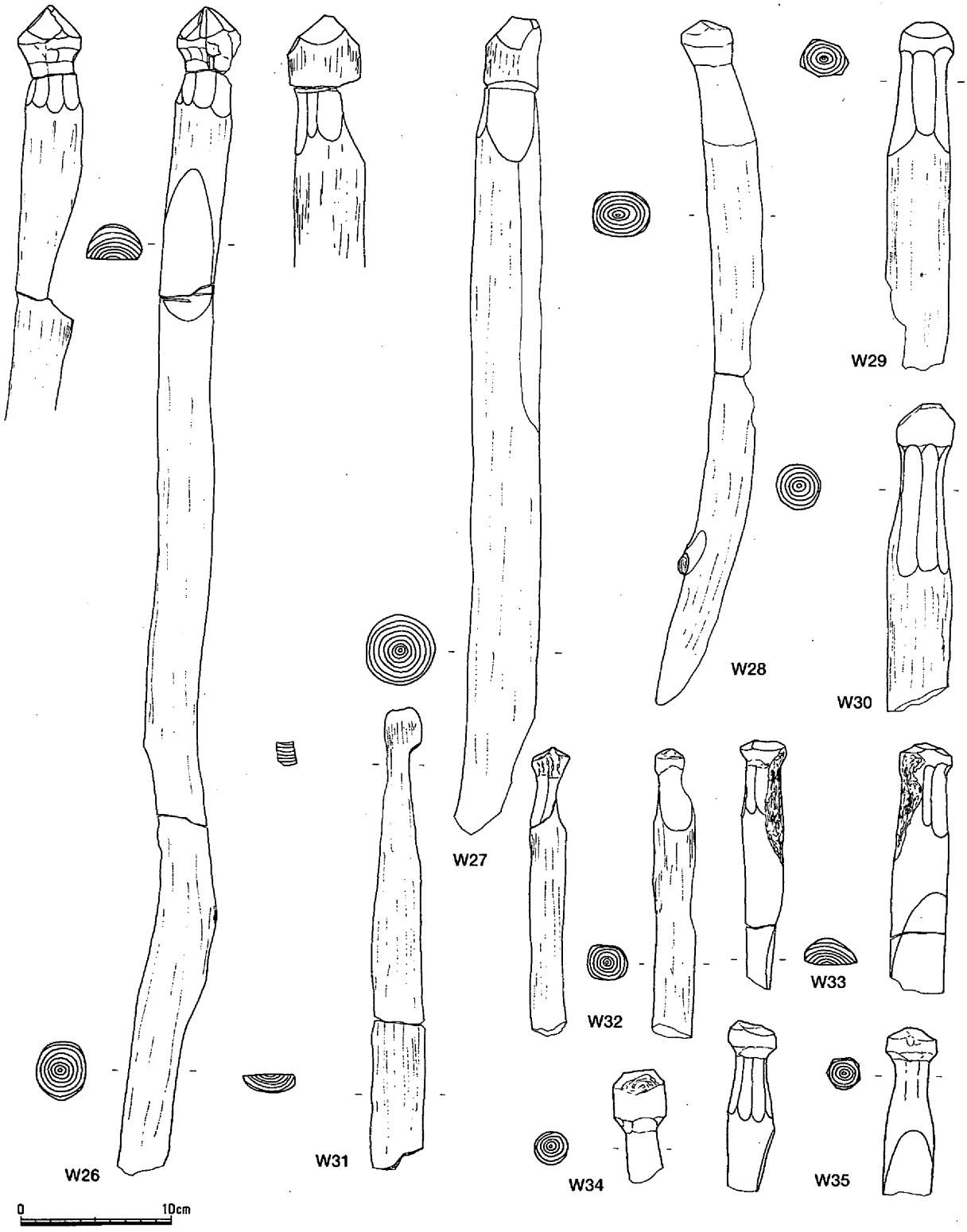


掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W 9	横槌	27.8, a14.5	c6.5×7.2(円), d2.9		コナラ属アカガシ亜属	
W10	横槌	19.8+α, a15.2	c18.2, d2.6×2.2		コナラ属アカガシ亜属	
W11	横槌	36.4+α, a16.4	c7.0, d1.2+α×2.2		コナラ属アカガシ亜属	
W12	横槌	25.9+α	c5.5×3.1		ヤマグワ	
W13	横槌	24.5+α, a17.5	c9.5(円), d3.9		ヤブツバキ	
W14	横槌	30.5+α	c8.5+α×5.0+α, d3.0+α×2.5+α		マツ属複維管束亜属	
W15	横槌	22.6+α, a19.3	c6.5×7.0(円)		ナシ亜科	

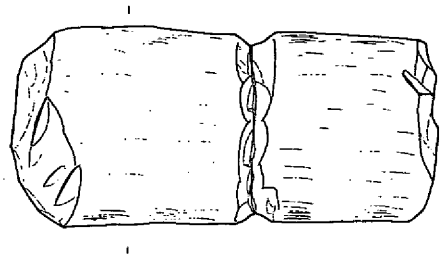

W16
W17
W18
W19
W20
0
10cm

掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W16	横槌	21.5+α, a13.0	c4.3(円), d2.9		コナラ属アカガシ亜属	使用痕顕著
W17	杵	a19.5+α, b11.7+α	c7.2×5.7(楕円), d3.6		コナラ属アカガシ亜属	先端から?状に火を受けている
W18	杵	45.7+α, a31.6, b4.7+α	c8.0×2.5, d2.8		ヤブツバキ	
W19	杵	49.3+α, a44.4	c6.2×7.8(円)		コナラ属アカガシ亜属	
W20	杵	92.80, a 31.1a2 39.5, b23.5	c1 9.0, c2 9.0, d3.1		ヤブツバキ	

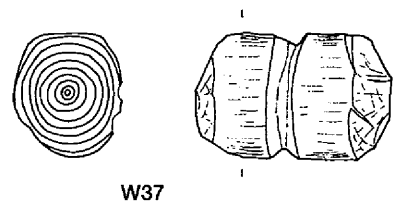
掲載番号	器種	法量（cm）			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W21	有頭棒	83.3, a2.2-3.0	3.1×3.5(円), d3.1×2.8+α-4.0×2.5, e2.1×1.1+α-2.5×1.5		コナラ属アカガシ亜属	
W22	有頭棒	122.6+α, a8.9+α-12.5+α	4.1, d4.5-3.0~4.8, e3.2-3.2		マキ属	
W23	有頭棒	104.3+α, a3.1×2.5, b5.2, c7.5	3.5, d3.1×2.5, e1.8×2.5		ヤブツバキ	抉りあり
W24	有頭棒	169.0+α, a3.0×3.4, b10.0, c12.0+α	3.5, d2.4, e2.5		コナラ属アカガシ亜属	先のみ加工
W25	有頭棒	74.6, a3.5, b9.0, c8.0	3.1, d2.5, e1.5×2.0		ヤブツバキ	



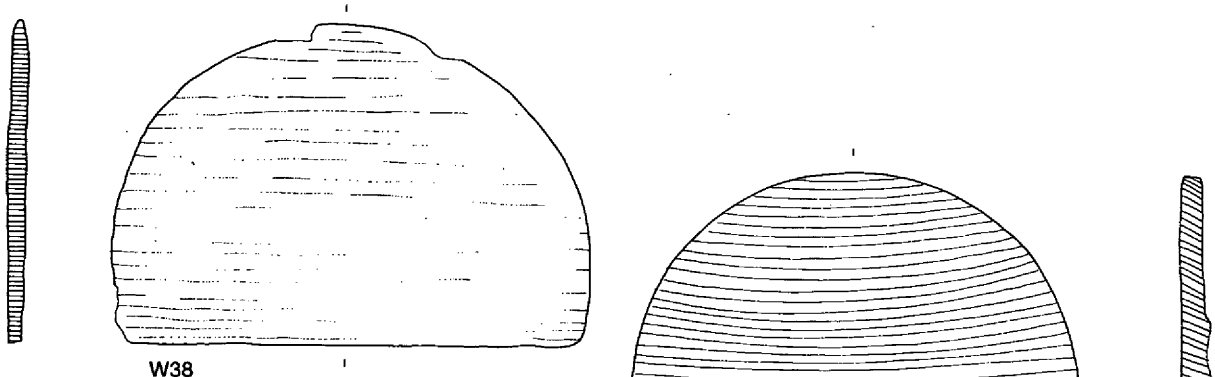
掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W26	有頭棒	72.7+α, a3.7, b6.5, c10.2	3.1～3.9, d4.1, e2.5		サカキ	
W27	有頭棒	54.3+α, a9.0	6.5, d3.5×5.0, e2.5×3.0		イチジク属	
W28	有頭棒	45.5+α, a2.7	3.0×3.7(円), d3.2, e2.5		コナラ属アカガシ亜属	
W29	有頭棒	23.2+α, a2.0	4.1, d3.5, e2.2×3.3		ヤブツバキ	
W30	有頭棒	20.5+α, 3.0	4.1, d3.8, e2.9		コナラ属アカガシ亜属	使用痕顕著
W31	有頭棒	30.8+α	1.3×3.3(カマボコ)		サカキ	
W32	有頭棒	19.3+α, 1.7	2.6×2.2, d1.9×2.5, e1.3		コナラ属コナラ節	抉りあり
W33	有頭棒	16.7+α, a1.9, b7.8, c6.5+α	3.5, d3.0×3.5, e2.0×3.0		シイ属	抉りあり
W34	有頭棒	7.5+α, a4.0	2.3+α, d3.3, e2.0(円)		ヤブツバキ	
W35	有頭棒	16.2+α, a2.0, b4.3, c4.0+α	2.1, d3.3, e2.0		クスノキ科	抉りあり



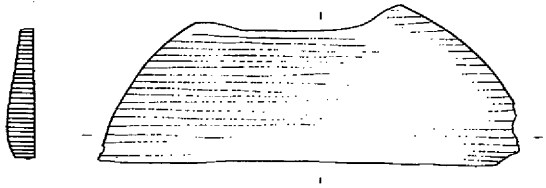
W36

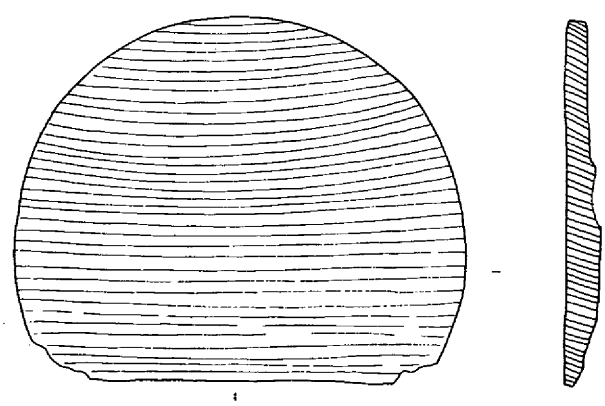


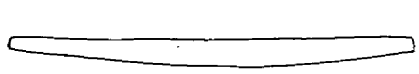
W37



W38

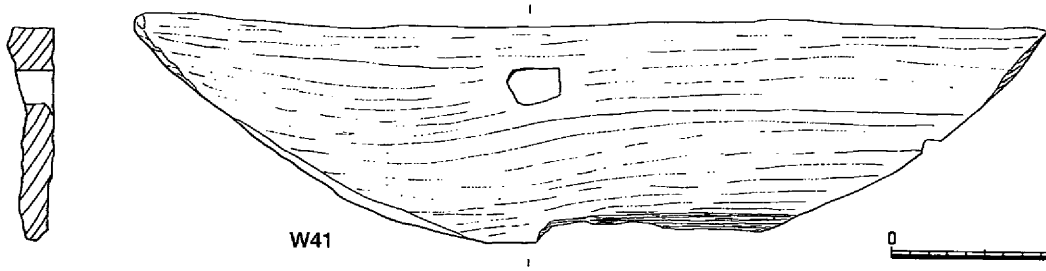




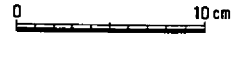


W39

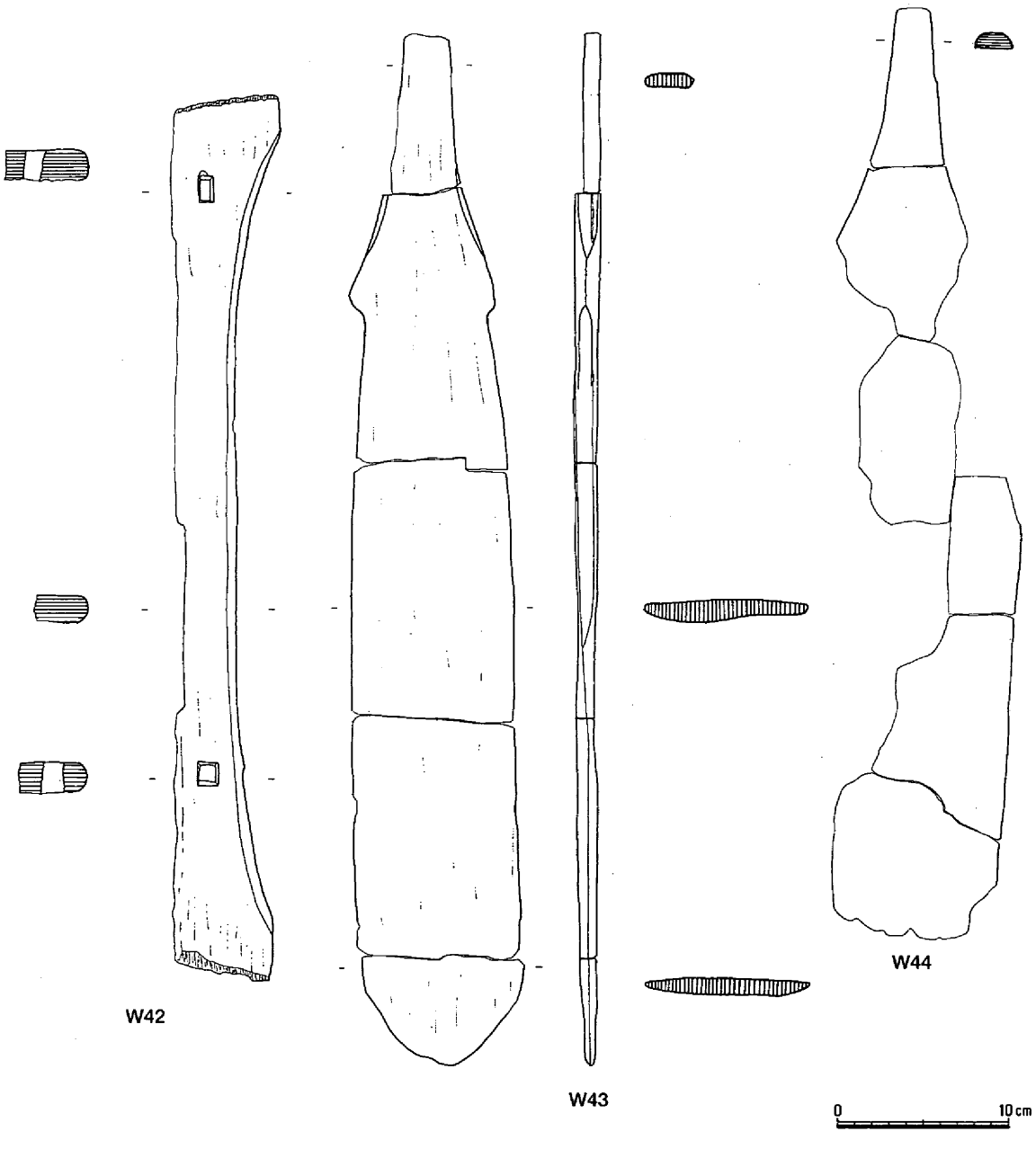
W40



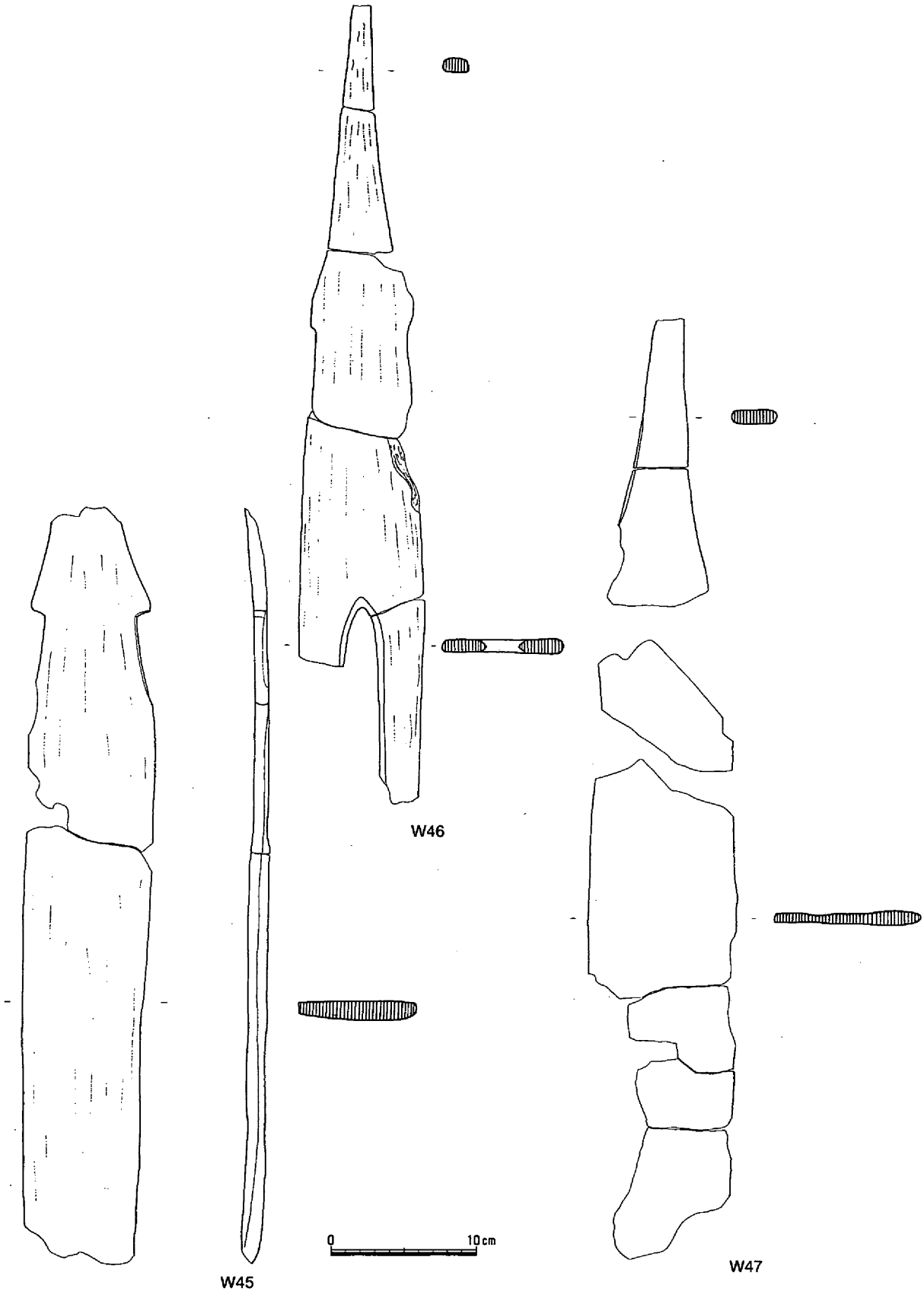
W41



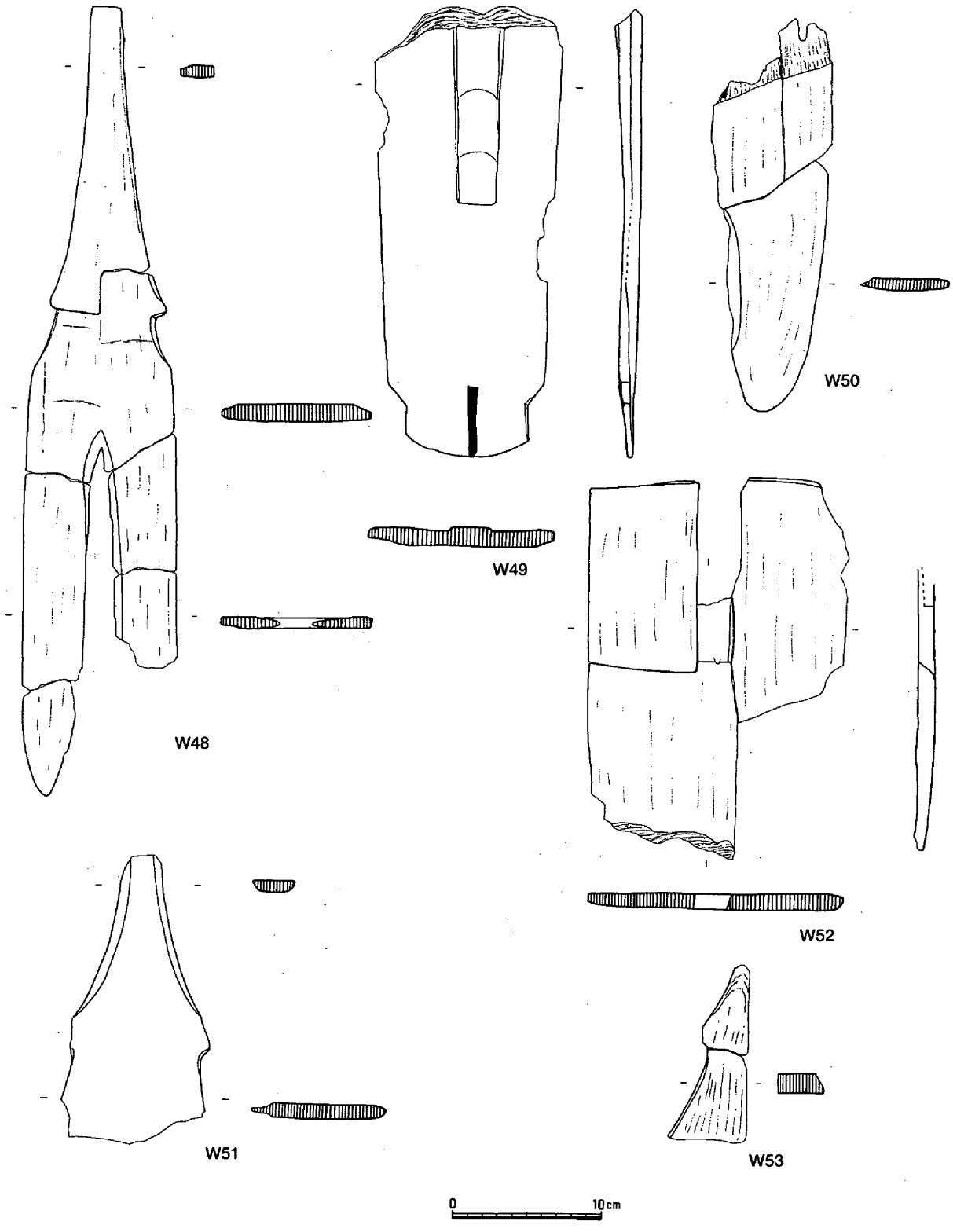
掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W36	木錘(編錘)	22.2,a2.0	8.0+α×10.5		コナラ属クヌギ節	
W37	編錘	10.5,a1.5	6.5×5.7		コナラ属アカガシ亜属	
W38	円板	25.2×17.0+a(円)		0.9	ヒノキ	
W39	底板？	22.0+α×6.7×α		0.7～1.4	ヒノキ	裏面に膨らみ
W40	底板	23.9×19.0		1.0～1.5	ヒノキ科	
W41	？	48.3+α	11.2+α	2.5	モミ属	方形孔あり



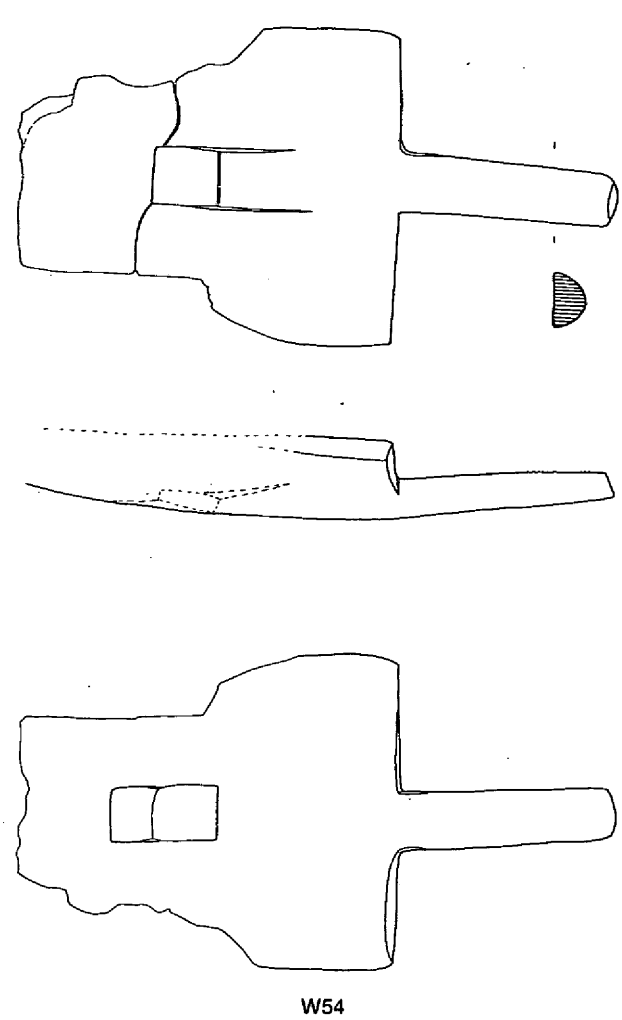
掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W42	部材	51.0+α	3.5+α+5.7+α	1.6+α	ヒノキ	方形孔あり(2ヵ所)
W43	錐(なすび)	60.3+α,b44.3	c8.4,d9.5	e0.8,f1.3	コナラ属アカガシ亜属	
W44	錐(なすび)	54.8+α	d9.5+α	e0.6	コナラ属アカガシ亜属	

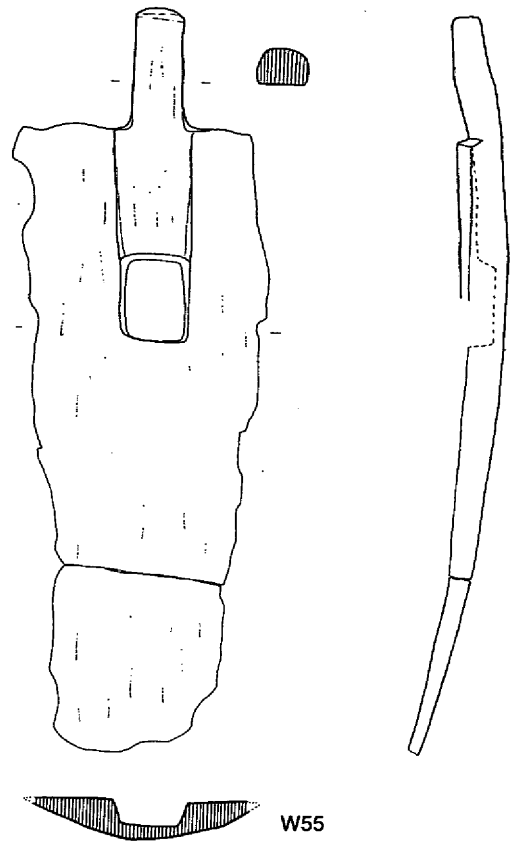


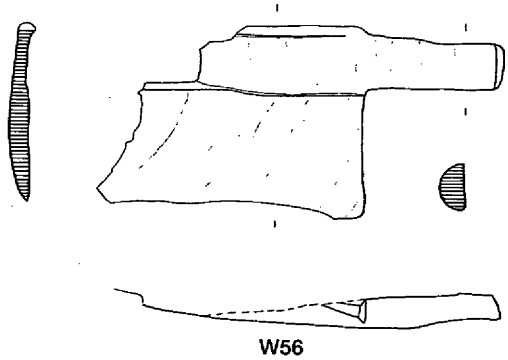
掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W45	鋤(なすび)	52.5+α, b45.2+α	c8.1, d7.5～8.5	刃厚1.2	コナラ属アカガシ亜属	
W46	二又鋤	55.6+α, b13.7	d8.3, e3.0, f1.0×1.8(カマボコ), c7.0, g0.9		コナラ属アカガシ亜属	
W47	鋤(なすび)	65.2+α	10.0	f0.9, e0.9	コナラ属アカガシ亜属	

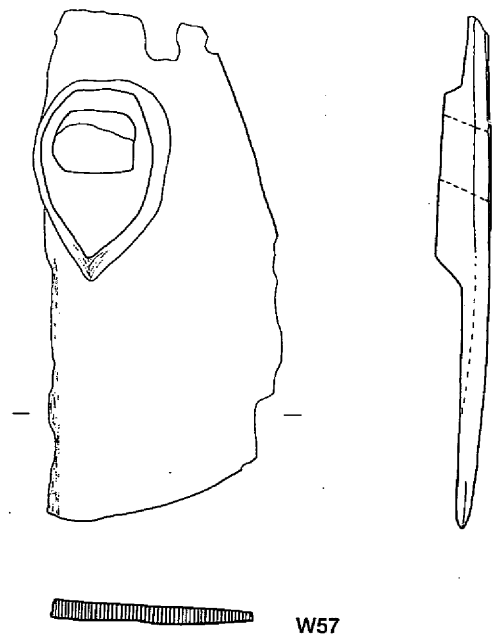


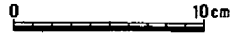
掲載番号	器種	法量(cm) 長さ	幅・径	厚み	樹種	備考
W48	二又鋤	53.0, a10.2, b4.0, d7.7, c23.3			コナラ属アカガシ亜属	柄2.3×0.8(カマボコ)
W49	平鋤	30.4+α, e5.0	10.3～12.5, d8.1	1.0	コナラ属アカガシ亜属	鉄製刃装着部あり
W50	二又鋤先	26.5+α			シイ属	
W51	鋤(なすび)	19.3+α	9.2+α	1.0	コナラ属アカガシ亜属	
W52	平鋤	26.0+α	18.0	0.6	コナラ属アカガシ亜属	孔あり
W53	鋤(なすび)	12.0+α	5.3+α	1.3	コナラ属アカガシ亜属	



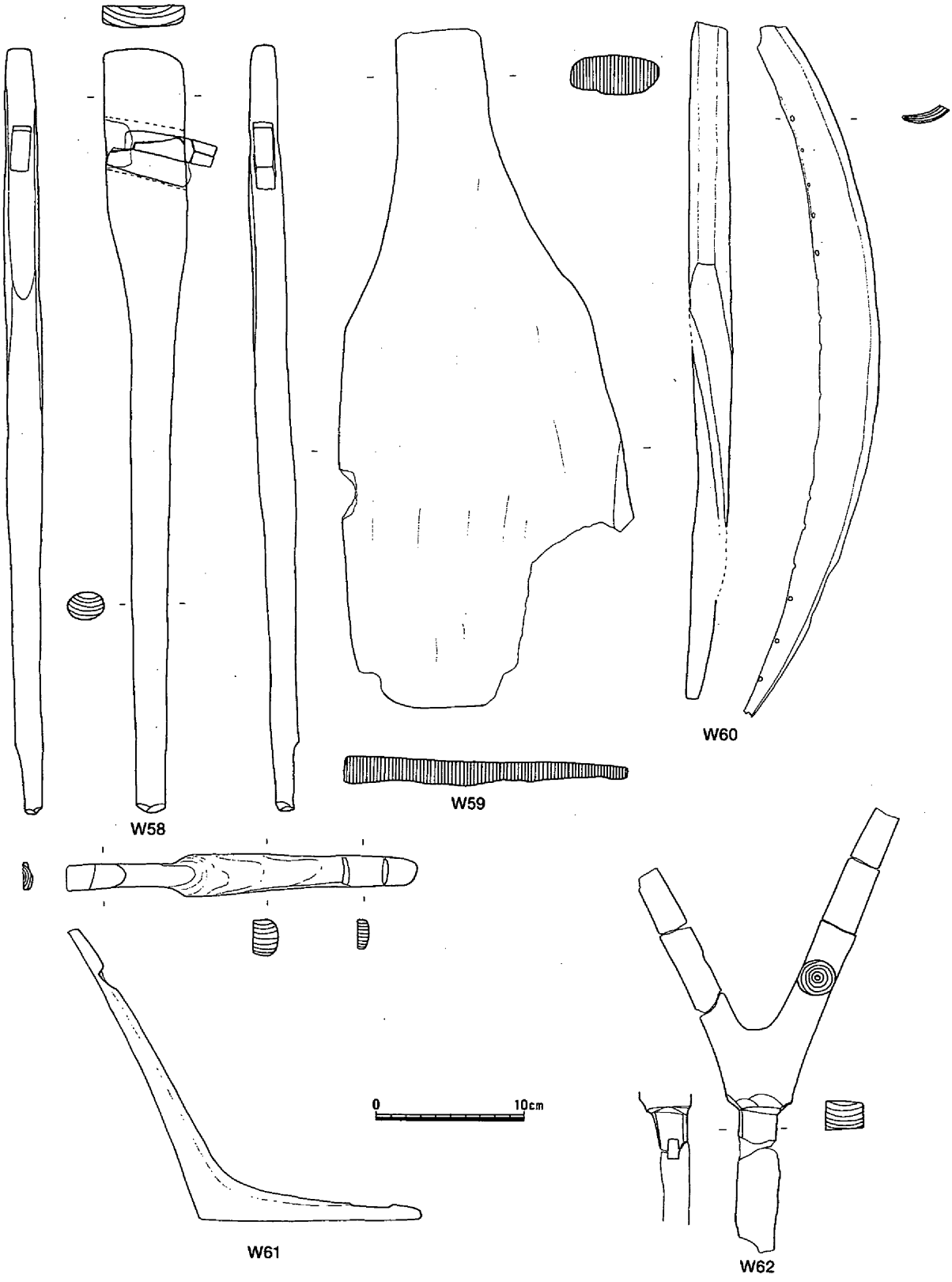




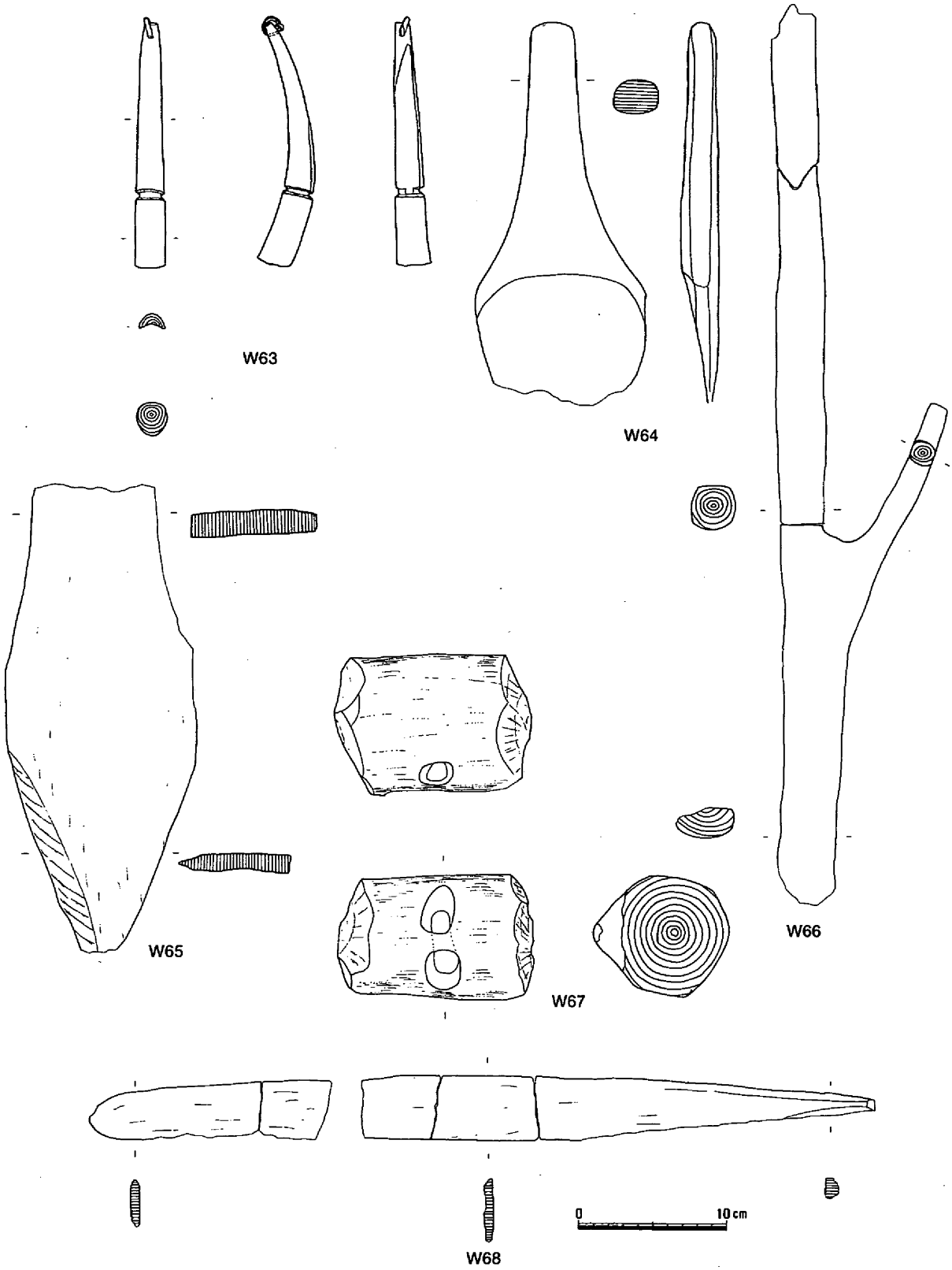




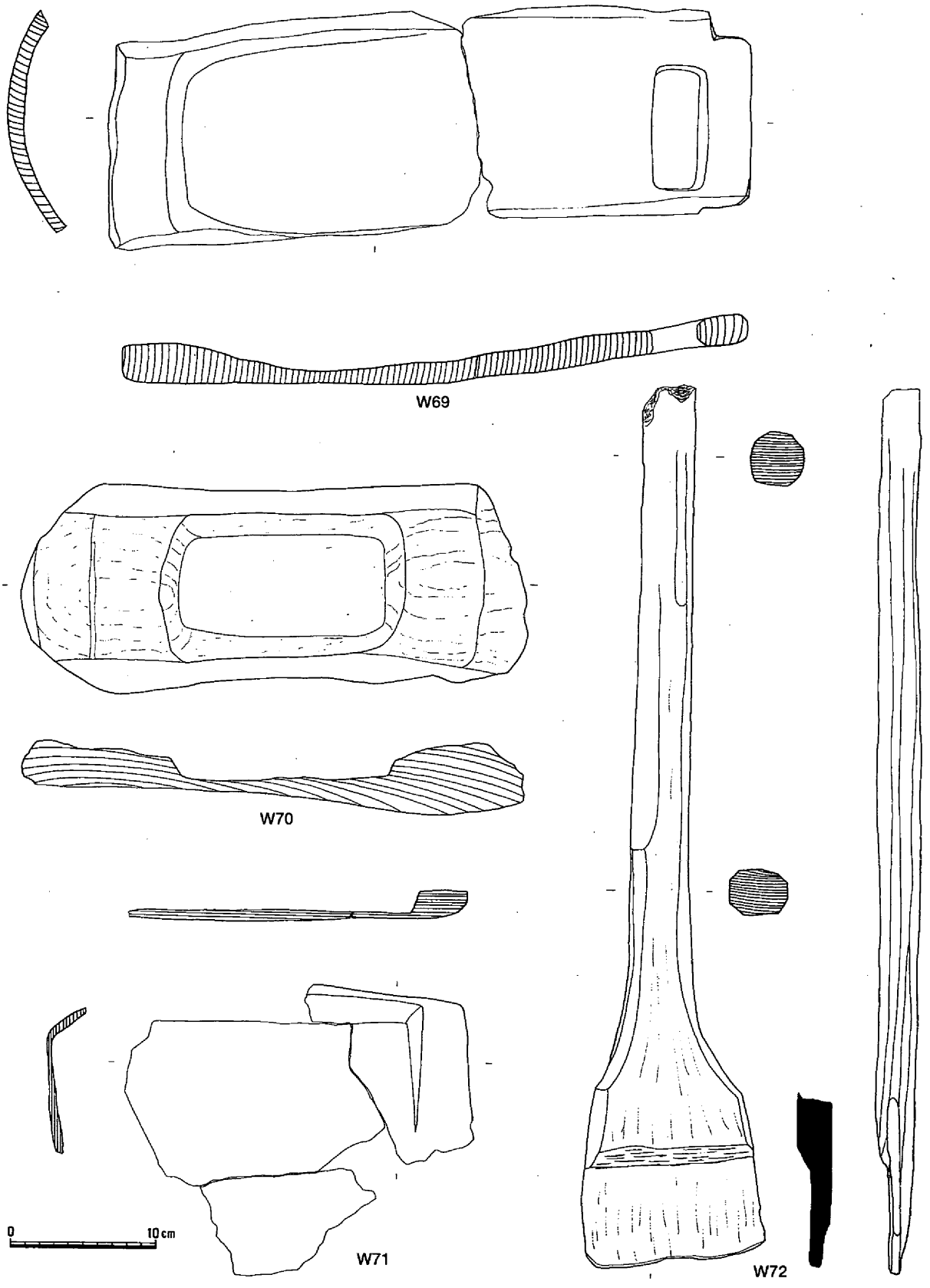
掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W54	鋤	30.8+α, b19.5	c16.5	f1.7(カマボコ), e1.7	コナラ属アカガシ亜属	方形孔あり
W55	鋤	39.0+α, b33.0+α	c8.0+α	f2.0, g2.0	コナラ属アカガシ亜属	方形孔あり
W56	鋤	21.4+α	c11.3+α	f0.6, g0.9	コナラ属アカガシ亜属	
W57	鍬	27.3	c12.5+α, 頭7.3+α	1.5, 柄孔隆起10.5×7.1	コナラ属コナラ節	方形(3.3×4.3cm)の孔



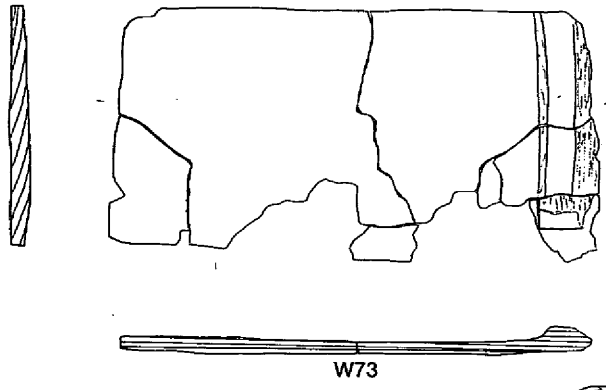
掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W58	斧形木製品	51.1	1.3	5.4×2.0	ヤブツバキ	方形(3.3×3.8cm)の孔
W59	櫂	45.2+α	18.5	0.8～1.7	コナラ属アカガシ亜属	
W60	網枠	46.2+α		0.8	マツ属複維管束亜属	4cm前後の孔が縁どる
W61	柄	a19.5+α, b19.5	2.4～1.5(c1.5×1.5～1.0)	1.8～0.8(d2.4～1.8×1.5～0.8)	カヤ	抉れあり
W62	?	29.8+α			環孔材	二又　ほぞ孔あり



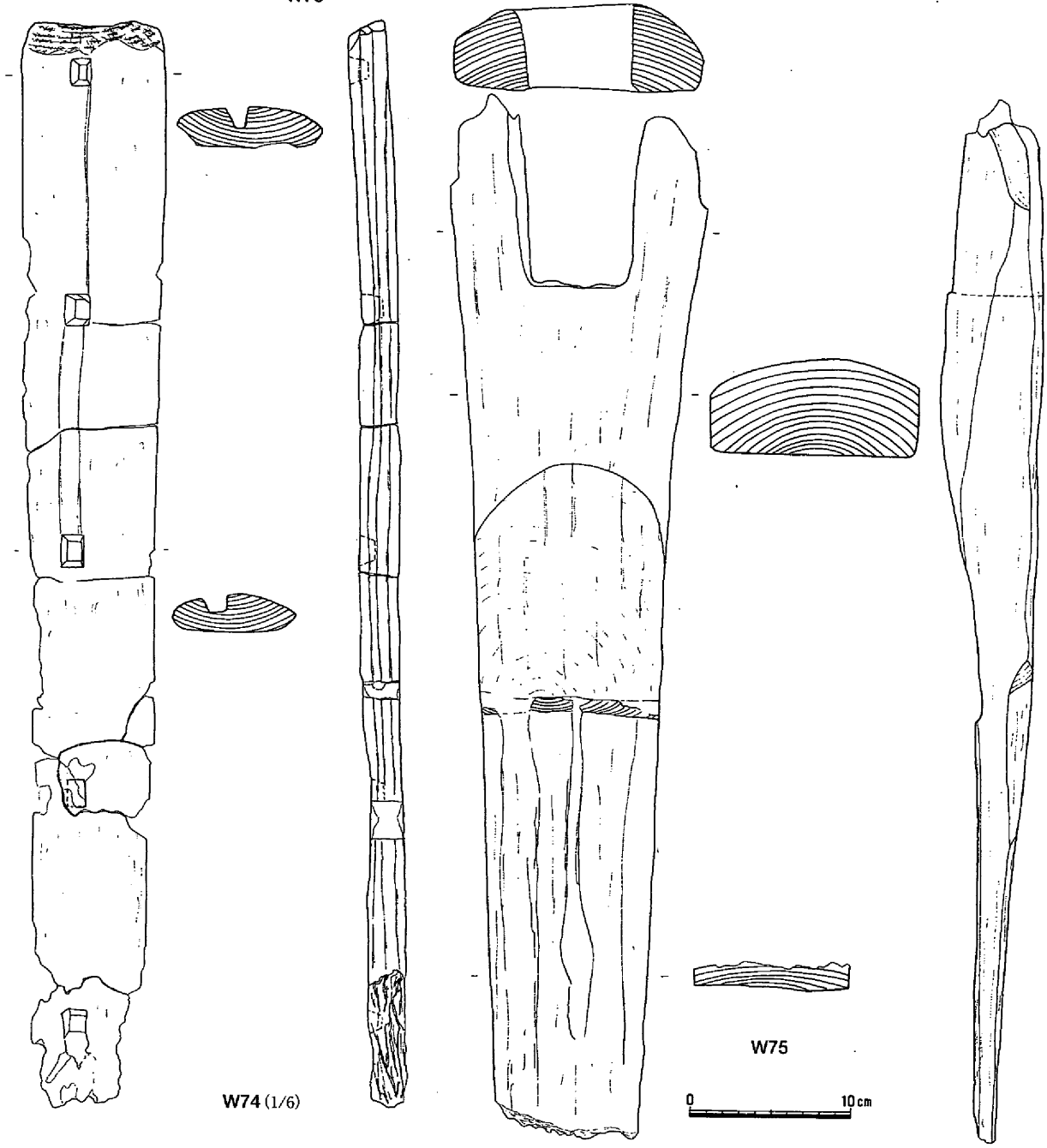
掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W63	?	a15.4, b4.5, c0.6				先端に孔　樹皮の紐あり
W64	?	21.0+α	11.1	2.5～0.5	コナラ属アカガシ亜属	
W65	?	31.7+α	最大12.3	1.6	マツ属複維管束亜属	片刃状
W66	?	61.2+α			ヤブツバキ	枝を利用して二又
W67	木錘	13.1	8.2		コナラ属アカガシ亜属	孔あり
W68	?	50.5+α	4.2+α	0.6	コナラ属アカガシ亜属	又？鋤？の可能性も



掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W69	桶	43.8		1.0～2.8	クスノキ	把手あり　下方肥厚
W70	容器？	34.9	12.5,凹17.0×9.7(方)	4.8,凹深さ1.8	ムクノキ	容器は未製品？柱基盤かも
W71	すくい具	c28.5+α,a20.0+α	0.4		コナラ属アカガシ亜属	
W72	スコップ？	61.0+α	b12.3,a3.5(円)		コナラ属アカガシ亜属	



W73

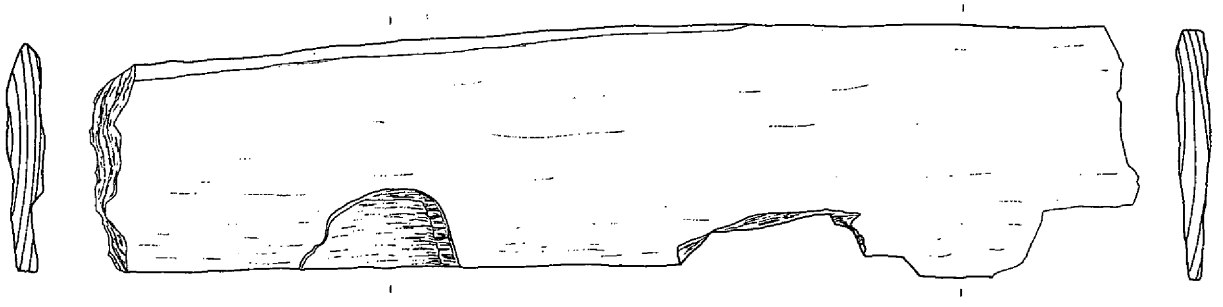


W74 (1/6)

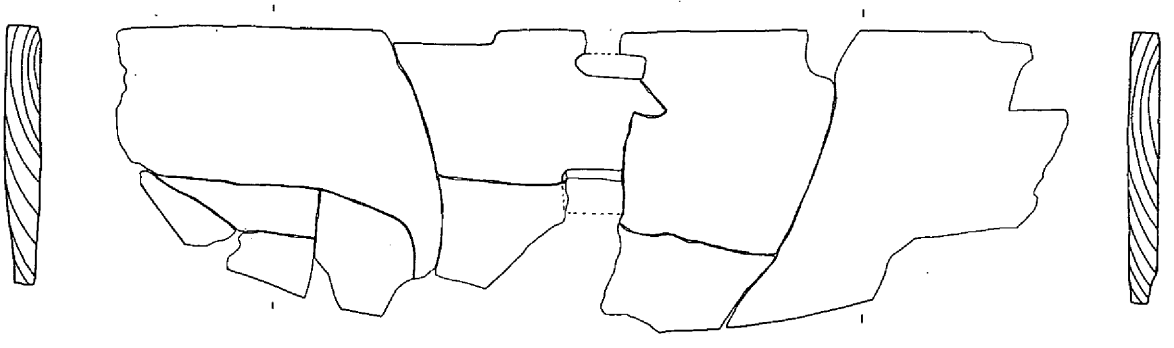
W75

0　10cm

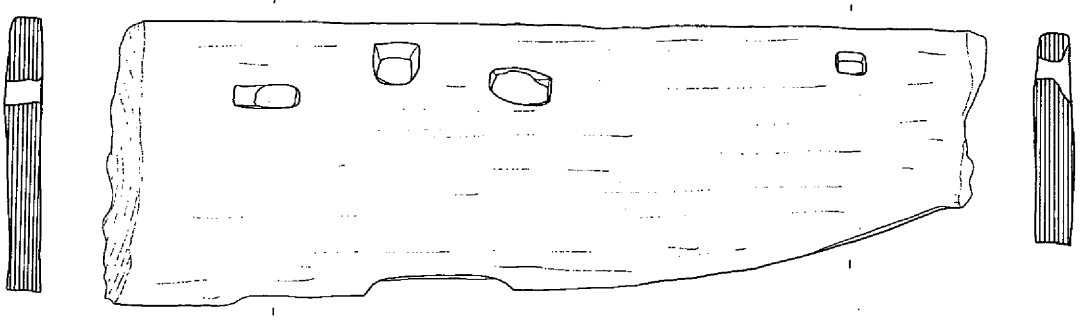
掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W73	すくい具？	a25.8	c13.3	0.7	コナラ属アカガシ亜属	凸部あり
W74	部材	100.0+α	13.3	3.5	ブナ科	ほぞ孔5個(方形)
W75	部材	64.6+α	13.0	5.9～14.0	コウヤマキ	抉りあり



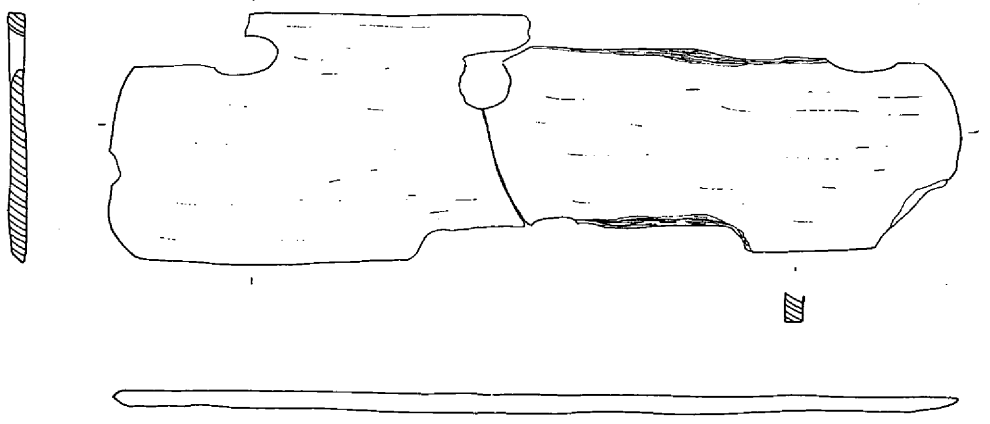
W76



W77

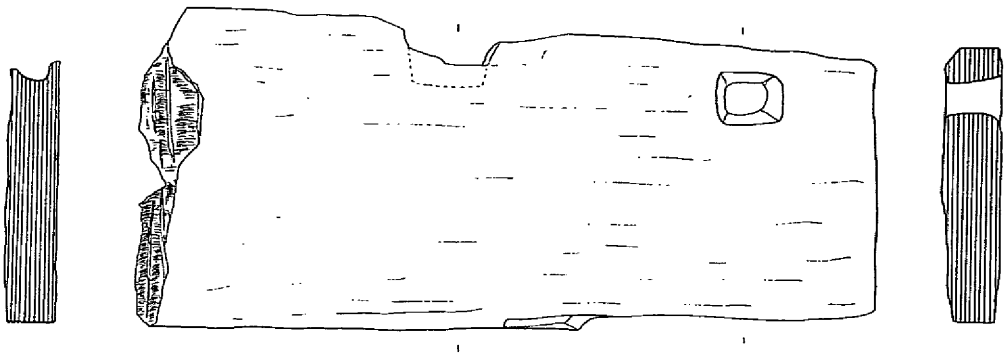


W78

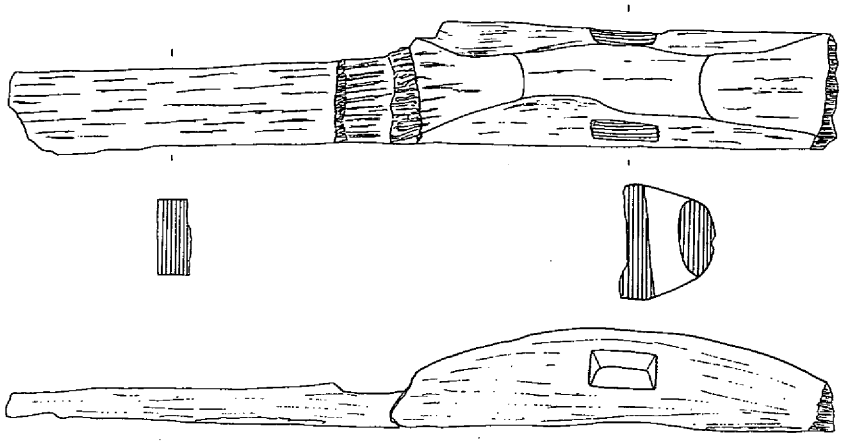


W79

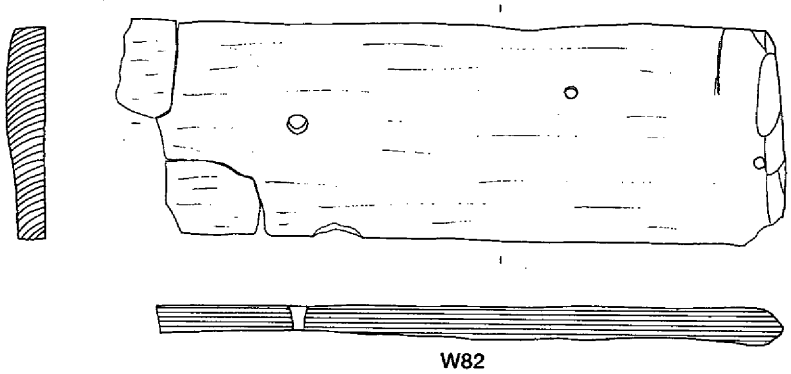
掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W76	部材	55.0+α	13.2	1.9	コナラ属アカガシ亜属	抉りあり
W77	部材	50.0+α	16.0+α		ケヤキ	方形孔あり(2ヵ所)
W78	部材	46.0+α	9.3～14.9	2.0	ヒノキ	方形孔4・ほぞ1
W79	部材	45.0	13.1	1.0	シイ属	孔あり(4ヵ所)



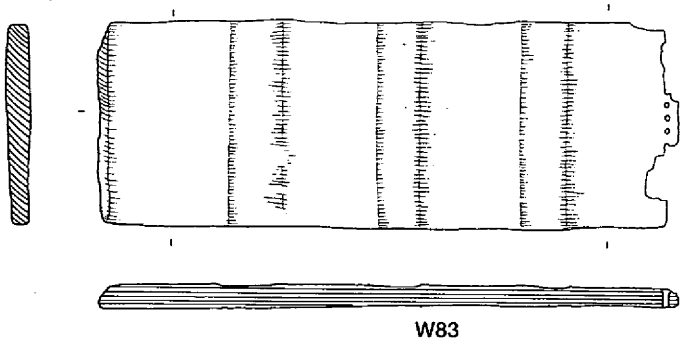
W80



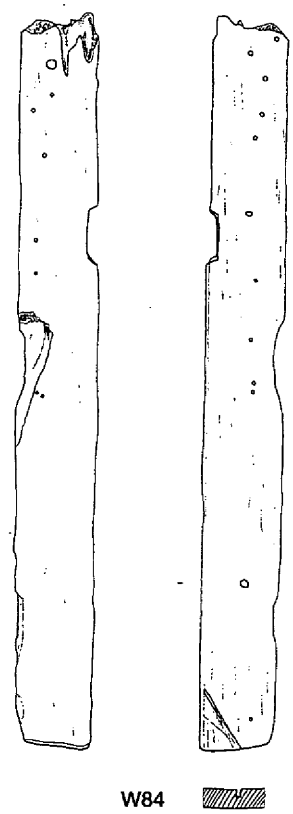
W81



W82



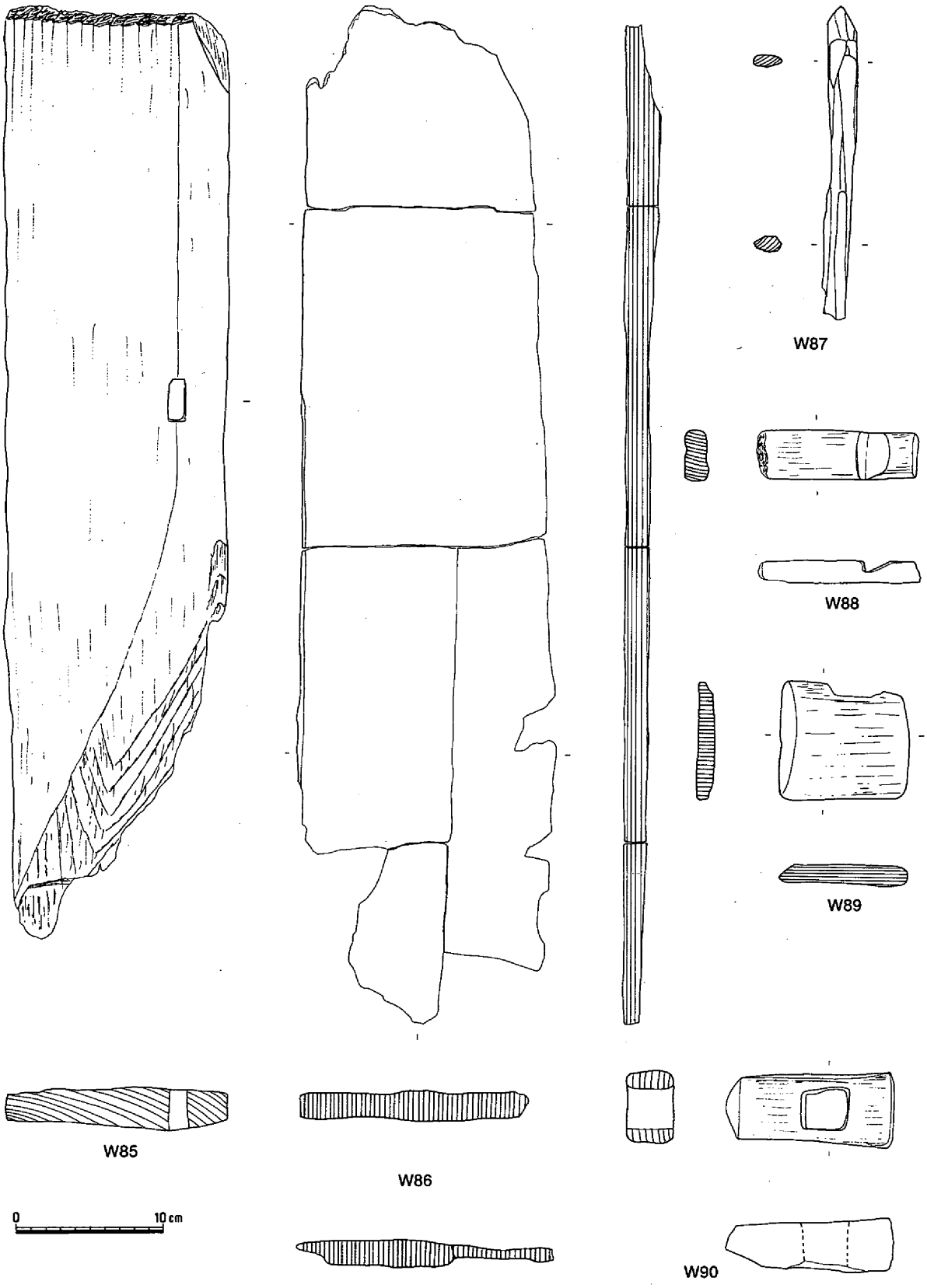
W83



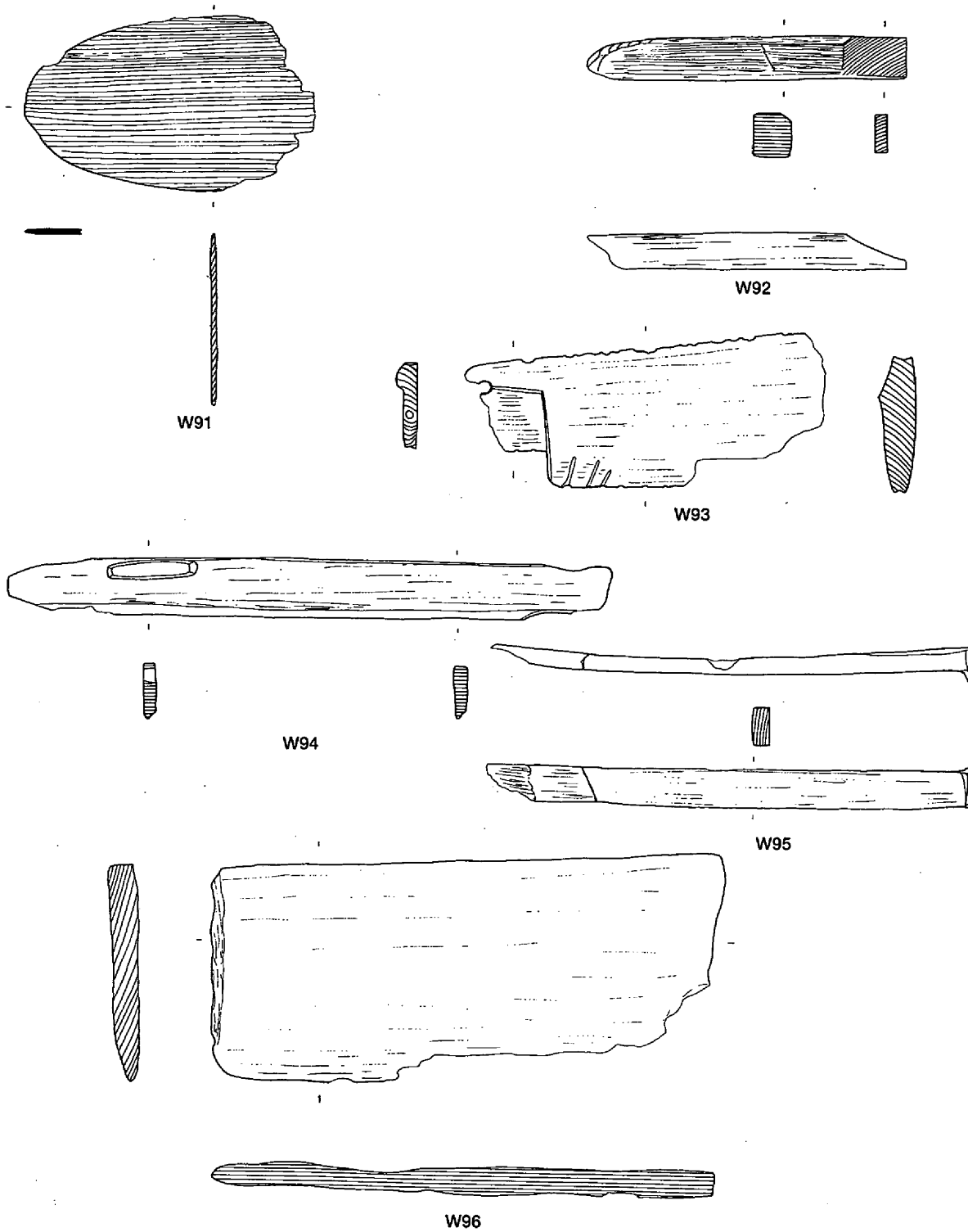
W84

0　10 cm

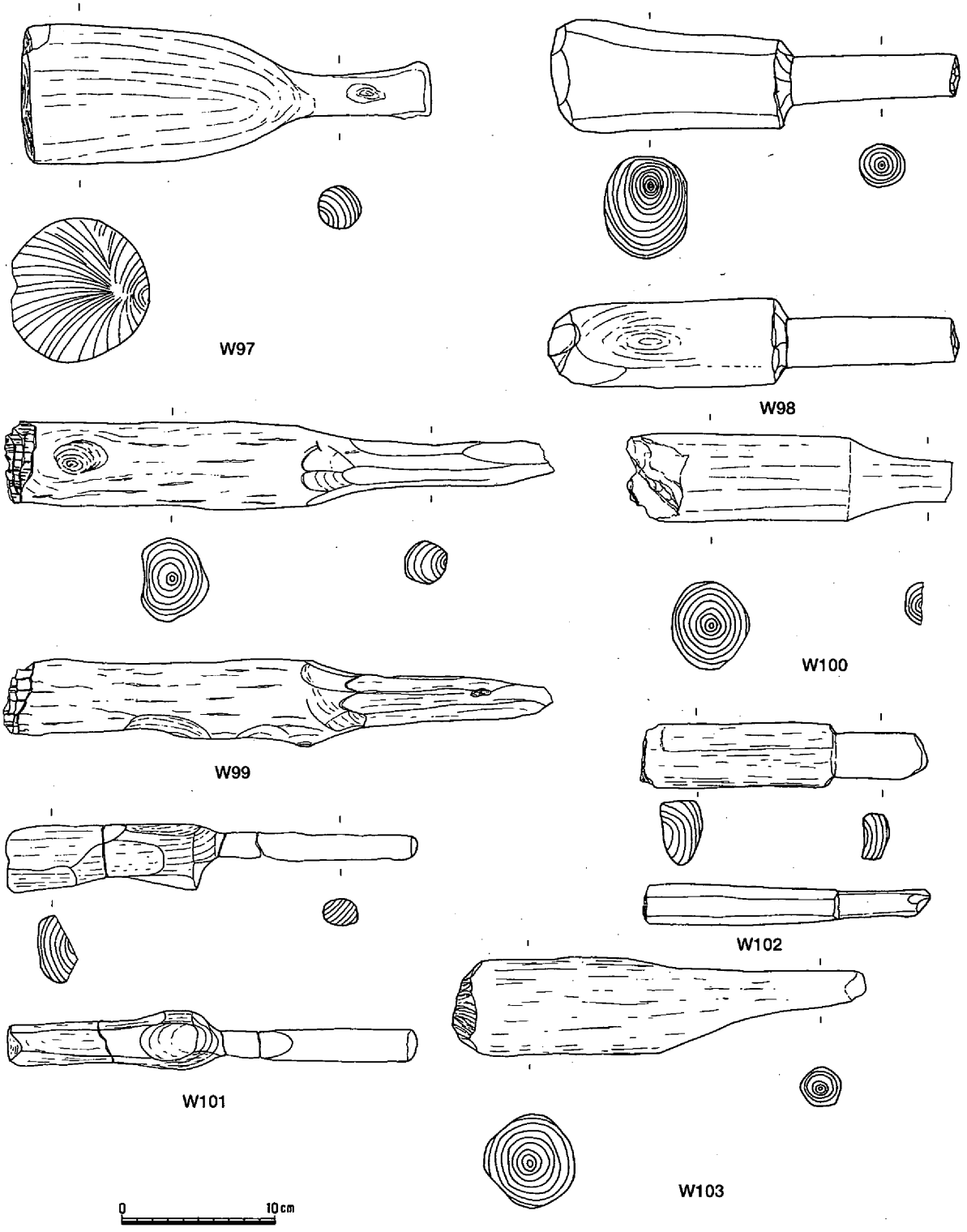
掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W80	加工材	39.0+α	14.2～16.9	2.5～3.0	広葉樹	ほぞ孔あり(方形)
W81	部材	43.6+α	4.3+α	5.0+α	モミ属	ほぞ孔あり(方形)
W82	部材	35.3+α	11.4	2.0	シイ属	小孔あり
W83	部材	30.4+α	10.5	1.2	ヒノキ	孔あり
W84	部材	39.0+α	4.1+α	1.3	ヒノキ	表裏に抜けない小孔あり



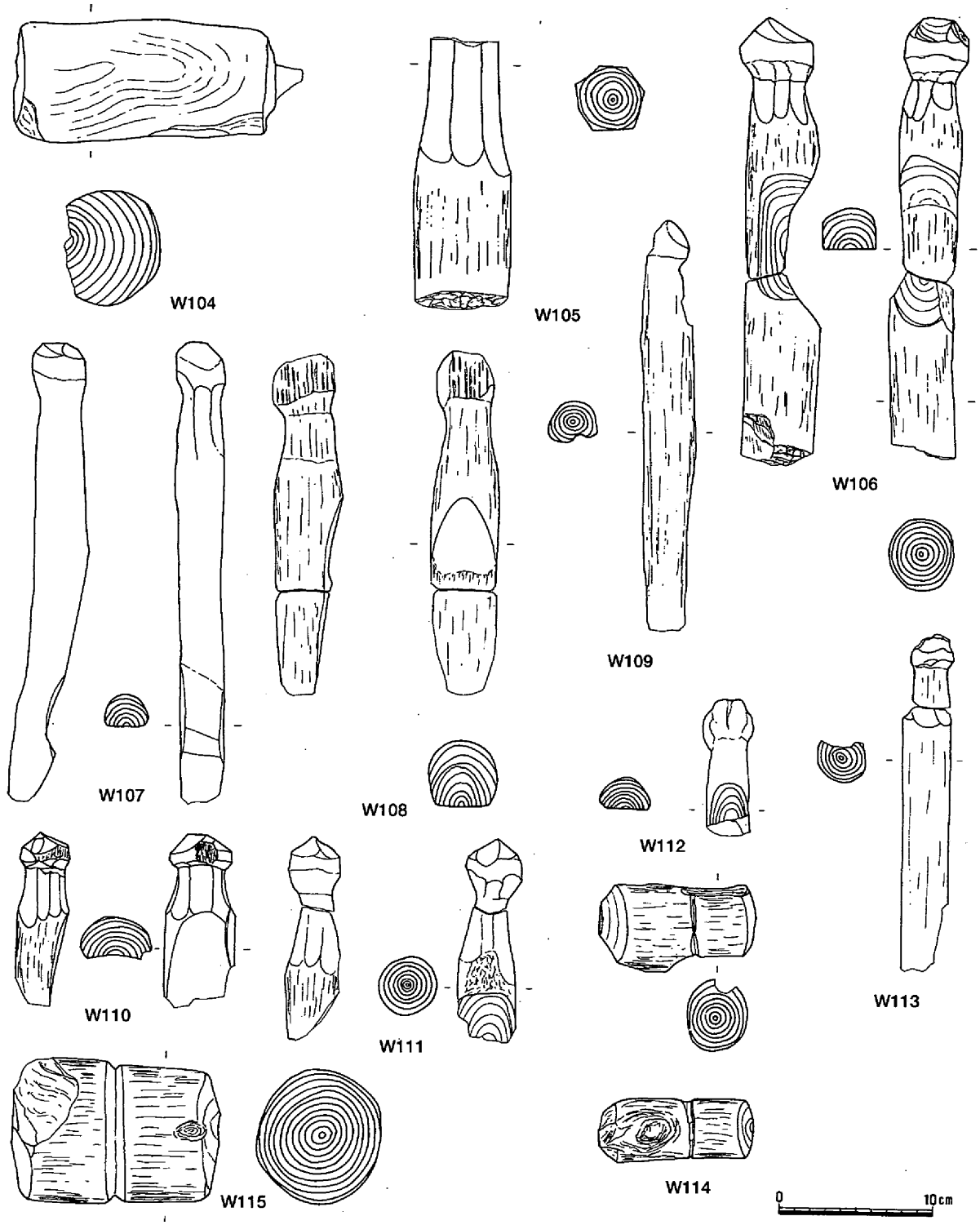
掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W85	部材	63.5+α	15.0	2.8	モミ属	方形孔あり
W86	板	69.3+α	16.5	1.0～2.2	コナラ属アカガシ亜属	大きく凹む
W87	加工材	21.2+α	2.0	0.8	マキ属	
W88	部材	11+α	3.5	1.5	シイ属	
W89	加工材	8.8	8.0	1.3	シイ属	
W90	部材	11.4	4.3～5.0	2.0～3.4	広葉樹	ほぞ孔(方形)



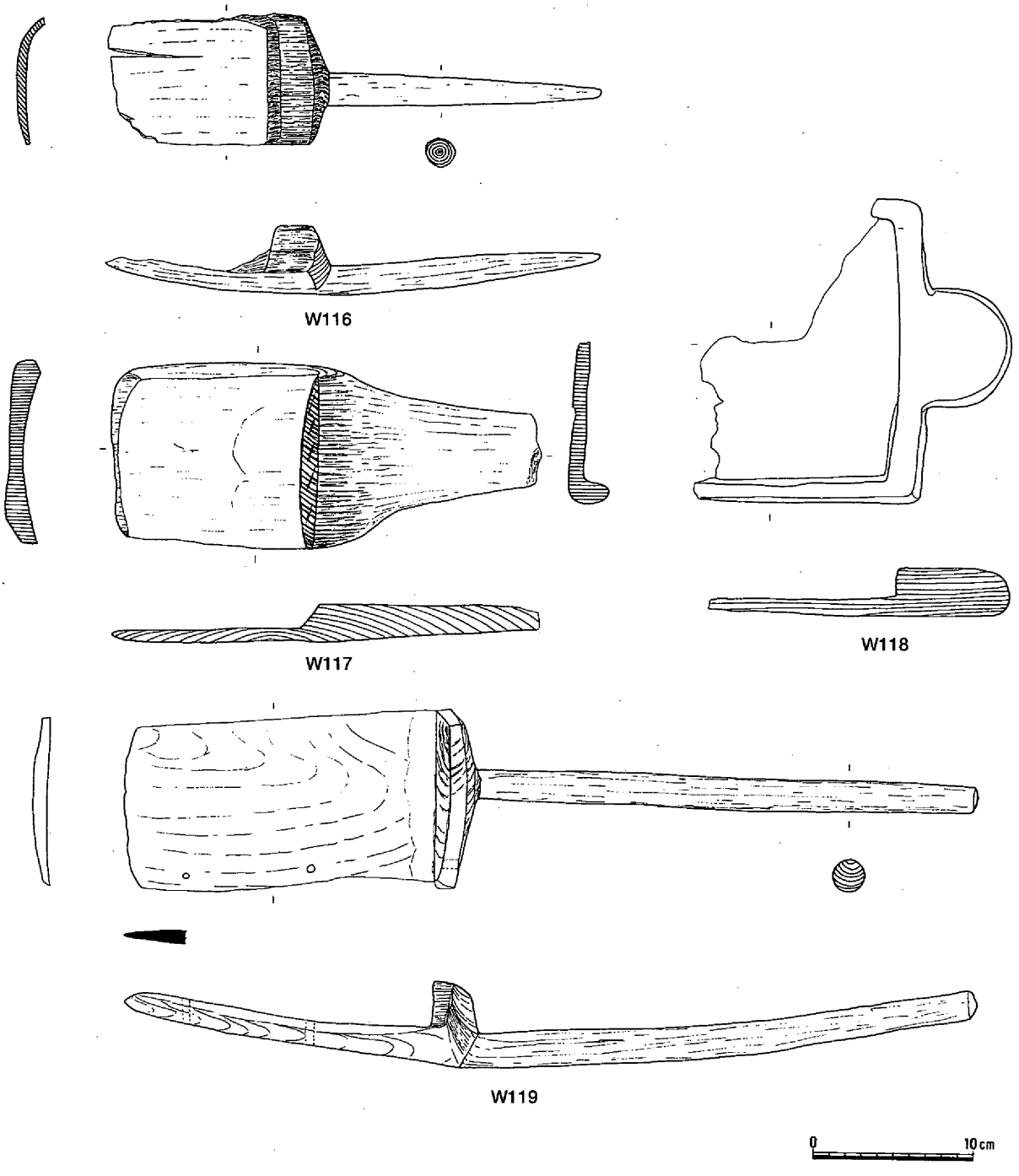
掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W91	部材	18.7+α	11.2	0.3	ヒノキ科	
W92	加工材	20.4+α	2.4	2.5	樹皮	焼けている
W93	部材	23.0+α	8.8+α	0.9～2.4	マツ属複維管束亜属	結バリ痕あり
W94	?	39.0	5.6～2.8	0.8	ヒノキ	方形孔あり
W95	?	32.0+α	2.5×1.1(方)		ヤマグワ	丁寧なつくり
W96	部材	33.3	14.0	2.0	モミ属	



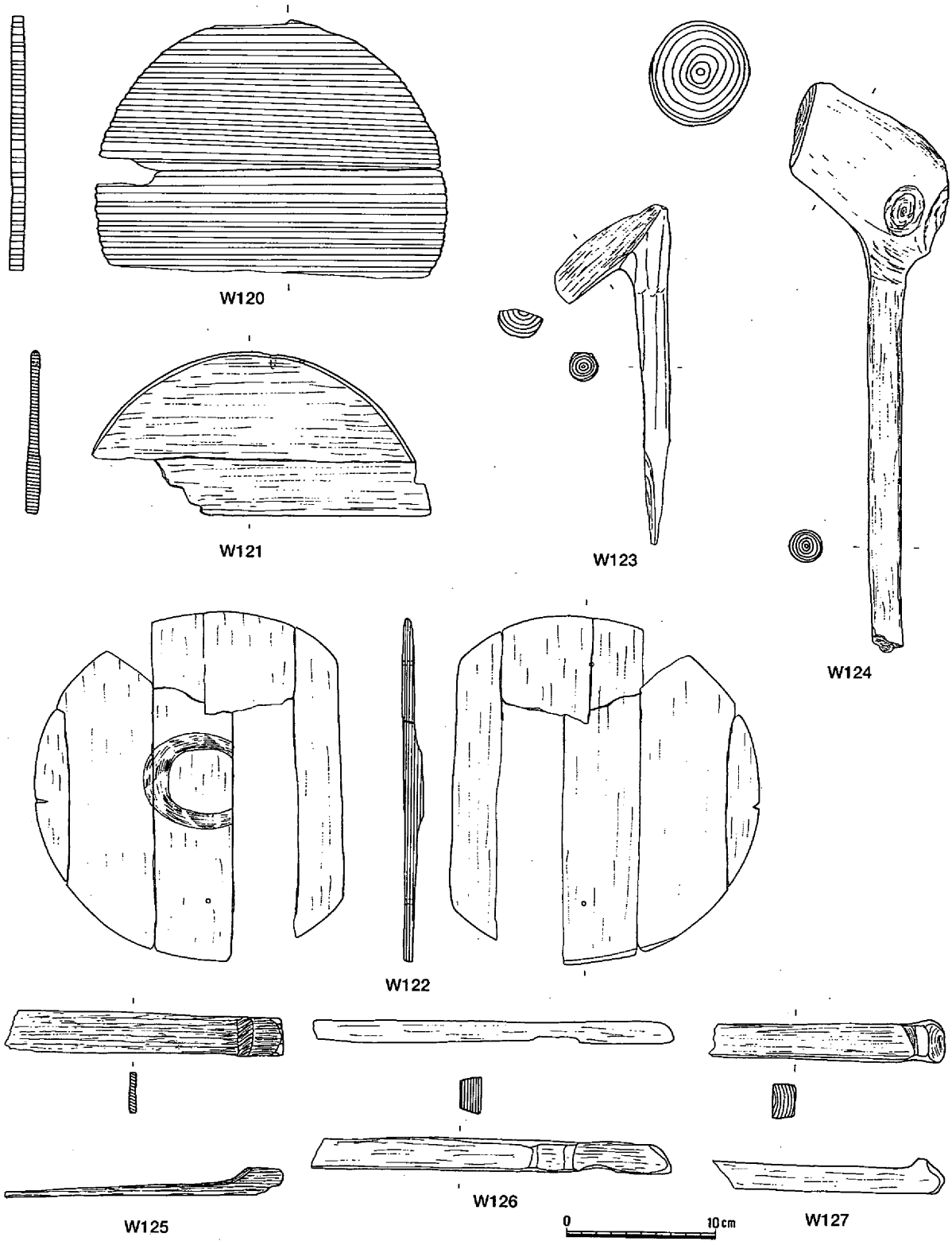
掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W97	横槌	26.9, a 20.9	c 9.4, d 2.6		コナラ属アカガシ亜属	
W98	横槌	26.5, a 15.5	c 6.6×5.4, d 2.7			舘は丁寧に仕上げられている
W99	横槌	36.0+α, a 22.2+α	c 5.4~4.4, d 2.8		マキ属	
W100	横槌	21.1+α	c 5.6×5.1(円)		ヤブツバキ	
W101	横槌	27.0, a 13.7	c 4.2×2.6~3.8, d 1.7~2.1		ケヤキ	
W102	横槌？	18.8+α, a 12.8+α	b 6.0, c 4.1×2.8, d 3.0×2.2		散孔材	
W103	横槌	26.9+α, a 11.5	c 6.0, d 2.5		クスノキ科	



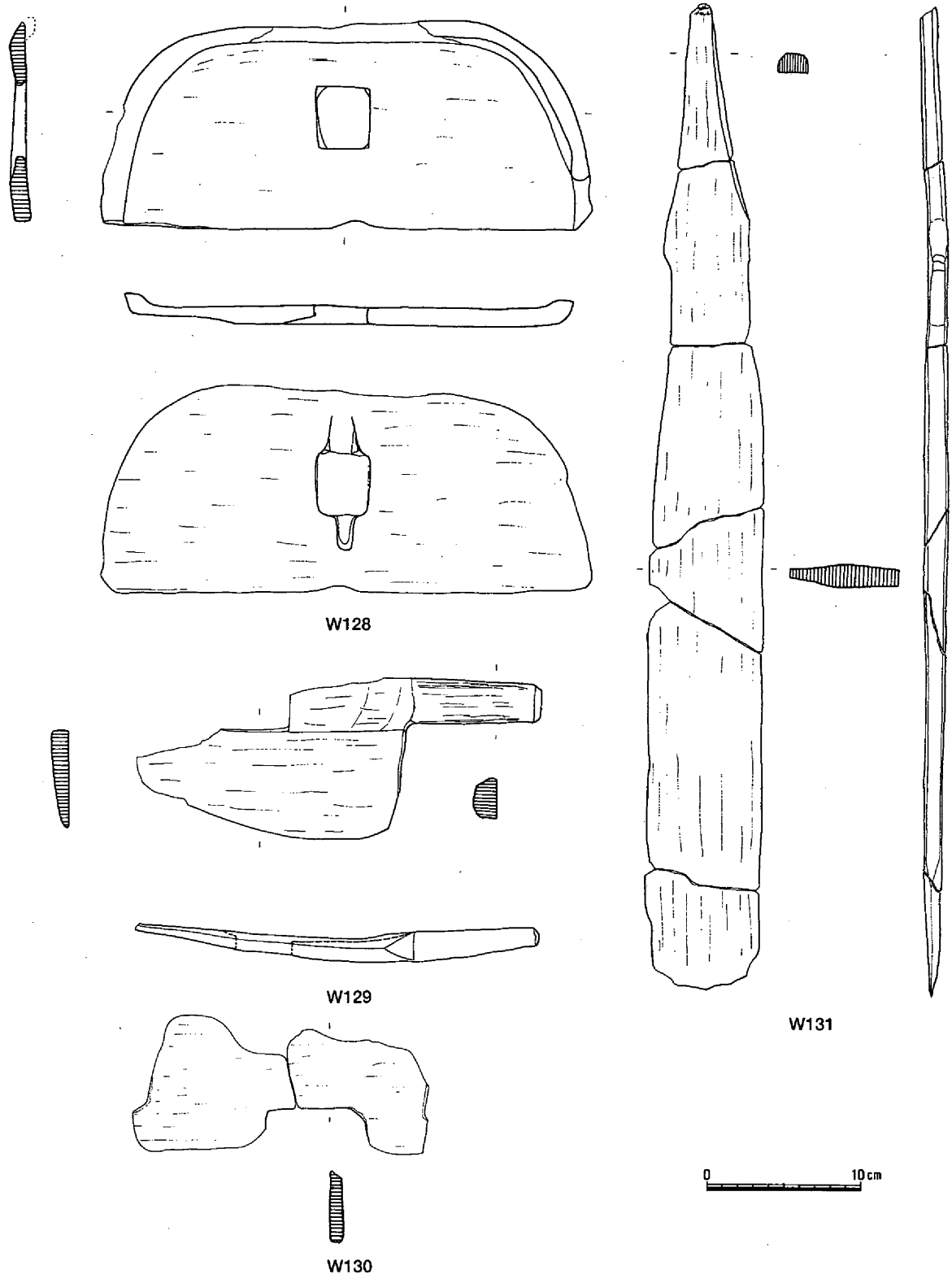
掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W104	横槌	18.6+α, a 16.8	c 7.5×6.0+α			
W105	杵	17.8+α	c 6.2	d 4.0?	ヤブツバキ	
W106	有頭棒	29.2+α, 4.0, b 5.0, c 11.0	4.0×5.6, d 4.2×4.9, e 2.9×3.3		シイ属	抉り 2ヵ所
W107	有頭棒	30.0+α, a 3.0, b 9.5, c 14.0	3.4, d 3.0×3.2, e 2.5		サカキ	抉りあり
W108	有頭棒	22.6+α, a 3.5, b 5.0, c 13.0+α	4.6, d 3.6×3.8, e 2.7×3.0		シイ属	抉りあり
W109	有頭棒	26.9+α, a 3.0	3.1×2.6, d 2.0, e 2.0		ヒサカキ属	
W110	有頭棒	11.4+α, a 2.1, b 3.0, c 6.0+α	7.5, d 3.0～4.0, e 2.5×3.0			抉りあり
W111	有頭棒	13.3+α, a 4.0, b 6.0, c 3.0+α	3.4, d 3.5, e 2.0			抉りあり
W112	有頭棒	9.0+α, a 3.0	3.2, d 3.2, e 2.0		ヤブツバキ	抉り?
W113	有頭棒	22.0+α, a 2.0	3.0, d 3.5, e 2.0			
W114	木錘(編錘)	10.2	4.5×4.0		ケヤキ	
W115	木錘(編錘)	13.6, a 1.1	8.5			



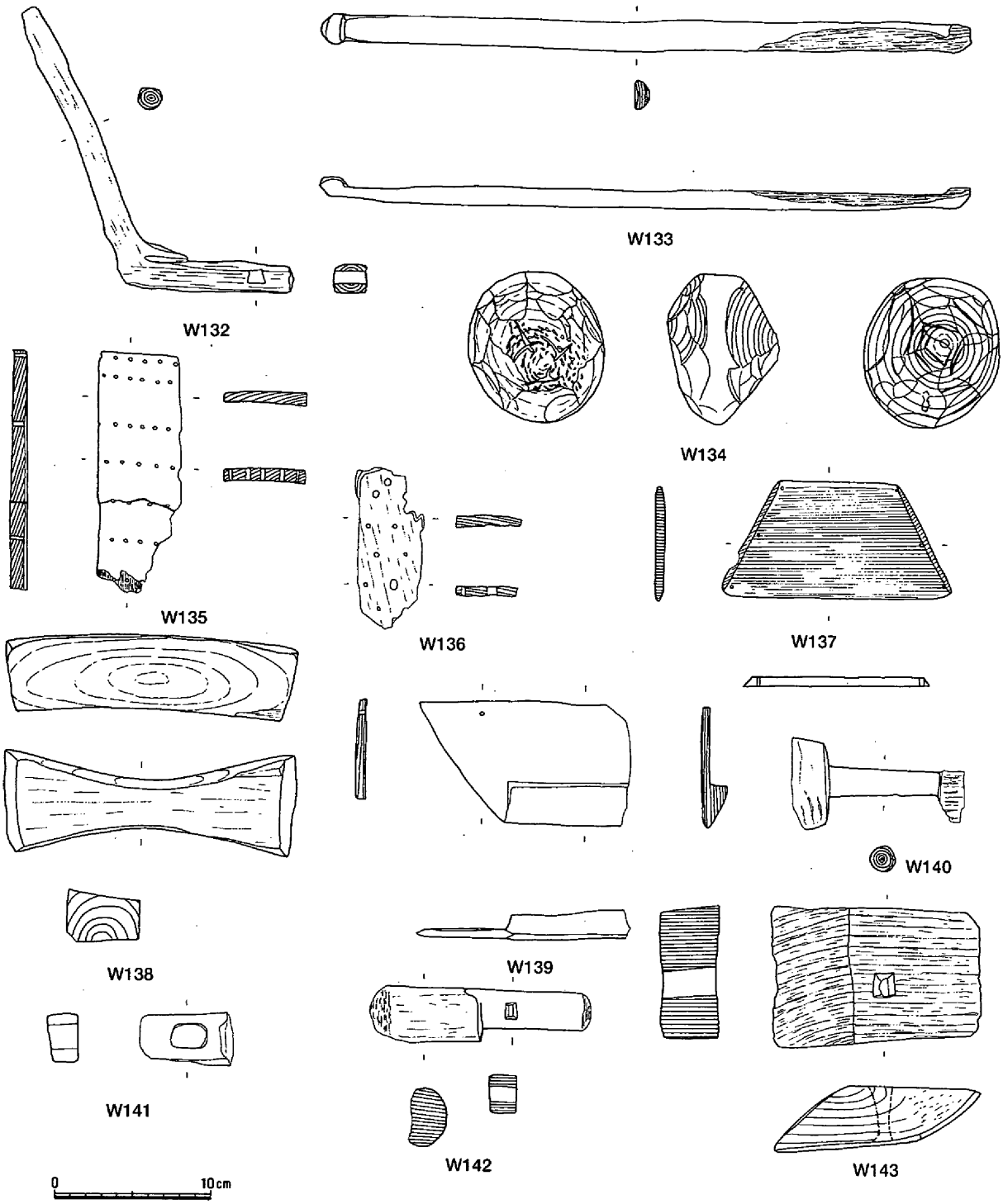
掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W116	すくい具	31.0+α, a 14.0+α	c 8.0+α, d 2.6	0.6		
W117	すくい具	27.2+α, a 13.0, b 13.9+α	c 11.3	1.0～21	モミ属	
W118	すくい具	18.5+α, a 14.5	c 18.8, d 7.2			
W119	すくい具	53.3, a 22.3	c 10.5+α, d 2.0		ヒノキ	孔あり



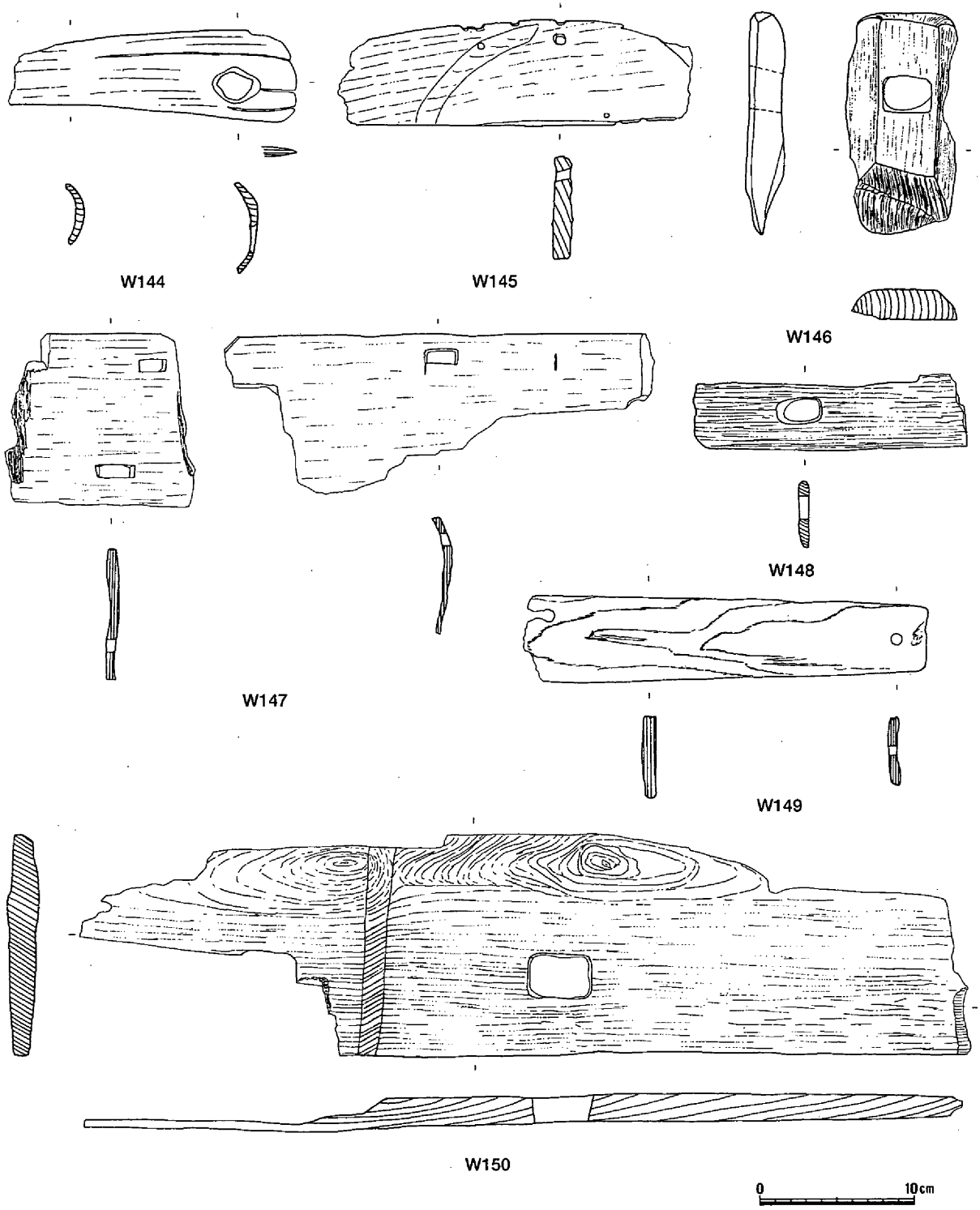
掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W120	底板		23.3×15.5+α	0.9	ヒノキ科	
W121	底板	22.5+α	22.5+a×10.9	0.6~0.8		
W122	底板	23.0×20.5	23.0×20.5	0.5		裏面に凸部
W123	柄	a 22.8+α, b 9.5+α	c 1.8, d 2.0			
W124	槌	37.8+α	頭6.3×7.0　柄1.2	1.2	マツ属複維管束亜属	縁に凸部あり
W125	部材	18.5+α	2.7	0.5	針葉樹	
W126	加工材	24.0+α	2.4	1.4	コウヤマキ	
W127	柄	15.7+α	2.2	1.5	ヤマグワ	



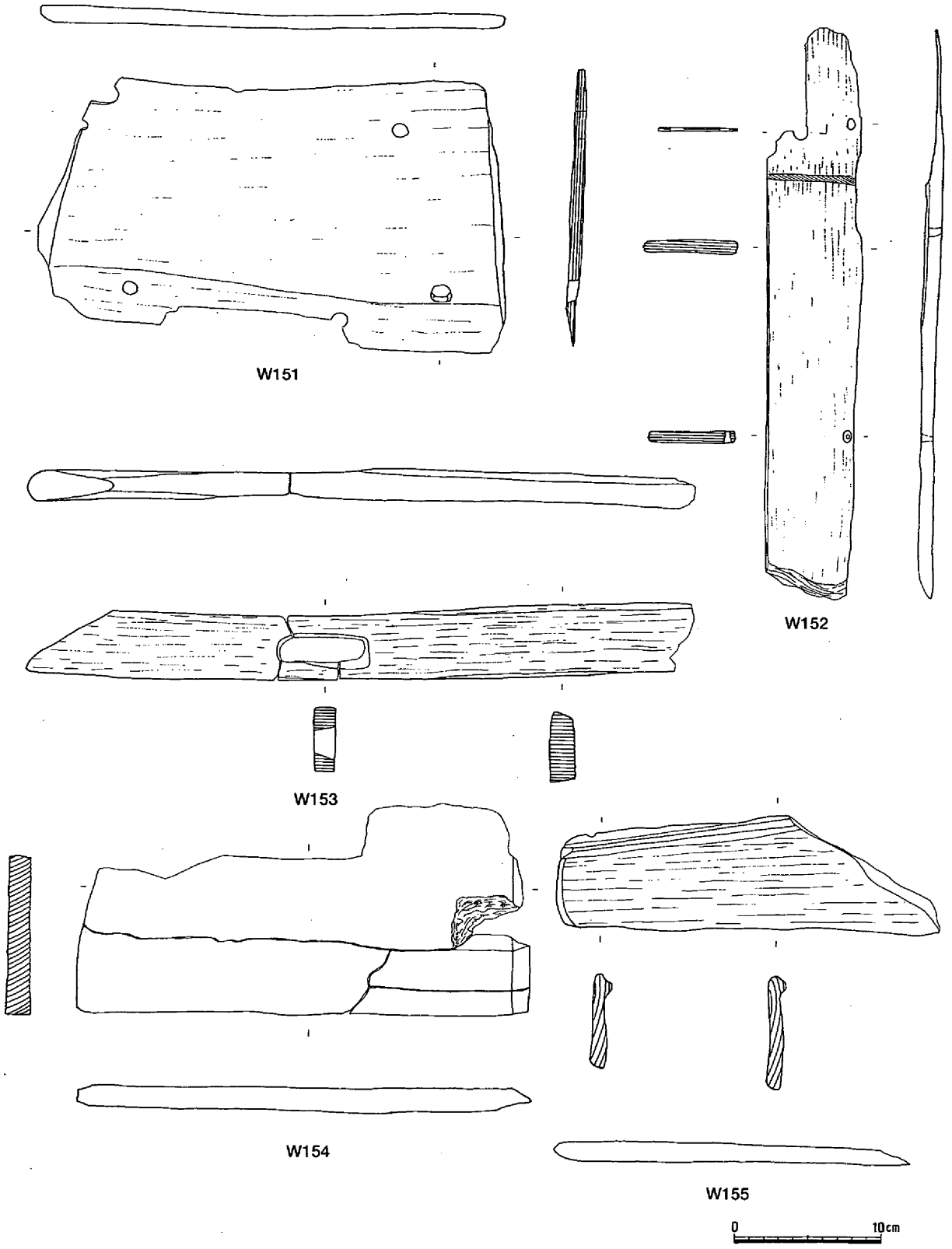
掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W128	さらえ	31.0	13.4	1.2	コナラ属アカガシ亜属	方形孔あり
W129	鋤	26.5+α, b17.7+α, a8.8		g1.4, f1.5(カマボコ)	コナラ属アカガシ亜属	身に孔
W130	鋤	8.6+α	19.8+α	1.0	コナラ属アカガシ亜属	
W131	鋤(なすび)	63.8+α, b47.8	d7.2, c5.5+α	e, f1.4	コナラ属アカガシ亜属	肩あり



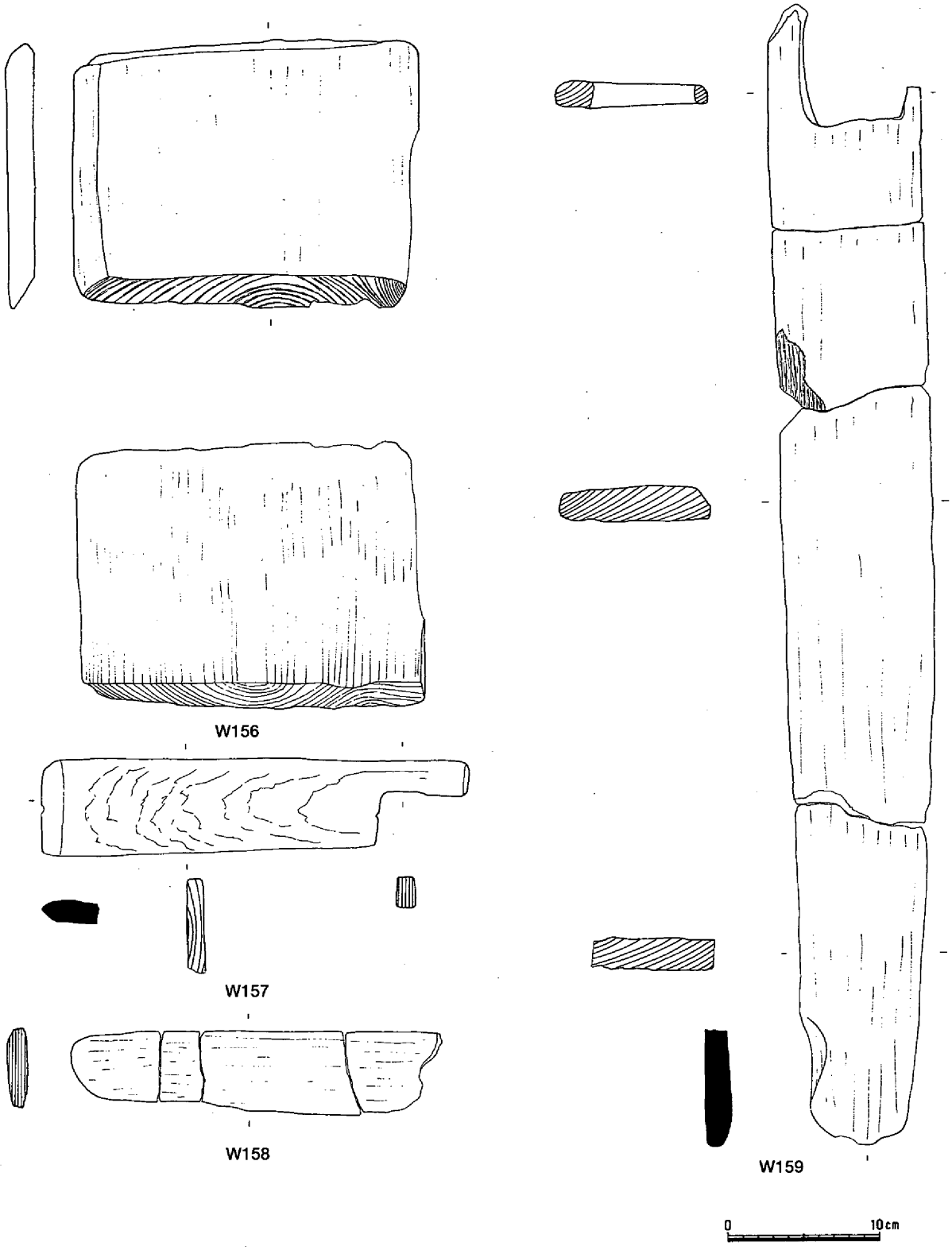
掲載番号	器種	法量(cm) 長さ	幅・径	厚み	樹種	備考
W132	柄	a 18.0+α, b 10.4	c 1.5(円), d 1.9×1.5(方)		ヒノキ科	ほぞ穴 (0.8) (方)　柄長16.2+a
W133	?	41.4	1.8	1.1		
W134	?	7.3	9.6×8.7		イヌガヤ	
W135	短甲	15.5+α	5.2+α	0.8	モミ属	
W136	短甲	10.5+α	4.5+α	0.7	モミ属	
W137	四方ころびの箱	14.9	7.5	0.6	ヒノキ	両端に小孔各３ヵ所
W138	加工材	18.8	2.6～6.2	4.8		
W139	部材	13.6	8.0	0.7	コナラ属アカガシ亜属	小孔あり
W140	加工材	11.1+α				
W141	加工材	6.0+α	3.3	2.1		ほぞ孔
W142	加工材	14.2+α, 柄7.2+α	柄2.5×1.8(方)		サカキ	柄にほぞ孔(方形)
W143	加工材	13.6	4.0	3.4	ヒノキ科	孔あり



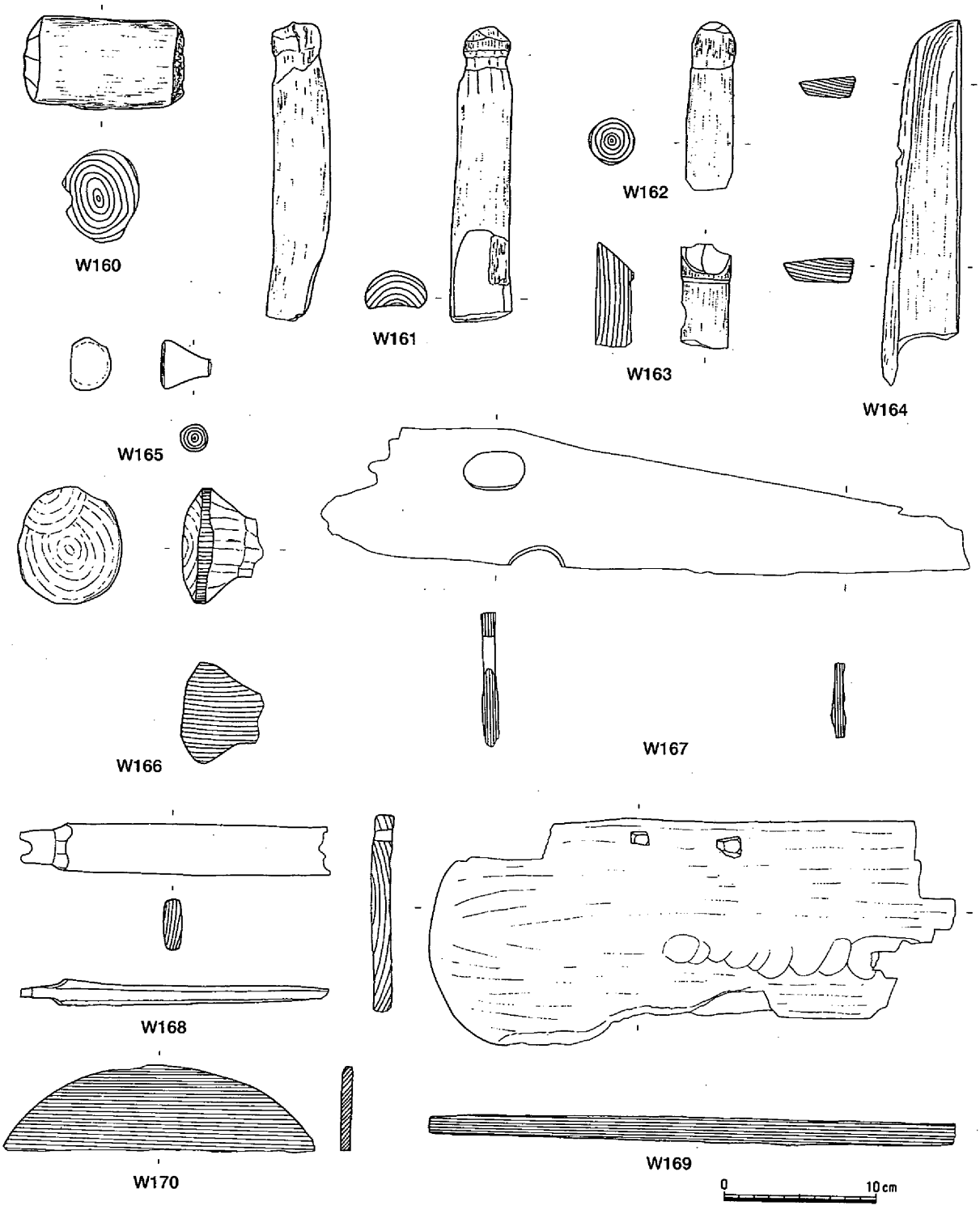
掲載番号	器種	法量(cm) 長さ	幅・径	厚み	樹種	備考
W144	加工材	18.8+α	5.8~4.0	0.7	マツ科	円形孔あり
W145	加工材	23.1+α	6.8	1.2	モミ属	孔あり
W146	平鍬？	14.3	7.0	2.0	コナラ属アカガシ亜属	方形孔あり
W147	部材	38.0+α	11.2+α	0.5	コナラ属アカガシ亜属	3ヶ片　孔3個(方形)
W148	部材	17.7+α	4.4	0.7	ヒノキ	隅丸方形孔あり
W149	部材	26.1+α	5.4+α	0.9+α	ツガ	円形孔あり(2ヵ所)
W150	部材	57.6+α	14.3+α	2.0	ヒノキ科	方形孔あり(2ヵ所)



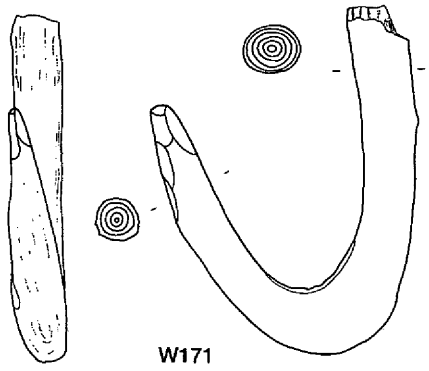
掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W151	田下駄	31.3+α	18.2	0.9～1.1	ヒノキ	孔あり
W152	部材	39.0+α	6.3	1.0～0.2	スギ	円形孔あり(3ヵ所)
W153	部材	45.0+α	4.8	1.7～0.8	シイ属	孔あり
W154	部材	33.0	14.2	1.6	シイ属	
W155	すくい具	26.3+α	7.7	1.0	ムクノキ	



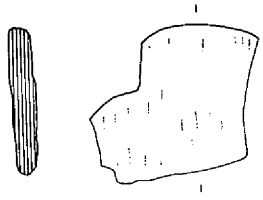
掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W156	加工材	17.6	23.7	2.0	ツガ	一部焼けている
W157	部材	28.7+α	6.2+α	1.1	ヒノキ	
W158	部材	24.9+α	5.5	1.4	コナラ属アカガシ亜属	
W159	部材	75.6+α	9.9	2.3	シイ属	孔あり



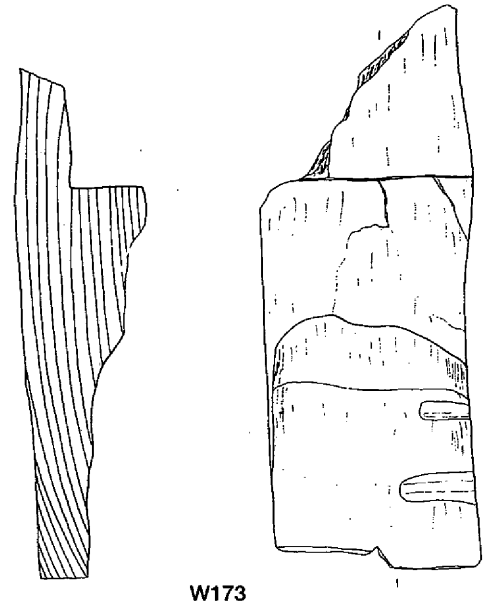
掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W160	横槌	a 10.2	c 6.0×5.0+α, d 1.6～1.4			
W161	有頭棒	19.6+α, a 2.0, b 10.6, c 5.7+α	3.8, b 3.0, e 2.5			
W162	有頭棒	11.1+α, a 3.0	3.0, b 2.7, e 2.5			
W163	有頭棒	6.9+α, a 2.4	2.2, d 2.2, e 2.4			
W164	加工材	29.0+α	4.5～3.6	1.6～1.4		孔あり
W165	加工材	3.3+α		3.4		
W166	当て具	5.2+α	6.6+α			
W167	部材	42.3+α	8.8+α	1.0		円形孔あり
W168	部材	20.3+α	3.3	1.7～0.8		円形孔あり
W169	部材	34.5+α	14.5+α	1.5		方形孔(2ヵ所) あり
W170	曲げ物底板		20.0+α×5.6+α			



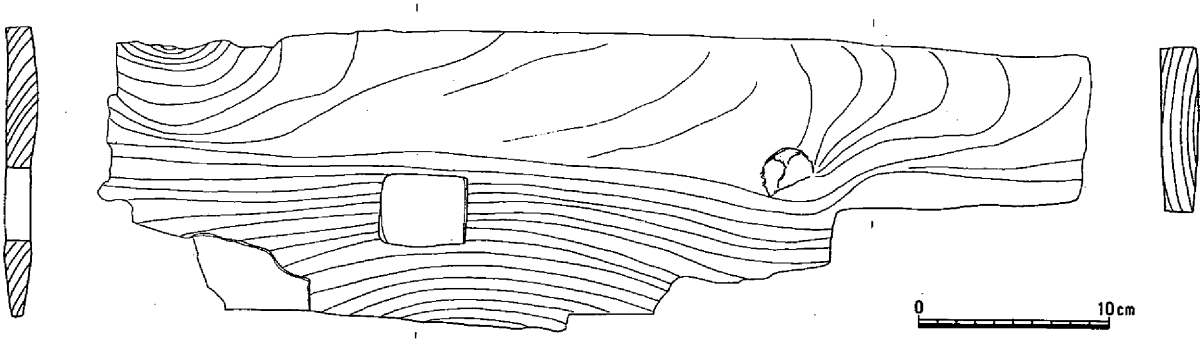
W171



W172

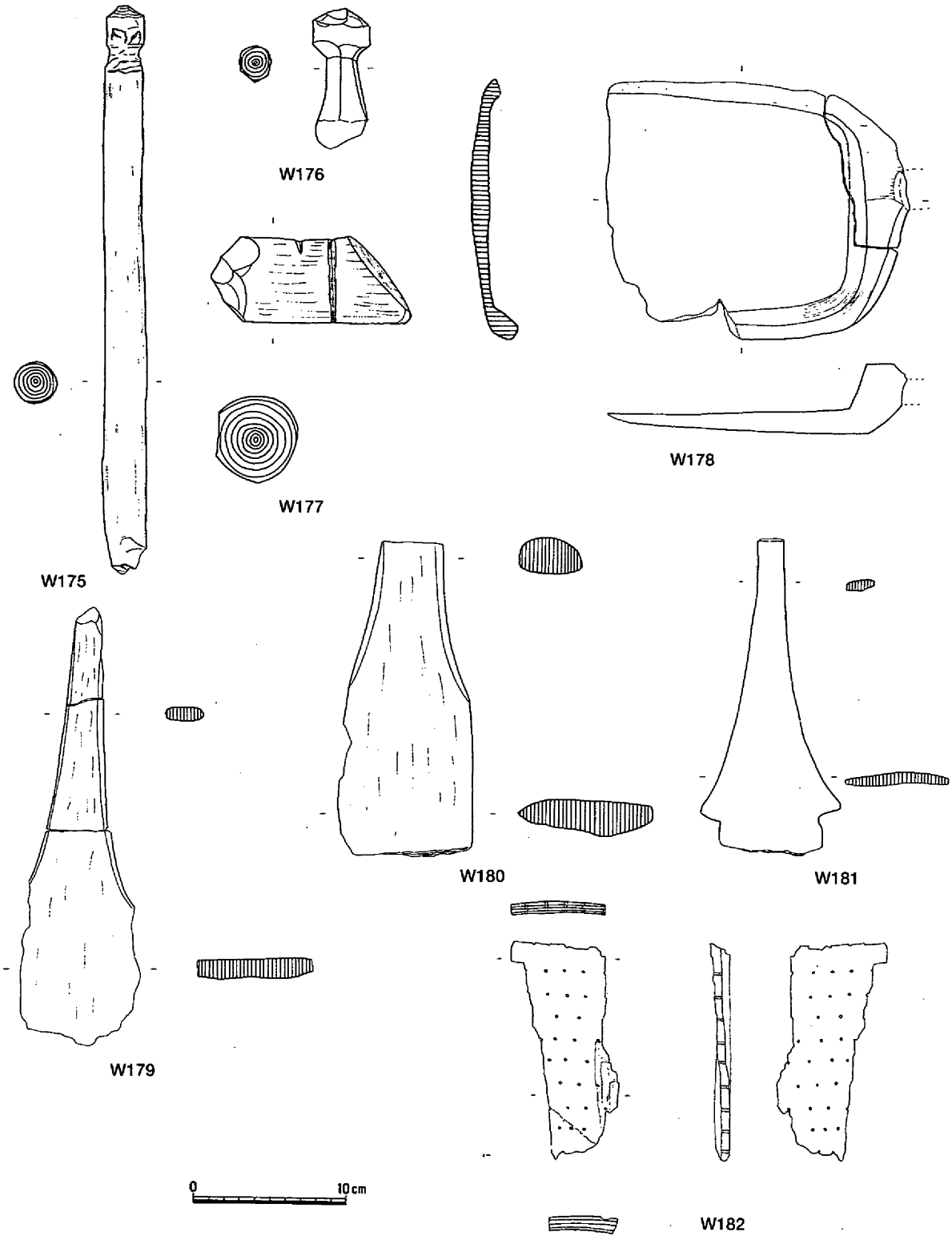


W173

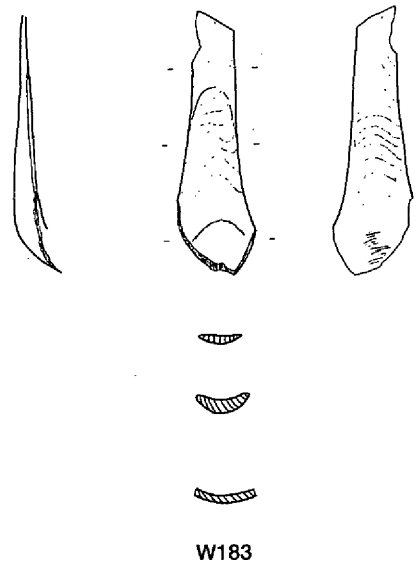


W174

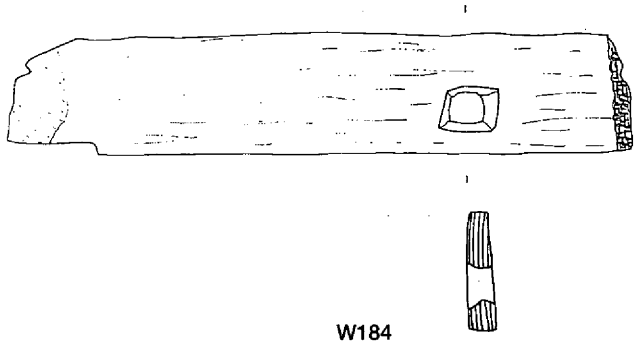
掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W171	部材	18.4	3.0			
W172	部材	8.0+α	9.0+α	1.2		
W173	梯子		11.0	2.6～6.7		
W174	部材	52.3+α	15.2	1.6	アカマツ	方形孔あり



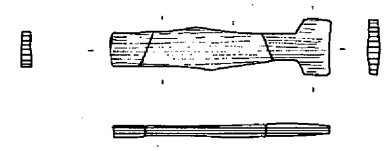
掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W175	有頭棒	47.7+α, a 2.6	2.8, d 2.5, e 1.8		ツガ	
W176	有頭棒	9.3+α, a 3.0	d 3.6, e 2.1×1.9		コナラ属アカガシ亜属	焼けて失う
W177	編錘？	13.2, a 0.4	5.5		ムクノキ	
W178	すくい具	a 20.0	c 17.0, 柄欠	1.0	コナラ属アカガシ亜属	
W179	鋤柄(なすび)	20.0+α	c 7.8+α	e, f 1.2	コナラ属アカガシ亜属	
W180	鋤(なすび)	20.8+α	c ?8.7	2.3	コナラ属アカガシ亜属	
W181	鋤柄(なすび)	21.2+α, b 18.0	柄の先1.7, c 9.0	0.9+α		
W182	短甲	14.2+α	7.3+α	0.7	モミ属	孔あり



W183



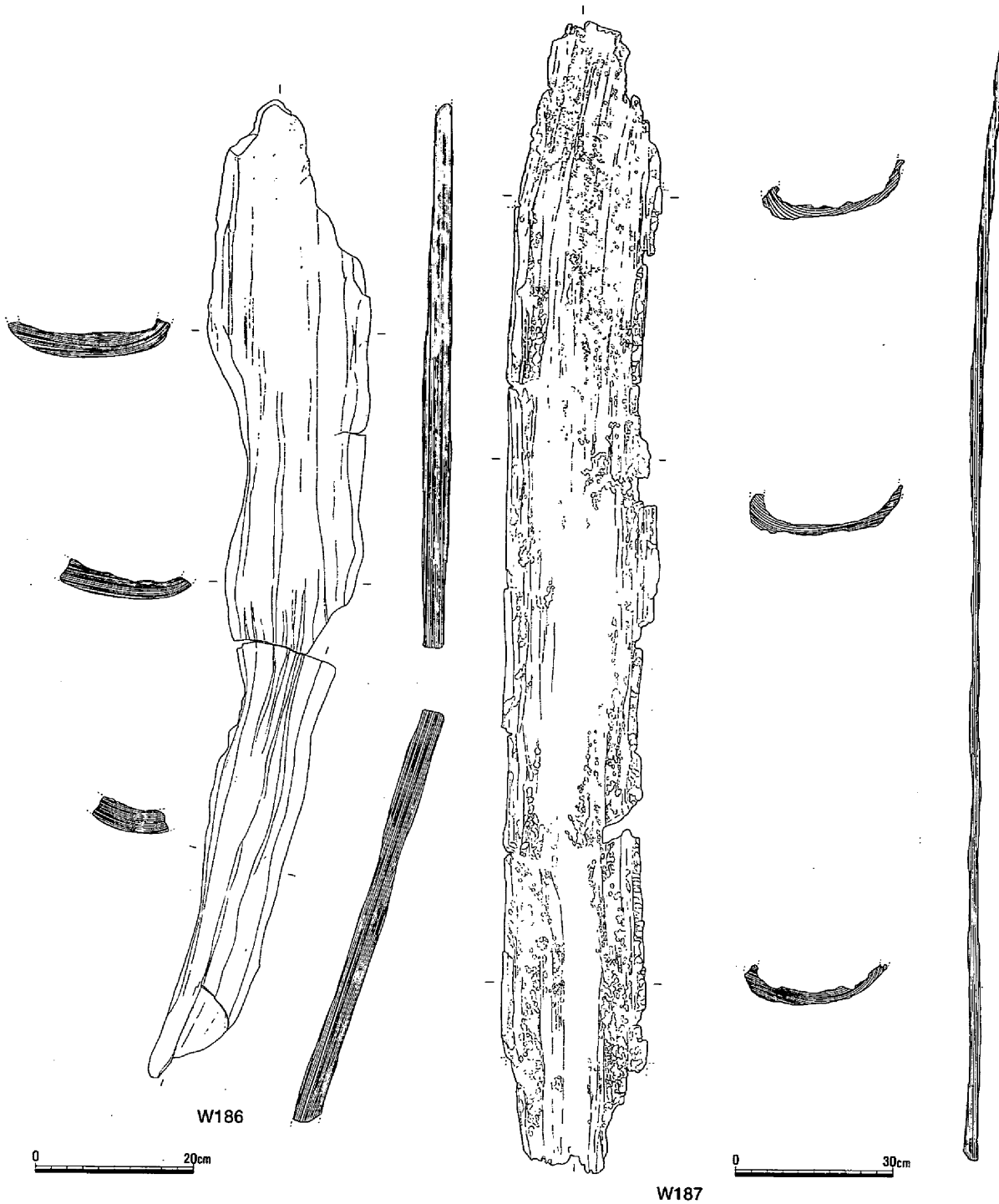
W184



W185

0　10cm

掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W183	匙	13.9＋α	2.2～4.0＋α	0.4～0.6	イヌガヤ	
W184	部材	32.5＋α	6.3	1.4	ヒノキ	方形孔あり
W185	加工材	11.7＋α	2.2	0.5	コナラ属アカガシ亜属	



掲載番号	器種	法量(cm)			樹種	備考
		長さ	幅・径	厚み		
W186	樋？	(104.2)	(20.5)	3.3	広葉樹	
W187	樋？	(219.4)	(29.1)	3.2	シイ属	

木製品のＷ４～W16・W97～W104・W160は横槌で、遺存状態の極めて悪いのも認められる。Ｗ５・W12・W16・W99・W101はかなり使い込まれ、凹んだ部分を形成させる。

W17～W20、W105は竪杵で、W20が完全な形で検出された。いずれの竪杵も搗部と握部の境を細く作っている。なお、W19は両面が使用により著しく凹んでいることから、横槌に転用されたと思われる。

W21～W35・W106～W113・W161～W163・W175・W176は有頭棒で、W21・W22・W24が完全な形として検出された。W21とW22は両端とも、先端を際立たせている。W24は一方の先のみに形を作り、他方は手を加えていない。また、先端の削り出しの調整部分から若干下った位置に抉りを設けているが、W107はかなり下った位置に抉りがある。この抉りは、ほとんどの有頭棒に認められる。

W36・W37・W114・W115・W177は、木錘あるいは編錘とされるものである。前者の２個が紐掛けの溝を、深く丁寧に設けている。

W38～W41・W120～W122・W170は、円板と底板である。W40とW122は、中央部分が厚くなる。

W42は部材で両端は欠失しているが、上面は丁寧に削られ、方形の孔を設けている。

W43～W56・W129～W131・W179～W181は、鋤である。W49は鉄製の刃を装着するための加工がなされている。W54～W56は、組み合わせのタイプである。

W57は鍬で、今回の調査において数少ない出土例である。

W58は、ほぞ穴部分に木が入った状態で検出された。この木が鉄製刃の楔として用いられたと想定された。しかしながら、復元して検討すると楔とするならば、このもの自身でほぞ孔の空間がなくなってしまうのである。このようなことから、楔と考えていたものが刃として用いられたと判断した。

W59は、波を掻く部分は内反りを示すことから櫂とした。W60は、縁に巡る孔から網の枠とした。

W61はW132と形態が同じであるが、前者は抉りだけ、後者にはほぞ孔が設けられている。

W63は完全品であり、先端にはほぞ孔に樹皮が止められている。反り返る形状を呈し、外側には抉り部を設けている。下端は、丁寧に面取りされている。

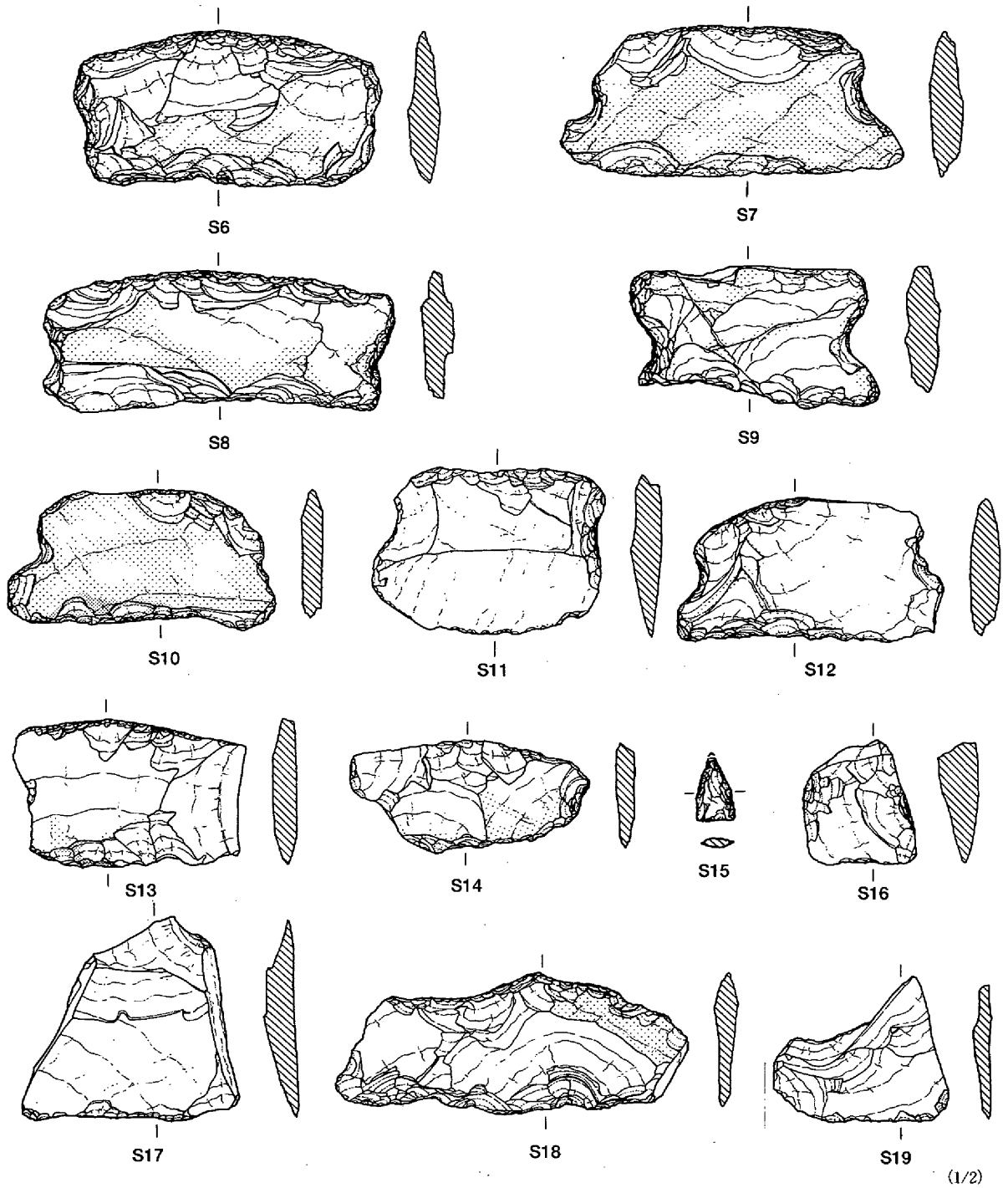
W71・W73とW116～W119・W178はすくい具とされるもので、後者の遺存が良い。W119は身の両側が欠しているがほぼ形態が把握できるものである。

W74～W96・W125・W126・W138～W159・W164～W169・W171・W172・W174・W184・W185は部材あるいは加工材であるが、W146は平鍬、W151は田下駄、W155はすくい具、W166は当て具の可能性が考えられる。

W135・W136・W182は短甲の小札と考えるものである。W135は左側面が生きていることから、横並びの小孔の延長線上に当る側面には紐の圧痕で生じた凹みが観察される。W182には、小孔を通した状態で表裏に丹が認められる。

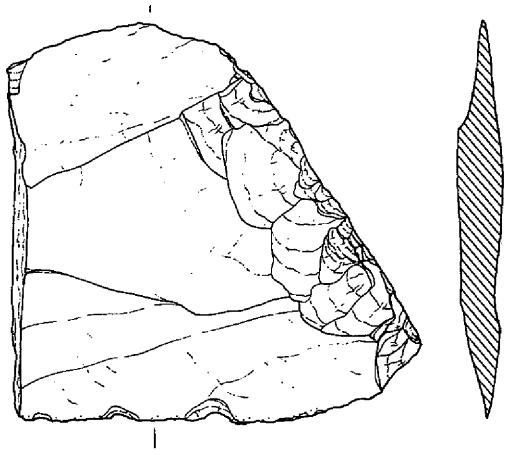
W186・W187は検出時において舟としていたが、復元と作図の過程で舟にしては幅が狭く人が乗るには疑問が生じた。他の用途を検討したが、現在のところ樋の可能性を考えている。

これらの木器の出土地点は、Ｗ４・７・12・13・27・33・35・36・42・43・80・82・83・87・97～159・173は第４図の第18層からであり、時期も古墳時代に入る。W160～W187は最下層付近からで、その他のものは、その間に出土したものである。

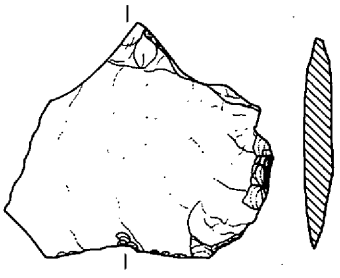


(1/2)

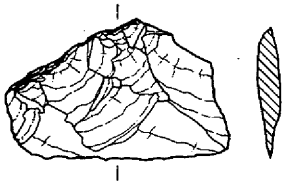
掲載番号	器種	材質	法量(㎜)			重量(g)	特徴・備考
			最大長	最大幅	最大厚		
S６	石包丁	サヌカイト	96.0	49.5	12.0	61.5	
S７	石包丁	サヌカイト	108.5	48.0	11.5	61.3	
S８	石包丁	サヌカイト	110.5	45.0	10.5	71.3	
S９	石包丁	サヌカイト	76.5	45.5	12.0	44.2	
S10	石包丁	サヌカイト	84.0	45.5	8.5	37.3	
S11	石包丁	サヌカイト	73.0	53.0	10.0	49.0	
S12	石包丁	サヌカイト	84.5	46.0	12.0	45.4	
S13	石包丁	サヌカイト	73.0	47.0	11.0	42.8	
S14	石包丁	サヌカイト	75.5	36.0	6.0	20.8	
S15	石鏃	サヌカイト	20.0	12.0	3.2	0.7	
S16	スクレイパー?	サヌカイト	36.5	40.0	13.5	19.0	欠損後調整　楔に使用？
S17	スクレイパー	サヌカイト	69.0	65.0	10.0	43.8	
S18	スクレイパー	サヌカイト	112.0	45.0	8.5	40.8	
S19	R．F	サヌカイト	56.0	46.5	6.2	12.7	



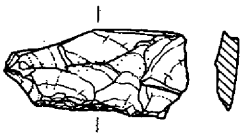
S20



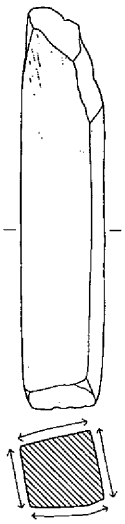
S21



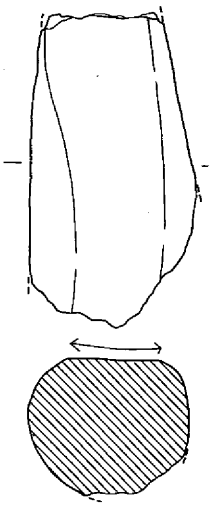
S22



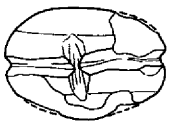
S23

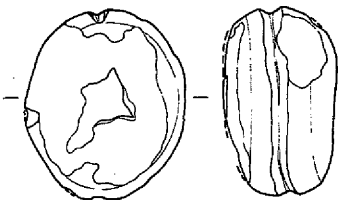


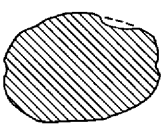
S24　(1/3)



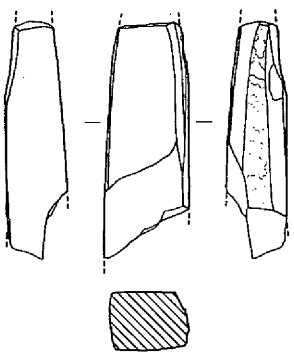
S25



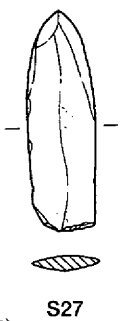




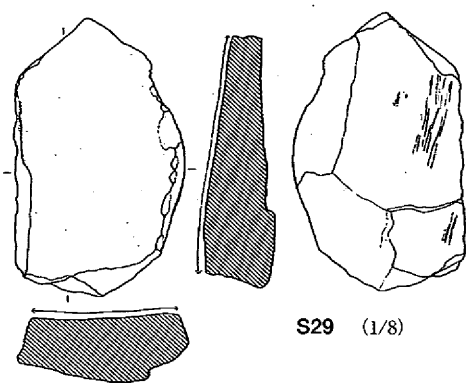
S28



S26

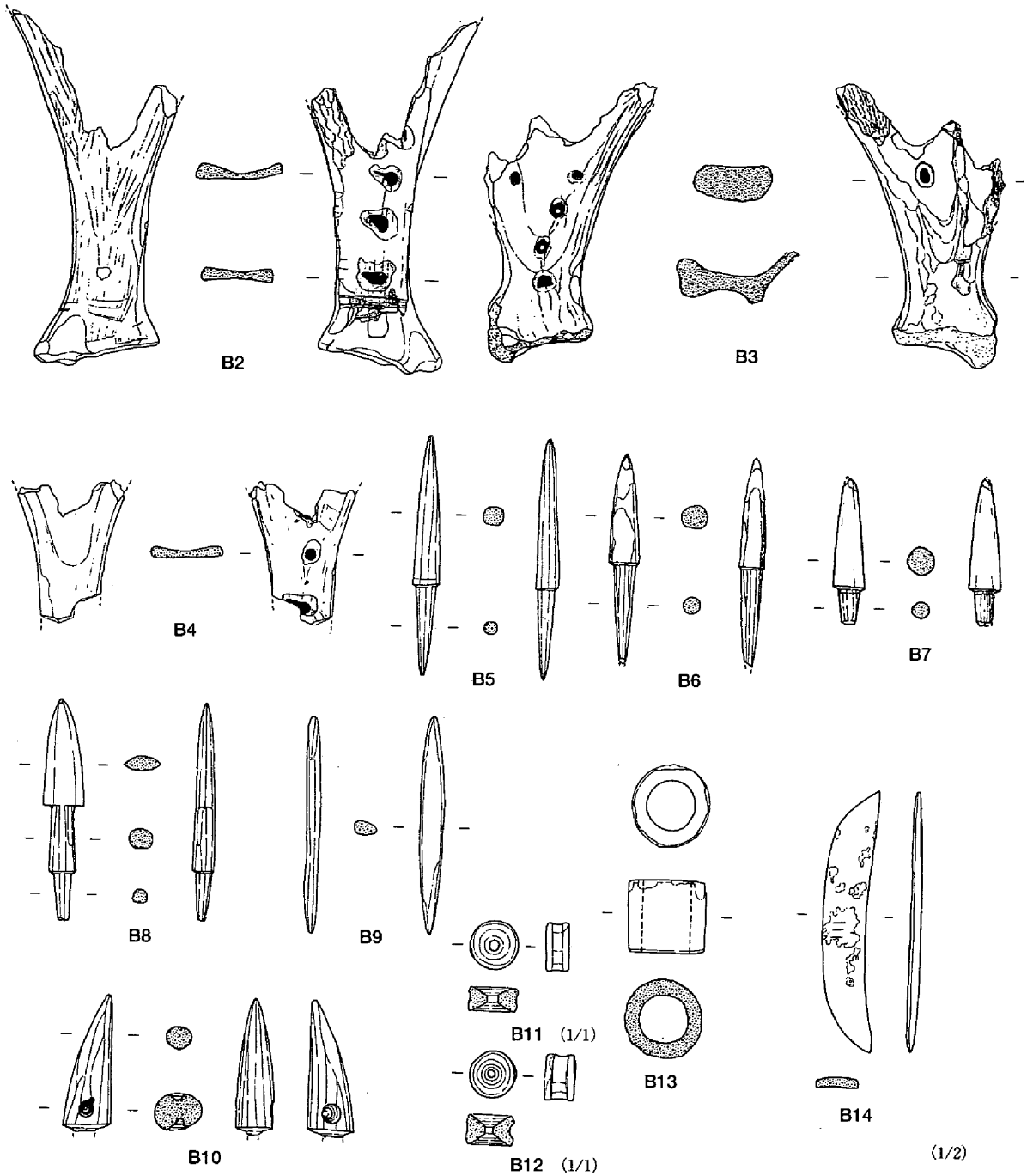


(1/2)　S27



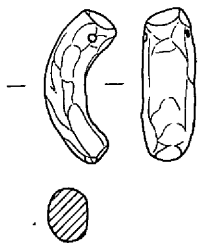
S29　(1/8)

掲載番号	器種	材質	法量(mm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	特徴・備考
S20	スクレイパー	サヌカイト	106.0	109.0	11.5	165.8	
S21	〃	サヌカイト	70.0	62.5	8.0	34.2	
S22	R．F	サヌカイト	58.5	37.5	7.0	13.5	
S23	スクレイパー	サヌカイト	47.5	23.5	6.5	8.0	
S24	砥石	流紋岩(溶岩)	161.5	43.5	31.0	277.7	
S25	砥石		84.0	44.0	49.0	177.6	
S26	不明		62.5	22.5	16.0	34.6	
S27	磨製石鏃		58.0	18.0	4.0	5.2	
S28	石錘		50.0	42.0	30.0	84.0	十字に紐掛け部あり
S29	砥石		295.0	190.0	71.0	504.0	

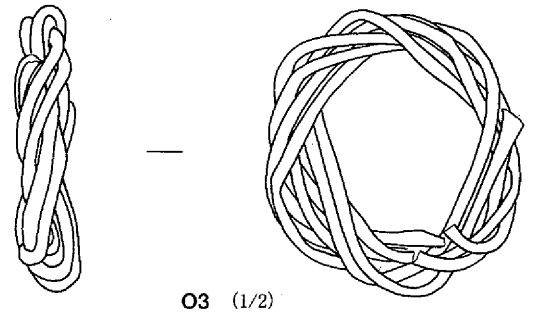


掲載番号	器種	材質	法量(mm)			重量(g)	特徴・備考
			最大長	最大幅	最大厚		
B2	卜骨	鹿の肩甲骨	109.0	50.5	28.0	15.8	中心部が黒く周囲は茶褐色になっている 4ヵ所焼灼痕　ケズリ
B3	卜骨	鹿の肩甲骨	87.0	52.5	22.0	23.2	外測線に１・内側線に５個の焼灼痕
B4	卜骨	鹿の肩甲骨	(44.5)	(32.0)	(4.5)	2.8	全体をきれいに磨いている　3ヵ所焼灼痕
B11	輪鼓状耳飾	エイ頬相体	7.5	15.0		1.0	
B12	輪鼓状耳飾	エイ頬相体	9.5	14.5		1.0	
B13	管玉	骨	22.7	24.0		11.7	内径15.0×15.5
B14	ヘラ	鹿の骨(角幹部)	81.0	16.0	3.5	4.8	

掲載番号	器種	材質	法量(mm)						重量(g)	特徴・備考
			身長	身最大幅	身最大厚	茎長	茎最大幅	茎最大厚		
B5	骨鏃	鹿の角	78.0	8.1	7.0	27.8	6.0	5.0	3.0	髄の部分が露出ミガキが及んでいない
B6	骨鏃	鹿の角	68.0	9.2	8.0	(40.2)	6.5	6.5	3.5	髄の部分が露出ミガキが及んでいない　制作部分あり
B7	骨鏃	鹿の角	(46.0)	9.7	9.5	(11.0)	6.0	6.0		両端一部欠損
B8	骨鏃	鹿の角	67.5	12.5	6.3	(14.2)	5.0	5.0	4.0	身部二段　髄が露出ミガキが及んでいないのか欠損
B9	骨鏃	鹿の角	67.0	7.5	4.2				2.2	茎部なし
B10	骨鏃	鹿の角	45.0	14.0	6.0	(1.0)	7.0	4.8	5.7	2ヵ所穿孔（未貫通4.3×4.3・5.5×6.0）



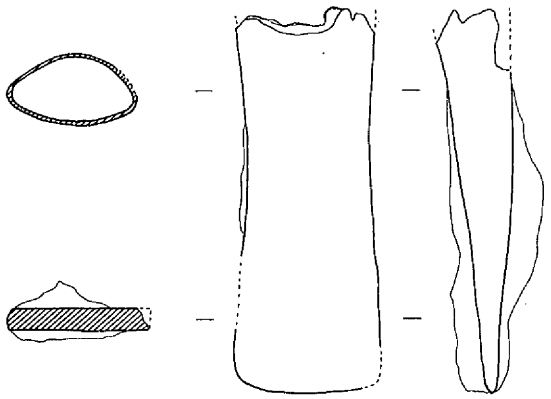
O2 (1/2)



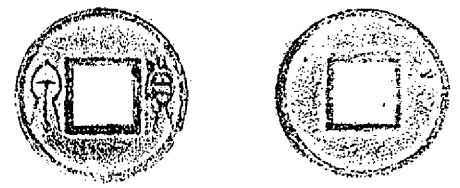
O3 (1/2)

掲載番号	器種	材質	法量(mm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	特徴・備考
O2	勾玉(土製品)		41.0	12.0	14.0	8.6	

掲載番号	器種	法量(cm) 長さ	幅・径	厚み	樹種	備考
O3	腕輪？	7.5	6.7	2.1(蔓の太さ0.25～0.40)		蔓を3本絡ませている



M1 (1/2)



M2 (1/1)

掲載番号	器種	材質	法量(mm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	特徴・備考
M1	鉄斧	鉄	(102.2)	(38.3)	(19.3)	66.3	
M2	貨幣	銅	22.91		1.55	2.5	貨泉

石製品はS6～S29で、S6～S14が石包丁である。S14は両側の抉りがなく、S11は自然面を残している。いずれの刃部にも、珪酸の付着が認められている。また、S6～S8・S10・S12・S13は、背部に敲打を行っている。S15は平基式の石鏃で、先端がわずかに欠失している。S16～S18・S20・S21・S23はスクレイパーであるが、S16は欠損したときに楔に転用したと思われる。また、S18は背部、S20には刃部に珪酸が付着している。S19とS22は加工痕有剝片で、S22の背部には自然面を残している。S24・S25・S29は砥石で、S26は石斧の転用の可能性もある。S26の右側面は、両側から溝を切った状態であるが外側部分は欠失し、他の3面は磨かれている。S27は、磨製石鏃とである。S28は溝を持つ石錘である。

骨角製品はB2～B14で、B2～B4は卜骨である。B2は肩甲棘部分をその基底部から削り取り、肩甲骨の全体を関節部を別にし、平らな板状のものに仕上げている。このために頸部には、深い切り込み、および後縁後にはカット面が顕著に認められる。灼痕は、肩甲棘の削り後に縦に並ぶように4ヵ所認められる。灼痕の中心部が黒く、周辺は茶褐色に変色している。肩甲頸に近い灼痕は、内側の面

には、剝離した部分が認められる。B3は肩甲棘は、低く削られている。灼痕は外側の棘上窩に1ヵ所と内側に4ヵ所が認められる。B4は肩甲棘を削り取るとともに内側も平坦に削られ、平坦な板状に仕上げられている。灼痕は肩甲棘に沿うように3ヵ所認められる。

B5～B9は骨鏃で、B9を除き有茎式である。B5とB6は円錐状の身で長めの茎を持ち、B7は短い茎となる。B8は茎が2段となり、B9は凸基状の形態を呈する。

B10は鏃と想定したが、両側からの穿孔は未貫通で終わっている。茎はこの穿孔途中で欠損したものと思われることから、鏃以外の用途が考えられる。

B11とB12はエイ類相体の輪鼓状耳飾りで、B13は管玉状の骨製品である。

B14は、鹿角の角幹部を用いた丁寧に作られたヘラである。

骨角製品の出土層は第7図の第18層からの出土がB9、最下層および基盤層に接して認められたのはB3・4・6・8・10であり、その他はその間の層から検出されている。

O2は土製勾玉である。O3は腕輪と考えられるものである。樹種は分析に出したが、保存状態が悪く観察が困難で、散孔材の同定にとどまっている。一本の太さは0.35cmを測るもので、3本を元として輪にしている。この出土層は、第7図の第18層からである。

M1は鉄斧で、袋部には木質が遺存している。袋部分の接合は、現状では認められていない。M2は貨泉である。出土層はM1が最下層から、M2は第26図に示した位置で第11図の第43層の暗灰色粗砂から検出されている。（下澤）

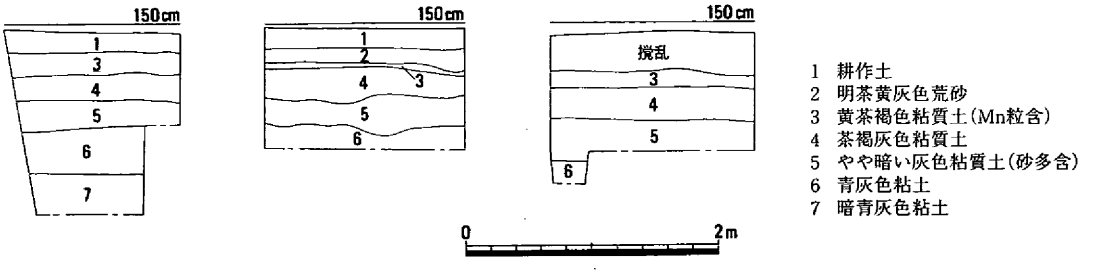
3　Ⅱ区の調査

Ⅱ区は第一次調査のグリットのT18～T21(第１章第１図)に相当する地区で、T21で微高地斜面の弥生時代から古墳時代の包含層を確認している。しかしながら、T18～T20においては、上層は近世から現代以降と考えられる水田層であり、下層は粘土とシルトの堆積で遺構、遺物は認められていなかった。このような結果を踏まえ、先のグリット設定間の中央やや西寄りに長さ125m、幅1mのトレンチを設け、再度この地区についての調査範囲の確定を行った。

現水田面の標高差は南端寄りで145cm、北側で157cmを測ることから、北側が高い傾向にあることが判断できる。調査区の現況は先に述べたように水田であるが、北側の新幹線寄りのグリットT21の水田は排土置き場となり、上層部分はかなり撹乱した状態にあった。

堆積層は第１層が現水田面で、北側の部分を除き認められている。第２層は明茶黄灰色の花崗岩風化土であるが、南寄りに認められた層で自然堆積ではなく水田下の床土として入れられた土と想定される。第３層は黄茶褐色粘質土で、北側の一部を除き認められた。第４層は茶褐灰色粘質土であり、北側を含め堆積が認められた。この層においてはトレンチの中央付近で、弥生後期後半の土器を検出した。このことから、断面を精査したがこの層からの遺物はこの土器だけで、このほか層中には土器と認められる破片さらには細片などは認められなかった。第５層はやや暗い灰色粘質土であり、北側を含め堆積が認められた。第６層は青灰色粘土であり、北側を含め堆積が認められた。第７層は暗青灰色粘土であり、北側を含め堆積が認められた。第６層に比較してこの層はかなり柔らかくなり、重みをかけると沈み込む状態になる。この下層の状態は掘り下げていないので詳細は不明であるが、ボーリングステッキを入れた感じでは砂層の堆積に移行するようである。

以上のように、125m間の土層断面においては土層の水平堆積が認められ、遺構を想定させる変化は認められなかった。また、第４層で認められた土器においても包含層を形成していなかったことが確認された。さらに、第一次調査で認められた北側部分の微高地下がり、およびそれに伴う包含層は検出することができなかった。このようなことから、当初このトレンチ調査の結果を踏まえ全面調査の範囲を確定する考えであったが、この調査で終了することとした。　（下澤）



第34図Ⅱ区土層断面図 (1/60)

第5章　結語

第1節　調査成果の概要

上東遺跡は、昭和の初め以降の田畑の地下げや暗渠排水、そして農業用水工事などに伴って土器片をはじめ多量の遺物が出土することから、大規模な集落址が存在することが想定されてきた。そして、土器が出土する小字名をもとに遺跡群として1963年発行の「全国遺跡地名表(岡山県)」に記載された。それ以前、坪井清足、鎌木義昌らによって出土土器をもとにした編年研究が試みられ、中部瀬戸内地方の弥生時代後期の指標となる「上東式」を位置づけた。

このような遺跡の認識から1972年の山陽新幹線建設に伴う発掘調査[1]において、具体的な姿でその内容が明らかにされたのである。新幹線の路線に沿った調査によって、従前から想定されてきた上東遺跡の東西方向への広がりの様相が明らかにされた。この内容から、東西の遺構の広がりは約500mの範囲で、その中に4つの微高地が存在することが確認された。このことは、1975~1976年に新幹線と平行して都市計画道路建設に伴う調査[2]においても同様の内容を把握することができたが、南北方向への遺跡の広がりを具体的に明らかにするのは今回まで待たなければならなかった。

このようなことから、ここでは今回の調査で明らかとなった内容についての概要を記し、遺構・遺物については第2節以降において述べていく。

上東遺跡の南への広がりは、この都市計画道路建設に伴う調査の時から今回の調査までは新幹線から南に数10m前後の広がりを一般的認識として持っていた。しかしながら、今回の調査においては、新幹線部分から旧2号線(現県道岡山倉敷線)までの1,040m間でも黄褐色基盤層の存在が認められた。遺跡は新幹線から南に650m行った地点で、東西方向の用水を境に字名が下庄となることで下庄遺跡とした部分にも広がることが確認された。しかしながら、その部分の遺構の密度は希薄である。新幹線から今回検出された波止場状遺構の間は、後背湿地と灰色粘質土系の水平堆積が確認されたが、微高地は認められなかった。遺構密度の高い微高地は、上東と下庄の字境の用水の南と北側に認められた。微高地は下庄遺跡で、北西から南東方向の北東側が高くなり、南西側は低くなる状態を呈している。また、土層においても前者は黄褐色であるが、後者はグライ化の様相を呈していた。いずれにしても、下庄側ではグライ化の状況であるが基盤層とされる黄色系の土層は認められ、その間に後背湿地や河道などを想定する状況は認めることはできなかった。したがって、波止場状遺構から旧2号線まで続く微高地であることが推測される。微高地の高さの推移は上東Ⅰ区と下庄Ⅰ区での遺構検出面が基盤層であり、いずれも1m前後で土器溜りの検出状況から削平が行われたことが知られ、下庄Ⅱ区で95cm、下庄Ⅲ~Ⅳ区では80cmを測ることができた。このことから、微高地は南に行くにしたがい下がる傾向にあるが極端な下がりは認められなかった。しかしながら、微高地の遺構の遺存状態から推定すると、その削平の深さが大きかったことが窺われ、仮に削平がなければ微高地部分の高さが際だっていたと思考される。

弥生後期前葉には微高地の北側に波止場状遺構が構築されたが、その機能消失から7世紀前半にい

たるまで北東から南西の流れにより浸食されていたことが上東Ib区の溝８から理解される。この部分には、波止場状遺構の他に具体的内容で把握することができなかったが運河の存在が想定された。これは検出された波止場状遺構から20mほど西側に、同じ方向で畔が認められる。そして、波止場状遺構の北西側の内容から、人工水路としての運河が設けられていたものと判断される。この他の弥生期の遺構は、下庄Ⅰ区と上東Ⅰ区の微高地部分に密度を濃くしている。主な遺構としては、竪穴住居、建物、井戸、土壙などが検出されている。時期は波止場状遺構と重なり、これと同様に機能していたことを知ることができる。弥生期に属する遺構の時期は、波止場状遺構の存続期間内である弥生後期前葉から末に含まれるものである。

中世から近世にいたる遺構は、溝と土壙を主体とするものである。溝と近世の土壙が集中する傾向が認められるが、先に記したように削平の関係で遺構は浅く、途中消失のような状態を呈していた。いずれにしても、今回調査された地区は上東Ib区で検出された水田の時期が室町期であることから、このころにはほぼ現状と同じ景観を形成していたことが推測される。

出土遺物は土器が大半を占め、木器、石器、骨角器が主要なものであり、この他に、貨泉が認められている。上東遺跡では先の調査[3]において、最も古くなる土器は縄文晩期後半期の深鉢であるが、今回、縄文後期前半の磨消縄文の破片を検出している。この後期前半から晩期後半期まで抜ける時期が存在するが、弥生からは古墳時代の須恵器が伴う前段階まで認められている。このことから、縄文後期から上東遺跡周辺に進出し、弥生に入り継続した生活の場を形成させていたことが明かになった。この出土遺物の土器において過去の２回の調査[4]では、少ない資料で示された才ノ町Ⅰ式とされる土器がまとまって下庄Ib区の井戸１から出土している。壺の頸部は「ハ」の字状に広がり、口縁端部の拡張が下方へ張り出す個体数が多くを占める。甕は壺と同様に下方への張り出しが多く、口縁端部の文様は細い凹線状となり、一部にヘラガキが存在する。また、底部は明確な平底となる。高杯は短脚に深い杯部となる。このように、才ノ町Ⅰ式を補足するものとして検出することができた。

波止場状遺構関係で検出された土器は、調査段階で600～1,000個体前後と想定していたがその数字を越えていたのである。甕については口縁部破片の遺存が３分の１のものについて、口縁部の計測関係から640の個体数を得ることができた。したがって、この数は確認した個体数の３分の１にしたものである。この数に実測分を加え、他の器種との比率[5]を見てみると甕66：壺15：鉢12：高杯７となり、甕の占める割合が多いことが理解される。

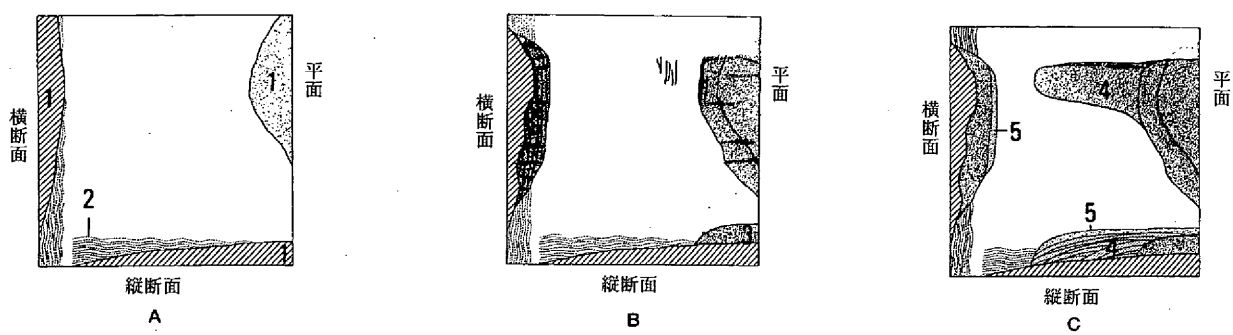
木器は波止場状遺構の古墳時代の堆積層からと、下層の波止場状遺構の湾入部分からの出土が大半を占めている。主要な製品については実測することができたが、多くを占める杭は調査の関係から現場に有り、また、記録して持ち帰ったものは実測することができなかったことを記しておく。（下澤）

第2節　波止場状遺構について

構築内容

波止場状遺構は検出時において、遺構と平行するトレンチを設けることにより内容の把握に努めた。しかしながら、南側では砂とチップ状の木片、中ほどで微砂・粘土・敷葉、北側で敷葉と粘土のように、これらトレンチで観察される堆積状況はそれぞれ異なる内容を呈していた。このようなことから、第4章第5図のように平行したトレンチを掘り下げることにより、北東側の広くなる部分と南西側の細長くなる部分との関係を把握することが可能になったのである。

第1図は、造成模式図である。A段階は造成前の地形想定であり、1がIc区関係の各断面図に基盤層として左下がりの斜線で示した暗灰色粘質土である。2は海水面であり満潮や干潮に大きく影響されるが、ここでは若干海水面から顔をのぞかせていた状態と想定している。B段階は1を基礎として、造成に着手するのである。この1の造成内容を明らかにできるのは、第4章第11図の土層断面図である。1の北西寄りに幅200cm、高さ30cmの壇状の高まりを造り、南西側は幅160cmの平坦面を、その外側には幅300cmにわたり38cm前後掘り凹めている。この状態は、北西側に顕著な造成を認められていないこととの比較で注目される。このことは、東側部分の湾状を造成するためにこのような基礎工事が必要であったことが窺い知れるのである。C段階はB段階で完工していた南西側斜面に付設するように4の造成を行うのである。4の造成は、B段階の図で示したように、基礎として用いられたと考えられる横木が認められている。さらに、第4章の波止場状遺構で述べたごとく、第Ⅰ工区との接合では太い横木を用いて施工されている。このことから幅5mの砂嘴状の造成は、第Ⅱ工区と一体のものとして施工されたのである。さらに、最上面に認められる土層の5が第Ⅱ工区にまで及んでいることから、この遺構の最終的な面の造成であることが判断できる。

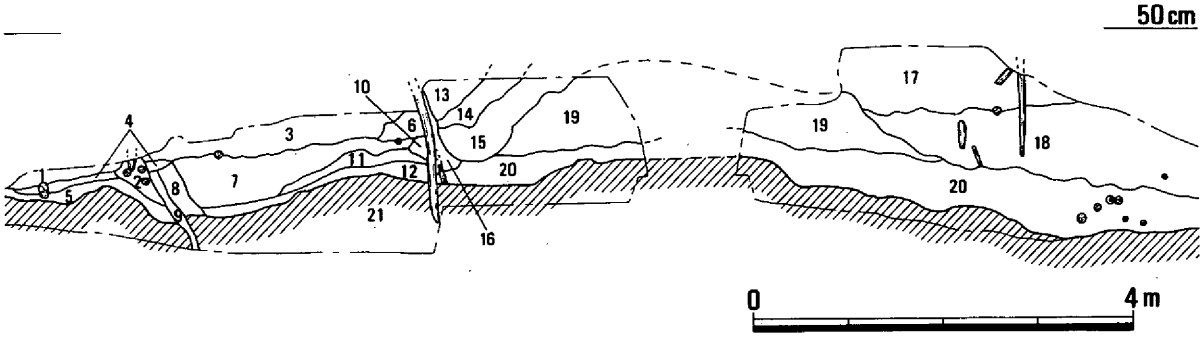


1　暗灰色粘質土（基盤層）
2　海水面
3　第Ⅰ工区盛り土
4　第Ⅱ工区盛り土
5　最上面盛り土

第1図　造成模式図

杭列と工法

すでにIc区の調査で記しているが、あらためて第2図の盛り土概念図を通して第Ⅰ工区について検討を加える。この図の壇状南東側の平坦部には、南東端よりに杭が認められ、これが杭列Ⅱに相当する。この杭はある程度の盛り土をした段階でなく、基礎工事が終わった段階、これは盛り土がなされる前に基盤層に打ち込まれているのである。第4章第11図に示したように、この杭を境として堆積が異なる内容を示しているのである。この杭が盛り土の後になされたならば、杭の左右で土層の堆積が

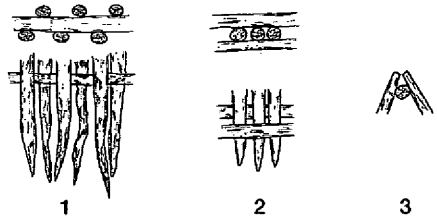


第２図　盛り土概念図(1/80)

相違することはなく、さらに、巻頭図版2－1においては、杭左の下方に見られる敷葉の層が杭に近接して認められるが、その影響が認められないことなどから判断できる。写真図版24－1は杭列Ⅲであり主に半截の杭を用い、その切断面側に樹皮を入れた後に土を入れる。この内容は、先の巻頭図版2－1および第４章第11図に示されている内容と同じ工法である。さらに、写真図版24－3で明らかなようにこれらの杭は、曲がりくねったもので打ち込むことに適しているとは思えないものである。このようなことから杭列Ⅰ～Ⅲは盛り土の補強としての役割ではなく、東から南東側に造成面を造りだすために用いられた工法であることが思考される。

西側に見られる杭列ⅣとⅤは、明確な断面図がとれていないのである。写真図版21－2では杭列ⅣとⅤの検出状態であるが、特に前者は平板状に加工した杭を多く用いている。この杭列の断面において、第４章第11図の第17層あるいは第47層中に認められるものがこれに相当する。後者の杭の状態については、先に述べているのであらためて言及しない。この杭列Ⅴ付近においては、第４章第11図の第23と84層に盛り土と平行して置かれている丸太を認め、写真図版27－3がそれに相当する。このように見ていくと、杭列Ⅰ～Ⅲが造成面を造り出していくのに対し、北西側の杭列ⅣとⅤは、その断面の内容から盛り土をした後に杭が打ち込まれていることが判断される。さらに、下層部分での横木の存在は、南西側が直線的な形状を呈することから、ずり込まないように基礎として存在したことが窺われる。

第３図は杭の模式図であり、第３図１は写真図版25－1・3、同26－1～3、同27－1、同28－2において認められる。模式図では横木が一本のみの表現であるが、写真図版25－1のように４本用いる箇所も存在するものの用いられる横木の数は、これよりも少ないことを認識している。第３図２は第４章第18図の杭列Ⅰに認められたもので、下に置かれた横木の間に杭をいれることにより杭の傾きへの強度を増したと思考される。第３図３は横木を固定させる工法で、写真図版26－2では明瞭に示されている。この場合は、１の工法における横木１本に用いられている。この横木を抜けないようにして、写真図版27－2に見られる如く先に杭を打ち込んでいる。



第３図　杭模式図

第Ⅰ工区において注目される工法は、杭列Ⅲ～Ⅴからの斜面部(第Ⅱ工区との接合部を形成)の内容である。長

さ550cm、太さ23cm前後の丸太が写真図版17－2に見られるように斜面に平行して置かれている。この丸太より150cmほど上方に長さ435cm、太さ17cm前後の丸太の西端部分では、挟むように杭が打たれている。また、第4章第8図のポイントB′寄りの第36と37層には、径30cmの太さの丸太が置かれている。この丸太は第4章第21図に見られるもので、一点破線で示したトレンチにより切られているものがこれに相当する。このことから、杭列Ⅰ～Ⅲの杭工法は表現が適切かどうかの問題が残るが、土地の造成工事としてのそれである。杭列ⅣとⅤは今日的な表現をすれば、土止めとしての内容を示すものである。そして、この斜面部に認められる横木の工法は、繋ぎとしてのものであることが理解されるのである。このようなことから、第Ⅰ工区は3種類の工法により形成されたことが明らかにできた。

第Ⅱ工区の杭列は、西側にのみ認められている。写真図版19－2・3、同28－2がこれにあたり、第3図の1に認められる内容であるが、この横木の方が太いものを用いている。第4章Ic区で述べたように、杭列Ⅴと一体として打たれたことが思考される。このことは、この遺構に伴うと想定される人工水路いわゆる運河の付設も考慮しなければならない。この第Ⅱ工区から第Ⅰ工区に行われた杭列の直線の形成は、流路の抵抗を派生させないための側面も考慮されたことが理解される。

敷葉工法

第Ⅰ工区と第Ⅱ工区において、先に記したように工区において異なる状態を呈していることが明らかにされている。第Ⅰ工区に認められるものは、第4図1～5の土層断面図における黒く塗色した層がこれに相当する。敷葉の内容は写真図版29－2に示した葦の単純層、そして木葉の単純層のものが認められた。これらの敷葉、特に木葉については枝に付いた状態ではなく、葉のみ検出されている。葉の状態は丸まったものがなく、広がった内容で認められている。敷葉についてはごく一部分のみにおいて、面的な把握がなされたのみであり、葦と木葉との施工における関係など把握することは論外であった。したがって断面図に示した敷葉は、両者の区別ができていない。ともかくも、写真図版21－3・同22－1において、黒くて細い筋状がこれにあたる。

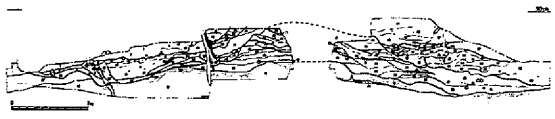
第Ⅱ工区においては、第Ⅰ工区で認められた葦、木葉の使用は確認できなかった。当工区の敷葉の内容は、木材のチップ状の物が層として認められると述べたように、薄く締まった状態ではなく圧縮されていない厚さの内容を呈している。この状態は写真図版29－3で見られるように、木葉ではなく木材のチップ状である。第4図6～8の断面図に認められる敷葉は、この種の内容であることが確認できている。

敷葉工法は第Ⅰ工区において、南側ではなく北側に多用されたことが第4図5の断面図などで窺うことができる。第Ⅰ工区に認められた内容の敷葉は断面の各位地での形状において、盛り土が崩落したような痕跡はなく、造成時から安定した状態を保持していたことが判断される。一方、第Ⅱ工区においては、第4図7・8に見られるように崩落部分が認められている。この崩落と思考される部分には、この区で認められる敷葉が他に比べ厚い堆積となっている。この内容は先にも記しているが、河口部分に溜る木材片を集めて用いた状況を呈している。いずれにしても、第Ⅰ工区に比較して安定した内容ではないことが理解される。

なお、一部の面的な確認と断面からは、大阪府大阪狭山市の狭山池[6]の調査で認められた木葉が枝に付いた状態で用いた内容は認められていない。

盛り土

この内容は、第Ⅰ工区と第Ⅱ工区では異なることを述べている。ここで改めて、その内容について

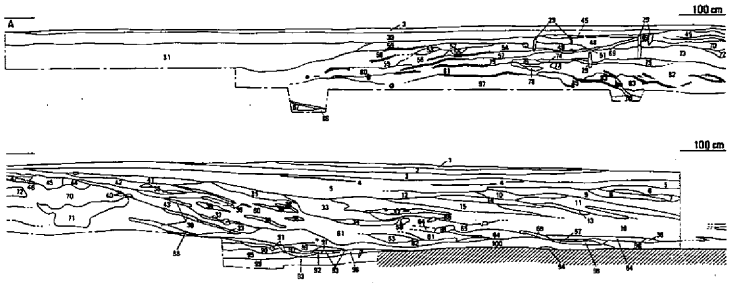


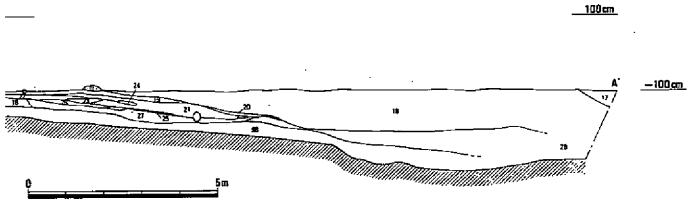
1

2

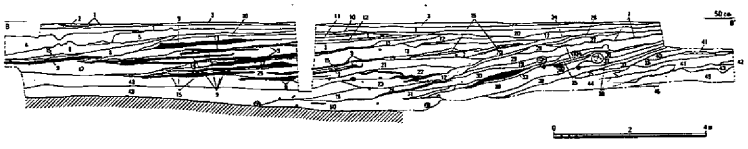
3

4

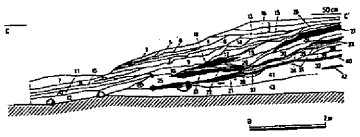




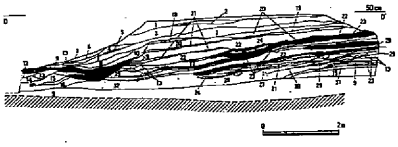
5



6

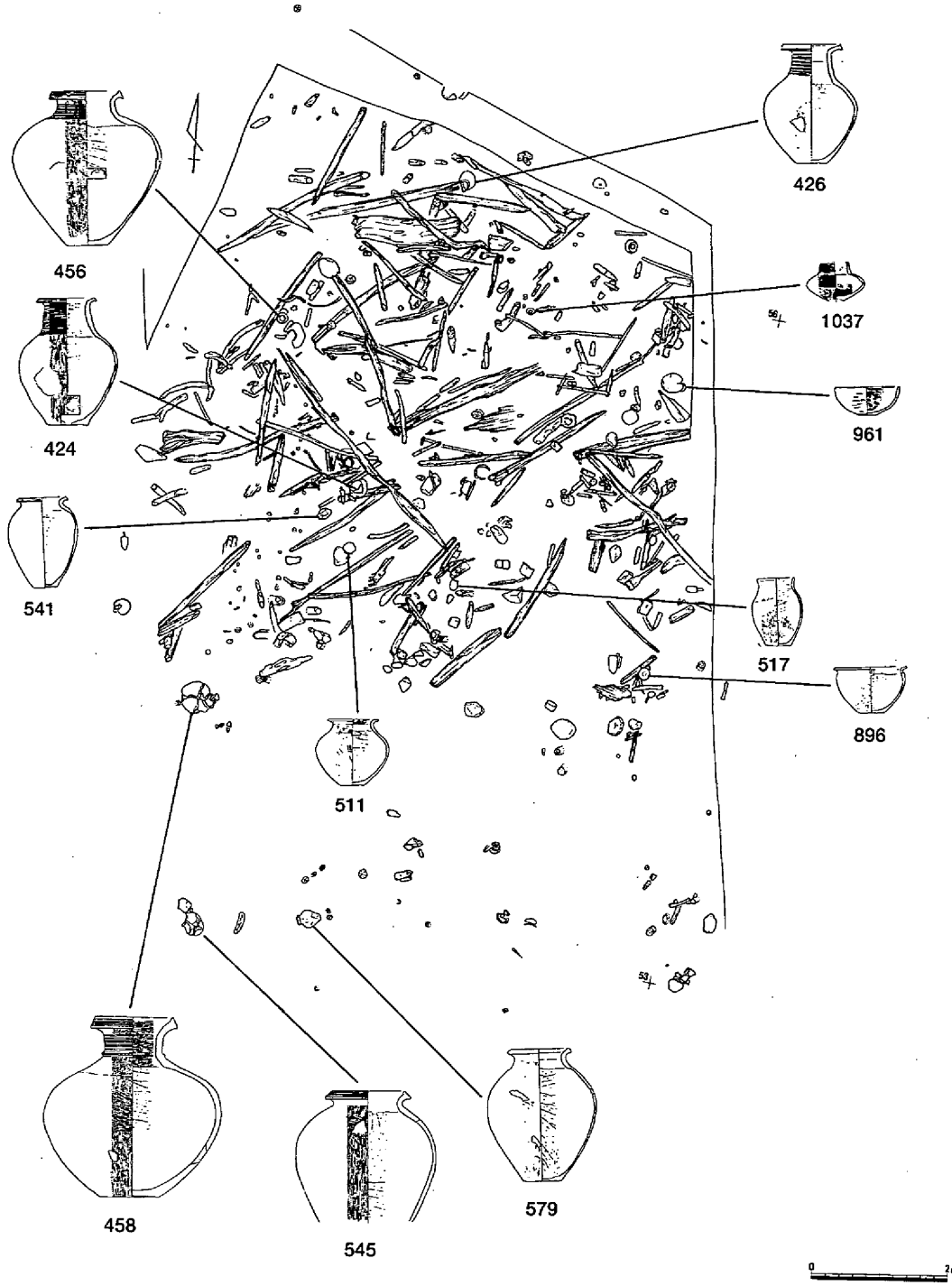


7

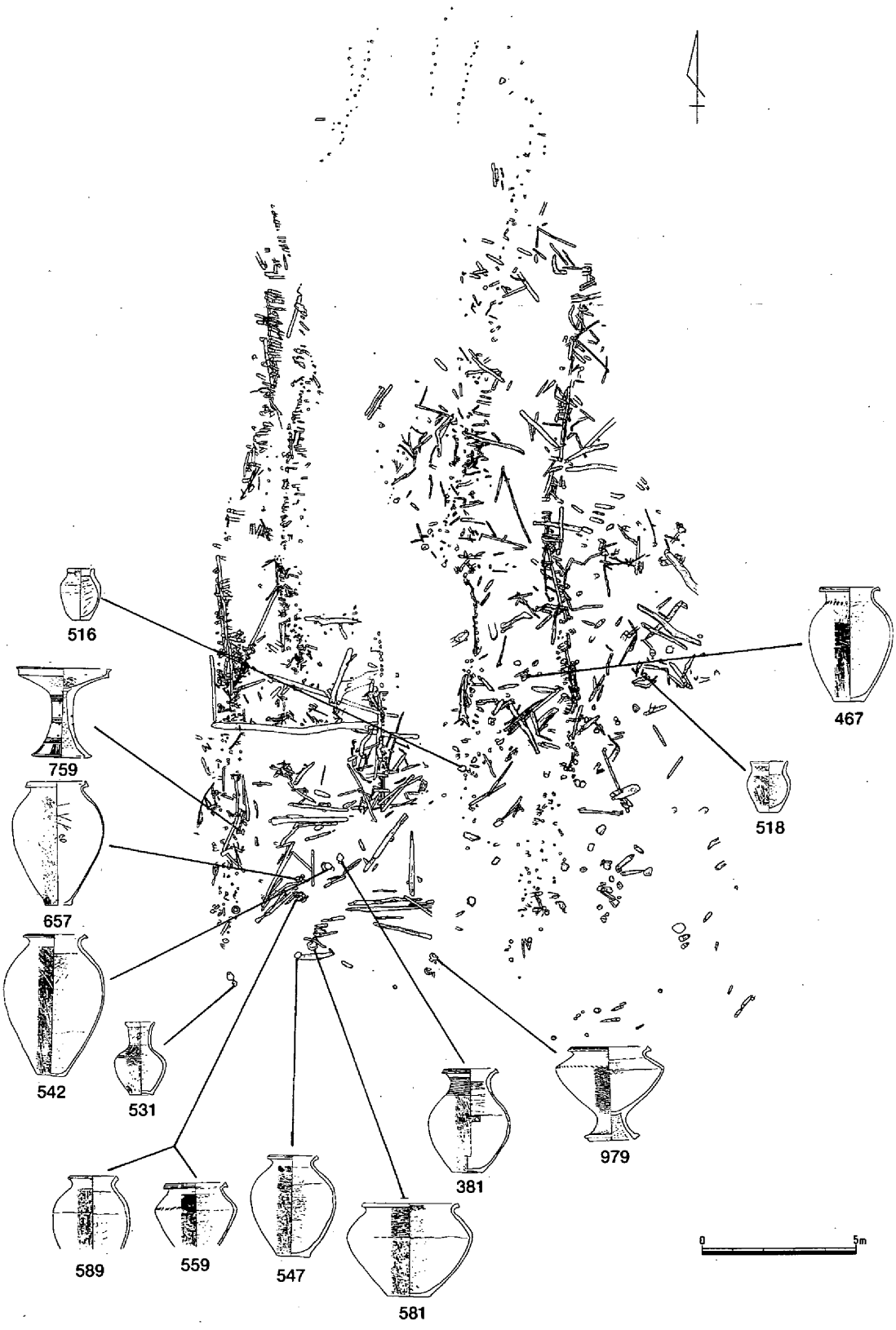


8

第４図　敷葉工法断面図(1/200)



第5図　第Ⅰ工区崩落部分出土遺物(1/100・1/16)



第６図　基盤層出土遺物(1/200・1/16)

若干の検討を加える。第Ⅰ工区は第4章第7・11～14図、写真図版21－3、同22－1・3、同23－1において、示されている。基本的に第4章第12、14図に認められている盛り土は、基盤層である粘質土を用いていることである。これは、基礎部分を構築するために動かした基盤層を他に移動することなく、敷葉と杭を用いることにより盛り土として再利用したのである。写真図版22－1、同23－1に見られるように基盤層の再堆積層に敷葉が認められる。第4章第14図の土層断面図では、敷葉が認められなければ基盤層として判断してしまう内容であった。この状態は、第Ⅰ工区の北に行くにしたがい顕著になり、調査時の側溝断面では、人為的な盛り土として認識は全くなかった。このような盛り土の内容の他に、第4章第13図と写真図版21－3に示された盛り土は、砂と粘土の互層となっている。断面図においては詳細な作図ができなかったが、写真図版では互層の状況が認められている。これらの互層は、畚の一単位とも判断されるように丸みの形状を呈することが観察された。砂の状態は、細い層で締まっていた。

第Ⅱ工区は砂質土を主とし、粘質土の使用は極めて少ないことが明らかとなっている。砂質土中には写真図版22－2に見られるように木片を多く含んでいる内容であった。したがって、第Ⅰ工区と異なり締まった状態での積み土は、なされなかったことが窺われる。このことが、この工区に多く認められる崩落の要因としても妥当と思考される。

両工区の盛り土内容は、かなり異なることが判断された。第Ⅰ工区においても異なる盛り土内容が認められることから、基礎工事から杭の使用と積み土の関係は、基本的に先に述べた見解として把握できる。しかしながら、第4章第13図に見られる盛り土内容の相違は、積み土過程でこれらとは異なる施工が行われたことが思考されるが、それを具体的に把握できうる調査ができていないことを痛感する。いずれにしても両工区とも一体として構築され機能していたことが思考されるのである。

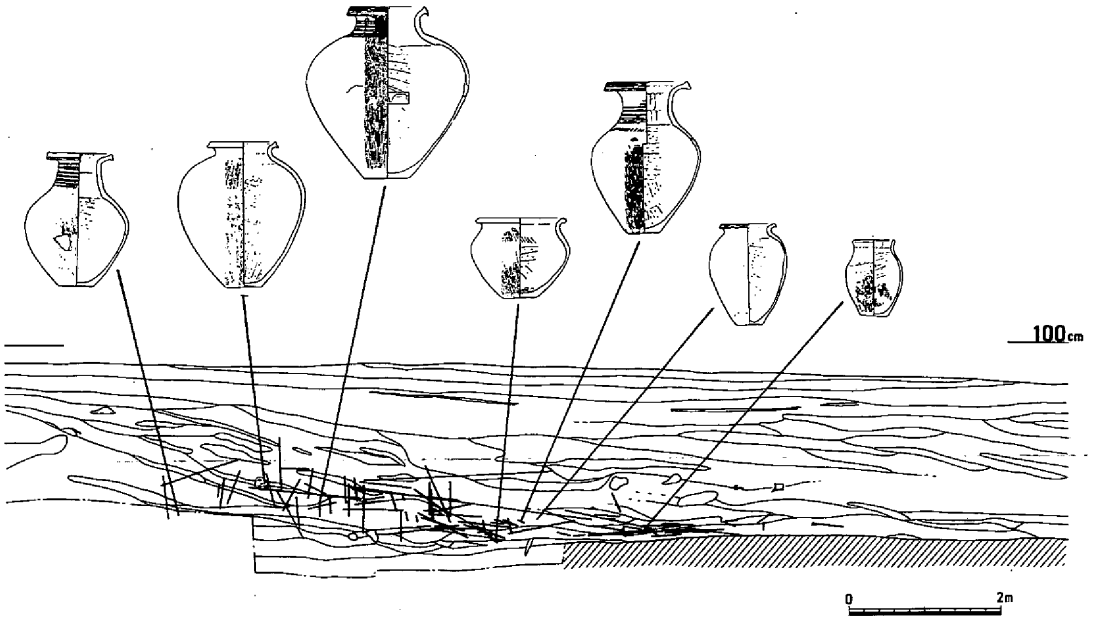
敷葉については、岡山市津寺遺跡[7]、大阪府狭山池遺跡などで調査されてきている。平成7年には敷葉工法についての具体的内容と検討が示されている。敷葉の内容は、粗朶・葦・木片などを含んでいるものならば、それぞれについて系譜、時代的な関係を有するのかの検討がこれからなされなければならないであろう。このことは、上東遺跡での敷葉の相違を明らかにする方向性を得ることになる。

杭工法は、これまでの検討が護岸や灌漑施設での内容の把握が主であった。これらの内容は、すでに積み土されている所に杭を打ち込むことによる構築物の強化と保持の側面を有する工法である。上東遺跡の杭はこのような工法も認められるが、積み土以前に杭を用いる工法である。この工法を採ることは先の側面からではなく、新たな技術の基に施工したと思考する。この工法は第Ⅰ工区と第Ⅱ工区との接合の内容と共に管見において知りえていないことから、資料の増加を持ちたい。

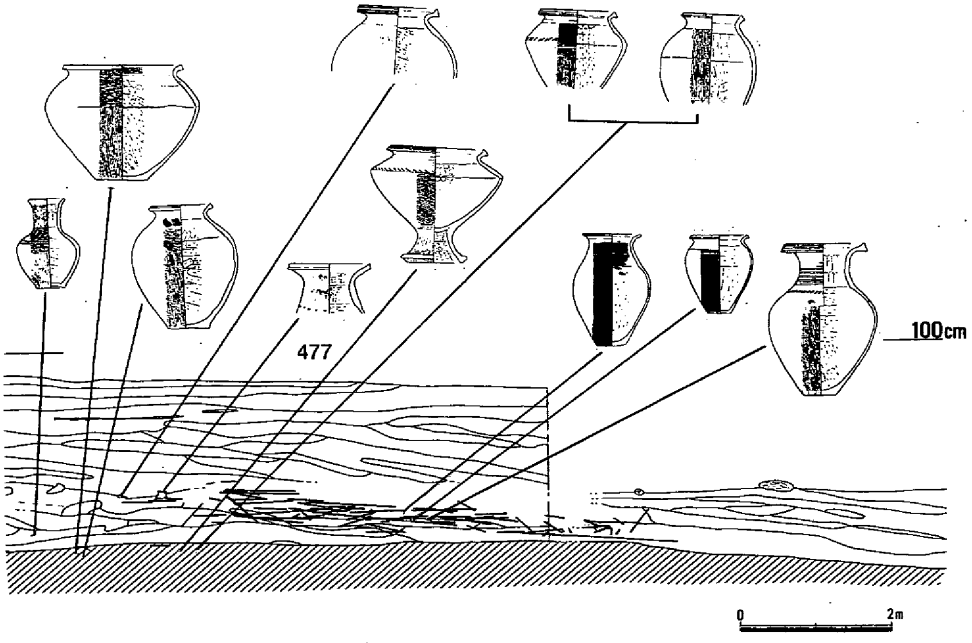
時期

構築時期を知る手掛かりとなるのは基盤層からの出土遺物である。第5図は第Ⅰ工区の湾入する部分に相当し、崩落を示唆する堆積が認められるところで一部崩落上部で検出されたものも示し、写真図版16－2がその状況である。しかし、ここでは基盤がどのようになるか見通しのきかない段階であり、明確に基盤層からの検出の認識を欠いていたのが事実である。ともかくも、458・545・579については、崩落に伴う杭類と関係なく認められている。

第6図は第Ⅱ工区を取り除き、他の杭列についても掘り下げが進みその内容が把握できる段階である。したがって、基盤層として青灰色粘土と黒灰色砂を認識し、特に青灰色粘土の基盤が存在する第



第７図　遺物出土層(1)(1/100・1/16)

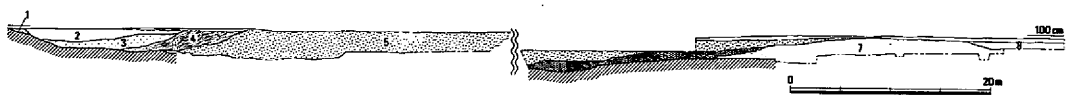


第８図　遺物出土層(2)(1/100・1/16)

Ⅱ工区側については写真図版19－3などに示すように明確さに努めた。第6図の遺物は、いずれも基盤層面で検出されたものである。このうち、759の高杯は写真図版28－1に見られるように、杭の間に据えられた状態で検出されている。

第7と8図は、第4章第16と17図に見通しとして示した。この土層断面図と木の関係はすでに述べているように、土器の出土位置においても地形的な状況から図化するには適切ではないと思考されるが、おおまかな関係を知るためには妥当と判断した。しかし、477の壺の頸部破片については、この断面図位置から検出され、当盛り土が近世期とし断面図作成で終了と判断した段階で弥生期まで溯ることを示した遺物である。また、第8図の土層断面トレンチにおいては、1062の器台が最下層部分から出土している。

これら、土器の他に構築時期を知るものが、貨泉である。貨泉は、第4章第26図の第Ⅰと第Ⅱ工区の接合部の後者側の基盤と考えられる暗灰色粗砂に認められる横木の基礎材部分から検出されている。この貨泉の出土状態と先の高杯のそれとについての見解と土器の時期については後述するが、ここで問題となっている構築時期については、基盤層に接して検出された土器が上東式の中でも前葉段階に属するものである。



第9図　上東Ia～c区西壁土層断面模式図(1/750)

波止場状遺構の埋没、または機能の消失時期は、上東Ib区からの堆積土と出土土器から判断することができた。第9図はIa～c区西壁土層断面であるが、Ic区の断面位置は中央部分での作図のため平行移動して合成した。この図で示した第7層が波止場状遺構の盛り土部分であり、第6層が弥生後期の土器を大量に包含する層である。第6層の上に堆積するのが砂を主体とする第5層で、先に波止場状遺構の盛り土の項で詳細は記している。Ic区の第7層と第6層に残存していた第5層からは603・604の遺物が出土し、この他に第6層に相当する上層出土土器はいずれもこの期に含まれるものである。そして、南に行くにしたがい時期を新しくしていくのである。また、西側の運河と想定される第8層からは、755の遺物が出土している。層位においては第7図の第31層からの出土であるが、これより下層での遺物の出土は認められていない。

このようなことから、波止場状遺構の湾入部分は古墳時代前半期に埋没し、運河部分は古墳時代中頃の段階でかなり埋没し浅くなることから、運河としての内容ではなく浅い水路としての命脈を保っていたと思考される。

遺構の名については波止場状遺構として、「状」を付して呼んでいる。このことは、湾状部分がIa区に認められる微高地とつながるのかどうか、第9図の第5層が河道として抜けるのか、同図の第8層が運河としての内容を有するのか対岸との関係など、まだ把握しなければならない部分が多々ある。これらは、いずれもが発掘調査において得られるものであることから、近いあるいは遠い将来において解決されるであろう。ともかくも、遺跡が残る姿で明らかになることを望むものである。　(下澤)

第３節　出土遺物について

１　時期

波止場状遺構の構築時期については、すでに弥生後期の上東式前半期にあたることを述べているが、ここでは具体的に土器を通して検討する。

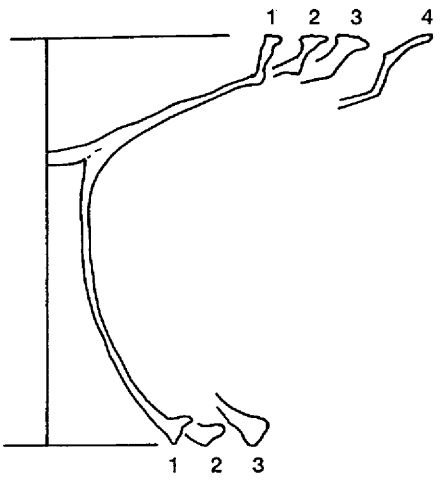
上東遺跡と同じ足守川流域にある津寺遺跡[8]・政所遺跡[9]・高塚遺跡[10]では、上東式前半期の遺物が多く出土し、当該期の時間的流れが明らかにされている。とりわけ、高塚遺跡からは25枚の貨泉が出土し、上東遺跡との関連が注目される。このことから、先の指摘を基に足守川流域の上東式土器前半期、高橋護氏が示されたⅦ期[11]と上東式古の段階[12]に相当する土器の流れを見ていく。高塚遺跡では、高杯の変化から前半期を４段階にわけられている。このうち口縁部と脚端部について、その内容を検討する。第10図－1は、１段階のものである。口縁部がやや外に開き気味となり、端部は僅かに外に張り出す。脚端部は上下に肥厚するが、上端部は摘み上げるように張り出す。第10図－2は、２段階のものである。口縁端部が内と外に拡張し杯部が浅くなり、端部は外側に肥厚させる。第10図－3は、３段階のものである。口縁端部が内と外に拡張し端面は水平にならなくなり、下る形状となる。脚端部は、上下に肥厚させるが丸くなりシャープさを失う。第10図－4は、４段階のものである。先のものと異なり、杯部から上方から外へ強く屈曲させ、内面には段を有する。脚端部は図示していないが、肥厚気味で素縁の傾向にある。

１段階は、津寺遺跡[13]で指摘された灰白色系と赤褐色系の色調を示す物を伴っている。同遺跡[14]で指摘された第45図の壺は底部径8.9～9.8cmを測り平均化し、形状も外面も膨らみを持つために安定性に欠けるが、甕にもこの形状を呈するものが認められる[15]。高杯では中期末の仁伍式に認められる脚端部の外方への張り出しが、より細く大きくする度合いを顕著にする。これらの特徴を示す土器はいずれの色調を示すものにも存在している。

２段階は、前段階で特徴的に存在していた色調の相違はなくなり、従来の上東式の色調である赤褐色系となり、長頸壺が出現する。甕の口縁部は肥厚気味に屈曲し、屈曲部に強いナデを行うことで端部を上下に肥厚させるものが多くを占めるようになる。前段階で主体を占めていた壺・甕の胴部上半のナデ、押圧などの調整にかわり、頸部下半までヨコヘラケズリが多く見られるようになる。高杯脚部に施される孔は、貫通するものとしないものとが認められる。

３段階は、甕の頸部が「く」の字状に短く屈曲し、端部を肥厚気味にする。また、端部を外方に拡張させるものも現れる。内面調整は、頸部屈曲部まで施されるのが認められる。高杯脚部に施される孔は、ほとんどが貫通しなくなる。

４段階は、前段階までは杯部から短く立ち上がる口縁を形成させていたが、この段階からは大きく立ち上がりながら外反するものに変化し、内面には段を形成させる。脚部も短く、「ハ」の字状に開く。特に、この段階においては脚部と杯部の別作りが出現する。写真１は764の杯部の接合状態であるが



第10図　高杯模式図

接合のための調整などは認められず、杯部内面の粘土の残存も円盤充塡を思わせる粘土を留める。また、口縁部も別作りであることが写真2で明らかである。足守川と流路が異なるが、百間川沢田遺跡[16]において次の時期に相当する上東Ⅱの高杯の変化を検討し、その古相段階とした内容に相当する高杯が出土している。これが773で、写真3と4である。これと比較すると、後者は脚部を差し込むようにあらかじめ調整をし、杯部内面と脚部との接合は、杯部のケズリとミガキにより寄せられた粘土が薄く認められる。杯部と口縁部との接合も安定する擬口縁を形成することなく、端部を丸く処理をした状態である。このようなことから、4段階においては、別作りが始められた時期とすることが妥当であろう。甕の口縁部は上方への拡張傾向が強くなり、端部を丸く終わらせるものもある。

以上、後期前半の流れを見てきたが記述を上東式の細分[17]として、ここでは1段階を上東Ia期、2段階を上東Ib期、3段階を上東Ic期、4段階を上東Id期とする。このような土器の流れの中で、波止場状遺構の構築時期を検討する。波止場状遺構の構築時にかかわる遺物は、基盤層とする青灰色粘土層出土のものと第Ⅱ工区の基礎部分から検出された貨泉と土器である。すでに説明を加えているが、さらに検討をすると第6図の土器は、崩落に伴う状況、左記に述べた458・545・579の土器のように波止場状遺構から離れて検出されたものとも異なる様相を窺い知ることができる。第6図に示した土器のうち979は崩落に伴う可能性もあるが、他は波止場状遺構の盛り土の基礎部分からの出土である。このうち、759は杭の間に意識的に置かれたと考えられる出土状態であった。この高杯は、口縁端部の外側への拡張傾向、脚部透しの未貫通などの特徴が認められる。また、第6図の土器の口縁端部は強いナデにより端部を肥厚させるもので、内面ヨコヘラケズリが頸部屈曲部まで達していない。このような内容を示すのは、先に述べた上東Ib期である。

貨泉は第6図の土器と同じ出土状態を示しており、時間的な差を持たずに置かれたものと思考する。貨泉の時期については高塚遺跡[18]から25枚出土している土壙からの土器が、先の上東Ic期[19]とされている。出土した高杯は、内面口縁部の立ち上がりが丸みを強くし、外方への屈曲の度合いが強くなる。甕は口縁端部の肥厚がより強調され、下方に拡張するものも認められる。また、内面ヨコヘラケズリは頸部屈曲部まで施されるなど、波止場状遺構出土の土器よりも後出的である。

以上のことから、波止場状遺構の構築時期のうち第Ⅰ工区は、上東Ib期に開始されたことが判断できるのである。しかしながら、第Ⅱ工区については崩落に伴う部分からの出土が認められているが当該工区において構築基盤からの土器の検出は確認できていない。このことから、両工区の構築の時間的介在の有無の問題については判断できないのである。

波止場状遺構の機能消失時期は、第9図の模式図の第5層から口縁部にクシガキ沈線を施す古墳時代前半期の甕が検出されている。このことから、この段階には、すでに波止場状遺構としての機能を留めていなかったことが窺われる。また、波止場状遺構の北西側に存在すると考える運河については、浅い溝状に名残を留める時期と推測される底から755の土器が出土したことから、古墳時代中頃までは運河としてではなく溝として存在していたと思考する。さらに、これらが完全に埋没した時期は、当該部分の遺構検出時に水処理用の側溝を北西側に掘り下げた際に、表土下約50cmで1086の須恵器を検出している。このことから、7世紀段階には完全に埋没していたことが思考される。　（下澤）

写真1

写真2

写真3

写真4

2　絵画文土器について

976の鉢には、四つの絵と二つの文様が描かれ、このうち文様の１つは口縁部内面に認められる。第11図Ａは両目と口を描き、そのうちの左目はアーモンドナッツ状の目の下方に睫毛と考えられるヨコの沈線を施すことにより瞼を閉じた状態、右目は睫毛が上側の縁からのびて目を開けている状態というようにそれぞれ異なる表現をさせている。また、口は二重線により表現されている。この二重表現、管見において知るに至っていない。これまでの出土例は単線によるものであり、目の表現と同様に何らかの意味を持つことが推測される。そして、相対するように額から頬にかけて弧状の線刻が描かれている。この多条の弧状線刻は、他遺跡の出土例から黥面とされるものである。この入れ墨は、左目の瞼の部分に線刻が及んでいることから、この部分にも施していたことを知ることができる。

Ｂは眉毛、目、口を描いている。眉毛は丸みを持たせて描いている。目は眉毛から口に及ぶ相対する弧状の線刻上半部に新たな線刻を付し、目として表現している。このことから、目は細く吊り上がった状態となる。さらに、両目ともに瞳を描いていることから、見開いた状態を表現しているものと判断できる。口は、上顎と下顎の歯を描き、左側には牙を想定させる線刻を行う。

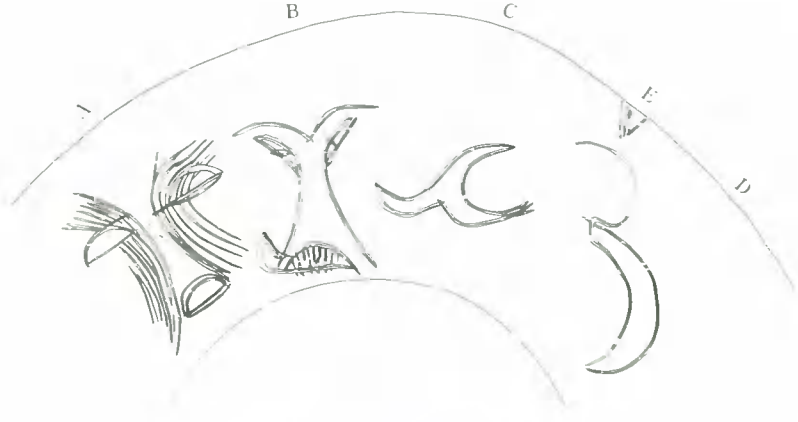
Ｃは人形状に描かれ、右端の線刻が３本となる。

Ｄは下弧状の先端から、細線が弧状に描かれている。

ＥはＤの細線近くに、口縁端から山形を描いている。正確には、小さい三角の一辺に添わせて２本の線刻を施している。

Ｆは976の実測図に示しているが、Ａの裏面に極めて薄い線で山形の線刻が認められる。

以上が、土器に描かれている絵画文の内容である。これらの絵は独立した単独の絵として描かれた



第11図　絵画文土器(1/2)

のではなく、土器をキャンバスにして思いを表現、具体的には物語として描かれたと判断するのである。これまでの出土例[20]から、Aの相対するように描かれている弧状の線刻は顔面の入れ墨を表現したものである。左右の目の表現は、睫毛と考えられる線刻から目を開けるのと閉じた表情を示している。口は単線ではなく、縁取るように二重になっていることから単に口を表したものとは考えられない。口の二重による表示は、声を発している状態を表現していると考えることが許されるであろう。このように見ていくと、描かれている内容は、黥面を有する人物の状態の表情を表していると思考するのである。このことは、トランス状態になった表情を表していると判断される。Bは先に述べたように、このように瞳を表現し牙と上下顎の歯まで表現をした例は管見によれば、見出されていない。この細く吊り上がった目は、瞳の明示とともに怒り輝く眼を思い起こさせる。さらに、牙と歯は、怒りのためにむき出しになった表情を表していると思考される。CとDは顔面表現と異なり、表現が抽象的であることから具体的に描いた対象物が特定できない。しかし、Cについて「記号文」[21]とされるものから見ていくと、竜の「記号文」とされる岡山市天瀬遺跡[22]出土のものと共通性が認められる。Dは他の出土例から脚などが描かれていれば、鳥などを想定することが可能であろう。しかしながら、このような表現が認められていないことからCと同じような「記号文」とされ、これの対象物を想定するとカマキリとなる。具体的に明示はできかねるが、前の3つの表現は正面で正位に向き示される。Dは横位にあって、弧状に描かれた細線を前脚を表現した時に木に添う状態を下から見上げる構図が思考される。そして、EとDは一体のものとして表現されたとした場合は獲物を得る場面で有り、この状態からすれば異なる表現にはなっていないのである。また、裏面に描かれているFは、明確な表示する意志のもとに描かれたのか不詳である。

絵画文土器は器面に線刻されたものが単純に描かれ、それのみの内容表現ではないことを明らかにすることができた。では、具体的にはこれらの線刻画が、どのような物語を表現しようとしていたのかについて触れてみたい。

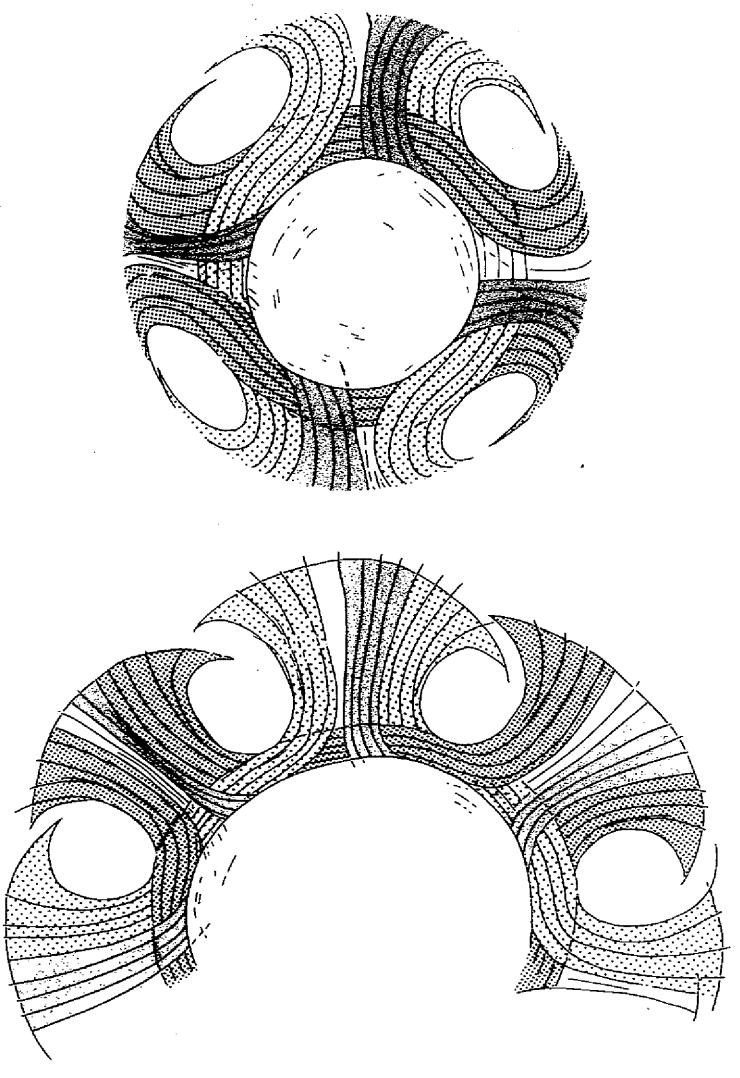
Aは入れ墨の存在から、呪術者(シャーマン)を想定することが妥当であろう。黥面した呪術者が片目を閉じ、口を開いて声を発している表情からして呪術行為におけるトランス状態を表しているものと判断される。Bは意識における恐怖の対象物としての悪霊を具象化したものである。Aが人体自身で表現するのに対し、これは『面』などの被り物を用いることで表現した可能性が思考される。この両者の行為の祈る対象と願いが、CとDにより示されていると思われる。

このようなことから、絵画文で示される物語は呪術者が災いをもたらす悪霊を神である竜に祈ることにより取り除き、カマキリに象徴される豊穣と多産の願いが込められているのである。　(下澤)

3　弧帯文土器について

上東遺跡の波止場状遺構から出土した鉢874の外面には細く鋭い沈線で、撥形をモチーフとした精美な弧帯文が明瞭に描かれていた(第12図)。このモチーフはしばしば弧帯文と共に散見され、集落内の祭祀に用いられた文様で、弧帯文の末端から析出されたとの見解が示されている[23]。ここではこの撥形のモチーフを撥形文と仮称するが、吉備における弧帯文の研究は特殊器台の変遷に主眼を置いたもので、撥形文自体の系譜や展開についてはあまり検討がなされていないように思われる。そこで今回あらためて撥形文に着目し、特に特殊器台以外の撥形文について、鉢874の文様の分析を通して具体的な様相を明らかにしていきたい。

まず鉢874の文様がどのような過程で作成されたか筆致および切り合いから類推すると、最初に円弧を組み合わせて撥形と2重の円からなる基本的な構図の輪郭を描き(第13図－Ⅰ)、撥形部内を4つの縦方向の区画に分割した後(第13図－Ⅱ)、各区画内に弧線を充塡(第13図－Ⅲ)して弧線帯を形成していったと復原される。ここで特に注目すべき点は、撥形部の右端が必ず左隣の撥形部の左端の下に配置される点で、その結果として撥形部の間に巴形の空間が形成されることとなっている。この頃は既に特殊器台に巴形の透孔が採用されており、偶発的に生じた図形と言うよりはむしろ、当初から巴形を意識した配置と考えた方が妥当であろう。また撥形部内の分割では、最初に巴形の空間を取り囲むようにU字形に区画を設けて両端の弧線帯を形成し、弧線の割付では撥形部と環状部を巧みに連ねたり切り合わせることによって、数本の帯が編み込まれたような表現を実現している。このように文様構成や作図過程に一種の規則性が認められており、撥形文そのものに手順をこえた原理が存在し、鉢874はその本来的な原理に基づいた文様であると評価することができよう。



第12図　文様展開図(1/2)

ではこのような原理が他の撥形文にも認められるのか、県内の各例を概観してみることにする。

撥形文は筆者の目に触れた限りでは上東例を含めて17遺跡19例を数える(第14図)。時期は弥生後Ⅲ期[24]～古墳初頭のごく短い期間に限られており、撥形文の成立および展開に、意図的な背景を考えずにはいられない。器種では壺・器台・高杯が主体

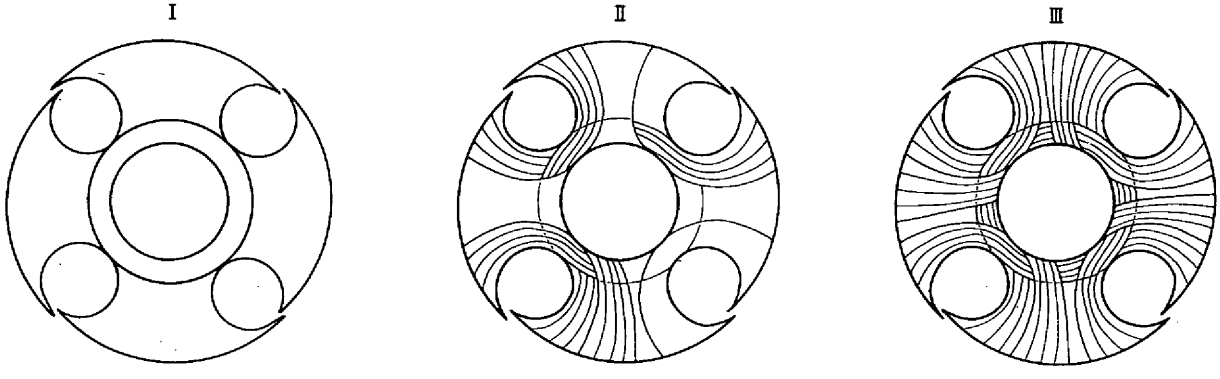
を占め、ほとんどが集落遺跡から出土したものであるが、墳墓に伴うものも数例あり、主として両者に共通する祭祀の供献行為に関わっていたとみなすことができる。また、1例だけではあるが土製品に撥形文が描かれる場合もあり、撥形文が土器に限る文様ではなく、撥形文に託された意義を表徴するものとして認識されていた側面を窺うことができる。

さて、これらの各例は文様構成から、弧線帯と一体的に構成されるⅠ類、弧線帯を伴うが弧線帯から分離しているⅡ類、弧線帯を伴わないⅢ類に大別することができ、さらにⅠ類は弧線帯が複数合わさって形成されるIA類と一つの弧線帯の末端となるIB類、Ⅱ類は弧線帯の上に撥形文が環状に連続して並ぶⅡA類と巻き込みのある弧線帯の側面にランダムに付くⅡB類、Ⅲ類は撥形文が複数展開したり、他の絵画文の一部に組み込まれるⅢA類、鋸歯文などと共に口縁外面の文様帯の構成要素となるⅢB類、単独で描かれるⅢC類に分類することができる。また撥形部内の表現の違いからは、複数の弧線帯から形成されるａ類、放射状に弧線が引かれるｂ類、弧線の切り合いが認められるｃ類、弧線が両側に分かれ中央に空間や別の弧線帯が挿入されるｄ類、輪郭線のみのｅ類、中央を軸で分割するｆ類に分類される。以下、この基準に沿って各例を概観し、撥形文の特性を導き出してみたい。

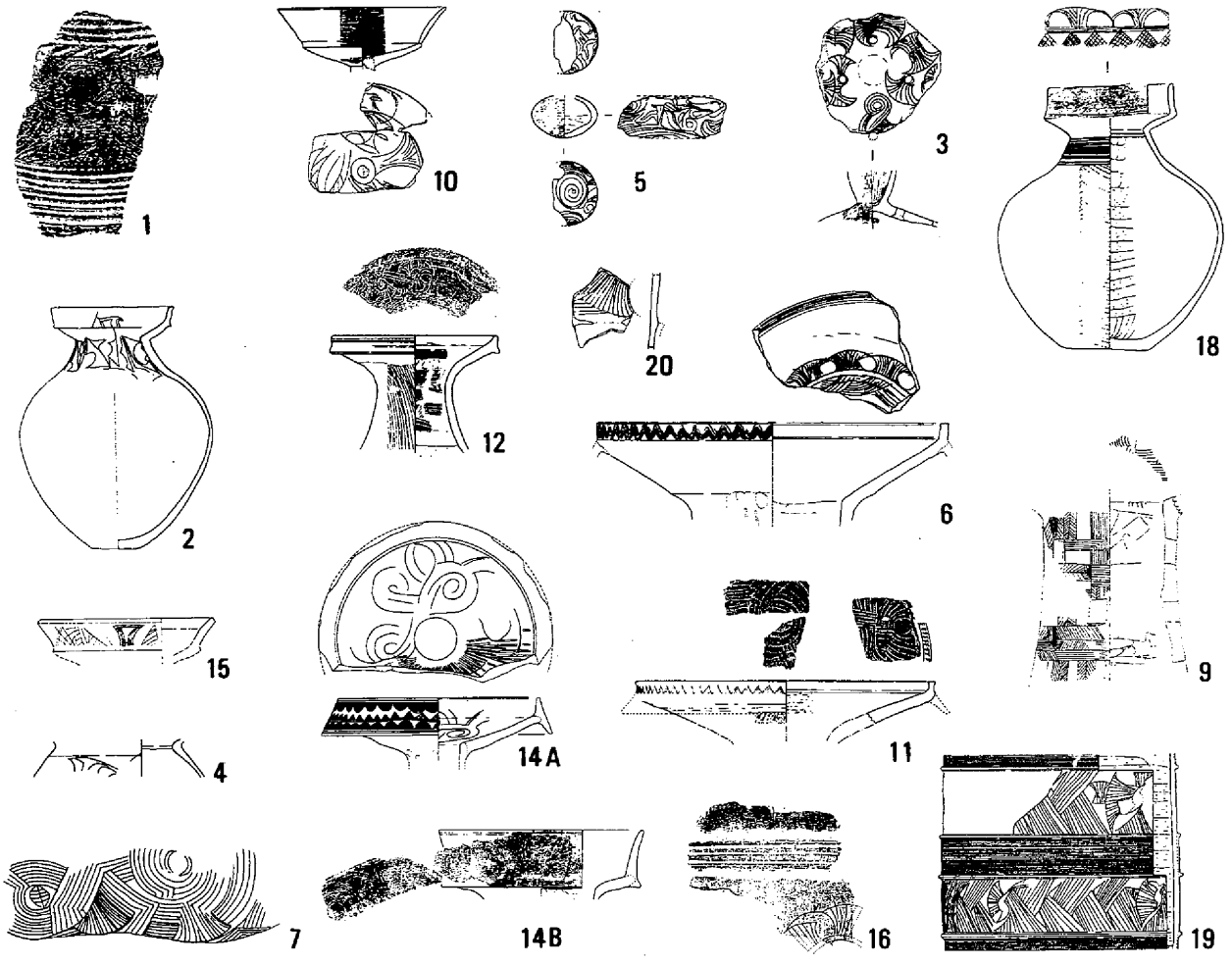
IA類(楯築遺跡[25]・上東遺跡)　弥生後Ⅲ期前半の楯築墳丘墓円礫堆出土の弧帯石(7)には石の全面を覆うように同心円状もしくはＳ字状に連なる弧線帯が巡らされているが、撥形部には弧線帯の環状部分の途中から両側の弧線帯が直角に外方に向きを変えて形成されたａ類、環状の弧線帯の一端が直角に折れ曲がるｂ類、環状の弧線帯の横につくｄ類の3種類がみられる。この3者の比較から、ｄ類の中央にみられる空間が、本来的にはａ類のように2つの弧線帯が合わさって一つの撥形部が形成されたことを表現したものと考えることができよう。上東遺跡例は先に述べたように、底部の弧線帯と撥形部両側の弧線帯が一連となったIA類で、撥形部も少なくとも3つ以上の弧線帯からなる、ａ類とみなすことができる。

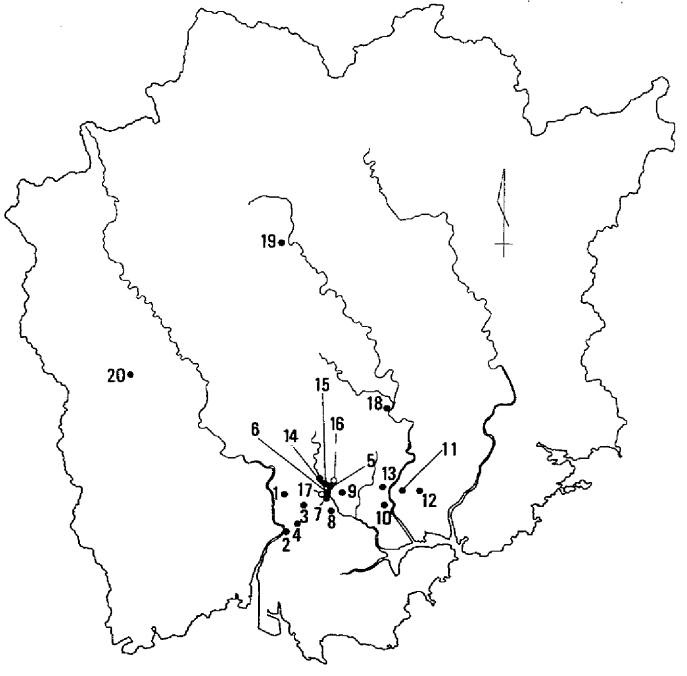
IB類(原尾島遺跡[26]・吉野口遺跡[27])　原尾島遺跡例は弥生後Ⅲ期後半の竪穴住居から出土した器台(11)で、受け部内面に直線的に交わる弧線帯がＵ字形に2手に分かれ、それぞれの末端にｂ類の撥形部を形成している。吉野口遺跡例も同時期の竪穴住居から出土した器台(9)で、細片のため文様の構成は明らかでないが、原尾島遺跡例に近い文様が想定される。筒部外面の文様の特徴から立坂型特殊器台との関連を指摘されている。

ⅡA類(矢部南向遺跡[28]・原遺跡[29])　矢部南向遺跡例は弥生後Ⅲ期の竪穴住居の廃絶後に形成された土器溜りから出土した器台(6)で、受け部内面に文様帯が一巡すると思われる。撥形部はｄ類である



第13図　文様復原案





1．宮山遺跡　　2．酒津遺跡
3．前山遺跡　　4．菅生小学校裏山遺跡
5．津寺一軒屋遺跡　　6．足守川矢部南向遺跡
7．楯築弥生墳丘墓　　8．上東遺跡
9．吉野口遺跡　　10．鹿田遺跡
11．百間川原尾島遺跡　　12．百間川今谷遺跡
13．津島遺跡　　14．高塚遺跡
15．津寺遺跡　　16．立田向山遺跡
17．矢部　　18．原遺跡
19．中山遺跡　　20．本郷遺跡

※遺跡の縮尺は７が任意、
18・19が1/6、他は全て1/4

第14図　撚形文関連資料出土例および遺跡位置図（白ヌキは出土地不正確）

が、2つの撥形を一つの弧線で覆って1つの撥形部としているようにも見受けられる。また、撥形部の基部と基部をつなぐように半円形の弧線帯が描かれるが、撥形部と弧線帯を繋ごうとする意識を読み取ることができよう。遺構から出土した土器は弥生後Ⅳ期が多数を占め、竪穴住居廃絶の時期が弥生後Ⅲ期と考えられることから、弥生後Ⅳ期に属する可能性が高い。原遺跡例はトレンチ調査時に出土した弥生後Ⅳ期前半に比定されている壺(18)で、口縁外面に、中央を横方向の多線帯で上下に分割し、上段にf類の撥形部を、下段に鋸歯文を一巡させている。さて、矢部南向遺跡例と原遺跡例は弧線帯と撥形部の構成が類似していることから同じ類に分類したが、原遺跡例では撥形部と弧線帯を一体的にしようとする意識は見られず、撥形部自体も弧線的な表現から逸脱している傾向が認められる。また両者とも撥形部の端部の間に空間が形成されているが、原遺跡例ではさらに垂線を加えて別の図形を形成しており、細部においてはかなり変容していることを指摘しておく。

ⅡB類(高塚遺跡[30]・今谷遺跡[31])　高塚遺跡例は弥生後Ⅲ期後半の土器溜りから出土した器台(14A)で、受け部内面にS字状文から逆ハの字形にのびる弧線が施文されている。逆ハの字形の上部には弧線の表現が無く、完全な撥形文とは言えないが、丁度その部分が受け部から口縁へ立ちあがる屈曲部と一致しており、不可視の線によって撥形文を形成していたとみなすことができ、この類に含めた。今谷遺跡例は弥生後Ⅳ期の溝から出土した壺(12)で、口縁内面にS字状文の巻き込み部に付随する撥形文が見られる。撥形部内の弧線は少なく、S字状文も形式的な表現となっている。

ⅢA類(宮山遺跡[32]・前山遺跡[33]・津寺一軒屋遺跡[34]・鹿田遺跡[35]・津島遺跡[36])　宮山遺跡例は墳丘墓付近で採集された器台(1)で、人面を中心として上下とその横にd類の撥形文が描かれている。撥形内の弧線には直線が多用される特徴を示す。前山遺跡例は丘陵上に営まれた墳墓群周辺で出土した高杯(3)で、脚裾部全面に2つの撥形文を分銅形に組合わせたもの、一つの撥形の上部に半裁された撥形文を横位に付随させたもの、S字文と組合わせたものなど様々な撥形文がランダムに配されている。撥形部の表現もb・c・d類と多様だが、撥形内の弧線は密で、比較的丁寧に描かれた印象を受ける。弥生後Ⅲ期に遡ると考えられている。津寺一軒屋遺跡例は河道から出土した弥生後Ⅳ期前半の壺(5)で、器表面に渦巻文や竜と思われる文様と共に描かれている。撥形文の一部が欠損しており全容は不明だが、上部の弧線が複数である特徴をもつ。鹿田遺跡例は弥生後Ⅳ期の井戸から出土した高杯(10)で、人面と共に、輪郭を二重にしたc類の撥形文が描かれている。津島遺跡例は現在調査中の弥生後期～古墳初頭の河道から出土した壺で、口縁内面に分銅形の輪郭のみの図形が2つ配されているが、前山遺跡例にみられる分銅形の構図から生じたと考えられ、この類に含めた。

ⅢB類(高塚遺跡[37]・津寺遺跡[38]・津島遺跡[39])　高塚遺跡例は古墳時代の竪穴住居に混入していた弥生後Ⅲ～Ⅳ期と思われる壺(14B)で、d類の撥形文が撥形文の変容と思われる多重線によるY字形の図形による文様帯の中に1つ配されている。津島例は先ほどの資料と同一遺構から出土した弥生後Ⅳ期の壺で、口縁外面の約1/3に撥形文を含めた弧線文を、残り2/3に鋸歯文を巡らせている。撥形文は波状の弧線の上にf類が一つのみ描かれ、周辺には高塚B例のようなY字形の図形も多用されている。津寺遺跡例は包含層から出土した古墳初頭の壺(15)で、鋸歯文風の直線文の間にe類の撥形文が描かれている。これらに共通する特徴としては、幾何学的な文様帯の中に一つのみ配される点で、象徴的な文様への転換を認めることができる。

ⅢC類(酒津遺跡[40]・菅生小学校裏山遺跡[41]・矢部出土土製品[42])　酒津遺跡例は高梁川の川底の包含層から採集された弥生Ⅳ期後半の壺(2)で、口縁外面に多重の輪郭で描かれている。、菅生小学校裏山

遺跡例は斜面堆積から出土した古墳前期の甕(4)で、肩部に弧線の極端に少ない撥形文が単独で描かれている。ほかに倉敷市矢部の水田から出土した弥生後期と考えられている竜形土製品の顎下部分にも撥形文が描かれている。

以上県内の出土例を概観したが、現時点では弧帯石が最も古く、また文様構成も最も複雑であり、撥形文の初源的なものと位置付けられよう。とすると撥形文は本来的には複数の弧線帯から形成されるべき文様と考えられ、上東遺跡例は弧帯石と同様の原理をとどめた文様と評価することができる。また、上東遺跡例の基本的な図形(第13図－I)はⅡA類の構図と共通するもので、ⅠA類からⅡA類が派生したと考えることもできる。続いて弥生後Ⅲ期後半にはⅠB・ⅡB・ⅢA類が出現するが、弧帯石にはそれらに繋がる要素も備えており、弧線帯と一体的な撥形文が、弧線帯から分離していく過程を想定することができる。さらに弥生後Ⅲ期後半～Ⅳ期前半では主に円形の面もしくは口縁外面に環状に文様を展開させる原則が認められるのに対し、弥生後Ⅳ期後半以降では単独での施文へ変化しており、施文法則の根本的な解体を認めることができる。また撥形部の表現においても、弧帯石にみられるａ類とｄ類の比較から、中央の空間や切り合いが複数の弧線帯の存在を暗示したものであり、さらに転じてｅ・ｆ類が生じると推察される。ｂ・ｄ類では弧線の粗密が認められるが、Ⅳ期後半以降存続するⅢB・ⅢC類にはｅ類が多用されており、表現の簡略化を後出的な要素としてとらえることができる。しかし、これらの変化を総合すると、図案の解体および文様の簡略化が同時に進行しているが、各類の出現期に明確な差は認められず、撥形文の変化が時間的な先後関係にのみ起因するものではないように思われる。伊藤玄三氏は直弧文の表現の差が施文対象の違いから生じることを指摘されているが(43)、撥形文でも同様の作用を想定でき、文様の分解および再編が多方向にわたってかつ急速に進行したと考えざるを得ないであろう。

続いて分布状況に目を向けると、撥形文が主に県南部の拠点的な集落から出土している傾向が看取されるが、この範囲は高橋護氏が「古墳時代前夜における文化圏としての吉備であり、政治的にも吉備中枢を形成する」(44)と位置付けた範囲とほぼ一致する点が注目される。とりわけ足守川中～下流域に分布が集中しているが、この地域は楯築弥生墳丘墓を含む墳丘墓が多数造営される吉備の中核であり、撥形文を用いた祭祀の成立と挙行にあたって、吉備中枢部が積極的に関与していた蓋然性は高い。また、ⅡA類の矢部南向遺跡と原遺跡、ⅡB類の高塚遺跡と今谷遺跡の文様の相関に示唆されるように、同じ類の中でも比較的複雑な撥形文は足守川中～下流域に分布し、時期的にさほど後出していなくても弧線帯を伴わなかったり簡略化された撥形文は周縁地域に多い傾向を見出すことができ、文様の変容の程度が吉備中枢部との関係を反映していると理解することもできる。このことは県外の撥形文についても同様で、撥形文は吉備との関わりの中で解すべきものであり、吉備と同様の原理が認められるほど吉備中枢部との繋がりが強いとみなすことができよう(45)。

ところで、近年の大規模な集落遺跡の調査結果から、弥生後Ⅲ期～Ⅳ期にかけて足守川中～下流域では集落の再編がおこなわれ、各集落が有機的に結びついていたことが明らかにされつつある(46)(47)。その中で、矢部南向遺跡を含む足守川遺跡群が中核的な位置をしめる集落とみなされ、集落再編の背景には「広く足守川下流域一帯を統括する政治的な要因から集合体への何らかの移動の働きかけ」が想定されている。一方、上東遺跡は足守川を媒介として足守川遺跡群と瀬戸内海を結ぶ門戸にあたり、波止場状遺構の建設という大規模な土木事業にあたっても、「広く足守川下流域一帯を統括する政治的な要因」からの「集合体への働きかけ」なくしては成し得なかったと思われる。先に指摘したように、

撥形文の文様の類似から、楯築弥生墳丘墓と上東遺跡および矢部南向遺跡の強い結びつきを認めることができ、想像を逞しくすれば、上東遺跡の波止場状遺構を管理し、波止場状遺構において撥形文を用いた祭祀を行ったのは「一帯を統括する政治的な要因」、すなわち吉備の中核的な集団であり、その主宰者は楯築墳丘墓に連なる人物であるという考えも浮上してくるのである。

なお、現時点では撥形文を用いた祭祀の具体的な内容を特定することはできないが、矢部南向遺跡および津島遺跡では特殊器台を共伴しており、吉野口遺跡の器台は立坂型特殊器台と強い関わりが指摘される一方、中山遺跡[48]・本郷遺跡[49]・立田向山遺跡[50]出土の特殊器台の文様に撥形文の要素が取り入れられるなど、撥形文と特殊器台には共通する観念が存在していたことは想像に難くない。すなわち、特殊器台出現の背景に首長の権威の拡大に伴って新しい葬送祭式が創出されたことを想定するように、同様の契機によって集落においては撥形文を用いた祭祀が成立し、共通の思想的基盤により吉備の一体性の形成を図ったと解することができるのではなかろうか。そして、古墳祭祀の成立にあたって特殊器台が終焉を迎えたように、撥形文についても祭祀の本質が薄れ、文様の解体を招いたと考えられないだろうか。

以上、上東遺跡の鉢874の文様を手がかりとして撥形文について検討を加えてみたが、撥形文は吉備中枢部において意図的に創出された、祭祀を表徴する文様であり、その背景には特殊器台と共通する何らかの観念が存在していたと考えられよう。また、撥形文の文様の解体の度合が、時間的な前後関係に起因するのみだけでなく、吉備中枢部との関係も反映する可能性も指摘できよう。しかし、筆者の力量不足であまり踏み込んだ論を成すことができず、吉備以外の地域における様相や直弧文の成立[51]についても問題を多く残したままであるが、いずれ機を改めて触れてみたいと思う。

末筆になりましたが吉田広、中村弘、青島啓、藤原好二、高畑知功、宇垣匡雅、重根弘和の各氏には資料収集に便宜を図っていただいたほか、有益なご教示をいただいたことを記して感謝致します。

（渡邉）

4　底部調整について

吉備型とされる甕(603に示される)は、内面指頭押圧痕が顕著に認められている。この要因は『器面の仕上に当って内側に差し入れた手で土器を支えながら外面の仕上げを行った痕跡』[52]との見解がなされている。これは、従来からのヘラミガキあるいはヘラケズリという器面調整の意味ではなく、新たな調整具の使用、その結果による土器底部の丸底化への変化として把握されるのである。

第15図の1は波止場状遺構の基盤層近くから検出された底部部分で、その形状から後期前葉に位置付けられるものである。内面調整はナデとヘラケズリで、外面はヘラミガキである。このヘラミガキは周辺部に丁寧に行われているため、図に示すように中央部分が張り出している。2は第9図土層断面の盛り土崩落部分の木材下層から検出し、先の底部よりも新しくなる。内面は押圧のちナデを行っている。外面の基本的な調整内容は、1のそれと変化は認められないが、外方のヘラミガキが強いために図で示すように明瞭な凹部を形成している。3は第9図の第6層からの出土であり、先の2種の時期よりも新しくなる。内面は押圧痕が認められ、その部分は手をあてがう状態であることが認められた。外面はヘラミガキを行うが、図に示すように平底状と張り出すように撫で肩状を呈し、一見して丸底と感じさせる。

底部の様相は、上東式後半期で内面に押圧痕と爪痕までが認められる663の底部は、張り出しなどを形成していない。658などは内面に明瞭な爪痕を残すが、ヘラミガキではなくナデによる調整である。676は内面に押圧痕を残すが、外面調整はハケである。これらの土器の底部は、ヘラミガキによる器壁の薄さへの傾向は認められないが、663のように薄く仕上げられているものも認められる。

さらに才ノ町段階になると、第15図の3に示したものが認められるようになる。この調整痕が丁寧に現れているのは、642である。第15図3の場合は、まだ粘土が完全に乾かない状態でヘラミガキを施したために内面にあてがった指の影響が出てしまっている。しかし、この642における底部は、そのようなことは全く観察されることなく調整されている。したがって、土器が乾燥した状態で行われたことが判断される。このことは、半乾きの状態では、木製ヘラの使用が可能であったと思考される。しかしながら、乾燥状態の器面には木製ヘラは使用に耐えるものではないと思われる。この木製ヘラに代わるものとして、鉄製ヘラが用いられたと推測されるのである。さらに、底部調整をヘラミガキとしているが、底部をケズリ込むことであり、ミガキを意味することではないと思考される。

紙面の関係上極めて概略的に記してしまったが、別の機会に改めて稿を起こしたい。　(下澤)

第15図　底部の調整

5　底部付着の炭化物について

甕形土器の外面には、煮炊きをした際に発生したと思われる吹きこぼれの痕と、内面に炭化物が付着した状態のものが検出されている。ここでは、鑑定の結果から後者について触れることにする。

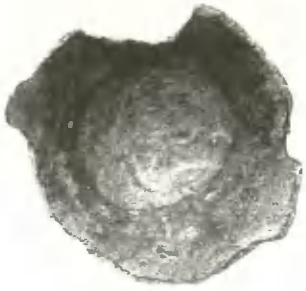
底部に認められた炭化物は、写真で示したような状態であった。1～5は底部分には面的な炭化物の痕跡が認められず、明確なリング状としてそれよりもやや上方に残されている。6は明確なリング状では無いが、そのような内容を示すものである。7は、底部分に炭化物を認めるものである。8と9は底部分とやや上の部分とでリング状態のように明確ではないが、そのような色調の差異を残している。さらに、底部分にも炭化粒の痕跡が広がっている。

この内容をさらに詳しく検討していくことにする。リング状に認められる炭化物の厚さは数㎜程度であるが、1－2は1－1の拡大したものである。これからを見ると、黒く炭化したリング状の部分とその下方では、様相が大きく異なるのである。このリング状を形成する胴部側については、このような厚みを持ってはいないが、やはり炭化物の付着あるいは黒く変色した状態を呈していた。しかしながら、下方の底部側は、胴部で認められたような状態は認めることはできなかったのである。この内容は、2～5でも明らかである。6は先のものより明確さにかけるが、基本的には同じ内容を示すものと思われる。7は底中央部分に炭化物が固まって認められるが、この写真で示すように底部よりもやや上の方に同様な炭化物の付着が認められることからして、底部全体に広がる状態で残されていたと思考される。このような状態で観察することになったのは、土器の洗浄の過程によるものと判断される。8と9は、対象の底部全面に炭化物の付着が認められるものである。この炭化物は塊となり厚みのある形状ではなく、植物であろう形状を明確に残した内容で付着しているのである。

炭化物がリング状に認められるものについては、極めて小さい気泡状となっている。7については気泡状ではなく、全体が塊としての炭化の状態を示していた。8と9は、前述したように細長い粒状となり、一見して米の炭化した状態を想定でる形状で残されている。これらの炭化物が全て炊飯に起因するかについては、全てのものに鑑定を行っていないので判断しかねるのである。しかしながら、リング状に残るものについては粒状のものが認められていることから、そのことに由来する可能性を思考することが許されるであろう[53]。

このように見ていくと、松谷暁子氏の見解におけるコメとアワそしてキビの2種類以上の混在の可能性を示されていることと関連し、1種類のみの炊飯を再考する必要がでてきた。このことについての全体的な検討ができなかったが、整理段階では細長い粒状と小さい粒状との2種類の炭化物が混在して底部に付着しているのが認められている。また、混在するものがモチ性のものであることからすれば、炊飯時における配慮をしなくても、同一条件で同じ状態で炊き上がることができたことになる。このように見ていくと、遺存した炭化の状態からコメの単品と異なる炊飯の姿が想定される。

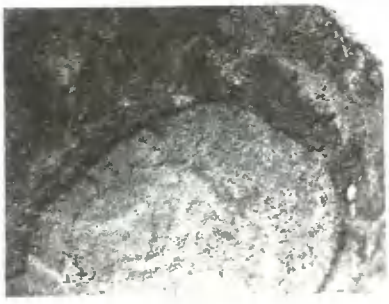
（下澤）



1—1

2

3



1—2

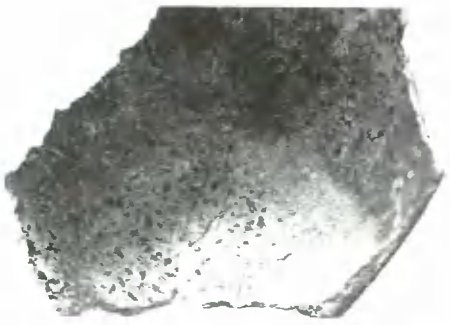
4

5

6

7

8



9

底部内面付着炭化物写真

6　祭祀について

波止場状遺構の調査では、何らかの祭祀を行っていたことが類推される内容が得られている。紙面の関係上、その概要を記し詳細な検討は後に譲る。

祭祀を類推させる内容とは、

1．第Ⅱ工区の基礎部分における貨泉、土器の完形品での出土

2．土器の焼成後の穿孔

3．器種の比率

の以上、3点についてである。

1の貨泉は両工区の接合部の第Ⅰ工区寄りで、最下層の暗灰色粗砂に用いられた横木の基礎材の下から検出した。土器についてはすでに述べている759の高杯は、意識的に杭の間に置かれた状態で検出された。531の壺もその状況から、第Ⅱ工区の基礎部分に置かれたものと判断される。このような状態の土器は正確な位置を記録していなかったが、第4章第8図のB－B′間の土層断面最下層から1062の器台を検出している。波止場状遺構築においては、その基礎部分の施工段階または構築の区切りの時点において祭祀が行われていたことが思考される。このことは、これらに関係する土器は、先に示した当遺構の構築時期と判断している時期と異なることがないのである。貨泉との関係は、その使用箇所からきているものと想定される。

2は波止場状遺構が完成し、使用を開始してからの行為である。そして、出土したほぼ全ての器種に認められた。穿孔の方向は器面外側から行われるが、鉢や高杯などは内面から行われている。穿孔は1ヵ所と思われていたが、3～4ヵ所認められるものもあるのである。382は、胴部下半に4ヵ所穿たれている。657は、胴部下半にかけて3ヵ所穿たれている。孔の内容は381のように、錐を用いたように丸く開けられるもの(内面側ははつる状態)、敲打が丸い状態になるもの、383・486のようにかなり大きい孔となるものが観察される。この敲打により穿孔が行われたほかに、器面に敲打痕だけをとどめているものも存在している。敲打痕写真は、1054の敲打痕の状態である。560の胴部下半には2ヵ所の敲打痕が認められ、器面には明瞭な剝離が残されているがいずれも裏面に達していない。488の敲打は、内面器壁を盛り上げる影響を与えるが開けられていない。また、594は3ヵ所の敲打痕が存在するが、その内の1ヵ所は敲打痕のみで未貫通である。この複数の穿孔の存在に対し、埋葬に伴う供献儀礼に伴う土器に施される穿孔は1ヵ所であるのが通例である。また、穿孔の状況から1個体に対し、1人が敲打を行うとするよりも複数の人が関わり、行われたことが思考されるのである。なお、小形の鉢においては、穿孔される割合が極めて低いことが認められている。

敲打痕写真

3については出土の土器を全て観察し、その遺存状態から器種別の出土を出すことは今回の整理では不可能であった。しかしながら、実測するしないの判断段階での相対的な数は得ている。また、甕においては口縁部形状の観察から、ほぼ全ての口径3分の1が遺存するものについての数を得たが、数はその割合で示した。これによると、甕66%、壺15%、鉢12%、高杯7%となる。近接する足守川矢部南向遺跡の土壙72では甕42%、高杯26%、鉢12%、壺12%、古墳時代に入るが同遺跡の竪穴住居62上層では高杯77%、甕10.7%、鉢4.7%、壺3.4%、小型器台1.9%を示している。この内容と波止

場状遺構の時間幅とでは短絡的に判断しがたいが、甕の割合が極めて高い反面、高杯のそれが低くなっていることが注目される。このことは、埋葬祭祀に伴う供献行為という儀礼とは異なる祭祀が思考されるのである。その背景に、生きる人を送りだすという行為であり、それにともなう祭祀が存在していたと想定しても許されるであろうか。

万葉集巻15第3694の歌「わたつみの　恐き道を　安けくも　なく悩み来て今だにも　喪なく行かむと　壱岐の海人の　上手の卜占を　象焼て　行かむとするに　夢のごと道の空路に　別れする君」[53]には、明確に海神のいる恐ろしい道としての航海の意識がすでに存在し、さらに、卜骨による航海の占いが行われていたことが知られるのである。さらに、同巻1第62の歌「ありねよし　対馬の渡り　海中に　幣取り向けて　早帰り来ね」[54]においては、幣を海神に捧げていることが詠まれている。いずれもが国家が関わることであり、時代的なことからも祭祀の規範の存在が知られる。これよりも、古い時代でさらに一元的な統治組織が形成される前段階で、地域的統治組織の段階を想定される時期である。しかしながら、恐ろしい海神の存在する海に船出をすることは、この時代においても全く同じだったのではないであろうか。同巻8第1453の歌「玉だすき　かけぬ時なく　息の緒に　吾が思う君は　うつせみの　世の人なれば　大王の　命畏み夕されば　鶴が妻呼ぶ　難波潟　三津の崎より　大船に　真楫しじ貫き　白波の　高さ荒海を　島伝ひ　い別行かば　留まれる　われは幣引き　斎ひつつ　君をば待たむ　はや帰りませ」と詠まれるように、船旅をする人の無事を祈って家人が幣を捧げ神を祭っていたことが知られる。このことは、帰るまでの間も祭祀の中に組み込まれていたことを思考される。埋葬祭祀が死者との別れと同時に新たな関係の引き継ぎの儀式であるのに対し、航海に出る人は生者であり、その人が生者として帰ることで元の生活に戻ることができるという全く異質な内容である。このようなことから、お焦げの存在は海に出る人と家族との共食であり、この共食に用いた土器を海に投供することで二者と海神との供食がなされたことが考えられる。さらに、海に出る者と家族において、土器に穿孔を行うという行為が、個人ではなく、家族を含めた結果としての複数の穿孔あるいは敲打痕により示される。そして、鉢の出土量の多さから共飲そして、海に投供することで三者の供飲がなされたことが思考される。

以上、波止場状遺構にともなう祭祀行為には、工事の節目となる施工部分に現在風にいえば、安全祈願と言えるべきものが存在しその姿をとどめ、さらに、波止場状遺構を使用する時に、航海の安全のために捧げられたと思われる多量の土器から二通りの姿が浮かび上がるのである。このことは、弥生後半から古墳時代にかけての埋葬祭祀における共飲共食儀礼の研究が進んでいるが、この種のものについては調査例も少なくほとんど顧みられていないのが現状である。いずれにしても、弥生社会について、その構造的性格を明らかにしていく新たな資料を得ることができたと確信するのである。

この節で記した内容は、十分な検討をしていないまま文章化してきてしまった。したがって、個々の問題において論拠の構築がなされていないことは明らかである。このことについては、文中で何度も記しているが、改めて別の機会に譲ることで、その責を果たしたい。　（下澤）

註

(1) 伊藤晃・柳瀬昭彦他「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第2集』岡山県教育委員会　1974年3月
(2) 柳瀬昭彦他「上東・川入」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』岡山県教育委員会1977年3月
(3) 註1、2による。
(4) 註1、2による。
(5) 全ての器種の数量化をしたのではなく、甕以外については実測可能なものについての割合が大半を占める。
(6) 大阪府大阪狭山市教育委員会　生涯学習推進課　市川秀之の教示による。
(7) 柴田英樹「津寺遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』岡山県教育委員会1995年3月
(8) 岡山県教育委員会おいて1995年から1998年に4分冊の報告書が刊行されている。
(9) 岡山県教育委員会「加茂政所遺跡・高松原古才遺跡・立田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告138』1999年3月
(10) 岡山県教育委員会「三手遺跡・高塚遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告150』2000年3月
(11) 高橋護「弥生土器－山陽」『月刊考古学ジャーナル』ニューサイエンス社1980年
(12) 高橋護「上東式土器の細分編年基準」『研究報告7』岡山県立博物館1986年3月
(13) 大橋雅也「津寺遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』岡山県教育委員会1995年3月、澤山孝之「津寺遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104』岡山県教育委員会1996年3月
(14) 註13の「津寺遺跡3」による。
(15) 「津寺遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127』岡山県教育委員会1998年3月の5580の土器である。
(16) 下澤公明他「百間川沢田遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59』1985年3月
(17) 註2による。
(18) 註7の第1分冊による。
(19) 註7の第3分冊による。
(20) 橋本裕行「弥生土器の絵」『月刊考古学ジャーナル』ニューサイエンス社などによる。
(21) 春成秀爾「絵画から記号へ－弥生時代における農耕儀礼の盛衰－」『国立歴史民俗博物館研究報告第35集』1991年11月
(22) 出宮徳尚「竜を祭った遺跡」『月刊文化財4』1979年
(23)a 高橋護「組帯文の展開と特殊器台」『岡山県立博物館研究紀要』5　1984年3月
(23)b 宇垣匡雅「特殊器台形土器・特殊壺形土器に関する型式学的研究」『考古学研究』第27巻　第4号1981年3月
(24) 文章中では、「津寺遺跡3」(岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104』1996年3月)での編年案を用い、弥・後・Ⅲを弥生後Ⅲ期と表記している。
(25) 近藤義郎『楯築弥生墳丘墓の研究』1992年12月
(26) 岡山県教育委員会「百間川原尾島遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39』1980年3月
(27) 岡山市教育委員会『吉野口遺跡』1997年3月
(28) 岡山県教育委員会「足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94』1994年3月
(29) 岡山県教育委員会「原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告54』1983年3月
(30) 岡山県教育委員会「高塚遺跡・三手遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告150』2000年3月
(31) 岡山県教育委員会「百間川今谷遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告114』1996年3月
(32) 河本清「絵画土器、人形・鳥形スタンプ文土器」『吉備の考古学的研究』上1992年11月
(33) 岡山県教育委員会「前山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告115』1997年3月
(34) 岡山県教育委員会「津寺一軒屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告142』1999年3月
(35) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター「鹿田遺跡Ⅰ」『岡山大学校内遺跡発掘調査報告』第3冊1988年3月
(36) 岡山県古代吉備文化財センター発掘。調査担当者高畑知功・島崎東らの御好意により、まだ未整理の資料を実見させて頂いた。
(37) 註30に同じ。
(38) 註14と同じ
(39) 註36に同じ。
(40) 間壁忠彦「倉敷市酒津及新屋敷遺跡出土の土器」『瀬戸内考古学』第2号1958年
(41) 岡山県教育委員会「菅生小学校裏山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告81』1993年3月
(42) 倉敷市教育委員会のご教示により実物を実見させて頂いた。
(43) 伊藤玄三『直弧文』ニューサイエンス社1984年10月
(44) 高橋護「弥生後期の地域性」『吉備の考古学的研究』上1992年11月
(45) 九州～東海に至る各地においても擬形文が散見されるが、中には吉備系の土器が搬入されていることから吉備との直接的な交流を想定できる遺跡もある。
(46) 草原孝典「弥生時代後期の遺構・遺物について」『吉野口遺跡』1997年3月
(47) 江見正己「弥生時代の集落変遷」『高塚遺跡』2000年3月
(48) 落合町教育委員会『中山遺跡』1978年3月
(49) 高梁市教育委員会「本郷遺跡」『高梁市埋蔵文化財発掘調査報告』第2集1999年3月
(50) 宇佐晋一・斎藤和夫「纏向石塚古墳南側周溝から出土した弧文円板の文様について」『纏向』1976年9月
(51) ここで、纏向遺跡出土の弧文円板の成立について私見を述べると、宇佐晋一・斎藤和夫の抽出した弧文円板の基本単位※1の

甲＋乙および丙＋丁が一つの撥形文に対応すると考えられ、両者の撥形文の間にある三角の透しは、一つの撥形文が2つの弧線帯からなることを現した切り合いや空間と同じ原理から生じたものであり、連結帯も前山例にみられる横線帯からの発展と考えることができる。また甲＋丁からなる図形も上東遺跡例の作図過程に同様の単位が認められる（第13図－Ⅱ）。さらに見方を変えると、周縁には丙＋丁→甲＋乙→丙＋丁の撥形部が順に並ぶが、丙＋丁と甲＋乙の間の巴形の透しも、上東遺跡例の撥形部の端部同士で作られた巴形の空間に祖形をもとめることができる。弧文円板では薄い板への透し彫りであり、強度の関係上、上東例のように端部を離すわけには行かなかったのであろう。しかも単に端を合わせては円形の透孔となるため、巴形を意識して内側に巻き込んだ端部を切断する必要が生じ、偶発的に甲図形が成立したと考えられる。これも施文対象の違いに起因する変容とみなすことができるが、弧文円板にみられる単位図形は概ね吉備の撥形文に萌芽が認められており、吉備の撥形文を変容、発展させたものとみなすことができよう。ついでに直弧文の成立に関してであるが、筆者は特殊器台が特殊器台型埴輪、さらに埴輪に変容していったように、撥形文も古墳祭祀に組み込まれるにあたって直弧文へと変容したのではないかと考えている。ただし、直弧文には対角線での分割や原単位を少しずつ変容させて割り付ける手法など吉備に見られない要素が加わっており、吉備のみでの自立的な発展は考え難く、今後の課題としておきたい。

※1宇垣匡雅・古市秀治・乗岡実「集成２　特殊器台・特殊壺」『吉備の考古学的研究』上1992年11月

(62)高橋護「弥生時代終末期の土器編年」『研究報告９』岡山県立博物館1988年３月

(63)小林正史・柳瀬昭彦「炭化物からみた弥生時代の煮炊き用土器の使い分け」『日本考古学協会研究発表要旨』1998年５月において、オカズ用としての甕の存在をも考えておられる。ここでは、そこまで詳細に検証できるまで至っていないので、遺存した炭化物の状態から炊飯としての内容を検討した。

(64)読み下し文は桜井満訳註『万葉集上・中・下』旺文社文庫1979年による。

(65)註20による。

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 157

下庄遺跡
上東遺跡

主要地方道箕島高松線道路改築に伴う発掘調査2
（第1分冊）

2001年3月15日　印刷
2001年3月31日　発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3
発行　岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6
印刷　山陽印刷株式会社

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 157

下庄遺跡
上東遺跡

主要地方道箕島高松線道路改築に伴う発掘調査 2

（第 2 分冊）

2001

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 157

下庄遺跡
上東遺跡

主要地方道箕島高松線道路改築に伴う発掘調査 2

（第 2 分冊）

2001

岡山県教育委員会

附編　自然科学的分野における分析・鑑定

上東遺跡出土資料の自然科学的調査

東京国立文化財研究所　　平尾良光　榎本淳子　早川泰弘

上東遺跡出土土器付着炭化植物遺残の識別

東京大学総合研究博物館　　松谷暁子

上東遺跡出土の動物遺存体と骨角製品

岡山理科大学　　富岡直人

上東遺跡出土の土器内固形物分析

漆器文化財科学研究所　　四柳嘉章

上東遺跡出土資料の自然科学的調査

東京国立文化財研究所　平尾　良光・榎本　涼子・早川　泰弘

1　はじめに

(財)元興寺文化財研究所から岡山県の上東遺跡から出土した貨泉について自然科学的調査の依頼があった。材料の産地を推定するために鉛同位体比の測定を行いその結果を考察した。

2　資　料

資料は岡山県倉敷市の上東遺跡から出土した貨泉１点である。上東遺跡は県道改築に伴って発掘された遺跡で、弥生時代後期の標準となる土器が出土している。資料とされた貨泉は弥生時代後期前葉の土器を伴う層から出土しており、分析には錆粉末が供された。

3　鉛同位体比法

1）鉛同位体比法による青銅原料の産地推定

産地推定のために鉛同位体比法を利用した[1]。一般的に、鉛の同位体比は鉛鉱山の岩体が異なればそれぞれの鉱山毎に特有の(固有の)値となることが知られており、産地によって特徴ある同位体比を示すことが今までの研究でわかっている。そこで、鉛の産地の違いが鉛同位体比に反映されるならば、文化財資料に含まれる鉛の同位体比の違いは材料の産地の違いを示すと推定される。古代の青銅には鉛が微量成分として0.01%程度、あるいは主成分の一つとして５～20%含まれている。鉛同位体比の測定に用いられる鉛量は測定器(質量分析計)の感度が非常に良いため、１μgの鉛があれば十分である。資料の金属部分でも錆部分でも同位体比は変わらないことが示されている。資料から鉛を化学的に分離し、表面電離型質量分析計で同位体比を測定した。

2）鉛同位体比の測定

資料から少量の金属を採取して、鉛同位体比測定用の資料とした。資料を石英製のビーカーに入れ、硝酸を加えて溶解した。この溶液を白金電極を用いて２Vで電気分解し、鉛を二酸化鉛として電極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。0.1μgに相当する鉛をリン酸－シリカゲル法で、レニウムフィラメント上に載せ、サーモクエスト社製の全自動表面電離型分析計 MAT262に装着した。分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を1200℃に設定して鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した鉛標準物質 NBS-SRM-981で規格化し、測定値とした[2]。

3）鉛同位体比測定結果と考察

測定された鉛同位体比を表で示した。得られた値を今までに測定した他の資料と比較してみると、図２、３のようになった[1][3][4][5]。

図２は縦軸が$^{208}Pb/^{206}Pb$の値、横軸が$^{207}Pb/^{206}Pb$の値である。この図をＡ式図と呼ぶこととする。この図で鉛同位体比に関して今までに得られている結果を模式的に表し、今回の結果をこの中にプロットした。すなわち、日本の弥生時代に相当する時期の東アジア地域において、Ａは中国前漢鏡が主として分布する領域で、華北の鉛である。Ｂは中国後漢鏡および三国時代の銅鏡が分布する領域

で、華南産の鉛と推定とされる。Cは現代の日本産の大部分の主要鉛鉱石が集中する領域である。Dは朝鮮半島産の多紐細文鏡と細形銅剣が分布する幅のあるラインの中心領域として示されることが判っている。また弥生時代後期にはaで示されるように非常に規格化された鉛の分布がある。図3は縦軸が$^{207}Pb/^{204}Pb$の値、横軸が$^{206}Pb/^{204}Pb$の値である。この中で図をB式図と呼ぶこととする。図3の中でA'、B'、C'、D'はそれぞれ中国華北、華南、日本、朝鮮半島産の鉛領域を表している。これらの図の中で本測定値は「●」で示される。

本資料はA式図でA領域に含まれることが分かった。しかもa領域とされた場所に位置する。B式図についてはA'領域に含まれている。このことから、この資料は中国華北産の材料を用いて作られている。しかも、弥生時代後期に見られる典型的な材料と同じ値を示した。この値は、弥生時代後期の材料と関連して、今後重要な意味を持つかも知れない。

引用文献

（1）平尾良光，榎本淳子：弥生時代青銅器の鉛同位対比，『古代青銅の流通と鋳造』平尾良光編，鶴山堂(東京)，p29-161(1999)

（2）平尾良光，馬淵久夫：表面電離型固体資料分析計ＶＧ Sectorの規格化について，保存科学 **28**，17-24(1989)

（3）馬淵久夫，平尾良光：鉛同位対比法による漢式鏡の研究；ＭＵＳＥＵＭ　№370,4-10(1982 a)

（4）馬淵久夫，平尾良光：鉛同位対比法による漢式鏡の研究(二)；ＭＵＳＥＵＭ　№382,16-26(1983)

（5）馬淵久夫，平尾良光：鉛同位対比から見た銅鏡の原料；考古学雑誌　**68**，42-62(1982 b)

［測定条件］

測定装置	SEA5230
測定時間(秒)	180
有効時間(秒)	176
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ0.1㎜
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	1000
コメント	98149岡山県古代吉備文化財センター　貨泉

［スペクトル］

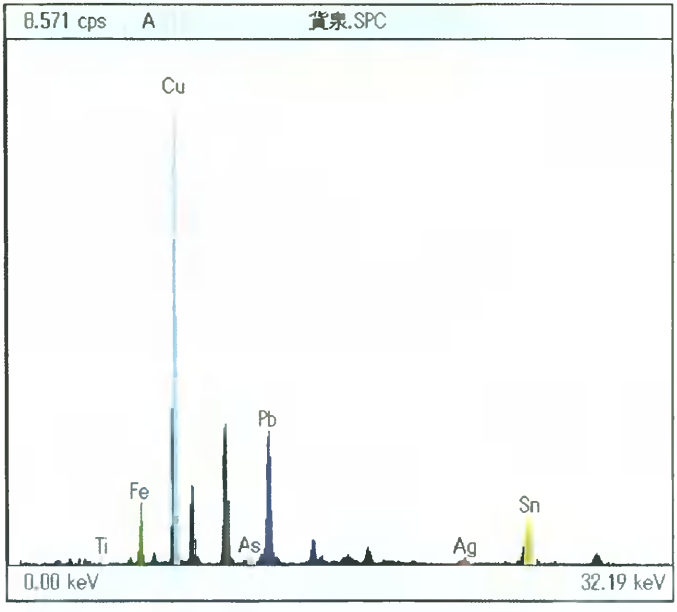


図１　貨泉表面のXRFスペクトル

貨泉の鉛同位体比値

	$\frac{^{206}Pb}{^{204}Pb}$	$\frac{^{207}Pb}{^{204}Pb}$	$\frac{^{208}Pb}{^{204}Pb}$	$\frac{^{207}Pb}{^{206}Pb}$	$\frac{^{208}Pb}{^{206}Pb}$
貨泉 KP1470	17.743	15.557	38.420	0.8768	2.1654
誤差範囲	±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006

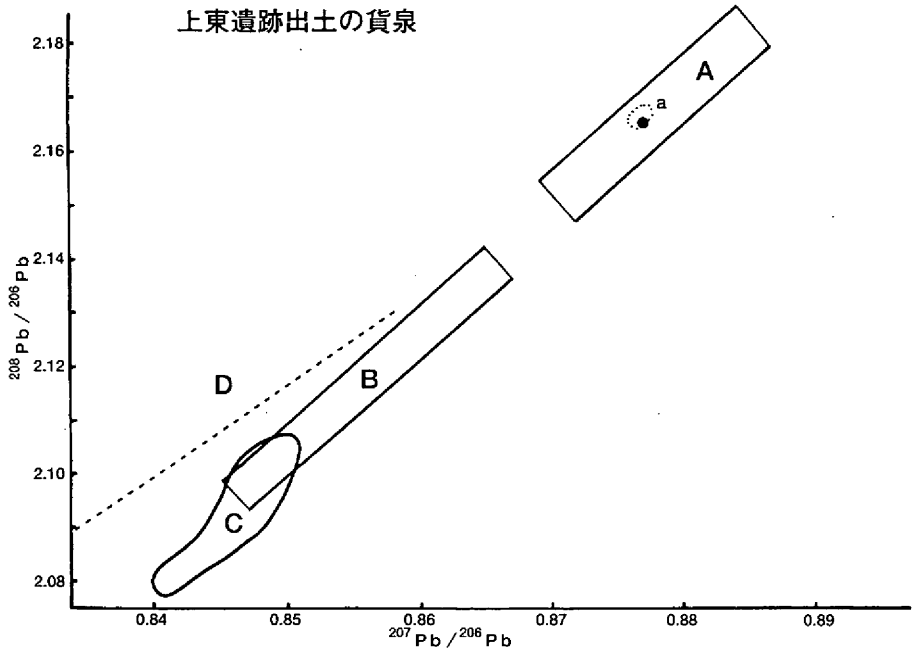


図 2

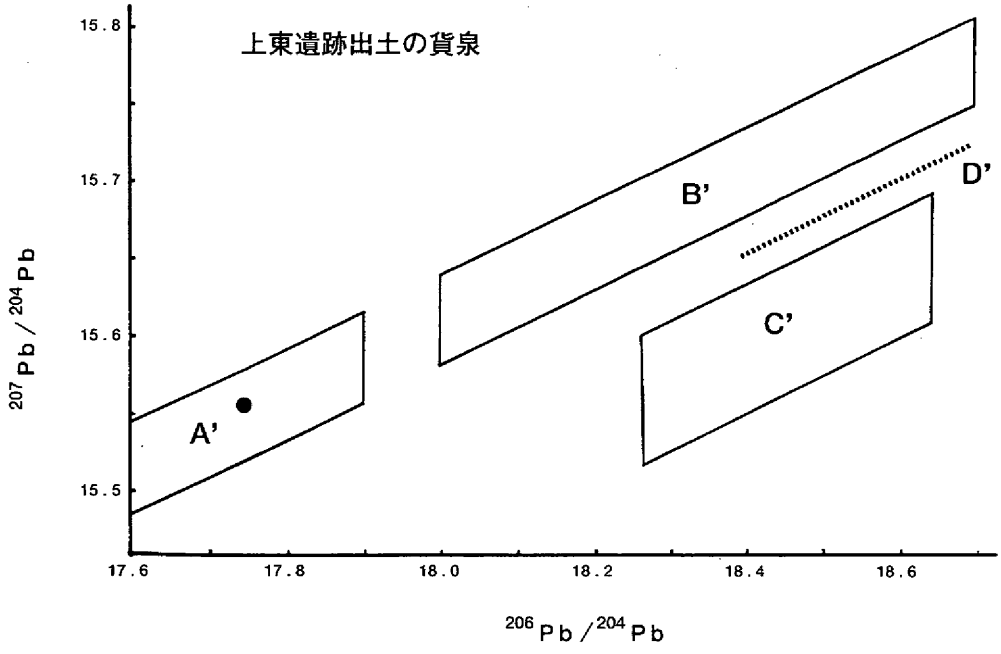


図 3

上東遺跡出土土器付着炭化植物遺残の識別

東京大学総合研究博物館　松谷　暁子

1　はじめに

上東遺跡から出土した弥生式土器には、内面に炭化物が付着したものが多数存在する。この付着物がどの様な植物に由来するかの識別を依頼された。これまでの経験で土器付着物の識別が困難なことは実感していたが、上東遺跡の土器付着物の中には、穀物粒との推定が可能な粒状の炭化物が観察され、しかもヒエ・アワ・キビなどイネ科雑穀粒に相当する大きさのものもあるという。

付着物の残存状況がどの程度なのかを知るため、土器が保管されている古代吉備文化財センターにおいて、実体顕微鏡による観察を行ったところ、付着物の多くは、外形の不明な炭化物が一面に付着している。しかし、穀類の粒と推定可能な付着粒が認められるものも確かに存在し、しかも、粒状の大きさには大小二種類が認められる。大きな方の粒状物は、長さ５～６㎜、幅２～３㎜の細長い形状をしていてコメ粒と考えられ、小さな方の粒は、長さ2㎜以下、幅１～1.5㎜位で、ヒエ・キビ・アワなどイネ科の雑穀である可能性が大きい。イネ科雑穀(ミレット)の可能性が考えられる土器付着粒は、極めて珍しく、付着物の一部に微細構造が残存していれば、ヒエ・アワ・キビ由来の付着物が識別できることも期待される。

①　この小粒の炭化付着物が、イネ科雑穀なのか。あるいは、大きさは似ているが、イネ科以外のもの、例えばシソ科シソ又はエゴマの可能性はないのか。また、イネ科雑穀粒としたら、その種類が識別できるだろうか。

②　大きな粒状付着粒が、想定されているように、コメ粒であると確認できるのか。あるいは、大きさが似ているオオムギ粒の可能性はないのだろうか。

③　粒状が認められない付着物についても、何らかの知見が得られないものか。

の３つの疑問に何らかの解答が得られることを期待して、観察を試みた。

2　試料

雑穀粒状とコメ粒状の付着粒が認められるものを中心に、詳しい観察が可能と思われる試料をやや多く選んで、送付して貰った。送付された試料には遺物と採取粒の二種類がある。遺物は、土器破片(底部が多い)に付着した状態のものが31点、採取粒は、完形品や大形の土器に付着しているものの一部を剝したもので27点あり、合計58点になる(表１)。

3　方法

遺物付着物と採取粒の全ての試料について、実体顕微鏡による外形の観察を改めて行い、さらに微細構造の観察を行うことが可能と思われる試料を選んで、走査型電子顕微鏡(SEM)による観察を行った。

4　実体顕微鏡による観察

Ⅰ　土器片に付着しているもの

上東遺跡から出土した土器内面の壁に付着した炭化物は、底から５～６㎝上の部分に一番多く付着しており、少数を除き底の中央部には付着物がない。

前述のように、大小二種類の粒状付着物が認められるが、長さ５～６㎜、幅２～３㎜の細長い形状

をした大きな粒状付着物をコメ粒状、長さ2㎜以下、幅1～1.5㎜位の小さな粒状付着物を雑穀粒状と表現する。しかし、粒状付着物の方向は一定ではなく、様々な方向を向いていると考えられる。従って、コメ粒状であっても角度によっては、雑穀粒状に見えることがあると推定される。粒状であっても、どちらに分類すべきかがはっきりしない付着粒も多い。粒状物がはっきりせず、一面に付着しているものはベタ状と表現することにした。しかし、後述のように、一見してベタ状と見える付着物中にも粒状物が観察される場合が多い。これらの付着物を、実体顕微鏡下で詳しく観察し、その中から微細構造の観察を行う試料を選んだ。

①コメ状の付着物について

厚みもあり、外形も顕著に観察されるK79の付着物に注目すると、細長いものの他に、短い粒も認められるが、中央部が中空ではなく、コメ状の横断面と考えられる(写真1)。K10の付着物は、K79の付着粒よりも厚みがあり、剝がれ易(やす)くなっている(写真2)。K20・K38・K76の付着物は、厚みはなく薄いとはいえ、同形同大の類似の付着物が観察される(写真3・4・5)。
K64の付着物は、横断面を残していると考えられる粒の他、剝がれた跡が長いコメ状の外形をしている(写真6)。

頴が残っていない場合のイネ粒(コメ)とオオムギ粒は、外形と大きさが類似しており、炭化物での識別が困難な場合があるが、イネでは内外頴の跡を示す二本の線、ムギ類では溝状構造の存在などによって、識別される場合が多い(松谷1990、鈴木・松谷・片平　1999)。上東遺跡から出土した土器付着物の状態は、炭化粒のような明瞭な特徴が認め難く、細長い形状はオオムギよりはイネの方に似ていると思われるが、断定するのは困難と思われる。そこで、K79とK10から付着粒を選んで、SEMによる観察を試みることにした。

②雑穀粒状の付着物について

形態がもっとも明瞭な粒が数多く観察されるK19の付着物に注目すると、一部に、長さが6㎜位のコメ状と見られる付着物が混在しているが、大多数の粒は、楕円形あるいは角ばった菱型をしており、それらの細胞壁は厚く、中央部は中空になっている(写真7)。K13の付着物は、K19の付着粒よりも残存量が少ないが、粒の輪郭が残っており、大きさと外形がK19の付着粒と類似している(写真8)。この他、K17(写真9)・K61(写真10)・K81(写真11)・K100(写真12)の4試料の付着物は、K19やK13に比較すると、粒の数も少なく、外形も明瞭とはいえないが、小型の粒状付着物が観察される。実体顕微鏡で見る限り、これらが同じ種類かどうかの判断は難しい。

大きさと外形が似ているヒエ・アワ・キビの三者は、頴が残っているときには、一般に乳頭突起の存在に由来する横方向のしわ状模様によってアワが識別されることが多く、キビやヒエは光沢のある厚い頴の存在が識別の鍵になる。しかし、上東遺跡の付着物の場合はそのような特徴がはっきりしない。従って頴は残っていない可能性が極めて高い。また、頴を除去したイネ科の頴果には、胚又はその跡やへそが見いだされ、それらも識別の手掛かりになるはずであるが、そのような構造も上東遺跡の付着粒には見いだされない。そこで、頴を除去したヒエ・アワ・キビの頴果(市販のもの、精白度は様々で、胚が残っているものも残っていないものもあり、内外頴が残存している粒が混在しているものもある)を坩堝にいれて水を加え、加熱して焦がした各粒と比較を試みた。キビは長さも幅も付着粒より大きく、ヒエも付着粒より大きい。アワは付着粒より大きいものもあるが、付着粒と同じくらいの大きさのものが多く、アワの可能性が一番高い。また、岡山県南溝手遺跡の弥生時代中期後半

のカメからは、雑穀粒と大きさや外形が類似しているシソ科のエゴマが識別されている(松谷1996)。従って、エゴマとの区別についても考慮する必要があるが、果皮を除去したエゴマの炭化したものも2㎜以上と大きく、エゴマの可能性はほとんどないと考える。しかし、大きさに頼る判断にはしばしば問題が残るので、やはり微細構造を観察する必要がある。

③その他の粒状付着物

また、K15(写真13)・K16(写真18)・K18(写真14)・K36・K50・K53(写真15)・K55(写真19)・K56・K68(写真21)・K76・K77(写真17)・K84(写真16)などにも、粒状付着物が認められるが、残存している外形からは、雑穀状ともコメ状とも判断できない。

④ベタ状

雑穀状粒やコメ状粒が観察されず、厚さは厚いものや薄いものなど様々であるが、連続して付着物が存在しているもの、亀裂が入っていることが多く、また、所々に剝がれた跡が認められる。付着物の厚さの厚いものと薄いものがあり、K42・K54は、付着物の厚みが厚く、亀裂が存在するが、K37・K41・K48(写真22)・K49は、付着物の厚さが薄い。

以上のように、付着物を、コメ状・雑穀粒状・粒状・ベタ状の4つのタイプに分類して、土器片毎に表1にまとめたが、明らかに複数のタイプの付着物が混在している土器片がある。例えば、K19は、雑穀粒状が多いが、ごく少数のコメ状付着物が含まれている。また、ベタ状の付着物中に、K38・K64・K76ではコメ状、K17・K61・K81では雑穀粒状、K77他では粒状の付着物が観察される。このように、ベタ状といってもその中にはコメ状や雑穀粒状のものが混在した場合があることを考えると、粒の形状が残っていない状態がベタ状というわけで、元々の正体はコメ状と雑穀粒状であると推定される。

コメ状のものは、オオムギではなく多分コメ(イネ)であろう。また、雑穀粒状のものもシソ科のエゴマやシソではなく、イネ科雑穀のアワ又はヒエであろうと推定されるが、その中のどちらかということを決めるのは困難であり、走査型電子顕微鏡による微細構造の観察を試みる必要がある。

Ⅱ　採取粒について

実体顕微鏡下の観察では、どのタイプかはっきりさせることが難しい(写真23・24)。27点の内から9試料を選び、走査型電子顕微鏡による観察を試みることにした。

Ⅲ　実体顕微鏡による外形を中心とした観察結果のまとめ

5　走査型電子顕微鏡による観察

外形や大きさが類似している、イネ科のヒエ・アワ・キビやシソ科のエゴマやシソの炭化粒は、外形による識別が困難な場合に、走査型電子顕微鏡による観察が役立つ場合が多い。イネ科雑穀の場合は、頴の表皮又は表皮下の細胞構造や、胚の跡やへその形態など、シソ科の場合は、果皮の表面・裏面・断面・種皮の表面などに特徴があり、部分的にではあってもそれらが検出されれば、識別が可能になることが多い(松谷1988、椿坂1993)。イネやオオムギも頴が残っている場合は、頴の表皮細胞の形態的特徴により識別が可能である(松谷1994他)。しかし、頴が残存しているのは、貯蔵されていた可能性が高い場合であって、煮炊きされた土器に残存した場合、どのような微細構造が残存しているのかについては、実際に観察してみる必要がある。そこで、実体顕微鏡下で保存が良いと判断される試料を選び、走査型電子顕微鏡による観察を行った。

走査型電子顕微鏡で観察した試料は、以下の試料である。

①コメ状の付着粒からは、状態の良さそうなK79とK10から剝がれた粒。

②雑穀状の付着物として、最も外形の保存の良いK19から幾つかを選び、その他に、K13とK100からも各1粒を選んだ。
③ベタ状付着物中の小粒状炭化物として、K77からの1粒を観察した。
④ベタ状付着物は、厚い付着物が残っているK54の一部を観察した。
⑤採取粒より、K23・K26・K31・K39・K43・K44・K52・K65・K90の9点について観察した。
合計16試料である。

SEM観察の手順は、金属試料台上の両面テープに試料を接着、白金パラジウム蒸着後、総合研究博物館の走査型電子顕微鏡(日立S-2250N型及びS4450型の機種)を使用し、伊藤尚子さんの操作で観察並びに撮影を行った。

① コメ状付着粒

K79：付着粒の多くは縦断面が露出している(写真25)。この状態の観察では、イネと判断できる構造は識別されなかったが、土器に付着している粒の一部を裏返して観察した試料では、イネ頴の跡を示すと考えられる二本の線構造が見いだされた(写真26)。

K10：頴が残っていない状態のイネ粒半分くらいの粒からは、多数の平行線構造が観察された(写真29-32)。この構造は、籾片が残存していて、イネであることが明らかな出土粒、神奈川県海老名市の本郷遺跡(松谷1991a)などの粒表面に認められるのと同じ構造といえる。煮炊きされた穀粒が焦げ付いた場合の例として、宮崎県内野々遺跡の甕の底に付着した炭化物を観察したことがある。上東遺跡の場合と異なり、コメ状の炭化粒は残存していなかったが、上記の構造と同じ形態の細胞が認められたため、多分イネであろうと判断した(松谷1992)。この時に観察されたのも同じ構造である。中果皮の最下層の横細胞と考えられる。現生のイネ粒で確認していないため、問題は残るとはいえ、コメ状の付着粒は、オオムギではなく、イネ粒に由来すると判断してもよいであろう。

② 雑穀粒状

K19：外形の保存の良さそうなものを実体顕微鏡下で、6粒選び、SEMによる観察を行った。外形と大きさは確かにアワ又はヒエ又はキビに相当するが、外頴や内頴に相当する構造は全く見いだされなかった。頴果表面の表皮細胞に相当すると思われる細胞は、見いだされているが、アワ・ヒエ・キビの識別が可能な程度の形態的特徴は明瞭ではない(写真33-48)。

K13：外形の保存はK19に比べると良くないが、頴のごく一部の破片と考えられる構造が見いだされており、ヒエやキビよりもアワの方に似ている(写真49-50)。

K100(写真51-52)：付着粒からはがした粒には、頴に相当する部分は残存していない。頴果表面に相当する細胞は、見いだされており、その形態から積極的にアワとの断定ができないものの、粒の大きさはアワの可能性が高い。

③ ベタ状の中の粒状として、K77から拾いだした粒(写真53-54)：K100の小粒粒と同様に、頴に相当する部分は残存していないが、頴果の表面の細胞と見られる部分が観察されており、その形態からアワとは判断できないが、粒の大きさや外形はK100と同様、アワに最も似ている。

以上のようにK19・K13・K100・K77の粒状はどれも良く似ている。シソ科のシソ属に見いだされる果皮の断面、裏面あるいは、種皮による証拠は見いだされず、イネ科の雑穀という可能性は極めて高い。粒の大きさは、現生のキビやヒエより小さく、アワに近いが、粒の大きさは、当てにならないところがある。頴の表皮細胞と考えられる部分が、少ないながら検出されているが、ヒエ・アワ・キビ

のどれかということを十分に示すだけの特徴は得られていない。頴果の表面の細胞は、現生のヒエではS字状、アワではもう少し細かい波状をしているが、付着粒表面で観察される構造は不明瞭になっている。他の遺跡から出土した炭化雑穀粒で、頴の特徴から識別されたものの頴果表面と比較してみたところ、最も似ているのはやはりアワと考えられる。

④ベタ状付着粒は、K54から一部を遊離して観察を行ったが、細かくなった断片が塊をなしているものの、由来した穀物の特徴を示す構造は観察されなかった。

⑤採取粒からは、最初、K23・K26・K43・K44・K52・K65の6点を選んだ。K26は、外形がわかる粒は認められないにもかかわらず、イネ科雑穀(ミレット)であると判断できる細胞構造が観察された。外形の保存が良い他の小粒付着物よりもはるかに広範囲の部分が残っていた。頴の最も外側の表皮細胞がそのままというより、薄い表面が剥がれて、その直下の構造が露出している状態と判断される(写真55-56)。乳頭突起に相当すると考えられる細胞も観察され、この部分はアワの頴に由来すると言ってもよいであろう。現在の市販の雑穀でも脱穀や精白が不完全な粒が時折混在しているように、大部分の粒には、頴が除去されているが、一部に頴が残っており、それが観察されたと判断してもよいであろう。K23も、イネ科雑穀粒の可能性があるが、識別に役立つような明瞭な特徴は残っていない。K43・K44・K52・K65からの付着粒は、孔あき状や細かい砕片が塊状になったもので、識別は不可能であるが、イネ科らしく思われる微細構造が観察される。このように実体顕微鏡では正体が余りはっきりしない採取粒でも、走査型電子顕微鏡では微細構造がよく残っていたため、採取粒の観察試料を追加する事にして、実体顕微鏡下での観察から有望と思われたK31・K39・K90の3試料を追加した。K31からは1㎜位の粒が観察され、K26で観察されたのと同類の細胞構造が認められた(写真57-58)。頴果表面に相当する構造も観察された。従って、K26と同じく、アワに由来する可能性が高い。K39も同類と考えられる。(写真59-60)最後にK90から採取された炭化物を走査型電子顕微鏡で観察したところ、イネ科雑穀の内頴又は外頴の長細胞に類似した形態が観察された。表皮細胞の裏側と推定される部位が多いが、長細胞の端に存在する乳頭突起に相当する部分も観察されるので、アワと判断してよさそうである(写真61-63)。

6　結論

上東遺跡から出土した弥生土器に付着した炭化物は、頴が残存している試料が極めて少なく、脱穀された状態の穀類が、土器の中で煮炊きされ、焦げ付いて残ったものと判断される。土器片に付着した状態の付着物31試料と、土器から採取された付着物27試料、合計58試料について、実体顕微鏡による観察を行い、さらにその中から選んだ16試料については、走査型電子顕微鏡での観察を行った。その結果、小粒はイネ科雑穀のアワの可能性が高く、大きい方の粒はイネに由来すると判断される。また、土器に付着した状態を観察したところ、一つの土器の中で、イネ状粒と雑穀状粒が同時に存在しているものが幾つも認められた。また、採取粒は、走査電子顕微鏡での観察では土器に付着しているものから選んだものよりも微細構造の保存状態がよいものが見いだされた。これは採取粒を含んでいた土器の方が、付着粒が豊富に存在していたためではないかと思われる。いずれにせよ、頴が残存しているにせよ、極めて少量であり、やはり不完全ではあるものの、脱穀されて炊飯されたものと考えられる。

7　考察

上東遺跡の25年前の発掘で出土した土器にも付着物が多く、多くは、炭化米と考えられてきたが、

小さな付着粒も出土していたことが、雑草種子を分析された笠原安夫氏の報告に次のように示されている。「上東遺跡の才の町から出土した弥生期終末から古墳初期時代のかめの底に焦げついていた炭化粒が米より極めて小形なので、ヒエ、キビ、またアワの何れかとされていたが、それ自体の遺物では鑑別ができなかった。しかし、井戸内から得られた弥生期末の土器中に極めて多数のアワの内外頴が検出されたので、かめの焦げつき粒はアワと措定される(笠原1974、p340)。」この「アワの内外頴」は炭化していない状態のように、文面からは伺われるが、「井戸から得られた弥生期末の土器」が、付着物のある土器と同じ種類のものなのかが、気になるところである。

今回、走査型電子顕微鏡による観察を実施したが、外形がアワ粒状の小さな粒からは、アワであることを示す明瞭な証拠は得られなかった。しかし、外形の残りのよくない付着粒から、アワであることを示唆する細胞構造が検出され、その後、採取粒の観察試料を追加したところ、外形と微細構造の両方で、アワの可能性を示唆する観察が得られた。従って、アワと共にキビも混在していたのを識別できなかった可能性も除外できないが、粒状付着物の正体は、イネとアワによると考えても差し支えはないであろう。

土器の中に貯蔵されたものが炭化して残った場合、イネ科の穀類には頴が残存している。千葉県中郷谷遺跡の弥生時代後期の住居跡から出土した土器(甕)に残っていた炭化粒は、キビが多くイネが少ないという状況で同じ土器の中から見いだされている(松谷1993)。また、茨城県武田遺跡群の古墳時代の土器内土壌から水洗選別された炭化物からも、イネの頴破片とキビの頴破片が同じ塊から識別されている(松谷1991ｂ)。これらの例から考えると、弥生時代や古墳時代の土器中で使用された穀類は、イネだけとか、アワだけというように、一種類だけではなく、二種類以上の穀類が一緒に用いられる場合が珍しくはなかったのかも知れない。

最後に、祭祀や儀礼に関連してモチ性の穀類の役割が大きいが、イネ、アワ、キビにはモチ性のものがあるのに対し、ヒエにはモチ性の品種が知られていない(阪本1989)ことを考慮すると、イネとアワ、あるいはイネとキビという組み合わせは、なかなか暗示的であると思われる。

なお、参考試料として、1974年度に発掘された多くの付着物の中から選ばれて送付された試料があり、これについても走査型電子顕微鏡による観察を行った。炭化米が付着と記されている、才の町調査区から出土した土器310番から採取された炭化付着物である(岡山県教育委員会　1974、p142)。しかし、送付された採取粒からは、イネ粒の特徴は観察されなかった。実体顕微鏡写真を見直すと、雑穀粒状の小粒粒が観察される(写真64)。したがってこの土器の場合もコメ状とアワ状が混在していた可能性が考えられる。

引用文献

笠原安夫　1974　川入、上東遺跡より出土した作物および雑草種子の同定について。岡山県埋蔵文化財発掘調査報告２、山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ、337-350。
阪本寧男　1989　「モチの文化誌」中公新書。
鈴木素行・松谷暁子・片平雅俊　1999　十王台のコメ。「十王台民俗資料館紀要」８、1-33。
椿坂恭代　1993　ヒエ・アワ・キビの同定。吉崎昌一先生還暦記念論文集「先史学と関連科学」261-281。
松谷暁子　1988　電子顕微鏡で探る縄文時代の栽培植物。佐々木高明・松山利夫編「畑作文化の誕生」日本放送出版協会、91-116。
松谷暁子　1990　岡山大学構内遺跡から出土した炭化種子と灰像について。「鹿田遺跡Ⅱ」岡山大学調査研究報告４、103-106。
松谷暁子　1991a　海老名本郷遺跡出土炭化植物遺残の識別。「海老名本郷Ⅶ」288-293。
松谷暁子　1991b　武田遺跡群出土の植物遺残の識別。「武田Ⅳ」勝田市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告書５、109-113。

松谷暁子　1992　内野々遺跡出土炭化物の識別。「内野々遺跡」宮崎県教育委員会、82-85。
松谷暁子　1993　中郷谷遺跡出土炭化粒について。「君津郡市文化財センター年報10」66-71。
松谷暁子　1994　大塚遺跡出土炭化種子について。「大塚遺跡II」451-456。
松谷暁子　1996　南溝手遺跡出土の炭化種子について。「南溝手遺跡２」岡山県教育委員会、338-342。
岡山県教育委員会　1974　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第２集。

写真説明

図版Ⅰ　コメ状付着粒(実体顕微鏡写真)
1　K79　2　K10　3　K20　4　K76　5　K38　6　K64
図版Ⅱ　雑穀粒状及び小粒付着粒(実体顕微鏡写真)
7　K19:雑穀状が主体で、コメ状が混在。　8　K13:雑穀状の大きさの粒状物（輪郭が多い)。
9　K17　10　K61　11　K81　12　K100
図版Ⅲ　粒状付着粒(実体顕微鏡写真)
13　K15　14　K18　15　K53　16　K84　17　K77　18　K16
図版Ⅳ　粒状とベタ状付着粒及び採取粒（実体顕微鏡写真)
19　K55　20　K62　21　K68　22　K48　23　K23　24　K27
図版Ⅴ　コメ状付着粒(走査型電子顕微鏡写真)
25　K79:縦断面状のもの　26　K79:土器付着面を表にしたもの　27　K10
28　K10:写真27の右中央部拡大　29　K10　30　K10:写真29の左部分拡大
31　K10:二写真29の右部分拡大　32　K10:写真31の中央上部拡大
図版Ⅵ　雑穀粒状付着粒(走査型電子顕微鏡写真)
33　K19a:全形　34　K19a:下部拡大　35　K19a:写真34中央部拡大
36　K19a:写真33左上部拡大　37　K19a:写真34左下方部拡大　38　K19a:写真33右下方部拡大　39　K19b:全形。左粒はa　40　K19b:上部拡大
図版Ⅶ　雑穀粒状付着粒(走査型電子顕微鏡写真)
41　K19c:全形　42　K19c:上方部拡大　43　K19c:写真41左拡大
44　K19c:右上方部拡大　45　K19d:全形　46　K19d:右上方拡大
47　K19d:粒上方部拡大　48　K19d:中央部拡大
図版Ⅷ　小粒状付着粒・ベタ状中粒状・採取粒(走査型電子顕微鏡写真)
49　K13:全形　50　K13:下方拡大　51　K100:全形　52　K100:中央部拡大
53　K77:全形　54　K77:左上方部拡大　55　K26(採取粒)　56　K26:写真55の中央部拡大
図版Ⅸ　追加採取粒の走査型電子顕微鏡写真並びに参考試料P310の実体顕微鏡写真
57　K31:全形　58　K31:下方拡大　59　K39:全形　60　K39:右下方拡大
61　K90:全形　62　K90:右端突出部上方　63　K90:右端突出部下方
64　1974年出土P310付着粒(実体顕微鏡写真)

※実体顕微鏡のケールは全て２ミリメートル

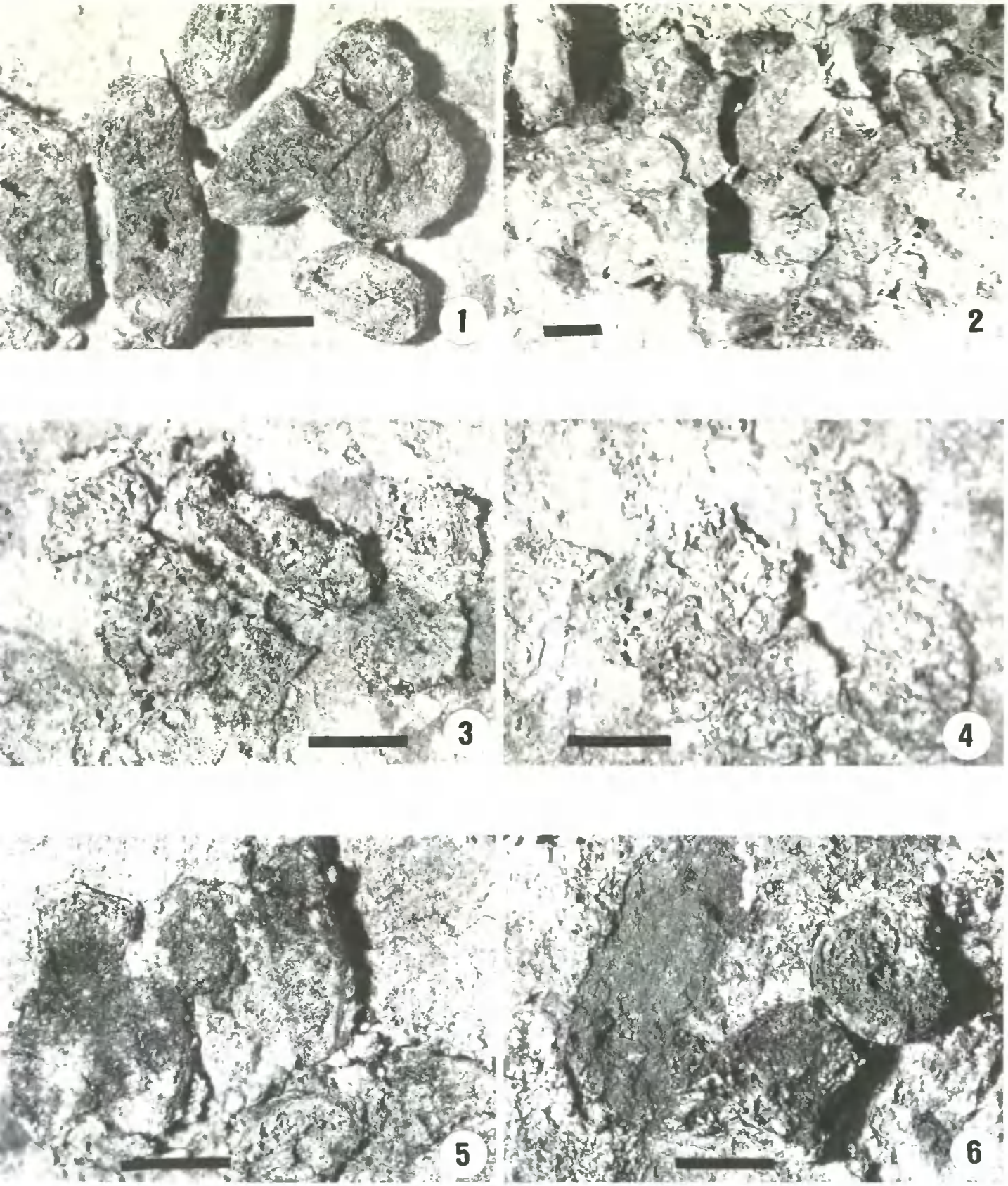
上東遺跡出土付着物観察一覧表

土器片番号	試料の種類	付着物の形態	実体顕写真番号	SEM 観察有無と写真番号
K-10	遺物	コメ状	2	＊ (27-32)
K-13	遺物	雑穀粒状	8	＊ (49-50)
K-15	遺物	粒状＋ベタ状	13	
K-16	遺物	ベタ状中粒状	18	
K-17	遺物	ベタ状＋雑穀粒状	9	
K-18	遺物	ベタ状中粒状	14	
K-19	遺物	雑穀粒状＋コメ状	7	＊ (33-48)
K-20	遺物	コメ状	3	
K-36	遺物	ベタ状中粒状		
K-37	遺物	ベタ状		
K-38	遺物	ベタ状中コメ状	5	
K-41	遺物	ベタ状		
K-42	遺物	ベタ状		
K-48	遺物	ベタ状	22	
K-49	遺物	ベタ状		
K-50	遺物	ベタ状中粒状		
K-53	遺物	ベタ状＋粒状	15	
K-54	遺物	ベタ状		＊
K-55	遺物	ベタ状中粒状	19	
K-56	遺物	ベタ状中粒状		
K-61	遺物	ベタ状中雑穀粒状	10	
K-62	遺物	ベタ状中粒状	20	
K-64	遺物	ベタ状中コメ状	6	
K-67	遺物	ベタ状中粒状		
K-68	遺物	ベタ状中粒状	21	
K-76	遺物	ベタ状中コメ状	4	
K-77	遺物	ベタ状中粒状	17	＊ (53-54)
K-79	遺物	コメ状＋ベタ状	1	＊ (25-26)
K-81	遺物	ベタ状中雑穀粒状	11	
K-84	遺物	ベタ状中粒状	16	
K-100	遺物	雑穀粒状	12	＊ (51-52)
K-11	採取粒	ベタ状？		
K-14	採取粒	ベタ状		
K-21	採取粒	ベタ？小粒？		
K-23	採取粒	粒状？	23	＊
K-24	採取粒	ベタ状		
K-26	採取粒	？		＊ (55-56)
K-27	採取粒	ベタ状	24	
K-28	採取粒	ベタ状？コメ状？		
K-31	採取粒	粒状？		＊ (57-58)
K-34	採取粒	コメ状？		
K-39	採取粒	小粒？		＊ (59-60)
K-40	採取粒	ベタ状？		
K-43	採取粒	ベタ状？		＊
K-44	採取粒	ベタ状？		＊
K-45	採取粒	ベタ状？小粒状？		
K-46	採取粒	ベタ状？		
K-47	採取粒	ベタ状？		
K-51	採取粒	ベタ状？小粒状？		
K-52	採取粒	ベタ状？		＊
K-57	採取粒	ベタ状？		
K-58	採取粒	ベタ状？		
K-59	採取粒	小粒状？ベタ状？		
K-60	採取粒	ベタ状？		
K-65	採取粒	厚いベタ状？		＊
K-83	採取粒	薄いベタ状？		
K-90	採取粒	粒状？		＊ (61-63)
K-101	採取粒	厚いベタ状？		

参考資料

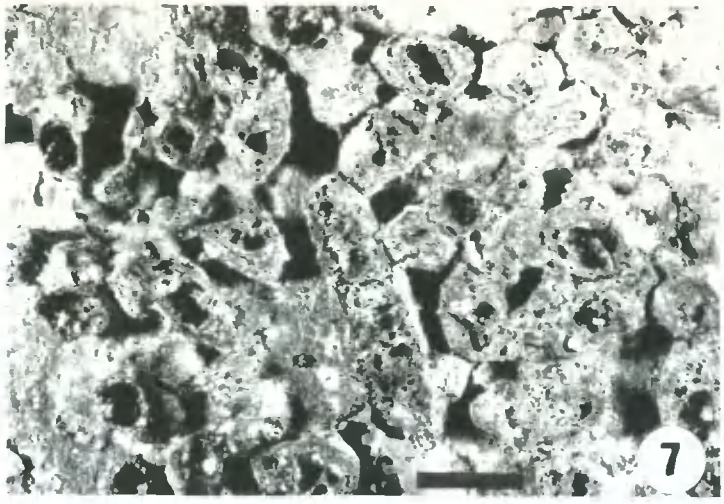
土器片番号	試料の種類	付着物の形態	実体顕写真番号	SEM 観察有無と写真番号
P-310	採取粒	？	64	＊

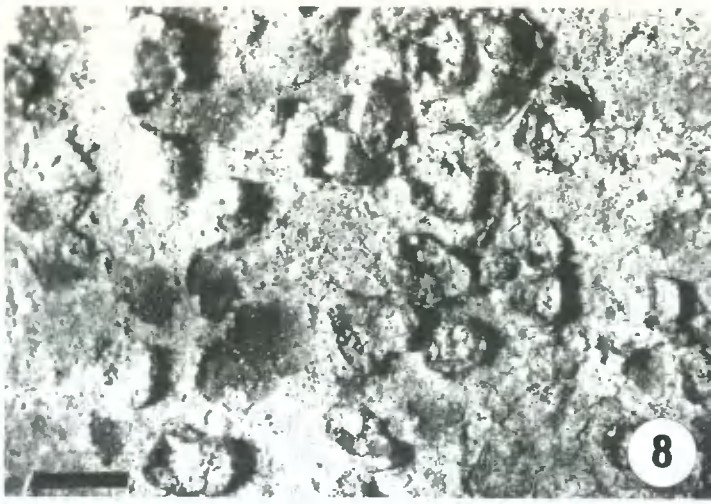
図版Ⅰ　コメ状付着粒(実体顕微鏡写真)

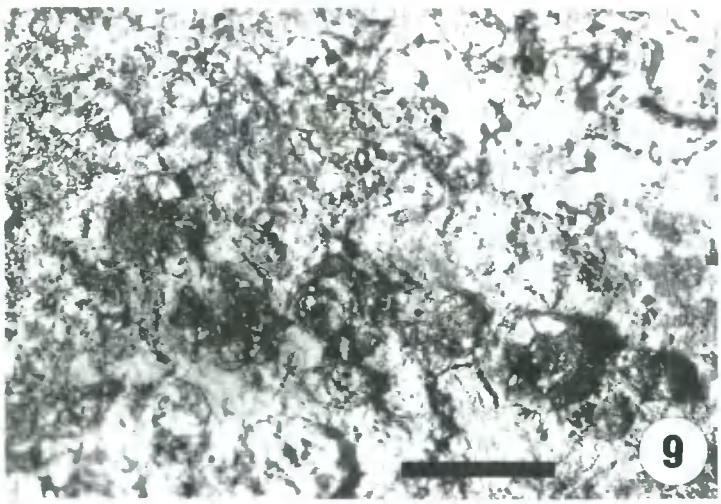


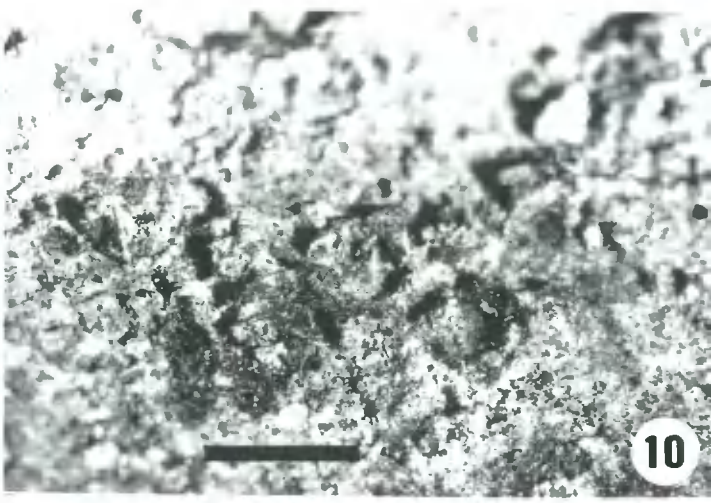
1　K79　　2　K10　　3　K20　　4　K76　　5　K38　　6　K64

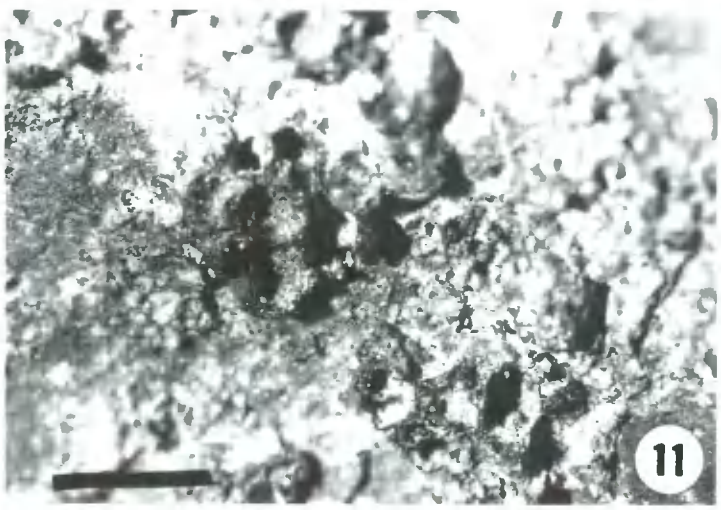
図版Ⅱ　雑穀粒状及び小粒付着粒(実体顕微鏡写真)

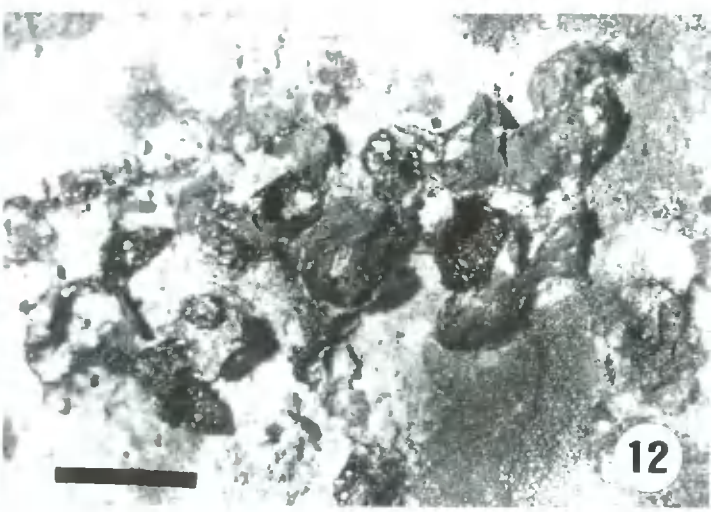






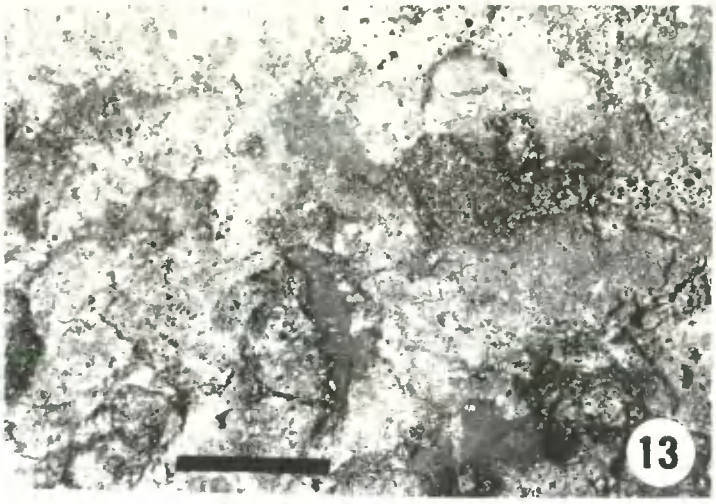


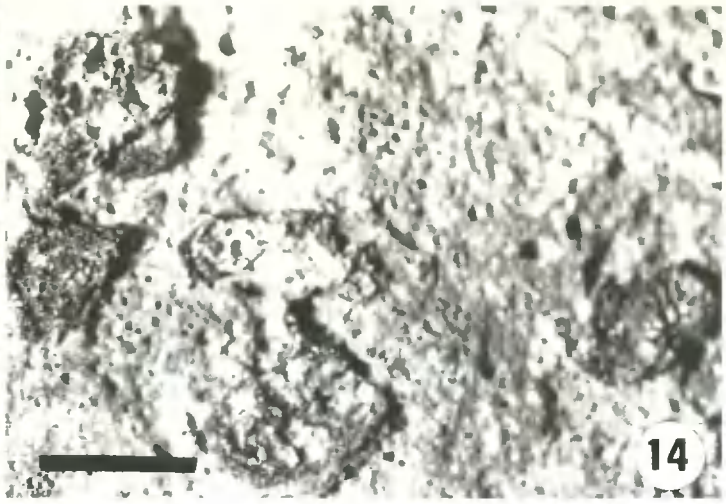


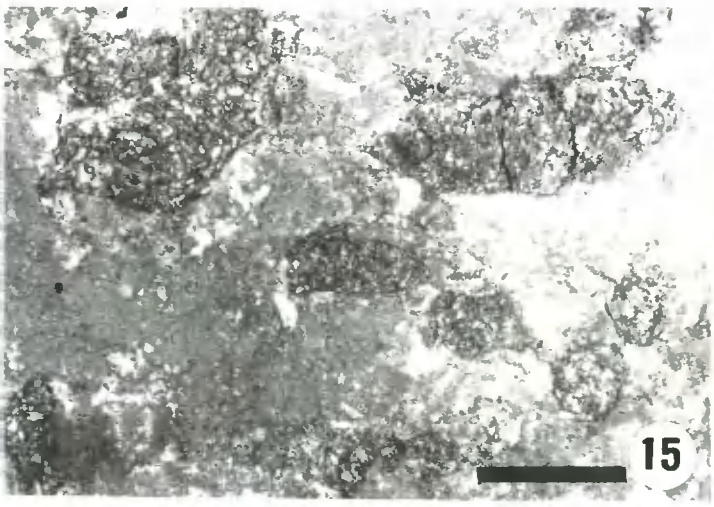


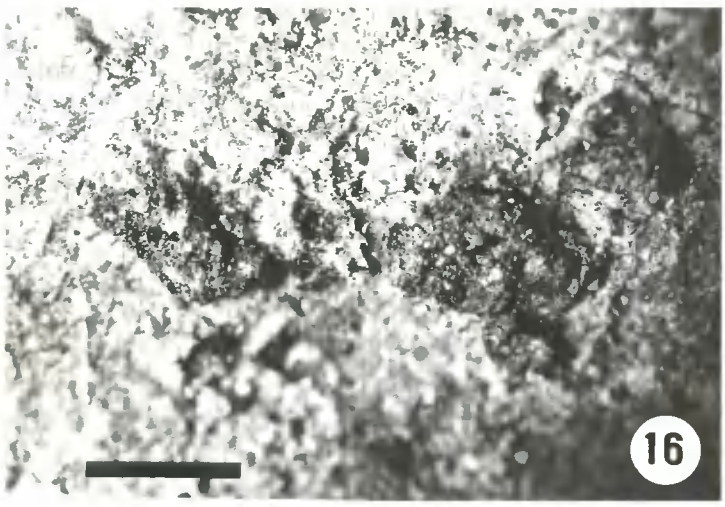
7　K19:雑穀状が主体で、コメ状が混在。　　8　K13:雑穀状の大きさの粒状物(輪郭が多い)。
9　K17　　10　K61　　11　K81　　12　K100

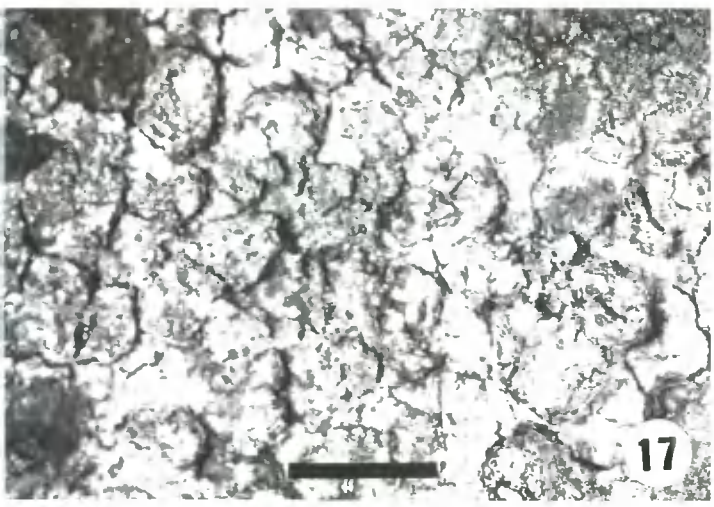
図版Ⅲ　粒状付着粒(実体顕微鏡写真)

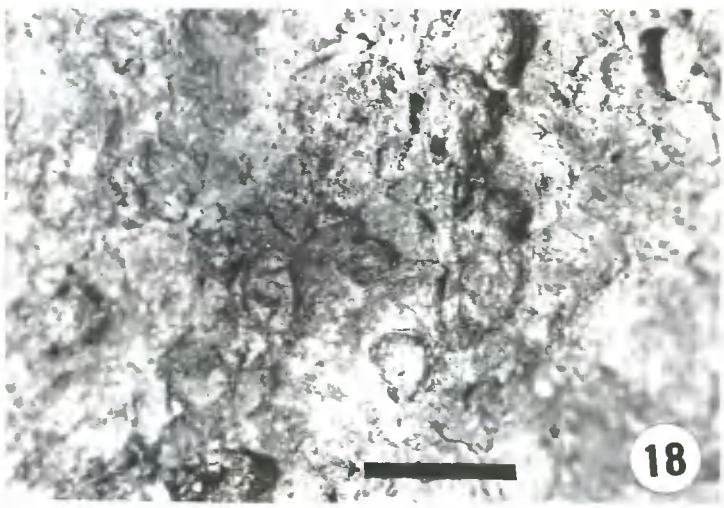






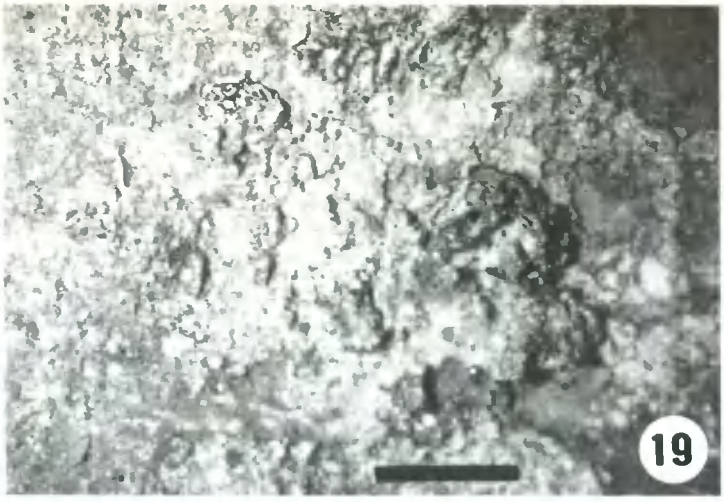


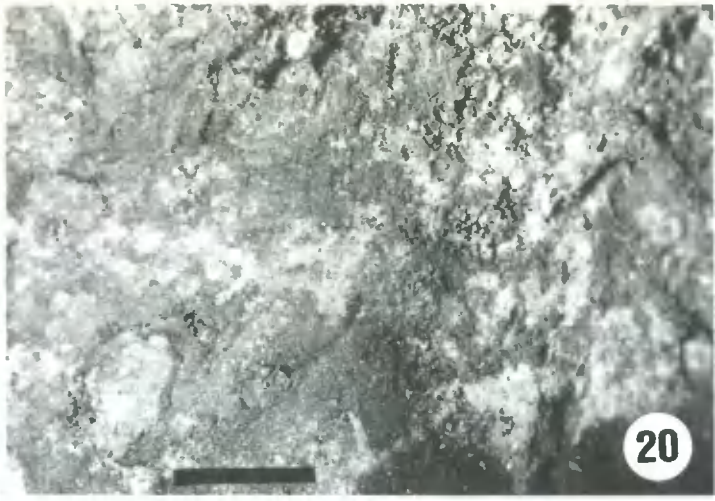


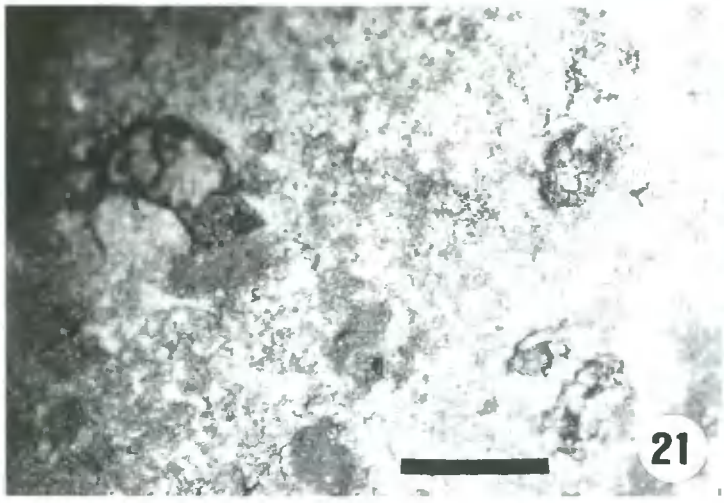


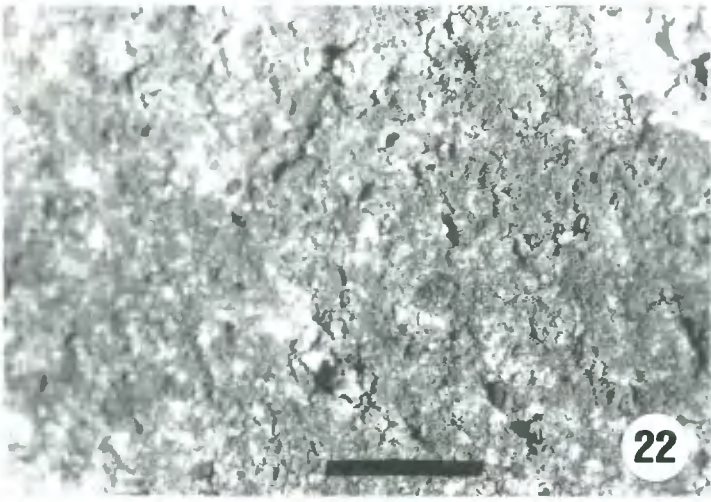
13 K15　　**14** K18　　**15** K53　　**16** K84　　**17** K77　　**18** K16

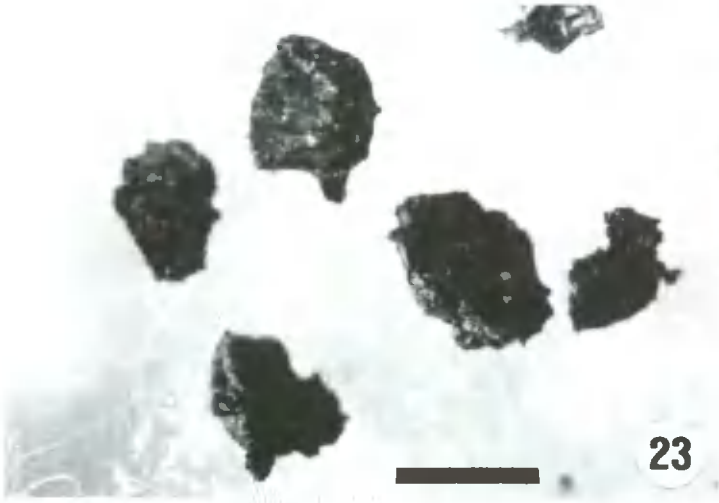
図版Ⅳ　粒状とベタ状付着粒及び採取粒(実体顕微鏡写真)

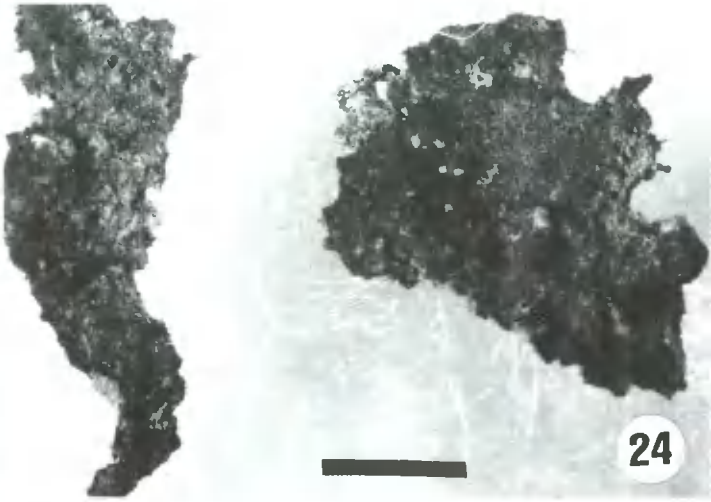






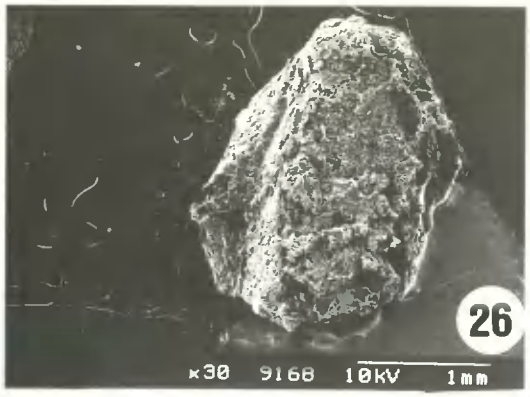


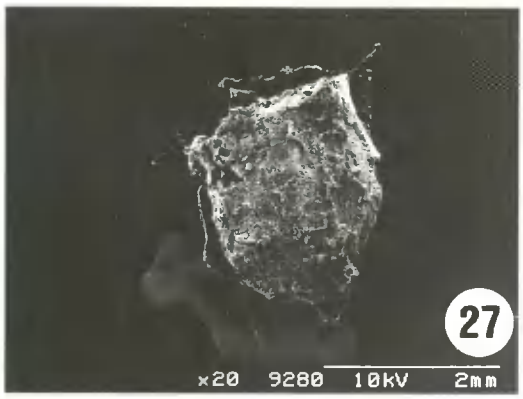


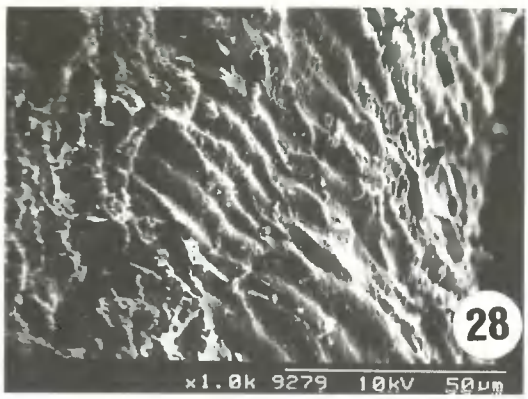


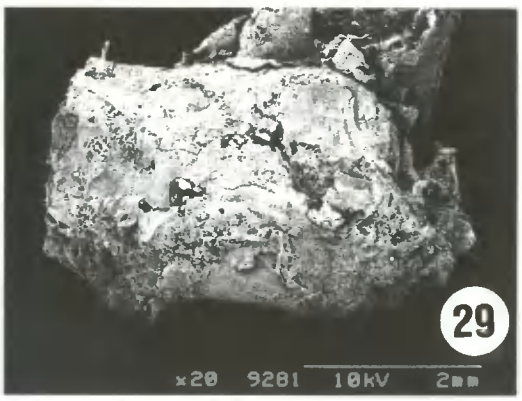
19　K55　　20　K62　　21　K68　　22　K48　　23　K23　　24　K27

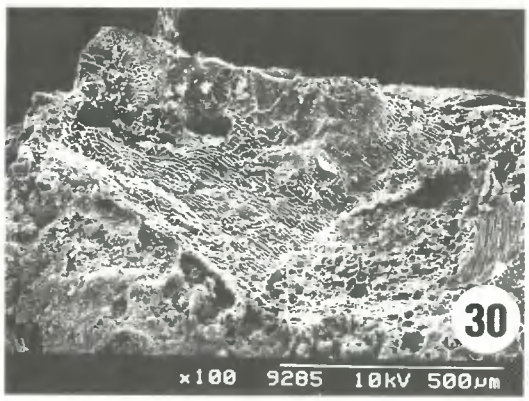
図版Ⅴ　コメ状付着粒(走査型電子顕微鏡写真)

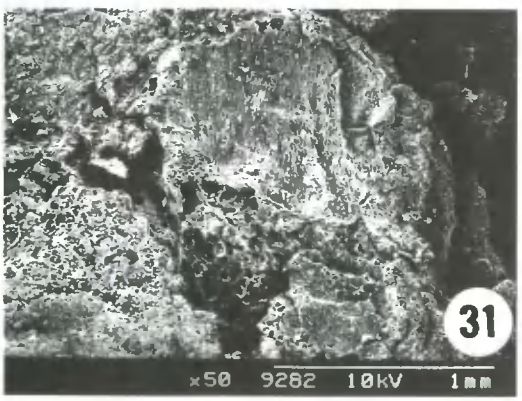


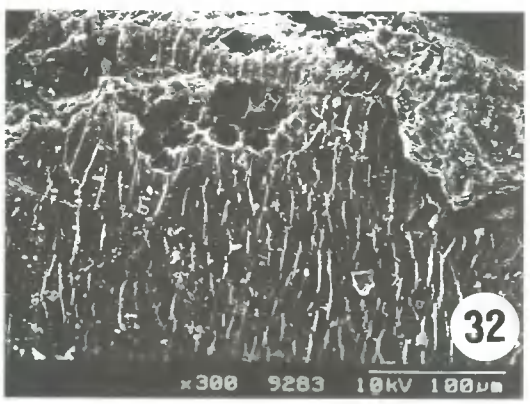






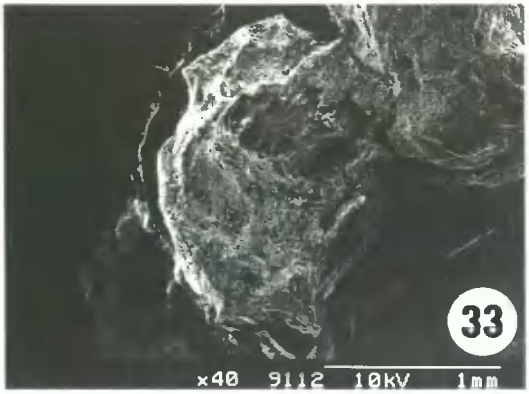


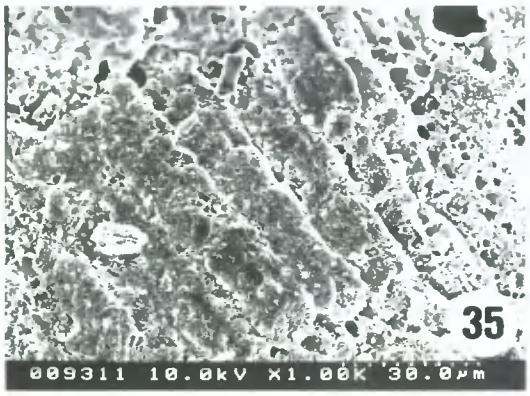


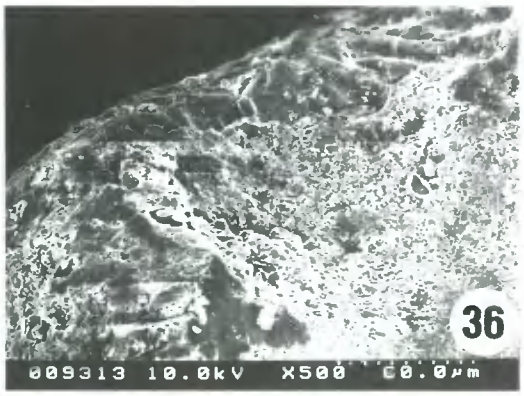


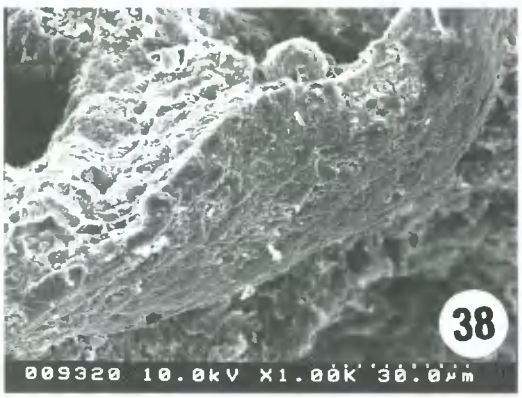
25　K79:縦断面状のもの　　26　K79:土器付着面を表にしたもの　　27　K10
28　K10:写真27の右中央部拡大　　29　K10　　30　K10:写真29の左部分拡大
31　K10:写真29の右部分拡大　　32　K10:写真31の中央上部拡大

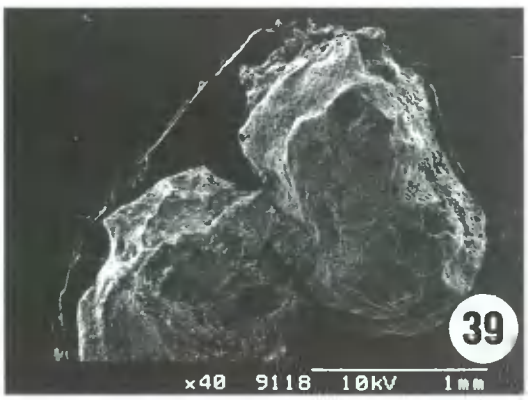
図版Ⅵ　雑穀粒状付着粒(走査型電子顕微鏡写真)

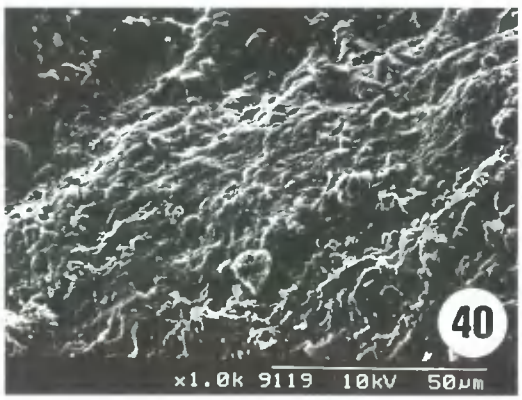






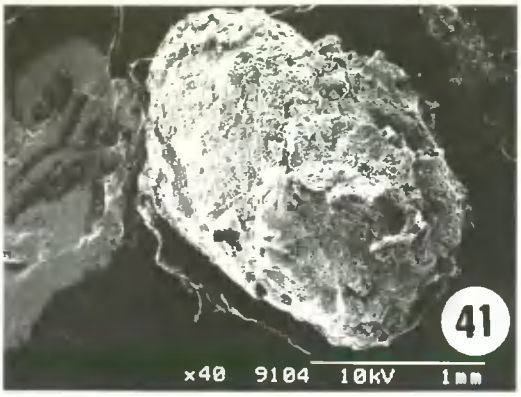


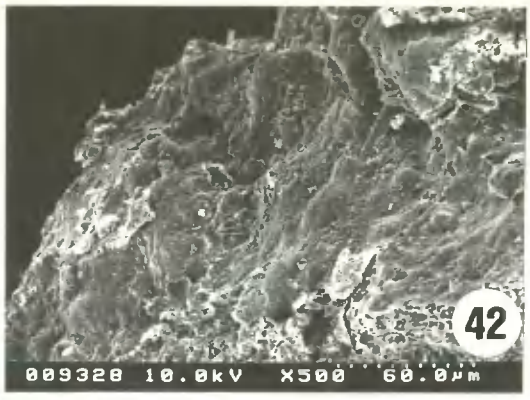


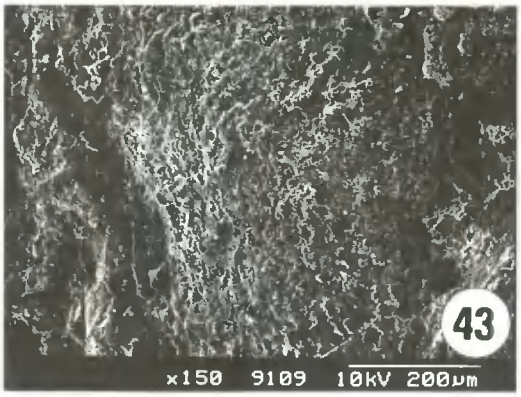


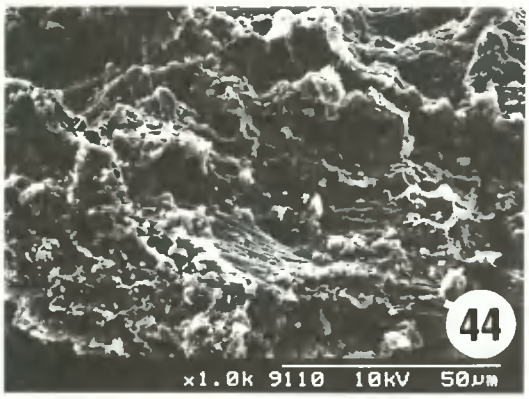
33　K19a:全形
34　K19a:下部拡大
35　K19a:写真34中央部拡大
36　K19a:写真33左上部拡大
37　K19a:写真34左下方部拡大
38　K19a:写真33右下方部拡大
39　K19b:全形。左粒はa
40　K19b:上部拡大

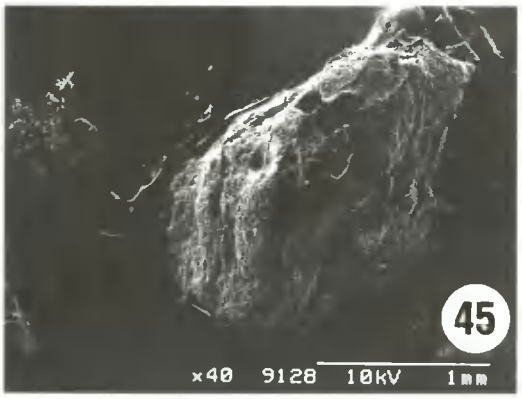
図版Ⅶ　雑穀粒状付着粒(走査型電子顕微鏡写真)

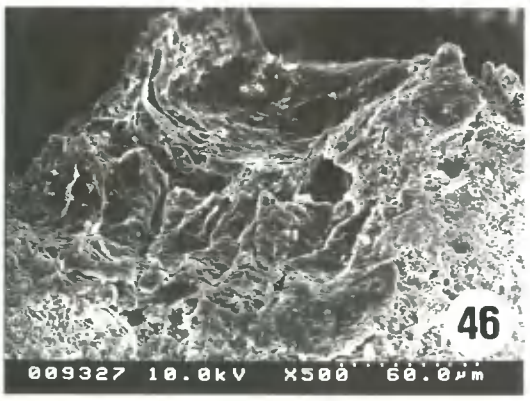


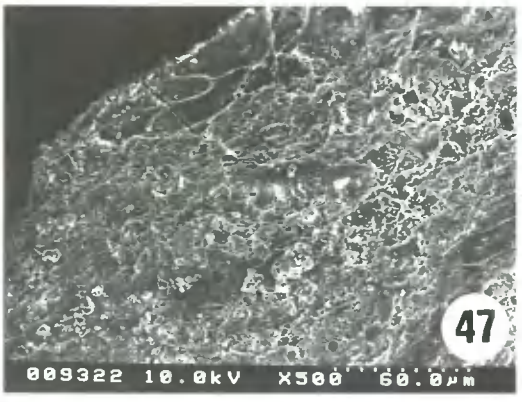


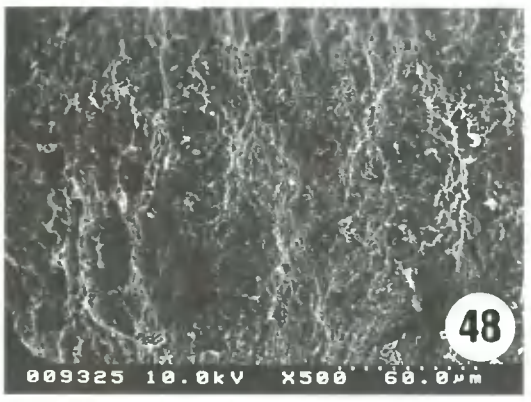






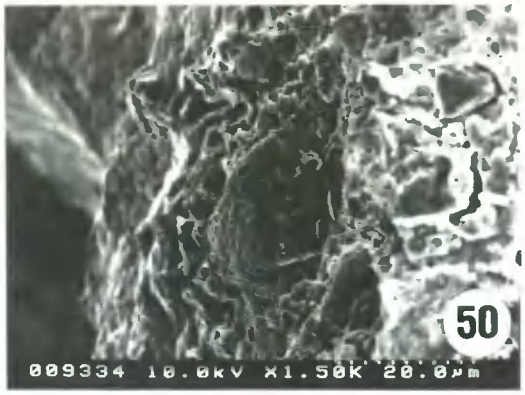


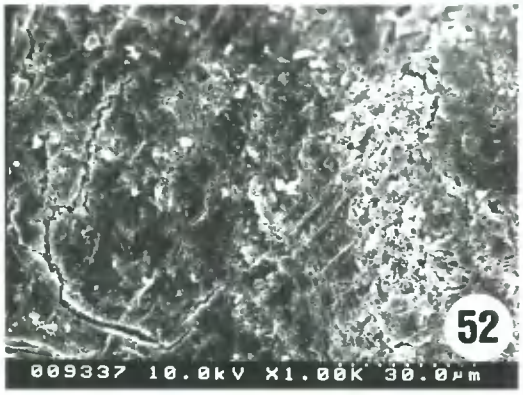


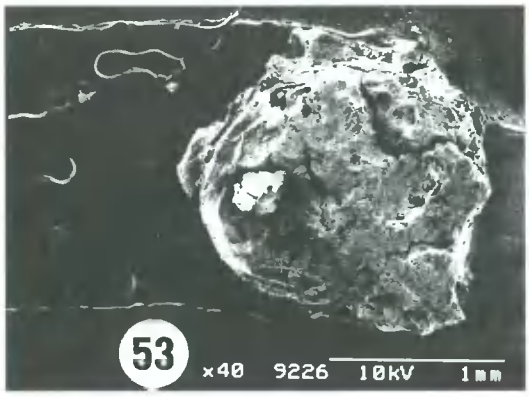


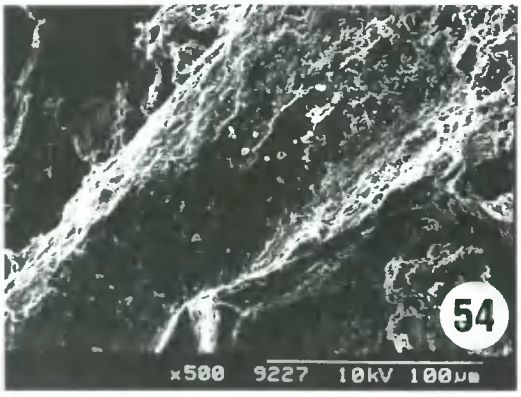
41　K19c:全形　　42　K19c:上方部拡大　　43　K19c:写真41左拡大
44　K19c:右上方部拡大　　45　K19d:全形　　46　K19d:右上方拡大
47　K19d:粒上方部拡大　　48　K19d:中央部拡大

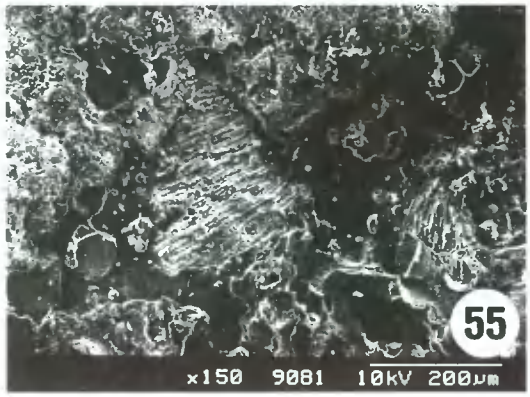
図版Ⅷ　コメ状付着粒(実体顕微鏡写真) 小粒状付着粒・ベタ状中粒状・採取粒(走査型電子顕微鏡写真)

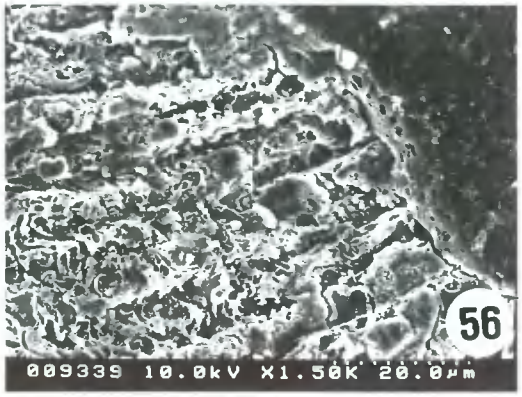






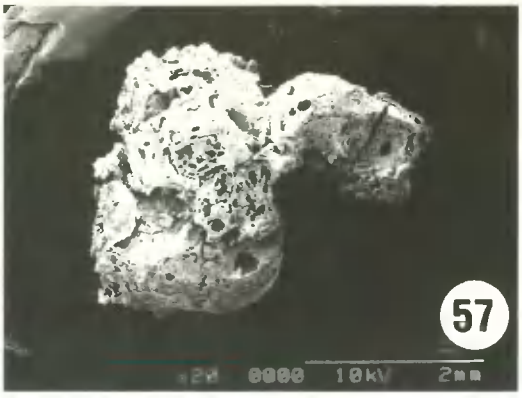


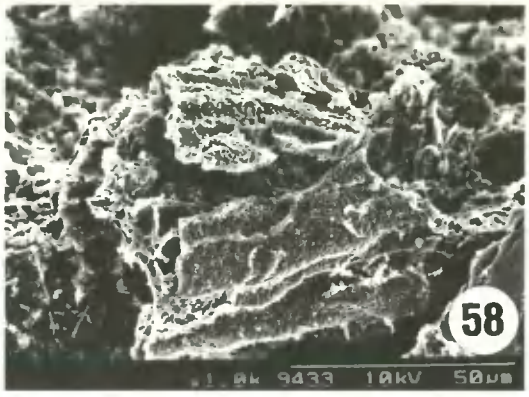


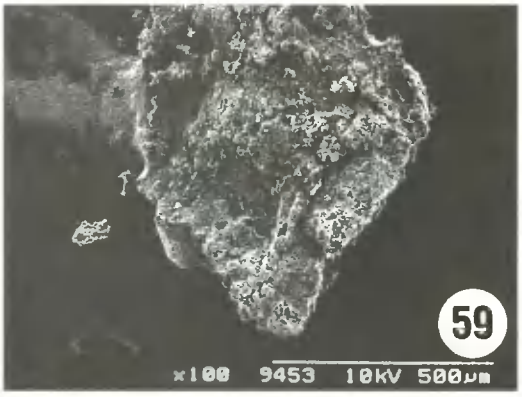


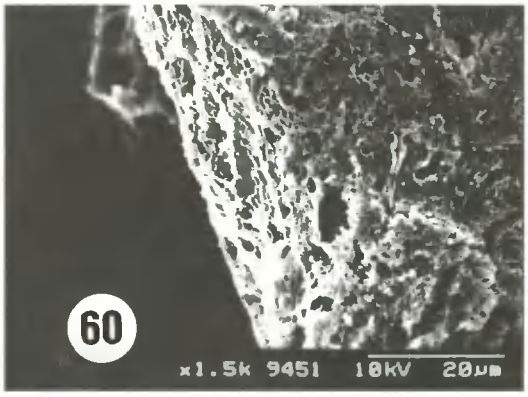
49　K13:全形　　**50**　K13:下方拡大　　**51**　K100:全形　　**52**　K100:中央部拡大
53　K77:全形　　**54**　K77:左上方部拡大　　**55**　K26(採取粒)
56　K26:写真55の中央部拡大

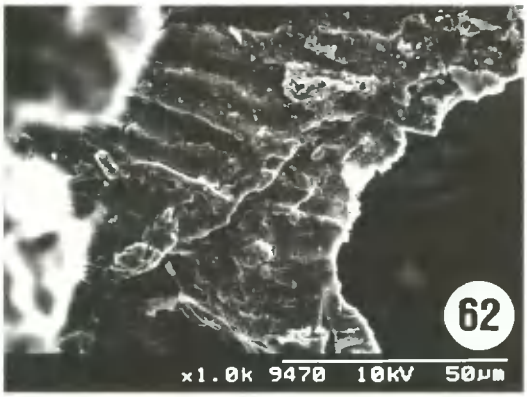
図版Ⅸ　追加採取粒の走査型電子顕微鏡写真並びに参考試料P310の実体顕微鏡写真

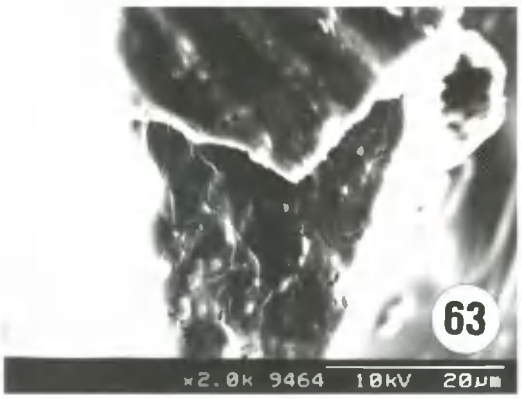


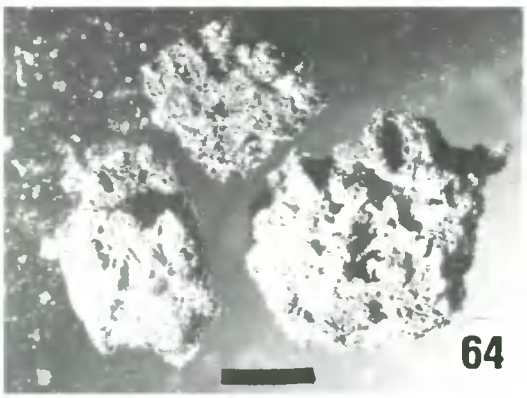












57　K31：全形　　58　K31：下方拡大　　59　K39：全形　　60　K39：右下方拡大
61　K90：全形　　62　K90：右端突出部上方　　63　K90：右端突出部下方
64　1974年出土P310付着粒（実体顕微鏡写真）

上東遺跡出土の動物遺存体と骨角製品

岡山理科大学理学部　講師　富岡　直人

第１節　出土状況・動物遺存体の概要

分析資料は、発掘時に確認・サンプリングされたものである。特に弥生時代後期と古墳時代の包含層及び遺構から動物遺存体が数多く出土した。特に遺跡の低地部分からの出土量が多い。

本分析資料のうち、綱以上が同定できた試料を第１表に掲げる。以下に動物遺存体の内容を下記分類に従って概括する。

第１表　上東遺跡出土動物遺存体種名表　List of animal remains from Joto site

軟体動物門	Mollusca
腹足綱	Gastropoda
カワニナ科	Pleuroceridae
カワニナ	*Semisulcospira libertina* (Gould)
チリメンカワニナ	*Semisulcospira libertina* reiniana (Brot)
節足動物門	Arthropoda
甲殻綱	Crustacea
短尾亜目（カニ亜目）	Brachyura
脊椎動物門	Vertebrata
軟骨魚綱	Chondrichthyes
板鰓亜綱	Elasmobranchii
ネズミ上目	Galeomorphii
ツノザメ・エイ上目	Squalea
エイ目	Rajiformes
硬骨魚綱	Osteichthyes
スズキ目	Perciformes
スズキ科	Serranidae
スズキ	*Lateolabrax japonicus* (Curvier et Valenciennes)
タイ科	Sparidae
クロダイ	*Acanthopagrus schlegeli* (Bleeker)
マダイ	*Pagrus major* (Temminck et Schleegel)
コイ目	Cypriniformes
コイ科	Cyprinidae
フナ（亜種不明）	*Carassius auratus* subsp. indet.
ナマズ目	Siluriformes
ナマズ科	Siluridae
ナマズ	*Parasilurus astus* Linnaeus
爬虫類	Reptilia
カメ目	Testudinata
スッポン科	Trionychidae
スッポン	*Trionyx sinensis japonica*
鳥綱	Aves
ガンカモ目	Anseriformes
ガンカモ科	Anatidae
カモ類Aタイプ	wild duck A type
コウノトリ目	*Ciconiiformes*
サギ科	Ardeidae gen. et sp. indet.
哺乳綱	Mammalia
ウシ目（偶蹄目）	Artiodactyla
イノシシ科	Suidae
イノシシ	*Sus scrofa* Linnaeus
ブタ	*Sus scrofa leucomystax* Temminck
シカ科	Cervidae
ニホンジカ	*Cervus nippon* Temminck
ウシ科	Bovidae
ウシ	*Bos taurus domesticus* Gmelin
ウマ目（奇蹄目）	Perissodactyla
ウマ科	Equidae
ウマ	*Equus caballus* Linnaeus
ネコ目（食肉目）	Carnivora
イヌ科	Canidae
イヌ	*Canis familiaris* Temminck
イタチ科	*Mustelidae*
テン	*Martes melampus* (Wagner)
サル目（霊長目）	Primates
ヒト科	Hominidae
ヒト	*Homo sapiens sapiens*

1　軟体動物門　Mollusca

腹足綱　Gastropoda

古墳時代の堆積層と貝塚から４点が出土し、そのうち２点(1-1-1, 1-1-2)はカワニナ科、他の２点(1-1-3, 1-1-4)は目以下が不明の蓋であった。

カワニナ科　Pleuroceridae

殻頂、殻唇を欠く２点が古墳時代の貝塚から出土した。1-1-2は、比較的細長型を呈するカワニナ *Semisulcospira libertina*、1-1-1は、縦肋がチリメン状を呈するチリメンカワニナ *Semisulcospira libertina reiniana* である。いずれも淡水の河川や池沼の砂泥底や水草に生息するものであり、自然死した個体が遺跡に混入した可能性がある。

2　節足動物門　Arthropoda

短尾亜目(カニ亜目)　Brachyura

古墳時代の堆積層を中心に化石化したものが出土した。周辺の環境から自然に混入したものか、人為的にもたらされたものかは不明である(1-1-4～1-1-14)。

3　魚類・・・・・魚上綱　Pisces

板鰓亜綱　Elasmobranchii

出土したのは6点(38, 39, 42, 1-1-15～1-1-17)の椎骨で、38と42を除き大型の固体に由来するものである。39と1-1-15はアオザメに類似しているネズミ上目Galeomorphiiの椎骨であり、42, 1-1-16, 1-1-17はツノザメ・エイ上目のエイ目の椎骨であった。また、38は上目の分類はできなかった。1-1-16, 1-1-17の中心には穿孔がみられ、特に1-1-16は人為的穿孔であることが明確で、骨製品と考えられる。

スズキ　*Lateolabrax japonicus* (Curvier et Valenciennes)

海水～汽水～淡水域に回遊する魚類である。古墳時代の貝塚から出土した(55, 1-1-18)。

マダイ　*Pagrus major* (Temminck et Schleegel)

外洋から内湾にかけて生息するマダイの間鰓蓋骨(78)と歯骨(1-1-20)、癒合した状態の頭蓋骨(1-1-19)が検出された。いずれも古墳時代に属する。1-1-19は、前頭骨、翼耳骨、後頭骨、篩骨、副蝶形骨、基後頭骨が癒合した状態でおり、通常の遺跡出土資料にはみられない状態であった。おそらくは、カニ類とともに化石化したものが混入した可能性が考えられる。

クロダイ　*Acanthopagrus schlegeli* (Bleeker)

海水～汽水に生息するタイ科魚類である。顔骨類5点が古墳時代の貝塚から出土した(46, 48, 1-1-21～1-1-23)。

フナ(亜種不明)　*Carassius auratus* subsp. indet.

汽水～淡水域に生息するコイ科魚類である。背鰭棘あるいは臀鰭棘1点が古墳時代の貝塚から出土した(1-1-29)。

ナマズ　*Parasilurus astus* Linnaeus

淡水域に生息する魚類である。左胸鰭棘1点が古墳時代の貝塚から出土した (1-1-28)。

4　爬虫類・・・・・爬虫綱　Reptilia

スッポン　*Trionyx sinensis japonica*

淡水域に生息するカメ類のスッポンが波止場状遺構を中心として検出された。解体の痕跡がみられない個体が多いことから、自然死した個体が混入した可能性も考えられるものの、91, 1-1-31に切創がみられることから、解体され食用とされたものもあると考えられる。

5　鳥類・・・・・鳥綱　Aves

検出・採集された動物遺存体の中に、鳥類は2点しか含まれず、ガンカモ科とサギ科と同定された。

カモ類Aタイプ　wild duck A type

マガモ *Anas platyrhynchos*, カルガモ *Anas poecilorhicha* 程度の大きさの左脛骨が出土した(1-1-39)。

サギ科　Ardeidae gen. et sp. indet.

弥生時代の堆積層からチュウサギ程度の大きさの個体に由来すると考えられる左尺骨が、出土した(1-1-40)。

6　哺乳綱　Mammalia

資料点数221点が哺乳類の遺存体と推定された。そのうち178点が4目、5科、5種に同定・分類された。また、中型哺乳類として記載した資料は目以下の同定が困難であった資料であり、37点を占める。

ウシ目(偶蹄目)　Artiodactyla

古墳時代の堆積層から頸椎の棘突起が検出された(166)。

イノシシ類　*Sus scrofa* subsp. indet.

イノシシは本州以南の森林地帯に群れをなして生息している(岡田他　1960)。本種は亜種として本州、四国、九州に生息するニホンイノシシ *Sus scrofa leucomystax*、南西諸島に生息するリュウキュウイノシシ *S. scrofa riukiuanus* が設定されているが、日本各地でブタと交配し一部は野生化している通称イノブタなどもかなり広くみられる。遺跡出土イノシシ類資料について、松本彦七郎、直良信夫は更新世から縄文時代にかけてみられる大型のイノシシをニッポンイノシシ *S. nipponicus* 及びその系統のミコトイノシシ *S. mikotonis* などと分類したが(松本　1917、直良　1968)これには反対意見も多く、現在のニホンイノシシと連続的なものであるとする考えも強い(林　1983)。出土資料は破片が多く、いずれも形質的にブタ *S. scrofa domesticus* と断定できる資料は検出できなかった。ただ一点、2-1-1,2の頭蓋骨と下顎骨は保存状況が良いものの、ブタやイノシシの形質的特徴が明確化する以前の若齢個体であることから、判断が難しい。わずかに頭蓋骨の短頭化や下顎骨の左右下顎骨の交わる角度の広角化が看取され、弥生ブタである可能性が残っている。

以上のことから、本報告では、ブタも含むカテゴリーとしてイノシシ類 *S. s.* subsp. indet. として報告する。

イノシシの年齢構成を歯牙の萌出した顎骨から推定した。この推定方法は、小池、林(1984)と小池裕子先生の御教示を基礎にした。その結果、幼・若獣ともに成獣(老獣も含む)が含まれていることが明らかになった。鑑定できた数値＝標本数が少なく確定的な判断は難しいが、弥生ブタを含んでいて幼・若獣の多い典型的な西日本弥生遺跡の傾向に類似する可能性がある。

ただし、弥生ブタが含まれる池上遺跡でのイノシシ類の年齢構成(金子　1984、林　1986)をみると若獣が幼獣、成獣の2.5倍近くも消費されており、中国新石器時代のブタを伴う河姆渡遺跡の場合(金子　1984)は、成獣4に若獣5程度の割合で若獣が多い。家畜を消費する場合、若齢で屠殺する方が経済的に負担が軽く肉量も多い。このことから、若齢が多い現象はイノシシ類を飼育している証左と考えられる。一方、上東遺跡では出土量が少ないことから、確定的な判断ができなかった。

前述のように、形質的にブタと断言できる資料がなかったこと、ブタを出土する弥生時代遺跡で確認される例が多い下顎骨の穿孔などが1点も検出されなかったこと、さらに年齢構成が不明なことか

ら、上東遺跡資料にはブタが含まれていたことは証明できない。

ニホンジカ　*Cervus nippon* Temminck

日本全国の森林、草原地帯に生息。草食性。ニホンジカは一亜種 *C. n. nippon* にまとめられることもあるが、6つの亜種に分類し、本州産のものをホンシュウジカ *C. n. centralis*、九州、四国産のものをキュウシュウシカ *C. nippon nippon* とする分類もある(大泰司　1983)。本報告ではニホンジカ *C. nippon* として記述する。

出土資料には、優勢個体と考えられる体格の大きな群がみられる一方、体格が貧弱な群もみられた。また、年齢査定の結果、幼・若・成獣いずれも含まれていた。

シカの上下顎骨から推定した年齢構成によると、2歳以上の成獣が出土しているのみで、幼獣、若獣はみられなかった。ただし、四肢骨骨端の化骨化状況をみると、幼若獣がみられることから、この遺跡に完全にみられないわけではない。このように成獣が多い状況は、縄文時代遺跡では一般的な現象で、宮城県中沢目貝塚、愛知県伊川津貝塚、縄文時代後期前葉の宮城県沼津貝塚にみられ(林　1986、須藤　1995)、成獣を中心とした狩猟が盛んであったことをうかがわせる。

一方、沼津貝塚の後期後葉、晩期前葉、晩期後葉のシカの年齢構成とは大きく異なっている。これも、イノシシの項で考えたように、①狩猟技術・方法の相違．②狩猟対象の選択の相違．③狩猟対象となった固体群の相違．の可能性が当てはまるが、シカについても①、②のような狩猟方法の相違が年齢構成の違いをもたらした可能性が大きいと考えられる。

ウシ　*Bos taurus domesticus* Gmelin

わずか1点ながら貝塚周辺の下がりからウシ左上腕骨が検出された(4-1-3)。小型の在来和牛とほぼ同程度の体格と推定される。遠位端側縁に激しい切創が残されており、解体されたことが明らかである。

ウマ　*Equus caballus* Linnaeus

右橈骨が貝塚周辺の河道から検出された(4-1-4)。尺骨との癒合がみられることから若～老獣の固体と考えられる。切創はみられなかった。小型在来馬とほぼ同程度の体格であると推定される。

イヌ　*Canis familiaris* Temminck

狩猟犬、或いは食用として飼育されていたと考えられる。波止場状遺構を中心として出土している。上東遺跡からは、イヌの噛痕の残る資料も出土しており、集落内でも確実に飼育されていたことがうかがわれる。

顎骨を伴う右下顎骨(4-2-2～4-2-4)はいずれもM3が萌出しており6ヶ月以上の個体と考えられ、大きさや咬耗から若獣から老獣と推定される。

一部の個体に切創などの切創がみとめられた。しかし、その他のものに加工痕跡が認められず、全てが食用や加工処理の対象であったのかは不明である。ネズミの噛痕も2点にみられることから、波止場状遺構の造営や補修などの際、埋葬個体が紛れ込んだり、別地点で死亡した個体が露出後本地点に混入した可能性も考えられる。

イタチ科　*Mustelidae*

左上腕骨骨幹部遠位より部分が出土した(4-2-21)。小破片であることから種の特定はできなかった。

テン　*Martes melampus* (Wagner)

頭蓋骨破片(鼻骨、上顎骨) が出土した(4-2-20)。樹上空間を利用する習性を持ち、人家付近にも

出現する(阿部　1994)。切創は確認されなかった。鼻骨と上顎骨は癒合しており、若～老獣と推定される。

ヒト　***Homo sapiens sapiens***

波止場伏遺構から出土している。左頭頂骨が１点(1-2-1)、右上腕骨が２点(258,1-2-2)、右大腿骨が１点(1-2-3)出土したのみであり、最少個体数２点の骨格のほんの一部が出土しているのみである。この点から、波止場状遺構の堆積層に入ったとしても、全身骨格の一部のみが埋存したということであり、一括性が極めて低く、激しく破損された個体であったことがうかがわれるが、明確な人為的切創はみられない。特に1-2-3は著しく風化・摩耗が進み、生物の穿孔痕跡が残され、長らく露出し放置されていた骨格であることが推定される。これらがこの地点の周囲で死亡したものかは不明確であり、往時の土地造成や遺構の補修などの際、埋葬個体が堆積層に紛れ込んだ可能性も考えられる。

第２節　骨角製品

分析した出土資料には12点の骨角製品と４点の未製品、さらに骨角製品の製作工程を示す資料数点が含まれていた。

１　卜骨

2-2-3(B3)はイノシシ類の右肩甲骨で、外側位に１ヶ所、内側位に６ヶ所の焼灼痕跡を残す卜骨である。近位部分は破損して失われている。他に出土したニホンジカ肩甲骨の卜骨と異なり、刃器による調整の痕跡や解体の痕跡はみられない。

2-3-6(B1)はニホンジカ左肩甲骨で、外側位が入念に調整され、翼状突起と骨表面が削り取られ、内側位もわずかに調整され、多数の緩やかな稜線が残されている。外側縁の調整では、骨質を徐々に削除し平坦に仕上げていった痕跡がみられる。調整された外側縁には長軸の横位に２つの鑽が残されている。鑽は貫通しており、焼灼後に抜け落ちたものと推定される。

2-3-4はニホンジカ左肩甲骨で、外側位が入念に調整され、骨表面が削り取られているが、小さい破片になっていることから、内側位の骨質の調整は不明である。外側位の端部に焼灼の痕跡の一部が１つ残されている。外側位の調整と焼灼の痕跡は2-3-5(B2)に極めて良く似ている。しかし、肩甲骨横径は2-3-4と2-3-5(B2)で大きく異なっており、同一個体に由来するものではない。

2-3-5(B2)はニホンジカ右肩甲骨で、外側位が入念に調整され、翼状突起と骨表面が削り取られ、内側位の骨質も丁寧に調整されている。本遺跡で出土したものでは内側縁が最も入念に調整された資料である。削られて平坦になった外側位側に５つの焼灼が残されている。遠位側は欠損している。

残された切創の様子から、この卜骨の調整の際に刃器は近位側から遠位の方向へ最終調整面とほぼ平行な角度で用いられたと考えられる。また、骨自体の変形は生じていないものの、内側位もわずかに調整が施されている。残された切創の痕跡から推定して刃器は鋭利な金属製品と考えられ、刃の軌跡の曲折から、大きさは片手で操作する刀子程度と推定される。

2-3-3はニホンジカの左肩甲骨で、翼状突起の一部が残されたままで焼灼や内側位の調整がみられないことから卜骨未製品と考えられ、製作途上で破損した未製品を廃棄したものと推定される。骨幹部遠位寄りにはイヌの噛痕が残されており、廃棄後にイヌが齧り、さらに破片化が進み、その後本遺

跡内に混入したものと考えられる。

(B4)はニホンジカ左肩甲骨製の卜骨で、2-3-4,2-3-5(B2)に極めて類似した調整が加えられ、外側位に2ヶ所の焼灼痕跡を止めている。遠位端関節部と近位側が損壊し失われている。

2-3-2はニホンジカの左肩甲骨で、焼灼の痕跡がみられないものの翼状突起の上部と内側縁遠位端付近に解体・調整時の切創がみられる。特に翼状突起の遠位側には15個もの切創がみられ、意図的に翼状突起を切り取ろうとした作業が行われたことがうかがわれる。上東遺跡から出土したニホンジカ肩甲骨の卜骨は、翼状突起や外側面が丁寧に調整されているものが多いことから、この資料は、肩甲骨の調整時に損壊したため、卜占には使用せず未製品のまま廃棄した可能性が高い。

以上のように鑽の型式では、①無鑽のもの．②楕円の鑽を持つもの．の2タイプが混在していることが明らかになった。また鹿卜のライフサイクルを示す資料群が確認されたことも特記すべき内容である。

2　垂飾

(B10)は鹿角製垂飾未製品である。穿孔が両側から施されているが貫通していない。先端部は人為的な擦痕、削り痕が残されているが、本来のニホンジカ枝部の先端をいかして整形されている。基部側は鹿角本体からこの角製品を分離する時の切創が残され、髄の部分が折れて破損している。

3　角鏃

(B5),(B6),(B8),(B9)は鹿角素材の鏃であり、「鏃形角器」とも呼ばれるタイプである。いずれも調整は入念に行われているが、基部にピッチの付着はみられず、失われた可能性が考えられる。形態的には尖頭部先端断面が円形のタイプ(B6),(B9)と菱形のタイプ(B8)に分けられる。さらに断面円形のタイプは茎と身の作出が明確なタイプ(B5)と不明確なタイプ(B9)に分けられる。

4　管状鹿角製品

(B13)は、鹿角の主幹或いは枝部を輪切りにし、髄をくり抜いたものである。鹿角表面は丁寧に調整され、本来の顆粒状の凹凸は失われ平滑になっている。また、内部の髄も入念に削られ一部に痕跡を止めるのみである。

5　篦状角製品

3-1-3は、素材の鹿角の特徴を残しながら、その小枝の先端はマイナスドライバーのように鋭く偏平に両刃の調整が施され、アワビオコシやイソガネとして用いられた可能性が考えられる。このような角製品は、形態に相違があるものの神奈川県三浦半島の毘沙門C洞窟遺跡や間口A洞窟遺跡、愛知県朝日遺跡(宮腰他　1992)でも発見されている。これらの遺跡には岩礁性の環境が付近に広がるものの、上東遺跡の付近に岩礁性の環境はほとんどなかったものと考えられる上、出土資料にも岩礁性の貝類などはみられない。このことから、本資料については土掘具等、他の用途も考えるべきであろう。特にいずれの遺跡でも卜骨が出土していることから、角斧として卜骨の素材の調整や清掃に利用された可能性も考えられる。近位側の基部の髄の部分は穿孔されており、柄として利用されていた可能性が考えられる。

6　不明鹿角製品

(3-1-5)は鹿角の小枝を切りはずし、両端の髄に穿孔している角製品で、何らかの柄であった可能性が推定される。本遺跡では上述のように卜骨の焼灼具が問題になるところであるが、本資料は焼灼具の柄の可能性がある。時代は降るものの、10世紀の多賀城跡でも卜骨とこのような柄状角製品が供伴しており、類似性が指摘できる。

(B14)は鹿角素材の用途不明製品である。全体に丁寧に調整され、片面には髄の組織を残すものの鹿角表面は丁寧に調整され、本来の顆粒状の凹凸は失われ平滑になっている。明確な使用痕はみられないが、表面と断面の一部に溝状の痕跡が残っている。

第3節　上東遺跡における生業

出土した動物遺存体は、遺跡が所在した河口付近の汽水～淡水域に生息する種のみならず、海岸部や丘陵域から搬入された動物が多く含まれていた。

ただし、淡水性の生物やイヌ・ヒトなどの遺存体の中には、遺跡内で自然死したものや破壊された遺構から混入されたものが含まれる可能性が考えられる。特にヒトの遺存体には切創がみられなかったものの、破片化したり激しく風化したものが含まれ、二次的に埋存した可能性をうかがわせる。

出土動物遺存体の多くは上東遺跡の立地や石器、骨角器組成などを考慮すると、この集団自身が盛んに狩猟活動を行っていたと考えるべきであろう。

上東遺跡の集団はイノシシ、ニホンジカを主体とした中型の陸棲哺乳類の狩猟を盛んに行い、遺跡に持ち込んだのであろう。主要な狩猟地点は、遺跡周辺の沖積平野から丘陵と推定される。また、イノシシ類と分類した資料の中には飼育されたブタが含まれる可能性があるが、全てが飼育されたブタとの確証はない。特に、飼育ブタが出土する弥生遺跡で検出されることの多い下顎骨穿孔例もみられなかった。さらに弥生遺跡で検出される例のある家禽のニワトリも上東遺跡からは検出されなかった。以上の諸点から、上東遺跡では動物飼養が低調であった可能性が考えられる。

上東遺跡の弥生集団は陸棲動物の狩猟を軸としながら、海岸部や河川や水田などを含めた淡水域からの産物も獲得する生業活動を営んでいたと考えられる。

謝　辞

岡山県古代吉備文化財センター下澤公明氏、田井荘之助氏、築地由行氏、渡邉恵里子氏には資料の提供とともに、様々な御教示、御援助を頂いた。東北大学文学部教授須藤隆先生には出土資料類の解釈について御助言を頂いた。国立歴史民俗博物館西本豊弘先生、奈良国立文化財研究所松井章先生、岡山理科大学名取真人氏には哺乳類骨格の同定、解釈について貴重な御助言を頂いた。同大学学生藤田芙美さん、渡辺美保さん、伊達佳輝君、中村周平君、阿部沙織さん、重名佐紀さん、田中紀子さん、中村友美さんには、同定作業と集計を手伝っていただいた。記して感謝いたします。

参考文献

阿部　永他　1994『日本の哺乳類』(東海大学出版局)

阿部宗明　1987『原色魚類大図鑑』(北隆館)
阿部　恵、遊佐五郎ほか　1986『田柄貝塚Ⅲ』宮城県文化財調査報告書111(宮城県)
今泉吉典、岡田弥一郎　1983『学研生物図鑑　動物』(学研)
内田　亨　1979『新編日本動物図鑑』(北隆館)
内田　亨他　1972『谷津・内田　動物分類名辞典』(中山書店)
内田　亨　1979『新編日本動物図鑑』(北隆館)
大泰司紀之　1980「遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節査定法」
『考古学と自然科学』13, pp. 51-74
大泰司紀之　1983「シカ」『縄文文化の研究2　生業』pp. 122-135
大泰司紀之　1984「ニホンジカの比較骨学および地理的時代的変異」
『古文化財の自然科学研究』pp. 555-558
岡田　要(校閲)、今泉吉典(著)　1960『原色日本哺乳類図鑑』(保育社)
岡田　要、内田清之助、内山　亨　1965『新日本動物図鑑』下(北隆館)
金子浩昌、牛沢百合子　1980「池上遺跡出土の動物遺存体」
『池上・四ツ池遺跡』第6分冊自然遺物編, pp. 9-32
金子浩昌　1984『貝塚の獣骨の知識　人と動物とのかかわり』考古学シリーズ⑩(東京美術)
蒲原稔治　1966『標準原色図鑑全集　第4巻　魚』(保育社)
小池裕子、大泰司紀之　1984「遺跡出土ニホンジカの齢構成からみた狩猟圧の時代変化」
『古文化財の自然科学的研究』pp. 508-517
小池裕子、林　良博　1984「遺跡出土ニホンイノシシの齢査定について」『古文化財の自然科学的研究』pp. 519-524
後藤仁敏、大泰司紀之編　1986『歯の比較解剖学』(医師薬出版株式会社)
進藤直作　1968『瀬戸内海の鯨の研究』(神戸市医師協同組合)
須藤　隆　編著　1995『縄文時代晩期貝塚の研究2　中沢目貝塚Ⅱ』(東北大学文学部考古学研究会)
高野伸二　1982『フィールドガイド日本の野鳥』(日本野鳥の会)
常田邦彦　1982「イノシシの分布」『アニマ』118, p. 46
千葉徳爾　1964「日本列島における猪・鹿の生息状況とその変動」『地理学評論』37, pp. 575-592
西本豊弘　1989「下郡桑苗遺跡出土の動物遺存体」『下郡桑苗遺跡』pp. 114-132(大分県教育委員会)
西本豊弘　1991「縄文時代のシカ・イノシシ狩猟」『古代』91, pp. 114-132
西本豊弘　1993「弥生時代のブタの形質について」『国立歴史民俗博物館研究報告』50, pp. 49-70
西本豊弘　1994「縄文時代のシカ・イノシシの大きさの変異」『動物考古学』第2号　pp. 39-52
林　謙作　1986「亀ケ岡と遠賀川」『岩波講座日本考古学　5　文化と地域性』pp. 93-124
林　良博　1983「イノシシ」『縄文文化の研究2　生業』pp. 136-147
林　壽郎　1968『標準図鑑全集　動物Ⅰ』(保育社)
林　壽郎　1968『標準図鑑全集　動物Ⅱ』(保育社)
春成秀爾　1993「豚の下顎懸架－弥生時代における壁邪の習俗」
『国立歴史民俗博物館研究報告』50, pp. 71-140
藤田三郎編　1986『昭和59年度唐古・鍵遺跡発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査団概要4
丸山直樹　1981「ニホンジカの季節的移動と集合様式に関する研究」
『東京農工大学農学部学術報告』23, pp. 1-85
宮腰健司、石黒立人、赤塚次郎　1992『朝日遺跡Ⅲ』(愛知県埋蔵文化センター調査報告書第32集)
Angela von den Driesch　1976　"A Guide to the Mesurement of Animals Bones from Archaeological Sites" Peabody Museum Bulletin 1, Museum of Archaeology, Harverd University

整理番号	図版番号(掲載番号)	掲載遺構	時代	時期	大分類	小分類	部位	LR	部分	成長度 雌雄	重量(g)	備考(数値の単位は(mm))
1	1-1-1	貝塚	古墳		貝類	カワニナ	殻体	M	−	?	0.16	CM不明
2	1-1-2	貝塚	古墳		貝類	カワニナ	殻体	M	−	?	0.10	CM不明
3	1-1-3	波止場状	古墳		貝類	腹足綱	蓋	−	完形	?	0.35	CM不明　最大径：32.74
4		貝塚	古墳		貝類	腹足綱	蓋	−	完形	?	0.05	CMなし　最大長：11.00
5		貝塚	古墳		甲殻類	カニ類	可動or不動指	?	破片	?	0.06	CM不明　化石化
6		貝塚	古墳		甲殻類	カニ類	可動or不動指	?	破片	?	0.02	CM不明　化石化
7		貝塚	古墳		甲殻類	カニ類	可動or不動指	?	破片	?	0.02	CM不明　化石化
8	1-1-12or13or14	貝塚	古墳		甲殻類	カニ類	可動or不動指	−	遠位端	?	0.07	CM不明　化石化
9	1-1-12or13or14	貝塚	古墳		甲殻類	カニ類	可動or不動指	−	遠位端	?	0.02	CM不明　化石化
10	1-1-12or13or14	貝塚	古墳		甲殻類	カニ類	可動or不動指	−	遠位端	?	0.01	CM不明　化石化
11	1-1-12or13or14	貝塚	古墳		甲殻類	カニ類	可動or不動指	−	遠位端	?	0.03	CM不明　化石化
12	1-1-12or13or14	貝塚	古墳		甲殻類	カニ類	可動or不動指	−	遠位端	?	0.03	CM不明　化石化
13		貝塚	古墳		甲殻類	カニ類	可動指	−	遠位端	?	0.69	CM不明　化石化
14		波止場状	弥後		甲殻類	カニ類	体部	LR	−	?		2点　化石化　全長＝計測不能
15		波止場状	弥後		甲殻類	カニ類	体部	R	−	?	3.15	化石化
16		波止場状	弥後		甲殻類	カニ類	体部	LR	−	?	5.43	CM不明　化石化
17	1-1-9	波止場状	弥後		甲殻類	カニ類	体部	LR	−	?	5.25	CM不明　化石化
18		波止場状	弥後		甲殻類	カニ類	体部	LR	−	?	4.23	CM不明　化石化
19		波止場状	弥後		甲殻類	カニ類	体部	LR	−	?	4.35	CM不明　化石化
20		波止場状	弥後		甲殻類	カニ類	体部	LR	−	?	3.02	CM不明　化石化
21		波止場状	弥後		甲殻類	カニ類	体部	LR	−	?	3.36	CM不明　化石化
22		波止場状	弥後		甲殻類	カニ類	体部	LR	−	?	1.73	CM不明　化石化
23		波止場状	古墳		甲殻類	カニ類	体部	LR	−	?	5.67	CM不明　化石化
24	1-1-10or11	波止場状	古墳		甲殻類	カニ類	体部	LR	−	?	4.85	CM不明　化石化
25		波止場状	古墳		甲殻類	カニ類	体部	LR	−	?	2.98	CM不明　化石化
26		波止場状	古墳		甲殻類	カニ類	体部	LR	−	?	3.63	CM不明　化石化
27		波止場状	古墳		甲殻類	カニ類	体部	LR	−	?	2.74	CM不明　化石化
28		波止場状	古墳		甲殻類	カニ類	体部	LR	−	?	3.64	CM不明　化石化
29		波止場状	古墳		甲殻類	カニ類	体部	LR	−	?	4.34	CM不明　化石化
30		波止場状	古墳		甲殻類	カニ類	体部	LR	−	?	2.49	CM不明　化石化
31	1-1-8	波止場状	古墳		甲殻類	カニ類	体部	LR	−	?	2.61	CM不明　化石化
32	1-1-4				甲殻類	カニ類	体部	LR	−		9.16	最大幅：27.50　化石化
33	1-1-7				甲殻類	カニ類	体部	LR	−		7.16	化石化
34	1-1-5				甲殻類	カニ類	体部	LR	−		4.22	化石化
35	1-1-6				甲殻類	カニ類	体部	LR	−		3.08	最大幅：29.00　化石化
36		貝塚	古墳		甲殻類	カニ類	不動指	−	遠位端	?	0.17	CMなし　複数個有り(8点)
37		貝塚	古墳		甲殻類	カニ類	不動指	−	遠位端	?	0.17	CMなし　複数個有り(8点)
38		貝塚	古墳		魚類	板鰓亜綱	椎骨	M	ほぼ完形(棘突起欠損)	?	0.01	CM不明　前位関節横径4.13
39		波止場状	弥後		魚類	板鰓亜綱	椎骨	M	破片	成長度不明	2.46	アオザメに似る　椎体長:13.08 椎骨径30.00　CMなし？
40	1-1-15	波止場状	弥後		魚類	板鰓亜綱	椎骨	M	完形	成～老	12.06	アオザメに似る　縦径:35.04 横径:37.31　関節幅37.17　CM不明
41	1-1-17	波止場状	古墳		魚類	板鰓亜綱	椎骨	M	完形	成長度？	1.24	エイ類　椎体径13.97　中央部に人為的穿孔
42		貝塚	古墳		魚類	板鰓亜綱	椎骨	M	完形	?	0.07	エイ類　CM不明
43	1-1-16	波止場状	古墳		魚類	板鰓亜綱	椎骨	M	完形	?	0.71	椎体の中心に人為的穿孔　前関節径:13.74
44	1-1-23	貝塚	古墳		魚類	クロダイ	角骨	L	完形	?	0.37	CMなし
45	1-1-21	貝塚	古墳		魚類	クロダイ	歯骨	R	完形	?	2.45	CM不明　全長31.13
46		貝塚	古墳		魚類	クロダイ	歯骨	L	骨幹部破片	?	0.09	CM不明
47	1-1-22	貝塚	古墳		魚類	クロダイ	前上顎骨	R	骨幹部	?	0.99	CM不明　残存高:10.41
48		貝塚	古墳		魚類	クロダイ	前上顎骨	L	骨幹部破片	?	1.02	CM不明　マガキが付着＝二次堆積？
49	1-1-27	貝塚	古墳		魚類	コチ属	歯骨	R	遠位端	?	1.11	CM不明　歯骨高:7.89
50	1-1-26	貝塚	古墳		魚類	コチ属	主上顎骨	L	前位	?	0.40	CM不明　残存長:28.45
51	1-1-24	貝塚	古墳		魚類	コチ属	前鰓蓋骨	R	骨幹部	?	0.50	CM？　比較的大型
52		貝塚	古墳		魚類	コチ属	副蝶形骨	M	破片	?	0.30	CM不明
53	1-1-25	貝塚	古墳		魚類	コチ属	翼耳骨	R	完形	?	0.67	CM不明
54	1-1-18	貝塚	古墳		魚類	スズキ	主上顎骨	L	遠位置＋骨幹部	?	0.55	CM不明　残存長:35.85　前位関節高:7.72
55		貝塚	古墳		魚類	スズキ	腹椎	M	ほぼ完形(棘突起欠損)	?	0.07	CM不明　前位関節横径:4.00
56		貝塚	古墳		魚類	スズキ目	背鰭鰭棘	M	完形	?	0.26	CM不明　全長:39.57
57		貝塚	古墳		魚類	スズキ目	背鰭鰭棘	M	基部	?	0.08	CM不明
58		貝塚	古墳		魚類	スズキ目	背鰭鰭棘	M	完形	?	0.08	CM不明
59		貝塚	古墳		魚類	スズキ目	背鰭鰭棘	M	ほぼ完形	?	0.01	CM不明
60		貝塚	古墳		魚類	スズキ目	背鰭鰭棘	M	ほぼ完形	?	0.18	CM不明
61		貝塚	古墳		魚類	スズキ目	背鰭鰭棘	M	ほぼ完形	?	0.12	CM不明
62		貝塚	古墳		魚類	スズキ目	背鰭鰭棘	M	ほぼ完形	?	0.13	CM不明
63		貝塚	古墳		魚類	スズキ目	背鰭鰭棘	M	ほぼ完形	?	0.25	CM不明
64		貝塚	古墳		魚類	スズキ目	背鰭鰭棘	M	完形	?	0.03	CM不明
65		貝塚	古墳		魚類	スズキ目	背鰭鰭棘	M	ほぼ完形	?	0.11	CM不明
66		貝塚	古墳		魚類	スズキ目	背鰭鰭棘	M	ほぼ完形	?	0.36	CM不明
67		貝塚	古墳		魚類	スズキ目	背鰭鰭棘	M	ほぼ完形	?	0.07	CM不明
68		貝塚	古墳		魚類	スズキ目	鱗	?	破片	?	0.08	CM不明
69		貝塚	古墳		魚類	タイ科	歯	?	完形	?	0.10	CM不明
70		貝塚	古墳		魚類	タイ科	歯	M	完形	?	0.01	CM不明
71		貝塚	古墳		魚類	タイ科	上擬鎖骨	L	完形	?	0.16	CM不明
72		貝塚	古墳		魚類	タイ科	尾舌骨	M	−	?	0.12	CM不明
73		貝塚	古墳		魚類	タイ科	尾椎	M	完形	?	0.06	CM不明　前位関節横径:4.00
74		貝塚	古墳		魚類	タイ科	尾椎	M	完形(神経棘欠損)	?	0.38	CM不明　前位関節横径:5.77
75		貝塚	古墳		魚類	タイ科	遊離歯	?	完形	?	0.35	破損不明　11点　計測不能
76	1-1-28	貝塚	古墳		魚類	ナマズ	胸鰭棘	L	骨幹部	?	0.41	CM不明　残存長:17.86
77	1-1-29	貝塚	古墳		魚類	フナ	臀鰭棘	R	完形	?	0.01	CM不明　残存長:16.00
78		貝塚	古墳		魚類	マダイ	間鰓蓋骨	R	完形	?	0.27	CM不明　残存長:27.80
79	1-1-20	貝塚	古墳		魚類	マダイ	歯骨	L	骨幹部	?	2.41	CM不明　残存長:26.93
80	1-1-19	波止場状	古墳		魚類	マダイ	頭蓋骨	LR	前頭骨　副蝶形骨 基後頭骨　篩骨 後頭骨　翼耳骨	成～老	53.27	CM不明　化石化？　全長84.00 基後頭骨関節横径:9.76
81		貝塚	古墳		魚類	硬骨魚綱	基後頭骨	M	破片	?	0.28	CM不明
82		貝塚	古墳		魚類	硬骨魚綱	尾椎	M	ほぼ完形(棘突起欠損)	?	0.04	CM不明　前位関節横径:2.95
83		貝塚	古墳		魚類	硬骨魚綱	腹椎	M	ほぼ完形(棘突起欠損)	?	0.01	CM不明
84		貝塚	古墳		魚類	硬骨魚綱	方骨	L	−	?	0.02	CM不明
85	1-1-35	波止場状	弥後		爬虫類	スッポン	下腹甲板	R	ほぼ完形		4.53	全長:50.96　全幅:33.10　厚:4.22
86		波止場状	弥後		爬虫類	スッポン	下腹骨板	R	破片	?	1.65	CMなし？
87		波止場状	弥後		爬虫類	スッポン	下腹骨板	L	ほぼ完形(一部欠損)	成～老	10.83	全長:92.24　CM(外側位、内側位)

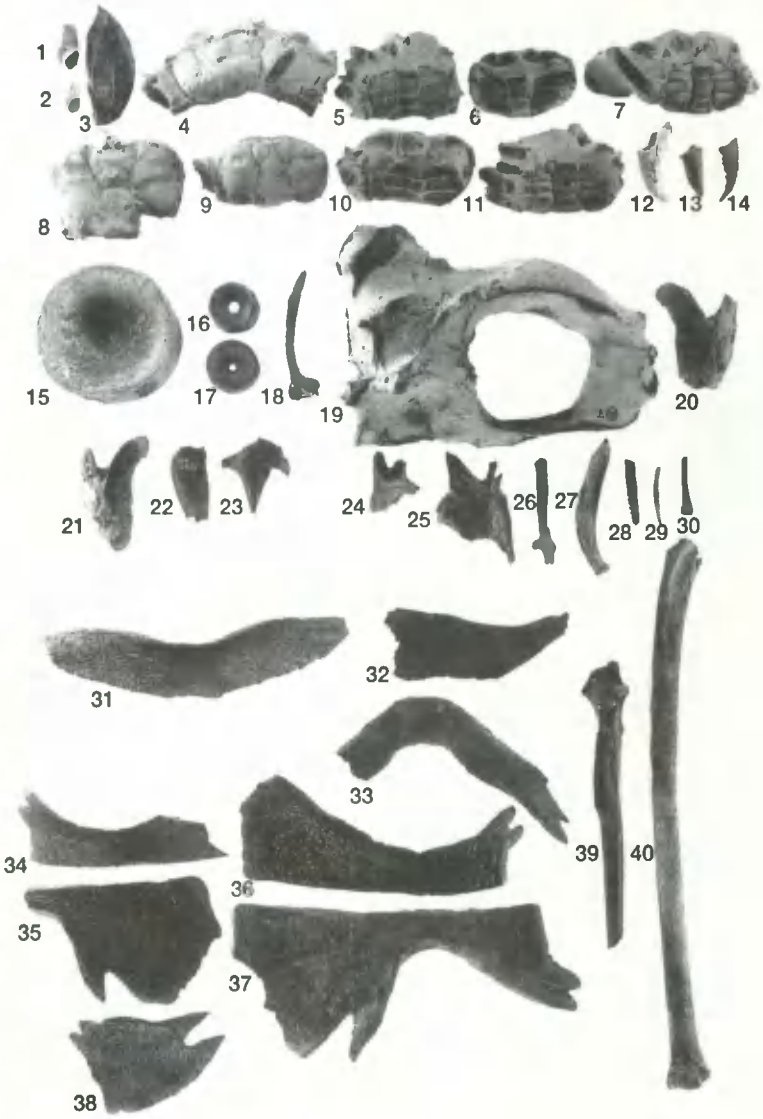
整理番号	図版番号(掲載番号)	掲載遺構	時代時期	大分類	小分類	部位	LR	部分	成長度 雌雄	重量(g)	備考(数値の単位は(mm))
88		波止場状	弥後	爬虫類	スッポン	剣腹甲板	L	完形	?	1.65	CMなし? 全長32.39
89	1-1-37			爬虫類	スッポン	剣腹骨板	L	完形(一部欠損)	?	1.57	CMなし? 残存長:40.50
90	1-1-32	波止場状	弥後	爬虫類	スッポン	前烏口骨	L	一部欠損	成～老	1.72	全長:49.10 CMなし(発掘後の傷有) イヌの噛痕?
91		波止場状	古墳	爬虫類	スッポン	第1肋骨板	R	外側縁	?	2.00	CM(外側縁に沿って)
92		波止場状	弥後	爬虫類	スッポン	第3肋骨板	R	腹縁	?	4.02	CM?
93		波止場状	弥後	爬虫類	スッポン	第5肋骨板	R	骨幹部	?	1.21	CMなし? 小型
94		波止場状	弥後	爬虫類	スッポン	第6肋骨板	R	完形	成～老	4.46	全長:67.78 幅:21.30 厚:4.22 CMなし(発掘後の傷有)
95		波止場状	弥後	爬虫類	スッポン	第6肋骨板	L	骨幹部	?	2.08	CM?
96		波止場状	弥後	爬虫類	スッポン	第7肋骨板	L	第3背甲板	成長度(成～老)	5.64	残存全長:65.06 全幅:31.94 厚:4.00 CMなし
97		波止場状	弥後	爬虫類	スッポン	第7肋骨板	L	ほぼ完形	?	1.69	全長:47.75 CMなし?
98		波止場状	弥後	爬虫類	スッポン	中腹骨板	R	遠位+骨幹部	成～老	10.83	CMなし?
99	1-1-36	波止場状	弥後	爬虫類	スッポン	中腹骨板	L	遠位+骨幹部	?	2.59	残存全長:56.64 残存全幅:20.55 残存厚:2.59
100	1-1-33	波止場状	弥後	爬虫類	スッポン	中腹骨板	L	ほぼ完形	?	5.25	残存全長:74.78 残存全幅:23.83 残存厚:3.69 最大幅:70.00(縁を除く)
101		波止場状	古墳	爬虫類	スッポン	中腹骨板	R	完形	?	4.67	CMなし 全長:77.80
102		波止場状	弥後	爬虫類	スッポン	頂骨板	LR	完形	成～老	4.48	全長:74.42 幅:16:34 厚:3.89 CMなし(発掘後の傷有)
103	1-1-31	波止場状	古墳	爬虫類	スッポン	頂骨板	LR	完形	?	4.68	CM(内側位) 全幅:81.00
104		波止場状	弥後	爬虫類	スッポン	頂骨板	LR	骨幹部破片	?	1.01	残存全長:28.54 全幅:12.76 厚:3.89 CMなし?
105	1-1-34	波止場状	弥後	爬虫類	スッポン	内腹甲板	LR	ほぼ完形	成長度(成～老)	2.71	厚:2.25 CMなし?(発掘後の傷)
106		波止場状	弥後	爬虫類	スッポン	背甲	L	第7背甲板外側位	成長度不明	1.46	全長:43.11 全幅:17.51 厚:3.47 黒変 発掘後の傷
107		波止場状	弥後	爬虫類	スッポン	腹甲板	R	骨幹部破片	?	1.93	CM不明
108	1-1-39	波止場状	弥後	鳥類	カモAタイプ	脛骨	L	骨幹部+近位	p:f	1.75	残存全長:75.15 全幅:14.65 近位関節幅14.70 sp(遠位部分)
109	1-1-40	波止場状	弥後	鳥類	サギ型(中型)	尺骨	L	骨幹部+遠位端	d:f	4.86	CM(後位) 中程度の大きさ 残存長143.00
110	1-1-30	貝塚	古墳	両生類	カエル目	脛腓骨	L	近位端+骨幹部	p:f	0.02	CM不明 残存長:15.68
111	4-2-21	波止場状	古墳	哺乳類	イタチ科	上腕骨	L	骨幹部(遠位より)	?	1.27	CMなし? 残存長:36.00
112	4-2-4	波止場状	弥後	哺乳類	イヌ	下顎骨	R	完形(遠位端一部欠損)	若～成	17.02	全長:102.64 P1～P4歯槽のみ M1～M3歯槽のみ CMなし?(発掘後の傷有) M1～M3の歯槽長35.38 M1の歯槽長18.36 P1～3歯牙欠損
113	4-2-3	波止場状	弥後	哺乳類	イヌ	下顎骨	R	完形	f 若～成	20.54	全長:109.97 I1×2×3×C×P1×2×3○4○ M1○2○3○
114	4-2-2			哺乳類	イヌ	下顎骨	R	完形	成～老獣	42.26	CMなし I123×C×P1×234 ○M12○3○× M12は小窩独立 P1～M3歯槽長:68.40 M1～M3歯槽長:32.95 M1歯冠最大長:19.55 M1歯冠最大幅:8.85
115	4-2-11	波止場状	古墳	哺乳類	イヌ	寛骨	R	腸骨 破片	f	3.74	CMなし?
116	4-2-9	波止場状	古墳	哺乳類	イヌ	頸椎	M	完形(横突起一部欠損)	ant,pos:f	9.72	CMなし 椎体残存長:17.47
117	4-2-10	波止場状	古墳	哺乳類	イヌ	腰椎	M	椎体(棘突起+横突起欠損)	ant,pos:f	6.09	CMなし? 椎体長:25.88
118	4-2-17	波止場状	古墳	哺乳類	イヌ	尺骨	R	骨幹部	?	5.81	全長:106.40 全幅:16.30 近位と遠位欠 CM(後側位)
119	4-2-16	波止場状	古墳	哺乳類	イヌ	尺骨	R	骨幹部+関節	若以上	7.28	縄文犬と比べてきゃしゃ CM不明 関節長:14.63
120				哺乳類	イヌ	上腕骨	L	遠位端	?	2.34	CM不明
121	4-2-5	波止場状	弥後	哺乳類	イヌ	第1頸椎	M	完形	ant,pos:f	9.55	頭蓋関節径37.11 残存最大長68.88 前位関節幅37.18 前位関節高24.12 CMなし?
122	4-2-6	波止場状	弥後	哺乳類	イヌ	第1頸椎	M	完形(横突起一部欠損)	ant,pos:f	7.51	前関節横径31.35 前位関節幅32.20 関節高20.77 CMなし?
123	4-2-8	波止場状	弥後	哺乳類	イヌ	第2頸椎	M	第2頸椎	ant,pos:f	4.74	残存全長:44.24 CM不明
124	4-2-7			哺乳類	イヌ	第2頸椎	M	完形	ant,pos:f	9.47	CMなし? 骨体最大長:39.50
125		波止場状	弥後	哺乳類	イヌ	第6頸椎	M	ほぼ完形(後位一部欠損)	f	4.70	残存高=33.07 全幅=30.72 CM(関節突起)
126		波止場状	弥後	哺乳類	イヌ	大腿骨	L	骨幹部	?	8.35	残存全長:78.15 CM?
127	4-2-1	波止場状	古墳	哺乳類	イヌ	頭蓋骨	LR	前頭骨 後頭骨 側頭骨 頭頂骨	若以上	63.74	後頭顆最大幅35.63 頭頂骨最大幅54.90 後頭窩最大幅19.78 後頭窩最大高14.80 右側縫合ほぼ終了 左側一部残 CM(右側頭骨) 後頭顆にはなし
128	4-2-13	波止場状	弥後	哺乳類	イヌ	橈骨	L	完形	p.d:f	14.29	全長:145.11 CM(外側位)
129	4-2-15	波止場状	弥後	哺乳類	イヌ	橈骨	L	完形	p.d:f	7.71	全長:123.10 関節幅(上):14.39 関節幅(下):19.32 CMなし(発掘後の傷)
130	4-2-14	波止場状	弥後	哺乳類	イヌ	橈骨	R	完形	p.d:f	7.11	全長:122.00 華奢 CMなし?
131		波止場状	弥後	哺乳類	イヌ	橈骨	L	骨幹部	?	4.24	残存全長:69.20 全幅(SC):11.15 CM? ネズミ噛痕
132	4-2-12	波止場状	弥後	哺乳類	イヌ	橈骨	R	完形	p.d:f	14.75	CM不明 ネズミ噛痕? 小型犬 残存長:144.45
133	4-2-19	波止場状	弥後	哺乳類	イヌ	脛骨	L	骨幹部+遠位端	d:f	14.65	残存全長:117.85 ネズミ噛痕 CM不明
134	4-2-18	波止場状	弥後	哺乳類	イヌ	脛骨	R	完形	p.d:f	19.87	CM(遠位付近、内側縁) 残存全長143.85 小型犬中程度
135	2-1-2	波止場状	弥後	哺乳類	イノシシ類	下顎骨	L	下顎体 m3X	若獣 3～6ケ月齢程度	19.37	CMなし?(発掘後の新しい傷)
136		波止場状	弥後	哺乳類	イノシシ類	距骨	R	完形	f	8.30	全長:40.04 全幅:24.52 厚:20.52 イヌ噛痕 CM不明
137	2-2-7	波止場状	弥後	哺乳類	イノシシ類	距骨	L	完形	f	14.49	ネズミ噛痕
138		波止場状		哺乳類	イノシシ類	距骨	L	遠位端	d:u	14.49	全長:46.40 ネズミ噛痕 CM
139		波止場状	弥後	哺乳類	イノシシ類	胸椎	M	棘突起欠損 突起一部欠損 ほぼ完形	ant,pos:f	14.84	椎体全長=21.04 CM(後位)
140		波止場状	弥後	哺乳類	イノシシ類	頸椎(2点)	M	ほぼ完形	ant,pos:f	30.80	残存椎体全長:47.20 CM不明(発掘後の傷) 2つが癒着(病変) 後位の横突起の骨折 飼育個体の可能性有
141	2-1-3(B3)	波止場状	弥後	哺乳類	イノシシ類	肩甲骨	R	遠位端+骨幹部	d:f	23.06	下骨 CM不明 外側縁に1、内側に5つの焼灼の痕有
142	2-2-1	波止場状	古墳	哺乳類	イノシシ類	後頭骨	M	後頭顆	f	13.50	CM(後頭顆) 後頭顆最大幅:53.04 後頭顆窩最大幅:24.41
143		波止場状	弥後	哺乳類	イノシシ類	腰椎	M	完形 棘突起欠損	f	25.14	椎全長:34.00 幅:26.01 高20.00 CM イヌ噛痕
144		波止場状	弥後	哺乳類	イノシシ類	尺骨	L	近位関節部	f?	19.25	残存全長:74.10 CM不明
145		貝塚	古墳	哺乳類	イノシシ類	上顎第3乳切歯	R	完形	0.5歳程度	0.37	未咬耗 全長:17.86
146		波止場状	弥後	哺乳類	イノシシ類	上腕骨	L	骨幹部	?	40.83	全長:83.98 高:37.50 全幅:34.72 CM 破損イヌ・ネズミ
147		波止場状	弥後	哺乳類	イノシシ類	上腕骨	L	骨幹部	?	27.45	残存全長:103.00 CM不明
148		波止場状	弥後	哺乳類	イノシシ類	上腕骨	L	骨幹部	?	37.72	全長:111.12 加工:CM,sp
149		波止場状	弥後	哺乳類	イノシシ類	上腕骨	L	遠位端	d:f	17.84	残存全幅:44.39 CM不明
150	2-2-4	波止場状	弥後	哺乳類	イノシシ類	上腕骨	R	遠位+骨幹部	d:f	42.53	全長=測定不能 CM イヌ噛痕
151		波止場状		哺乳類	イノシシ類	上腕骨	L	骨幹部	成長度不明	46.86	残存全長:110.01 遠位側残存幅:32.25 イヌ噛痕 CMなし?

整理番号	図版番号(掲載番号)	掲載遺構	時代	時期	大分類	小分類	部位	LR	部分	成長度 雌雄	重量(g)	備考(数値の単位は(mm))
152		波止場状	弥後	哺乳類	イノシシ類	前頭骨		L	頬骨突起	?	3.15	全長:30.45 高:22.00 全幅:25.86 CMなし
153				哺乳類	イノシシ類	側頭骨		L	岩様部	f	10.20	CM不明 残存長:44.70
154		貝塚	古墳	哺乳類	イノシシ類	第1一切歯		R	I1 完形	1.5歳程度以上	2.54	咬耗開始 小窩独立 159と同一個体全長:36.38
155		波止場状	弥後	哺乳類	イノシシ類	大腿骨		L	骨幹部	?	42.06	残存全長:135.01 全幅:34.62 CM
156		波止場状	弥後	哺乳類	イノシシ類	大腿骨		L	遠位端	d:u	27.83	CM不明
157		波止場状	弥後	哺乳類	イノシシ類	中間手根骨		R	完形	f?	5.09	CMなし
158	2-2-8	波止場状	古墳	哺乳類	イノシシ類	中節骨		L	ⅡorⅣ	f	2.55	CMなし? 火を受けた白色に変化 最大長25.00
159	2-1-1,2	貝塚	古墳	哺乳類	イノシシ類	頭蓋骨+下顎骨		LR	鼻骨 前頭骨 上顎骨 側頭骨 後頭骨 頭頂骨 下顎骨(完形)	2～2.5歳程度(下顎臼歯咬耗より)	下顎骨 214.26 頭蓋骨 306.62	CM(左後頭骨外側縁、前頭骨頂部、後頭頸) 左上:I1○2×C×P1△234○M123○M3萌出途次、それ以外は全て咬耗開始、左下:I1○2△C×P1△234×234×M123○M3萌出途次、M1は小窩独立出wear index Ⅲ 右下:I12×C△P1なし2×34○M123○P1は歯槽無し、左右下M2はwear index Ⅱ
160		波止場状	弥後	哺乳類	イノシシ類	肋骨		R	骨幹部	?	4.25	CM(外側位) ネズミ噛咬? 残存長:68.90
161	2-2-5	波止場状	弥後	哺乳類	イノシシ類	橈骨		L	骨幹部+近位端	p:f	43.46	全長=114.74 関節幅:33.45 イヌ噛痕(遠位側)
162		波止場状	弥後	哺乳類	イノシシ類	脛骨		R	近位端	p:u	12.98	近位端最大幅(復元値)54.00 CMorイヌの噛痕?
163		波止場状	弥後	哺乳類	イノシシ類	脛骨		L	骨幹部	?	36.29	CM不明
164	2-2-6	波止場状	弥後	哺乳類	イノシシ類	脛骨		R	骨幹部	?	50.40	CM不明 ネズミ噛痕
165	4-1-3	下がり	古墳	哺乳類	ウシ	上腕骨		L	骨幹部+遠位端	d:f	207.62	CM(遠位後位に多孔) 残存長:189.72 遠位最大幅:73.10
166		波止場状	古墳	哺乳類	ウシ目	頸椎		M	棘突起	f	2.77	CMなし? イヌ噛痕?
167	4-1-4	下がり	古墳	哺乳類	ウマ	橈骨		R	骨幹部+遠位端	d:f	247.20	縁位関節幅:73.90 残存長:297.5 CMなし? 尺骨と癒合
168	4-2-20	貝塚	古墳	哺乳類	テン	頭蓋骨		LR	鼻骨+上顎骨	f	3.38	CMなし? LRC歯槽最大幅:23.38 LRI3歯槽幅:15.22 LI123×C×P12○3× P12は咬耗開始 RI123×C×P12×3○ P3は咬耗開始
169		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	右脛骨			遠位端+骨幹部	f	16.20	遠位端最大幅:35.14 CMなし?
170		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	下顎第2後臼歯		R	完形	3.5～5.5歳	3.92	CMなし wear index 5 咬合面長:18.84 咬合面幅:8.78 歯冠長:17.81 歯冠幅:11.17
171	3-1-4	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	角		L	角冠	1歳以上♂	42.41	全長:64.75 全幅:49.81 CM(金属器)
172	3-1-5	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	角		L	角冠・主幹部	2歳以上♂	78.82	高:70.88 全幅:55.76 角冠の最大径:59.64 受火 CM 落角
173		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	角		L	角幹部(第1主幹)	3歳以上♂	23.95	残存全長:75.46 全幅:30.03 加工痕 CM
174	3-1-2	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	角		L	第1枝	2歳以上♂	53.91	残存全長:147.60 全幅:26.22 髄の組織を抜くように穿孔有 sp CM不明 角製品の可能性有
175	(B10)	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	角		?	角幹部	1歳以上♂	5.72	鹿角製品
176	(B5)	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	角		?	角幹部	1歳以上♂	3.01	鹿角製鏃
177	(B9)	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	角		?	角幹部	1歳以上♂	2.22	鹿角製鏃
178	(B6)	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	角		?	角幹部	1歳以上♂	3.48	鹿角製鏃
179	(B8)	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	角		?	角幹部	1歳以上♂	3.48	鹿角製鏃
180	3-1-1	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	角		R	第1～2の小枝 第2～3の小枝 尖部	3歳以上♂	22.11	全長=測定不能 CM?
181	3-1-3	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	角(第2・3あるいは第3・4枝)		R	第2～4の小枝	1歳以上♂	69.25	角先端に金属器の削りによる両刃状の加工痕跡
182	3-2-6	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	距骨		L	完形	f	20.38	全長:42.195 全幅:25.38 きゃしゃ CMなし?
183	3-2-7	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	距骨		L	完形	f	16.35	全長:39.00 全幅:27.20 CMなし?
184		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	距骨		R	完形(一部欠損)	f	12.25	全長:48.50 全幅:40.90 CM
185		波止場状	古墳	哺乳類	ニホンジカ	距骨		L	完形	?	22.78	CM 全長:42.60 最大幅:26.55
186		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	胸椎		M	完形	ant,pos:u	6.82	全長:76.00 全幅:54.90 化骨化していない 茶褐色に変色 CM(椎体右外側位)
187		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	胸椎		M	胸椎	成長度:f	10.54	破損:CM 化骨化している 棘突起一部欠 棘突起前位にCM
188	3-1-12	波止場状	古墳	哺乳類	ニホンジカ	胸椎		M	完形(一部欠損)	ant:f	10.87	CM(金属器による切痕(右棘突起)) 前位関節最大幅:28.84
189	3-1-10	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	頸椎		M	完形	a:f p:u	57.80	全長:72:53 高:54.20 全幅:41.94 CMなし
190	3-1-11	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	頸椎		M	完形	f,ant,pos:f	36.69	椎体全長=52.30 CMなし
191		波止場状	古墳	哺乳類	ニホンジカ	頸椎		M	前位	ant:f	3.42	CM不明 関節横径:16.95 関節縦幅:25.25
192	2-3-7	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	肩甲骨		R	角幹部+近位端	d:f	25.56	残存全長:159.84 前縁・肩峰・背縁を切除してへら状に成形:骨角製品 イヌ噛痕 CM+擦痕 骨刀状骨製品
193	2-3-2	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	肩甲骨		L	近位端+骨幹部	f	50.09	CM(翼状突起の上部、内側縁遠位端寄り) 卜骨未製品
194		波止場状	古墳	哺乳類	ニホンジカ	肩甲骨		L	遠位端+骨幹部	d:f	26.32	CMなし? 横位関節部径:26.38 縦方向関節部径:29.18
195	2-3-4	波止場状	古墳	哺乳類	ニホンジカ	肩甲骨		L	遠位端+骨幹部	d:f	10.65	CM 関節部横径:30.06 関節部縦径:29.92 卜骨
196	2-3-5(B2)	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	肩甲骨		R	遠位端+骨幹部	d:f	15.73	CM 関節部横径:27.10 関節部縦径:27.88 卜骨
197	2-3-1	波止場状	古墳	哺乳類	ニホンジカ	肩甲骨		L	遠位端+骨幹部	d:f	32.88	CM(遠位端付近) 残存長:113.98 横径:26.40 縦径:28.02
198	3-2-4	波止場状	古墳	哺乳類	ニホンジカ	肩甲骨		L	遠位端+骨幹部	d:f	14.79	CM(外側位) 卜骨未製品 残存長:95.26 内側位にスス状物質が被膜状に付着
199	2-3-3	表採		哺乳類	ニホンジカ	肩甲骨		L	骨幹部	?	7.63	CM 卜骨未製品
200	2-3-6(B1)	貝塚	古墳	哺乳類	ニホンジカ	肩甲骨		L	近位端+骨幹部	f	19.57	CM 卜骨
201		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	腰椎		M	完形 棘突起欠損	ant,pos:f	32.80	椎体全長:40.70 CMなし?
202		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	腰椎		M	椎体	f	27.04	全長:56.66 高:45.85 全幅:50.90 CMなし?
203		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	腰椎		M	ほぼ完形 棘突起欠損	f	23.24	化骨化している 椎体全長=38.12 CMなし?(新しい傷)
204		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	腰椎		M	椎体(棘突起、横突起欠損)	ant,pos:u	15.08	CM不明
205		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	腰椎		M	ほぼ完形(棘突起、横突起欠損)	pos,ant:u	13.55	椎体残存長=34.06 高=39.06 CMなし?
206		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	腰椎		M	ほぼ完形(棘突起、横突起欠損)	pos,ant:u	24.32	椎体残存長:30.95 CM不明
207		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	腰椎		M	ほぼ完形(棘突起、横突起欠損)	pos,ant:f	20.50	椎体長:37.90 棘突起後位に異常に骨増殖あり 後関節突起骨折後治癒 CMなし?
208		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	腰椎		M	ほぼ完形(棘突起、横突起欠損)	ant,pos:u	9.05	全長=38.44 高37.12 椎体残存長:28.62 前位関節全幅:20.38 前の関節面は接合 椎体長=30.14 CM(棘突起及び横突起)
209		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	腰椎		M	椎体	ant,pos:f	9.61	残存長:30.71 CMなし?

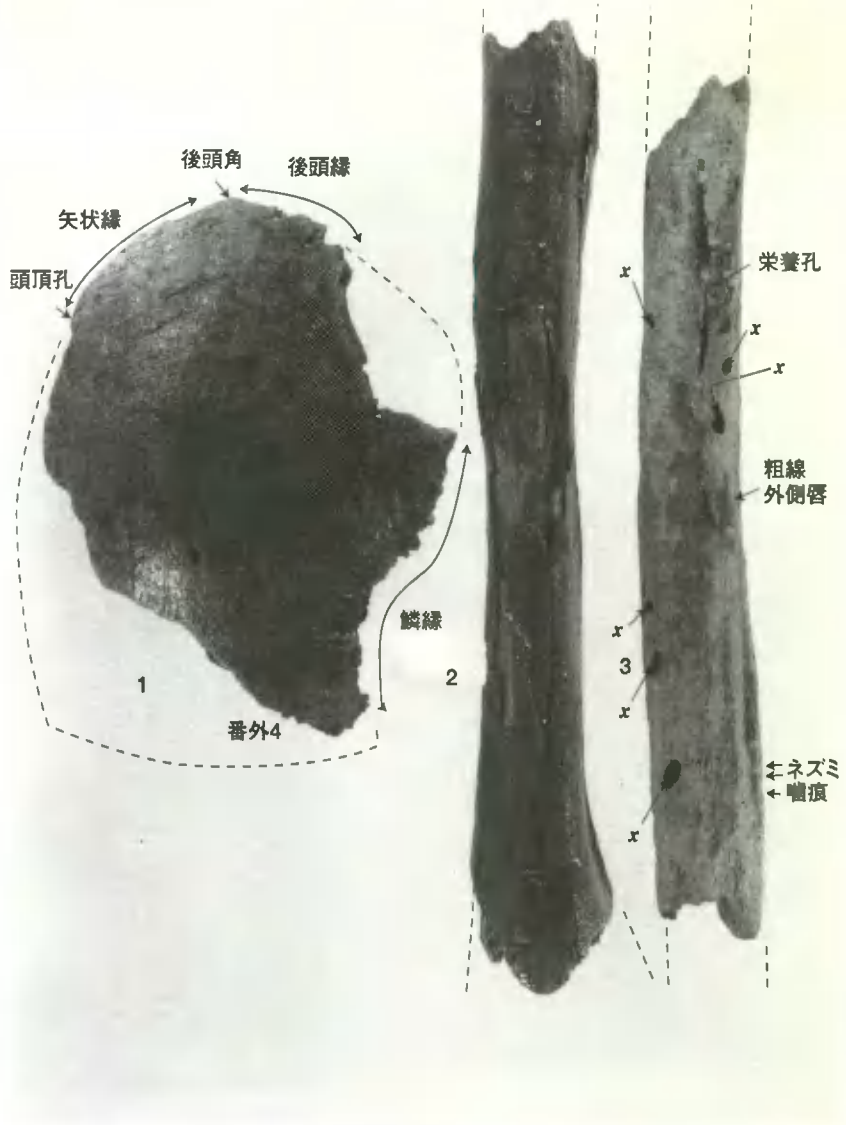
整理番号	図版番号(掲載番号)	掲載遺構	時代時期	大分類	小分類	部位	LR	部分	成長度 雌雄	重量〔g〕	備考(数値の単位は〔mm〕)
210	3-1-13	波止場状	古墳	哺乳類	ニホンジカ	腰椎	M	完形(棘突起+横突起欠損)	ant,pos:f	20.23	CM(左外側位に横方向+縦方向、右外側位) 椎体最大長:31.74
211	3-2-2	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	尺骨	R	関節部+骨幹部	?	14.47	CM(尺骨体後位内側、外側位) 残存長:137.20
212		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	上腕骨	R	遠位端	d:f	9.27	CM不明
213		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	上腕骨	L	骨幹部	f不明 幼~若獣?	28.03	残存全長:121.45 表面磨滅 CM不明
214		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	上腕骨	R	骨幹部+遠位端	d:f	32.08	全長:119.80 イヌの噛痕? CM不明(表面磨滅のため) 骨端最大幅:37.80
215	3-2-1	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	上腕骨	L	骨幹部+遠位端	d:f	57.10	残存全長:168.90 残存全幅:38.00 CM(遠位端)
216		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	上腕骨	L	骨幹部	?	10.57	イヌ噛痕?(遠位) CMなし?
217				哺乳類	ニホンジカ	上腕骨	L	骨幹部+遠位端	d:f	65.57	CMなし? 遠位端最大幅:39.53
218		トレンチ		哺乳類	ニホンジカ	上腕骨	R	骨幹部	?	26.26	CMなし? 黒色変化(受熱痕跡) 残存長:88.22
219		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	仙椎	M	一部欠損	a,p:f	23.17	磨滅のためCM不明 前位 間接全幅35.90
220	3-1-6	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	第1頸椎	M	上位一部欠損	成長度:f	24.94	CMなし 横突起が欠損(発掘時?)
221	3-1-7	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	第2頸椎	M	完形	f	17.79	全長:72.54 220とは別個体(ほぼ完型 横突起一部欠) 棘突起にCM 前位関節幅:39.45
222	3-1-8	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	第2頸椎	M	椎体	f	19.98	全長:84.95 CM
223	3-1-9	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	第3頸椎	M	完形(横突起欠損)	ant,pos:f	43.59	CMなし? 前位関節横径:15.97 後位関節横径:23.08 後位関節縦径:27.78
224		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	第4頸椎	M	前関節類	ant:f	22.97	残存全長:35.43 残存高:49.25 残存全幅:55.27 CM不明
225		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	大腿骨	L	骨幹部	?	31.98	全長:121.35 犬噛痕、CM(後側位)(発掘後の傷)
226		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	大腿骨	L	骨幹部	?	12.11	残存全長:53.66 CM(全面) sp
227		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	大腿骨	L	骨幹部	?	35.50	sp CM イヌ噛痕?
228		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	大腿骨	L	骨幹部	?	43.85	CM不明 イヌ噛痕?
229	3-2-12	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	中手骨	R	完形	成長度p,d:f	92.82	関節横径:(近)32.05 (遠)32.50 CM全面(浅い/薄い) 頑丈 全長:210.15
230		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	中手骨	R	近位端	p:f	33.83	残存全長:161.23 CM
231	3-2-9	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	中手骨	L	骨幹部+近位端	p:f	33.06	全長:153.00 全幅:35.70 CM(骨幹部内側位) 遠位端磨滅
232		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	中手骨	R	遠位端	d:f	21.43	加工痕 CM
233	3-2-11	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	中手骨	R	完形	p,d:f	36.29	全長:172.75 近位関節幅:22.35 前位関節長:16.10 遠位関節幅:25.05 遠位関節高:17.25 CM(前位付近寄り)
234	3-2-10	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	中手骨	L	骨幹部+近位端	p:f	29.72	残存長:164.35 近位関節幅:24.35 近位関節高:18.05 CM(全面) ネズミの噛痕(近位寄り外側位)
235		波止場状	古墳	哺乳類	ニホンジカ	中手骨or中足骨		遠位端	d:f?	4.44	CM不明
236		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	中足骨	R	近位端+骨幹部	p:f	21.90	残存全長:83.98 意図的に割られた? 加工品(折れた先端が磨耗) 近位端最大幅:27.90 近位端最大長30.82 CM ネズミ噛痕
237	3-2-13	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	中足骨	L	骨幹部+近位端	p:f	79.47	遠位端は磨滅 後位と外側位に大~中刃器による CM 骨幹部前位に中~小型刃器による CM ネズミ歯痕
238		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	中足骨	R	骨幹部	?	19.83	CM(全面) 擦痕(近位寄り) 骨製品の未製品or破損品
239		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	中足骨	L	骨幹部+近位端	p:f	22.78	sp CM不明 骨製品の未製品or破損品 横位に楔などで半裁
240	3-2-14	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	中足骨	L	完形	p,d:f	87.89	全長217.5 近位端最大幅:23.43 近位端最大高24.74 遠位端最大幅:26.44 遠位端最大高18.30 CM(近位端前位)
241		波止場状	古墳	哺乳類	ニホンジカ	中足骨	R	近位端	p:f	9.45	CM不明 風化が激しい 最大高:27.08 最大幅:24.28
242		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	末節骨	R	近位端	若以上	1.91	CMなし?(発掘後の傷) 近位関節高:14.74
243		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	肋骨	R	近位端+骨幹部	p:f	9.96	残存全長:130.73 CM
244	3-2-8	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	橈骨	L	近位端	p:f	50.47	全長:169.0 頑丈 関節幅:37.45 CMなし?
245		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	橈骨	R	ほぼ完形	d,p:f	a:56.20 b:35.52	全長:216.0 近位関節幅:39.60 遠位関節幅:38.09 2点接合 CMなし?(発掘後の傷) 黒色変化付着物
246		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	橈骨	R	骨幹部	?	29.03	残存全長:139.51 CMなし?
247		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	橈骨	L	近位端+骨幹部	p:f	15.08	CMなし? 近位関節幅:34.24
248		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	脛骨	L	近位端+骨幹部	p:f	58.31	全長:180.31 高:35.97 全幅:51.62 CM
249		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	脛骨	L	遠位端+骨幹部	d:f	28.41	残存全長:74.89 関節最大径:31.22 sp
250	4-1-2	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	脛骨	L	ほぼ完形	p,d:f	139.92	全長=27.10 近位関節幅:52.32 遠位関節幅32.00 近位関節高:25.35 CM
251		波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	脛骨	L	遠位端	d:f	48.73	加工CMなし 遠位端幅:33.80
252		波止場状	古墳	哺乳類	ニホンジカ	脛骨	R	骨幹部+遠位端	d:f	62.79	CM不明 表面の風化が激しい 遠位端最大幅:26.37 遠位端最大高:20.88
253	4-1-1	波止場状	古墳	哺乳類	ニホンジカ	脛骨	R	骨幹部+遠位端	d:f	133.11	CM不明 遠位端最大幅:32.34 遠位端最大高:27.33
254	3-2-3	波止場状	古墳	哺乳類	ニホンジカ	脛骨	R	骨幹部前位	?	19.25	CM(前位) 黒色変化(受熱痕跡) 残存長:136.94 篦状骨製品
255	3-2-5	波止場状	弥後	哺乳類	ニホンジカ	踵骨	R	完形	f	24.76	全長=80.85 近位端sp
256		波止場状	古墳	哺乳類	ニホンジカ	踵骨	R	前位	f	8.15	CMなし? イヌ噛痕?
257				哺乳類	ニホンジカ	踵骨	L	骨幹部破片	?	6.37	CM不明 イヌ噛痕? 残存長:34.11
258		波止場状	弥後	哺乳類	ヒト	上腕骨	R	骨幹部	?	13.15	残存全長:62.71 CMなし?(発掘後の傷)
259	1-2-2	波止場状	古墳	哺乳類	ヒト	上腕骨	R	骨幹部	成人?	86.08	CMなし 残存長216.5
260	1-2-3	波止場状	古墳	哺乳類	ヒト	大腿骨	R	骨幹部	?	61.64	残存長:197.50 CM(遠位寄りの内側部) 表面に動物による摂餌痕 風化が激しい=二次的埋存?
261	1-2-1	波止場状	古墳	哺乳類	ヒト	頭蓋骨	L	頭頂骨	uf?	63.80	最大高110.5 22~26歳前後以前?
262		波止場状	古墳	哺乳類	中型	頸椎	M	椎体	ant:f,pos:u	16.26	CMなし 残存骨体長:26.05
263		波止場状	弥後	哺乳類	中型	四肢骨	?	骨幹部	?	4.80	残存全長:55.65 CM不明
264		波止場状	弥後	哺乳類	中型	四肢骨	?	骨幹部	?	16.68	CMなし?
265		波止場状	古墳	哺乳類	中型	四肢骨		骨幹部	成長度?	12.26	残存全長=73.61 残存幅=36.69 CMなし? sp
266		波止場状	弥後	哺乳類	中型	手根骨or足根骨	?	破片	?	1.08	CM不明
267		波止場状	弥後	哺乳類	中型	不明	?	骨端部	f?	7.83	全長:43.85 全幅:23.60 CM不明
268		波止場状	弥後	哺乳類	中型	不明	M		f	2.26	厚:5.08 加工不明
269		波止場状	古墳	哺乳類	中型	不明	?	骨幹部	?	4.63	CM不明
270		波止場状	弥後	哺乳類	中型	脛骨	L	骨幹部	p:f	5.03	全長:61.60 全幅:18.10 CM不明

注 本文中の遺物の番号について、枝番号は図版番号・数値のみは整理番号・Bの頭がつく番号は報告書掲載番号を使用した
加工痕CMは切創の略

図版　1－1



図版　1－2

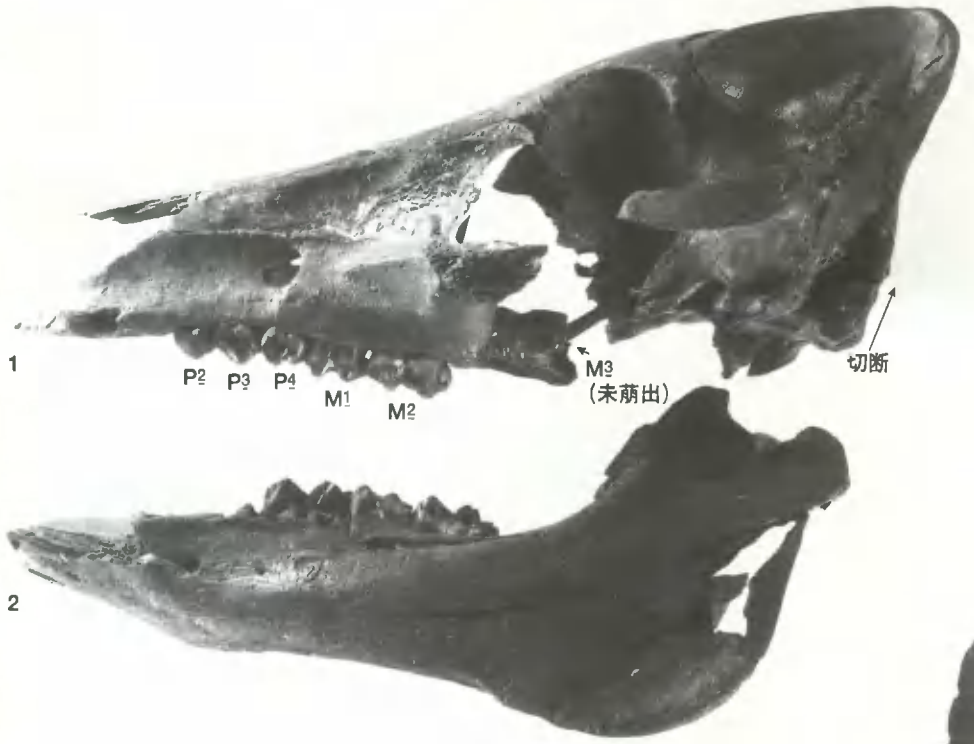


図版１－１　　出土動物遺存体

軟体動物門　腹足綱　1　チリメンカワニナ　殻体部　2　カワニナ　殻体部　3　腹足綱　蓋　　節足動物門　甲殻綱　カニ類　1～11　体部　12～14　可動指 or 不動指
魚上綱　軟骨綱　板鰓亜綱　15～17　椎骨　　硬骨魚綱　18　スズキ目　上上顎骨　19・20　マダイ、19　頭蓋骨　20　歯骨　21～23　クロダイ、21　歯骨　22　右前上顎骨　23　左角骨
24～27　コチ、24　右前鰓蓋骨　25　右翼耳骨　26　左上上顎骨　27　右歯骨　28　ナマズ　胸鰭棘　29　フナ　右臀鰭棘
両性綱　30　カエル　右四肢骨(脛骨、腓骨)　　爬虫綱　31～38　スッポン　31　頂骨板　LR　32　左前鳥口骨　33　右中腹骨板　34　内腹骨板　35　右下腹骨板　36　左中腹骨板
37　左下腹骨板　38　左剣腹骨板　　鳥綱　39　カモAタイプ　脛骨　40　サギ科　左尺骨

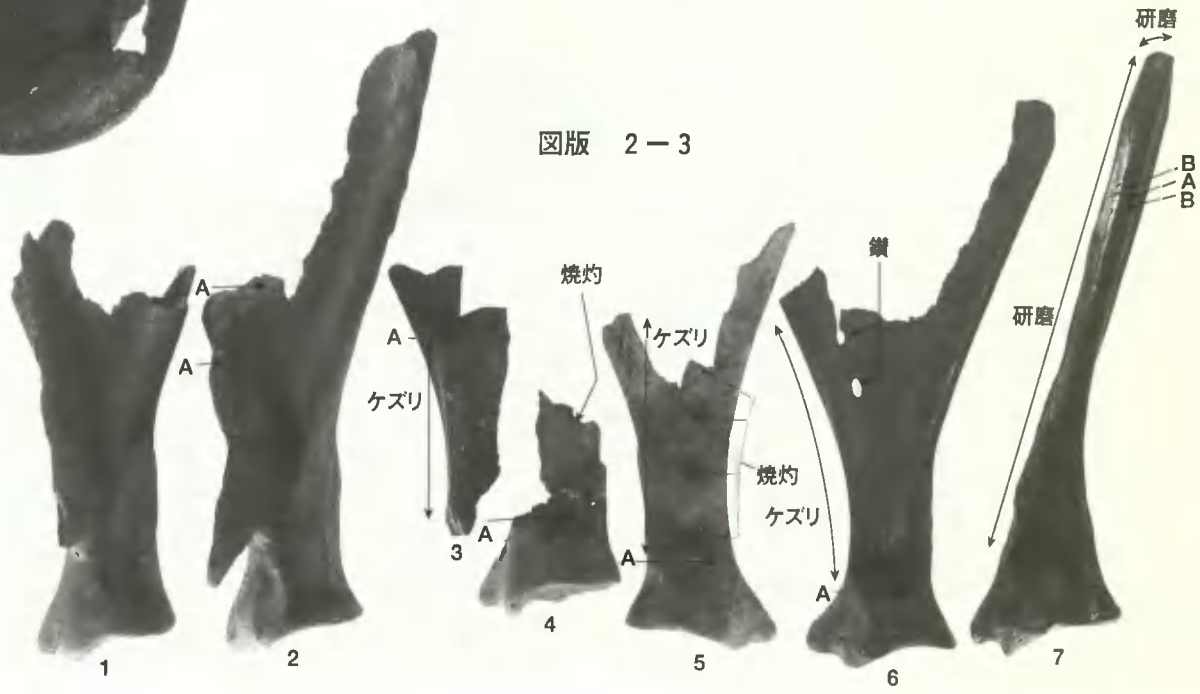
図版１－２　　出土ヒト遺存体
[S：55%]
1　頭蓋骨(左頭頂骨)
2　右上腕骨(外側位)
3　右大腿骨(後位)
(x：生物による食痕？)

図版　2－1



図版　2－2

図版　2－3



図版2－1　出土：イノシシ類　頭蓋骨、左側面
[S：50%]
1　頭骨　2　下顎骨

図版2－2　出土：イノシシ類遺存体
[S：40%]
1　後頭骨　2　左下顎骨　3　右肩甲骨(下骨)　4　右上腕骨
5　左橈骨　6　右脛骨　7　左距骨　8　左中節骨

図版2－3　出土：ニホンジカ肩甲骨製ト骨・篦状骨製品
[S：50%]
1－3　未製品　4－7　ト骨　7　篦状骨製品
A：激しい切創、B：軽微な切創

図版　3－1

図版3－1　出土　ニホンジカ遺存体

1　右角　2　左角　3　右角　4　右角冠　5　左角　6　第1頸椎
7、8　第2頸椎　9　第3頸椎　10、11　頸椎　12　胸椎　13　腰椎

図版　3－2

図版3－2　出土　ニホンジカ遺存体
[S：40%]

1　左上腕骨　2　右尺骨　3　右橈骨　4　左肩甲骨　5　右踵骨　6、7　左距骨
8　左橈骨　9、10　左中手骨　11、12　右中手骨　13、14　左中足骨　A：激しい切創

図版　4－1

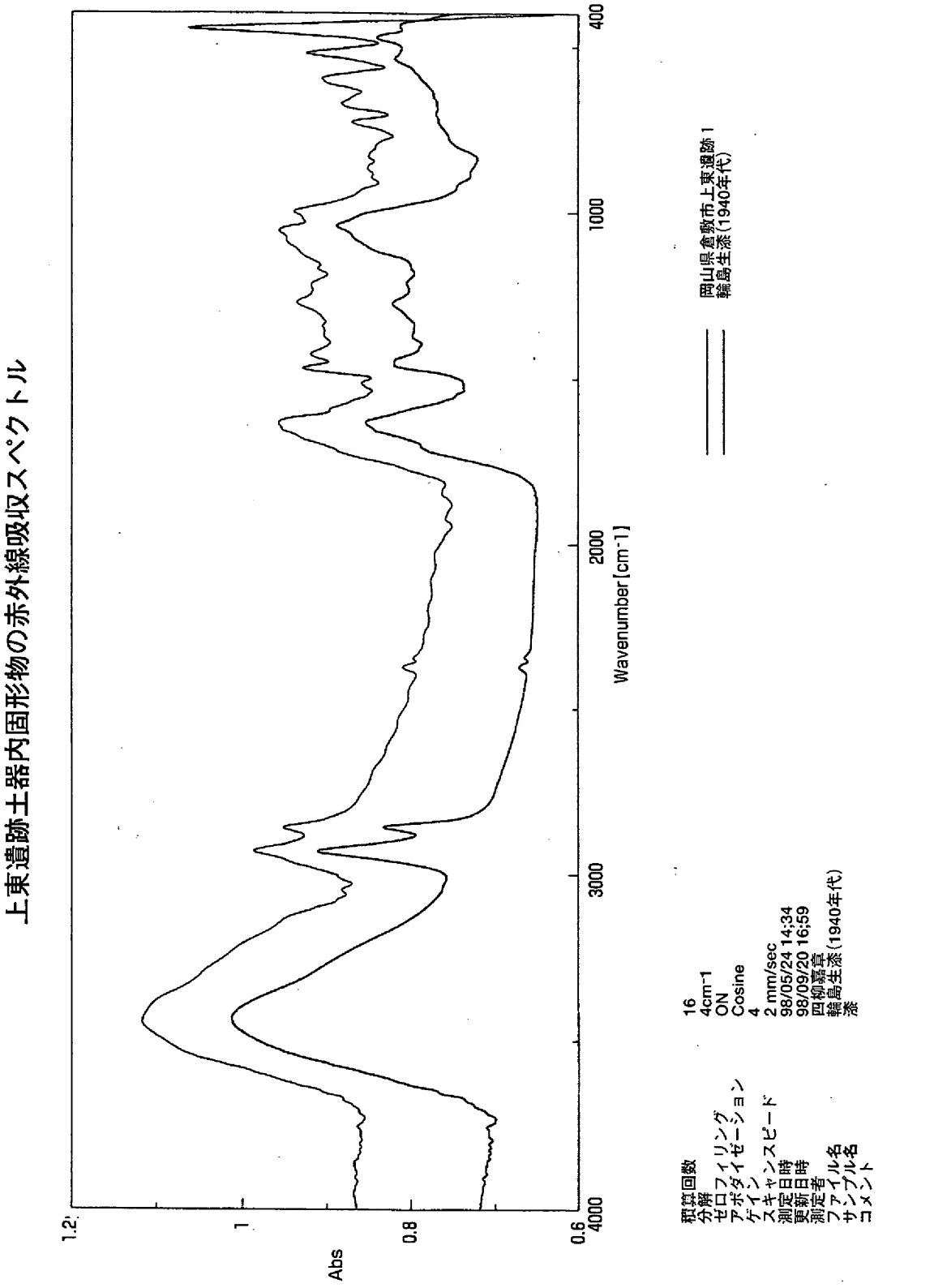
図版4－1　出土　ウシ目、ウマ遺存体
[S：40%]
1－2　ホンシカ（1　右頭蓋　2　右肩甲骨）　3　ウシ　右上腕骨　4　ウマ　右橈骨

図版　4－2

図版4－2　出土　ネコ目遺存体　イヌ（1～19）
1　左右頭蓋骨　2、3、4　下顎骨　5、6　第1頸椎　7、8　第2頸椎　9　頸椎
10　腰椎　11　右寛骨　12　右橈骨　13　左橈骨　14　右橈骨　15　左橈骨　16、17　右尺骨
18　右肩甲骨　19　左肩甲骨　20　テン　切歯骨～上顎骨　21　イタチ科　右上腕骨

上東遺跡出土の土器内固形物分析

漆器文化財科学研究所　**四柳　嘉章**



写真図版1

1．下庄Ia区
中近世遺構面
（北から）

2．下庄Ia区
弥生遺構面
（北から）

3．下庄Ia区
溝1
（南東から）

1．下庄Ib区
中世遺構面
（南東から）

2．下庄Ib区
溝 1
（南から）

3．下庄Ib区
竪穴住居
（北から）

1．下庄Ib区
竪穴住居
（南から）

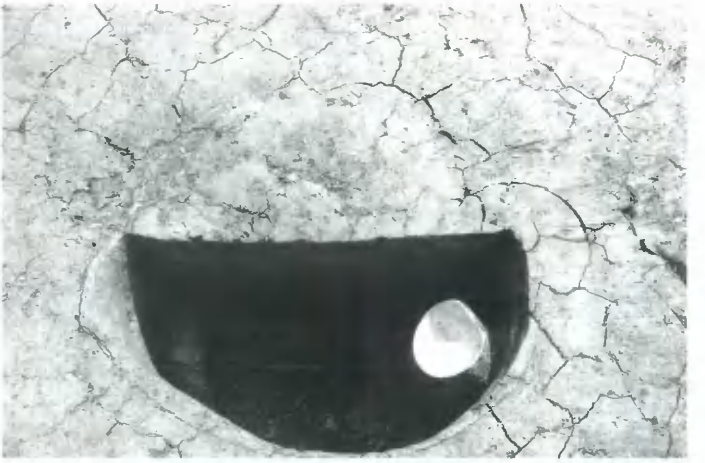
2．下庄Ib区
井戸 1
（西から）

3．下庄Ib区
井戸 1 掘り下げ
（俯瞰）

1．下庄Ib区
井戸１完掘
（西から）

2．下庄Ib区
土壙１２
（南から）

3．下庄Ib区
土壙１７
（南西から）



1．下庄Ib区
土壙 21
（東から）

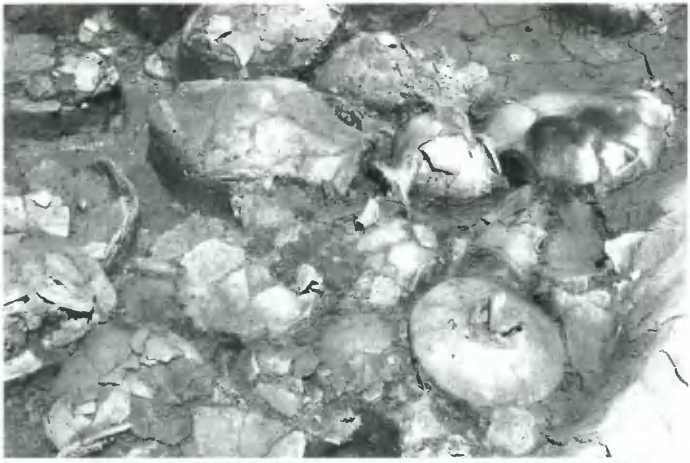
2．下庄Ib区
土壙 24～27・30
（南から）

3．下庄Ib区
柱穴
（南東から）

1．下庄Ib区
土器溜り1
（北東から）

2．下庄Ib区
土器溜り1断面
（南東から）

3．下庄Ib区
土器溜り2
（北から）



1．下庄Ib区
土器溜り 2 遺物
出土状態
（南から）

2．下庄IIa区
全景
（南から）

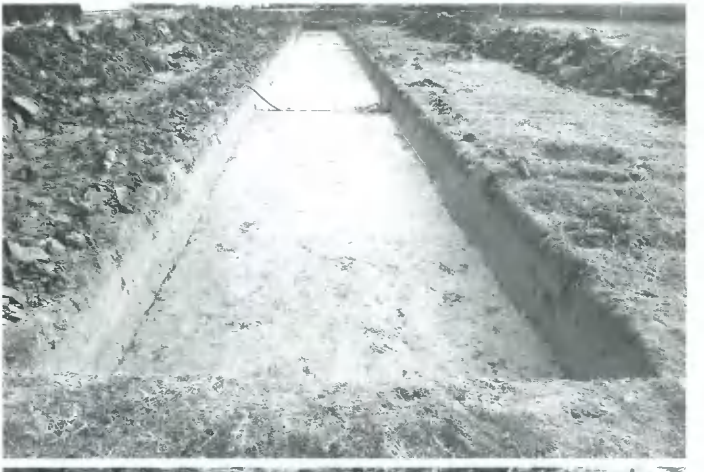
3．下庄IIb区
全景
（北から）

1．下庄Ⅱc区
全景
（北から）

2．下庄Ⅱa区
溝14
（西から）

3．下庄Ⅲ区
全景
（北から）

1．下庄Ⅲ区
たわみ 9
（北から）



2．下庄Ⅳ区
中央トレンチ
（北から）

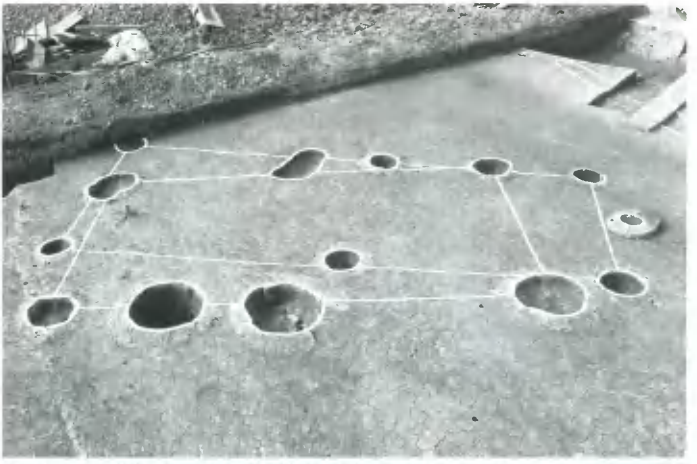
3．下庄Ⅳ区
中央トレンチ西端
（南東から）

1．上東Ia区
全景
（北から）

2．上東Ia区
全景
（南から）

3．上東Ib区
全景
（南から）

1．上東Ia区
建物1・2
（南西から）



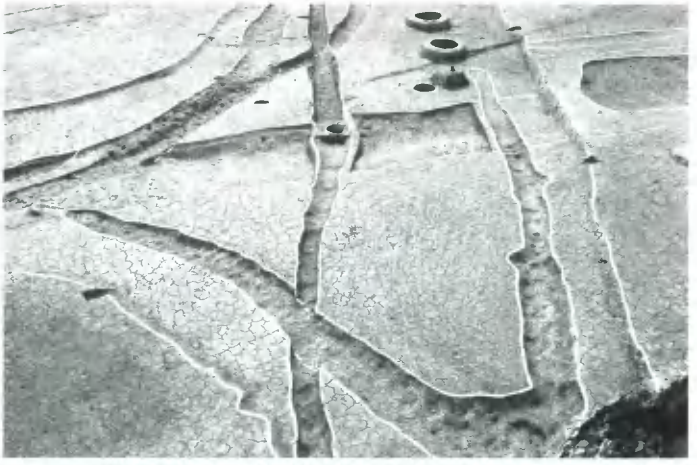
2．上東Ib区
微高地下がり
（北から）

3．上東Ib区
微高地下がり
（東から）

1．上東Ib区
貝塚
（北から）

2．上東Ib区
貝塚
（北東から）

3．上東Ib区
貝塚獣骨出土状態
（俯瞰）



1．上東Ia区
溝3・4
（東から）

2．上東Ia区
溝2・6・7
（南から）

3．上東Ia区
溝5
（北から）

1．上東Ia区
土器溜り
（南から）

2．上東Ia区
土器溜り掘り下げ
（南から）

3．上東Ib区
獣骨検出状態
（南から）

1．上東Ic区波止場状遺構検出状況(南西から)

2．上東Ic区遺物出土状況(南西から)

1．上東Ic区土層断面(B−B′)(東から)

2．上東Ic区遺物出土状態(南から)

1．上東Ic区遺物出土状態（北東から）

2．上東Ic区第I工区南端状態（南西から）

1．上東Ic区
遺物検出状態
（南西から）

2．上東Ic区
第Ⅱ工区撤去状態
（南東から）

3．上東Ic区
第Ⅱ工区撤去状態
（南西から）

1．上東Ic区
第Ⅱ工区撤去状態
（北西から）

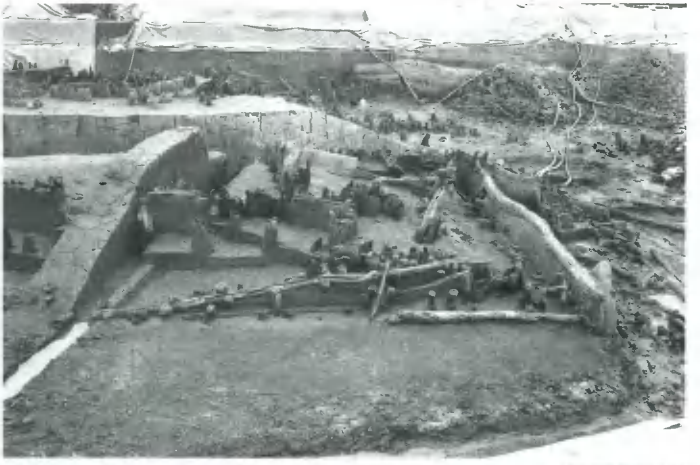
2．上東Ic区
第Ⅱ工区撤去状態
（東から）

3．上東Ic区
第Ⅱ工区撤去状態
（南東から）

1．上東Ic区
杭検出状態
（南東から）

2．上東Ic区
杭検出状態
（北東から）

3．上東Ic区
杭検出状態
（北東から）



1．上東Ic区
杭検出状態
（西から）

2．上東Ic区
杭検出状態
（北から）

3．上東Ic区
土層断面(G−G′)
（南から）

1．上東Ic区
土層断面(F−F′)
（南東から）

2．上東Ic区
土層断面(B−B′)
（南東から）

3．上東Ic区
土層断面(A−A′)の
噴砂
（西から）

1．上東Ic区
土層断面(F−F′)
（南から）

2．上東Ic区
土層断面
(C−C′・B−B′)
（北東から）

3．上東Ic区
杭列Ⅲ検出状態
（北西から）

1．上東Ic区
杭列Ⅲ検出状態
（北西から）

2．上東Ic区
土層断面(E−E′)
（北東から）

3．上東Ic区
杭列Ⅱ検出状態
（西から）

1．上東Ic区
杭列Ⅰ検出状態
（東から）

2．上東Ic区
杭列Ⅴ検出状態
（南から）

3．上東Ic区
杭列Ⅴ検出状態
（西から）

1．上東Ic区
杭検出状態
（西から）

2．上東Ic区
杭検出状態
（南東から）

3．上東Ic区
杭検出状態
（南東から）

1．上東Ic区
杭検出状態
（北西から）

2．上東Ic区
杭検出状態
（西から）

3．上東Ic区
基礎横木検出状態
（北から）

1．上東Ic区
遺物出土状態
（南西から）

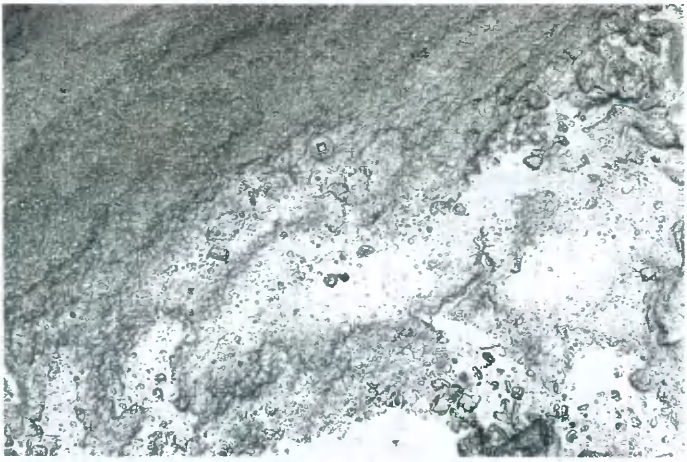
2．上東Ic区
杭検出状態
（南西から）

3．上東Ic区
杭検出状態
（北東から）

1．上東Ic区
杭検出状態
（北から）

2．上東Ic区
葦検出状態
（西から）

3．上東Ic区
敷葉（木片）検出状況
（東から）



1．上東Ic区
貨泉出土状態
（東から）

2．上東Ic区
遺物出土状態
（南西から）

3．上東Ic区
樋出土状態
（南西から）

1．上東Ic区
遺物出土状態
（東から）

2．上東Ic区
作業風景
（南東から）

3．上東Ic区
作業風景
（南西から）

1．上東Ic区
細粒鉱滓による
埋め戻し
（南東から）

2．上東Ⅱ区
トレンチ
（北から）

3．上東Ⅱ区
トレンチ
（南東から）

15

16

32

35

60

37

64

出土土器 1

137

139

170

203

248

327

出土土器 2

328

352

368

377

393

423

出土土器 3

376

377

382

383

415

424

431

435

436

出土土器 4

450

454

456

457

458

出土土器 5

465

470

490

486

494

497

出土土器 6

503

509

511

516

523

528

530

531

537

534

出土土器 7

573

579

594

607

631

615

647

出土土器 8

654

658

663

679

697

708

717

722

750

716

751

出土土器 9

759

777

771

785

802

815

865

856

885

872

903

977

881

973

出土土器 10

1029

1031

1055

1059

1061

1062

1065

1066

1074

出土土器 11

W58(1/4)

(1/2)

W22(1/8)

(1/2)

(1/2)W23

(1/8)

(1/2)W24

(1/8)

出土木器 1

W7(1/2)

W36(1/4)

W20(1/8)

W42(1/6)

W48(1/6)

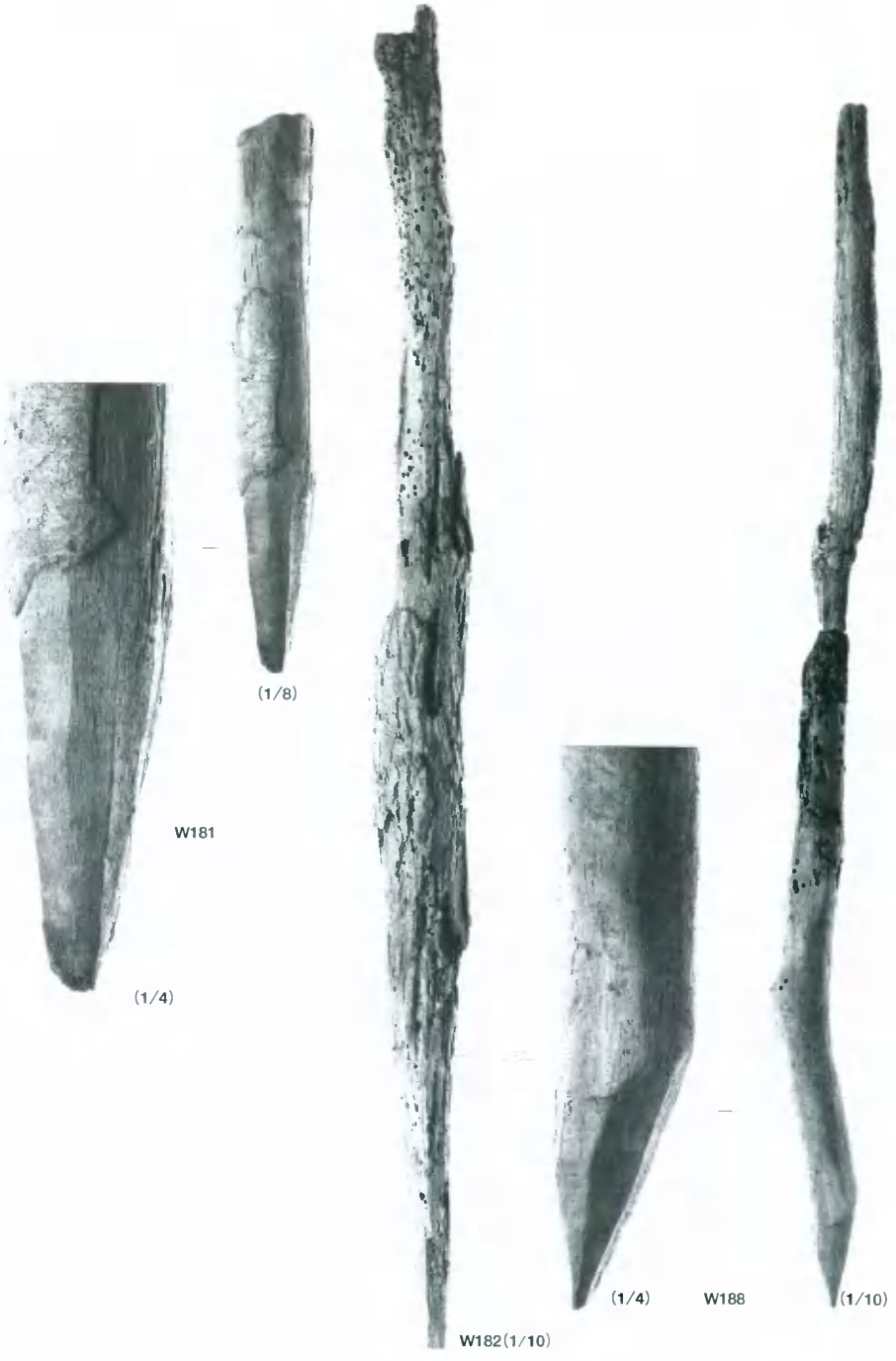
W49(1/4)

表　W54(1/4)

裏

W59(1/6)

出土木器 2



出土木器 3

(1/4)　(1/10)

W189

(1/3)

(1/1)

(1/1)

W63

W190(1/8)

W191(1/8)

W192(1/8)

出土木器 4

W186(1/8)

W187(1/15)

報告書抄録

フリガナ	シモショウイセキ　ジョウトウイセキ
書名	下庄遺跡　　上東遺跡
副書名	主要地方道箕島高松線道路改築に伴う発掘調査
巻次	2
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	157
編著者名	高畑知功・大橋雅也・下澤公明・築地由行・渡邉恵理子・平尾良光・榎本淳子・早川泰弘・松谷暁子・富岡直人・四柳嘉章
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136　岡山県岡山市西花尻1325-3　TEL086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700-8570　岡山県岡山市内山下2-4-6　TEL086-224-2111
発行年月日	

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
シモショウイセキ 下庄遺跡	オカヤマケンクラシキシシモショウ 岡山県倉敷市下庄	33202		34°38′28″	133°50′11″	19970401 ～ 19980515	12673㎡	主要地方道箕島高松線道路改築に伴う発掘調査
ジョウトウイセキ 上東遺跡	オカヤマケンクラシキシジョウトウ 岡山県倉敷市上東	33202		34°38′35″	133°50′8″			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下庄遺跡	集落	弥生	竪穴住居　1軒 掘立柱建物　6棟 井戸　2基 土壙　26基 溝　9条 たわみ　9ヵ所 土器溜り　2ヵ所 柱穴列　2列 柱穴　多数	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 石器・石製品 木器・木製品 土製品 金属器	
		古墳			
		中世	土壙　2基 溝　5条	早島式土器	
		近世	土壙　9基	磁器	
上東遺跡	貝塚 水田	弥生	掘立柱建物　2棟 井戸　3基 波止場状遺構　1ヵ所 土器溜り　1ヵ所 溝　10条	弥生土器 土師器 須恵器 石製品 木製品	弥生後期前葉に築造された波止場状遺構
		古墳	貝塚　1ヵ所 たわみ　2ヵ所	鉄、金属製品 骨角製品	
		中世～近世	土壙　2基 溝　2条 水田 獣骨散布地　1地点	植物および動物遺体 貨泉	

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 157

下庄遺跡
上東遺跡

主要地方道箕島高松線道路改築に伴う発掘調査 2
（第 2 分冊）

2001年 3 月15日　印刷
2001年 3 月31日　発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3
発行　岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6
印刷　山陽印刷株式会社